Vol.VI. JANUARY. 15TH, 1902. No.1.

昆蟲世界

(第六卷第壹册) 第五拾參號

目次 (禁轉載)

(明治三十五年一月十五日發行)

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU, JAPAN.

◎寄附物品受領公告

一日本美術協會報告百五十六號附錄曾根荒助君藏時代蒔繪小硯宮(群蝶) 壹枚
一八町蜻蛉簪(名古屋船橋製) 壹本
一群蝶花簪 壹本
一春日神社御供物菓子(蝶摸樣) 壹個
（以上 東京市 田中五一君）

一蟲形釣(鱒鮠等に用ふ) 八種
一蚊形釣(金澤市製、方言ドブ釣) 十個
一天蠶糸(舶來品) 九種
（以上 東京市 中村利吉君）

一飯櫃(蝶摸樣付) 壹個 岐阜縣 飯沼武右衛門君
一烟草入金具(蝶形) 壹個 岐阜縣 遠藤政太郎君
一硝子製コップ(蝶摸樣付)二種三個 東京市 熊崎安太郎君
一除蟲御札(說明附) 數葉 秋田縣 佐々木茂助君
一琉球產蝶類目錄 壹冊 沖繩縣 黑岩恒君

一花瓶(群蝶摸樣)(石川縣工業學校製) 壹個
一風呂敷(蜻蛉染摸樣付) 壹枚
（以上 岐阜縣 河田貞城君）

一黴菌斃死螻蛄 貳頭 靜岡縣 岡田忠男君
一梨樹栽培法 壹冊 山形縣 高橋清兵衛君
一雄蝶雌蝶(迎年祝酒の銚子に附ろ) 一番 東京市 田中芳男君
一全身肖像 壹枚 東京市 平田東助君
一盃洗(群蝶摸樣) 壹個 岐阜縣 岡崎治市君
一紙製石版(蝶摸樣) 壹個 岐阜縣 高橋喜之助君
一茶卓(蠶蛾、繭等の摸樣) 壹枚 靜岡縣 八木嶺賢君

◎昆蟲世界購讀紹介者芳名

秋田縣 佐々木茂亮君 (壹名)
德島縣 勝浦文太郎君 (壹名)
德島縣 阿部萬三郎君 (壹名)

◎岐阜縣冬季昆蟲展覽會經費寄附金受領第三回報告(人名イロハ順)

一金拾五圓(武儀郡委員長) 小島鼎君
一金拾圓(東京市) 田中五一君・田中健太郎君
一金貳圓 津田顯孝君
一金貳圓(名古屋市) 守隨鐘三郎君
一金壹圓 南守文子君
一金壹圓 渡邊治右衛門君
一金壹圓 永澤甲子君
一金壹圓 大野勇君
一金壹圓 松尾國松君
一金壹圓 天野秋二君
○小計金參拾五圓也
○通計金六拾六圓也

右今般本會計畫の趣旨を賛同し各頭記の金額寄附相成候に付此段及報告候也

明治三十五年一月 岐阜縣昆蟲學會

第十一回全國害蟲驅除講習會員募集

開期{自三月一日 至同月十四日}二週間(凡四十名)

全國害蟲驅除講習會は既に第拾回の經驗を重ねて茲に益々その必要を感じ、且つ教授科目にも改正を加へたれば、本年よりは更に有用にして實行に適切の方法に頼らんとす、入會希望者は來二月二十日以前に申込ありたし、尚ほ今回の講習には左記條々の利益ある可しと信ず。

一、開會季節の早き爲め、本田は勿論、苗代田害蟲驅除の準備をもなし得べき事。
一、今年初發生の益蟲、害蟲より漸次採集して、完全なる四時の昆蟲標本を製作し得べき事。
一、岐阜縣冬季採集昆蟲展覽會の出品標本を觀覽するの便あれば見學に多大の益あるべき事。
一、當昆蟲研究所陳列舘の整理と共に、新たに陳列せる新式昆蟲標本に就て研究の便ある事。
一、前回まで教授せざりし新科目をも講習するか故に、多少斯學研究に益あるべき事。

なほ無定員なるも當所の都合に依り、隨時入會を謝絶することあるべし。規則書入用の向は郵券を添へ至急照會あれ、直ちに回送致すべし。

明治三十五年一月 岐阜市京町 名和昆蟲研究所

恭賀新年

明治三十五年一月一日

岐阜縣岐阜市京町
名和昆蟲研究所

所長　名和靖
主任　永澤小兵衛
調査主任　名和梅吉
養蟲掛　森宗太郎
仝補助　長屋六二
標本掛　棚橋昇
仝補助　名和愛吉
仝補助　吉田悦三
編輯主任　天野秋二
圖書主任　伊藤七郎
仝補助　名和貴子
庶務主任　福井克雄
仝補助　高橋喜男
會計主任　名和正也
昆蟲陳列舘主任　森嶋勘次郎

昆蟲虎の卷 〔自神武天皇三十年庚寅 至明治二十三年庚寅〕

◎應用昆蟲學研究家參考

凡そ昆蟲學を農業に應用せんと欲せば、先づ其歴史を知らざる可からず。蟲害の猛烈なるを確認せんと欲せば、先づ其結果の如何を知らざる可からず。害蟲を驅除せんと欲せば、先つ其當業者の迷信を打破せざる可からず。此三者を知悉し而後始めて昆蟲學を談ろべし。古來傳へていふ、虎年には風害その他の災異違例多しと、是れ果して信か、歴史の上より之を言ふ時は、今年こそ蟲害風害をはじめ、天災地妖の極めて少なかろべきを豫言するに難からじ、讀者この虎の卷を繙きて其僞りならざるを知れ。

○神武天皇紀元三十年庚寅(今年より二五三三年前)　國内靜平なり。明年、國土の相形を望み覧給ひ、猶ほ蜻蛉の呫臀するがごとしとて、國名を蜻蛉洲と號づけ給ふ。

○綏靖天皇即位二十三年壬寅(二四六一年前)　支那に於て、此頃より瘧疾にかゝる者あり。

○安寧天皇二年甲寅(二四四九年前)　支那齊の崔杼が家亂れ、明年その室東郭姜自經す、是れ鳳蝶の蛹を縊女と稱する俗說の根源なり。

○懿德天皇十二年壬寅(二四〇一年前)　支那に於て害蟲火殺の法行はる。又瘧疾を患ふる者多し。

○崇神天皇七年庚寅(一九九三年前)　天社國社を定め、諸神を祭祀し、國に風雨水旱蟲疫の災ひなからんことを祈らる、是れ後世祈年祭執行の濫觴なり。

○垂仁天皇三十五年丙寅(一八九七年前)　諸國に飢饉あり窮民を賑恤を勅して池溝を開きて農事に利し、稻穀を蓄へて凶歉に備へしむ。支那に於て、漢宣帝が甘露の年號を用ゐたるも、後漢明帝の時、甘露降り百官壽を上れるも、また蝗螟の魯恭が封境を侵さゞりしも、皆この前後にあり。

○同　四十七年戊寅(一八八五年前)　此頃、支那北邊關東に飢旱あり、猶太の約翰は蝗蟲を食とす。

○神功皇后攝政二十二年壬寅(一六八一年前)　此頃、支那に於て魏文帝の中宮北郊に蠶す。後本邦に於ても之に倣ふて、子日祭を執行せらる。

○仁德天皇三十年壬寅(一五六一年前)　十月、皇后磐之媛國風を詠せらる、その歌に「那莵務始能譬務始能慮呂望赴多弊耆氐云々。十一月、帝葛城宮に行幸せらる、蓋し奴理能美が飼ふ所の三變化の奇蟲を覧給はんとてなり。是れを本邦の正史に、昆蟲の發育を記述せる權輿となす。

○允恭天皇三年甲寅(一四八九年前)　正月、帝疾ひ篤し、朝議すなはち良醫を新羅に徵さる。是れ本邦に漢方の本草學を傳へたる原始にして、實に昆蟲學の源泉は此時に發せり。

○雄略天皇六年壬寅(一四四一年前)　帝深く蠶業を重んじ給ひ、皇后幡梭姬をして、躬から之が飼育に勸めしむ。是より先、帝河上小野に獵し給ひ、その地を蜻蛉野と號づけ給ふ。

○顯宗天皇二年丙寅(一四一七年前)　此年、稻穀豐かに稔り、銀錢一文は米一斛の價ひに當る。
○欽明天皇七年丙寅(一三五七年前)　惡疫流行す。此頃養蠶の術始めて歐洲に傳はると云ふ。
○推古天皇十四年丙寅(一二九七年前)　此頃、聖德太子養蠶を奬勵し、又始めて醫學研究生を隋國に派遣す。支那に於て懸賞的驅除法を設け、害蟲を買收せしは此後に屬せり。
○皇極天皇元年壬寅(一二六一年前)　六月、大旱す、雨を佛に祈れども驗なきを以て、帝親から之を天に祈り給ひしに、大雨數日、民皆その恩德に霑ふ。明年、韓種の蜜蜂を三輪山に放養す。此頃支那に於て唐太宗、蝗害の周南に發れるを憂ひとし、自から數蝗を呑み、以て攘災を祝せり。
○天智天皇五年丙寅(一二三七年前)　七月、大水あり、禾稼を害ふ。
○白鳳七年戊寅(一二二五年前)　十月、甘露攝津難波に降る。此頃始めて祈年祭の儀式定まる。
○大寶二年壬寅(一二〇一年前)　大寶令を發布し、新たに典藥寮及び藥官の官制を定め、又藥園を起して本草を攻究せしむ、是より昆蟲の狀態益々判明す。此年、因幡、伯耆、隱岐に蝗害あり、駿河、伊豆、下總、備中、阿波諸國飢う、蓋し去年、海內十七國に發生せる害蟲の再生に因れる歟。
○和銅七年甲寅(一一八九年前)　錢一文を以て米六升に替ふ。此頃より、本邦に追儺の儀始まる。
○神龜三年丙寅(一一七七年前)　遠江に水害あり、尾張に飢饉あり。

(トラフコガネ)
金龜子(コガネムシ)類は總て有害蟲

○天平勝寶二年庚寅(一一五三年前)　備前飢う。去年上總、下總に蟲害、飢饉の災あり。
○天平寶字六年壬寅(一一四一年前)　此頃より、正月子日宴に、鋤と帚とを供へて農蠶の神を祭るの儀おこる、今正倉院の御物に、儀鋤二柄、玉帚二握あるは其紀念なり。畿內、伊勢、近江、若狹、越前、石見、備前飢う。三河、尾張、遠江、下總、美濃、能登、備中、備後、讃岐に飢旱あり。明年夏また大旱、民に餓死する者あり。明後に至り、米價騰貴して一斛の價ひ千錢となる。
○寶龜五年甲寅(一一二九年前)　諸國に疫癘行はる。山城、尾張、讃岐、大和、三河、能登、美濃、近江、河內、志摩、伊豫、飛驒、若狹、土佐飢う。明年、河內、攝津、下野に大鼠害あり。
○延曆十七年戊寅(一一〇五年前)　阿波飢う。夏雨久しく止まざるを以て、晴を丹生社に祈らる。
○弘仁元年庚寅(一〇九三年前)　五月、晴を丹生川上社に祈らる。美作、河內、因幡、土佐、伯耆、大和、攝津、備後、播磨、淡路、丹波、遠江飢ゆ。此後薩摩、大隅の二國數次蝗害にかゝる。
○同　十三年壬寅(一〇八一年前)　山城、石見飢う。甲斐、美濃、阿波に疫癘行はる。長門、三河、遠

江は連年旱疫あり。優詔を下して、皆これを救恤す。
○承和元年甲寅(一〇六九年前)越後、越前、丹波、伊勢、出雲、石見諸國飢う。
○仝　十三年丙寅(一〇五七年前)出羽飢う。七月、白馬幣帛を丹生川上社に奉じて、晴を祈らる。
○天安二年戊寅(一〇四五年前)五月、西海道に大風暴雨あり、靑秧皆腐失し屋宇概むね損傷す。
○貞觀十二年庚寅(一〇三三年前)河内に飢旱あり。夏霖雨、晴を加茂、貴布禰兩社に祈らる。
○寛平六年甲寅(一〇〇九年前)此頃、類聚國史成る、歴代の蟲害及び甘露を詳記す。又僧昌住の新撰字鏡成る、中に蟲類の文字四百九十六字を收む。子日宴を再興す、但し舊儀は全たく廢る。
○延喜十八年戊寅(九八五年前)醫博士深根輔仁、勅を奉じて本草和名を撰す、是れ本邦に於て動植物名を對譯せる始めなり。八月暴風雨、人畜の被害多し。明年天下半ば稔らず。
○延長八年庚寅(九七三年前)春より疫疾流行す、大赦を行なはる。此頃、胡蝶樂新たに成る。
○天曆八年甲寅(九四九年前)此頃、震旦の醫僧長秀本邦に來り、諸種の藥方を傳ふ。
○康保三年丙寅(九三七年前)京畿大雨洪水、八月、晴を貴布禰社に祈り、閏八月また之を十六大社に祈る。この後、瘧疾に罹る貴人少なからず、但し有毒蚊族は、以前より棲息せしに似たり。
○天元元年戊寅(九二五年前)此頃、宮城の天井に、和歌を蝕ばむ。源順和名類聚抄を撰す、中に昆蟲を解說せるもの六十餘條あり。是より先、文學盛んに興り、昆蟲を吟詩詠歌の材料とする者、毛詩の名物を解釋せんとて之を研究する者、頓に增加し、博物學に不少の進歩を來たせり。
○正曆元年庚寅(九一三年前)秋雨久しく霽れざるを以て、晴を丹生貴布禰の社に祈らる。
○長保四年壬寅(九〇一年前)大旱、讀經雨を乞はしむ。秋霖雨、晴を丹生貴布禰社に祈らる。
○永承五年庚寅(八五三年前)宋國に大飢饉おこり。明年、宮中に菖蒲の根合せの儀ありし時、蝶舞の童を作り立てふる。此頃、堤中納言物語成る、中に昆蟲に關する一章を收む。
○承保元年甲寅(八二九年前)本邦の商民朝鮮に航して、貿易を行なふ。明年、金葉和歌集撰成る中に昆蟲を題とせしは、纔かに二首あるのみ。去年、宋國に於て、建昌城北に甘露降ふる。
○承德二年戊寅(八〇五年前)此頃、始めて選蟲の戲あり、後永く宮中の儀の一に加へらる。
○天永元年庚寅(七九三年前)春時寒冷、夏秋霖雨、爲めに洪水飢饉あり。翌年また天災多し。
○長承三年甲寅(七六九年前)風水飢疫並び發る。三たび諸社に奉幣して、攘災を祈ふる。
○嘉應二年庚寅(七三三年前)平族跋扈、揚羽の蝶を以て紋章となす。明年、宋國に旱害あり。
○壽永元年壬寅(七二一年前)氣候不順、風火水旱飢疫踵至し、兵亂また諸國に起る。去年飢疫。再昨年、京都に稀有の旋風あり。此頃、源氏の臣伊勢義盛及び畠山重忠等、蝶摸樣を以て其武器の

裝飾となす。當時鎌倉に於て、薪炭一駄の價ひは、各々百錢。是より先、源頼政宇治に敗死し、明年、齋藤實盛加賀に戰歿す、この後、宇治螢及び實盛蟲の俗説世に行なはる。

○建久五年甲寅（七〇九年前）六月、諸社に奉幣祈晴し、又神祇官に祈らるゝもの七日、蓋し降雨其の量に過ぐるを以てなり。此頃、鴨長明四季物語を作る、中に昆蟲に關する記事多し。

○建永元年丙寅（六九七年前）八月、幣を奉じて、晴を諸社に祈らる。

○寛喜二年庚寅（六七三年前）五穀登らず、餓死する者多し、米一斛の價ひを一貫文と定めしむ。

○仁治三年壬寅（六六一年前）洪水のために禾稼を害なふ。

○建長六年甲寅（六四九年前）秋、烈風暴雨、家屋農作を損亡せしむるもの算なし。

○文永三年丙寅（六三七年前）風雨其の順を失し、災異數次至る、朝廷攘災を各大社に祈らる。

○正應三年庚寅（六一三年前）元國に洪水あり、流民四百五十萬餘に及ぶ。

○正平十七年壬寅（五四一年前）大旱、琵琶湖三丈餘の水量を減ず。諸國に饑餓の窮民多し。

○長祿二年戊寅（四四五年前）比年、水旱震饑相次ぎ、兵亂また起り、農業殆んど全たく廢れ唯工藝美術の進歩を見るのみ。此頃より伊勢大廟に於て、大御田祭を執行して害蟲の退散を祈らる。

○文明十四年壬寅（四二一年前）朝鮮より、將軍足利義尙に、胡椒幷びに藥物を贈り來る。

○永正十五年戊寅（三八五年前）諸國大ひに飢う。明年また災異あり。

○永祿九年丙寅（三三七年前）西洋藥劑來る。去年松浦宗案の親民鑑月集成る、本邦農書の始めなり。

○天正六年戊寅（三二五年前）畿內凶作。當時金一兩に米四斛を買ふ。

○慶長七年壬寅（三〇一年前）この頃、米一斛は、銀十匁內外を直ひせり。

○仝十九年甲寅（二八九年前）秋、畿內及び東國に風水あり。冬強震す。

○寛永三年丙寅（二七七年前）五月、將軍上洛す、時に沿道に令して、一人一夜の宿料を四文と定め、馬匹は其の二倍を納れしむ。

○仝　十五年戊寅（二六五年前）江戸品川牛込に藥園を置き、又肥前に蘭人の居留地を定む。木棉一端の價ひ銀二匁となる。此頃、明國に旱蝗の災あり、次で大飢饉おこる、崇禎の凶荒是なり。

○慶安三年庚寅（二五三年前）江戸に強震あり損害夥たゞし。明年、處士由井正雪反を謀り、靜岡

（トラフコメツキ）
叩頭蟲（コメツキムシ）類は總て有害蟲

に自及す、これより後、里俗、擬脈翅目の蜻蛉を目して、正雪が亡魂の化生となせり。

○寛文二年壬寅(二四一年前)　諸國に地震洪水あり。野中兼山土佐の農業の面目を一新す。

○延寶二年甲寅(二二九年前)　畿內大水あり。明年諸國飢う。此頃米一斛の價ひは銀七十四匁。

○貞享三年丙寅(二一七年前)　夏、風雨の災あり、諸名神各大寺に勅して、攘災を祈願せしむ。

○元祿十一年戊寅(二〇五年前)　京都の醫岡本爲竹和語本草を著はす。此頃より蠶種商に帶刀を特発し、鳳蝶の蛹を於菊蟲と稱し初む。又俳優水木某江戸の劇場に、蝴蝶狂亂痴戯の伎を演ず。

○享保七年壬寅(一八一年前)　幕吏甲相諸國に採藥す。清韓よりも藥物多く渡來す。伊豫、尾張、伊勢、紀伊に海嘯洪水あり。元祿以後、米價貴ふとし、此に至りて兩に六斗二升五合となり、木棉一端の價ひは銀四五匁となる。筑前始めて注油驅蟲を試ろむ。去年秋、飲食を節すべきの令下る。

○仝十九年甲寅(一六九年前)　幕府命じて諸國の物產を調査せしめ、又庶物類纂增修の備員を增徵す。注油驅除法漸やく西國に播まる。連歲饑荒の後をうけ、生民の困弊名狀すべからず。五月、金一兩を錢五貫二百文に替へ、十月に至りて、金一分を一貫二百六十文に替ふ。去年、大疫。

○延享三年丙寅(一五七年前)　田村藍水、青木昆陽等其著書を公行し、阿部將翁は漢渡の藥草を種植す。凡そ本邦に於て、本草及び博物を究明せる學者の多かりしは、此前後を以て第一とす。

○寶曆八年戊寅(一四五年前)　去年來、田村藍水物產會を江戸に開く、蟲類も多く陳列せらる。

○明和七年庚寅(一三三年前)　平賀鳩溪長崎に於て、蘭國の本草を研究す。馬鈴薯漸やく播まる。

○天明二年壬寅(一二一年前)　秋、四國九州凶作、諸國また違例多し。米一斛は銀六七十匁、木棉一端は九匁十匁の間にあり。平高潔和藥考を著はす。明年、東國大飢饉、米一斗の價ひ一貫四百文より二貫五百文に暴騰し、江戸の小賣相場は、二貫八百五十文餘に當れり。

○寛政六年甲寅(一〇九年前)　千蟲譜著者栗本丹洲幕府の醫學館に本草を講じ、又藥物を鑑定す。

○文化三年丙寅(九七年前)　七月大旱。本草和訓鈔再版成る。小野蘭山庶物類纂を再寫し、吉田成德蘭藥鏡源を譯述す。本邦に於て、昆蟲を圖說せしは、皆この以後に屬せり。

○文政元年戊寅(八五年前)　江戸に於て、藥品會を開く、昆蟲また多く其中に在り。此頃、尾張の水谷豊文、吉田雀巢等同志と嘗百社を創立す、共に蟲譜其他の著述あり。

○天保元年庚寅(七三年前)　冬暖なる春夏の候のごとし。七月京都に强震あり、人畜の死傷多し。伴信友の動植名彙、佐藤中陵の山海庶品、大藏永常の除蝗錄後篇、藁科玄隆の本草彙考、岩崎灌園の本草圖譜、佐藤信淵の經緯記等成る。此頃蘭方醫學進步し、純正植物學の基礎はゞ定まる。

○同　十三年壬寅(六一年前)　攝津に水害あり。令して農家の蔬菜を早熟せしむるを禁ず。佐藤信

淵の物價餘論、田村仁左衛門の農業自得、小野職孝の救荒本草啓蒙成る。注油驅除法東國北國ゝ播まる。去年、富山侯前田利保啓蒙蟲譜圖解を作り、明年、石川八太蟲譜を作る。

○安政元年甲寅（四九年前）校刻神農本草經、大藏永常の農家益續編を開板す。幕府始めて北海道に養蠶を試む。此頃、飯室樂園の蟲譜圖說及び各種の蟲譜成る。

○慶應二年丙寅（三七年前）齊藤拙堂の遺著救荒事宜を補刻す。開成所御用係田中芳男、幕命をうけて、關東東海諸國ゝ昆蟲を採集し、之を標品に製作す、これを本邦に於て昆蟲採集製作の嚆矢となす。

○明治十一年戊寅（二五年前）島根縣下に害蟲發生す、稻禾を燃燒して之を驅除せしむ。安倍樸齋の遺著驅除法方を刊行す。勸農局外國の種苗を試植し、又臨時報を發刊して種藝驅蟲方の普及を圖り、兼て蟲害地に屬僚を特派して監督を嚴にす。此頃なほ曆本に禮記の月令を列記す。

○明治廿三年庚寅（一三年前）京都、島根、兵庫、廣島の府縣に害蟲發生す。第三回內國勸業博覽會を東京ゝ開く、岐阜縣名和靖これに昆蟲標本四十函を出品して優賞を受領す。英人プライアーの日本蝶譜初卷成る。諸國に水害あり。是より先、農事及び動植物學專攻の諸會續出し、昆蟲に注目せる者漸やく多し。

（トラツリアブ）
鈎虻（ツリアブ）類は總て有害蟲

○百蟲の譜　横井也有述

也有は尾州藩の重臣にて、千三百石の厚祿を食めり。性風流文雅を好み、俳句をよくせり、特に俳文に長じ、古今獨步の妙域に到達す、この譜また其一にて、鶉衣に收めたる清輕奇拔の傑作なり。俗稱を孫左衛門といひ、半掃庵と號す、初めは野有ともいへり。天明三年六月八十二歲の高齡にて歿しぬと云ふ。

蝶の花に飛かひたる、やさしきものゝ限なるべし。それも啼音の愛なければ、籠に苦む身ならぬこそ猶めでたけれ、扨こそ莊周が夢も此物には託しけめ。只蜻蛉のみこそ、彼にはやゝ並ぶらめど糸につながれ、黐にさゝれて、童の翫弄と成るだに苦しきを、阿房の鼻毛に繋がるゝとは、最も口惜き謗かな。美人の眉に譬へたる、蛾といふ蟲も有ものを」　子を持てる者は、其恩愛に引れてこそ苦勞はすれ。蜂の他の蟲をとりて我子となす、老の行衞をはからんとにもあらず、何を讓られんとて斯くは骨折るにや。我に似よ〳〵とは如何に、己が身を思ひあがれるにかあらむ。花に狂するとは詩人の稱にして、歌にはさしも讀まず。蜜をこぼして世の爲とするはよし、只人目稀なる藥師堂に大きなる巢作りて、掃除坊主をおびやかさんとす、それも針なくば人には憎まれじを」

蛙は古今の序にかゝれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ、朧月夜の風靜まりて遠く聞ゆるは好し。古池に飛んで翁の目さましたれば、此物の事さらにも謗がたし」　蟬はたゞ五月晴に聞そめたる程が好きなり、稍日ざかりに啼さかる比は人の汗絞

ろ心地す。去れば初蝶とも初蛙とも云ふ事を聞かず、此物ばかり初蟬といはるゝこそ、大きなる手柄なれ。聽て死ぬけしきは見えずと、此物の上は、翁の一句に盡たりと云ふべし」 螢は比ふ可き物も無く、景物の最上なるべし、水に飛かひ草にすだく五月雨の闇は、たゞ此物の爲にやとまでぞ覺ゆる。然るに貧の學者に捕れて油火の代にせられたるは、此物の本意にはあらざるへし。歌に螢火とよませざるは殊の外の不自由なり、俳諧にそ其眞似すべからず」 日ぐらしは多きも喧しからず、暑さは晝の梢に過て夕は草に露をく比ならん。つく〳〵ぼうしと云ふ蟬は、つくし戀しともいふなり、筑紫の人の旅に死して此物になりたりと、世の諺にいへりけり。哀は蜀魄の雲に叫ぶにも劣る可からず」 蜘蛛は巧に網を結んで、潜りて物を害せんとす。待暮の歌によまれ又は退隱の媒ともなりたれど、偏に奸賊の心ありて最もにくし。古代朝敵の始として賴光をさへ脅やかしたる最と恐ろし。とは云へ廢宅の荒れたる軒に蟬の羽など懸捨たるは、聊かあはれ添ふ折もあらんか。彼は甲斐々々しく巢つくりてこそあれ、東海道に散りほひたる宿なし者をば、蜘とは如何でいふやらむ」 芋蟲は腹たつものに譬へ、毛蟲はむつかしき親仁の號とす。脊むし沓蟲は名のみして蟲ならず。油むしと云ふは、蟲にありて憎まれず、人にありて嫌はる」 蠶の生涯は世の爲に終り、火とり蟲は誰が爲に身をこがすや。蜉蝣は果敢なき例に引かれ、蓼くふ蟲は不物好の譏となれり。とは俳諧する者を、俳諧せぬ人の斯くいふ折もあるべし」 同じ寶の名に呼れて、玉蟲はやさしく、こがれ蟲は賤し」 蟻は明暮に忙しく、世の營に隙なき人には似たり。東西に聚散し餌を求てやまず、いつか槐安の都を逃れて其身の安き事を得ん。去るも侮りあしき方に穴をいとなみて、千丈の堤を崩すべからず」

蠅は歐陽氏に憎まれ。紙魚は長嘯子に憐れまる」 狗の齒に嚙まるゝ蚤は、たま〳〵にして、猿の手に採らるゝ虱は逃るゝ事難かるべし。虱を千手觀音と呼ぶに、蚰蜒は梶原といへり。さるを梶原が異名なりや、げぢ〳〵が異名なりや、先後今は知りがたし」 蝸牛は只水に有べきものゝ、如何で草葉に遊ぶらん。家は持たれども、行く先々を負ひあるくは水雲の安きにも似ず」 蛇、蚯蚓の足無くても歩くべくば、蜈蚣、など蟲の數多きは不用の事なり」 蟷螂の痩たるも斧を持たるほこりより、其心いかつなり、人の上にも此類ひはある可し」 蟹の歩みに譬ふべき物こそ無けれ、たゞ京吉原を駕に乘りて、富士を詠ゆく人には似たり」 促織、鈴蟲、轡蟲はその音の似たるを以て名によべる。松蟲の其木にもよらで、如何で斯く名を付たるならん、毛生ひむくつけき蟲にも同じ名有て、松を枯し人に疎まる。一ト在處に二人の八兵衞ありて、一人は後生を願ひ、ひとりは殺生を事とす、これ松蟲の類ひなるべし」 きり〴〵すの綴りさせとは、人の爲に夜寒をおしへ、藻にすむ蟲は、我からと只身の上を嘆くらんを、蓑蟲の父よと呼は、守宮の妻を思ふには似ず。去れど父のみ戀ひて、などかは母を慕はざるらん」 蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月の比、端居珍しき夕べ、はじめて仄かに聞たらむ、又は長月の比、力なく殘りたるは、さびしき方もあり。蚊屋釣たる家のさま、蚊やりたく里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、彼七賢の夜咄には、いかに團扇のひま無かりけむ」 むかし銀に執心殘せし住持は、蛇となりて錢箱をまとひ、花に愛着せし佐國は、蝶となりて園に遊ぶ。そも俳諧に心とめし後の身、如何なる蟲にかなるらん、花に狂ひ月に浮れて更ゆく行燈の影を慕ひ、なら茶の匂ひに音を啼らんこそ、哀なるべけれ。

カマキリの発生

君か代は。千代に八千代に。さゝれ石乃。いはほとなりて。こけの蒸すまて。

◎祈年祭祝詞

御年皇神等能。前爾白久。皇神等能。依左志奉牟。奥津御年乎。手肱爾。水沫畫垂。向股爾。泥畫寄氏。取作牟。奥津御年乎。八束穗能。伊加志穗爾。皇神等能依左志奉者。千穎八百穎爾。奉置氏。瓱閇高知。瓱腹滿雙氏。汁爾母穎爾母。稱辭竟奉牟。

大野原爾。生物者。甘菜。辛菜。青海原爾。住物者。鰭能廣物。鰭能狹物。奥津藻菜。邊津藻菜爾至万氏爾。御服者。明妙。照妙。和妙。荒妙爾。稱辭竟奉牟。

御年皇神能前爾。白馬。白猪。白雞。種々色物乎。備奉氏。皇御孫命能。宇豆能幣帛乎。稱辭竟奉久登宣。

◎蝗災告城隍文

維神職爕陰陽。下民之生。禦害濟災。
照臨斯土。古祀有之。迎猫迎虎。
今茲仲夏。蝗蝻荐延。趯趯動股。
越陌度阡。方將皷翼。積禍瀰天。
譬彼漢池。木斬竿揭。爰用興師。
庹蕘使絕。毋俾燎原。致難撲滅。
或捕或瘞。民亦致力。藟匪人與。
敬祈神殛。良苗懷新。惟神之仁。
秉畀炎火。惟神之武。至仁而武。
神其是依。嚴威有赫。靈鑒在茲。

斯る愛たき昭代には、彼の聞くだも忌はしき、蟲害の絕にて無かふま欲しさの餘りよ、二千年來朝廷に於て、最と重んド給へる、年ごひの祭の祝詞の數條と、明の康煕年間、飛蝗發生せし時、郯城の知縣黃六鴻が、民に其災害を免がれしめんとて祈祝せる告文の一とを、爰よ揭げて新年の賀詞に換ふ。

昨年の今月は温度高かりしため、モンキテフの飛行くを見たきり。

◎カマキリ類に就て （第壹版圖參看）

名和昆蟲研究所長 名和靖

カマキリは直翅目のカマキリ科(Mantidae)に屬し、年に一回發生するものにて、其能く疣を除去るより古名をイボムシリと呼ばれしを、後に訛りてイボシリと名づく、支那にては螳蜋と書し、或ひはまた螳蜋、蟷螂、蟷蠰などゝも書せり。往昔、齊の莊公の乘車を搏ちて、天下の勇蟲なりと嘆賞せられしを以て、有名の昆蟲にて、禮記の月令に「小暑至。螳蜋生」とあるもの即はち是なり。此蟲は邦内各地に産するも、唯寒地には其蕃殖極めて少なし、現に奥北青森縣に於ては稀に之を見るのみにして、一たび津輕海峽を越ゑて北海道に到れば、全たく之が隻影だも見ること能はずと云ふ。

(註) 先年嘗て札幌農學校に於て、其卵塊を求め孵化の後、原野に放養せしも、生存の痕跡を留めざりきと云へば、其源因は平均攝氏の八度以下の低温地に棲息を遂ぐること能はざるか、適當の食蟲居らざるが、ために餓死するか、若くは他の蟲禽に其蕃殖を妨げらるゝか、必らずや三者其一に居らんか。

現今本邦に産するカマキリは都て五種ありて、其躰長、形色自づから互ひに相仝じからず、一をオホカマキリと云ひ、二をカマキリと云ひ、三をハラビロカマキリと云ひ、四をコカマキリと云ひ、五をヒメカマキリと云ふ、便宜に從かひ之を比較記載別となす時は、即はち次の如し。

(一)オホカマキリ Tenodera aridifolia.

雄の躰長 二寸五分。 翅長 三寸五分。
雌の躰長 二寸九分。 翅長 四寸二分。

(二)カマキリ Tenodera capitata.

雄の躰長 二寸三分。 翅長 三寸。
雌の躰長 二寸五分。 翅長 三寸三分。

（三）ハラビロカマキリ　Hirodula lipapilla.　雄の軀長　一寸五分。翅長　二寸二分。
雌の軀長　一寸九分。翅長　二寸七分。

（四）コカマキリ　Pseudomantis maculata.　雄の軀長　一寸六分。翅長　一寸八分。
雌の軀長　一寸七分。翅長　二寸二分。

（五）ヒメカマキリ　Acromantis japonicus.　雄の軀長　九分。翅長　一寸三分。
雌の軀長　九分。翅長　一寸三分。

前記に依れば、ヒメカマキリ一種を除き、他は皆雌の雄に比して多少大形なるを證し得べし、又生殖上の必要より、其腹部も後者は前者より膨大なるを常とし、特にハラビロカマキリに於て其徴顯著なるを認む。軀色はオホカマキリとカマキリとは、綠色若くは淡褐色を普通とし、ハラビロカマキリは概むね綠色のものゝみにて、其異色を彩れるは極めて鮮なし、コカマキリに至りては、前種とは殆んど反對に綠色のものは恒に見ること難し、ヒメカマキリハ一種特異の外貌を裝ほひ、淡褐色に綠色を混ドへたり斯く軀色に數樣あるは、畢竟生存競爭の原理より出てゝ、其種屬の保護蕃殖に適應せしむるに外ならず即はち綠色種は綠葉に據り、褐色なるは樹幹枝莖に軀體を寄せて、その口腹を飽かしむべき小動物の來り近づくを待つに利便ならしめんが爲めなり。

カマキリ族は何れも中後兩脚は細長にして、肯て他の草蟲と大差なきも、前胸部の發達特に著るしくして長形を爲すが爲めに、前脚のみは恰かも鎌狀に變じて、そが股節と脛節とには鋸齒樣の短刺を叢生し且つ脛節の末端は尖銳の構造をなせるが故に、一躍能く容易に小動物を捕獲し得べし、是れ鎌切蟲の俗稱ある所以なり。もと此昆蟲ハ已が食餌とすべき蟲類を狙擊捕殺に巧妙なるも、決して死物を食せざるの性あり、故に飼育中に死蟲を與ふる時は、飢渴に迫りて餓死するもの亦少なしとせず。

其卵塊は和名をオホヂガフグリと云ひ、俗にまたカラスノヨド、ヨドスリの稱あり、支那にては之を螵蛸と稱して藥劑に供し、特に桑樹にあるものをば奇効ありとて桑螵蛸と呼べり。其形狀は種類によりて

（第一圖）
オホカマキリの卵塊

各々異なり、圓長大小の別あり、例へばカマキリの卵塊（第二版第一圖）は樹枝に下垂の狀をなして粘着し、外被極めて硬堅に、其色灰白褐を帶べり、之に反してオホカマキリの卵塊（第一圖）は餘り太からざる樹枝、竹枝に多く、稍不正圓形をなせり、其色澤は前種と全じけれども、實質は鞣軟にして宛然海綿の如し、ハラビロカマキリのものは（第二圖）樹木の幹枝に産附せられ、稍楕圓黄褐にして中央には灰白色の縱線を劃し、其質非常に堅固なり。コカマキリのものは（第三圖）雜草の根際或ひは石塊等に於て多く採集せられ、カマキリのものに似て小さく、其色彩は稍濃厚なるを恒とす。ヒメカマキリのもの（第四圖）最とも小形にして、概むね樹幹に産着せられ、採集容易ならずその形色頗ぶる前種に似たるを以て、往々誤認することあり、卵塊は大抵六月に至らざれば、孵化せずと雖ども、之に蒸熱を與ふれば季春初夏の比、幼蟲の化生を見るべし、一塊より孵化する所ろのもの凡そ百頭乃至三百頭に上り、その擧動甚はだ活潑なり。

カマキリ族は總べて食肉蟲にして、多く小動物特に昆蟲類を捕食す、中には偶々益蟲をも食餌とすれども、蠅、蚊その他の害蟲を貪食するが故に、農家は之を愛護して、天然驅除を行はしむを良とす、聞く茨城縣下にて煙草を多作する地方に於ては、十數年前より之を苗圃に放ちて、害蟲の幼若なるものを捕食せしめたる

コカマキリの卵塊
（第三圖）

ハラビロカマキリの卵塊
（第二圖）

に、奏効顯著にして頗ぶる人力を省けりと云ふ。然るに昆蟲學に通曉せざる農家中には、カマキリは柞蠶に加害すとて、此蟲蠶の發生より、結繭までを害する者なれば、捕殺を怠るべからず、但該卵子は小さき燒麩のやうなる者の中にあり、之を除くは冬春の頃、其卵巣を採りて燒殺すを尤良法とす」など其著書に記述せるもあれど、是は小害を見て大益を勘へざる議論なれば、決して迷ふ可きにあらず。カマキリは孵化後、成蟲に至るまでには凡そ、幾旬の日子を要すべきや、是を未だ輕々しく言明すること能はざる問題なるも、余が實驗に依ればヒメ種に在りては、凡そ六十日を要するが如し、去ば六月孵化するも八月に至らざれば、生殖作用をなすこと能はざるなるの道理なり。(昆蟲世界第五拾號雜報參照)

(第四圖)　ヒメカマキリの卵塊

▲▲説明　第一版(第一圖)はカマキリの卵塊、(第二圖)は其幼蟲の初期、(第三圖)は三眠起の幼蟲、(第四圖)は蛹期の狀、(第五圖)は雄蟲の翅を擴張せるもの、(第六圖)は雌蟲靜止の狀。(以上總て自然大)

◎翅脈研究の必要を辨ず

名和昆蟲研究所助手　名　和　梅　吉

人試みに昆蟲の翅翼を撿視する時は、其翅面には幾條の縱線、横線、或ひは斜線の網羅狀をなして交錯するものあるを見ん、昆蟲學の術語にては之を翅脈と稱す。乃ち翅脈の疎密、方向、長短等は昆蟲の種類に依りて其趣むきを異にし、脈翅目のウスバカゲロウ、クサカゲロウ若くは擬脈翅目のトンボ類、カゲロウ等は夥しく多くの翅脈を有するに、膜翅目の寄生蜂の一種又は双翅目の蟲癭蠅の一種か、左なくば總翅目のムクゲムシの如きは、頗ぶる少數にして、或ひは殆んど之を缺如するものさへ之あり、其千差萬別の狀、決して一定する所ろ無きが如くなるも、實は其間に牢乎不動の天則の存するものありて

割然彼此固有の特態を保持せしめ、幸はひに錯亂紛糾の患ひなからしむ。此を以て之を究明し得るに至らば、昆蟲分類の上に幾多緊要の利便を來たすべきや、豫じめ測知る可からざるものなり。

去ればにや、方今昆蟲學の研鑽に其一身を犧牲とせる先輩諸氏は、先づ翅脈に對する名稱を統一し、以て斯學大成の料に資せんことを欲し、日夜勉めて怠たらざるの傾向あり。現に米國の昆蟲學者カムストック氏の如きは、既に業に膜翅、双翅、鱗翅三目の攻究を遂げ、之を自著の昆蟲書に記述して世に發表せられぬ。就て之を覽るに、氏が宏博の識、精緻の學は、その多年の經驗と相俟て、明らかに造化の妙工を闡彰し得て、吾人初學者の迷蒙を啓發せしむるに足り、之が爲めに享くる所ろの恩惠の尠少にあらざることを知得せり。此に至りて余は本邦に於ても、從來各學者間に命名固執せられしが如き弊風を廢め、全國に共通すべき適當なる一定の名稱の下に、翅脈より漸次その他に研究し及ぼし、假ひ後進と云ふと雖ども、稍秩序ある昆蟲學の旗幟を、絕東のこの名譽國に樹てられん事を望まざるを得ず。

前にも言へるが如く、昆蟲の翅脈たる、其種目の異なるに隨うて搆成を異にし、疎密單複必らずしも同一の形式に出でず、故に之が研究も實は易きに似て決して易きに非ず、また難きに似て決して難きにもあらず、要は綱を置き目を立て其本末を糺し其用途を明らむるに在るのみ、而して之をなさんには先づ次の六者より、逐漸各部に推及ぼすを順序とすべし、曰く前緣脈（Costal Nervure）なり、曰く亞前緣脈（Subcostal Nervure）なり、曰く半徑脈（Radial Nervure）なり、曰く中央脈（Median Nervure）なり、曰く肘脈（Cubital Nervure）なり、曰く臀脈（Anal Nervure）なり。

右の六翅脈中、前緣脈と亞前緣脈とは、通常分枝せずして單一線を畫するも、半徑脈、中央脈及び肘脈に至りては共に分岐するを見る、即はち半徑脈は五條に分れ、中央脈は三條に分れ、肘脈は二條に分れ

（第一圖）クロアゲハの前翅

（イ）は前緣脈（ロ）は亞前緣脈（ハ）は半徑脈（ハ1）（ハ2）（ハ3）（ハ4）（ハ5）は第一、二、三、四、五半徑枝脈（ホ1）（ホ2）（ホ3）は第一、二、三中央枝脈（ト）は肘脈（ト1）（ト2）は第一、二肘枝脈（チ）（リ）（ヌ）は第一、二、三臀脈（ル）は橫脈

臀脈は一箇乃至三箇を存し尙は橫脈をも併有す、而して或昆蟲にありては、中央脈の前後に、各一箇の翅脈を存することあり、之を稱して前中央脈(Premidial Nervure)と謂ひ後中央脈(Postmedial Nervure)と謂ふ。

今鳳蝶科のクロアゲハの翅脈を細撿するに、前中央、中央、後中央の三脈は全たく之を缺き、半徑脈よりは斜めに五條の枝脈を並發す、之を第一二三四五の半徑枝脈と謂ひ、其の中央脈より出でたる三條の枝脈をば第一二三の中央枝脈と謂ひ、肘脈より分れたる二條の枝脈をば第一二の肘枝脈と謂ふ、即はち上の第一圖に示すもの是なり。而して臀脈は都て三條より成り、その第三脈は極めて短かく辛うじて後緣の三分一の位置に在るも、第二脈は翅底より外緣に向ふて縱走し、更に翅底に近き邊より分枝して第一脈即はち點線を以て現はしたる系脈を形成し、それより共に外緣に至るものなるが、其基部には肘脈に接して一の橫脈をも具へたり。

以上の記載は、クロアゲハの前翅に於ける脈系の大概なるが、後翅にありては多少其の趣むきを異にし前緣脈は短かくして亞前緣脈の基部に於て連環し、半徑脈は別に枝脈なく、中央枝脈及び肘枝脈は共に前翅に同じきも、臀脈は唯一條を有するのみ。

此等の事實を確かめんが爲めに、更に粉蝶科のモンシロテフに就て證左を擧げんに、固より大躰は前者と違ふ所ろなきも、仔細に觀察を加ふれば、多少相異なるものあるを見ん、即はちクロアゲハは半徑枝脈の五條を有し、その第三脈の分岐點より第四脈を派し、更に中途より第五脈を畫するも、モンシロテフに在りては、四枝脈に止まるやの觀ありて、第三四兩脈は合一に歸し、唯第五脈のみ纔かに前縁に近き部分に至りて分岐し、其中途に於ては第一中央枝脈をも分出し、斯くて臀脈は二條にして横脈を缺けり。其後翅は概むねクロアゲハと同じきも、臀脈は彼に比して一條多し、是れその異點となす。又蛇目蝶科のジャノメテフを視る時は、前後翅ともに中央脈の存在を認むべし。然らば則はち假し同一に翅脈を有するものなりとも、其種屬を異にするに随うて、枝脈分出の位置には、自づから異なる所ろあるを知る可きなり。

第二圖

クロアゲハの後翅符合は前翅に同じ

第三圖

ジャノメテフの前翅（ホ）は中央脈の他の符合はクロアゲハに同じ

それ一二の蝶種に就きて調査するも、なほ能く翅脈には斯かる異同あるを知らん、若し更に歩を進めて之を双翅目、或ひは膜翅目のもの丶上に比較研究を行ないたらんには、各種特殊の構造を明ふむることを得て其利益と其快味とを併得するに至りぬべし。例へば同じく鱗翅目に屬するものにても、蝶と蛾とはまた其翅の組織を異にし、或る蛾の前翅の翅底内縁角の部分は、裂片となり、廣刺となりて後翅を連接するの用をなせる内縁裂片(Jugum)と稱するものを存し、又後翅の前縁翅底

に於て、同一の作用をなすべき肩角刺（Frenulum）を具備するが如き、擧來れば翅脈研究の必要を感ずることと愈々深し、知らず余が希望は近き將來に於て、讀者の採納せらるゝ所ろとなるべきや、否や、刮目之を異日の動靜にトせん。茲に新春を迎ひ、漫りに所懷の一斑を書して之を同志に告ぐと云爾。

◎瑞祥甘露の事を記す

仙臺宕麓　晴耕雨讀子

法華經には五百年に一たび花を開くと説かれ、河海抄には金輪王出世の瑞として靈瑞花と仰がれ、源氏物語には心ある法師の和歌にさへ詠まれたる優曇華は、近く享和年間までも、箏花てふ雅名の下に、柳營の內覽に供へられし程の珍品たりしに、昆蟲學の發達に伴れ、可惜この名花をば、尋常一樣の蟲卵と解決して、世人に興をさまさせし學者のあるに、尋でまた嘉瑞吉祥の一たる甘露をも、害蟲蚜蟲の排泄汚液なりとて、之を卑下するに至りしこそ無情けれ、實に學術の進歩は無風流を媒ちするものにや。

その初め、蚜蟲の排泄液に甘露の美稱を命じたるは、彼の好奇心に富める支那人の所爲なり、去れば彼國にては、古來また多くの嘉名を附して仁澤、文露、瑞露、寶露、膏露、榮露、天乳、天油、天酒、仙酒、天瑞、甘膏、日膏、酒漿、神漿、凝脂、神滋、敎水などゝも呼び、こは神靈の精、仁瑞の澤なれば飲む者は、不壽なるも能く八百歲の長齡を保つべしと諸書に散見せり。

抑何が故に斯く瑞祥の稱を冠ぶらして、彼の四靈と斑列を等うするまでに尊重せしやと云ふに、原と方士の一仙術に過ぎざりしを、事理を解せぬ暗愚の君主の、之を延命無病の靈液と誤信するに及びて、國家の吉兆となし、三轉遂に政治上の或場合にも利用せられたるに因れるならん歟、去るにても、その稀に降下すると、其形味の他物に似ざると、崑崙山、蒙山の如き名岳嵩嶺に在りとの傳說は、他の怪異を

書列ねたる諸書と相俟て、當時の人心を動かしたるや固より論なし、要は陰陽説盛んに行はれて理科思想の空乏なるに歸すべきのみ。看よ、甘露の宿るまでに蚜蟲の群生せる樹木なりせば、早晩枯瘦を脱がれ難きを以て、則はち凶徵たるべきに、先天的に之を以て聖德仁澤の餘光と牢記せる彼國民の腦底には露かゝる感想も溢出でず、或時は「王者ノ德至ニリ於天一ニ。和氣感ス。則チ甘露降ル二于松柏一ニ」と讃め、或時は「軒轅之精散シテ。則チ爲ル二甘露ト一」と頌し、また或時は「甘露ハ仁澤也ナリ。其ノ凝ルヤ如シレ脂ノ。其ノ美キ如シレ飴ノ」との形容詞を用ゐたりき。若し此かる世に、昆蟲學者の存在して「薔薇之一株、昆蟲世界」の如き書を發行したらんには、恐らくは坑火の災禍を免がれ得ざりしなる可し。

ろも支那に於て、甘露を瑞祥となせし濫觴は、詳びらかに之を知り難きも、黄帝の時既に丹丘國より瑪瑙甕に寶露を献ぜたりとの記事あるに徵し、又佛敎の古偈に甘露門云々の句あるに推せば、彼土に蚜蟲の發生せしは、その如何に久遠なるやを測知するに難からざる可し。今下に二三の例證を擧げんに、漢の武帝の元光二年(二千三十三年前)に方士をして神仙の術を求めしめしに、東方朔は得意となりて天酒と玄露とを帝に献じ、帝また之を群臣に頒ち與へたりと云ふが如き、同代の宣帝は纔かに二十年間に、五たび年號を更へ乍ら、此度はまた五鳳を甘露と改元せりと云ふが如き、後漢の明帝の永平十七年正月に、甘露甘陵に雨ふりしかば、即はち百官をして朝に壽を上まつらしめたりと云ふが如きは、共に皆著明の事實にして、その宋の神宗の熙寧六年に、建昌城北の松樹に甘露降ることありしに、乃はち其松枝を折りて太守張子方に献ぜたるは、概むね人の知る所ろなり。

去れど前記の諸說は、未だ全たく支那に於ける甘露の價値を判定するに足らず、隋書の賀表にいふ「神漿可シレ掬ス。流スニ珠ヲ九戶之前ニ。天酒自ラ零ツ。凝テ照ス二階之下ヲ一」と、又曹植が銘てふものには「甘露以テ

降リ。蜜淳氷凝ル。覩レ陽不レ晞ガ。瓊爵是レ承ク。献ニ天帝ノ朝ニ。以テ明下聖徳上」とも見ねたり。啻りこれに止めぞ、隋の李德饒が其父の憂ひに丁りて、甘露その樹に降りしかば人皆之を羨欽して、これを以て至孝の致す所ろありと、後漢の沈豐が零陵に太守たりし時、甘露大ひに降りしかば、時人これを以て德政の致す所ろなりとし、岑彭が潁川に守たりし時、全じく甘露、嘉禾、麟鳳の瑞ありしかば、これを以て良治の致す所ろなりとせしに至りては、誠とに驚くに堪へたり。其他明皇雜錄には「李林甫が其女壻鄭平と與に、恩賜の甘露羹を食へて、鬢髪黑く變せりとの一仙話を載せ、本草書には「甘露は氣味甘く、大寒にして毒無し、之を食へば五臟を潤ふし、年を長て饑へず」と云へり。もと好んで亂怪を談るの性ある支那人の事にしあれば、斯ばかりの妄誕放語は敢て奇とするに足らねど、此一種不可思議の記事の裏面には、却つて上下擧りて甘露を尊重せる眞理を包藏するにあらざる莫きかを疑ふ、但この迷信の依然として明代まで繼續せられしは、遺憾の極みと謂ふべし。

（未完）

◎柑橘の有害貝殼蟲と驅除法（既に本邦各地に發生するもの及び將來輸入の恐あるもの）（續）

在米國スタンフォールド大學　米國理學士　桑名伊之吉

（5）Pulvinaria psidii, Mask.（學名）　Lecaniinae（亞科名）　雌蟲は躰長約ろ二ミメありて黃褐色を呈す、枝條及び葉裏に附着の卵囊は綿質にして白色なれども、通常は黑色の煤樣をなせる黴菌を以て被包せらる觸角は八節より成り、脚は比較的太し、其幼蟲は扁平橢圓形をなし、觸角は六節を有せり。此種は布哇島咖啡作の大害蟲にして、もと分布區域は極めて廣く錫蘭（Cylon）及び支那領土にも多產す、而して此種に關する歷史を言へば、桑港檢疫官クロウ氏は、先年布哇より輸入の柑橘苗木に寄生せるを發見して

悉ごとく之を燒棄せしめたることあるの外、余亦之を福岡、岐阜兩縣下に於て採集せしも、柑橘樹に於ては嘗て見る所ろ無かりき。

(6) Pulvinaria aurantii, Ckll.(學名) Lecaniinae(亞科名) 此種は前種に酷似するを以て、顯微鏡の力に藉らずんば、到底識別すること難し。本邦各地に發生の種にて、柑橘類の大害蟲とす。

(7) Lecanium hesperidum, L.(學名) Lecaniinae(亞科名) 雌蟲の躰長は三メミありて光澤ある褐色を呈す、躰面は稍凸起せり、此種は成長の期の異なるに隨うて其色澤を異にし、幼若なる時は黃色に且つ軟弱なるも、漸やく老熟すれば遂に褐色となる。幼蟲は長半メミ許り、黃色にして斑點あり、その多く新芽に群棲する性あるを以て大害を釀すに至る。

Pulvinaria aurantii の圖

（イ）は雌蟲產卵せし狀（自然大）（ロ）は其幼蟲（放大）

此種の分布は至つて廣く、歐洲諸國にて夙に果樹及び庭園植木の害蟲として之を疾視し、米國フロリダ、ルイジアナ及び加州にては間々柑橘類に加害せらるゝことあり余は昨年東京、橫濱及び北海道に於て之を採集したるも柑橘樹上の寄生を認めざりき、而してその北海道に於けるものゝ約そ八割は皆寄生蜂の爲めに斃され居れるを發見せり、別に天仇としては瓢蟲の或種を存す。

(8) Lecanium hemisphaericum, Targ.(學名) Lecaniinae(亞科名) 雌蟲は躰面著るしく凸起して半月形をなし、其長三、五メミ、濶三メミ、高さ二メミあり、卵は雌蟲の躰下にありて黃白色をなす。幼蟲は淡褐色を帶び、その形ちは扁平楕圓なり。

此種は通常温室の害蟲を以て目せらるゝも、米國フロリダ州及び加州にては、往々柑橘に加害す。余は東京府下に於て採集せしかども、柑橘に於ては其寄生を見ざりき。

(9) Lecanium oleae, Bernard.(學名) Lecaniinae(亞科名) 雌蟲は躰長四乃至五ミリありて暗褐色を呈す躰面にH狀の凸起あり、卵は楕圓形をなし産下の當時は白色なれども、漸次紅色に變ず。此種は歐米諸國にも産し、加州にては果樹の大害蟲の一たり、余は東京近傍の川崎村に於てLimetree（菩提樹）に寄居するを實見せしのみ、而してその天仇としては瓢蟲Chilocorus calti及びRhezobobius ventralisあり。

(10) Ceroplastee ceriferus, Anderson.(學名) Lecaniinae(亞科名) 雌蟲は褐色にして躰面は著るしく凸起し、腹部は扁平なり、全躰常に白色の蠟質を以て包はる。幼蟲は黄色を呈し、其形ちは扁平楕圓に、觸角は六節より成れり。此種は本邦諸處に産するものとす。

(11) Ceroplastes floridensis, Comstock.(學名) Lecaniinae(亞科名) 雌蟲は楕圓にして、その躰面は大ひに腫起し、腹部は扁平をなせり、全躰常に白色の蠟質にて覆はれ、左右兩側には各々三箇の蠟質凸起を有す、其體長は二、五ミリ乃至三ミリを算す、卵は楕圓形にして紅褐色をなしその數は恒に七十五乃至百顆の間にあり。

イ

ロ

Ceroplastes屬の圖
(イ)は雌蟲の樹枝に附着する狀(自然大)(ロ)は其幼蟲の腹面と側面(放大)

(13) Ceroplasts cerripediformis, Comstock.(學名) Lecaniinae(亞科名) 此種は一千八百八十年にフロリダ州にてカムストック氏の發見せる柑橘の害蟲として、爾來ルイジアナ州及び加州に於ても之を見受けらる、その外殼の形ちは宛がら「エボシガヒ」(Barnacle)に似たり、幸ひに本邦には未だ發生するに至らず

（未完）

岐阜縣にては今月桑姫象蟲驅除のため、吏員を郡部に派遣す。

◎廢物の利用（テグスの製造原料）

京都蠶業講習所技師　農學士　川島勝次郎

私は唯今御紹介成りました通り、先日來、蠶病消毒講習會に出て居るのでありますが、今日岐阜昆蟲學會月並會を御開きに成るので、私にも何か話をせよとの事でありますけれども、昆蟲に就ては何も十分に研究又は調査を致した事も有ませず、且今日御列席の過半の方々は、講習會で日々御目に掛ッて居りますから別に珍らしい咄とてもありませぬ、そこで御斷り申上ましたけれども、何か暫時にても宜しいとの事で有ますから、茲に罷出た次第であります。

扨今日は廢物の利用と云ふ事に就て御咄し致し度いと思ひます、尤とも是は昆蟲學會の御席で述べる程の事でも有ませぬが、全く緣の無い事でもあるまいかと思ひ、暫く清聽を瀆す次第であります。元來廢物と申しましても、人智の進歩せる今日に於ては、眞の廢物と云ふものは殆んど有ませぬ、例へば彼の一匹の牛に就て御覽なさい、肉や皮は勿論、乳、毛、角、骨、臟腑、血液などに至るまで其々用途がある特に以前は單に肥料とするのみで誰も顧なかッた血液からも、近年は精良なる有用物を製造すると云ふ事であります。又炭燒の廢物として居ッた煤煙は木精、醋酸其他主要なる藥品となり、襤褸片は變じて純白光潤の上等洋紙となります位ゐであるから、斯る例を擧げますと中々に澤山あります、が私の只今述べやうとするのは、昆蟲に關係のあるもので有ます。

それは外でも無い、養蠶上の廢物とでも申しませうか、彼の上簇間際に出來る所のヂヤイ、ゴロツキ、裸蛹と稱へて居るものや、又は栗蟲の如きものである、即ち廢物と申さんよりは寧ろ害物たる害蟲を利用するのであります、而して之を利用するには差當り「テグス」を製するより外に途が無からうかと思ひます。今日我邦で漁業に使用して居る「テグス」は重に支那及び印度から輸入するものでありまして、其原料を樟蟲の一種の絲線から取ると申しますが、長さは三四尺もあります、又一種伊太利や佛蘭西諸國

かゞ參るものは、蠶兒の絲線から出來たもので、其長さは一尺前後に過ぎませんけれども、品質は餘程上等でありますο而して此等「テグス」の本邦に輸入せらるゝ高は毎年十萬圓足らずの統計でありますが實際はそれよりも餘程多いとの事に聞及びました。

斯ういう樣に廢棄蠶や野生の害蟲から「テグス」と云ふ有用品を製する事が出來るので我邦でも段々之が製出に就て研究した人がある、併し乍ら內國產栗蟲の絲腺から得たるものは、小魚を釣るには適するが大魚には强力に乏しいと云ふ缺點がある、又蠶兒から抽出したものは、强力伸度共に申分無いやうだが長く海水に浸せば多少剝げて取るゝ憂ひがあると云ひます、…………是は未だ十分の試驗を遂げませんが、若し果して然りとするも、少しく腺法を改良さへすれば其憂ひを除く事が出來るに違ひ無い、且前にも申しました通り、蠶兒は別に健全のもの計りを用ゐるに及びませんで、隨分病蠶の種類に依ては其絲腺を利用する事が出來るのでありますから、旁々以て望みの無い事では有ませぬ。

是より蠶兒の絲腺から「テグス」を抽出す方法の大略を述べませうならば、先づ其用に充てやうと思ふ蠶兒を集めまして、之を食用酢の中に浸すこと二十時間乃至一晝夜の後に取出し、その頭部を切りまして腹部から靜かに內臟を推出しますと、二條の絲線が之に伴へて出ますから、そこで其絲線の第一屈折部と第二屈折部との中間を取りまして、豫じめ裝置せる竹釘の間に其一端を挾みて徐々と之を引延し、他の一端をも亦一方の竹釘に挾みまして、日光で乾かしたる後に、束ねたる儘「マルセーユ石鹼」で練りあげるのであるが、扨この引延す時には自然に任せて延す樣に致し、決して手を以て擦りては宜しくありません、何故なれば扁くなるからである、又「マルセーユ石鹼」は二〇〇瓦の水に其五瓦を溶かして一時間半も煮れば宜しい。斯くして後は、淸水で洗ふて表面附着の滓すなはち絲線細胞を取除き、それを彎曲にしたる竹に恰かも弓弦を張りました樣に張詰めて、日蔭でこれを乾かすのでありますが、尙その上に藁を以て磨きますれば極めて光澤あるものと成るので有ます。

斯樣な次第であッて「テグス」と申すものは、絲線に食酢の如き酸性のものを注ぎ、其間に化學變化を起さして製造するもので有ますから、解舒に用ゐる藥劑は決して食酢に限ッと云ふ譯では有ませぬ、即ち酢の中に含んで有まする成分中の酸味と同樣のもの、彼の醋酸とか、硫酸とか又は硝酸のやうなものも亦同一の効用があるのである、唯それを稀薄にする度合が六かしいので有ます、尤も氷醋酸と申すもので有ますと、水の三百立方仙迷に對して八立方仙迷の分量を混じ、その混合液に二十時間も浸せば宜し

いが、硫酸や硝酸になると極めて薄くせんければ到底駄目で有ます、又「マルセーユ石鹼」の代りに明礬その他の藥劑を用るも宜しい。兎も角、今日までの經驗に依りますと、浸す時には酷酸か又は普通の食用酢を用ゐ、精練には「マルセーユ石鹼」が一番に結果が良いやうで有ます、併し悲しひ事には、漁業に使用しての結果を見ると、何分外國から輸入致しました品ほどに具合好くは無いのである、尙ほ研究を要する點が多い事と存じます。

一躰この「テグス」を製しますには絲線の大なるもの程宜しいのでありますから、健蠶でありますと固より佳良品が出來ませんけれども、濫りに健蠶を用ゐまするのは國益上得策とは申されません、或ひは今後完全の製法が知られ、且つ非常に需要が増す事がありますれば、其塲合には格別でありますが、成るべく爛熟の蠶兒を利用することが必要でありませう、又森林の害蟲の如きも、用ゐ方に依りましては十分に害を益に轉用する事が出來るでありませうから、是非一つ此範圍に於て完全の「テグス」を製出致し、一には廢物を利用し、一には海外の輸入品を防ぐの道を求め度いと存じます、就ては唯り養蠶業の一方から計りでは無く、普通の昆蟲學上からも御研究を願ひたいのであります。話の材料は尙ほこれに盡きませんが先づ今日はこれで御免を蒙ふります。

昨年今月一日の調査に依れば、全國の水田は、約二百七十六万四千三百町歩あり。

◎本邦昆蟲研究家叢話（其二）

古奥　青蓑白笠の人

◎小野蘭山先生の篤學　本邦物産學中興の祖として又博物學の泰斗として、昆蟲學の發達に偉大の恩惠を與へたる者を、近代の學者に索むれば、必らずや先づ指を小野蘭山先生に屈せざるは莫かるべし。先生は從四位下主殿大允兼伊勢守職茂朝臣の子にして、本姓は佐伯氏、名は職博、字ハ以文、俗稱は喜內、蘭山は其號なり、別にまた衆芳軒、朽匏子とも號せり。享保十四年を以て京都に生る、幼時より學を好み、年甫めて十一、秘傳花鏡を手寫して觀者を驚かしゝぬ。稍長じて松岡恕庵氏に就きて本草を攻究すること多年、念を塵界に絶ち、帷を下れ徒を聚めて學を京都に講ず。時に學術革新の機に際り、新

古の各派互ひに抗爭し、海內殆んど歸嚮する所ろを知らず、先生此間に在りて專はら物產學を唱ひ、稻生若水、松岡恕庵二先輩の論旨を承述し、日に業を執るもの十八時間、名物を辨別し品類を稽査し、刻苦精勵の功を累ね、己にして諸國及門の徒、爭そひ至り名聲漸やく遠近に振へり、時に先生未だ而立の齡に達せざりきと云ふ。年七十一、幕府の徵に應じて江戶に徙り、醫學館に本草學を敎授せしに、其精通多識に服せざる者なかりき、當時の醫學館督學丹波元簡氏先生の行狀を記して「自先世迨父祖。並仕朝。至翁隱于洛陽之市。下帷授徒。採藥之外。足不出戶。而名顯於海內。己未春。應召來茲都。賜居於醫學之西隅。命講本草。授醫官子弟。余因窺其爲人。沈靜古朴。澹然於世味。性最强記。凡人持草木諸物而問之。莫不衝口而荅。答必擧數名引數證以告焉。嗚呼。殊方絕域。山顚水涯之品。其區而別。何有所限。而其應答能如是。則不知翁之胸中。儲蓄幾千萬種也。翁年七十餘。其貌鑁然。猶能採藥於山谷間。人稱爲地僊云。」と云へるは能く其眞容を寫せりと謂ふべし。

先生の江戶に在るや。甲駿濃信紀勢諸國に採藥するもの前後七年、その間動植鑛諸物を蒐集して、醫學博物學に貢献する所ろ擧げて數ふ可からず。享保三年本草綱目啓蒙四十八卷を公行し、次で啓蒙名疏七卷を上木せしむ。蓋しこの二書は先生畢生の心血を濺げるものにて、中に收むる所ろの品種凡そ千八百八十二種に上り、博く古今に涉りて和漢の衆說を綜攬し、其源に遡ぼり其徵を窮め、往々前人未發の卓說を吐露して、自づから一家の機軸を出せり、特に腐草化螢說を排斥せるが如き、又甘露蟲遺說を主張せるが如きは、今人の轉た敬服する所ろなり。聞く大槻文彥、物集高見の二文學博士が、曩に言海、日本大辭林の兩辭書を著はすに當りてや、最とも動植庶物の解說に窮し、多くは先生の遺著に據りて始めて其業を完うすることを得たりきと、是れ今に至るまで既刊本草書中の白眉と稱せらるゝ所以なる歟。文化元年幕府の秘庫に就て、庶物類纂一千卷を手寫せしに、その三年、火災のために半を失へり、依てまた之を繕寫して完本となせり、此時先生年己に七十八、從學する者また一千人に超ね、益々內外の崇敬をうけられぬ。既にして先生疾ひに罹る、臥して牀中にあり乍ら、これに屈せずして廣參說二千餘言を草し、業終るに及びて其僑居に逝けり、享年八十有二、實に文化七年正月廿七日の事なりき。先生資性堅忍にして坦靜、生涯娶らず、頹齡老境に至るも嘗て講學を廢めず、言語細低殆んど言ふことを能はざるが如くなりしも、其强記洽聞なるは、優に一世に超絕し、栗本丹洲氏の如きすら、先生の示敎鑒定を仰ぎて、千蟲譜を大成せりと云ふ。門下また名を成せる者多し、就中、木村巽齋、水谷豐文、飯沼慾齋

杉田元伯諸氏はその衣鉢を承け、斯學の進歩を圖れる者とす。著書數種あり、十品考、毳筵小牘、本綱品目、格物徵、松軒愚筆、衆芳軒雜錄、飲膳摘要等は其主要なるものにて、手跡は門人柚木常盤作る所ろの夏草冬蟲帖の書牘によりて、世に傳へらる。

◎三化螟蟲二期越年の原因發見（越年蟲の死活）

愛媛縣農事試驗場東豫分場技手　矢野延能

我東豫分場に於ては、三化生螟蟲第二期越年の狀況及ひ彼か自然界に於ける狀態の一斑を調査して豫防驅除の資料たらしめむとし、客年十月より十一月に涉り不肖延能等に命して越智、宇摩二郡に出張し、實地を調査せしめむ、依て之に關し從前調査したる事項をも併せ、左に要領を摘錄して讀者諸君の參考に供す、其詳細に至りては、他日報告書に依りて公にせらるゝ所あらんと信すれは茲に略す。

（第一）　三化生螟蟲が普通の經過を取ると、第二期幼蟲にて越年するとは、溫度の高低一大原因を爲せり、即ち第二項乃至第四項に據り推測斷定するを得べし、是れ單に一ヶ年內の現象に基くと雖も、尚ほ各地の實況は其揆を一にし、毫も此理に漏るゝものなく、遂に此推斷を下さしむるに至れり。（第二）溫度高き地には、第三期の經過を取るもの多く、溫度低き地は之に反せり、但溫度の高低は、海岸平地と山間高地、地底より冷水滲出する濕田と然らざる陸田と對比勘算せり。（第三）　冬作期間、稻株の乾燥し難き二毛作濕田には、第二期のもの多くして第三期のもの少し、是れ冷水滲出の爲め地溫低くして、第三期の經過を取るに適せざると、稻株濕潤にして越年に適するに由るならん、斯かる、地形の土地は、常に彼か根據地に供せられて、其附近に蔓延するの基點となるのみならず、水利の便あるか爲めに、苗代を設くるものある時は、即ち其苗に產卵して、越年不適の地に移植せられつゝあるあり、若し夫れ夏季に格別高溫ならんか、斯かる濕田も普通の經過を取るに適するに變じ、遂に非常の慘害を被むるに至るべし。（第四）　冬作期間能く乾燥する陸田には第二期のもの稀にして第三期のもの多く或は第二期に同し、是れ全く地溫を低下すへき原因なくして、第三期の經過を取るに適すると、稻株乾燥の爲め螫伏蟲の死滅多くして、越年に適せさるとに依るものならん、然れは適々冬春多雨過濕にして稻株乾燥完からさることあらんか、一轉忽ち越年の適地となり、その蕃殖蔓延を恣にするに至らん。

（第五）　每年四月頃、耕耡湛水する水田には、三化生螟蟲甚はた稀なり、之に反し六月中旬に至り始めて耕耡する水田には該蟲多し、是れ甲は稻株の反轉湛水に由り螫伏蟲を死滅せしめ、乙は耕起前に螫

伏蟲の殆んど化蛾し終るに由る。（第六） 陸田濕田の冬春耕耘は、蟄伏三化生螟蟲の死活に關すること大なり、即ち田面能く乾燥すと雖も、稻刈取後只一回耕耡したる地の稻株よは生存蟲多く、麥田の屢次耕耘したるものよは生存蟲少し、是れ全く數回耕耡の功に由り、稻株の翻轉せられて乾燥すると然らさるとよ由るなるべし、然れども或程度までは、乾燥以外の原因によりて、其發生を妨けらるゝや固より論なきなり。

附記　蟄伏稻株の乾燥死滅は福岡縣に於て、同堀返し湛水死滅は德島縣に於て、既に發見せられたるのみならず、當分場に於ても客年四月其種蟲を新居郡金子村に採收するに當り。大に此事の實地に行はるゝを見認め、同月廿四日試驗に着手し、稻株日乾三十日試驗には（晴天十四日）死滅十九頭、半死一頭を、稻株倒伏浸水二週間試驗よは全死滅の成績を得たるものにして、本項亦出張當時に見認めたる所の實況なり。

之を要するよ、冬春の乾濕は越年蟲の死活よ關はり、夏季溫度の高低は第三期發生の多少に關はり、其乾濕寒暖は氣候風土及ひ人爲に原因するを知るへし、依て以て乾燥、浸水、低溫に彼が蕃殖力を減殺せらるゝの特に多大なるを觀、其減殺が防除の目的以外に行へる人爲よ基つく場合尠からさるを察せは、多少之を根本的豫防法に應用するの方策を講するの急務なるを感せずんはあらさるなり。

◎昆蟲見聞記拾遺（一）

長野縣　清水藏

（其一）再び蠶兒の尾角よ就て　予は本誌第卅二號雜錄欄內に於て、蠶兒の尾角と題し、某幻燈說明者の說なりとて、蠶兒の尾角は營繭上の必用具よして、之を切去り又は損傷するときは營繭をること能はさるものなることを記載せしが、右れ大なる誤りにて、蠶兒の尾角は營繭と何等の關係なきことを、京都蠶業講習所技手荒木武雄氏が濃蠶原因硏究試驗の結果に依りて知得したれば、左に記載してその誤を正す。

尾角切斷試驗　明治三十三年七月十三日、四齡餉食の夏蠶ィ形三十頭を採り、其尾角を切斷して血液を流出せしめ、爾後普通の方法を以て試育せり、蠶兒發育の狀況は、切斷せし當時にありては痛苦に堪へざるが如くなりしも、時日を經過するに從ひ漸次回復し遂に一頭の斃蠶をも見すして上簇せり、結繭蠶三十頭の內一頭死籠あり、之れを鏡檢するに軟化病にして遂に一頭の濃蠶を認めず。

（其二）カブトムシの利用法に就て　カブトムシの利用法よ就ては、是迄二三回本誌上よ記載せられしが予はカブトムシの爲めよ一命を助かり得たる昔話を探り得たれば、下に記して諸君が消閑の一助よ供せんとす。

昔し土耳古國にて、ヴイズアーと云へる人は、其帝王の逆鱗に觸れて、森林中の高塔に幽閉せられぬ、ヴイスアーは種々脫獄の工夫を

凝したるも遂に能はざりき、然るに一日其妻の塔下に尋れ來りて悲しみ居るを見て、之に牛酪少しと、強きカブトムシ一頭と、絹糸撚糸、鞭縄の一把づゝと及び太き亭縄とを持ち來るべきことを命したり。妻は怪しみながら此等の品々を持て到りしに、乃ち妻に命して其カブトムシの頭に牛酪を塗り附け、其体の一端に絹糸を結付け塔壁に附着せしめぬ、然にカブトムシは其頭に牛酪の塗附せられたるを夢知らずして、其香氣は必ず塔の上部にあるものならんと次第に這ひ上り、遂にヴヰズアーの居る邊迄達したるを以て、難なく其絹糸を手に入れ、此絹糸にて撚糸を引上げ、更に撚糸にて鞭縄を引上げ、遂に亭縄をも引上げたるを以て、其一端を塔の柱に結付け、之に傳ふて脫獄の目的を達したりきと。

◎昆蟲に關する算術問題

岐阜縣立農學校　木村良雄

小學校に於て算術科を課する要旨は、日常の計算に習熟せしめ、生活上必須なる知識を與へ、兼て思考を精確ならしむるにあるを以て、其問題は他の敎科目に於て授くる事項及土地の情況を斟酌して日常適切なるものを選ばざるべからず、然るに多くの小學校に於て授くる所の問題は、敎科書に揭くるもの其儘なるが故に、土地の情況に適せず隨うて生活に必須なる知識を與ふることの少きは、予の常に遺憾とする所なりしが、岐阜縣土岐郡の小學校長諸君は、過般全郡に於て農作害蟲驅除講習會の開かれたる際予の希望に協へる問題を作成して講師名和先生に示されたりと云ふ。其問題は何れも面白けれども、其數多くして悉く揭載し難きにより、中に就て特に適切なりと思へる數題を選拔して讀者の參考に供す。

○尋常科第一學年　（一）バッタには、四本の短き足と二本の長き足とあり、總て幾本なるか。（二）七ホシテントウムシには七つの黑点あり、二匹には幾つの黑点あるか。（三）アリ二匹の足數合せて十二本なり、一匹の足數は何本なるか。

○仝第二學年　（四）或る梨の木には三十七顆成りたりしも、象蟲の爲めに十九顆を落されたりと云ふ、殘り何顆なるか。（五）テントウ蟲一匹にて一日にアブラ蟲二十二匹を食ふとせば、三日間には何匹のアブラ蟲を食ふか。（六）兒童五人にてエダシヤクトリ九十五匹を捕へたりと、一人に付平均何匹あるか。

○仝第三學年　（七）夏期休業中にクハカミキリ五十八匹と、ズイムシ四十六匹と、ウンカ二百四十二匹とを捕へたる兒童あり、總て何匹なるか。（八）農夫ありて茄子二百株を植ゐしにアブラムシの爲めに三十六株を枯らされたりと云ふ、殘り幾株なるか。（九）ランプの傍に螟蟲の蛾を捕へたるに、雄蛾は百三十二匹にして雌蛾は十二匹なりと云ふ、雄蛾は雌蛾の何倍なるか。

○仝第四學年　（一〇）父あり子に約して曰はく、害蟲一匹を殺せば貳厘を與へ、益蟲一匹を殺せば五錢を取らんと、其子野に行きて害蟲九十七匹と、益蟲三匹とを殺したりと云ふ、歸りたる後父より何程を貰ひたりしか。（一一）昨年は一反歩の田より、玄米二石二斗一升を收穫したりしも、本年は螟蟲の害に罹りたる爲め、僅に一石九斗九升を收穫したり、一升の價を拾壹錢五厘とせば幾何の損害なるか。（一二）或る學校にて兒童を源平兩隊に分ちて、害蟲を驅除せしめたるに、源は三百八十四頭を捕へ、平は源の二倍より九十四頭少く捕へたりと云ふ、源平の差如何。

○高等科第一學年　（一三）枝シャクトリ百二十五匹を捕へたるに、其內寄生蜂に刺されしもの二十五匹ありたりと云ふ、此割合にて七百二十五匹の中には、寄生蜂に刺されしもの何匹なるか。（一四）玄米一石の價拾貳圓の年に於て、螟蟲の害に罹りたる爲め一反歩に付玄米二斗の減收を來したりとせば、八十八町五反歩を有する村の損害高如何。

○仝第二學年　（一五）蚤の飛躍力は身長の二百倍なりと云ふ、然らば身長五厘の蚤は、四間の距離を幾飛躍にて越ゆるか。（一六）或る畑に害蟲發生したるを以て、初日に三分の一を驅除し、次日に四分の一を驅除し、第三日に三百二十九頭を驅除したるに全く盡したりと云ふ、然らば最初幾頭發生せしか。

○仝第三學年　（一七）兒童ありて夏期休業中に、害蟲益蟲合せて千五百八十四頭を捕へたりしに、其割合は四十一と三との如しと云ふ、各頭數は如何。（一八）世界中の動物は總て三十八万六千種にして、其七割五分は昆蟲なりと云ふ、其數は如何。

○仝第四學年　（一九）毎年平均百二十俵の玄米を得る地ありて、本年は害蟲驅除の結果一割五分の增收ありたりと云ふ、何程の增收なりしか。又問、一俵の價を四圓七拾五錢とせば、增收に對する金高如何（二〇）正方形に整列したる昆蟲標本ありて、其足數千三百五十本なりと云ふ、一列の頭數は如何。

◎蓑蟲の說

第七回全國害蟲驅除講習生　石川縣　高多信久

余が秘藏の函底に埋まれる古き書冊の中に「蓑蟲の說」と云ふ一篇あり、温故知新の料にもと、記して之を「昆蟲世界」に寄す。

田圃植物を害する昆蟲の中、奇異なる者數多あり、蓑蟲の如きは即ち其一也、蓑蟲は英に「バッグ、ウヲルム」と云ひ、學名を「シリドプテリックス、エフェメレーホーミス」と云ひ結草蟲、結葦、木螺、蓑衣

上人、避債蟲等の別名あり、或は大なる袋を作りて數多相ひ群居し、或は植葉を綴り、又は果皮の内に入りて其身を保護も、冬季樹葉落下せる後、容易く此袋の垂るゝを檢視し得べし、而して袋に空なるあり、又は黄色の軟卵を納るゝあり、空なる者は雄蟲の袋にして軟卵ある者は雌蟲の袋なり、卵子は早春孵化して飛鳥色の幼蟲を生す、幼蟲は直に袋を造りて其身を覆ふ、幼蟲漸く成長して袋亦漸く重く垂下す、其充分に成大せる者は蛹なりとす、此時若し幼蟲を袋より引出さば、引出されたる部分のみ固く黒くなりて袋内ょ遺りし分は軟かく赤くなるなり、幼蟲は四度數日の間は、食を斷ち袋を閉ぢて其衣を脱す、而して食榮期既に終れる時ハ、則ち先づ其袋を丈夫なる枝に吐糸を以て括りつけ、亦た吐糸を以て袋口を杜さぎ、而して後ち袋底ょ頭をむけ身を倒にして眠り蛹となる、後ち三週間を經て雄蛹を破りて化蛾す、其形狀は雌蛾は一の翅なく、雄蛾は双翅を具ふ、雌蛾は卵を袋殼中に産附せし後地に落て死すと云ふ、此の卵の孵化することは即ち前述の如し、蓋し此幼蟲は然も常綠葉植物を好み、之を害すること夥しく、殊に倒柏葉を好み食ふと云ふ、然れども櫟林、栗林等に於て多く之を發見することある也、世人たゞ之を玩視して其の農植に害を爲すを知らず放置す、得策に非ざるなり、鳥の如き自然の驅蟲者も、此蟲の樹葉にかくれて現れざるを以て之を取らず、人自ら之を取除せずんば其蕃殖を防ぐ能はざる也、云々。

◎昆蟲漫筆（其二）

第三回全國害蟲驅除講習修業生　靜岡縣　神村直三郎

○石山宇治の螢狩　江州石山、城州宇治川の螢は、其形も勝れて大きく、幾千萬の限もしらず、一團の野火の如く群聚り、水面に飛かふさま、盛夏の一壯觀ょして、涼宵ょ舟を泛べ、彼蘇翁が遊にならひて宇治川の流に泝り、あるは石山供御の瀨に舟をとゞめ、明月ならねども、山間の闇をてらす螢の光ょ盃をめぐらし、舷を叩て、琴三絃の拍子を和し、江上の清風に醉を醒しては復醉ひ、短夜の夢結ぶ間もなく、一葉の舟の中ょ既に東方の白きょ驚き、やがて元の岸に舟を廻らし、空しき樽をさげてすご〱と揚れるさまは、恰も晝の螢見し心地せられていとすさまじ。抑宇治の螢は、賴政が靈魂化して螢となり、戰をなすといひ傳ふ、されど敵の螢は誰が亡靈との名も聞ねず、さはともあれ、今の世までも、螢となりて戰ふ程の氣象にて、其昔し今は是迄と見限りて自害せられしこそ心得ね、又攝州鳥飼の邊、白井てふ所ょ螢多し、土人相傳て、こは明智光秀が一族戰死の靈なりといふ、かゝることもとより兒女

老婆の談にして、こゝに擧ぐべきことならねど、古しへより唐の大和の文にも、かゝる類ひをかき傳へて、茶話の助けとなせる例もあれば、さのみにくむべき事にもあらず。螢は腐草及び爛竹の化する所、始め蟄蟲の時すでに光あり、數日にして變じて飛ぶ、もと陰濕の地よ生ず、大暑の前後大火の氣を得て光を發す、ほたるとハ此蟲の身より火垂るゝの義なりとぞ、或人の語りき。（文化三年板年中行事大成所載）

○中遠螢狩のうた　ホータロこーい、チイマイ來い、あんどの光をちよいと見て來い。と又曰く、ホータロこーい、みんづくし、そッちのみーづは、まーぞいよ、こッちのみーづは、うーまいに、ちやッと來て、飲んでけ、汲んでけ。又曰く、ホータロ來ーい、みんづくし、ホタロの親父は、金持で、よーるは提灯、竹のぼり、ひーるは草葉の露吸ひに、そッちのみーづは、まーぞいに、こッちのみーづは、うーまいよ、ちやッと來て汲んでけ〳〵、と。

○中遠人螢に就ての迷信　試よ兒童に問ふて「螢は如何よして發生するか」と聞かば、彼らは躊躇する所なく、一齊に答ふる所確然たり、曰く「螢はチーマイの化する所なり」とこれを五人に質すも、十人よ問ふも、將た千人にたづぬるも、皆同樣なり、然らは何人に聞きしかを推問するよ、或ひは母に聞きつといふものあり、或ひは祖母に聞きつといふものあり、其他祖父といふもの、父といふものあり、以て一般人士の迷信を知るを得べし、チイマイとはマヒマヒムシにして、松村氏が昆蟲學のミヅスマシなり此方言チイマイにして前項の歌にもあるが如く、其大小同じきが故、これの化する所なりと確信する又一理なきにあらず。

九十三年前の今月は小野蘭山翁逝き、昨年の今月は伊藤圭介男卒せり。

◎浮塵子螟蟲調査要領

在島根縣農事試驗場　田中房太郎

昨三十四年中、當試驗場に於て、浮塵子と螟蟲とに就て調査を行なひ、兼て捕獲試驗をも行なひたり、依てその調査試驗に得たる成績の要領を記述して、之を左よ報告す。

○第一、苗代期よ於ける各種浮塵子發生期調査　本調査の目的は各種浮塵子が、苗代田よ發現する時

期を確めんとするにありて、一日二回苗代田に就きて調査したるものなり、其結果を表示すれば如左。

種類名	發生月日	摘要	種類名	發生月日	摘要
ツマグロ	五月二十日	畦畔其他に越年せる成蟲	ツマグロ幼蟲	六月九日	本年第一回の發生
フタホシ	五月二十三日	同上	フタホシ幼蟲	六月二十日	同上
イナヅマ	六月六日	同上	ツマグロ成蟲	六月二十三日	同上
トビイロ	六月九日	同上			

○第二、苗代期に於ける各種浮塵子繁殖調査　苗代期に於て、各種浮塵子繁殖の狀況を知らんと欲し成蟲の最も多かりし六月九日より仝月十八日に至る十日間に於て、毎日一回づゝ、三角形捕蟲網を以て掬獲調査せり、苗代面積四坪を以て之に充つ、其成蹟は左表の如し。

月日	ツマグロ	フタテン	イナヅマ	トビイロ	計	月日	ツマグロ	フタテン	イナヅマ	トビイロ	計
六月九日	二六	一九四	六	一	二二七	六月十五日	―	八三	三一	一二	一二六
六月十日	一八	一二八	二六	二	一七四	六月十六日	―	五七	四三	七	一〇七
六月十一日	一四	一七七	二八	一	二二〇	六月十七日	―	六四	五三	二	一一九
六月十二日	一二	一六三	三二	一	二〇八	六月十八日	―	六七	四三	―	一一〇
六月十三日	六	一七九	三七	一	二二三	計	八一	一二一五	三八六	二八	一七〇九
六月十四日	五	一〇三	八七	一	一九六						

此を以て之を觀れば、苗代田に於てはフタテン最も多く、イナヅマ之に次ぎ、トビイロ（セジロ種を混す）最も少し、尤もツマグロ種は其發生早かりしを以て、六月中旬に至てハ成蟲既に斃れ、幼蟲の繁殖漸次盛なりき、今六月十五日より仝二十三日まで、苗代田四坪に於けるツマグロ種の幼蟲を捕獲（三角形捕蟲網を用ふ）せる頭數を擧ぐれば左の如し。

月日	蟲の頭數	月日	蟲の頭數	月日	蟲の頭數
六月十五日	二〇	六月十六日	八〇	六月十七日	七二
六月十八日	一〇〇	六月十九日	一四六	六月二十日	一六四
六月廿一日	四一一	六月廿二日	三八六	六月廿三日	一六六
計	一、五四五				

此の如くツマグロ種の繁殖は漸次猖獗なりしも、フタホシ種は漸次其繁殖を減じ、挿秧后は其數甚だ少かりき。

○第三、本田に於ける各種浮塵子發生の摸樣　本田に於て、各種浮塵子發生の狀況を調査せしに、大要左の如し。

一ツマグロ種　此種の繁殖は、漸次旺盛にして八月中旬及び九月中旬の頃最も多かりき。

一トビイロ種　此種は七八月の頃に於ては其發生遲緩なりしも、九月に至りて漸次其數を增し、同月下旬及び十月上旬に於て突然非常なる增殖をなし、其猖獗なりしこと殆ど三十年に劣らざるの觀ありき、本年の秋收を減したるは此種の加害多かりしに依る。

一セシロ種　此種は苗代期に於て、点々其發生を認めたるが、本田に於ても漸次繁殖を增し、其最も盛なりしは八月中旬にしてツマグロ種と共に猖獗を極めたりし。

一イナヅマ種　此種は繁殖甚しからず、九月上、中旬の交に於て、稍多きを見しのみ。

一フタホシ種　此種は本田に於ける繁殖は極めて少かりしも、偶々雜草中に於ては其多きを見たり。（未完）

◎岡山全縣下に於ける螟卵摘採數

岡山縣岡山市　篠田春太

本縣赤磐郡農會に於て、去る明治三十一年名和先生を聘して害蟲驅除講習會を開きし時、稻螟蟲驅除豫防法としては、岡田採卵法は最とも奏効確實なることを講話せられしより、本縣當局者に於ても翌三十二年よりは一面縣令を發布し一面奬勵金を懸けて、一般に採卵を督勵し、其結果として頗る多數の卵塊を集め得たることは、既に貴紙上に掲載せられし所の如し、今また本年の採卵數確定發表せられたるを以て便宜の爲め之を前年來のものと對照すれは別表の如し、但此採卵數は奬勵金の下付を受くへき者あるに依り、縣廳主務官に於て詳細調査せられ些も異種の卵塊を混せす、尙此他に實際採取せしも直に捫殺して調査を受けさる者も亦頗る多かりんと信すれとも、是は表出し難きにより、一點の私意を挿まず、原文の儘を報告す、因みに云ふ此事業のため本縣にては、一昨年は四千五百圓、昨年は七千圓、本年は參千參百八拾餘圓の縣費を支出せり。(十二月五日報)

編者云ふ、岡山縣技師岸歌次氏よりも同件に關する通報ありたるが、これには最初の採卵屆出數と不合格數をも表出し置きたれば、如何にも面白く感せられたり、去れど重複に涉れば、其表をば篠岡氏報道の下欄に附記して、讀者の覽閱に便す、之を細視せば、昆蟲學思想の高低と、摘採の巧拙自づか

ふ判明するものあらん。此他なほ根本東枝氏よりも通報に接したれど、是亦同一表なれば、先着の篠田氏のものを採用する事となせるなり、玆に其事由を記し置く。

郡市名	明治三十二年採取卵塊數	明治三十三年採取卵塊數	明治三十四年採取卵塊數	明治三十四年卵塊屆出數	同上屆出卵塊不合格數
岡山市	一、二三八	三七一	一八、五一四	一九、五三四	一、〇二〇
御津郡	九二九、五七七	三〇一、四八〇	二八九、六八三	四三一、一五九	一四一、四七六
赤磐郡	九、八九五、四四二	一、三一三、七六四	四四九、四五四	六一八、五四二	一六九、〇八八
和氣郡	一、七一七、一一二	四一一、三〇三	六三、九七二	七三、四四三	九、四七一
邑久郡	一、〇七六、二八四	三八六、七六七	六六一、九五〇	六八六、一七四	二四、二二四
上道郡	七一〇、四三七	二六〇、三〇六	六〇六、七二一	七一〇、一八九	一〇三、四六八
兒島郡	八六二、八三九	三八八、七六七	一二一、六七三	一二一、六七三	—
都窪郡	二二四、六九〇	四一、〇三〇	一三、〇七〇	一三、〇七〇	—
淺口郡	四七七、〇三八	一〇九、二八六	六九、七九二	七三、五七四	三、七八二
小田郡	八〇五、〇五六	二四七、〇四二	三七、八四四	三七、八四四	—
後月郡	一、二一四、七四八	一七三、〇六五	四五、一八一	七六、二二〇	三一、〇三九
吉備郡	一、一六四、四九四	五四九、六五二	二三六、三八七	二九三、六〇六	五七、二一九
上房郡	六二八、七二九	一四一、七四八	二九六、一三七	三九九、四三九	一〇三、三〇二
川上郡	五三六、九四四	一一四、二六五	四五、七六四	八七、九七六	四二、二一二
阿哲郡	四一六、六三七	二〇、九一三	三九、七七四	六四、六二七	二四、八五三
眞庭郡	九一〇、七九五	六一、五九七	四二、七九三	六六、二六八	二三、四七五
苫田郡	二、三五二、一四五	四八、三〇六	六四、一〇七	七二、四一八	八、三一一
勝田郡	二、一〇六、〇七一	一三八、六〇七	一四〇、九二二	二八五、六四七	一四四、七二五
英田郡	一、一三一、一四六	五〇、四六一	二四、六〇四	二五、一三五	五三一
久米郡	二、〇九四、九四一	一三三、二〇二	一一六、七五二	一二三、九〇二	七、一五〇
計	二九、二五六、三六三	四、八九一、九三二	三、三八五、〇九四	四二八〇、四四〇	八九五、三四六

◎三重縣阿山郡の昆蟲方言

第八回全國害蟲驅除講習修業生 三重縣 西岡嘉十郎

予は昆蟲採取の傍ら當地方に於ける昆蟲の方言を調査せしよ、頃日に至り漸やく左記の數種を採り得たり、幸ひに掲載の榮を賜はらんことを。

◎螟蟲をシンムシ、ズヰムシ◎橫這をウンカ◎蚜蟲をアリマキ、コワ◎セウヽトンボを赤トンボ◎アヲハダトンボをアヂサントンボ◎アブラゼミをオヽセブ◎ニイニイゼミをコセブ◎タガメをガンタヽキ◎ミヅスマムシをマヒマヒコボシ◎キリギリスをゲレス◎瓢蟲をサル、アカザル◎椿象をドンガメ、ウガ◎マルバチをブンブ、カボチヤバチ◎ヤマバチをテンドリバチ◎鍬形蟲を源氏◎鋸鍬形を平氏◎アリヂゴクをメヽコジ◎金龜子をカヂブンブン◎全幼蟲をジンド◎ナヽフシをアヲトカケ（尙該蟲は有毒なりとて非常に恐る）◎アゲハノテフをホトキサンテフテフ◎カラスバアゲハをヤマヒテフ◎鳳蝶の蛹をお菊蟲◎姉ノイラムシをイライラムシ◎全繭を雀の小便溜り◎エンマコホロギを雲助コホロギ◎稻椿象を三角蟲◎行夜をヘコキムシ◎セウリヨウバツタをハタオリ◎イナゴをイヂゴ◎大根のサルハムシをコガヂ◎全幼蟲をサル◎全トビハムシをトビカヽリ◎桑の枝尺蠖をカタクリ◎螢をホツタル◎其他毛蟲類をヒゲムシ、蛹類をニシドツチと云ひ、蝶蛾類をば一般よテフテフと云ひ居れり。

◎土佐產の蟲報 （第一の三）

高知縣土佐郡 武内護文

○阿檀蝶科 アサギマダラ。海岸を距ること北方三里以上の山中には、到處之を產すと雖ども、南方よは極めて稀なり、伊豫の境を探れば、時として花上に群飛するの狀頗ぶる美觀なるを目擊することあり、仲春晩秋の二季に發生するを見る。

○蛇目蝶科 （一）コジヤノメ。（二）ヒメウラナミジヤノメ。（三）ベニヒカゲ。（四）ヒカゲテフ。（五）コノマテフ。（五八）キマダラテフ。此中（一）（二）（四）（五八）の四品は全縣下に最も普通よ分布せり、而して（一）には淡色あるものと、濃色なるものとありて、淡色なるものは少しく陽地にあるも、濃色なるものに至りては、林間幽暗の地に於て之を產するを見る、是れ果して同一種ある可き歟。（五）はコウモリテフの稱あり、其數多からぞと雖ども、到處の山中概むね之を產せり、翅裏の色彩は黃褐色（工石山の附近に於て之を獲たり）なるあり、淡靑褐色（初月村に於て之を獲たり）なるあり、淡紫褐色（高知市附近に於て之を獲たり）なるあり、其斑紋また種々よして濃褐斑に黑紋なるもの最とも普通あれども、或ひ

は全く黒色なるもあり、隨うて漣狀線紋の有無多少とも亦一定せず、然れども其表面の形狀は Melanitis leda の外に之あるを見ず。（三）は伊豫の境に到れば、敢て異品とするに足らざるも、それより南方に下る時は絕えて之を產するを見ず。以上數種中（一）の幼蟲の稻を害するあり、八月中之を飼育せしに、蛹期一週間にして、九月五日に淡色種の成蟲を得たり。

○挵蝶科　（一）ダイミヤウセセリ。（二）チヤマダラセセリ。（五）オホチヤマダラセセリ。（六）ホソハ子セセリ。（七）キマダラセセリ。（九）イチモジセセリ。（十一）アヲバセセリ。

右の中（第一）はダイミヤウセセリの名を假用すと雖ども、宮島氏記載の圖說に係る Daimio tethys と相異なる點は、全躰純黑色にして、前翅に大白紋を有するに止めず、後翅にも亦一帶の白紋を有することゝす、暫らく疑ひを存し置く。

以上數種中、一般に普通なるは（九）とす、其他は多く海岸を距ること二里以上の山中に產せり。而して其加害に至りても、唯り（九）のみ之を恣にし、發生經過は地方の異なるに隨うて少異あり、例へば北方の山中と、南方の海邊とを較ぶれば、凡そ一ヶ月の相違あるが如し、高知市附近に到れば大概九月には幼蟲已に羽化し盡して、山中或ひは隄塘、畦畔等の禾本科植物に產卵し、幼蟲の儘にて越冬するもの甚はだ多く、冬季及び早春に於て、氣候溫暖なる時は野生の禾本科植物はその好飼料たり、余は去る三十三年の冬に、此事實を認めたるを以て、其後野草を與へて飼育を試みたるに意外の好成績を得たりき。

◎昆蟲研究會の組織

福井縣敦賀郡松原村農會內　松原昆蟲研究會

今回村內の有志相謀り、一の昆蟲研究會を開かんとて、本月十八日其組織會を開き、先づ左の會則を議定し及び役員を選擧せしに、會長には立木可六氏、幹事には倉谷力藏氏當選せり。（十二月廿八日附）

第一條　本會は專ら昆蟲に關する事項を調査研究するを以て目的とす○第二條　本會は松原昆蟲研究會と稱し、松原村農會內に置く○第三條　會員は本會の目的を贊成する者たるべし○第四條　本會に會長壹名、幹事貳名を置き會務を整理せしむ○第五條　本會は隔月壹回例會を開き、必要ある時臨時會を開く○第六條　會員は例會又は臨時會の節に成るべく昆蟲標本又は問題を提出すべし○第七條　本會の經費は會員の寄附金及び其他の收入を以て支辨す。第八條　會員は會費として每年金拾五錢を納むへし○第九條　此會則は會員の協議に依り變更することを得。

◎昆蟲に關する葉書通信　（第十八報）

（八十七）螟蟲驅除とその俗謡（兵庫縣揖保郡、岩田熊三郎）　兵庫縣揖保郡石海村佐々木秀藏氏は農事の篤志者にて。恒に害蟲驅除には注意を怠たらぬ方なるが、昨年は各地とも螟害甚はだしかりしより、村民と協同して稲莖に喰入の第二回幼蟲加害穗の拔取を行ひしに、該部落二十町歩の水田より、被害稲六十七貫五百目を獲たり、然るに一莖十頭のものも少なからざりしと云へば、總數は約三十萬以上なりしならんと云へり。尚は同氏は先年青森縣に於て螟害の劇甚なりしを目撃して、驅除の方便にもと三十三首の都々逸節を作りたる事ありしと、聞くが儘その二三を左に附記す。

○稲の髄蟲名は色々で根蟲しん蟲わらの蟲○稲の生血を吸ふる蟲は冬が稲かぶ藁布團○蟲が附いたら其稲莖を低く苅取り置くがよい○蟲のかたきの燕の巣をば可愛がらんせ家毎に○晝は草葉に人目を忍び夜は飛出し浮氣する。

（八十八）蜻蛉釣及び捕蝶の時の俗謡（宮崎縣農事試驗場內、竹井繁滿）　當宮崎縣地方に於て、兒童が蜻蛉を釣り、又は蝶を捕ふる時に謳ふ歌は。

アケヅ、トンボ々々々、もさんさきイ、さまツじヤれ、あけの三月だ、酒取ツて、飲まツしヤぎユ。○ちユ々々めろ、こめろ、もさん、さきイさまれ。（前者は斯くうたへて蜻蛉の靜止するを俟ちて捕ひ、後者は繰返し々々謳ふなり）

（八十九）蟲名つきの短句集（石川縣石川郡、高多信久）　農閑の徒然に任せて、蟲の名のつける句を選み見しに、中には面白可笑もあれば、大まい一錢五厘を奮發して葉書通信の材料に供す。

（一）蚊遣する美人の細帶一つなり。（二）地尊藏の頭のあたり蜻蛉飛ぶ。（三）寂さして蟋蟀の鳴く夜寒かな。（四）出戻りの女秋蠶を飼へるかな。（五）蠅出てゝ障子を叩く小春哉。（六）餘念なく蜜蜂かせぐ小はる哉。

昨年今月の調査に依れば、全國の地價は、十三億八千五百萬圓弱なり。

◎ゼニノハハムシに就き質問　靜岡縣小笠郡河城村　岩水三郎

拙者の癖として恒に昆蟲學の取調に心懸居候折柄、不料も『本草綱目』昆蟲の部を一讀仕候に、青蚨の記事有之、その如くんば如何にも不思議の蟲と存じ、是非實躰取調度と苦心仕候へども、只今まで其名稱

ども傳聞不致、且實見致候事も無之に付、頗ぶる遺憾に存居候處、或同好者の忠言にて、貴所は東洋第一の昆蟲研究所に候へば、天地間の蟲類なれば、如何なるものにても判明可致と懇篤に示敎せられ候故卽ち質疑の手續に及び候間、此蟲の和名、産地其他を委しく垂敎相成度候。

答

名和昆蟲研究所内　永澤小兵衛

微々たる吾が名和昆蟲研究所を以て、東洋第一などゝ過賞に預かり候事故、貴問に對して十分の應答は固より欲する所に候も、耻かし乍ら不明と申すより外、何とも致方無之候。

（考徵）　青蚨は『本艸綱目』卵生蟲類の部に、似小蟬、大如虻、青色有光、とありて、字書には之を水蟲と註し置けども、本邦に産するものなりや、又昆蟲綱に配すべき種屬なりや否やを明らかにせず。去れど和訓はありしものと見ゑて『事物異名類編』『和語本草』にゼニノハハムシと訓ませ、『發心集』にはカゲロフと云へり。ゼニノハハムシとは、例の唐土の妄說に原づける名稱にて、宋丁晉公の記事に、五百青蚨兩家缺などあれば、その錢貨の異名とせられしは餘程古き事なるべし。彼の『搜神記』其他に收めたる怪談に隨がへば、此蟲は支那南方の產にて、味ひ辛美に、人の其母子兩蟲の血を錢面に塗りて使用する者ある時ハ、必らず自から元に還るより之を子母錢と云ふとぞ。斯く信ず可からざるものなればにや、『綱目啓蒙』及び『名物博覽』には、共に其名を揭げたるも、明らかに不詳と註し、『啓蒙名疏』には、たゞ諸書に見ゑたる別名を載せしまでにて、『綱目品目』の如きは、其和訓をも缺き置けり。然れば和漢の『爾雅』は固よりあり、藥物に蟲類を多用せる『儒門事親』その他の漢方醫書にすら、未だ之が配劑を載せざる程なれば、『蟲譜圖說』の外は本邦人の手に成れる蟲譜類に之あるべしとも思はれず。斯かる靈異の蟲は、『和漢三才圖會』に綱目の說を引きて、誠仙術也といひ、又『和漢音釋書言字考』に、人間難得之物也といへる如く、暫らく神丹秘方の一と見做して、之が研究を欲かるゝとも、左まで支へ無かる可し。

◉昆蟲月令（第一月）

此月の中に記すべき昆蟲記事は、概むね下に列擧するが如し。

今月を一月と曰はずして、正月と曰へりしは王者居正の義に取れるなり。

○氣候　陰曆十二月の節に當り、小寒大寒ともに此月にあれば、寒氣烈しく、日脚短かく、雪雨また多し。內地にては攝氏の七度より零下九度の間を昇降す◉太平洋方面は快晴輕暖の日續くも、日本海方面は陰鬱酷寒の日多し、但し風力は寧ろ强からざる可し。

○蟲類　暖地なれば向陽の堤防などに、越年せる蝶種の飛行を見る◉果樹害蟲豫防驅除は成るべく月の中に行ふべし◉桑に枝尺蠖の棲息するものあらば、箒などにて雪上に掃落して捕殺すべし◉總て蟲の巢又は卵子を殺滅すべし◉今月より來月に掛け、百蟲蟄伏の時期なれば、掬網、敲網、振網等の諸方法にて、冬季採集を行ふに利あり。特に雪中潛伏の浮塵子、刈株蟄居の螟蟲を搜索せば、農家の迷信を解くの好材料たるべし◉高仕立桑樹の姬象蟲は農閑に驅除するを利便とす◉藁稈を燃料とせんと欲せば、宜しく被害の多かりしものより先づ用ゐ始むべし◉土地を耕耡せば幼蟲、蟲卵を凍殺せしめ、兼て地力を增加せしむべし。

○古儀　奈良朝の頃には、此月初子の日に、至尊躬親から耡を把り、箒を供へさせ給ふて農桑の神を祭られ、又臣下にも耡箒を賜はれり、蓋し耡は以て（一）（二）其年の豐稔を祈らせ給ふの深意、箒は蠶室の汚物、惡蟲を掃ひ清めんか爲めにて、禮記に天子親耕於南郊、王后蠶於北郊の義なり。今俗間に於て、繭玉とて瑞樹に多くの白餅を插み飾るの習はしあるは、此玉は一きに擬へる遺風なり。舊事本記にも、此日蠶神を祭るの事見ゆ、唐土の書にも同じ事あれば、古くより彼我ともに行ひしなる可し。

○舊說　支那にては。春の間に鯡魚の頭を食へば、其中に惡蟲ありて人を害する由の傳說あり◉禮記の月令擧ぐる所の七十二候にも、季冬の條には昆蟲記事を缺きて、たゞ介蟲爲妖とのみ見ゆ◉此月の終り、若くは二月初旬は、恰かも陰曆の年末に當るを以て、俗間に追儺の儀とて、煎豆を打ちて疫鬼を拂ふ事あり、疫鬼は疫神にて、マラリヤ病をエヤミ又はワラハヤミと呼びしも、畢竟疫神につかれたる疾ひなりと信じたればなり。

○雜事　年始に女子の羽子板もちて羽つくは、幼き者の蚊に咋はれぬ咒法にて、欒華子附ける羽は即はち蜻蛉に擬へるなり（昆蟲世界第五一號雜錄欄參看）是は凡そ四百五十年前より盛んに行はるゝに至りしなりとぞ。

虫きらひ蜻蛉を友の羽子あそび（柳郊）

◉虎年と蟲害の關係

今年は寅年に當れるより、未だ新春を迎へぬに、早や一年の吉凶を彼これトふ陰陽博士ども、多かれど本號卷首の附錄「虎の卷」にもある如く、本邦開國以來寅年ほど無事平穩なるは他に少なきが如し、特に蟲害に至りては極めて少なく、之を世人が吉年と迷信する他の干支の年に比較して、寅年の却つて祝す

べきを認むるなり、古來虎の異名を大蟲とも云へるより「虎年大ニ蟲アリ」と曲解せる人もありしやに聞けど、是は毫も取るに足らぬ謬見にて、蝗災祈攘の文章には、詩經の故事を引て迎虎迎猫などゝもあり雉子を華蟲といふこともあれば、強がちに俗說俚言に惑ふにも及ぶまじ、何はさて、世に此かる迷信の多き限りは、害蟲驅除の功其半ばをも奏し難ければ、速やかに之を除去したくこそ思ふなれ。

◉**第十一回全國害蟲驅除講習會の開會期**　旣に客冬を以て無事に第十回の講習を終結せる全國害蟲驅除講習の件は、當昆蟲研究所の都合により、春風の駘蕩たる四五月頃に其次回すなはち第十一回を開會すべく豫定し置きしに其后各縣より強ゐて三月中に開會の請求あり、去れど年度變りの時と云ひ、餘寒なほ外出を促さゞる頃なれば、來會者も如何あらんかとの懸念より、一切之に應ぜざりしに、三月中に開會せらるゝ時は、修業生は直ちに苗代時期より害蟲驅除に從事するの便あるのみか、岐阜縣冬季採集昆蟲展覽會の成績をも知悉するの利あり、且つ三十四年度經費より講習生補助の件を議定し置きたれば、必らずや年度內に之を支出せざる可からざる內情あり、故に此際万障を排して開會せられんことを望む旨懇ろに照會し來れるもあるより、從來の關係上遂に默止し難き場合となり、斷然來る三月一日より仝十四日まで二週間之を開くことゝなしたり、併し乍ら全く前陳の懸念もあれば、今回は異例にて無定員募集となしぬ、委しくは卷首の廣告にあり。

◉**岐阜縣冬季採集昆蟲展覽會豫報**　農作害蟲驅除及び科學上の利益を圖らんが爲めに、來二月八日より開く岐阜縣冬季採集昆蟲展覽會は、其後着々設備を整のへ、各郡郡よりの出品申込意外に多く、小學校はおろか縣立學校すら進んで之に加盟せん形勢にて、最初の計畫に對し規摸を擴むるの必要を感じたりと、又主催者たる岐阜縣昆蟲學會よりも種々通俗的の出品をなす由なれば、この舊曆正月より紀元節にかけ、一般農家の裨益する所ろ少なからざる可し。

◉**本號の記事に就て**　本號の紙上にて豫告し置ける平田農相并びに高崎樞府の詩書畫は製版遲れて發行の間に合はぬ爲め、之に代へて「虎の卷」等の附錄を添へ又學說、雜錄、通信の中にも多少變更したるはあれど、是は豫告後有用の寄書多き爲めなれば、寧ろ本誌紙上に一層の光輝を放てるものと謂ふべし、なほ今年も舊に依り續々玉稿を投せられんことを冀ふ。（編者白す）

◉**蟄居の蟲影**　此頃の新聞雜誌は、中々昆蟲記事が多く成ッたと褒めては見たが、其後一向これ

ぞと思ふものを見當らぬ、褒められ兒は何とやら、少々買被ぶりをした樣である、恐らくは百蟲死滅期と思ふて居るではあるまいか○諸尊の初孫に當る淡路國とし云へば、蚊の睫に寄生すると云ふ蟲の大さ位ゐであるに、希望は中々廣大だと見ゑて、有志者は今年内に昆蟲展覽會を開く事に決定したさうである、是でこそ天の逆矛の價値も見ゆる譯サ○當年一月の初刷に昆蟲記事を載せた新聞は先づ無いやうであッたに、岐阜日々と濃飛日報とは、期せずして之が爲めに數十行の紙面を割いた、毎年國會を脅やかしたり、新聞社を納得せしめるやうに成ッたのを見ると、蟲殿もこゝ一寸資格を上げはせぬかと思ふ○未だに寄生蜂と云ふ事を知らぬ農家は、螟蟲の卵塊は、何んでも燒捨つるものと思ふて居るらしい、それであるから害蟲驅除よりも、先づ迷信驅除をして欲いのだ○其迷信で聯想したが、害蟲驅除から見て一番に癪に障るものは、ハイカラーでも無ければ、デモ學者でもブル役人でも無い、唯彼の慾深の高天原連と、生腥さ賣僧どもである、高天原は蟲除の御札を高く賣附け、生腥入道は生意氣にも害蟲驅除を以て、殺生だなどゝ言ふて居るでは無いか、ウフン片腹の痛い咄ぢ○誘蛾燈を勸誘する御役附と掛けて何と解く、蠟燭屋と解く……心は油を賣る代りに油も澤山使ふ、あンと名案では御座らんか○暖地あれば螟蟲ハ刈株の中で越冬するものである、と說法した昆蟲學者があるさうだが、驚ろいた珍說だ、さうすると奥羽の如き零下八九度まで降下する低温地方には、たゞの一疋も居らぬ道理であるに、青森縣と云ふ日本有名の寒地では、明治十年以來何回大被害があッたか知れぬ程では無いか、吹くのは良いが、嘘は言はぬが良い○國會へ特別免除を請願しに這出した地租蟲は暫時音が絕ゑた樣である、代議士の蟄伏時代だけは、有繫の昆蟲も根強く推參仕る譯に行かんと見ゑるワ○今年は昨年の今頃と比較すると、如何にも寒氣が酷いので大した蟲害は無からうと豫測する、併し害蟲と云ふものは不時に天から降ッたり、地から湧たり、草木が化たりするのであるから、決して油斷は出來ない、岐阜縣廳で盛んに姬象蟲の驅除を督勵ゐ居るのは、如何にも感々服々の次第である。(あにがし投)

◎三十四年中昆蟲に關する講習　當昆蟲研究所事業の一として、昨三十四年中に開催せる各種の昆蟲學講習會は別表のごとく、三月より十二月までの間に都合十六回なりしが、其中普通のものは六回にて他は短期のものに屬し、此總人員は千三百名に二名の缺あるのみ、即はち初回の講習より一昨年末までの成績に比較すれば、確かに良好の結果を收めたるものと謂ふべく、これにて滿足に長短五十回の講習を終へ、三千二百有餘通の修業證書を授與したり。

開會月日	會期	會場位置	主催	會名	會員種類	人員
從三月一日 至三月十四日	十四日間	岐阜縣岐阜市京町	名和昆蟲研究所	第七回全國害蟲驅除講習會	十八縣	五三名
從七月一日 至七月五日	五日間	靜岡縣周智郡森町	靜岡縣周智郡農會	昆蟲學講習會	敎育者實業者	七一
從七月十五日 至七月二十八日	十四日間	岐阜縣岐阜市京町	名和昆蟲研究所	第八回全國害蟲驅除講習會	二府廿二縣	九二
從八月十五日 至八月二十八日	十四日間	岐阜縣岐阜市京町	名和昆蟲研究所	第九回全國害蟲驅除講習會	二府二十縣	五六
從八月二十二日 至八月二十六日	五日間	岐阜縣不破郡垂井町	岐阜縣不破郡農會	第二回害蟲驅除講習會	敎育者實業者	五五
從九月一日 至九月五日	五日間	岐阜縣海津郡高須町	岐阜縣海津郡農會	昆蟲學講習會	敎育者實業者	一五五
從九月七日 至九月二十六日	廿日間	岐阜縣岐阜市京町	岐阜縣	第四回岐阜縣害蟲驅除講習會	實業者	一三三
從九月二十五日 至九月二十九日	五日間	愛知縣丹羽郡布袋町	愛知縣丹羽郡農會	害蟲驅除講習會	實業者	一二二
從十月三日 至十月七日	五日間	岐阜縣吉城郡古川町	岐阜縣吉城郡農會	昆蟲學講習會	敎育者實業者	一〇一
從十月十一日 至十月十五日	五日間	岐阜縣岐阜市京町	岐阜縣武儀郡	昆蟲學講習會	實業者	四四
從十月十八日 至十月二十二日	五日間	香川縣綾歌郡坂出町	香川縣綾歌郡農會	害蟲驅除講習會	敎育者實業者	一一八
從十月二十六日 至十月三十日	五日間	島根縣那賀郡濱田町	島根縣那賀郡農會	昆蟲學講習會	敎育者實業者	六二
從十一月十六日 至十一月廿九日	十四日間	岐阜縣岐阜市京町	名和昆蟲研究所	第十回全國害蟲驅除講習會	一府十八縣	三六
從十二月十日 至十二月十四日	五日間	千葉縣君津郡中川村	千葉縣君津郡農會	害蟲驅除講習會	敎育者實業者	七〇
從十二月十六日 至十二月二十日	五日間	千葉縣君津郡中村	仝上	仝上	敎育者實業者	一二七
從十二月廿二日 至十二月廿六日	五日間	千葉縣君津郡湊町	仝上	仝上	敎育者實業者	一〇三

計十六回、千二百九十八名。從卅一年至卅三年　合計卅四回、千九百廿六名。總計五十回、三千二百廿四名

◉九州各縣の螟害に對する希望　　客冬十一月一日より三日間、佐賀縣佐賀市に開きたる第八回九州區實業大會に於て左の如く決議せし趣むき本所特別通信員嶺要一郎氏（福岡縣）より報道ありたり之を一續するに、其理由の是非と文章の巧拙は偖置き、國庫補助請願てふ眼目より云へば、彼の蟲害地

免租請願と伯仲の間に位ゐすべき、如何にも蟲のよき立案にて、一府縣に假りに五萬圓づゝの補助とすれば、全國に約貳百五拾萬圓の國費を撒布せしめんとの趣意なるやに見ゆ。本邦の農家貧弱は貧弱なるも斯くまで自主自衛の念に乏しとは考量せざりき、貳百五拾萬圓の金額を一國の經濟の上より見れば、容易に支出し得べき少費のやうなるも、こゝ數年間は果して其豫測の如く自由になる可きや如何、地租を加重してすら、猶ほ治國の機關を全うせざる今日にはあらざるか。そは兎まれ、此決議中には數々根本的驅除の文字見ゐて、其方法は全たく先頃の本誌に花を咲かしたる事實あるやに思はる、斯くても尙ほ再たび霞湖漁隱氏の執筆を煩はさで事濟とある可きか、疑はしき限りにこそ。（所末ミ、カ記）

一、螟蟲の被害甚しく、町村費を投じ、尙郡縣の力を借り、驅除玄能はざるときは、國庫より補助せられんことを其筋へ建議する事。但本案決定の上は、被害地當局者及び縣農會代表者の協議會を主催地に開催すること。

◉第十回全國害蟲驅除講習生氏名　前號紙面の都合にて掲載し得ざりし、第十回全國害蟲驅除講習修業生の氏名は左表の如し、尙ほ全會開會中に、農商務商工局長木内重四氏は、一同に對ひ頗ぶる有益の演説をせられたれば、併せてこゝにものし置く。

組別	府縣別	郡市名	町村名	族籍	役名	姓名	生年月	履歴摘要
第壹組	石川縣	石川郡	林中村	平民		齊田八良	明治元年三月	村農會幹事並に評議員
	福井縣	敦賀郡	松原村	平民		倉谷力藏	明治三年十月	村農會幹事
	千葉縣	香取郡	良文村	平民		八本金十郎	明治九年十月	農事講習會修業
	奈良縣	添上郡	帶解村	平民	組長	內藤富治	明治十二年十一月	中學校卒業
第貳組	福島縣	岩瀬郡	須賀川町	平民		車田定次郎	明治九年八月	競進社養蠶傳習所卒業
	三重縣	多氣郡	津田村	平民		中井銀兵衛	明治十四年十月	農事講習會修業
	愛知縣	丹羽郡	穗波村	平民	組長	鈴木敬一郎	明治八年四月	村農會長
	京都府	船井郡	富本村	平民		原勝次	明治十二年三月	小學校准訓導、農業に從事
第三組	三重縣	多氣郡	津田村	平民		松本齊五郎	明治九年六月	高等小學校卒業、農事講習會修業
	大分縣	宇佐郡	兩川村	平民	組長	安部香之助	明治七年四月	宇佐郡害蟲驅除講習會修業
	愛知縣	中島郡	中島村	平民		魚住仙一	明治十五年一月	農事講習會修業
	滋賀縣	坂田郡	伊吹村	平民		伊夫伎孫治郎	明治十四年一月	滋賀縣蠶病講習所卒業

組	府縣	郡	町村	族籍	役	氏名	生年月	經歷
第四組	三重縣	多氣郡	津田村	平民		佐野佐吉	明治三年十一月	農事講習會修業
	兵庫縣	氷上郡	畑內村	平民	組長	柳川瀨信太郎	明治九年三月	村役場書記
	京都府	船井郡	園部村	平民		田中庄太郎	明治十四年一月	京都府農學校卒業
	和歌山縣	日高郡	印南町	平民	級長	久保田助次郎	文久二年一月	害蟲驅除委員
第五組	三重縣	鈴鹿郡	野登村	平民	組長	菰田佐四郎	明治六年十月	東京蠶業講習所卒業、三重縣農事講習所技手
	宮崎縣	日高郡	南那珂村	士族		竹井繁滿	明治十五年十月	中學校農業專修科卒業、農業補習學校正教員
	熊本縣	菊池郡	泗水村	平民		松本相良	明治十二年十二月	郡役所雇
	鳥取縣	西伯郡	法勝寺村	平民		磯田千太郎	明治十年八月	縣立農學校乙科講習修業
第六組	千葉縣	夷隅郡	中川村	平民		上田愛藏	明治十六年六月	高等小學校卒業、三橋農場講習部二ヶ年修業
	富山縣	上新川郡	日岡村	平民		茶木長重郎	明治十二年六月	富山縣農學校卒業
	岡山縣	阿哲郡	草間村	平民	缺席	黑川唯市	明治十四年三月	短期農事講習所修業
	三重縣	志摩郡	越知村	平民	組長	宮本善三郎	明治七年四月	短期農事講習會修業
第七組	熊本縣	菊池郡	陣內村	平民		兒島喜作	明治六年一月	菊池郡役所雇
	兵庫縣	氷上郡	柏原村	平民	組長	足立重雄	明治七年二月	氷上郡書記
	新潟縣	西蒲原郡	和納村	平民	缺席	本多秀三郎	明治十三年三月	短期昆蟲講習會修業、郡農事試驗場見習
	富山縣	東礪波郡	中野村	平民		畑六次郎	明治元年十二月	尋常小學校長
第八組	兵庫縣	氷上郡	春日部村	平民	組長	高見常太郎	明治九年三月	高等小學校卒業、青年農友會幹事
	熊本縣	下益城郡	松橋村	平民	缺席	藤川龍馬	慶應元年十一月	下益城郡書記、害蟲驅除委員
	富山縣	富山市	千石町	平民		阿部由熊	明治四年十月	富山縣技手
	山梨縣	東八代郡	圭林村	平民		大須賀藤勝	明治十一年四月	山梨縣雇
第九組	兵庫縣	氷上郡	春日部村	平民		德義右京	明治十三年六月	稻作改良講習會修業
	岩手縣	稗貫郡	矢澤村	平民	組長	島善平	明治九年五月	岩手縣農事講習所卒業、郡農事巡回教師
	愛媛縣	越智郡	今治町	士族	缺席	金子鹿壽磨	明治九年五月	東京猿樂町簿記學會修了、越智郡雇書記
	京都府	何鹿郡	以久田村	平民		大島幸治	明治十二年十一月	村農會巡回技手
第拾組	兵庫縣	氷上郡	竹田村	平民	副級長	芦田惣吉	慶應二年十月	害蟲驅除豫防委員
	岩手縣	稗貫郡	龜ヶ森村	平民		高橋悅人	明治十三年四月	高等小學校卒業
	秋田縣	北秋田郡	鷹巢町	平民	組長	細田茂吉	明治六年二月	高等小學校卒業、農事講習所修業
	兵庫縣	宍粟郡	山崎町	平民		曾谷精一	明治十一年十一月	師範學校卒業、本科正教員

◉岐阜縣昆蟲學會記事

岐阜縣昆蟲學會第三十七回月次會を、本月四日午後一時半より開會せしに、新年旅行等の多き時たるに關はらず、會衆は無算四十名なりしが、最初に副會長名和靖氏の開會の辭に次ぎての規則改正に伴なふ幹事の選擧方法及び同會の主催に係る岐阜縣冬季採集昆蟲展覽會開會期繰上げの件、同展覽會出品申込、寄附金醵集等に關する報告あり、次に村井正元氏が月並會に關する注意あり、夫より演說に移り愛知縣名古屋高等女學校長甫守謹吾、老農田中榮助、會員松野春一、岐阜高等女學校敎諭正富彌藏、岐阜中學校敎諭長野菊次郎諸氏が、斯學發達普及の上に於ける切實の意見を公表せられ、終りて万歲聲裡に愛度散會を告げたり。當日は名和昆蟲研究所より賀儀として、會員一同へ祝酒の饗應などもありしが、前條の協議問題をば(一)幹事二名は兩會長の指定に任する事(二)展覽會開期は二月八日より之を開く事に決し、乃て大野勇、村井正元の兩氏に幹事を囑托せり。

◉千葉縣若津郡の害蟲驅除講習會

千葉縣上總國若津郡農會にては、敎育上又特に農業上、昆蟲思想の養成を必要とし、同會長中野協藏氏は副會長杉谷彌之吉氏と協定の上、有志の醵金を得て舊臘これを郡內三ヶ處に開會せり。最初は中川村にて十二月十日より五日間に七十名の修業生を出し、次は中村にて同十六日より始業の上百廿七名の出席あり、最後は湊町にて同廿二日より之を開き百三名に修業證書を授與したり、會場は第一回は寺院ありしも、第二回第三兩回は共に校舍を借用し、其會員の多くは學校職員と實業家にて豫想外の盛況を呈したるが、此兩者の斯く一致したるは從來曾て無き事なりと、又同郡に於ては深く斯學の必要とその趣味を感じ三十五年度に於ても再たび之を開催して、更に斯業の進捗を期する見込ありと、講師は當昆蟲研究所長名和靖氏に委囑し來りしも、當時恰かも病臥の際なりしかば、代理として助手名和梅吉氏その任に當り、本月一日を以て歸所したり、こゝに漏れたる事柄は追て報道する所ろある可し。

◉蟲合せ答案の披露(一)

客冬十一月を期し、蟲合せの答案を同志間に求むるや、續々寄稿せらるゝものありて意外の多數に上れり、期滿つるを俟ちて之に審按を施したる結果、左揭の如く優等六通、一等二通を選拔して合格のものと查定せり、但輕々しく何れを甲、何れを乙と定め難ければ、編輯部に到着の時を以て前後を別ち、順次之を今月の紙上より披露することゝなせり。また各案には必ず短文の批評を加へたるが、專はら公正を旨となしたれば、或ひは寄稿家に對しては他山の石片となり、一般愛讀者に對しては判別の助けともなる事あらんかし。

◎蟲合せ答案(第一)

愛媛縣温泉郡興居嶋村　田村晴太郎氏選

(優等)

天牛　地膽
ヤマカヒコ　ウミグモ
熊蟻　虎蜂
シギムシ　鷸ガメムシ
泥カツギ　土スガリ
稻椿象　麥稈蜻蛉
白蟻　黑鳳蝶
紅天牛　緋威蝶
大イシアブ　小タマムシ
ミツカドコホロギ　ヨツテンヨコバヒ
トコジラミ　エンマムシ
ヤマジヨラウ　オニヤンマ
首切飛蝗　胴切蜂
ウバタマムシ　コオヒムシ
風船蟲　手鞠蠅
糸引葉捲蟲　ハタオリ
カマキリ　クハジラミ

天蠶　地蠶
ヤマバチ　カハゲラ
虎斑蟲　豹紋蝶
ツバメシジミ　スズメバチ
花セセリ　砂ムグリ
百合花スヒ　菊虎
黑筋蝶　白筋天牛
淺黃蝶　綠蚜蟲
大蟲　小螟蟻
六点ヨコバヒ　七星瓢蟲
ウチスズメ　ニハスズメ
ショウレウバッタ　シデムシ
翅長蟲蚤　足長蜂
シホヤアブ　コメツキムシ
齒黑蜻蛉　ベニ蟲
茶柱蟲　菓子蛾
ミノムシ　編笠羽衣

星吉丁蟲　日陰蝶
カハラバッタ　ハマベトビムシ
象鼻蟲　馬尾蜂
孔雀蝶　ミミヅク
ハナノミ　果蠹蟲
花虻　葉蟲
クロコ毛蟲　シロコ蚜蟲
赤サシガメ　青羽セヽリ
大クサガタ　小ツチバチ
丸椿象　ヒラタ虻
皇寄生バヘ　大名セヽリ
紺蠁　紅娘華
青眼虻　頰黑テウ
オホギヤテフ　ウチハトンボ
ツトムシ　櫛髭カゞンボ
クツワムシ　グンバイムシ
ハサミムシ　ハリガメムシ

イナヅマヨコバヒ　カミナリハムシ
泥負蟲　砂サシガメ
馬追蟲　駱駝蟲
カヒガラムシ　エビガラスゞメ
草ヒバリ　木マハリ
金ケムシ　銀蜂
紋黑蜂　紋白蝶
紫尺蠖　赤條ガメ
ヒシバツタ　トモエテフ
白星蛾　黑樹蜂
姫蟷螂　京女郎
舞々頭振　踊子蝶
目高翅カクシ　メクラアブ
アンドレナ　提灯ムシ
ベツコウトンボ　クロタイマイ
鉄砲蟲　拳銃蓑蟲
ヤマガマス　フクダワラ

アメンボ　ツユムシ
臺灣飛蝗　蝦夷セミ
クマゼミ　トラフシジミ
龍蝨　蛇目蝶
草蜻蛉　木ノ皮蝶
金サルムシ　銀ヤンマ
白筋コガ子　赤スヂガメ
クロアリ　ベニヒカゲ
大象鼻蟲　小瑠璃蜂
カナブン　一文字セヽリ
フクラスゞメ　大黑コガ子
腹廣蟷螂　腹細蟲曳
イボタムシ　葛上亭長
アブラムシ　トウスミトンボ
衣魚　毛髭蛾
ノミ　キリ〴〵ス
瓢簞蠅　德利蜂

ハルセミ　アキツバメ
三井寺斑猫　日光白テフ
カノコテフ　コクマバチ
河伯蟲　天狗テフ
松蛅蟖　杉天牛
アカガ子オサムシ　ハリガ、子ムシ
黑蚊　黃テフ
シマバヘ　黃斑テフ
二星ガイダ　三筋テウ
イヘアリ　センチコガ子
エンマコウロギ　アリヂゴク
腹廣花蠅　腹長蜂
コブゾウムシ　フシダカバチ
タイコムシ　カ子タタキ
ビロウドツリアブ　チヾミグンバイ蟲
ノミバツタ　鋸カミキリ
センブリ　ジンサンムシ

蜜蜂ノ王臺　蟻塔

編者評云、此答案は去年十月の末即はち募集後間もなく落手したるものなれは、定めて熟慮の餘假なかりしならん、それにしては上乘の出來なり、中に就て二三の鈌點を言はゞ、床蝨とエンマ蟲、カナブンと一文字セヽリの對は聞へず、アカスヂガメは兩處にあり再考ありたし、又三井寺ハンメウに高野ヒジリを、エンマコホロギにオニヤンマを、アリヂゴクにヤマジヨロウを組合せ、首切バツタに翅長イナゴを、胴切蜂に足長蜂を配したらんには一層面白かるべく思はるゝに、その此に出でざりしは遺憾なり、但し其出處の確實にして且穢はしき名稱を避けたるの一事は用意の周到、蘊蓄の充實なるを想見するに足る。

（優等）　◎蟲合せ答案（第二）

三重縣阿山郡東柘植村　橋本逸治郎氏選

秋津ムシ　ミノムシ（大日本美濃國）
車バツタ　マヒ〳〵ムシ
羽ジラミ　毛ジラミ
蠶甲バチ　タイマイテフ
山カマス　川トンボ
ヤブキリ　竹ノフシ
ヒグラシ　夜盜蟲
殿樣バツタ　大將ムシ
瓢簞ムシ　德利バチ
竹・蠹蟲　雀バチ
象ムシ　駱駝ムシ
烏バアゲハ　鳶色横バヒ

馬チヒ蟲　轡ムシ
蚊モドキハチ　團扇トンボ
編笠ハゴロモ　ハラヂムシ
水スマシ　火トリムシ
穀ガ　菜ガメ
木ノハテフ　枯ハテフ
木マハリ　花セヽリ
飴バチ　甘露
一點螟蟲　二星瓢蟲
ツマ黒ヨコバヒ　ツマキテフ
エビガラスヾメ　貝ガラムシ

岐阜テフ　京ジヤウロフ（岐阜市京町）
埋葬甲蟲　極樂トンボ
糸トンボ　針ガメムシ
トラカミキリ　クマゼミ
オバトンボ　子オヒムシ
ヒストルムシ　ハンモンガ
竹ケムシ　雀テフ
アリヂゴク　チニキ・ノコ
サルハムシ　キツ子バチ
赤ケムシ　白テフ
閻魔コホロギ　鬼ヤンマ
オキクムシ　幽靈横這

標本ムシ　群バチ（昆蟲標本陳列場御中）
河原バツタ　水カマキリ
牛ジラミ　馬シラミ
エゾシロテフ　タイハン・バツタ
鉄炮ムシ　劍ガメムシ
脊スヂスヾメ　腹アカムシ
天牛　地バチ
鍬形ムシ　鋸バチ
ヘピリムシ　クソパヘ
圓カメムシ　角モンハマキ
三角ムシ　菱ヨコバヒ
赤スヂカメムシ　白スヂカミキリ

ハサミムシ　カマキリ
六點横這　七星瓢蟲
紅スヾメ　齒黒トンボ
早苗トンボ　稻ガメムシ
米牛　麥蛾
玉ムシ　コガ子
芋ムシ　蕪バチ
雷ハムシ　電横バヒ
蜜バチ　刺ムシ
糸引葉捲　ハタチリ
舟ガタケムシ　鰹ムシ

茶タテムシ　菓子ムシ
提燈蟲　蠟蟲
春ゼミ　秋ツバメ
金ケムシ　銀ヤンマ
黒アゲハ　白シタバ
米ツキ　アツキアラヒ
卵バチ　團子横這
ヒメアカホシ　ヒメ黒横這
一文字セヽリ　十字カメムシ
桑ヨコバヒ　蠶ノ蛆バヘ
ヒロウド蟲　モウセン蛾

踊リ子テフ／太鼓ムシ　兜ムシ／軍配ムシ　南京ムシ／南瓜カメムシ　サラサモン蛾／シマヨコバヒ　二筋テフ／三筋テフ　笹波シャクトリ／ホタルテフ

猫柳ムシ／手鞠バヘ　メクラアブ／道オシヘ　米ノ白ムシ／小櫟バチ　星天牛／地スガリ　大丸蜂／小丸蜂　ヒメハサミムシ／ヒメカマキリ

實盛ムシ／首切バッタ　巴テフ／オトシブミ　天狗テフ／羽ゴロモ　風船ムシ／ブランコ毛蟲　石アブ／綿ムシ　夕顔ベットウ／三日月尺トリ

蛇ノ目テフ／ヘビトンボ　大羽カゲロフ／小羽イナゴ　大ズ井ムシ／小シンクビ　穀ヌスビト／綱目カハゲラ　鹿ノ子テフ／角尺トリ　赤マダラ蚊・／黄斑尺トリ

ヒメシロテフ／姫黑オトシブミ　大名セヽリ／ヒオドシテフ　大象ムシ／小玉ムシ　テフトンボ／トンボテフ　鶺横這／燕テフ　ハラグロカッチ蟲／ハラ白ハナムグリ

尾ナシカハゲラ／尾ナガ蜂　腹長バチ／腹廣蟷螂　龜ノ子ムシ／顔カクシテフ　桑ノ青ハマキ／稻ノ黄ハマキ　マルメンヨコバヒ／メンダカスヾメ　大黑コガ子／小黑ヨコバヒ

編者評云、此答案は飛舞輕妙、才氣の紙上に溢るゝを覺ゆ、但毛ジラミへヒリムシ、クソバヘなど、他人の面前にて憚るべき野卑の名稱を用ひたるは甚はだ拙と謂ふべし、又舟形蟲には錨テフを配シ、蛇目蝶には龍蝨を配し、天鵞絨蟲には蜀紅錦蛾を配し、實盛蟲には齊女などを配せば、極めて完全なりしならんか、其他竹雀の關係を知らせんとてにや、竹毛蟲に雀テフ、竹ノシンクヒに雀バチと用ひたるは惡し、南京蟲に南瓜ガメムシも穩かならず。

◉岡山縣の蠶蛆驅除

岡山縣にては舊冬縣令を以て蠶蛆驅除規則を發布し、更に訓令を以て一致共同の利を示せる趣となるが、蛆害の養蠶業に及ぼす影響は長野、福島、群馬諸縣の實例に徵して明白なれば、何れの養蠶地方に於ても斯くありたきものなり。

◉昆蟲標本陳列館の參觀人

去歲十二月中に、當昆蟲研究所の標本陳列館を參觀せし人員は、總計三千二百五十七名にて、最とも多かりしは一日に於ける三百二十四名、最とも少なかりしは三日に於ける七十五名よて、一日平均百六十二人强に當れり、其中重なる者は、山口、愛知、富山、千葉諸縣の農事當局者又は敎育者等なりき。

（以上、一月十三日脫稿）

謹奉賀新年候

◎秤は何種に拘はらず（商標）の商標幷に守隨製の打込印を御認めの上御買入相成候事必要に候
◎（商標）の商標幷に守隨製の打込印なき者は拙店の製品ょ無之候
◎拙店の製品ょあらざるものは多く原料粗惡にして耐久の見込無之候
◎耐久の見込なきは今回の定期檢定成績ょ於て既に御了解相成候と存候
◎耐久の見込なきのみならず損所修覆の時原料の取替又ハ各異形の爲め非常の手數を要し候
◎非常の手數を要し候故に修覆料も亦隨て高價に相成候
◎修覆料の高價ょ止まらず無據御斷り申上候品も澤山有之候
◎拙店は三百年來斯業ょ從事し陸軍省所有の大砲掛秤鐵道局使用の車輛掛秤臺灣總督府の標本秤等を製造せしのみにても技術の巧妙にして堅牢なる製品を出すと明白に候
◎拙店は全國に於て三支店四分店四十出張所七百八代理店を有し修覆又は取次をなさしむるを以て損所修覆の際は獨得の便利有之候
◎定期檢定を受けざる秤又はポンド目カン〲等を御使用相成候方往々見受け候得共右は法律上嚴罰有之候間速ょ御棄却可被成候
右は將來秤御買入の諸君に對し豫じめ御注意申上候也

尙弊店の漆器營業種目は左の如くに有之候
美術漆器、一閑張、張拔、螺鈿入漆器、朱塗物、重箱、本膳椀、硯盛、菓子椀、吸物椀、折敷膳、會席膳、吸物膳、菓子器、杯洗、盃類、盆類、鏡臺、針差、枕類、鏡類、額緣、塗板額、貿易漆器、紀念木杯、卷煙草箱、料紙文庫、硯箱、香合、棗類、香盆、小箱、塗煙草盆、行燈、衣桁、切手盆、机類、箸箱類、下駄箱、紅葉箱、[illegible]簞笥、長持、用簞笥、櫛簞笥、膳簞笥等は御注文に依り十分入念調製可仕候
御嫁入道具、家具類、玩弄物を始め其他漆器類一切營業可仕候
特ょ蒔繪は自宅の工場內に技師雇入れ有之に付美術蒔繪は無論其他意匠圖案の求めに應ぞ

名古屋市榮町一丁目　度量衡 漆器業　（商標）　守隨本店　（電話[illegible]）

◎害蟲圖解既刊の分廣告

●第一。桑樹害蟲エダシヤクトリ(枝尺蠖)(三版)
●第二。桑樹害蟲トゲシヤクトリ(刺尺蠖)(再版)
●第三。稻の害蟲イネノズヰムシ(二化生螟蟲)
●第四。煙草害蟲タバコノアヲムシ(煙草螟蛉)
●第五。稻の害蟲イチモジセセリ(苞蟲又葉捲蟲)
●第六。桑樹害蟲ヒメゾウムシ(姫象鼻蟲)
●第七。桑樹害蟲シンムシ(心蟲)
●第八。稻の害蟲イネノアヲムシ(稻螟蟲)
●第九。茶樹害蟲ミノムシ(避債蟲)
●第十。豌豆害蟲エンドノキリムシ(夜盜蟲又地蠶)
●第十一。桑樹害蟲クハカミキリ(桑天牛)
●第十二。稻の害蟲ツマクロヨコバヒ(浮塵子)
●第十三。桑樹害蟲イトヒキハマキムシ(糸引葉捲蟲)
●第十四。茶樹害蟲チヤケムシ(茶蛅蟖)
●第十五。馬鈴薯及び茄子の害蟲テントウムシダマシ(擬瓢蟲)

以上十五種は既刊の分にして發刊以來既に江湖の高評を得て郡農會又は町村農會は勿論、各種の諸學校にも備へ付けられたり、時節柄害蟲驅除には必要欠く可からざる圖解とす。

◎昆蟲學用書籍發賣廣告

名和昆蟲研究所長名和靖著

五版 薔薇の一株 昆蟲世界 全

定價貳拾錢郵稅貳錢郵券代用一割增

名和昆蟲研究所編輯部編

臨時刊行第一編 日本昆蟲分科表 全一冊

定價(郵稅共)金貳拾八錢(郵券代用一割增)

名和昆蟲研究所編輯部編

臨時刊行第二編 通俗益蟲集覽 第一輯(說明書附)

定價(郵稅共)金貳拾貳錢(同上)

雜誌昆蟲世界合本出來廣告

昆蟲世界第一巻品切

本邦唯一の昆蟲雜誌

昆蟲世界合本

第五巻(昨年分)出來

西洋綴金文字入美裝

●昆蟲世界第三巻合本壹冊 定價金壹圓貳拾錢郵稅金拾貳錢
●昆蟲世界第四巻合本壹冊 同上
●昆蟲世界第五巻合本壹冊 同上

◎害蟲圖解未刊の分豫告

◎桑樹害蟲キンケムシ（金條蛄蟖）
◎稻の害蟲フタホシズヰムシ（三化生螟蟲）
◎稻麥害蟲キリウジガガンボ（切蛆）
◎稻の害蟲セジロウンカ（背白浮塵子）
◎稻の害蟲ヒゲナガアブ（長角虻）
◎桑樹實蟲クハハマキ（桑葉捲蟲）
◎蠶の害蟲カヒコノウジバヘ（蠁蛆）

◎松樹害蟲マツケムシ（松蛄蟖）
◎藍の害蟲アヰノゾウムシ（藍象鼻蟲）
◎粟の害蟲アハノズヰムシ（粟螟蟲）
◎胡麻害蟲メンガタスズメ（胡麻蠋）
◎赤楊害蟲ハンノキケムシ（赤楊蛄蟖）
◎櫟の害蟲カミキリムシ（天牛）

◎桑樹害蟲クハケムシ（桑蛄蟖）
◎稻の害蟲イナゴ（蝗螽）
◎稻の害蟲トビイロウンカ（褐色浮塵子）
◎稻の害蟲クロクサガメ（黑色椿象）
◎桑樹害蟲アヲハマキムシ（青色葉捲蟲）
◎桑樹害蟲クハゴ（野蠶）
◎蔬菜害蟲モンシロテフ（菜の螟蛉）
◎蔬菜害蟲サルハムシ（菜の葉蟲）
◎大豆害蟲ヒメコガネ（姬金龜子）
◎梅樹害蟲ウメケムシ（梅蛄蟖）
◎梅樹害蟲ウメシヤクトリ（梅尺蠖）

◉豫約代價

◉圖解の紙幅縱一尺三寸橫九寸 ◉壹枚の代價拾五錢郵稅貳錢
◉百枚以上一纏壹枚拾錢郵稅百枚に付き貳拾錢
壹枚拾錢郵稅貳錢
圖解代金 凡て前金にあらざれば回送せず但申込の際前金添附の事
但郵券代用壹割增の事

◎梨樹害蟲ナシノゾウムシ（象鼻蟲）
◎梨樹害蟲ホシハマキ（星葉捲蟲）
◎果樹害蟲イラムシ（刺蟲）
◎稻の害蟲オホズヰムシ（大螟蟲）
◎藍の害蟲アヰノズヰムシ（藍の螟蟲）
◎粟の害蟲アハノヨトウムシ（粟蠶）
◎里芋害蟲セスヂスズメ（烏蠋）
◎桐樹害蟲シモフリスズメ（桐蠋）
◎果樹害蟲ホシカミキリ（白斑天牛）
◎果樹害蟲ドウガネブンブン（金龜子）

發行所 岐阜市京町 名和昆蟲研究所

謹賀新年 田中芳男
田中節三郎

謹賀新年 小貫信太郎
中川久知

恭賀新年 在獨乙伯林府 松村松年

謹賀新年 在米國 桑名伊之吉

謹賀新正 岡田虎二郎 （在米國桑港）
渡米以來頑健消光罷在候間辱交諸彦の御放慮を願上候

恭賀新年 林茂
桑原貫之助

謹賀新年 岐阜中學 長野菊次郎

謹賀新年 北總 大竹義道

恭賀新年 長野縣 小山海太郎
清水藏

恭賀新年 千葉縣 林壽祐
齋藤啓二

謹賀新年 靜岡縣 岡田忠男
神村直三郎

恭賀新年 島根縣八束郡持田村 三代作次郎

謹賀新禧 香川縣大川郡丹生村 脇屋禎三郎

謹賀新年 秋田縣 松浦靜方

謹賀新年 岐阜縣本巣郡生津村 柳行李製造所 紫雲英種販賣 西堀彌市

謹賀新年 愛媛縣新居郡泉川村豊禾園 山内幹衛

謹賀新年 鳥取縣 蓮佛万吉

謹賀新年 和歌山縣日高郡上南部村 第八回全國害蟲驅除修業生 大野宗一

謹賀新年 岐阜縣 高橋貫一
村井正元

謹賀新正 島根縣 田中房太郎

謹賀新年 大分縣 小野覺太郎

謹賀新年 岩手縣 鳥羽源藏
小山幸右衛門

（明治三十五年一月十五日發行）

昆蟲世界

（每月一回十五日發行）

第五卷第五拾參號

（明治三十年九月十日内務省許可）
（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

◎岐阜縣昆蟲學會公告

本會規則に依り左記諸君を名譽會員ゝ推選致候ゝ付此段及報告候也

川路利恭君 寺尾捨次郎君 構松珍麿君 堀口有一君 小島鼎君 古田兼彌君 大津政布君 高橋俊益君 山田省三郎君 古井由之君 牧野鉄九郎君 駒田孫市君 高橋嘉吉君 見須章君 堀口泰一君 松岡清司君 各務平七君 原輟幸君 石井鼎君 金森吉次郎君 井上源衞君

加藤炳君 石川隆積君 名和靖君 水谷弓夫君 澤田乙三君 伊藤祐之君 後藤信明君 岡井藤之亟君 田中善次郎君 説田武之助君 日比野重一君 弓削三次郎君 春日善一君 堀兼作君 神戸彌助君 大野本十郎君 中川源次郎君 市岡政香君 天野若圓君 安田公平君 早川周藏君

柿元一兵君 三宅貞太郎君 若松卓爾君 津田顯孝君 中村眞夾男君 加藤厚寛君 野呂駿三君 石田英壽君 山田貞策君 渡邊文三君 松原九郎君 丸山守一郎君 加藤榮三君 竹村梅吉君 佐久間國三郎君 矢野嘉右衛門君 西尾馬五六郎君 福田吉郎兵衛君 伊藤長右衛門君 各務寛左衛門君 杉下太郎左衛門君

明治三十五年一月

岐阜縣昆蟲學會

◎岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條ゝ依り、每月第一土曜日午後正一時より、岐阜市京町名和昆蟲研究所內に於て開く筈なれば、每會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所內
岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會本年中の日並は左の如し

第三十八回月次會（二月一日）
第三十九回月次會（三月一日）
第四十回月次會（四月五日）
第四十一回月次會（五月三日）
第四十二回月次會（六月七日）
第四十三回月次會（七月五日）
第四十四回月次會（八月二日）
第四十五回月次會（九月六日）
第四十六回月次會（十月四日）
第四十七回月次會（十一月一日）
第四十八回月次會（十二月六日）

◎名和昆蟲研究所案內

當研究所の位置は上の圖の如く停車場よりは僅十餘町にして養蟲室あり、又ロとヘとの間なる新設の岐阜縣物産館構內ゝは常備の昆蟲陳列館（五間ゝ十六間）あり有志諸君の來訪を俟つ

岐阜縣岐阜市京町
名和昆蟲研究所

◎本誌定價並廣告料

壹部郵稅共金拾錢
壹年分拾貳部郵稅共金壹圓八錢
（見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す）

（注意）本誌は總て前金ゝ非れば發送せず◎郵券代用は五厘切手にて壹割增とす◎爲替拂渡局は岐阜郵便電信局

廣告料五號活字廿二字詰一行ゝ付金拾貳錢、三十行以上一行ゝ付き金拾錢とす

明治三十五年一月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二
（岐阜縣岐阜市京町）

發行所 名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二
發行者 名和梅吉

同縣武儀郡下有知村三百七十四番戶
編輯者 天野秋二

同縣安八郡大垣町大字郭百五十三番戶
印刷者 河田貞城

（大垣西濃印刷株式會社印刷）

Vol.VI. FEBRUARY. 15TH, 1902. No.2.

(毎月一回十五日發行)

昆蟲世界

(第六卷第貳冊) 第五拾四號

目次 (禁轉載)

(明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)

(明治三十五年二月十五日發行)

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU ,JAPAN

◎寄附物品受領公告

一金貳圓　靜岡縣濱名郡蠶業學校　松野春一君
一鍍金製根掛（菊に蝶摸樣）　岐阜縣　永澤甲子君
一反物商標（牡丹に蝶摸樣）　石川縣　高田信久君
一伊賀日報三葉（昆蟲記事掲載）　三重縣　西岡嘉十郎君
一蟲除御札　數種　新潟縣　茅原治六君
一蟲除御札　三種三枚　岩手縣　佐々木寛五郎君

右當所に寄贈相成候に付茲に芳名を掲げて其厚意を謝す

明治三十五年十二月

岐阜市京町　名和昆蟲研究所

第十一回全國害蟲驅除講習會員募集

開期（自三月一日至同月十四日）二週間（凡四十名）

全國害蟲驅除講習會は既に第拾回の經驗を重ねて茲に益々その必要を感じ、且つ教授科目にも改正を加へたれば、本年よりは更に有用にして實行に適切の方法に頼らんとす、入會希望者は來二月廿五日以前に申込ありたし、尚ほ今回の講習には左記條々の利益ある可しと信ず。

一、開會季節の早き爲め、本田は勿論、苗代田害蟲驅除の準備をもなし得べき事。
一、今年初發生の益蟲、害蟲より漸次採集して、完全なる四時の昆蟲標本を製作し得べき事。
一、岐阜縣冬季採集昆蟲展覧會の出品標本を觀覽するの便あれば見學に多大の益あるべき事。
一、當昆蟲研究所陳列舘の整理と共に、新たに陳列せる新式昆蟲標本に就て研究の便ある事。
一、前回まで教授せざりし新科目をも講習するが故に、多少斯學研究に益あるべき事。

なほ無定員なるも當所の都合に依り、隨時入會を謝絶することある可し。規則書入用の向は郵券を添へ至急照會あれ、直ちに回送致すべし。

明治三十五年一月

岐阜市京町　名和昆蟲研究所

◎昆蟲標本及び昆蟲學研究用具

● 農作物害蟲標本　壹組（桐箱入解説附 金四圓五拾錢）
● 農作物益蟲標本　壹組（桐箱入解説附 金參圓九拾錢）
● 教育用昆蟲標本　壹組（桐箱入解説附 金四圓九拾錢）
● 自然淘汰標本　壹組（桐箱入解説附 金五圓五拾錢）
● 雌雄淘汰標本　壹組（桐箱入解説附 金五圓五拾錢）
● 氣候變形標本　壹組（金四圓）
● 昆蟲學研究用書籍及び器具一式

（壹組の荷造費金貳拾錢小包料は百里迄貳拾錢百里外四拾錢）

從來昆蟲の研究調査多忙のため、自然標本器具等の調製に暇なく、屢次各位の貴命に背き居り候處豫め品目を御指定相成るに於ては、短期間に悉皆取揃へ調達可致樣準備致候間何れのものなりと隨意御申越被成下度候也

明治三十五年第一月

名和昆蟲研究所會計部

◎昆蟲世界購讀紹介者芳名

岐阜縣　安藤登君（六名）
茨城縣　小山文三郎君（壹名）
靜岡縣　丸山方作君（壹名）
岐阜縣　土岐郡昆蟲學會（壹名）

（平田農相の詩書）

螟蝗何跋扈
誰畫驅除方
一洗妖氣盡
祥雲滿野黄

西涯

（高崎男の詠歌）

名和ぬしか昆蟲學硏究のものかたりを傳聞て

正風

古衛なのみめてし
むかしの宮人に
このむしはらひ
きかせてしかな

（小原米華先生の繪畫）

論說

新年梅

御製

立かへる年の朝日に梅の花かをりそめけり雪間ながらに。

◎蟲害地と國庫補助の請願に就て

農政の上より觀る時は、國に災害ある毎に、國費を支出して之が救濟賑恤を講ずるは、理の當に然るべきものたり。特に蟲害の如き、瞬間片時を爭ふものに對つては、漢土の故事ならねども、蝗境內に生せば、必らず馳せて上に聞せよ、少淹頃刻も坐する所ろ輕らず、の繩矩によりて應急の措置を希ひ。又恒に其レ或ハ勢微ニ種稺キハ、則チ當ニ丞カニ率ニ衆力ヲ以テ圖ル之ヲ、不必シモ因テ細微ニ以テ來サ大難ヲ於民ニ也、故ニ凡ツ居モノハ官ニ、必ズ先ヅ致シ於負荷ニ、而ル後ニ可シ以テ有ル爲ス、の旨に準據して、逆かじめ驅除豫防を講じ、猶ほ力及ばずして、一敗收穫皆無の日あらんには、其視る所ろの損害の輕重を按じて、迅かに救恤の意を明かにせられん事を、當路の有司に望まざるを得ず。然れども箇はこれ國家無難の際に行ふべく、今日の如き內外多事、實力培殖の秋に施すべき性質のものにあらず。況んや其双肩に國家經濟の大半を負擔する農業家が、些末なる事由を口實として、然かも富裕ならざる國費を、互ひに分爭するが如き事あらんには、到底其希望を容るゝの餘地なかる可きをや。

農業家は國費の供給者たり、需用者にはあらず。然るを先には四國、畿內ろの他諸縣に於て蟲害地租全

免を請ふあり、今また九州の數縣聯結して、螟害驅防費補助請願の決議をなせるあり、抑そもこれ自家の位置を忘却せしものにはあらざる莫きか。吾人は一己の上より言はゞ、蟲害地の何れたるを問はず、固より同情一掬の熱涙を濺ぐに吝ならざるも、深く現時の大勢に照らし、又將來の弊惡を矯めんが爲めには、菩薩の手に夜叉の劍を把りて、先づ國費分爭の禍根を斷つに努めざるを得ず。而して地租全免に對する意見は、既に屢次これを公表したれば、茲にまた贅せざるも、螟害驅防費補助の件また是れ、一種の地租免除たらざるやを疑はしむるを悲しむ。乃は郡縣の力を以てして、なほ驅防の功を全うし能はざるが故に、敢て國庫の補給を望まんと云ふに外ならざればなり。想ふにこの脆弱の論旨を基礎として、能くその宿意を貫徹し得べきや否や、又その要望金額の一縣凡そ幾何に當るやは豫斷し難きも、假りに某縣の言ふ所ろの如く、年に二十四万圓を消費せりとなし、其十の二を以て補助額となす時は、即はち全國の五十府縣に、約二百五十万圓の巨費を分たしむるものに非ずや。今や僅々十五万の規定額をすら穩やかに農會に與へざる國庫は、果して之を甘受すべきか、また之を快諾せしめ得べきか、其成敗に至りては、寧ろ智者を俟つの要なけん。

嘗て地租全免請願地の實情を聽くに、中には地方の財力を竭し、農家の全力を盡したるもありと云へば假ひ迷信、懈怠、多費等のために彼の奇禍を買ひたりとは云へ、他に策の講ずべきものあらば、また之を賑恤するに異議せざる可きも、或ひは多勞多煩に、且つ未だ經驗を堆ねずと評せらるゝ他の驅防法の爲めに、初めより此巨額を、國庫の補給に仰がしめんとするが如きは、寧ろ時勢を辨ふるに似て、而かも遠慮なきの計畫に出づるにあらざるなき乎、吾人は輕易に同情を表白し難きの感あり。今や國家に餘財なく、地租は加重せられ、諸税は漸次收斂に近づき、自作年に減じて小作連りに增するに、此有用

に似て、面のあたり有用ならざる驅防法を實行せんが爲めに、強ゐて多大の國費を支出せしめたりとて歸する所ろは果して幾何の利益ぞ。人或ひはこれと反對に、農家の困窮を救護し、兼て國家の實益を增進せんが爲めに、補給を仰ぐなりといはんも、凡そ國費と云ひ縣費と云ひ、其名目こそ異なれ、實は主として農家の懷ろを指すに外ならざれば、枉げて之を餘裕無きの國庫に求めんよりは、初めより自家囊中の黄白を堵して、誠實に之を行ふの優れるに及かざる可し。假し多少の補給を仰ぐの必要ありとするも、爲めに依賴心を惹起さしめて、此裏に蟲害を顧慮せざるの惡風を養成し、遂に蟲害に較べて一層劇甚の大害を釀さんことを畏る。吾人が極力蟲害地租免除請願に反對するも、また螟害驅防費補助請願の決議を重視せざるも、蓋し皆この深意より出づ。

近着の官報紙上に於て、要路の責任者が「蟲害地地租免除の事は、必らずしも、之が必要ありと認めず」と貴族院に公言せしを一讀し、早晩吾が希望の一片を、遂行するの機會に到達せしを悅ぶと共に、また螟害驅防費補助請願の決議あるを耳にし、慨然天を仰ぎ、筆を抛うちて、大息するもの良久し。

新年梅
皇后宮御歌
大君の千代田の宮の梅の花ゑみほころびぬ年のはしめに。

◎柑橘の有害貝殼蟲と驅除法（既に本邦各地に發生せるもの及び將來輸入の恐れあるもの）（續）

在米國スタンフォールド大學　米國理學士　桑名伊之吉

(13) Askidiotus amrantii, Mask.（學名）Diaspinae（亞科名）　雌蟲の貝殼は略ぼ圓形に半透明の淡灰色にし

て、中央に臍狀の赤斑紋あり、其軀體も赤褐色を呈し、外被より透見することを得。卵は楕圓をなし淡黃色なり。一雌の產む所ろ、二十粒乃至四十粒とす。雄蟲の外殼は雌蟲のものよ似て小に、約その四分一に過ぎず。此種は加州柑橘園の一大害蟲にして、嘗て淸國產の柑橘と輸入を共にしたりと傳へらる。本邦の果樹には加害甚はだしからざるも、東京、橫濱、和歌山及び九州地方よ發生す。

(14) Aspidiotus ficus, Ash. (學名) Diaspinae(亞科名)　雌蟲の貝殼は圓形をなし其脫皮は殆んど中央にあり、第一脫皮は臍狀をなし生ける時は白色にて、第二脫皮は稍淡紅色を呈す。他の部分は暗赤褐色にして、外緣の薄き處ハ灰色なり。直徑二、ミメあり。雌蟲は扁平よして、背面よは白或ひは黃色の斑紋あり卵は淡黃色にて、其孵化せし當時は黃色なり。雄蟲の外被は楕圓よして灰色に、長さ半ミメあり。此種は加州、フロリダ州及びルイジアナ州にて多く柑橘樹に加害す。本邦にては他の植物に於て被害を認めたるも、未だ柑橘樹よ寄生せるを發見せざりき。

(15) Aspidiotus duplex, Ckll. (學名) Diaspinae(亞科名)　雌蟲の貝殼は殆んど圓形にして、少しく隆起し暗褐色なり。脫皮は蜜柑色にして殼心よりは稍一方に偏せり。被害樹より之を剝離する時よは、其跡よ白痕を殘留す。成熟したる雌蟲は長圓形にして其色は黃なり。此種の加害植物は頗ぶる多きも、就中、柑橘、躑躅、茶、樟、椿、榊等をその主要のものとす。

(16) Aspidiotus perniciosus, Comst. var. albopunctata Ckll. (學名) Diaspinae(亞科名)　邦產の柑橘樹に寄生輸入せしを、アレキサンダー、クロー氏の發見せしものに係る。サンホーゼー種に酷似す。余は本邦巡歷中に此種をば、何地にても採集し得ざりき。

(17) Aspidiotus hederae, val. (學名) Diaspinae(亞科名)　本邦各地よ發生する有害種よして單よ柑橘類に

止めず、幾多の果樹、盆栽類にも寄生加害す。貝殼は扁平にして、其形恰かもAspidiotus nerii に似たり。

(18) Aspidiotus nerii.（學名） Diaspinae（亞科名） 雌蟲の貝殼は扁平にして圓く、色灰白なり。脫皮は殆んど中央にありて淡黃色に、第一脫皮は分泌質よて現はれざと雖ども、第二脫皮は全たく之よ反せり。躰長は直徑二ミメを有し、卵は淡黃を帶べり。雄蟲の貝殼は小よして長形をなし、僅かよ一メミを越ねず。常に白色なれども、脫皮は黃色をなす。此種はフロリダ、カリフォルニア、ルイジアナ諸州に棲息して、多くレモン及びオレンジ樹を害すれども、本邦に於ては未だ之を見ず。

(19) Parlatoria pergandii, Const.（學名） Diaspinae（亞科名） 雌蟲の外殼は通常圓形よ、脫皮は稍一方に偏せり。身長一ミメを算し其色灰白なり。卵皮と幼蟲とは共に紫色を帶ぶ。雄蟲の貝殼は細長よ、脫皮は前端よありて、灰黃色を呈す。躰長一ミメを算し、貝殼の中央部は暗綠色をなせり。余は福岡縣小倉の柑橘樹に於て、發見せしのみなるも、猶は他處に於ても寄生を見るなる可し。米國にてはフロリダ、ルイジアナ二州の柑橘よ發生し、年々加害少なからず。

(20) Parlatoria proteus.（學名） Diaspinae（亞科名） 此種もと前種(19)と外觀略同じきを以て、鏡檢を經ざれば彼此を判別し難し。余は未だ柑橘樹よては之を目擊せざるも、横濱に於て植木會社園内の風蘭よ寄生するものを採取せり。

(21) Chionaspis Citri, Const.（學名）Diaspinae.（亞科名） 雌蟲の貝殼は暗褐色よ、側面は灰色を呈せ。脫皮は黃褐色なり。此種は合衆國の東部諸州よ多く發生するものにて、ルイジアナ州にては柑橘樹に有害なりと稱す。本邦にありても亦、柑橘樹に多生すれども、未だ大害をなさゞるが猶し。

(22) Chionaspis minor, Mask.（Hemichionaspis（學名） Diaspinae（亞科名） 此種の雄蟲は葉裏に群棲する

の常性あり。余は福岡縣及び和歌山縣下に於て、その發生の盛んなるを目撃せり。

(23) Mytilaspis citricola, Pack. (學名) Diaspinae (亞科名)　雌蟲の外被は茶褐色にして

Mytilaspisの圖
(イ)(ロ)は葉裏に附着するの狀
(ハ)は擴大したるもの(裏面)

少しく弓狀に彎曲し、その一端は細狹なり。軀長は三ミメ、卵子は白色にして、雌軀下に不規律に産附せらる。雄蟲の貝殼は雌に比して頗ぶる小に、其長半ミメに過ぎず。余は此種の青森縣下弘前市及び福岡縣下に發生せるものを採收せり。

(24) Mytilaspis gloveri, Pack (學名) Diaspinae (亞科名)　雌蟲の貝殼は黃褐色にして、通常弓狀に彎曲す。此種は前者(23)に似て幅は稍狹し。其卵色は白きも、幼蟲の軀色は紫なり。すなはち柑橘樹に寄生する普通種にして、多くは成長の旺盛なる小枝又は果實を害するものとす。米國へは清國より輸入せりと傳へらる。本邦にては和歌山、福岡、岐阜の諸縣下にて採集せり。　(未完)

◎瑞祥甘露の事を記す (續)

仙臺宕麓　晴耕雨讀子

翻へつて本邦には、嘗てこれに類する事例無かりしかと云ふに、日本書紀、續日本紀、國史類聚等の正史實錄を始めとし、野乘の類にも往々甘露降下の記事あるを見る。素より隋唐以降、何につけ彼國の制度文物を採擇せる中古の事にしあれば、彼の俗を移して、甘露を瑞氣の感じて地に降るものと信ぜしは、少さか怪しむに足らねど、邦人の手に成れる本艸書其他に、多く之を收錄せざる事實より推す時は、幸はひに唐土の如き迷信の害は無かりきと見えたり。

甘露に別種異品のありや無きやれ、詳らかに言ふこと能はざるも、之を諸說の記事に徵し、またアマキツユてふ邦訓によりて之を判ずれば、其色は瑩徹玲瓏に、其味はひは甘美にして、樹木の枝葉に凝着する稠粘液ある可きに、天武紀の白鳳七年十月の條下には『有レ物如レ綿。零ニ於難波ニ。長サ五六尺。廣サ七八寸。則チ隨レ風ニ以テ飄ヘル于松林及ヒ葦原ニ。時人曰フ甘露ト也』とありて、茅窓漫錄にはこれを異物なりと言ひ置けり。是れ甘露としては、有得べからざる形狀にて、到底蚜蟲の排泄液と同視すべきものにあらねど、晉書に『耆老得レハ敬チ。則チ松柏ニ受ケ之チ。尊ヒ賢チ容レハ衆チ。則チ竹葦ニ受ク之チ』とあれば、此等の所說に因づきて、形狀の如何を問はず、その松林竹葦に飄零せるより、時人は此く思ひ誤りしならん歟。

次に甘露を、世にも得難き靈液仙方となせしは、其名稱と主治効能とを、和漢の本草書に擧げたるにても明確なるが、源語には『甘露法藥の藥も、今は何にすべき身にもあらぬ』をとあり、走湯山緣記てふものには『如ニ白琉璃霰一。凝ル下枝條ニ上。久シテ不レ零チ。嘗レハ之チ如シ蜜糖一。衆色更ニ和シテ。結ボレ草葉ニ。自ラ不レ消ヘ。味レバ之チ病患愈ユ』とあるを見ても、その如何にこれを重んせしやを知るに足りぬ可し。去るにても穢はしき蟲遺の果なりと知る由なかりし、古人こそ實に哀れ。

斯く甘露は和漢を通じて瑞祥の一たりしに、明朝に至り杜鎬氏先づ陰陽の理を基礎として之が排斥を試ろみ、本邦の小野蘭山氏博物眼に照して之を究明せられにき。即はち杜氏が『甘露ハ非レ瑞ニ也。乃チ草木將ニ枯レント。精華頓ニ發スルナリ於外ニ。謂フ之チ雀餳ト』と論せしはそも不祥說の濫觴なるべく、小野氏が甘露と蚜蟲とを解說して『多くは眞の甘露に非ずして、杜鎬の說の雀餳なり。雀餳は草木將に枯れんとして、精華頓に外に發すと云、然れども枯れんとする時のみに非ず、夏の時、新葉茂盛し、鬱して蚜蟲を生ず、是草木の病なり、其蟲味甘きもの故、必ず衆蟻來り、舐ぶれば其蟲愈長じ、遂に羽化して去る、此蟲多

き所には、其下の葉に必露多くたまる、此つゆ甚甜し、是蟲の尿也、人たま〳〵此露を舐れば、誤て甘露と云ひ瑞とす、此雀錫也、甘露に非ず、唐山にも此の例あり（中畧）凡ろ梅李の類、必此蟲を生ず、梢に此蟲あれば、下の枝に必露ありて、蜂蠅の屬集り舐る、人その枝下に至り仰げば、微雨の如く面を撲つ、是皆蚜蟲の遺するところなり』と漁隱叢話をも引きて、古來の迷謬を喝破せしは、是ぞ蟲遺説の始めなる。去れど世人は猶は久しく甘露の奇瑞をおもひ、蚜蟲を蟻子とあやまり、蚜蟲と甘露とを全たく別物となせしに、一たび泰西の學術東漸するに至り、釋然その疑がひを解さて、今や反つて之を凶兆視するに迨べり。觀來れば甘露の一榮一枯、豈また奇ならずや。

余が知る所ろを以て言へば、本邦に於て、甘露の實躰を明らかにし、小野氏の蟲遺説を補足せしは、近く明治維新の後の事にて、動物學と農學勃興の賜ものなり。即はち內務省が海外の農書を飜刻し、勸農局が告諭文及び臨時報を頒布し、農務局が害蟲圖解、田圃蟲書、農商公報を刊行せし等は世人が昆蟲に對する舊思想を洗掃し、文部省の著述また此間に幇助を與へたるものゝ如し。其他田中芳男、鳴門義民二氏が大日本農會に蟲學科を擔任せる、練木喜三氏が農學校に動物學を敎授せる、津田仙氏が學農社を興し又農業開拓兩雜誌を利用して應用昆蟲學の必要を知らしめたる、名和靖氏が岐阜縣農學校にありて農事雜誌その他に頻々昆蟲記事を寄せたる等は、確かに警醒の曉鐘ともなり、將た甘露凶兆の根源ともなれる要素にて、當時早くも已に泰西の學説を飜譯せる蚜蟲説及び其敵蟲に關する實驗説を公けにしき。又中川久知氏等がその學業の餘暇に、絕ず筆を昆蟲記事に執れると、佐々木忠次郎氏が通信敎授を開始し及び動物書の飜譯に從事せしとは、稍少しく後の事なるも、其蚜蟲族を研究する上に裨補せる功勞は、長しへに沒すべきにあらず。今日誰一人、蚜蟲有害説、甘露蟲遺説を嘖々吾物顏に述べざるは無き

に至りしも、畢竟此等先進諸氏が、或ひは實驗に心を潜め、或ひは攻學に身を忘られし苦辛の形身とこそ思ふなれ。

終りに世の識者に尋ねたきは、甘露の降下せる季節と、其樹種との二つあり。季節につきては、和漢ともに温暖の候とするもの固より多かれど、中には怪しくも、九冬の酷寒に發りし事のやう記載せしも之あり、これ果して蚜蟲の化育に恰好の時あるべきか、或ひはまた古今暦本の異あるが爲めに、斯ある冬季に當るものにや、未ざ何れとも考がひ得ず。次に甘露の宿る樹種を松柏とするもの多きも、これ亦道理上如何あるべきか、古人が松柏を愛づるの餘り、故さらに斯く書したらんやは知らねど、昆蟲學より觀察して頗ぶる疑ふべき節ありと思はるゝなり。歳首の試筆には、宜しく芽出たき題を選ぶべきものよと豫て聽きたれば、斯學發達史の一助にもと、昔時の瑞祥たる甘露の記を作ること此の如し。(完)

◎龍蝨に關する小觀察

名和昆蟲研究所助手　名和梅吉

龍蝨は成蟲のまゝ、水中にて越冬するを常とすれども、また山林中の陰濕がちなる落葉下、若くは片岩磊塊等の罅隙に潜伏して、越年すること珍らしからず、故に冬季に昆蟲採集の際、斯かる意外の場處に於ても、屢次之を發見することあり、昨今は恰かも其時期に相當すれば、或ひは想ひ當らるゝ讀者も少なからざる可し。

龍蝨(Cybister japonicus, Sharp.)とは漢名にて何れの地方にも多産し、普通これをゲンゴラウムシ(源五郎蟲)と云ふ、即はち昆蟲學上の系統より云へば、鞘翅目の龍蝨科(Dytiscidae)に屬する一種にして、彼の水面を最とも輕快に游泳する所ろのミヅスマシ(又マヒマヒムシと稱す)と近縁を有せり、俗に「油屋

のおこん」とも謂ふ、蓋し全躰恰かも油を流したるが如き外觀あるに因るか。其成蟲は幼蟲と共に、食肉性にして、常に池、沼、溝渠、水田等に棲息し、各種の水產昆蟲及び小魚類を捕食す、而して成蟲は能く陸上に出で、又空中を飛翔す、是れすなはち他に移轉するものにて、多くは黃昏より夜中に於てす、往々人家の燈火に集來するものあるを見るは之が爲めなり。

其大さは一寸二、三分許り、其外形は扁平楕圓形をなし、頭部、前胸背及び翅鞘は、淡綠を帶たる黑褐色にして潤澤を有し、その周緣は黃褐色を以て彩どられ、腹面は龍骨狀を呈し、褐色に黑色を交へて光澤を具ふ、腹眼は大形にして頭部の左右に配置せられ、觸角は細絲狀にして十一節より組成し、腹眼の前面に當る頭側より出たり、脚部は前、中脚は短かく略ぼ同形なるも、後脚は長く脛節跗節は扁平となり、多くの細毛を密生して恰も舟の艪と同樣に行進の作用を爲し、其游泳浮沈を自由ならしむ、是れ全たく此科の特色にして他の昆蟲に、多く其比を見ざる所ろなり。而して前脚の跗節は、雌雄に依り大ひに其趣きを異にするを以て、一目の下にその雌雄を鑑識し得べし、即はち雌蟲にありては跗節の五關節は普通なるも、雄蟲は基部の三節は非常に變化して大形平盤狀と成り、且之に多くの吸盤をも備へり、蓋しこの變狀を來したる所以は、全たく雌雄淘汰の結果に外ならざるなり。其他著るしく異なるを翅鞘となす、雄蟲に於ては僅かに認知し得べきに點の縱條を有し、且平滑にして甚しく光澤あるも、雌蟲は全面に密刻したる不規則なる縱條を有し、爲めに前者の如き色澤を有せず、是また跗節

龍蝨の圖

（イ）は雌蟲の全形（自然大）

（ロ）は雄蟲前脚の跗節（放大）

の變化に對する變化ありとせば、雌雄間に不少の關係あるを知るに足らん、自然の妙用實に奇と謂べし。

そも龍蝨の幼蟲はガムシ(Hydrophilus)の幼蟲と共にヤマメ或ひはヤゴメとも稱せられ、藻草繁茂の淺水中に棲居す。其形態ハ圓長にして、腹端に至るに從がひて細まり、特に末節は細長の管狀をなし、之より二個の附屬物を出せり、十分成長したるものは二寸內外に達し、淡黃褐色をなして細絲の如き六脚を保有す、頭部は比較的大にして、前方の兩側には觸角、觸鬚の外、細き尖銳にして先端の內曲せる上顎を有し、これを以て好む所ろの食物を獲取するも肯て顯著なる口部とてはなく、食を取るや必らず上顎に開在する口孔より吸入し、それより食道に輸送するものに似たり、故に彼が小昆蟲たる子孑、コミヅムシ、キリウジ或ひは小魚類を捕へたる時には、顎齒に狹みたる儘、良々久しきを經て、そが躰を收縮し、始めて之を腹中に收むるなり。是は唯り此種のみに止まらず、ウスバカゲロフの幼蟲たるアリヂゴク或ひはクサカゲロフの幼蟲等また食を取るに此奇異の狀をなす。而してその蛹化の塲合には、土中に橢圓形の穴を造り、其內に入りて一定の期日を俟つに似たり、其大さは一寸二分內外にして、淡黃白色を呈し、羽化の前に至り始めて黑褐色に變ずるなり。

以上略述せしが如く、龍蝨は食肉性にして、昆蟲類或ひは小魚類を食殺するものなれバ、之を養魚家よりすれば、有數の害蟲として驅除せざる可からざるも、之を農業家より見れば、時に害蟲を食殺するの利あるを以て、有益蟲として愛護すべき價値あるものなり、されば之が害益の繫がる所ろは、唯其人の見解如何にあるのみ、而して此科に屬する昆蟲は何れも同性を有するものなれば、序でに其種類と解說の梗概とを揭げ置かんとす。

一、コガタノゲンゴラウ(Cybister tripunctatus,)　前種よりは小形にして、色澤は同じ、最とも普通のものとす。

二、クロ、ゲンゴラウ(Cybister brevis.)　コガタ種に似て黑色を呈す、珍種とす。(新稱)
三、ゲンゴラウ、モドキ(Dytiscus sharpi.)　ゲンゴラウに似て、翅鞘上には明かに刻まれたる凹縱條あり。
四、キスヂ、ゲンゴラウ(Hydaticus Bowringi.)　大さ四分五厘内外あり、翅鞘上には二個の黄点と、四條の縱條あり。
五、コ、キスヂ、ゲンゴラウ(Hydaticus sp?.)　前種に酷似するも、二個の黄点を有せず。
六、マダラ、ゲンゴラウ(Eretes sticticus.)　大さ五分内外あり、黃綠灰色にして黑褐斑を有す。
七、セ、グロ、ゲンゴラウ(Hydaticus sp?.)　大さ五分五厘内外あり、前胸帶は赤色にて翅鞘上に淡黑の雲紋を彩どる。(新稱)
八、コ、シマ、ゲンゴラウ(Hydaticus grammicus.)　大さ三分五厘許り、翅鞘には黃褐色の縱條あり。
九、トビイロ、ゲンゴラウ(Rhantus pulverosus.)　大さ四分左右にして、翅鞘には縱條なく、褐色を呈せり。
十、コ、グロ、ゲンゴラウ(Agabus conspicuus.)　大さ三分五厘位ゐ、全躰黑褐色を呈す。(新稱)
十一、カメノコ、ゲンゴラウ(Hyphydrus japonicus.)　大さ一分五厘内外、黃褐色にして龜甲狀の黑斑あり。
十二、ナガ、キベリ、ゲンゴラウ(Rhantus?.)　トビイロ種に似て、躰は細く、黃褐色の周緣あり。(新稱)
十三、マル、キベリ、ゲンゴラウ(Agabus sp?.)　大さ四分五厘許り、圓形にして暗褐色を呈す、周緣は前者に同じ。(新稱)

右の外十餘種あれども、通常關係する所ろ少なければ之を省く。要するに、龍蝨は到るところ之を獲易きを以て、昆蟲を研究するには屈強の材料に資すべきのみか、一たび其性質、其搆成、其益害等を講明したらんには、他を研究する上に、多大の利益を來たす可きものあるを疑はず。

編者云ふ、龍蝨は本邦固有の產なる可けれど、古來和漢の本草書、字書類に之が記載を缺くを以て、其詳細を知るに由なし。小野蘭山氏の如きすら、五雜俎を引てゲンゴロは龍蝨の屬なりとのみ誌し、水谷豐文氏は龍蝨てふ漢名をデンゴロウ又はアブラヤノオカカと訓じ置くるに止めり、正しき名稱の無きと記載の少なきとは、これにても知らる可し。去れば多くの方言ありてオカッパ、ガムシ、ガメムシ、ゴキアラヒムシ、ドンガメムシ、スッポンムシとも稱する地方あり、普通にはゲンゴラウムシと云ふを略してゲンゴラウとのみ呼べり。又信州羽州の如き海魚に乏しき地方に抵れば、之を火に炙ぶり甘鹹の諸味を加へて、食膳に上すに、香氣滋味ともに芳烈にして頗ぶる美肉なりとて、今に賞用するとか。斯く有効無毒のものを、本草書等に省きしは何故なるにや、甚はだ疑はしき次第なり。本文には此等の記事無きを以て、補足かた〴〵爰に附記して、博識の考定に俟つ。

新年梅

東宮御歌

あらたまの年の始の
梅の花見るわれさへ
にほゝ笑まれつゝ。

◎イラムシの繭と柳のタマバヘとの話

名和昆蟲研究所長　名　和　靖　講演

私は唯今より、イラムシの繭と柳の球蠅の咄を致さうと思ひますが、話に順序が無くては面白くありませんから、先づ第一にイラムシ、次はタマバヘと、斯ういふ様に致します。

扨イラムシは御承知の通り、鱗翅類の蠶蛾科に屬するもので、地方に依ッては、或ひはオコゼとも、シバムシとも、ハンキャウジ抔とも申しますが、漢名は澤山ありまして、古くから本草書にも出て藥品とされた昆蟲であります。昆蟲學上では羅甸語で Monem blavescens, But. と申して居ります。一躰此蟲は親蟲になると、餘り人に目を注けられませんが、併し幼蟲時代と蛹の時には誰にも能く知られて居るのであります。即はち幼蟲は柿の木、棗の木其他の果樹に居るものですから、小兒などが手を刺されまして、泣騒ぐ事もあり、又その蛹の時代は梅や李にまで多く附てありまするので、園庭を掃除する老人までが之を見附けると云ふ風で、昔しから解ッては居ッたが、惜ひ事には害蟲として之を驅除されて無くあッた。處が此幼蟲は中々の惡るもので、朴にも棫にも大害を與へる………柿と棗は勿論でも。斯様にして幼蟲は植物を害し、早や滿腹と云ふ頃になると、今度は色々の樹の枝に這上りて其繭を作るのである。繭と云ふと蠶のものの様に、如何にも有用品の彼の如くに聞へるが、決して左様な物ではありませんで、冬春間の潜伏處に過ぎない、それも堅く樹枝に附けるのであるから、古人は之を繭とは云はずに、唯巣と計りいふて居る。

イラムシの繭は正しく言へばスズメノツボと云ふ名で、方言では雀の枕、雀の酒壺、雀のタゴ抔などゝも申しますが、是は如何にも雀の卵に似て居るより名づけられたものであッて、支那でも同様に雀甕とか、雀兒飯甕とかと書いてある、併し眞に雀が之を酒道具としたり、眠る時の枕にするとは信じられて居ぶ

ぬ、即はち蛄蟖殻、蛄蟖房などと云ふてあるのを見ますと、矢張イラムシの巣とは認めてあッたに違ひが無い、それに此繭の中に居る幼蟲又は蛹を小鳥が好んで喰ふものでありますから、自然雀の何々などゝ云ふ名に成ッたのだらうと思はれます。それは措きまして、此繭と申すものは、初めから斯様に堅いものではありません、これの作りたては、全く柔かなものでありますが、追々乾燥すると緊縮して第一圖のやうなものとなるのである、何故かと云ふと、初めは蠶が繭を作るやうに、口から二本の細絲を吐出して、其躰を覆ひながら段々厚くするものであるから、決して堅い筈の道理がない。この繭はどンな必要があるかと申すと、是は蛹期の前後に外敵を防ぎ乍ら、安全に其身を保護する金城鉄壁でありますから、イラムシに取ッては、實に種族蕃殖上の必要機關である。然らばイラムシは如何なる順序で以て其生涯を送るかと申せば、昨今の如き寒い間は巧みにも半蛹の形……實は見るも嫌な奇妙な幼蟲の形を致して、此繭の中に休眠して居りまして、大概この六七月頃に至りますると、全たくの蛹となり、程なく翅を生じまして、親蟲即はち蛾の形となり、繭を破ッて外に出るのであるが、親蟲となると、生殖作用を行ひまして卵を産附ける、其れから孵化したものは、柿や棗の葉などを喰害する黄色い毛蟲……處々に黒い毛の生へてある幼蟲となり、こゝに植物の葉を害し乍ら、段々日數を經つ間に老熟して、それがまた繭を作るのである、即はち一年に一度しか發生致しませんもので、其の手を刺れてア、痛たと叫びまするのは、丁度幼蟲時代の秋の末頃、又能く鳴る笛であると申して小兒が翫弄物と致すのは、蛹が蛾となッた後であるから、なンでも夏の末、秋の初めかたであります。

イラムシの繭の圖（第一圖）

右はイラムシの一生涯の概略でありますが、此繭を澤山取ッて置くと（僅か五六寸の枝でも、數十個附てあるのもある）中から親蟲ならぬ、蠅が飛出すことがある……蠶の蛆蠅に能く似た蠅が、一つの繭から一疋づゝ出て來る事がある。是は意外と思ひまして能く調べて見ると、何も不思議な事は無い、すなはち寄生蠅と云ふものであッて、イラムシが、まアだ幼蟲である頃に、突然やッて參ッて、其食葉に産卵（？）したのが追々イラムシの躰内に孵化、化蛹と云ふ二つの時代を經過して、遂に其宿主を斃して飛出すのである。イラムシの爲めには大敵蟲でありますけれども、之を自然に驅除する効がありますから、人

間の眼より見ますと、如何にも有益蟲であります。イラムシが鋭利の武器を以て其身を保護するに關ふず、往々斯る敵蟲の爲に敗北を來たす事があるとは、自然界の妙理實に不思議では有ませんか。ところで、イラムシは其の幼蟲時代には、躰面に毒ある針を裝ふて置いて、鳥の害を防ぎ又人の近づくのを許さん樣に致し、老熟すると前に申しました繭を作ッて籠城、凌寒兩つながら成し遂げますが、彼の柔弱き親蟲即はち蛾と爲ッてからは、如何にして此堅い卵を破ッて外へ出るかと云ふ事が、定めて疑問の一つでありませう、是れには又た不思議な事があるのであります。其れと云ふのは、此蟲には本能と云ふものがありまして、誰に教はッたと云ふ事が無くとも、此堅固な城郭を破るの術を知ッて居るのである。それは如何するのかと云ふと、此本能の作用で以て、繭を作ッた時に、内部から嚙切ッて置いて、成蟲となッて飛出すにも聊さか心配の無いやうに、豫じめ備へて置くのであるから、イザと云ふ場合には、少し推しさへすれば容易に開ける譯である。若し斯う致さんと最早、出口を失ふたものであるから、美ン事その中に在ッて討死を遂げざるを得ないが、そこは造化の妙工で少しも差支へを起さぬ仕掛となッて居ます。論より證據、繭の下端を破り幼蟲を引出して、内部から伺ふと明かに第二圖の(ロ)の如き形をなしてあるが、其局部を何か鉛筆でも以ッて輕く壓すと、容易く規則正しい圓形の蓋が取れて、親蟲の通路が開けること恰かも同圖の(イ)の如くになり、此繭を保護して置くと、秋の初めには(ハ)の如き蛾となッて蕃殖の本を作るのである。彼と云ひ此と云ひ、その化育の理の面白いのには、實に驚くの外はありません。然るに前にも申しました通り、この繭は昨今色々の樹木に附てありますから、餘り月日の經たん間に出來得るだけ取りまして、秋後の大害を除くが肝要である、且つは學理研究の好材料ともなると思ひます。特に繭の形が可愛らしくて、何處にでも澤山あるものであるから、小學生徒に理科思想を注入する場合、又は昆蟲學を知らしむるの端緒としては、必らず適當なものと存じます。處でこの物は偶々高い處にもありますから、斯ういふ際には驅除が出來んかと云ふと、左樣では無い、竹竿の尖端に布片を少し纏ひ附けて、これに石炭油を浸し、それを以て

イラムシの圖(第二圖)

(イ)は羽化の際の繭の上端を開ける狀
(ロ)は羽化の際開くべき圓形の痕跡を内部より見たる放大圖
(ハ)は成蟲(雌蛾)

繭に塗り附けるが宜い。一度右樣にさへ致して置くと、中に居る幼蟲は發育を遂げる譯に參らんから、則はち驅除したと同じ効能がある、但し取ッて標本とする譯には參りません。繭の長徑は凡そ五六分の間で、横徑は三四分の間で其地色は淺黑でありますが、縱に白紋を裝ふて居る。これを作る幼蟲は長さが七八分もありまして、形は平たく、黄色で處々に黑い集合刺毛と云ふものを生やして居りますが、親蟲になると一躰に褐色で、前翅には少づゝ許りの斑點があります。イラムシの加害を除くには、先づこの親蟲に注意せんければ成らんのであるが、大概は平生餘り心に掛けんで置て、被害甚はだしくなると俄かに騷ぎ出すことは、去る廿八年の實例でも解かる。又幼蟲にはイラムシと云ふ名を附けて、恐がッて居るに關はらず、其親たる蛾には、名が附て居らんのを見ても、此間の消息は察せらるゝ。兎に角に既に蛾となり又幼蟲となると、捕獲も驅除も共に困難であるから、繭の時代に絶滅さするが一番に宜しい。それには唯今のやうな農閑期が適當と思ふ、普通の農家の損益は暫らく措き、岐阜縣その他柿の名產地などに成りますと、正式に之を驅除するの價ひがあると信じます（本號雜報欄、昆蟲月令の條參看）。次は柳の球蠅の御話に移りませう。

（未完）

新年梅
東宮妃御歌
あたらしき年のほぎ言いひかはす袖にもかほる梅の初はな。

◎本邦昆蟲研究家叢話　（其二）

古奥　青蓑白笠の人

◎稻生若水先生の卓識　先生名は宣義、字は彰信、通稱を正助と云ひ、若水を以て其號とせり。天資穎敏にして氣節を尙とぶ、博通宏覽、眼識自づから一世に卓絶するものありき。父の名は正治、號を恒軒といふ、大阪の人なり、少壯貧窮の間に、修業力學の功を積み、竟に宮津の領主永井侯の侍醫に擢用せられ、後其藩學の敎授をも兼ぬ。母は河瀨氏、名は春子、夙に聰慧貞順の譽れ高く、又畧ぼ書史に通せり、内助の功多く、本邦賢婦人の一に稱せらる。先生は實にこの双璧の間に呱々の聲を揚げしが、初めは家庭の敎養をうけ、長ずるに迨びて、醇儒木下順庵氏に、聖賢の道を問はれきと云ふ。

或日のこと、先生その庭園に於て、竹根の石化せるものあるを發見し、端なくも之を科學的に究明して、其原理を探らんとの念を發したり。これぞ斯學研鑽の端緒にして、また立志の起因なる。この時掌上一塊の石片を凝視せる少年をば、人誰か、物産學の開祖と崇敬せらるる、偉人若水先生の前身なりと知り得べき。會々福山德潤氏、長崎より來り、徒弟を聚めて本草を講ずと聞き、乃はち就て之を師とし事へぬ。未だ幾年ならざるに、早くも造詣する所ろあり、雋秀の名漸やく遠邇に傳はるに至りて、遂に名儒新井白石氏の知遇をうけ、その將軍家に進講する毎に、通解の用に供ふべき動植庶物を採集し、及び之が解説の記述をも囑せられにき。蓋し白石氏膺揚の後、嚴有公の爲めに、時々詩經を江戸櫻田邸に講ずることありしに、確實の名物圖なきに窮しみて、事のこゝに及びしなり。是れ先生が四十歳前後の事と聞へし。先生その請に應じて、これより洽ねく實物を山海に捜索し、又爲めに詩經小識一篇を著はせり。木村巽齋氏が毛詩品物圖攷の跋に、梁有毛詩圖三卷、唐有毛詩草木蟲魚圖二十卷、宋有馬和之毛詩圖、久既失其傳焉、吾日本嘗有稻若水先生者、自唱多識之學、始有小識之撰、其徒相續有纂述云々と敍したるによりて之を推せば、此著や、邦人が解釋を加へたる、幾多の詩經名物書中、最古に且つ最優に位ゐするものなる可し。

時に昇平日已に久しく、文物蔚然として勃興し、貝原益軒、岡本一抱、中村惕齋、寺島杏林等の諸大家、各々一方に雄峙して本草を講明し、兩都の鴻儒碩學また經書の名物を解決するに努めたり。然かも貝原氏の該博を以てすら、其神髓を得るに由なく、時に或ひは疑義を先生に質すことありき、況して其他をや。當時、學殖と名聲と兩つながら、海内に匹儔する者なかりしは、此一事以て測り知るに難からじ。

己にして先生、斯學の包轄せる所ろ、甚はだ濶大に失するを看破し、本草家は主はら物類を聚收し、品名を鑒識し及び外體を攻究するに止め、其主用と効能の如きは、宜しく擧げて之を醫家の手に移すべきものなる事を主張し、始めて物産學を唱道しぬ。蓋し中古以來、本草家は職として禽獸蟲魚、金石草木の分類命名より、之が氣味能毒の鑒定に從事せしが故に、動もすれば輙はち散漫に陷いるの弊あり、此を以て辨物をば、全たく醫方より分離して、之を專攻精研せしめんとするにあるなり。是れ獨り博物學を特立し、昆蟲其他の研究を、醫家獨占の覊絆より脱出せしめたるのみか、また實に本邦の學術界に、革新の動機を與へたる壯擧なりき。これより先、北國の加賀藩、熾んに文教を興し、民業の發達に努む。寛文中、向井靈蘭氏の如き名器を其國に延きて、意見を徴し、又これに封内物産の調査を託して、施政

の參考に資する等、頗ぶる治績の觀るべきものあり。是に至りて英主綱紀侯、先生を禮聘して儒員となし、祿三百石を賜はる、事は元祿の末年にありき。己にして侯その篤學を憐れみ、祿を以て公暇を賜ひ、家居して庶物類纂一千卷を編輯すべきの命あり、且つ別に毎年金五十兩を給して、その購書の料に充てしむ。先生深く侯の知恩に感奮し、内外の典籍を集收するもの約そ十二萬卷、中に就て選擇を加へ、拮据二十年を經て、その九類三百六十二卷の正副二本を手寫し畢れり。惜ひ哉、未だ宿志の央をも遂げざるに、正德五年七月、溘然として京都北小路の家に歿しぬ。其生明曆元年を去ること、六十有一。

先生の訃の傳はるや、侯痛くこれを悼み、後四年、その正本を柳營に獻せり。時に有德公頗ぶる博物と究理の癖あり、覽てまた之を惜まれ、乃はち門人丹羽正機氏に、先師の遺志を繼ぎて增修に任すべきの旨を命じ、更に内山覺中氏を加賀より徵して、之が補助たらしむ。當時相傳へて、學者無前の榮譽となしたりき。業を享保十四年に起し、六年の星霜を閱して二十年に至り、その書完たく成る、都て十七類、六百三十八卷あり、稱して續篇といふ。後年、三千四百種の品物を綜攬せる、博物學無二の寶典として、深く祕府に藏められ、彼の古稀の老翁小野蘭山氏をして、垂涎措くこと能はぞ、前後二回自寫の勞に當らしめたるは、即はちこの兩書なり。

稻若水

初め先生の庶物類纂々輯の大業を起すや、新井白石氏聽て嘆賞すらく、年未だ五十に滿たずして、千卷の書を著はす者は、古今未だ其比あるを聞かず、と其當時に推重せられしこと概むね斯くの如し、而して先生の著述は、唯りこれに止まらざりき。曰く左傳名物考、曰く本草圖翼、曰く物產目錄、曰く本草別集、曰く採藥獨斷、曰く本草綱目指南、曰く炮炙全書、擧げ來れば、凡そ十指にも餘りぬべし。其他、弱冠の頃ほひ、家嚴恒軒翁の遺著「蠡斯草」を開板して、孝道を明らかにせしが如き、後進の便益に万曆版の二十一史を飜刻せんとて、之に訓讀を施こすの煩らひを辭せざりしが如き、本邦に始めて孝女傳を公行して、一貧女の卓行偉蹟を後昆に傳へたるが如き、韓使の來聘する每に、必らず其客館に訪ふて、物產を質問したるが如き、時珍の本草綱目に校正を加へて、學者の閱讀に便にしたるが如きは、皆一として其異常の風采を想見せしむるの標榜たらざるは莫し。嗚呼、先生の儀範を啓示せしより、悠々已に二百年、而して今になほ學術界の巨宗として、人の之を仰慕する所以のものは、豈にそれ偶然ならんや。

嘗て聞けることあり、近世加賀藩ょ博物家を輩出し、其支藩富山領に、藥物を多産するに至れるは、全たく先生と向井氏の餘澤なりと。想ふょ、其門下より、松岡恕庵、丹羽正機等有爲の傑才を出し、又學派を殊にせる丹波元簡氏をして、我邦前輩、有專以辨物産別爲一家者、乃藥性主療、付之于醫家、置而不講、如若水稻氏、最稱覽覽君子、著庶物類纂七百卷と讃嘆せしめたる先生其人の如きは、所謂其名を慕ひ其人を思はしむるに足れる者歟。

按ずるに、庶物類纂に補篇と稱するもの五十四卷あり。こは延享二年の冬に着手し、四年十月に終業せし書にて、正續兩篇に遺れる、百八十餘條を拾收せしものなり。是また有德公の命を奉じて、丹羽氏等の纂修に係れど、その脱稿は、公が退職の後にもあり、且つ直接には先生の傳記に關係なければ、故らに本文には之を缺けり。又先生が木下氏の訓陶をうけたりとの說は、多少疑はしき節あるも、後に前田家の儒員となりし緣故といひ、木門の巨擘新井氏との交際と云ひ、同門五先生の一たる室鳩巢氏に、庶物類纂の序を囑したる關係と云ひ、如何にもそれかと思はるゝ事實多ければ、これに從へり。但諸書概むね、先生を以て江戸の人となし置けども、未だ確證を得ざるが故に採らず。覽者怪しむ勿らんことを。

◎昆蟲漫筆（其二）

第三回全國害蟲驅除講習修業生　靜岡縣　神村直三郎

嘉保二年八月十二日、殿上のをのこ共、嵯峨野ょ向つて、蟲を取つて奉るべきよし、みことのりありてむらごの糸にて、かけたる蟲の籠を下されたりければ、貫首以下みな、左右馬寮の御馬にのりて向ひける、藏人辨時範、馬の上ょて題を奉りけり、野徑尋蟲とぞ侍りける、野中ょいたりて、僮僕をちらして蟲をばとらせけり、十餘町ばかりは、各馬よりをり歩行せられけり、ゆふべょ及んで蟲をとりて籠ょ入て、内裏へかへり參り、萩女郎花などをぞ籠にはうざりたりけり、中宮の御方へ參らせて後、殿上にて盃酌朗詠など有けり、歌は宮の御方ょては講ぜられける、簾中よりもいだされたりける、やさしかりける事なり。（古今著聞集）

或る田舍人、京のぼりして侍りけるが、宿にて、ひなたぼこりして居たりけるょ、首のかゆかりけるを、さぐりたれば、大きなる蝨のくひつきたりけるなり、それを何となくて、腰刀をぬきて柱を少しけづりかけて、其中ょへしこめて、はたらかぬやうに押し覆ひてげり、さて此ぬし田舍へ下りぬ、次の年のぼりて又此宿にとゞまりぬ、ありし折の柱を見て、扨も此中ょへし入れし蝨如何なりぬらんと、覺束なく

て、けづりかけたるところを引あけて見れば、蝨のみもなくて、やせがれて未だ有り、死またるゝと見れば猶はたふきけり、ふしぎに覺えて己がかいなに置きて見れば、はたふきて、かいなよ喰ひつきぬ、いとかゆく覺えけれども、いまだ生たるむざんさよ、事のやう見んとて、猶くはせをりける程に、次第に喰ひて身あかみける折、拂ひすててげり、其の這ひたる跡あさましくかゆくて、かき居たりける程に、やがてはれて、いく程もなく夥しき瘡になりよけり、とかく療治すれども叶はず、つひにそれを煩ひて死にけり、蝨は下﨟などは、なべてみなもたれども、いつかは其喰ひたる跡かゝることある、是は去年よりへしつめられて、過したる思ひをとりて斯く侍りけるよや、あからさまにも、あとなき事をばすまじき事なり。(同上)

中遠には昆蟲よつきての迷信がまことよ多く、アゲハテフ、カラスアゲハ、ヒオドシテフ、ルリタテハなどの蝶を捕ふれば瘧疾を振ふなど〻稱へて恐れて居る、故にこれらの蝶には、一般よオコリテフ〱と名がついてゐます、又コオヒムシは、其雌蟲が產氣づいて、產所を造つてと雄蟲に賴むも、雄蟲は橫着ものにて容易よ造らず、其うちよ今よも產れんとするに臨んで、雌蟲迫れども平然として己れの背中へでも產めヤレ、と云ひしかば、去らばと云ふので雄蟲の背中へ產卵した、故に彼の卵を負ふて居るは雄蟲なりと言ひあへり、又イボタ蟲の幼蟲が胃病に効ありとて、比較的多數の幼蟲も、發生間もなく取り去らるゝあり、又石蠶の一種の八分位ゐより一寸位ゐの繭を營む幼蟲の、黑くしていまだ繭の準備もなきものが、水底を這ひ回り居るをセムシと稱へ、これは小兒疳の病の妙藥なりとて用ゐるものあり、又足長蜂の巢は、婦人子宮病の妙藥なりとて、其巢をたづねて取る、益蟲保護上これらはたゞおけぬことなりかし。

昆蟲世界編者云ふ。選蟲の儀は禁秘抄、公事根源にも嘉保二年より始まるとあれば、著聞集の說正しかるべし、但神村氏のものは寫本と見えて、假名遣ひを誤まり原文と違ふところ少なからず、讀者の注意を望む。次に蝶を捕ふれば瘧疾を病むとの迷信は、必らずしも中遠地方に限れるに非ず、是は頗ぶる古くより言傳へたる事にて、堤中納言物語にも出でたる說なり。又疣取蟲その他を藥用に供するを以て迷信の一に加へたるは當らず、本綱及び外臺秘要方などにも見えたる治方にて、漢醫の說の今に遺れるなり、混ずべきに非ずと思はる。參考までに茲に附記す。

◎窒素肥料としての金龜子

第七回全國害蟲驅除講習修業生　石川縣　高多信久

金龜子は葡萄その他荳科植物に發生する害蟲にして、その加害時にまた甚だし、故に之が驅除に勉むるも、年々その蕃殖旺盛にして容易に撲滅を期し難く、爲めに夏秋間の損失少なからざるを見る。然るに明治廿五年に農科大學に於て執行せる金龜子分拆の結果を見るに、干鰯、搾滓に比し燐酸の量は劣れるも、窒素分はこれと殆んど同量なるを以て、余は金龜子驅除を勵行すると丶もに、農家の尊重すべき窒素肥料の原料に利用せんことを望むや切なり。尤とも之が利用につきては、夙に船津傳次平翁も到處に唱道せられきと云へば、これを以て新説とは云はざるも、何人と雖ども左記の分拆比較表を一見せば、只道途に委棄すべからざる貴重物たるを首肯し得べしと信ず。

・含有量比較表

		窒素	燐酸
金龜子	（少しく乾燥のもの）百分中、	八、七	一、四
干鰯	百分中、	七、五	三、七
搾滓	百分中、	九、七	四、〇

さて金龜子驅除の簡便法を聞くに、甲州地方の如き葡萄栽培地に於ては、乾露の未だ乾かざるに、笊に米糠を盛りて之を樹下に吊し置き、不意に打擊を加へて蟲を笊中に受落せば、軈て蟲は笊底の米糠内に潜匿するを以て、これを熱湯にて殺し、その儘日光にて乾固せしめ、後貯藏器に入れて蓄はひ、施用に際して粗碎するを良とすと云ふ、又船津翁の説に依れば、己に之を殺したる後は、直ちに肥料壺に投入腐熟せしむるか、碎きて之に灰を加へて施用すとも云へり。兎に角、斯くの如くして肥料に供用するものなるが、去りとて之を獲んが爲めに、作物の被害を顧りみざるは愚の極なるも、万一發生加害の際には、直ちに甲州流か又は方形捕蟲器か鉄葉製の捕蟲器等を用ゐて驅殺し、後これを集めて肥料となさば、一擧兩得にして廢物利用の旨意にも適ふものなる可し、篤農の士幸ひに之を實地に試ろみられよ。

◎蟲螽の卵塊の所在に就て

第七回全國害蟲驅除講習修業生　愛媛縣　矢野延能

イナゴの害を豫防するに、五月頃田面に水を湛へて打返し、水上に浮漂せる卵塊を掬ひ取りて、偉効を

奏せりとは、昆蟲世界第五十號の紙上にある、岐阜縣害蟲驅除講習生中村氏の實驗談なり。然るに從來學說にては、畦畔下に伏在するものとせしに、前說は之に反するより少しく疑念を生じ、去歲十一月その交尾期のものを飼育試驗なしたるに、土中に產卵せしことは毫も學說に違はざりき。其後、昆蟲研究として縣下松山地方に出張の途、周桑郡石根村の紫雲英田に於て、稻株の三化生螟蟲を調査せしに、料らずもイナゴの卵塊の、少しく押開ける形をなせる刈株中に存在するを發見し、數多採集せしが、注意するに隨うて諸處に之を見るに至りたるも、却つて畦畔には稀少なるを覺ゆ、是に於てか、彼の中村氏の說の妥當なるを確かめたり。それ斯く畦畔にも、刈株にも產卵するを知れるも、兩者何れか多きやに至りては未だ明白ならず、而して之が論定は、向後該蟲の加害多き地方の讀者が、紫雲英または雜草の未だ茂生せざるに先だちて、精密の比較調査を行ふたる結果に俟つの外なきなり、若しこの調査にして成功せられんか、必らずや實地に適切なる驅除方法を案出せらるゝに至らん、應用昆蟲學上決して輕視すべきものにはあらざるなり。尙は余が目擊する所ろに依れば、卵塊は稻作後に耕耡せざる田の畦畔に近き處、若くは刈株より發芽の蘖苗を、イナゴの蝕害せりと覺しき稻株に多きが如ければ、此說の當れりや否やをも、併せて調査を遂げられんことを望む。

昨年の今月、全國農事會五ヶ條の希望要件を公けにし、名和昆蟲研究所の事を其一に加ふ。

◎螟蟲驅防に對する實業大會の決議　福岡縣遠賀郡　嶺要一郎

去歲十一月一日より三日間、佐賀縣佐賀市に開設せる吾が九州區實業大會に於ては、福岡縣より提出せる左の害蟲問題を可決し、なほ協議會を開きて、次項をも協定せり。

一、螟蟲の被害甚しく、町村費を投じ、尙郡縣の力を借り、驅除し能はざるときは、國庫より補助せら

れんことを其筋へ建議する事。但本案決定の上は、被害地當局者及縣農會代表者の協議會を主催地に開催すること。

理由　今や螟蟲の被害年毎に猖獗を逞ふし、從來の驅除豫防法を以てするも、到底之が撲滅を期すべからざるは何人も能く知る所なり、今日に於て根本的驅除を勵行することなくんば遂に救ふべからざるに至らん、蓋し其被害は獨り福岡縣に止まらざるも、假に本縣に就て調査せんか、被害の最も甚きは八女、山門、三井、三潴、三池の五郡にして、其反別二萬六千九百九十七町歩餘にして、此被害の步合は二割、即九萬千七百八拾餘石は年々螟蟲の蝕害する所となれり、假に壹石拾圓とするときは九拾壹萬七千八百九拾八圓の多額に達せり、其他五郡にして之に要する町村費は、既往五ヶ年間平均壹ヶ年間四萬壹千三百九拾二圓にして、人夫も又壹ヶ年平均三拾萬千四拾五人に當れり、此人夫賃金を男女平均參拾錢とし九萬〇三百拾參圓に當り、合計百〇四萬九千六百三圓なりとす、豈に驚くべきの額にあらずや、然れども更に効果を收むることなく、年々其區域を增大ならしめんとす、由是觀之根本的驅除法即稻株掘採乃至稻藁燒却(若くは之に代はる方法)を實行するにあり、然して之に對する經費は何程を要すべきか、單に稻株掘採に就て推算するも、一反步三人とし一人三拾錢の賃金と假定するときは貳拾四萬二千九拾三圓に當り、到底町村の負擔に堪ゆる所にあらず、是を以て町村に於て根本的驅除を行ふ場合は、國庫及縣費より幾分の補助金を交付し、完全の奏効を計るべきは最も刻下の急務なるを信ず之れ本問題を提出する所以なり。但し根本的驅除を行ふに際しては、被害各縣當局者に於て充分の協議を遂げ、其方法並に程度等の均一を計るべきは勿論とす。

一、害蟲蔓延の地區に限り、狩獵法第七條の實施を九州各縣知事に建議する事。但其區域は當該縣農會に諮問せられたき事。(以上二件、福岡縣農會提出)

前項の決議に基き、仝月八日より仝市に於て熊本、福岡、長崎、佐賀四縣の害蟲驅除豫防協議會を開會せり、來會者は各縣より九名佐賀縣より八名都合十七名にして、其協議案は左の如し。

一、熊本、佐賀、長崎、福岡四縣内螟蟲蔓延最も甚しき區域に限り左の方法により特に根本的驅除豫防を實行する事。(一)稻株を掘取適當に殺蟲方法を行ふこと。(二)二化螟蟲多き部分にては稻藁を肥料とし、又は屋根葺草に用ふるを禁止し、且翌年三月以後に保存する稻藁に對し、嚴密に殺蟲方法を行ふこと。(三)畦畔路傍等の雜草は之を燒拂ふこと。(四)右三號の外苗代田及本田に於ける驅除豫防は各縣適宜の方法により之を行ふ事。

一、根本的驅除豫防施行の區域は各縣知事之を定め、其費用は町村郡縣より相當の補助を與ふる事。

一、根本的驅除豫防施行區域以外に於ける驅除豫防の方法は、從來の例に依り各縣適宜に之を行ふ事。

一、以上の事項は本會より四縣知事に建議し其實行を要求する事。

◎海津郡昆蟲研究會報告

第四回岐阜縣害蟲驅除修業生　伊藤佐太郎　中島正美

岐阜縣海津郡昆蟲研究會例會を、客年十二月一日を以て開會し、主として岐阜縣冬季昆蟲展覽會出品に關する件を討議せり、當日の出席者は左の如くなりき。（一月十一日附）

古田兼彌　西善太郎　近藤政齊　安藤登　大橋尊義
佐藤正雄　古川紋治　谷保太郎　伊藤佐太郎　中島正美
側島健次郎　藤本泰通　青木興正　山內虎治　伊藤信
水谷和安　寺倉万里　大橋慧逸　今津半次郎　大橋正祝
岡本友治　安藤則太郎　大野源太郎　原田種德　丹羽榮治郎
山田正純

次で同十四日を以て、郡內石津村大字太田の方面に向つて團躰採集を試みたり、當日採集せし蟲種は、概むねウリハムシ、二十八星瓢蟲、カハラバツタ、ヤニサシガメ、黃蝶、キンカメムシの類なりしが、其際同行をなせる會員は左記の如くなり。

安藤登　大橋尊義　佐藤正雄　古川紋治　中島正美
山田正純　伊藤佐太郎　谷保太郎　側島健次郎　山內虎治
岡本友治　鈴木平三　水谷和安　曾根太三郎　木村藤三郎

◎土佐產の蟲報（第二の一）

高知縣土佐郡　武內護文

○鱗翅類天蛾科　（一）エビガラスヾメ。（二）メンガタスヾメ。（三）スヾメ蛾。（四）セスヂスヾメ。（五）オホセスヂスヾメ。（六）ベニスヾメ。（七）オホスカシバ。（八）モヽスヾメ。以上數種中（一）は九月上旬より十月上中旬の頃に至る迄成蟲多く現はる、幼蟲は十一月中最も多く、到る所の甘藷園皆多少の害を被らざるなし。十二月に至りて大概皆蛹化す。（二）の成蟲の黃昏花際に飛來たるは、九月中を以て最も

多きを知る、幼蟲ハ到る所、茄子及び胡麻を害し、茄子を害するものは八月上旬多く老熟し、胡麻圃にあるものは此時尚ほ多く二三齢のものなり、余が昨三十四年中飼育せしは、八月上旬同一時ニ老熟し、九月上旬に至て既ニ蛾化せるものあり、又蛹狀を以て越冬せるものもありき。(三)は六月中旬成蟲の現はるゝを見る、而して山野ニ多くして人家近邊ニ少なし、是れ其土佐に於てハ、葡萄栽培の未だ盛ならざして、却て野生の葡萄多きに由るならん。(四)は六月より八月の間成蟲を見ること少からず、幼蟲は夏月中、其發育不同を以て到る所の芋畑を害せり。(五)は(四)と略ぼ經過を同ふし、亦發育頗る不同あり、山野及び人里ニ於て、人生有用の薯類を害せる大形の鳥蠋は蓋し此の幼蟲ならん。(六)は七八月中成蟲を見るも、其數極めて少し。(七)は六月七月の間、炎天花間ニ飛舞するもの甚だ多く、幼蟲は七月以降庭園及び山野に多し。(八)は五月中旬成蟲にて現はれ、七月中人里ニ飛來して桃葉に產卵するを目擊せりと雖とも、未だ其加害の甚しきを見ず。

其他(二)の外成蟲の鳴聲を發するものあり。(七)の外蜂形ニ擬するものあり、葡萄科、茜草科、薯蕷科等の諸植物には諸種の幼蟲を見るも、多くは余が未研究中のものなり、其中常春藤にある一種ニて、其幼蟲(成蟲は年二回發生す)の蝮蛇ニ擬形せるものは、昨年採集中ニ一行の驚歎せし所ありき。

○硝子蛾科　(一)コスカシバ。(二)ブダウスカシバ。此二種は、五月下旬山野に於て成蟲を捕獲したるも、未だ幼蟲、蛹等の經過を詳にせざ、此外一種頗ぶる奇形なるものあり。

○鹿子蛾科　(一)タケケムシ蛾。(二)カノコ蛾。(一)は諸種の竹葉を食害すること少からず。(二)は夏日山野ニて頗る多く成蟲を見る、昨年七月十一日余が居村の一老農、其桑葉ニ斑々產卵せるものを成蟲と共に捕へ來りて余に害否を問ふ、余は此蟲の桑樹の害蟲として知られたるものにあらずと雖とも、既ニ產卵せる以上は、幼蟲の加害することなきを保せざるを以て答へり。

○蝙蝠蛾科　クサギノシンクヒ蛾。此名稱習性は余は昆蟲世界第五十一號に於て、名和先生の解說ニ由りて初めて詳知したる所なりと雖とも、未だ其成蟲を發見せず、幼蟲は到る所の山野に臭梧桐を加害すること少なからず。

○燈蛾科　ヒメゴマダラ。此科に屬するものは、森林ニ於て數種の成蟲を見ると雖とも、未だ幼蟲の加害を詳にせず、獨り桑樹の害蟲として知られたるものは、ヒメゴマダラの最とも普通なるを見る。

○天蠶蛾科　（一）オホミヅアヲ蛾。（二）イボタ蛾。（三）クリムシノ蛾。（四）ヤマヽユ蛾。（一）は五月中、林間に於て屢々成蟲を見る。（二）は夏日、イボタ樹に於て稀に幼蟲を見る。（三）は北方山中クリ、ナラ、フシノキ等に加害すること少からざるを見る。（四）は到る所の檞樫樹に加害せり。此數種中眞に有効蟲としては、獨り（四）の稍や人生に利用せらるゝを知るのみ。

○蠶蛾科　（一）カレハ蛾。（二）マツケムシ蛾。（三）クハゴ。（一）は嘗て人里に見ず、却て山野に多し。（二）は到る所の松樹に其大害を被るを見る、幼蟲の儘越年し、冬季と雖とも、少しく温暖なれば則ち活動して食害せり。（三）は到る所の桑園に於て、年二回（或は年二回以上發生することあらん）の發生をなせり。

○避債蟲科　（一）ミノムシ。（二）ヒメミノムシ。ミノムシは余が昨年採集し來りて其羽化を試みたるもの二百頭以上、一も成蟲を得ずして無數の寄生蜂を出したるには一驚を喫したり、故に確かに一二の種別を知るを得ずと雖とも、仮に其蛹化せし者にして、被蓋の大さ一寸五分内外のものを（一）とし、一寸許の者を（二）として茲に之を記さんに、（一）は茶園に於ては其加害を見ること甚だ少しと雖とも、桑樹果樹には稍や多く、而して森林の建築材及び薪炭材木は概して其大害を被らざるなく、杉樫等の幼木の屢々枯死するに至るものあるを見る、又稀には薑をも害することあり、水畔の裝飾樹としては、柳楊も亦多少其食害を被れり。（二）は野生の禾本科植物に群生し、稀に來て稻麥を害せり、又桑樹に加害することも少からず。

○毒蛾科　（一）ドク蛾。（二）カシワノケムシ。（三）ハンノキケムシ。（四）キンケムシ。（一）は人里に培養せる樹木に於ては未だ之を見ずと雖とも、晩夏山野に於て其成蟲を獲るに難からず、想ふに土佐に在ては亦森林の一害蟲なり。（二）（三）は共に經過を同ふし、森林諸木に加害せり、昨年中余が飼育せるものは、七月上中旬に皆羽化し、野外に於て其產卵せるを見るは、七月下旬八月上旬に多かりき。（四）は年二回の發生を爲し、成蟲は五月下旬、十月上旬に多く現はるゝを知る、主に桑樹を害するも、野生の薔薇及び柳藤には敢て珍からず、冬季樹葉の枯落せる後に、蔬菜類を食害せることは屢々目擊する所なり。

◎岡山縣の蠶蛆驅除の令規

岡山縣岡山市　篠田春太

吾が岡山縣に於ける蠶蛆の害は、近年益々その度を高めたるが、縣當局者に於ても、其忽諸に附し難きを認められ、客年十一月を以て、次に記するが如き縣令、訓令及び諭告を發布し、なほ監督者の參考として、注意事項をも一般に告示せられぬ。

●蠁蛆驅除規則　（明治三十四年十一月七日、岡山縣令第百二十三號）

第一條　本令に於て蠶絲業に從事する者と稱するは、養蠶者、蠶種製造者、製絲業者及繭仲買業者、其他總て生繭の取扱、保存若は運搬をなす者を謂ふ。第二條　本令は毎年五月十日より八月二十日に至る期間に於て、飼育若は結繭する所の蠶兒及蠶繭に適用す。第三條　蠶絲業に從事する者は其取扱へる蠶兒に寄生し、及蠶繭より發生したる蠁蛆を驅除すべし。第四條　生繭を取扱ひ或は保存する者は繭架の下に蠁蛆を集捕するに足るべき受幕を設くるか、又は生繭を置く室の床面其他に、蠁蛆の逸出すべき隙間を存せざる樣設備を爲すべし。第五條　生繭を運搬する者は蠁蛆の逸出を防ぐに足るべき荷造を爲すべし。第六條　養蠶者は四齡以後の病蠶又は斃蠶を發見したるときは、之を液肥中に投入し沈溺せしむるか、又は熱湯を注ぎ若は燒殺すべし。第七條　官吏若は吏員を派遣し、蠶絲業に從事する者に就き蠁蛆驅除の實況を臨檢せしむることあるべし、此場合に於ては當業者は其臨檢を拒むことを得ず。前項の官吏、吏員に於て第四條若は第五條の設備不完全なりと認め、又は第六條の取扱不適當なりと認めたるときは、其設備又は取扱の變更を命ずることを得。第八條　第三條、第四條、第五條及第六條の規定に違背し又は第七條第一項の臨檢を拒み若は同條第二項の命令に從はざる者は壹圓九拾五錢以下の科料に處す。

●岡山縣諭告第八號　（訓令第八十六號は略之）

家蠶に寄生する蠁蛆の害は近年益々猖獗を極め蠶業上被むる所の損害頗る多大なりとす、而して多數蠶業家中には蛆害を以て獨り蠶種製造上の障害なりとし、製絲用養蠶家には損害を及ぼさゞるものゝ如く思惟せる者少からず、然れども蛆害に罹りたる蠶兒は種々の病蠶となりて斃れ、或は極めて不良なる繭を作る等、收繭上の損害敢て製種上の損害に讓らざるなり、此蛆たる他の蠶病の原因をなす微生物と異り、躰軀大形にして何人にも容易に認め得べく、當業者にして能く一致共同して驅除に盡瘁せんか、其蔓延を防遏し、途に其の撲滅を見るに至らしむる亦難きに非ざるなり、是れ今回縣令第百二十三號を發し、諸種の方面より總て春夏季飼育の蠶兒及蠶繭より生じたる蠁蛆を殺盡すべきを命したる所以なり、業に蠶絲に從ふ者は宜しく此趣旨を諒し蠁蛆の絶滅を期すべし。

◎害蟲驅除豫防規約

愛媛縣興居島果樹協會理事　田村晴太郎

愛媛縣温泉郡興居島村果樹栽培家の結合を以て、明治三十三年より成立せる興居島果樹協會は、同村果物の改善發達を計るを以て目的とし、其綱領中に於て別に害蟲驅除豫防規約なるものを設け、毎年之を實行し、目下重なる害蟲に就き驅除期日を定めて驅除に從事せしめ、尙視察委員を派して果園を巡視せしめつゝあり、今害蟲驅除豫防規約を報ずれば左の如し。

一、本會に害蟲視察委員を置き、毎年春期及落葉期間に果園を巡視せしむ〇二、他地方より苗木を購入したる時は本會の檢査を受け、害蟲附着したる時は、十分の驅除を行ひたる後に非ざれば移植することを得ず、但苗木を輸出する時も檢査を受くることを亦同じ〇三、害蟲發生の徵候ある時は、本會之を豫報し、又發生したる時は之を會員に報告し、其驅除を嚴行するに適宜の驅除期日を定む〇四、平素注意して單獨に驅除すべきは勿論、本會より報告せし驅除期日以內には必ず驅除すへし〇五、右期日以內に驅除を爲さずして、本會より督促するも尙之を怠る時は、本會より人夫を雇入れ驅除せしむ、其費用は該果園持主の負擔とす〇六、會員は驅除を怠れる果園あれば、本會に報告するの義務あるものとす〇七、會員外の果園にて驅除を怠れる者へは、本會又は會員之が驅除を奬勵すべし。

◎群馬縣多野郡の昆蟲方言

第三回全國害蟲驅除講習修業生　群馬縣　山田皆藏

當地方は古來昆蟲の事に暗く、多くは之に留意せざるの傾向ありて、蟲名の一定せざるは勿論、假し方言を知るも、普通名稱を知らざるを以て、意の如く之を報道し難し、去れど余が高山社蠶業學校に於て修學の餘暇に、調査せしものあれば、其中より主要なるもの丶みを左に錄して、斯學硏究の一助に供す。

蠶をオコサマ●蛹をニシヒガシ●蛾をテフ（蠶種產卵の事を蝶つけと云ふ）●トノサマバッタを總てハタオリギッ●キリ〴〵スをギッ●蜻蛉をドンプ●大なる蜻蛉を大山ドンプ●赤卒を盆樣ドンプ（八月に多し、小兒もし之を捕ふる時は、制して此ドンプを殺す時は其家に盆サマ來らずと云ふが如し）●ユリハナスヒ類をカッパ蟲●蝶類をテフテフバッコウ●褄黑蝶をスマグロテフ●獨角仙の幼蟲をノケサ●コホロギを加藤サセ●足長蜂をアシツルシ●花虻を御經讀蜂●クマバチをクマン蜂（外にダルマバチ、ヤラウバチ、黃尻蜂と呼ぶ種類もあり）●鳳蝶を鎌倉蝶（飛來ることあれば捕へて疔腫の藥となす）●栗蟲蛾をシラガタラウ、モヅツクリ、シラガタイフ●雀甕をスズメノアイゴウ●松蟲をチンチロリン●寒蟬を土用蟬、ジイ〳〵、田植蟬●馬蟬をミンミン、栗蒔蟬●ヒグラシをカナカナゼミ●枝尺蠖をビヤムシ●野蠶をノラゴ●龍蝨をセキレイ蟲●鈴蟲をリンリンムシ●葉捲蟲をハマクヒムシ●蟻をアリンドウ●瓢蟲をイチゴ●七星瓢蟲をクロナナムシ●ミヅスマシをシウトメ●蟷螂をハラタチヂイ、ハラタチババア●螵蛸をカラスノキンタマ●蚊をブンブウ●山繭をヤマンメイ●家蠅をヘイ●蚤を赤馬●蝨を觀音樣●牛蠅をウシンベイ●天鵞絨釣虻を御天狗虻●シホヤアブをショーアブ●キリウジカガンボをアシオキムシ●天牛をキイ〳〵ムシ、カミキリムシ●コメツキムシをオシンムシ、ムギツキムシオシンムギツケ●ホタルをホウタロ●ツチハンメウをニハムシオバケ●ガメムシ類をカッパムシ●行夜をワックサ、ヘッピリムシ、ショロムシ●アブラセミをエイギリ〳〵●ツクツクボウシを彼岸蟬●嚙蟲をガシヤガシヤ●カゲロフを幽靈蜻蛉●マヒマヒカブリをトックリムシ●カウカバチを御廻蜂●此他多けれども略す。

◎宮崎縣の昆蟲方言

第十回全國害蟲驅除講習修業生　宮崎縣　竹井繁滿

當宮崎縣下兒湯、宮崎、東諸縣、南那珂の四郡に於て、余がこれまで聞知り得たる昆蟲方言を、かい摘みて左に報せんに。

◎浮塵子（サブエ、サフエ、コヌカムシ、アキムシ）◎椿象類（フウ、カメブ）◎稻螟蟲（スムシ）◎螢（ホタルコ）◎金龜子類（アブラムシ、イゾロ）◎蜚蠊（アマメ）◎蝶類（チユ〱メロ、チヨ〱マンゴ、チヨ〱メ）◎頭蝨（シラメ、シラミ）◎蛾の類（ヒル、ヒロ）◎蚋（ブト）◎毛を有する蟲（イラ、イラムシ、ケムシ）◎縊女（アマンシヤク、アマンシヤクメ、オキクムシ）◎毛を有せざる蟲（イモムシ、ハダカムシ）◎大胡蜂（クマバチ、ウグマ）◎夜盜蟲（ホウヂヨ、子キリムシ、チヤン〱ムシ）◎穀象（ゴクツブシ、コクゾームシ、ボリ）◎松蟲（チンチロリン）◎沙㾦子（ボツクリムシ、トコトコムシ）◎鈴蟲（スヾンムシ、スヾムシ）◎鼓蟲（ゴキアレ）◎きり〴〵す（シンキムシ、ハタオリ、キリ〴〵ス）◎くつわむし（クダマキ、ガチヤ〱）◎くまぜみ（ワシ〱）◎はさみむし（シリサシムカゼ）◎蟷螂（オンガマツソ、オガモ、シヨロムマヽ）◎鰹節蟲（ゲダ）◎蜻蛉（アケズ、トンボ）◎赤辨使者（シヨロアケズ、アケズ）◎蟪蛄（コゼミ、ナガツセミ）◎蛇目蝶（センチユ〱メロ）◎はるぜみ（ズレ〱、マツゼミ、松蟲）◎こめつきむし（キツツリムシ、アネマタ、キ、キツチムシ）◎鳴蜩（クマゼミ、ヒガラゼミ、タロゼミ、ジワ〱）◎みちしるべ（ヒトモドカシ）◎蛁蟟（ハナクエゼミ、ヒグラシ）◎天蠶蛾（ヤマキエゴ）◎蟷螂の卵（ヨダレクンナ）◎天牛（ビワムシ、ギイ〱ムシ）◎くもかめむし（コシナガブ）◎水黽（カワムマ、アメフリバジヨ）◎つく〱ぼうしぜみ（ヅクヅクシ、ツクツクブシ）◎さるはむし（サンシユムシ、サンシヨムシ）◎田鼈（フナキリ、タンガメ、タマハサミ）◎蟲の蛹（ヒガシムケニシムケ）◎行夜（ヘヒリムシ）◎はくろさんぼ（カンチヨロ）◎蠐螬（ザツムシ）◎かなかなぜみ（ヒグラシ、カン〱ゼミ）◎むしひきあぶ（オトブエ、オトブカンカン）◎ばつたの類（ギメ、ハタオリ）◎せうりよばつた（キチ〱ギメ、サカヤノコメフメ、サコンタロ）◎ぢばち（アナバチ）◎ちやばねあぶらむし（カキノサ子）◎ゆりはなすい（ハエキリ）◎胡蜂（コグマ）◎蜾蠃（コンナレバチ、ドロバチ）◎蟋蟀（クロギメ）◎くろあげは（ムマチユ〱メロ）◎やんま（バブ、ヤンマ、ヤンモ、カトリバブ）◎かゞんぼ（カナンベ）◎くさぎしんくひ蛾の幼蟲（クサキナムシ）

◎浮塵子螟蟲調査要領（續）

島根縣農事試驗場　田中房太郎

○第四、浮塵子捕獲器使用時期試驗　此試驗の目的は苗代田に於て捕蟲網を用ゐて浮塵子を捕獲するに、一日中如何なる時刻を最良とするかを知らんとするにありて、試驗の方法は、一區一回つゝ三角形捕蟲網を以て苗頭を掬ひ行きたり、其成蹟は左表の如し、但し苗代面積は四坪とす。

月日	午前六時							正午十二時							午後五時						
	ツマグロ			フタテン	イナヅマ	トビイロ	計	ツマグロ			フタテン	イナヅマ	トビイロ	計	ツマグロ			フタテン	イナヅマ	トビイロ	計
	雌	雄	計					雌	雄	計					雌	雄	計				
六月一日	八	—	八	一二七	—	—	一三五	三六	一	三七	三〇六	—	—	三三九	一九	一	二〇	八四	—	—	一〇四
六月九日	四	—	四	三六	一	—	四一	一四	—	一四	一〇五	二	一	四三	八	—	八	五三	三	—	六四
六月十日	六	—	六	三三	二	—	五〇	七	—	七	八八	一〇	二	一〇七	五	—	五	七	五	—	一七
六月十一日	三	—	三	二九	九	三	七四	七	—	七	六九	一	一	七八	四	—	四	四九	一八	—	七一
六月十二日	六	—	六	二九	一〇	—	四五	五	—	五	八三	一〇	—	一〇〇	一	—	一	四九	一三	一	六三
六月十三日	一	—	一	三九	一三	—	五三	五	—	五	八四	九	一	九九	—	—	—	五六	一六	—	七二
六月十四日	—	—	—	二三	二〇	—	四三	五	—	五	四七	四四	三	九九	—	—	—	三三	二三	一	五七
六月十五日	—	—	—	六	五	二	一三	—	—	—	二三	六	六	三七	—	—	—	五二	二〇	四	七六
六月十六日	—	—	—	二	四	一	七	一	—	一	五	九	一	一六	—	—	—	五〇	三〇	五	八五
六月十七日	—	—	—	八	五	二	一五	—	—	—	二九	一四	—	四三	一	—	一	二七	三四	—	六二
計	二八	—	二八	三六二	二七	八	四七五	八〇	一	八一	八三九	一〇五	一五	一〇四〇	三八	一	三九	四六〇	一六一	一一	六七一

注意　二日より八日までは降雨の爲め試驗を中止す。

即ち十日間の總獲數及平均一日の捕獲數を表示せば左の如し。

蟲名	午前六時 十日間總數	午前六時 平均一日數	正午十二時 十日間總數	正午十二時 平均一日數	午後五時 十日間總數	午後五時 平均一日數	蟲名	午前六時 十日間總數	午前六時 平均一日數	正午十二時 十日間總數	正午十二時 平均一日數	午後五時 十日間總數	午後五時 平均一日數
ツマグロ	二八	二、八	八一	八、一	三九	三、九	フタホシ	三六二	三六、二	八三九	八三、九	四六〇	四六、〇
イナヅマ	七七	七、七	一〇五	一〇、五	一六一	一六、一	トビイロ	八	〇、八	一五	一、五	一一	一、〇
計	四七五	四七、五	一〇四〇	一〇四、〇	六七一	六七、一							

前表よ依て之を觀れば、十二時區最も多獲にして、午前六時區最も少し、而して午前六時區は捕獲數の最少なるのみならず、朝露未だ乾かざるを以て、捕蟲器霑濕し作業に便ならざるの憾ありき。

〇第五、浮塵子捕獲器試驗　此試驗の目的は、綱と網とは、孰れか浮塵子を捕獲するに効多きやを比

較せんとするにありて、各區に苗代田四坪を充てたり、其試驗の成績は左表の如し。

一、黐區　圖の如き篠に黐を塗り(一回毎に塗り換へ)之を斜に立てゝ苗頭を掃ひ行くものとす。(圖は略す、長四尺、幅一尺)

二、網區　圖の如き三角形の網を用ゐて、苗頭を急に掃ひ行くものとす。(圖は略す、普通の不正三角形捕蟲器なり)

月日	黐區 ツマグロ 雄	黐區 ツマグロ 雌	黐區 ツマグロ 計	黐區 フタテン	黐區 イナヅマ	黐區 トビイロ	黐區 各幼蟲	黐區 計	網區 ツマグロ 雄	網區 ツマグロ 雌	網區 ツマグロ 計	網區 フタテン	網區 イナヅマ	網區 トビイロ	網區 各幼蟲	網區 計	天氣
六月一日	一	一	二	一七	—	—	—	一九	四	一	五	四一	—	—	—	四六	晴
六月二日	二	—	二	三	—	—	—	五	—	—	—	三	—	—	—	三	雨
六月三日	二	—	二	一五	—	—	—	一七	三	一	四	一八	—	—	—	二二	曇
六月四日	三	一	四	二	—	—	—	六	二	—	二	三〇	—	—	—	三二	雨
六月五日	—	—	—	五	—	—	—	五	五	—	五	七	—	—	—	一二	雨
六月六日	—	—	—	四	—	—	—	四	一	—	一	一〇	一	—	—	一二	曇
六月七日	一	—	一	一	—	—	—	二	二	—	二	二〇	—	—	—	二二	雨
六月八日		—	—	二	—	—	—	二	一	—	一	五一	一	—	—	五三	曇
六月九日	—	—	—	三	—	—	—	三	一	—	—	九	—	一	二	一三	晴
六月十日	—	—	—	三	一	—	—	四	—	—	—	四五	四	—	—	四九	晴
六月十一日	一	—	一	三〇	—	—	—	三一	二	—	二	三五	四	—	—	四一	晴
六月十二日	—	—	—	一九	一	—	—	二〇	一	—	一	二九	一	—	—	三一	晴
六月十三日	—	—	—	一四	二	—	—	一六	—	—	—	一八	二七	—	—	四五	晴
六月十四日	—	—	—	一〇	八	—	—	一八	—	—	—	一六	一七	—	—	三三	雨
六月十五日	—	—	—	二	—	—	—	二	—		—	一一	七	—	二一	三九	曇
六月十六日	—	—	—	一	—	—	—	一			—	一〇	一八	—	二〇	四八	晴
六月十七日	—	—	—	二	二	—	—	四	—	—	—	一四	二五	—	一〇	四九	晴
計	一〇	二	一二	一三三	一四		—	一五九	二五	二	二四	三六七	一〇五	一	五三	五五〇	

即ち網區は五五〇、鞘區は一五九區にして、網區は鞘區より多きこと三倍强なり、殊に鞘に於ては毎回塗り換ふるの不便あるが上に、朝露多きときは粘着せさるの憂あるを以て、網の優れるに若かず。（未完）

◎昆蟲に關する葉書通信（第十九報）

（九十）螢狩の時の童謠（宮城縣仙臺市、愛蟲生）　吾が仙臺市に於ける螢狩の童謠を左に報ず、但郡村に抵れば、これに異なり、謡ふ節また同じからず、却て三四種あるものゝ如し。

○ホータロ來へ、山みち來へ、行燈の光りを、ちよイと見て來へ。々々々。

（九十一）なにがし君に問ふ（兵庫縣三原郡農事試驗塲、中野生）　昆蟲世界第五十三號雑報欄にて、貴君が執筆せる蟄居の蟲影記事中に、吾が淡路國を蚊の睫に寄生する蟲の大さ位ゐなどゝ言はれしも、是は要領を得ざる次第ならずや、成程吾が淡路島は小なるには違はざるも、周回三十七里、人口二十萬の上に出で、產米また四十萬石に餘り、由良鳴門の兩處には要塞砲臺すらありて、戍衛兵千餘の駐屯するあり、其他舟楫漁魚の便多くは他に讓らざるに、該記事は少しく酷に失せざるか、意ふにその蚊は今年始めて天降りし巨大無邊のものならんが、君は如何にして恒に飼育せられ居るか、飼育箱は萬里の長城よりも大に、主任者は定めて東大寺の金銅盧遮那佛の仲間にてもあらん、就ては後學の爲めに、是非其蚊の事は勿論、寄生蟲の習性經過をも委しく答へられよ。

（九十二）昆蟲講話會（三重縣阿山郡、西岡嘉十郎）　三重縣阿山郡新居村東西尋常小學校出身者の組織せる同窓會の第二回總會を、本年一月五日午后に開きたるに、郡内有志者盡ごとく參集し、その演說に移るや、西山金十郎氏は螟蟲採卵の有益なるを說き、小生また昆蟲の講話をなし、稻本坂太郎氏は蠶病に關する事を縷述して、會員の注意を呼起せり、盖し高尙ならずとも、斯學思想の注入は目今最とも必要なるを感じたればなり。

（九十三）尺蠖驅除用の藥劑（石川縣石川郡、高多信久）　尺蠖驅除に壚水、天竺桂煎汁（天竺桂一升に水三升）又は苦參の葉根を細刻し、之を水に浸潤すること三日の後、更に石灰又は木灰を加へて製したる濃液を用ゐたるに、奏効の大なるを實驗せり、余は昨年桑の枝尺蠖に試驗して成蹟を擧げたれば、時節柄これを報道す。

（九十四）螢狩の小供歌（岐阜縣益田郡、一敎員）　飛驒國高山地方に行はるゝ、螢狩の小供の歌を聽く

に、從來昆蟲世界誌上に現はれしものと異なる所ろあれば、記して貴所に寄す。

○ちウ來へ、がア來へ、あッぽ呉れろ子、立ッて來へ。（註）ちウは雀、がアは鴉、あッぽは餅の方言。

○ほッたろ來へ、宿かせろ、甘ひぶンぶを呉れろに。（註）宿かせろは宿を貸さんの意、ぶンぶは水の方言。

むかしは二月を、仲春とも、如さもいひ、和名にてはキサラギと云ひたり。

◎瓢蟲其他の標本製作に就き質問

埼玉縣　櫻井倚畊

迂農義客年第八回全國害蟲驅除講習修了後、專ら我が地方に於ける昆蟲を採集して多數の標本を製作なしたれど、就中、瓢蟲類、米象、姫象蟲類等は、其常習として物に觸れて各部を緊縮するより、毒殺又は熱湯殺の後、完全に各部を整理配列せんと欲するも、未だ一も完全のものを得ず、偶々之が配列の自由を得んとして、酒精を筆尖にて點加すれば、其局部のみは、自由を得れども、黑色以外の色彩を有するものに有りては、變色或は褪色の恐れあり、熱殺また之と同じく、場合に依りては、觸角頭部及び脚部等甚しく緩みて脫落することあり、斯くて此患ひを免れんとて、强剛緊縮の儘展伸配列せんとすれば、自づから原形を毀ち又は肢躰の脫落等ありて誠に遺憾に堪へず、之を救ふの方法を垂敎ありたし。

答

名和昆蟲研究所助手　名和梅吉

手腕の未だ練達せざる間は、瓢蟲或ひは象鼻蟲等を完全の標本に製作せんとは誠に至難なるべし、當昆蟲研究所に於ては、靑酸加里にて毒殺せしものを、先づ一時熱湯中に投じ、可成的早く水と交換し、此内に四五時間位ゐ放置の後ち手巾の如きものゝ上にて、十分全躰に含有する水分を取り去り、後ち手にて脚部を引き出すこと數回に及び、斯くて糊着すべき厚紙上には、ダラカントゴムを塗粘し、其上に右の脚部の伸びたるものを置きて徐ろに整理し居れり、最とも始終丁寧に取扱ふは必要にて、瓢蟲の脚部を躰下に縮めたる時などは「ピンセット」にて、微かに外に露はれ居る跗節端を鋏みて緩やかに引延ばすなり又最とも小形に且つ平らかなる爲め、最初より脚部を引き出し難き瓢蟲類或ひは象鼻蟲の如きものは總て剛强なる毛筆にて左右に出し置き、後ち普通の順序を經るものとす、而して瓢蟲類の褪色或ひは變

色を來すには種々の原因ありと雖ども、概むね羽化して間もなきもの、即はち未だ十分その翅の堅固ならざるもの及び水浸の長きに失せしもの等には此患ひあるもの〻如し、但し標本製作の業は、亦一種の技術なれば、完全なる標本を得んが爲めには、多くの苦辛を經るべきを怠るべからず。

◎ミチシルベの捿所と習性に就き質問

大阪府大阪市西區京町通壹　池田眞治

余は屢次近郊に於て昆蟲採集を試みたるも、未だ鞘翅目斑蝥科に屬するミチシルベを得るに至らず、願くは該蟲の好みて捿息する地質及び其習性等を示敎あらん事を。

答　名和昆蟲研究所助手　名和梅吉

ミチシルベの常に捿息すべき地質は砂質土なり、故に砂質土にて築きたる堤防或ひは砂質より成る圃逕庭園、運動場等には其肢行を認むべし、而してその習性として恒に此種の場所を東西に疾行し、他の小蟲類を追擊しては之を捕食し居れり、又急に人の近づくことあれば、前方數間の地に飛揚するなり、此種は全躰淡綠灰黑色に灰白色の斑紋を有するを以て、砂質土上に捿息する時には容易に見出し難きものなり、是れ全たく自然淘汰の結果として見るべき現象とす。

天武天皇の御宇四年二月、始めて祈年祭を執行せられ、風雨蟲災の無からんことを神祇に祈らる。

●●●●昆蟲月令（第二月）

此月に配すべき昆蟲記事は、概むね下に列擧するが如し。

○氣候　此月の五日より立春に入り、八日は陰曆の正月元日に當り、十九日より雨水の氣節に入る。寒氣猛烈の日あるは年内第一にて、前年内地にて攝氏の二十五度弱に下り、北海道にて三十八度強に及びたる事あり。去れど平均溫度は前月に比較して稍昇騰し、内地にて七度半より零下二度半の間にあり●雪雨日數は總じて前月に讓らず、却つて著しく水量を增すを常とするが故に、全國一般に屢次大雪を見る●寒地にては、風雪のために全く外業を廢するに至るも、暖地にては野梅の滿開を見る。

○蟲類　雜草荊叢を燒却して、害蟲の潜伏せるものを絶滅すべし●麥圃及び紫雲英田に掬網を試ろみて、害蟲の發生如何に注意すべし●雀甕を除去し、又その他の卵塊を潰殺して、毛蟲類の發生を妨たぐべし●稻の刈株堀取、倉廩掃除を此月中に行ふ時は、業務の

上にも、害蟲驅除の上にも都合宜しかる可し◎月末より黃蝶の飛行するもの點々郊外に現はるべく、蚜蟲の蜜蓋に寄居するものまた漸やく多かるべし◎冬季採集は、概むね此月を以て最終とすれば、勉めて多種類を蒐集すべし◎其他姫象蟲に枝尺蠖に果樹害蟲に、何れも驅除法を執行すべき要あるは前月に異ならず、蟲卵蟲巣の剿滅また同じ◎閑暇あらば溫暖の日、堤防に棲息の蟲種を採集するも面白かるべく、柳桑等に産附せる蟷螂の卵塊を取來りて之を溫床内に入るゝも研究の一材料たるべし◎溫床の害蟲には絶えず注目し、若し蚜蟲などの發生あらば、瓢蟲を放つか又は適宜の驅除法を行ふべし◎地蠶類をはじめ蟲卵を凍殺するは、此月の中に限れば、耕鋤その他の方法にて决行するを要す。

○古儀　此月四日には宮廷に於て祈年祭を執行はせ給ふ。これ古くより重んじ給ひたる祭祀にて、此年に風雨水旱蝗螟などの災ひなく、穀菜の成熟せんことを　伊勢大廟以下國々の神社に祈願し給ふが故に年ごひの祭りとは云ふなり。この祭りの時に、特に御年神に祝詞を上り、又白雞、白豬、白馬を供物とする事由は、神代に此神の害蟲を驅除し給へるに因づけるにて、何れも深き縁故あるによる。下の圖は　伊勢外宮の神寶たる金銅の挊を縮寫せしものなるが御年神はこの形を𣏓柄にて作り、それにて稻苗を掃ふべき由を誨へさせ給ひきと云へば、此器の本邦害蟲驅除に關係を有するを知るべし。

（カセヒの圖）

（貫子謹寫）

○舊說　陰曆の二月に、陰地の流水を飲む時は、すなはち瘧にかゝると云ひき◎支那にては此月に樹木を移植し、又挿枝するを良しとせり◎禮記の月令には蟄蟲始振とあり◎節分は此月の四日に當れば俗間に追儺の儀ある事は既に前月の條に記したるが如し。

○雜事　此月は農家に閑隙多きため、概むね遊樂をなすの風あるも、成るべく驅除器械及び藥劑等の調製に從事し、他日の準備をなし置くべし。

◎本號の口繪の說明

本號の卷頭に揭げたる寫眞銅版三種の中、行體もて「螟蝗何跋扈。誰畫驅除方。一洗妖氛盡。祥雲滿野黃」の五絶に西涯と落款せしは、現農商務大臣東田東助氏が、當昆蟲研究所長名和靖氏に寄せんが爲め、百花群蟲圖に題せられたる讃にて、圖は貴族院議員の榮職にありて、能畫の聞え高き米華小原重哉氏が、特に平田農相の高囑に應じて揮毫せしものに係ると云ふ。又和歌は樞密顧問にて御歌所長を兼ねらるゝ高崎正風男が、農相を訪はれし折名和氏の事歷など聽取せられ、感じて詠遺されしものゝ由にて「聲をのみ愛でし昔しの宮人にこの蟲選び聞かせてし哉」とあり、言葉書には「名和主が昆蟲學研究のものかたりを傳聞て」と記されたり。何れも當昆蟲研究所の爲めには名譽のものなれば、紀念として之を載す。尙ほ岐阜縣選出の前代議士大野龜三郎氏は、深くこの間の顚末を知る由

なるも、いづろやの神戸又新日報の京信（宮崎新報編輯餘錄にもあり）また此事あれば、序でに轉載すること次の如し。

●昆蟲界佳話（平田農相と名和靖氏） 先頃平田農商務大臣工場視察の爲め西巡の歸途、岐阜を訪ひ名和靖氏と會す、名和氏多年昆蟲學研究に一身を捧げ、今現に自から創立したる岐阜の研究所に所長たり、常住昆蟲を伴ひ、坐臥昆蟲と親しむ、帽子の徽章襟飾用ゐる所のものは、標本の其のみ、斯道に熱心なる實に驚嘆すべし、名和氏、農相を驛に送り袂別に臨んで昆蟲の徽章を送り以て紀念とす、農相欣んで之を領し他日必ず酬ゆる所あらんと誓ふ、名和氏即ち曰く、呈する所の物、正に一錢五厘に價す、願はくば其價の範圍内に於て高志を受くるを得んと、農相首肯して去る、歸來百方思索すれども未だ約を果たすに物なし、一日之を隣翁に謀る、隣翁沈思良久しうし、縑を展べて筆を執る、靈筆飛ぶが如く、忽ち描き出されたる數多の昆蟲、躍如として紙を離れんとす、隣翁とは何人ぞ、丹青を以て當世に鳴る小原重哉米華翁是なり、農相手を拍て嘆賞し、即ち左の詩を題して名和氏に贈る

螟蝗何跋扈。 誰畫驅除方。 一洗妖氛盡。 祥雲滿野黃。

高崎正風翁時に宿痾を養うて逗子にあり、偶農相を其別墅に訪ひ、談此に至りて感嘆自ら禁ぜず、遂に國風一首を詠じて名和氏に寄せたりと云ふ、好話柄以て傳ふべし。

◉大分縣の蟲塚

左に圖したるは、昨年秋、大分縣西國東郡朝田村俣水の鼻の先地内にて發見せる蟲塚なり。同じ蟲塚とは云へ、こは供養碑の類ひにて小石に經文を一字づゝ書しるし、それを集め埋めて害蟲の發生加害なからんことを禱りしものある事は、その左右兩側にある文章にて知らる去れば宮城縣磐城國伊具郡大張村にあるものと同種なる可し。碑の高さ貳尺許り。幅は一尺七寸程ありて、三重臺なりとぞ。昔時は佛寺に昆蟲學者の居りて、石を以て驅除劑に供したりと見ゆ。

石書醍醐妙典蝗蟲供養塔

◉第十一回全國害蟲驅除講習會

ろの開會期節の却つて宜しき爲めか、來る三月一日より二週間、當昆蟲研究所に開會の豫定なる第十一回全國害蟲驅除講習會は、意外に入會申込み多く、某縣の

如きは十名餘の應募者あり、但多數の中には、書式に違ひて年齡職業等を記入せざるものありと云へば斯かる煩ひのなかゝらん樣注意して、此際成るべく早く規定の手續を履まるゝこそ宜けれ。

◉負暖の蠅聲　歌の御會は毎年、宮廷で御執行遊ばせらるゝも、一度として御題に蟲の上ッた事は無い、勿論、祝意を表すべきものであると、季節が季節であるから致方はないが、何となく遺憾な思ひがある。○併し禁祕抄などで拜見すると、鳴く蟲だけは禁中でも可愛がられて、歌にも多く詠まれたやうである、如何に奇麗でも、蝴蝶の歌の少ないのは、全たく聲音を發し得ないからでもあらう。○新領土臺灣の名物と云へば、先づ土匪に樟腦に阿片に砂糖に其次はマラリヤ病であッて、此病氣の爲めに去三十一年には二千七百人を斃した、と云ふのも畢竟蚊族の惡戯である、そこで昨年、陸軍省では戍兵の一部に眼と口の外は肉體を盡ごとく被包させ、又室內にも蚊の出入せぬ樣にし、其上夜中の外出をも止めて、五ケ月間試驗させたのである、此試驗に當てられた兵士こそ、迷惑千萬であッたに違ひ無いが之が爲めに確かに顯著なる好果を得たと云ふ事である、神樣ならぬ蚊への人御供とは、一寸滑稽に類した咄だ。○今の昆蟲學者の仕方とかけて、何と解く、秋末の家婦と解く、心は……銘々勝手な栞(名)をつけて獨りで喜んで居る。○專賣特許品を見ると、世人は頭ごなしに粗惡品、高價品と云ふて、實用品とは思はぬ風がある、如何にも其の通りで、今日世間が重寶がるものに、特許品の少ないのも妙ではないか、特に害蟲驅除用器具にはヘンテコな物が多いやうに感ぜられる、多分斯道の十分開けぬ爲めでもあらうか。○三重縣名賀郡で以て、先月昆蟲講習會を修了した時に盛んな慰勞會があッたげな、其時特別標本として、名張町にあるとあふゆる害蟲どもを驅集め、婦人子科の成蟲や、酌取蟲科の幼蟲を陳列して衆覽に供したとの事である、定めて異品や新種の採集も多くあッたであらう、神風の吹く土地の冬季採集はまた格別ではあるまいか、何ンと羨しんだらう。○餘り蟲害地租特別免除と云ふものであるかふ、今度は雹害地までが、衆議院の日程に御相伴と出掛けた、來年になると雷害地の番が來るかも知れん。○蟲害地租全免討議の場合に、貴族院で田中芳男翁が、蟲害地租を免除する位なら、害蟲驅除豫防規則が不用になるでは無いか、と道破したのは近來の大出來で、東京新聞にも褒めて書いてある、これと云ふも、昆蟲其物を知悉して居ふるふからの事だ。○同ド議場で、政府の番外が、蟲害地租特免の事は必要とは認めないと、きッぱり答辯したのも妙ぢや、人氣取の居る下院とは、少し違ふ廉のあるのは、貴族院ぞと言はねば成るまい。○今の農業家が智嚢を拓開して、學術を實地に應用するやうになふ

んければ、害蟲驅除も十分ではない、其不十分な間ハ方法を簡易にし、器械を低價で輕便なやうに作らんければ成らぬ、誰しも十分な事を願はん者は無いが、努めて不十分主義を固持するは之が爲めで、害蟲驅除に關係ある人の、成るべく此心掛をして普及に勉めるのを望むのである。○先月の二六新報に、昆蟲學者は上院の働人と題して、三島彌太郎子の敏腕に就て揶揄してある、二六の人の惡いのには驚いた、昆蟲學者と云ふた處が、そンな迂濶な者計りでは無い、郵船會社の事務に干與して居る高階氏を見ても解かるではおまへんか。○當月は丁度陰曆の正月と云ふナマケ月に當るので、大概の地方では、雪餅に醉ひ、氷酒を嚙ぢり、火燵に旅行するなど、丸で冬季蟄伏の昆蟲を眞似して居る、なンと仕方の無い變則憲法では御座らんか、こンな餘暇があらば、何故害蟲退治や、驅除器藥劑の調達でもせんだらう蟲が陰で笑ッて居るのを悟らんのか知らん。(なにがし生)

◉昆蟲の質問に就て　從來各地方より質問の昆蟲名稱及び益害、能毒、習性等に就ては、成るべく質疑者の便宜を計り、種々の方法を用ゐて應答し來りたるも、近頃この種の質問頓に增加し、尋常の手段にては應じ切れぬやうになりたれば、今後は或一部の外は總て「昆蟲世界」誌上にて應答することの內規を設けたり、質疑者は豫じめ此意を含まれたし。

◉本誌の改良　雜誌「昆蟲世界」は昨年一月以降、約そ十頁に相當する字數を增して、愛讀家の厚意に酬ゆる所ろありしが、本號よりは紙數に於ても、更に每號四頁を增加し、木版は概むね精巧緻密の木口彫となし、且つ各地の農會に囑して弘く蟲報を輯收する事となしたれば、今後は稍面目を一新するに足れるものあらんと信ず。

◉諸國の蟲送り　害蟲驅除の一法として、そのかみ盛んに諸國に行はれたる蟲送りは、今なほ之を存する地方あり(既に昆蟲世界に記載せるも多し)是はもと唐土傳來のものと覺しきも、其年月は詳らかならず、斯かる兒戲に類する事は昆蟲學思想の普及に伴れ早晚廢絕に歸すべきも、去りとて之を打捨て置くべきにもあらねば、見聞に隨うて之を本誌に收錄し、讀者が他を啓發するの一材料たらしめんとす。(其一)今は昔し、土佐の國にては、每年陰曆の五六月頃すなはち稻草の膝を沒するまで生茂りて梅雨の降しきる時に、農民は各部落と云はず、各鄕村と云はず、大勢隊伍を組み、數旒の旗を押立て、半鐘を擔ひ、太皷その他の鳴物を打鳴らし、又藁もて作れる牛草履の凡そ一丈餘りもあるのに、竿を通

して之を數人にて擔ひ、畦畔の間を盤廻し乍ら『齋藤別當さーねもり、いーねのむーし、ひーきャげた』と口々に聲高く叫ばはりて、其己が占有區域を巡行するあり、白晝の事とて城下の士民なども多く群がり見物するものから、有繫に耻かしからんと伺ひ見るに左にはあらで農民は皆眞面目の顔して少しも怪しとは思ふ景色なかりき。是は蟲送りの方法なれど、害蟲驅除には、夜間燈火を照らして田間に赴むけりき(右、在高知縣高知市、島田疎石氏報)。(其二)岡山縣上道郡赤磐郡附近にては、土用に入り螟害甚はだしき時は、村内に集會を開きて其決議により、蟲送りと稱する一種の祈禱をなすを例とせり、之をなすには先づ旦那寺の住僧を招じて螟蟲退散の讀經を請ひ、次に數條の五色の紙に法語を大書して竿に括り附けたる數十旒の幟樣のものを、數多の兒童に持たしめ、少壯者は太鼓を擔ひ鐘を叩き乍ら練行き皆異口同音に『おンねもり、さンねもり、跡先ウ探いた』と可笑しき節つけて呼立て、村内の田間を隈なく巡りたる後は、送り場と稱する山の絕頂に到りて此幟を納むるなり、蓋しおンねもりは螟の雄蟲にして、さンねもりは其雌を指し、山中に之を納むるは、螟蟲の此五色幟に畏怖して侵害を止むるか、又はこれに附着して送り場に送らるゝものと信ずるが故に、斯くはなすなりとぞ。此事は甚はだ歎かはしき悪習なるも、何分古例の事とて急には廢し難きにや、現に昨年八月の如きは村會議員、害蟲驅除委員までが此事に與かりきと新聞にも見ゑたり(右、岡山縣都窪郡妹尾町藤田政勝氏報)。次は福岡縣に靜岡縣、宮城縣に石川縣といふ順番なり。

◉岐阜縣昆蟲學會記事

第三十八回岐阜縣昆蟲學會月次會を、本月一日午后二時半より、例に

より當昆蟲研究所内に開きたり、會衆は三十餘名にて、先づ當所の名和梅吉氏は有吻目異翅亞目に屬する種類と、鞘翅目天牛科の和名と、紫雲英の蚜蟲調査事項等に就て前後二回に談話し、次に岐阜縣害蟲驅除講習修業生岩越金次郎氏は、細かに冬季に昆蟲を採集せる結果を演述し、それより質疑會を開きて問答あり、終りて本巣郡船木小學校長今西孫一氏が百舌鳥の挿餌を學童に採取せしめたる顛末を報告して該鳥は害蟲を食とするも多くの有益動物を殺害するを見れば、結局害鳥なるべきかとの判斷を下し、次に當所の永澤小兵衛氏は、伊勢大廟と害蟲驅除の關係に就き、初子の日の玉箒、御田扇、金銅拵等に就て說明を試ろみ、次に當所長名和靖氏は石川縣能美郡の昆蟲講習會景況に亞ぎ蟲塚及び勸業學事等の事情を詳述し、なほ冬季昆蟲展覽會出品の意外に好果を收めたる事より大躰に關する短評ありて演說は終へ、次に同會幹事村井正元氏の事務會計及び出品現況報告ありて午后五時半過ぎに散會せり、當日は恰かも展覽會出品も數々到着せし事とて、其一部をば別室に陳列して會員の内觀に供したりき。

◉昆蟲叢書

同書は昨年中に第一編を公行すべき豫定なりしに、既記の如く種々の事情に妨げられしも、今や全く其故障を脫がれたれば、本月は必らず印行すべし、敢て既約の讀者に敬告す。

◉浮塵子の驅除器械

本誌第五十二號（昨年十二月）の葉書通信にある、德島縣那賀郡津浦村の酒本氏が發明の浮塵子驅除器といふものは、茲に圖したるが如きものにて、之を鳥酒油散器と稱名せりとぞ。（イ）ハ柄にて長さ四尺五寸乃至五尺（ロ）は水散用の板にて、長さ七寸（ハ）は三寸四分（ホ）は摺板にて、長さは一尺幅四寸その尖を少しく細む（ニ）は稻株の押分竹にて楕圓形をなし、徑凡そ三尺三寸あり。果して實用に適するや否やは知る所ろにあらざるも、蟲害地にては之が試用をなすも利得なる可きかと思はるれば、讀者の參考までに之を登載しぬ。

(浮塵子の驅除器械)

◉宮崎縣の蟲害豫防執行

一昨年大蟲害をうけたる宮崎縣にては、昨

年驅防法を嚴行して効驗ありし爲め、本年も訓令と告示とを發し、去月廿五日より本年十五日まで、主として浮塵子及び椿象の豫防驅除を行ふ事になれる趣むき、同縣試驗場在勤の竹井繁滿氏よりの通信。

◉姫象蟲の共同驅除　岐阜縣稻葉郡長良村長良區にては、本年一月二十八日より當月六日まで桑樹の害蟲姫象蟲の共同驅除に從事の豫定なりしも、天氣都合と器具整備の都合により、已に着手のものは半數に止まれりと、同地後藤宇三郎氏より報道あり。（二月二日附）

◉石川縣能美郡昆蟲學講習會　石川縣加賀國能美郡と云へば、彼の天保年間建立の蟲塚を以て有名の土地なるが、郡長川田茂通氏は如何にもして學事及び農業の上に昆蟲學を應用せしめんとの希望より、急に昆蟲學講習會開設の計畫を立て、郡內各小學敎員を主力としてこれに農業關係者を加ひ、去月廿五日より五日間、小松町能美郡衙樓上に於て開會せり、修業證書を得たる人員は男女合せて百十八名なりしも、日々深雪を踏みて傍聽に來れる者、又は縣立農學校、中學校の職員學生等を加算する時は、二百名乃至三百名の多數に上り、實に非常の盛況を呈したり、特に此計畫なるが爲めに俵石川縣書記官より一般に內訓ありしとかにて、縣當局技師を始め各農事巡回敎師も概むね來會したれば、素養ある會員さへ少なからず、隨うて將來斯學の發達を促がすに足るべきものあらんとなり、講師としては當昆蟲研究所長名和靖氏冬季昆蟲展覽會務を差繰り、且つ病軀を推して之に臨み、日に七時間の講話をなせしが講習中は兩課長、郡視學、農事巡回敎師等の盡力實に少なからざりきと云ふ。

◉岐阜縣昆蟲展覽會記事　岐阜縣昆蟲學會が主催となりて、來る八日より十日間開會の岐阜縣昆蟲展覽會は、既に其設備を終へ今や陳列に取掛り、明後七日より審査に着手の都合なるが、其出品を見るに、昨冬の計畫にかゝり採集製作の時日少なきに關はらず、出品點數凡そ千函に達し、出品人員二百數十名の多きに上り、一見外觀の美はなきも珍種異品意外に多く、製作排列また觀るべきもの多く、之を昨春の全國昆蟲展覽會に比較して優に進步の狀を呈したるものあり。今其景況を記載したきも、記事の不完備とならんことを恐れ、本會全部の始末は之を次號に詳記することゝなせり。（二月五日記）

◉蟲合せ答案の披露（二）　前號の二答案に次ぎて、披露すべきは、左記の二者なり、

（優等）　◎蟲合せ答案（第三）　靜岡縣靜岡市　岡田忠男氏選

（タイワンバツタ／エゾシロテフ）　（シマヨコバヒ／カスリヨコバヒ）　（茶ケムシ／菓子蛾）　（二筋横這／三筋蝶）　（鳥羽テフ／鳥羽ヨコバヒ）　（尻長ヨコバヒ／鬚長テフ）　（大サシカシラ横這／首長蜂）　（ミドリ横バヒ／トビイロ横這）

七星ヨコバヒ／八ノツマダラ横這　背白ウンカ／腹黒カツチムシ　マルガメムシ／ニツクワウ白蝶　ヒリツピンテフ／サンノゼー貝殻蟲　ウツラカメムシ／烏羽アゲハ　サルゾウムシ／リスノミ　ジンガサムシ／カンムリ横バヒ

ベニシヾミ／スミナガシ　ツマクロスケバ／ツマシロウラ蛇目　ツバメシヾミ／カラスシヾミ　ヤヘヤマイチ文字／オガサハラシヾミ　カミナリハムシ／イナヅマ横バヒ　金モンテフ／銀バヘ　オホマル蜂／クマバチ　トラカミキリ／トラフカミキリ

米ダハラ／麥ダハラ　アカバチ／クロガメムシ　トンボテフ／テフトンボ　ピストルムシ／セコンドムシ　草カゲロフ／木マワリ　カトンボ／カヾンボ　田龜／海蛛　犬ノミ／馬ジラミ　金龜子／石蚕　豹脚蚊／象鼻蟲　天蠶／地蠶

閻魔コホロギ／鬼ヤンマ　大瓢蟲／小蠹蟲　テツパウムシ／ツルギヨコバヒ　玉蟲／泥カツキ　芽蟲／花虻　クダマキ／ハタオリバツタ　紫尺蠖／藍ノゾウ蟲　手マリ蠅／足長蜂　埋葬蟲／蟻地獄　舞々テフ／オドリコ蝶

更紗蛾／鹿子蛾　姥タマムシ／紅娘華　ナシゾウムシ／リンゴノケムシ　葉蟲／芽蟲　木ノカハテフ／枝尺蠖　根切蟲／首切バツタ　トラフトンボ／クマゼミ　ベツカフ虻／ルリタテハ　二尾テフ／三カドコホロギ

テンマクケムシ／星ウスバカケロフ　ノミムシ／ノコギリ蟲　カサハラハ蟲／ミノムシ　モヽシンクヒ／クリムシテフ　ルリタテハ／スヾメテフ　ヨコバヒ／タテハマキ蟲　トノサマバツタ／ヒメコガ子　三スヂテフ／ヨツテン横這

五倍子／六ツホシヨコバヒ　風船蟲／車バツタ　トモヱテフ／蛇目蝶　ヘヒリムシ／ガメムシ　マグソムグリ／クソムシ　コシボソバチ／モヽブトバチ　瓜守／穀盜　ウチスヾメ／ニハスヾメ　德利バチ／瓢簞ゴミムシ

筒石蠶／管バチ　白蟻／黑アゲハ　葉バヘ／根バヘ　三井寺ハンメウ／高野ツリアブ　馬大頭／馬尾蜂　藤バチ／栗ガメ　水スマシ／砂ムグリ　獨角蟲／獨脚蜂　鍬ガタ蟲／カマキリ　オトシブミ／コヒガ　ハリガ子蟲／イトヽンボ

天狗蝶／幽靈横這　一文字セヾリ／二化螟蟲　三化螟蟲／五倍子　避債蟲／夜盜蟲　ジギゾウムシ／シリアゲムシ　メクラアブ／ミチオシヘ　タマムシ／ヒヘブウ　角ゼミ／耳ヅク　イボタムシ／イボタロウ　ビロウドツリ虻／モウセンガ

ヘリホシシヾミ／ツマグロ横バヒ　足長バチ／尾長バチ　クロアゲハ／アカタテハ　シーモンタテハ／ピーモンタテハ　クジヤクテフ／カラスバアゲハ　豹モンテフ／虎フシヾミ　メス赤ミドリシヾミ／メス黑ヘウモンテフ　大名セヽリ／大將蟲

松ケムシ／竹蝨　アサギテフ／クロアゲハ　白髮太郎／孫太郎蟲　軍扇蟲／カブト蟲　リウキウムラサキ／オガサハラシヾミ　モンシロテフ／モンクロバチ　纓節蟲／貝殻蟲　ワタハマキムシ／イトヒキハマキ　竹節蟲／木皮蝶

蜜蜂／白蠟蟲　ハルゼミ／ナツアカ子

編者評云、此答案を細見するに、其材料の豐富にして、直接害蟲驅除に關係ある蟲名を多く擧げたるに至りては、他に其例無き程なるも、是また如何はしき蟲名を用ゐたるもの二三あり、確かに鈌点なるべし。中に鴉揚羽と芽蟲と五倍子と小笠原小灰蝶とを二處に擧げたるは如何に、又イボタラフムシを俗に略してイボタムシと云ふなるに、茲にはイボタノシンクヒ蟲を云はんとして、却て混雜せしむるやうになせしは惜むべし、又圓ガメムシに日光白蝶を、天幕毛蟲に星薄羽蜻蛉を、馬大頭に馬尾蜂を對しさせは適はず。

（優等）

◎蟲合せ答案（第四）

長野縣埴科郡西條村　清水藏氏選

一文字セヽリ／二星瓢蟲　フタスヂテフ／ミツカドコホロギ　三筋テフ／四星瓢蟲　五倍子／六星瓢蟲　ナナフシ／八町蜻蛉　八ノ字根切／九星瓢蟲　赤シヾミ／青目アブ　赤タテハ／青ゴミ蟲　赤色瓢蟲／青羽羽衣

（赤星瓢蟲／青トンボ）（アカボシシデムシ／アヲバハ子カクシ）（シロ星瓢蟲／クロアゲハ）（白斑猫／黑瓢蟲）（黑マルバチ／白星貝殼蟲）（黃揚羽／紫テフ）（紫カメムシ／樺色シジミ）（金ゴミ蟲／銀ヤンマ）（キンケ蟲／ギンバヘ）（キン椿象／ギンバチ）

（淺黃マダラ／ルリタテハ）（駱駝蟲／象鼻蟲）（虎斑天牛／豹紋蝶）（トラフシジミ／クマバチ）（猩々蜻蛉／猿羽ムシ）（孔雀蝶／鳥羽揚羽）（トビ色ウンカ／カラスシジミ）（ツバメテフ／スズメテフ）（タケベニ天牛／スズメテフ）

（タケムシ／トラフトンボ）（ウマバヘ／鹿子テフ）（ミドリ蚜蟲／黃　テフ）（ヤマバチ／カハトンボ）（カハゲラ／ウミグモ）（瓢蟲／地蜂）（天蛾／地蠶）（ハルゼミ／夏アカ子）（アキツバメ／霜降シジミ）（小笠原シジミ／琉球ミスヂ）

（膽振シジミ／大和シジミ）（臺灣バッタ／蝦夷白テフ）（長崎揚羽／岐阜テフ）（ハリバヘ／糸トンボ）（ハサミムシ／物差トンボ）（ハタオリムシ／クダ巻ダマシ）（オサムシ／機織ムシ）（松ケムシ／竹七フシ）（ウメ毛蟲／桃ゴマ斑）（梨子象蟲／林檎葉捲）

（蜜柑貝殼蟲／葡萄サル蟲）（麝香揚羽／ヘコキムシ）（コウカ蜂／クソバヘ）（煙草ノ青蟲／茶ノケムシ）（アサホウグロ／ユフマダラ）（馬追蟲／轡蟲）（スズムシ／鐘タタキ）（タイコ蟲／鼓ミノ蟲）（カゲロフ／電横バヒ）（尺トリムシ／マヒマヒ蟲）

（オドリコ蝶／京ジョラウ）（カブト蟲／陣笠ムシ）（カブト蟲／緋威テフ）（鋸蜂／ノミ）（カマキリ／鍬形ムシ）（團子トンボ／蚊）（墨ナガシ／カミキリ）（鼈甲羽ゴロモ／櫛髭カガンボ）（鐵砲ムシ／ピストル蓑蟲）（ミノムシ／笠原羽蟲）

（提灯ムシ／ラフムシ）（火トリムシ／水カマキリ）（大名セセリ／殿樣バッタ）（大黑ムシ／福ダハラ）（麥ダハラ／スカシ俵）（クサ蜻蛉／木ジラミ）（アリ地獄／鬼ヤンマ）（エンマコホロギ／シホカラトンボ）（風船ムシ／車バッタ）（叩頭蟲／米糠蜂）

（大根羽蟲／カブラ蜂）（毛氈蛾／天鵞絨金龜子）（イシカケ蝶／スナムグリ）（ウシムシ／ツノゼミ）（豌豆ノ切蟲／カラムシ蝶）（雛羽蟲／卵バチ）（ウメ尺蠖／櫻コガ子）（桐蠋／菊虎）（牛房ゾウムシ／人參コクサガメ）（ゴバウ臭ガメ／ヒエブウ）

（天狗テフ／鼻高バチ）（カヒコ／キイト蜻蛉）（夜盜蟲／ジンサン蟲）（アメバチ／菓子ムシ）（筋黑テフ／白筋天牛）（褄黑ヨコ這／ツマキテフ）（モンシロテフ／モンクロバチ）（コブ象ムシ／イボタラフ）（カレハテフ／コノハテフ）（コガ子蟲／タマムシ）

（ゴイシシジミ／ゴモクムシ）（トクリバチ／瓢箪ゴミ蟲）（イタリア蜜バチ／フヒリッピン蝶）（大將蟲／軍配蟲）（南瓜ガイタ／ウリハムシ）（雲形豹紋／日カゲ蝶）（鞆テフ／蛇目蝶）（ユリ花スヒ／アゲハテフ）（小豆ガメ蟲／マメコガ子）（鶉ガメ蟲／シギムシ）

（クロ雲テフ／電ヨコバヒ）（大名翅隱シ／シホヤアブ）（カツチムシ／エビガラ雀）（子オヒムシ／オンブバッタ）

編者評云、此答案は坦平にして首尾に著るしき適否の差異なきと、他のものに用ゐざる二三の蟲名をも擧げしは其長處なるべし。併し乍ら、往々耳障りとなる穢はしき名稱を加へたると、狂けて附會せしめんとて、正しく當らざるものをも配合せしは確かに瑕瑾なり。例へば大名と庄屋を聞かせんとて大名翅カクシとシホヤアブを組まし、米と米糠を言はんとて叩頭蟲とコヌカバチを組まし、閻魔に塩との諺を擧げんとてエンマコホロギに塩カラトンボを組ましたるが如き、其他アリヂゴクにオニヤンマ、蠶にキイトトンボ、夜盜蟲にジンサンムシ、團扇トンボに蚊、テントウムシに地バチの如き皆此病にあらざるは莫し。なほ遠慮なく言はゞカブトムシとハタオリムシ等は重用せられ、イナヅマ横這また前後二處にあり。イボタラフムシをイボタラフとのみせしは惡し。

◉年賀狀のいろ〳〵

今年各地より當昆蟲研究所へおこされし年賀狀中、昆蟲に關するものを披露すれば次の如くなり、但し昆蟲外たりとも、其趣向の面白く且つ有用と認めたるものは併せ揭ぐ。

●東京市小山彰氏の日章旗を交叉せる中央に、巧みにトラカミキリを配置して、黄總の如くに見せたる意匠は優美なり●岡山縣竹内睦男氏の蜻蛉と蝶とを畫きて、其下より小花を添へたる筆力は健雅なり●岐阜縣小森省作氏の謹賀新年の左側に、虎斑天牛の寫生圖を現はしたるまた佳なり、去れど蟲下に元旦の二字のみを添へたるは心淋し●岩手縣晴山立郎氏が全國講習會に習得せる青色寫眞法を應用して、緻密の蝶影を現はしたるは感服なり、但し富岳は何の意なりや一寸不感服なり●長野縣清水藏氏が青色寫眞法によれる蟲秤は其趣向陳套のものなるも、文中の寓緘は中々に味はひあり、評して之を切齒扼腕鉢の賀狀とも申すべきか●千葉縣林壽祐氏の牽牛花に蜻蛉は宜けれど普通の賓品を用ゐたるを惜む、餅屋の餅とは賞め難かたし●東京若原勇太郎氏のものは、林氏と全たく同一のものにて、笠井製の石版繪葉書なり●岩手縣鳥羽源藏氏の志摩製の撫子花に蝶摸樣のものは、製版は可なれど、氏の如き畫心のある人の之を用ゐたるを怪しむ、木から落ちたるにやと外思はれず●新潟縣富取東朔氏が、用件として新年早々、苦言列擧の印刷葉書は有用のものなり、併し之を落手したる農家は、定めて芋蟲の如き膨れ顏をするなる可し●兵庫縣飯田儀太郎、中野壽郎兩氏連名のものは、二三化兩生螟蟲の區別を知らしむるに足れり、注意深し、唯畫摸樣あるため讀にくきを微瑾とす●靜岡縣神村直三郎氏の勅題に添へての蟲名讀込み俳句も、尋常の出來なれど、毎度乍ら筆まめなるには感服す●廣島縣中本又市氏の益蟲に對する希望は、頗ぶる眞摯に出でしものなり●岐阜縣安藤登、谷安太郎兩氏連名の害蟲驅除の句は、是また新年を祝ふの意に協へり、併し狂歌の躰なるを遺憾とす●長崎縣小林傳四郎氏のものは、殆んど昆蟲に關係なきも、一縣の資力を知らしめ、併せて經濟思想喚起の用に供すへき極めて必要のものたり、今一層印刷宜しかりしならんにはと思ふのみ●長野縣柳澤平作氏の全國米産表は、小林氏のものと同じく昆蟲には關係無けれど、如何にも能き心掛に出でたるを感ぜしむ●岐阜縣山田廣助氏の蟲歌は、意は十分なるも言葉足らぬ處あり。

●**校正の疎漏を謝す**　校正の疎漏より、間々心にも無き誤謬を來たす事あるは、何れの印刷物にも恒に免がれ得ぬ病なりとは云へ、特に前號の本誌には指摘すべきもの多く、附錄より本紙に至るまでに都合幾十の誤植を存せり、中にも、有益蟲釣虻類を有害蟲とし、翅張を翅長とし、ミメをメミとし享和を享保とし、千葉縣君津郡を若津郡としたるが如きは其數例なり、謹んで疎漏を謝す。

●**昆蟲標本陳列館の參觀人**　去一月中に、當昆蟲研究所の標本陳列館を參觀せし人員は、總計四千六百二人にして、最とも多かりしは、二日に於ける四百十三名にて、一日平均百七十七名に當れり、其中重なる者は、愛知、茨城、東京、三重、石川、大阪、滋賀、奈良、諸府縣の農事當局者又は敎育者等にて、學生また多かりき、なほ本月よりは新たに陳列したる諸品少なからざれば、從前に比し研學上の便益多からんと思はる。

（以上二月五日脫稿）

◎蟲塚保存費義捐金募集

現時、本邦各地に散在の蟲塚（害蟲に關する石碑）は其數凡そ十基に下らざる可し。而して當初其の建立の旨意を尋ぬれば、多少の異同ありて、石川縣のものゝ如く害蟲埋瘞の紀念碑たるあり、大分、宮城、福井諸縣のものゝ如く蟲害掃攘の祈祝碑たるあり、又福岡縣のものゝ如く害蟲驅除の記功碑たるありと雖ども、要は農作害蟲の怖るべく、之が驅防の等閑に附す可からざる事を訓戒するの誠意より出づ、豈にこれを路傍の供養碑と同視して可ならんや。然るを其現狀を聽くに、或ひは桑園の間に顚倒するものあり、或ひは風雨に曝されて文字の剝蝕に任するものあり、或ひは空しく山中の荊叢に埋もるものある等、今にして早く之が保存の道を講ぜずんば、久しからざるに事蹟湮滅の虞れなしとせずと。

當昆蟲研究所深くこゝに感あり、當所創立七年の紀念事業として、本年四月を期し、之が保存修補の計畫をなせり。然れども到底少數者の微力を以て完成すべきにあらざれば、博く同志を全國に募り、其義捐を仰ぎて、古人が今日に遺したる洪恩に荅ふる所あらんとす。世の農桑業に從事し若くは昆蟲學を研究せらるゝ諸士の、半瓶の酒、一塊の肉を節して、此擧に賛襄の意を表せられんことを冀ふ。

一義金は一口金五錢以上とす。（郵劵代用にて宜し）

一義金取扱は來る四月末日を以て終了期限とす。

一義金には受領書を出さず時々「昆蟲世界」紙上に芳名を掲げて領收の證となす、精算報告また同じ。

一醵集義金は之を平分して、四月末日までに判明せる、各蟲塚所在地の官廳に依託すべし。

一義金の送附の際は、蟲塚復舊工費若くは雨覆ひ埓柵修造費に限り支出せられ度旨を指定すべし

一義金醵集總額幷に寄附者名簿は、配分金と共に各官廳に送附して、義捐者の意思を傳達すべし

義捐金申込所　岐阜市京町　名和昆蟲研究所

◎昆蟲世界改良廣告

雜誌「昆蟲世界」は今や愛讀諸彥の厚庇と、昆蟲思想の發達とに伴はれ、漸次順運に向ひたるも、昨年までは字數增加に止めたりしが、斯くては未だ讀者に酬ゆるに足らざる事を悟り、本號より紙數の增加を斷行し、尙ほ六號活字を多用して、內容を潤むるに勉め、更に每號精巧の木版圖を挿入して、記事を補足する事となせり、希くは一層愛讀を賜ふと共に續々玉稿を寄せられんことを。

明治卅五年二月　名和昆蟲研究所編輯部

守隨商店の特色と營業種目

◉秤は何種に拘はらず〔商標〕の商標幷に守隨製の打込印を御認めの上御買入相成候事必要に候
◉〔商標〕の商標幷に守隨製の打込印なき者は拙店の製品ょ無之候
◉拙店の製品ょあらざるものは多く原料粗惡にして耐久の見込無之候
◉耐久の見込あきは今回の定期檢定成績ょ於て既に御了解相成候と存候
◉耐久の見込なきのみならず損所修覆の時原料の取替又ハ各異形の爲め非常の手數を要し候
◉非常の手數を要し候故に修覆料も亦隨て高價に相成候
◉修覆料の高價ょ止まらず無據御斷り申上候品も澤山有之候
◉拙店は三百年來斯業ょ從事し陸軍省所有の大砲掛秤鐵道局使用の車輛掛秤臺灣總督府の標本秤等を製造せしのみにても技術の巧妙にして堅牢ある製品を出すと明白に候
◉拙店は全國に於て三支店四分店四十出張所七百八代理店を有し修覆又は取次をなさしむるを以て損所修覆の際は獨得の便利有之候
◉定期檢定を受けざる秤又はポンド目カン〳〵等を御使用相成候方往々見受け候得共右は法律上嚴罰有之候間速ょ御棄却可被成候
右は將來秤御買入の諸君に對し豫じめ御注意申上候也

尚弊店の漆器營業種目は左の如くに有之候
美術漆器、一閑張、張拔、螺鈿入漆器、朱塗物、重箱、本膳椀椀盛、菓子椀、吸物椀、折敷膳、會席膳、吸物膳、菓子器、杯洗、盃類、盆類、鏡臺、針差、枕類、鏡類、額緣、塗板額、貿易漆器、紀念木杯、卷煙草箱、料紙文庫、硯箱、香合、棗類、香盆、小箱、塗煙草盆、行燈、衣桁、切手盆、机類、箸箱類、下駄箱、紅葉箱、簞笥、長持、用簞笥、櫛簞笥、膳簞笥等は御注文に依り十分入念調製可仕候
御嫁入道具、家具類、玩弄物を始め其他漆器類一切營業可仕候。
特ょ蒔繪は自宅の工塲内に技師雇入れ有之に付美術蒔繪は無論其他意匠圖案の求めに應ぞ

名古市榮町一丁目

度量衡
漆器業

〔商標〕

守隨本店（電信略符シスイ）

名和昆蟲研究所長名和靖著

五版

薔薇の一株 **昆蟲世界** 全

定價貳拾錢郵税貳錢郵券代用一割増

臨時刊行第一編

日本昆蟲分科表 全一冊

定價（郵税共）金貳拾八錢（郵券代用一割増）

臨時刊行第二編

通俗益蟲集覽 第一輯（説明書附）

定價（郵税共）金貳拾貳錢（同上）

臨時刊行第三編

貝殼蟲圖説 全一冊（再版）

定價（郵税共）金參拾七錢（同上）

雜誌昆蟲世界合本出來廣告

昆蟲世界第一二卷品切

本邦唯一の昆蟲雜誌

昆蟲世界合本

第五卷（昨年分）出來

西洋綴金文字入美裝

●昆蟲世界第三卷合本壹冊 定價金壹圓貳拾錢郵税金拾貳錢

●昆蟲世界第四卷合本壹冊 同上

●昆蟲世界第五卷合本壹冊 同上

右昆蟲世界の義は發刊以來、非常の高評を博し斯學研究上の寶典として又農事改良の先驅として歡迎せられしも、未た之を合本とするに至らざりしに、今回讀者の勸告により毎一年分を装釘して閲讀索引に便にせり、請ふ愛讀を玉へ。

◎害蟲圖解既刊の分廣告

●第一。桑樹害蟲エダシヤクトリ（枝尺蠖）（三版）

●第二。桑樹害蟲トゲシヤクトリ（刺尺蠖）（再版）

●第三。稻の害蟲イ子ノズヰムシ（二化生螟蟲）

●第四。煙草害蟲タバコノアヲムシ（煙草螟蛉）

●第五。稻の害蟲イチモジセセリ（苞蟲又葉捲蟲）

●第六。桑樹害蟲ヒメゾウムシ（姫象鼻蟲）

●第七。桑樹害蟲シンムシ（心蟲）

●第八。稻の害蟲イ子ノアヲムシ（稻螟蟲）

●第九。茶樹害蟲ミノムシ（避債蟲）

●第十。豌豆害蟲エンドノキリムシ（夜盗蟲又地蠶）

●第十一。桑樹害蟲クハカミキリ（桑天牛）

●第十二。稻の害蟲ツマクロヨコバヒ（浮塵子）

●第十三。桑樹害蟲イトヒキハマキムシ（糸引葉捲蟲）

●第十四。茶樹害蟲チヤケムシ（茶蛅蟖）

●第十五。馬鈴薯及ひ茄子の害蟲テントウムシダマシ（擬瓢蟲）

以上十五種は既刊の分よして發行以來既よ多くの各級農會は勿論、諸學校よも備へ付けられたり。

◎害蟲圖解未刊の分豫告

◎桑樹害蟲キンケムシ（金條蛅蟖）
◎稻の害蟲フタホシズヰムシ（三化生螟蟲）
◎稻麥害蟲キリウジガガンボ（切蛆）
◎稻の害蟲セジロウンカ（背白浮塵子）
◎稻の害蟲ヒゲナガアブ（長角虻）
◎桑樹實蟲クハハマキ（桑葉捲蟲）
◎蠶の害蟲カヒコノウジバヘ（蠁蛆）

◎松樹害蟲マツケムシ（松蛅蟖）
◎藍の害蟲アヰノゾウムシ（藍象鼻蟲）
◎栗の害蟲アハノズヰムシ（栗螟蟲）
◎胡麻害蟲メンガタスズメ（胡麻蠋）
◎赤楊害蟲ハンノキケムシ（赤楊蛅蟖）
◎櫟の害蟲カミキリムシ（天牛）

◎桑樹害蟲クハケムシ（桑蛅蟖）
◎稻の害蟲イナゴ（蟲螽）
◎稻の害蟲トビイロウンカ（褐色浮塵子）
◎稻の害蟲クロクサガメ（黑色椿象）
◎桑樹害蟲アヲハマキムシ（青色葉捲蟲）
◎桑樹害蟲クハゴ（野蠶）
◎蔬菜害蟲モンシロテフ（菜の螟蛉）
◎蔬菜害蟲サルハムシ（菜の葉蟲）
◎大豆害蟲ヒメコガネ（姫金龜子）
◎梅樹害蟲ウメケムシ（梅蛅蟖）
◎梅樹害蟲ウメシヤクトリ（梅尺蠖）

◎圖解の紙幅縱一尺三寸橫九寸　◎壹枚の代價拾五錢郵稅貳錢
◎百枚以上一纏壹枚拾錢郵稅百枚に付き貳拾錢

◎豫約代價

壹枚拾錢郵稅貳錢
但申込の際前金添附の事

圖解代金　凡て前金にあらざれば回送せず但郵劵代用壹割增の事

◎梨樹害蟲ナシゾウムシ（象鼻蟲）
◎梨樹害蟲ホシハマキ（星葉捲蟲）
◎果樹害蟲イラムシ（刺蟲）
◎稻の害蟲オホズヰムシ（大螟蟲）
◎藍の害蟲アヰノズヰムシ（藍の螟蟲）
◎栗の害蟲アハノヨトウムシ（栗蠶）
◎里芋害蟲セスヂスズメ（烏蠋）
◎桐樹害蟲シモフリスズメ（桐蠋）
◎果樹害蟲ホシカミキリ（白斑天牛）
◎果樹害蟲ドウガネブンブン（金龜子）

發行所　岐阜市京町　名和昆蟲研究所

實業叢書出版廣告

東京牛込早稲田農園發賣 明治卅五年度 春播種苗定價略表

品名	一合代郵税共
早生千成茄	五十一錢
中生山茄	五十一錢
晩生山茄	五十一錢
佐土原長茄	七十一錢
清國大圓茄	一袋五錢
市着茄	五十一錢
清國大長茄	一袋五錢
米國大圓茄	一袋五錢
早生三枚目・節成胡瓜	五十六錢
節成胡瓜	五十一錢
大胡瓜	五十一錢
三尺胡瓜	一袋五錢
清國大胡瓜	一袋五錢
晉西亞胡瓜	一袋五錢
早生越瓜	一圓一錢
大越瓜	一圓一錢
早生甜瓜	四十一錢
大甜瓜	四十一錢
梨甜瓜	三十一錢
洋種甜瓜	一袋五錢
早生小南瓜	九錢
菊坐南瓜	九錢
縮緬南瓜	十一錢
西京南瓜	十一錢
西洋南瓜ハツバード	二十一錢
清國方瓜	三十一錢
清國芋瓜	三十一錢
西瓜日本種	十三錢
洋種アイスクリーム西瓜	三十一錢
全マウンテンスヰート	二十六錢
夏大根	二十七錢
龜井戸大根	二十七錢
細根大根	十七錢
時無大根	二十七錢
廿日大根(白、赤、黄、紫)	各四十二錢
東京赤莖長牛蒡	三十一錢
札幌牛蒡	二十六錢
砂川牛蒡	二十一錢
大浦牛蒡	三十一錢
梅田牛蒡	二十一錢
東京大長人參	六錢
西洋大長人參	十六錢
三寸人參	十一錢
金時人參	十一錢
札幌人參	十一錢
夏蕪	十二錢
黄玉葱	七十一錢
赤玉葱	八十一錢
千住太葱	六十一錢
下仁田葱	四十一錢
夏葱	二十一錢
韮葱	八十六錢
火焔菜	二十一錢
獨逸白牛蒡	三十一錢
甜菜	二十一錢
八ツ房蕃椒	三十一錢
日光蕃椒	三十六錢
鷹爪蕃椒 皮付	九錢
甘味大蕃椒 全	九錢
水稻各種一袋(一合入)	四錢
陸稻各種 全	四錢
小冬瓜	二十一錢
鹿兒島大冬瓜	五十一錢
長夕顔	二十一錢
丸夕顔	二十六錢
太絲瓜	六錢
長絲瓜	十六錢
太苦瓜	十六錢
長苦瓜	十六錢
千成瓢簞	十六錢
大瓢簞	十六錢
蕃茄	五十一錢
葉球甘藍類	八十二錢
蕪甘藍	一袋五錢
子持甘藍	一袋五錢
羽衣甘藍	一袋五錢
花椰菜	一袋五錢
玉ちしや	一圓一錢
かきちしや	二十一錢
波稜菜	五錢
鶯菜	八錢
茼蒿	六錢
菾菜	四錢
みつば	十三錢
つるな	四錢
洋芹	七十一錢
塘蒿	一圓五十一錢
石刁柏	二十七錢
赤紫蘇	二十一錢
青紫蘇	二十一錢
玉蜀黍各種	八錢より十錢
夏そば	三錢
胡麻各種	四錢
菜豆類各種	六錢より八錢
大豆各種	五錢
小豆各種	五錢
[illegible]國大莢豌豆	十二錢
刀豆(白、赤)	十錢
十六さゝげ	七錢
三尺さゝげ	三十二錢
牧草類	一斤四十五錢 五八十
除虫菊(白)	六十一錢

以上一合代價なきものは小袋金五錢一合代價あるものは一袋各二錢ヅヽ郵税不要

草花種子

▲麝香撫子▲かんな●麝香連理草●美女櫻▲矮生はろしやぎく●はろしや菊●花菱草●スター●フロックス●翠菊●美女撫子●二色すみれ●金蓮花●筑羽根草●金盞花●金鶏草●美人草●花げし●おだまき●金魚草●庭石菖●水仙翁●蜀葵●錦葵●千鳥草●八重鳳仙花●萬壽菊●松葉牡丹●夕錦●貝細工●はけいとう●仙人穀●風船かつら●小町な●月見草●鐘草●芙蓉●おたぎ草●百日草●サルヒヤ●ザキタリス●花菖蒲●しゆんぎく●向日葵●黄蜀葵●水蝶花●午時花●みづひき●かつこあさみ●ベリヤトンース●巴草●俵蔘●コスモス●日々草●紅花茶●紅蜀葵●玉不留行

以上▲印一袋五錢●印二錢郵税不要

朝顔種子

品名	代價
丸咲最大輪	一袋十錢より三十錢
全大々輪	一袋五錢より三十錢
全大輪	一袋五錢より二十錢
全中輪	一袋六錢より二十錢
亂菊咲	一袋九錢より壹圓
蔓なし	一袋廿錢より五十錢
茶臺咲	一袋各十五錢
五切咲	一袋廿錢より一圓
錨咲	一袋八十錢
獅子咲	一袋二十錢
車咲	一袋八十錢
咲分	一袋廿錢より五十錢
牡丹咲	一袋十錢より一圓

山林用種子類

品名	一合郵税共	一升郵税共
杉(精撰)	八錢	六十八錢
檜 全	九錢	七十八錢
赤松 全	十三錢	一圓廿錢
黒松 全	十一錢	一圓
落葉松 羽根付	廿六錢	二圓二十三錢
落葉松 羽根取	五十一錢	四圓五十五錢
からたち	十三錢	一圓五錢
樅	六錢	五十錢
櫟	十三錢	一圓廿錢

新輸入外國有益樹種類

左の種子は世界各國にて最有益なるものにて殊に日本の風土に適し栽培法は林學博士本多靜六君の口授をこひたるもの印刷し種子に添へて呈す

名	一袋郵税共
大王松	三十錢
オレゴンパイン	十五錢
ラウソンひのき	十五錢
鉛筆の木	十五錢
ギガント世界爺	五十錢
センペル世界爺	三十錢
落羽松	二十五錢
ストロブ五葉松	十一錢
ユーカリプタス	十一錢
獨逸もみ	十一錢
シベリヤもみ	十一錢
スパニヤもみ	十一錢
ヒマラヤシーダ	十一錢
リバノンシーダ	十一錢
歐洲落葉松	十一錢
チリシーダ	十一錢
獨逸唐檜	十一錢
カナリヤ松	十一錢
アレッポ松	十一錢
コルシカ松	十一錢
獨逸黒松	十一錢
佛國海岸松	十一錢
獨逸赤松	十一錢
同はんのき	十一錢
同山はんのき	十一錢
歐洲の栗	十一錢
獨逸ふな	十一錢
同しはち	十一錢
獨逸かしわ	十一錢
コルクかし	十一錢
砂糖かへで	十一錢

此外内外種苗數百種販賣詳細目録書は復往端書にて呈す

東京牛込早稲田
穴八幡坂上
早稲田農園

◎岐阜縣冬季昆蟲展覽會經費寄附金受領第四回報告（人名イロハ順）

一金拾圓（岐阜市委員長）堀口有一君
一金拾圓（山縣郡委員長）精松珍麿君
一金拾圓（養老郡委員長）東文舖君
一金拾圓（益田郡委員長）中村眞夾男君
一金拾圓（可兒郡委員長）水谷弓夫君
一金參圓　岐阜高等女學校職員一同
一金貳圓　三吉艾君
一金壹圓五拾錢　小林義三郎君
一金壹圓　正富彌藏君
●小計金五拾七圓五拾錢
●通計金百貳拾參圓五拾錢

右今般本會計畫の趣旨に贊同し各頭記の金額寄附相成候ゟ付此段及報告候也

明治三十五年二月

岐阜縣昆蟲學會

◎岐阜縣昆蟲學會公告

本會規則に依り左記諸君を名譽會員、若くは特別會員に推選致候に付此段及報告候也

小幡忠藏君（名譽會員）
泉繁太郎君　林茂君　渡邊治右衛門君　梶川AF吉君
田中榮助君　坪井伊助君　土川誠一君　名和梅吉君
永澤小兵衛君　村井正元君　大湖市太郎君　大野勇君
桑原貫之助君　山田與十郎君　圓山包吉君　松尾國松君
安藤鉞吉君　佐賀粂三郎君

明治卅五年一月

岐阜縣昆蟲學會

◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條ゟ依り、毎月第一土曜日午後正一時より、岐阜市京町名和昆蟲研究所内に於て開く筈なれば、毎會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所内　岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會本年中の日並は左の如し

第三十九回月次會（三月一日）　第四十四回月次會（八月二日）
第四十回月次會（四月五日）　第四十五回月次會（九月六日）
第四十一回月次會（五月三日）　第四十六回月次會（十月四日）
第四十二回月次會（六月七日）　第四十七回月次會（十一月一日）
第四十三回月次會（七月五日）　第四十八回月次會（十二月六日）

⋯ 市街界
‖ 案内道
町
イ 研究所
ロ 縣廳
ニ 病院
ハ 中學校
ホ 監獄
ヘ 郵便局
ト 西別院
チ 公園
リ 長良川
ヌ 金華山
ル 停車場

◉名和昆蟲研究所案内

當研究所の位置は上の圖の如く停車場よりは僅十餘町にして養蟲室あり、又ロとへとの間なる新設の岐阜縣物産館構内ゟは常備の昆蟲陳列館（五間ゟ十六間）あり有志諸君の來訪を俟つ

岐阜縣岐阜市京町　名和昆蟲研究所

◉本誌定價並廣告料

壹部郵稅共金拾錢
壹年分拾貳部郵稅共金壹圓八錢
〔見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す〕

（注意）本誌は總て前金ゟ非れば發送せず◉爲替拂渡局は岐阜郵便電信局◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす

廣告料五號活字廿二字詰一行ゟ付金拾貳錢、三十行以上一行ゟ付き金拾錢とす

明治三十五年二月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二
（岐阜縣岐阜市京町）
發行所　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二
發行者　名和梅吉

同縣武儀郡下有知村三百七十四番戸
編輯者　天野秋二

同縣安八郡大垣町大字郭百五十三番戸
印刷者　河田貞城

（明治三十年九月十日内務省許可　明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

（大垣西濃印刷株式會社印刷）

Vol.VI. MARCH. 15TH, 1902. No.3.

THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.

EDITED BY Y. NAWA.

GIFU, JAPAN.

昆蟲世界

（第六卷第參册）　第五拾五號

（三月十五日發行）

（毎月一回十五日發行）

目次　（禁轉載）

（明治三十五年三月十五日發行）

（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU ,JAPAN

◎寄附物件受領公告

一金參圓　靜岡縣　岡田忠男君
一金貳圓　東京市　中川久知君
一金壹圓　岐阜縣　佐藤作之丞君　原田晟君
一金壹圓　德島縣　林寅藏君
一普通教育動物學教科書　一册　理學博士　箕作佳吉君
一厚風　一册　山梨縣　八田達也君
一明治卅三年螟蟲驅除事蹟報告一册
一害蟲驅除豫防委員必携一册　熊本縣　鹽谷春作君
一東海新聞
一新總房（昆蟲記事掲載）貳葉　千葉縣　蒔田愛藏君
一農事試驗成蹟　第五報　堀田家農事試驗場
一The skeleton of the head of Insects.　一册　在米國コーチル大學　米國理學士　河内忠次郎君
一肉叉蚊第一回報告　臺灣　木下嘉七郎君

右當所に寄贈相成候仍て茲に芳名を掲げて其厚意を謝す

名和昆蟲研究所

◎蟲塚保存義金喜捨報告　（）ハ口數

金壹圓（廿）岐阜縣名和　靖君
金五拾錢（十）　永澤小兵衛君
金貳拾錢（四）石川縣岩地勘七君
金貳拾錢（四）岐阜縣名和正也君
金貳拾錢（四）岐阜縣名和政子君
同上（同）　同上　名和梅吉君
同上（同）　同上　名和貫子君
同上（同）　同上　名和　正君
同上（同）　同上　伊藤七郎君
同上（同）　同上　天野秋二君
金拾五錢（三）山口縣重田又三君
金拾錢（二）　靜岡縣岡田忠男君
金拾錢（二）岐阜縣岡崎小左衛門君
同上（同）　同縣　渡邊榮吉君
同上（同）　山口縣三家本文二君
同上（同）　岐阜縣棚橋　昇君
同上（同）　岐阜縣森　宗太郎君
金五錢（一）　岐阜縣名和愛吉君
金五錢（同）　同縣　高橋基男君
同上（同）　同縣　長屋六二君
同上（同）　栃木縣　松本　瑠君

小計金四圓十錢（八十二口）

右蟲塚保存費中へ義捐相成候に付報告す

明治三十五年三月　名和昆蟲研究所

◎昆蟲標本及び昆蟲學研究用具

● 農作物害蟲標本　壹組（桐箱入解說附　金四圓五拾錢）
● 農作物益蟲標本　壹組（桐箱入解說附　金參圓五拾錢）
● 教育用昆蟲標本　壹組（桐箱入解說附　金八圓五拾錢）
● 自然淘汰標本　壹組（桐箱入解說附　金五圓五拾錢）
● 雌雄淘汰標本　壹組（桐箱入解說附　金五圓五拾錢）
● 氣候變形標本　壹組（桐箱入解說　金四圓）

（壹組の荷造費金貳拾錢小包料は百里迄貳拾錢百里外四拾錢）

● 昆蟲學研究用書籍及び器具一式

從來昆蟲の研究調査に忙のため、自然標本器具等の調製に暇なく、屢次各位の貴命に背き居り候處豫め品目を御指定相成るに於ては、短期間に悉皆取揃へ調達可致樣準備致候間何れのものなりと隨意御申越被成下度候也

明治三十五年第三月　名和昆蟲研究所會計部

◎昆蟲世界愛讀諸君に敬白す

雜誌「昆蟲世界」の義は、假ひ御注文有之候とも、前金にあらざれば、發送致さゞる規定に有之候處從來の厚誼上、前金相切れ候時は、其旨を朱書の上、特別に御取扱ひ致し候ひしに、往々却って意外の御取計ひに相成る向も有之候故、以後は不得止發送を見合はせ可申候、依て封書に前金切れのしるし相附し發送致候場合には御不用なれば其趣き御一報願上度、若し御通知無きに於ては、舊の如く御購讀相成るものと見做し可申候間、豫じめ御承知置願上候

三月十日　名和昆蟲研究所會計部

雜草採集と甲蟲四種

論説

（明治三十五年第三月）

◎害蟲驅除を論じて宗教家の反省を促がす

宗教家は、他を感化啓發するに、好適の地位を占有し、且つ恒に國民の儀範と仰がれて、特殊の待遇を與へらるゝ者あるが故に、一朝災殃變異の起るあらば、社會の平靜、民生の慶福を期せんが爲め、各々教徒を激勵して、熱誠その事に盡瘁するの義務ある可し。然るを、去る明治三十年の如きは、近古稀有の蟲害に罹り、吾が同胞の大半は、家に一椀の糧食なく、纔かに海外の臭米を炊き、山野の草根を嚙みて餘生を繫ぎ、次年また其餘波をうけて、殆んど酸鼻の悲境に沈淪したるに、身には慈悲忍辱を標榜とせる宗教家の、誰ありて害蟲驅防の急要を説き、又慰撫救恤の方法を講せし者なかりしに非ずや。當時吾人は、天命を傳へ福音を布き、以て形而上の教導に當るてふ此等宗教家が、未だ蟲害の一國動亂の禍根たるを知らざるを憐れみ、又何が故に、この饑餓の窮民を傍觀せしやを怪しみき。爾後會々風評巷説によりて、耳朶に觸るゝ所ろのものは、曰く、其信徒のこれに從事するを抑制せる者あり、曰く、この災禍を奇貨として、私かに暴利を貪ぼれる者ありと。

もし夫れ、宗教家の職分をして、たゞ神佛に禮し、葬祭に與かるを以て足れりとなさば、敢てその行爲を議するの要なきも、天理を宣示し、人道を闡明し、因りて以て、修身齊家の本源たらしむるものなり

せば、如何で斯かる賴み無きの擧動を以て、神聖の天職を完うせりと言ひ得べけんや。吾人は宗教家の德を敬仰するの厚き、その嘗て蟲害に關心せざるの事由を以て、昆蟲の性態、加害の狀況を知悉せざるの過失ならんかと推量し、寧ろ之を寬恕する所ろありき。而して之に諭すことを爲さず、之に施こす事を企てず、反つて往々利を收め、慾を滿せりと云ふを聞くに及び、始めて其無情冷酷の太甚しきを感じぬ。人はいふ『宗教家にして、もし戮力惻心、蚤く害蟲驅除に勗むること、他の災異の時の如くんば必らずや、六年前の慘害と國辱とを招致せざるべく、又蟲害地租免除の如き、一種嫌忌すべき議案を、我が光榮ある帝國議會に見ること能はざりしならん』と蓋し時弊に中れりと謂ふべし。

然るにても、世人の所謂、宗教家なるものは、果して皆、害蟲驅除に盡すべきの重任を有すべきか。是れ一種の疑問に屬せり。今試ろみに、吾人をして、露骨に其事實を證徵せしめよ。

（一）**儒敎は如何**　古來、醇儒といはれ、眞儒と呼ばはるゝ者は、概むね抱負の經綸を行ふを以て、最終の目的とはなさゞるが如く、口每に治國平天下を論議するも、農作の豐凶より、國家の經濟をば擧げて度外に附し去り、又好んで身を風塵俗累の外に避け、物價を知らず、牙籌を手にせざるを以て得意となし、句讀を授け、字義を解釋するを以て本色と誤想し、遂に儒敎家とし云へば、世故に迂濶なる者の異稱とせらるゝに至りぬ。往昔、孔夫子の聖を以てすら、實學に精通せず、轗軻不遇、飢に陳蔡の野に遭へりと云へば、形骸をのみ摸倣する斗筲の末裔が、簿書堆裏の蠹魚を以て甘んじ、涓滴國家事業を思はざるの弊に陷いりしは、毫も異とするに足らざるも、その固陋を覺らず、倨傲自から許し、害蟲驅防の方の若きは、諸を農者に問へ、吾は肯て焉に關はらずとなし、宛然國民の安危を顧慮せざるもの丶如く、延て聽者をして、其去就に迷はしむるに至りては、決して默視するに忍びざるなり。抑そもこれ、

儒家が常に尊信する所ろの『毛詩』に農作と蟲類とを詳記し『禮記』の月令に昆蟲の發生加害を警告し『春秋』に螟螽蝝の三害を特筆せる古聖の深意に適へりと云ふを得べきか。吾人は、こゝに疑ひを挿まざるを得ず。若しそれ、經書の一章一節に拘束せらるゝの力を殺ぎて、之を實地活用の方面に轉ぜば、公利公益に資すべきもの、其幾ばくあるかを知らざる可きに、野中兼山、新井白石、熊澤蕃山の亞流を以て、自任する者の今に鮮なきは、斯教のため歎きても猶ほ餘りありと謂ふべし。

（二）基督教に如何　其主義と教理の如何は、吾人の得て談るべき所ろにあらず。たゞ其經典には、農作衛生の害蟲より、有効蟲類の性狀をも、細說せしものあるを以て、布教の一方便として、熾んに之を引用講說したらんには、教徒も將た國家も、兩つながら恩惠を被ふる可きに、嘗てその此に出でし者無きを惜むのみ。彼の『箴言』には、蝗と蟻とを言ひ『詩篇』には、蠅と蝗と蟊賊の害とを謳ひ『士師記』には衆民を以て、蝗族の多きに喩へ『利未記』と『撒母耳前書』と『馬太』『馬可』の兩傳記には、蜂蜜及び蝗類の共に食糧に充つべきを教へ『約耳書』と『約翰默示錄』には、蝗害の有無を、凶福の分岐點ありと示さずやは。然かも『出埃及記』の如きは、奇跡の示現とも稱ふべき害蟲の跋扈と、有効蟲類とを、前後數章に收錄せり。中にも、不潔の處には蚤を發生し、蚋群も時ありて王宮を侵襲し、飛蝗は風位風力によりて左右せらるゝものなるも、一たび害を穀菜に加ふれば、國內また殘青遺綠無きに至る等の實例を、巨細證明せしが如きは、これ豈に害蟲驅防と國家との關係を知得すべき、好箇の材料にあらずや。觀來れば、幾多の基督教家が、朝に夕に、經典の誦讀を事とし乍ら、此等の神戒祖訓に留心せざりしは、迂拙の至りにして、到底、蛙鳴蟬噪の誹りを避け能はざるものに似たり。さばれ、既往の事は之を論ふも詮なし、唯將來に對つて、其猛省を求め、其應援を得れば、吾人の希望は則はち足れり。　（未完）

◎冬季昆蟲展覽會の結果附冬蟲採集試驗（前）

名和昆蟲研究所長　名和靖

岐阜縣昆蟲學會主催となり、明治三十五年二月八日より十日間、岐阜縣冬季昆蟲展覽會を、岐阜縣物產館構內第二號館に開設せしゝ、其計畫の頗ぶる遲かりしゝ關はらず、之が出品數と成績ゝ至りては、全たく豫想外の好果を收め得て、學術研究上不少の新材料を發見せり。是れ唯り、余が誇張の言にはあらで、一たび之を觀覽せし者の、齊しく首肯せし所ろあらんと信ず。依りて將來斯種の發會を經營せんとする同志の爲めに、其目的と其利益とを併せ記述して、弘く妙味の一半を分たんとす。（本號雜報欄、展覽會記事參照）

そも此會を計畫せしは、客歲十月下旬の事ゝして、頗ぶる突如の觀ありしも、一旦ろの議の協定するや迅速その設備に着手して、十一月より一月に至る、最寒期間に捕獲の昆蟲を以て、その首要部となすべきを移檄し、又勉めて團躰出品をも奬勵せり。而して其目的とする所ろ、次の二項の如くなりき。

（一）　方今昆蟲學の前進せず、害蟲驅除法の普及せざるは、畢竟、昆蟲の習性經過に明ならざるに因づく、而して之を知得するの捷經は、百蟲蟄伏期の狀態を詳にし、兼て其種類を蒐集するに在り。たゞ之を爲すや、（イ）宜しく年內最寒の時期即はち十一月乃至一月間を以て恰當の採集期とすべし。（ロ）然れども之を採集し、單に同志間の內覽に供するのみにては、利益少なし、故に小學兒童及び農家の休暇多き時機を以て、博く公衆の觀覽に供し、親しく其品種等を熟視せしむるの必要あれば、二月八日（陰曆正月元旦）より之を開設すべし。（ハ）冬季の採集品は、外觀に乏しきも、種類調査并びに分布調査には意外の便宜あるべく、特に採集を熟達せし

むるの利あるべし。故に成るべく一般に閑隙多き時を以て、弘く採集を行はしむべし。

（二）　個人出品は優者をます／＼優良ならしむ可きも、前項の目的に副はざる所ろ多し。故に團躰出品を主力とし、以て普及の方針を採るに利あり。此希望を實行せんが爲めには（イ）各級農會、各種の學校、各昆蟲研究團体の協力を要す。（ロ）特に理科思想の發達の爲めに學齡兒女の採集品を希望するも、其學課を廢するが如きは、固より好まざる所ろなるを以て、宜しく注意を與へて、冬期体業中又は放課の際の採集品に限らしむべし。（ハ）各級農會の出品は直接に弘く農業に關係を及ぼし、昆蟲研究團躰の出品また大に斯學の伸暢を期するに足れるも、一私人としての農業者若くは昆蟲研究者の出品は、比較上利益少なし。故に前者に重きを置き、私人の出品は之を妨たげざるも、敢て之を重視せず。

然るに其結果として、豫定期間に意外にも九百函、十萬頭の蟲類を一場に蒐集し、縣下一市十七郡の出品を以て、壘々彼の廣濶なる第二號舘を充塞し得たるのみならず、團躰出品は約全部の八九割を占め、殆んど當初の希望を充たすに至れり。之を詳言すれば、恐らくは未だ世界に其前例無き此展覧會は、其規摸こそ小なれ、今回の試驗を經て、實に左の列擧の疑問を解決するに殆かりき。

一、從來、冬季に於ては昆蟲の越冬するもの極めて少なしと信憑せられしに、其蟄伏越年の品種は意外に多く、草蜻蛉の如きすら成蟲を以て冬季を凌ぎ、瓢蟲に至りては殆んど全く成蟲の形態を以て越年するものなる事を證し得たり。

二、昆蟲の越冬を輕視するとゝもに、誰しも其採集の困難なる可きを感じ、嘗て冬間に之を試ろみし者あるを聞かざりしに、頑是なき小學兒童若くは女學生徒すら、容易に幾千頭の微小種を捕獲し得て、他の春夏秋の三季と、其利益を等うすることを現實にせり。

三、昆蟲は如何なる處に蟄伏越年するものなるかは、未だ之を明言する者無かりしに、今回の成績に依りて、その樹皮、草根、枯葉、綠葉の間又は石下、土中、朽木間に潜伏するものなる事を證明し、兼て其好む所ろの巣窟の種別をも、粗ぼ了解せしめたり。

四、益蟲と害蟲とは、越冬の趣むきを異にするや否やとは、斯學上の一疑問たりしに、田圃間に於て加害の種類の反つて山林に冬を凌ぎ、益蟲類の平地に多く潜在の形跡あるを知り得たり。

五、冬季外の採集に係る昆蟲展覧會の出品には、大形美麗のもの多きも、新種異品として斯學者の珍奇とするものは極めて少なし、而して本會の出品は昨年開設の全國昆蟲展覧會に比し、其區域の狭小な

るに關はらず、未ざ曾て世人の知らざりし種類頗ぶる多く、又農作害蟲として注意すべきもの亦前者に比して、相應に多かりし事を認め得たり。

六、冬季の採集品には、小形醜惡のもの多きを以て、裝飾用標本の如き競華爭妍の出品少なく、教育と農作等に適切のものを主とするが故に、學術研究上はた又害蟲驅除上、實に言外の妙味あることを確かめたり。

七、團躰出品奬勵の結果として教育者間には、或ひは授業を妨害すべし、との杞憂を懷きし者ありしも今回の出品に徵すれば、其成績の優良なるもの丶全部に、冬期の休暇若くは課外の時間に採集製作を了へ、毫も學業に故障なかりし事の解釋を與へたり。

八、昆蟲標本に、毎頭採集年月日及び採集地等を記入するは、甚はだ煩雜且つ無用のものと誤想せられしが、今回の出品の如き、細小形種にも、一々之を記入し得るの餘裕あるを以て見れば、畢竟這は爲し得べからざるにあらざるの事實を證すると共に、また分布區域調査の上に、必らずや之なかる可からざる事を明らかに知らしめたり。

九、冬季の採集品は、概むね展翅板上にて乾製とするの要なきを以て、其設備日數の多きを望むの徒勞なるを知得せり。但し蜂類の如き、乾燥に困難なるものと雖ども、また容易に乾固せしむる事を案出するに至りしは勿論なり。

十、冬季の採集品は、その容積少なきを以て、陳列と比較研究の上に非常の利益あり。特に破損し易き有翅種の此季間に、殆んど全たく生存せざれば、之が製作も普通農家又は兒女の手によりて完成せらるゝ事を誨へたり。又採集品を補足せんが爲めに、蛹若くは幼蟲を多く添加するの傾むきあれば、昆蟲の發育を知らしむるの點に於ては、確かに輕小ならざる利益あるを知れり。

其他なほ萬般に於ける經費の節約より、保存上の便益等に至る事項を算ふれば、何につけ特長の証徵を示さゞるは莫しと雖ども、冗漫に涉るの譏れあれば、上記の諸點を以て暫らく足れりとすべし。而して茲に列擧の利益の虛實は、之を目擊せし者に非ざれば、得て判知し難かる可きも、初め本會を輕視せし者の、入場先づ感歎の聲を漏らさゞるは莫かりしと云ふを以て見るも、其大概を推知するに足らん。

然れども前に述ぶる所ろは、其概要を言ふに止まり、未だ以て確實の結果とは稱し難し、况んや纔かに一回の試驗的展覽會に過ぎざれば、中に疑團を容るべきものまた少なからざるをや。是に因りて一般出品に對する詳細の報告は、調査決了後、尙は將來の經驗に徵して、世に公けにせんと欲するのみ。

初め、この會の計畫せらるゝや、余はこれに參考品を出陳せんことを欲し、吾が昆蟲研究所の助手五名に命じ、岐阜市内の山野兩處に於て、五種の冬季採集法を各々五回づゝ、都合五十回執行せしめぬ。時已に一月に入り、寒威凜烈の最中なりしが、此間に獲たる蟲數は九千九百四十七頭にして、之を分類すれば、五百廿七種に上りき。左に之を順次表出して吾が愛讀者の參考に供へ、併せて未だ冬季採集の趣味を解せざるの人に示さんとす。

冬季に篩網採集の圖

（イ）は選蟲の處（ロ）は振ひ居る處

第一、篩網採集法　　此法を行ひたるは、一月五日より同月二十一日までの間にて、採集種類は三百八十八、頭數三千六百八十五なりしが、其中山に於ては、二百三十一種二千百五十頭を獲、野に於ては百五十七種千五百三十五頭を獲たりき。而して更に之を調査するに、山に於ては、コメツキモドキ多く、ウリハムシまた多少あり　、野に於ては、サルハムシ最とも多く、白星瓢蟲、靑腰蟲の類之に亞ぎ、浮塵子の一種また多かり。此結果に依れば、山は野に

比して白星瓢蟲、サルハムシ、青腰蟲は少なきも、野に居らざるコメツキモドキと守瓜とは多かりしが如し。今これを七類分類式に從うて表出する時は、左に揭くるが如き事實となる。

類目		野	山	計	備考
膜翅類	種類	一三	二九	四二	野とは岐阜市街地及び郊外の忠節林より新村の邊を指し、山とは公園より權現山金華山の間を指せり。採集者は吉田悦三、長屋六二、名和愛吉、高橋基男、森宗太郎の六名とす。
	頭數	三〇	八九	一一九	
鱗翅類	種類	一	五	六	
	頭數	三	一三	一六	
双翅類	種類	一四	一七	三一	
	頭數	二九	六六	九五	
甲翅類	種類	八七	一二二	二〇九	
	頭數	一一〇三	一五〇四	二六〇七	
半翅類	種類	三五	四九	八四	
	頭數	三一〇	四〇六	七一六	
直翅類	種類	五	七	一二	
	頭數	五六	六八	一二四	
羅翅類	種類	二	二	四	
	頭數	四	四	八	
計	種類	一五七	二三一	三八八	平均一種に付凡そ九頭强に當る
	頭數	一五三五	二一五〇	三六八五	

第二、雜草採集法　此法は一月十日より同月二十日までの間に行ひしが採集種類は九十五種千六百頭にして、其中、野に於ては五十四種九百九頭を、山に於ては四十一種六百九十一頭を獲たり。而して其結果は七星瓢蟲最多を占め、青腰蟲、酸漿椿象、針椿象等これに次ぎ、守瓜の如きは殆んど全たく隻影を認めざるに反し、山に於ては守瓜最とも多く、コメツキモドキ、アヅキガメ、稻ガメ、薄ガメ類多く、七星瓢蟲は最とも少なかりき。即はち同一の採集法なりとは云へ、其地を異にすれば大ひに蟲種を異にせるものあるを見る、是れ明らかに昆蟲越冬の適地を誨ふるものと謂ふべきなり。今其成績を擧ぐれば實に左表の如し。

類目		野	山	計	備考
膜翅類	種類	六	二	八	野とは今泉新村の邊より忠節林等を指し山とは主に權現山及び伊奈波の邊を指す採集者は前同斷なり。
	頭數	七	二	九	
鱗翅類	種類	一	一	二	
	頭數	一	一	二	
双翅類	種類	一	〇	一	
	頭數	一	〇	一	
甲翅類	種類	二一	九	三〇	
	頭數	五四一	四一八	九五九	
半翅類	種類	一九	二四	四三	
	頭數	三二三	二六〇	五八三	
直翅類	種類	六	二	八	
	頭數	三六	七	四三	
羅翅類	種類	〇	三	三	
	頭數	〇	三	三	
計	種類	五四	四一	九五	平均一種に付凡そ十七頭弱に當る
	頭數	九〇九	六九一	一六〇〇	

●●附言　本號卷頭に揭げたる石版口繪は、冬季に雜草採集を試ろむる圖にて、兒童の上方に符合を附して列擧せる昆蟲は、すなはち冬季昆蟲展覽會に關係を有するもの丶みなり。故に本篇に於て之が說明を加ふるは、至當の如くなるも記事上の都合あれば次回にその詳細をものし、纔かに一回開會せる、冬季昆蟲展覽會たりとも、研學の上には、如何に多大の利益を與へしかを世に示さんとす、讀者その心して、暫らく來四月の「昆蟲世界」第五十六號を參看せられよ又昆蟲分布區域調査に就ては、本號雜報欄に記述する所ろある可ければ、將來贊同の厚意を與へられんことを切望す。

◎鳥類の食物と昆蟲との關係

岐阜中學敎諭　長野菊次郎　抄譯

鳥類の食物が、植物質なるか、動物質なるか、將また有害物を減ずるか、有益物を損するやは、益鳥と害鳥との二點を決する一大原因たらずんばあらず。然れども本邦に於ける鳥類の食物につき、古來果して精密の調査を經たるか、余の無識なる、未だ之を知る能はざるなり。然るに北米ユーナイテッド、ステ

ート農務省の千九百年報中に記載せるジャッド(Judd)氏の調査に係る、巣中の鳥の食物に於ける報告は此等の點に於ける余輩の疑問に對ひて、一道の光明を與ふる最良の材料たらずんばあらず。固より彼我位置を異にし、鳥類亦其種を異にせるを以て、直に之を我邦に應用すること能はざるべしと雖ども、之を參考に供することの、決して徒勞に非ざるを信ずるなり。特に鳥類の食物の、幾分が昆蟲にあることを知らば、鳥類の消長が、昆蟲の繁殖に、如何なる影響を及ぼすかを推定すべく、而して是等は保護鳥條例又は狩獵法等に、大關係を有するものたらずんばあらず。是れ余が淺學を顧みず、抄譯を敢てして以て未だ之を知らざる人に報ずる所以なり。

凡そ雛が最初卵より孵化してより、最後の雛が巣立をなすに至るまで、親鳥は非常の勞力を費すものにして、日出前より日沒後に至るまで、孜々汲々として殆んど倦むことなし。特に雛の食事は、甚だ頻繁なるものにして、平均二分間に一回の割合に當れり。初め雛は一日間に已れの体重より多量の食物を攝取して、一日間に二割乃至三割の重を增加し、終日食ふことのみに從事せり。此の如き有樣なるにより彼等の貪食の全量の莫大なること實に知るべきなり。トレードウエル(Treadwell)氏によりて捕へられたる、幼きコマ鳥の一種は、一日に六十疋の蚯蚓を喰ひ、ブリユーエル(Brewer)氏によりて觀察せられたる、若き雌雄の歐羅巴カシドリは、一時期に於て一百万の螟蛉を食ひたりと云へり。此の如く鳥の種類によりて、異りたる食物の多量を要することとは、農家に對して重要の關係を有するものなり。然れば多くの鳥巣は、生長する穀類等の附近に營まれ、又營巣の時季は農事の最も繁忙なる時と一致せり。

凡そ鳥は、動物植物を混食するか、又は其一方のみを食ふものにして、其雛を養ふにも、已の食物と同

一のものを以てすること通例なり。然れば、アジサシ、カモメ、ペリカン、アヲサギ、カハセミ其他の食魚鳥は、其雛を養ふに魚を以てし、鷹、梟等の如き食肉鳥は、其雛を養ふに鳥類及び哺乳類を以てし杜鵑、燕の如き食蟲鳥は唯昆蟲のみを以てし、鴿鳩の如き食穀鳥は只澱粉質の種子を以てせり。但し動植物を併食する鳥は、通常其幼鳥を養ふに、殆んど昆蟲のみを以てし、特に螽蟲又は地蠶等の害蟲其多きに居れり、而して普通の鳥の多數は此類に屬せり。

種子を食ひ、又は動植物を混食する鳥類は、强靱なる筋より成れる砂嚢を有せり。是れ此等の食物は重に硬き物より成りたれば、之を消化するに、胃の力を勞すること多ければなり。是に反して、消化し易き昆蟲又は他の動物を食ふ所の鳥類は、薄壁にして比較的柔軟なる胃を有せり。此等の解剖上の差異及び作用の如何は、幼鳥の食物の研究に對し、看過すべからざるものなり、何となれば、此等は成育の時期によりて、食物の差を生ずることに關係を有するを以てなり。

凡そ幼鳥は、成鳥と同じ構造の胃を具ふること勿論なれども、孵化したる儘の雛は、單に膜狀の袋を具ふるに過ぎずして、筋の發育甚はだ微々たり。故に極めて軟にして、速やかに消化し得べきもの丶外は同化すること能はず、此故に諸種の鳥に於て、其幼時と成長したる後とは、全く食物を異にすることあるも、敢て異むに足らざるなり。

强き砂嚢を有して、穀粒を啄む鳩の如きは、其雛を養ふに、鳩乳とて穀粒の消化されたる半流動体を以てし、之を雛の咽頭に注ぐ。然れども植物を食とする多數の鳥類は、皆此の如くなること能はざるを以て、其雛を養ふに昆蟲を以てするなり。

烏の一年の食物中、其四分の三は植物質なり。然れども雛の食物としては、屢々柔かなる蜘蛛を以てせ

り、是れ柔軟なる幼生兒の胃に適すればなり。其他これと同時に小さき鑫蟲及び柔なる小さき地蠶を以てす、されども胃の發育するときは、甲蟲の如き堅き昆蟲も亦食物の一部分となり、幼鳥の胃は穀物をも消化すべく十分堅牢となるなり。此の如くなれば穀物自由に給せられ、漸次其量も増加し、雛の巣立する頃に及びては、其四分の一を占むるに至る。

(ミソサヾイの一種の食物の割合圖)

(成鳥)(イ)アチムシ類(ロ)クモ類(ハ)カメムシ類(ニ)カゲロフ類(ホ)ゾウムシ類(ヘ)イナゴ類

(幼鳥)(イ)アチムシ類(ロ)クモ類(ハ)カメムシ類(ニ)カゲロウ類(ホ)ゾウムシ類(ヘ)イナゴ類

譯者曰く、原著には數十種の雛と、成鳥の食物につきて、詳細の記述あれども、悉く之を列擧する必要を認めざるを以て、以下本邦産に近縁のもの丶みを選ぶこと丶せり。

◎アメリカ、コマドリ(Merula migratoria.) 此鳥はレンジャク類の如く、園藝家に煩を及ぼすものあれども、雛の時代に於ては、昆蟲を食すること少なからざるなり。ビール(Beal)氏之を注意したるに、雛は親鳥によりて、一時間に五乃至六回食を與へらる次に十四羽の雛と八羽の親鳥の胃とを驗したるに數種のイナゴ類、櫻ザイフリボク等の實は、幼鳥に於ては僅か百分の七に過ぎざれども、成鳥に於ては百分の七十に及べり。而して幼鳥の要する昆蟲類は、重に螟蛉、蝗、鑫蟲、蟋蟀各種の甲蟲等にして、蜘

蛛、蝸牛、蚯蚓等も亦其少量を取るものなり。

◎ミソサザイの一種(Troglodytes aedon)　此鳥は全く昆蟲類のみを食とするものなれば、農家に對して最とも有益なる鳥の一なり。巢中の雛は、頻繁に食物を取り、其量驚くべきものなり。著者の觀察によれば、或る日親鳥は、四時三十六分間に百十回雛に近づき、昆蟲と蜘蛛との合計一百十一疋を給したり。他日同一の觀察をなしたるに、三時五分間に、雛は親鳥より六十七回の食物を給せられたり、蓋し此時の雛は、殆んど四分三の生長程度に於てありき。その食物の割合は圖によりて知るべし。

◎モズの一種(Lanius ludocicianus excubitorides)　キング(King)氏の觀察によれば、モズの一種は、雛に鼷鼠及び少さき鳴禽類を給す。而して近く拋棄したるモズの巢を驗したるに、ミチシルベ類の鞘翅の、數多存することを知りたり。嘗て實驗所に於て、六羽の雛と六羽の成鳥とを驗したるに、其食物の百分の七十五は、蝗類なりき。而して、雙方共に甲蟲、コホロギ及び蜘蛛を取り、幼鳥の二羽は鼷鼠の一部分を食ひぬ。然れども成鳥は單に昆蟲のみを食とせり。

(モズの一種の食物の割合圖)

(成鳥)
(一)直翅類(イ)蜘蛛類(ロ)種々ノモノ(ハ)甲蟲類

(幼鳥)
(ホ)直翅類(イ)鱗翅類(ロ)蜘蛛類(ハ)有脊動物(ニ)甲蟲類

(未完)

◎明治三十四年の氣象と害蟲の發生

北總　大竹義道

凡そ昆蟲は、年により其發生の多寡を異にするものなるが、其かく不同を來たす所以は、蓋し天候の變調によりて、或種類は減少し、或る種類は增加するが爲めならん。是を以て、昆蟲學を研究する者の、

時々刻々に變化する天候に注目し、以て害蟲の發生增減の狀態を觀察するは、後年の參考として頗ぶる價値ある事と信ず。先年或害蟲の非常に發生せし時、この比例を以てすれば、次年は如何に其種族を蕃殖せしめて、一般農作に加害するかを危ぶましめしに、意外にも其後頓に減退を來たしたる爲め、次年には格別の被害を見るに至らずして止みき。此事例に徵するも、測候の害蟲發生に緊密の關係あるを知り得べし。

去れば、年每に初冬以來の天候に注意し、研究を積み、經驗を累ね、その結果を以て、斯る天候の變調には何種の害蟲を減滅し、又斯る順候には何種の害蟲を增殖すと云ふが如き事實を、逆じめ未發期に想察し、以て弘く之を當業者に警告し、其種族の蔓延せざるに當りて、銳意豫防的驅除に勉めなば、斯業を利すること特に大なるものあらんと信ず。

因に云ふ。害蟲の甚はだしく發生せざる年たりとも、猶は幾多の遺類の、其嗜好植物を蝕害し乍ら、種族の蕃殖を圖るものあるを以て、其年に農作の被害なしとて偸安の情を發すことなく、反つて斯かる年にこそ極めて嚴密の驅除を行ふを最上の策とすなれ。然るを我國の當業者は、害蟲の加害劇甚なるに至らざれば、驅除豫防に手を下さゞるの風あり、姑息もまた太甚しと謂ふべし。

今より昨年の天候を追懷するに、余が寄寓地の如きは、前後違例相續き、冬季以來頗ぶる順調を缺けり隨うて或害蟲は多く蕃殖を遂げて、或作物に慘害を與へたるも、或種類のものは、大ひに少なく、却つて平年に見るが如き加害なかりき。余は爰に此等害蟲の、甚はだしく發生蔓延せる狀況を列記するに先だち、天候の變調の一斑を叙述せんとす。

◎明治三十三年十二月　此月の上半月は、概むね冬季の狀態を存し、氣流の變動やゝ頻繁に、天氣に變化多かりき。即はち七日は多雨にして、八日は晴天に復したるも、南の暖風吹來りて、人をして不快を感ぜしめ、その翌九日より十四日に亘る六日間は、過半晴天にて、早朝の外氣は攝氏の零度以下を示

し、又十五日より十八日に至る四日間は、終日快晴を持續したるも、十九日よりは陰雨勝にて過暖を感じき、蓋し氣流沈滯のために、著るしき變動ありしに因れるならん。

◎明治三十四年一月　その冬季の狀態を缺けることは前月に同じく、殆んど例年に見ざる變態を呈せり、即はち凜烈肌を裂く寒風の吹き續くこと少なくして、氣流緩慢の日多く、且天氣の變化不規則にして、溫暖を覺ゆるの氣候は割合に多かりき。就中、其顯著の日を擧ぐれば、四日は早朝に濃霧を罩めしが、遂に霽るゝに至らず、終日暗鬱の曇天を現じて雨模樣を呈し、其夜半より微雨を降せり、五日、午前は細雨を持續し、午后三時頃よりは、此の强風に雨を混へ、夜に入り益々强雨となれり、乃ち終日の雨量を算するに四十耗餘(一坪の雨量は七斗三升二合餘の割合)なりき、斯くて九日に至るまでは、絕えず陰鬱なる曇雨の天候を以て、暖濕を覺へき。

◎二月　前月とは大ひに異なり、上半月は全たく冬季の特徴を呈し、寒氣多く加はりて、天氣に劇變あるを見、隨うて寒暖の差も顯著なるを示し、而して下半月は、これと稍趣むきを殊にしき。即はち十九日は快晴を來たし、日中は頗ぶる暖氣を感じ、二十日は暖氣なりしも、曇天にして不良の摸樣を現はせり、廿一日は過半曇天にして且つ暖氣多かりし爲めにや、燈火の下に一種の馬尾蜂の飛來れるものさへありき、超えて廿七八の兩日も、亦暖晴なりしかば、蠅族の飛遊するを認めぬ。

◎三月　上半月は、依然冬季の狀態を繼續し、天候の變化繁く、時々寒風の襲ふ所ろとなれり。一日より四日までは曇雨ありしが、三四兩日に雨雹を降下し、五日は快晴に復し、六日午後より曇天に變じて南の暖風を來たし、軈て雨摸樣を催ふせり、七日は過半曇天又は小雨を見、夕に至りて始めて晴天に復せり、九日は終日快晴、特に暖氣强かりき、十日は前日と異ならざりしも、午後に不良の徵を現はし

十一日は雨降る、其後陰晴不定の象を以て數日を送りしが、十四日に至り俄然として寒氣を増し、早天の外氣は零下三度餘に沈降し、且つ過半晴天なりき。斯くて下半月に移れば、冬季の氣象大ひに去りて溫和輕暖となり、氣温は割合に昂昇して、概むね晴天を連續したる爲め、種々の蛞蝓類を發生せり。今之が概要を言へば、其十六十七の兩日には、モンシロテフの圃間に飛揚するを目撃せしが、廿一日よりは天候一變し、廿二日には將に降雨あらんとするの摸樣ありしも、午後快晴に復せり、此日早朝に蚊影を見き、廿三日より雨となり、廿四日に至りて一時多量を降せり、越へて廿七日は快晴溫暖なりしが、郊外に於てはヒオドシテフ、キリウジガガンボの飛行を認めり、廿八日午前、團雲を南東方に認めしが午後晴天に復するや大ひに暖氣を増し、爲めに桑枝にある卵塊(夜盗蟲のものに似たる)より害蟲の孵化するものとウメケムシの幼蟲の出づるものとを見き、廿九日前十時頃、西方に暗黑の雲影現出し、又南方の暖强風吹き來りて、甚だ險惡の摸樣となる、此變化の前兆は翌卅日に至り、東北の暴風雨となる可きを示せるあり、此日甚だ寒冷を感じ、雨量は四十三粍(一坪に七斗八升六合餘)を算しき。　(未完)

◎イラムシの繭と柳のタマバヘとの話 (續)

名和昆蟲研究所長　名和靖　講演

柳の球蝿と申しますと、何の事やら鳥ッ渡、解かりにくいかも知れませんが、是は常に柳の枝に附てある一種の瘤……瘤と申しても人間の瘤のやうに大きい物ではありません、兎も角も柳の枝に圓く

て堅く附て居るものがありますが、今申すのは其中に居る蟲を云ふのである。それは大概蛆のやうな形をして居りますから、誰でもそれを取ッて割て見ると直ぐ解かるのでありまして、其蛆が段々日數を經つと蠅の一種となるのである、斯ういふ譯から、俗はタマバヘと云ふのであッて、此球蠅は枝にばかりではありません、種類によると葉にも澤山附て居るのがあります。

タマバヘの事を人に依ッては、また手鞠蠅とも申しますが、是は昆蟲學の上から申すと、雙翅類の球蠅科(Cecidomyidae)に屬して居るもので、種類は澤山にある。朴にもつけば、竹にもつく、が一番に誰の目にも注くのは柳のものであるから、茲には柳の球蠅を例に引くのであるが、書物の上では概して蟲癭と申して居る。チウエイ……支那では瘤癭即はちコブと計り言ふてはあるが、決して精しい記載とては無くあッたから、故事を引て御話しする譯には參らん、併し昔しは一般に、蟲の巢とは見認めて居らなんだらしい、現に我國でも、百年許り以前の博物學者、大阪の蒹葭堂先生……木村巽齋と云へば、其頃きッての藏書家で、好事家で、博識家であるが、其先生が書かれた本などを見ると、竹の蟲癭の事をば笹魚と申しまして、其竹笹と云ふ物は自然に谿河へ墜ちて、嘉魚と云ふ魚となると申して

岩魚とはまだならずとも笹魚のさゝをすゝむる一ふしとなれ

などゝ和歌をも引き、圖畫をも加へてある。其外蚊母樹などにある蟲癭は、能く人の見聞するものであるから、決して珍らしいものとは申されんが、あれが蟲の巢だと云ふと、如何にも不思議さうな顏をする人がある、畢竟是迄は昆蟲研究と云ふ事を、餘り貴んで居らなんだから、自然注意を缺いた結果として、十分に調査せんのである。其はさておき、柳の枝の瘤を取りまして、子細に之を見ますと、一局部が異形に膨起りて居て、如何にも何か譯があるらしい。そこで之を割いて見ますと今度は中から小蛆が出て參ります、其小蛆も一疋づゝ棲んで居るものと、一處に數疋棲んで居るものとがありまして、決して一樣ではありません。是は申すまでも無く、種類が違ふものであッて、私が今茲に述べやうとするのは一瘤に一疋づゝ棲んで居るものを指すのである。

然らば、此蟲は如何にして、この毬形の瘤を作るかと云ふと、初め此中に居る幼蟲(第三圖イのもの)が春の三四月頃に蛹となり、間も無く成蟲となりまして、大抵五月頃には生殖作用を行なひ、枝條の皮の中に卵子を産附くのである、其卵子から孵化しました幼蟲即はち蛆は己が食物をあさり、枝に刺戟を與へますから、日數を經つに從がひ、その蟲の居りまする部分が、自然と變化を起しまして、丁度人間に

瘤と云ふ贅肉が出來ますやうに、段々と膨れあがるのである。すると幼蟲も追々大きくなりますが、其年は此の瘤の内で年を取りまして、明くる年の春に、蛹となり、次で羽が生へて飛出す、飛出せばまた生殖を行ふと云ふやうに、斯うして年々其種族の蕃殖を圖ッて居るのである。そこで、此蟲は、一年一回の發生であると云ふ事が、明らかであります。然らば成蟲は何ンな方法で以て、斯かる堅い枝を破ッて外に飛出すのかと云ふと、是またイラムシと同じやうに、幼蟲時代から小さい孔を穿けて置きますので、假ひ斯ンな窮屈らしい巣に入ッて居りましても、少しも窮屈を感ぜずに、自由に空氣をも吸取り、又堅牢無比の城郭の中にあッて、安心して食を求め乍ら生長するのである、實に奇妙と申すより外に譬へやうがありません。

ヤナギノタマバヘの圖（第三圖）

（イ）は癭内に幼蟲棲息の狀態
（ロ）は其成蟲の放大圖（雌）

右申しました通り、最早一二ヶ月の中には蛹に化し、間もなく成蟲となりますが、其成蟲を見ますと、全躰は黑いもので只見た處では蚊の樣な形をして居ります。翅が二枚で脚が何れも長くて……併し乍ら、之を能く取調べると、全たく違ふて居ッて、色は暗褐色で、躰の長さは一分四厘許り、其着色のある翅を擴げると二分五厘許りの蠅の一種（第三圖ロのもの）であると云ふ事が判然致します。左樣な次第でありますから、昆蟲の分類學と云ふ方から申すと、雙翅類に入れられて蚊や虻など丶科目を同うしてあるのであるが、結局蚊とは親類同士に違ひは無いが、骨肉を分けた近親の間柄では無いのであります。

是まで申述べました通り、彼のイラムシと申せ、又この球蠅と申せ、種類は非常に違ッて居りますが、其本能の作用で以て、自分の種族を繁昌させる爲めには、共に各々實に驚くばかりの仕事を致して居る、然かも皆幼蟲時代から遺算の無い準備を致しまして。そこで私共は此二種の蟲を見るごとに、誠に耻かしい思ひが致しますが、これに就き三つの注意すべき事項があると存じます。其第一は教職に在る人の

この道理を授業の際に應用しまして、兒童の時代即はち昆蟲なれば幼蟲時代から、孜々として後來の事を遠く慮はかりませんと、決して善良の結果を得ない、若しイラムシの繭に啓開すべき傷痕なく、柳の球蠅に小孔を存せぬ日には、折角成蟲となッても、種族蕃殖と云ふ最終の目的を達し得ないで、巣の中で斃るゝ計りである、これと同じく、人類も成長の後に、世に雄飛して祖先の名を辱かしめず、且鴻業を成さんことを望みますれば、先づ其幼時期に十分の覺悟が無くてはならぬ、覺悟をせぬと或ひは家の中に潜んで死期を待つばかりである……丁度出口の無い昆蟲のやうに。又如何に老成しても一時慾に迷ふ事があると、寄生蠅に其身を失ふイラムシの樣に、一事業をも作る事が出來なくて亡びますから、德性の涵養が大切であると云ふ事を敎ふるの必要があらうと思ひます。第二の注意すべき點は昆蟲學を學ばうとする人が、研究の材料にする事で、最とも獲易いイラムシの繭や、柳の球蠅の御蔭で以て、習性經過の有樣から、自然の妙用、天敵の制裁且は驅除豫防の道理までを推知することが出來まして、彼の大形のものを粗雜に研究するから見ますと、比較上多くの緻密な觀察力を養成し、之が爲めに他の複雜な昆蟲、例へば浮塵子とか鋸蜂とかマラリヤの蚊とか申すやうな、微小種の研究に一方ならぬ利便を來たす事と存じます。さうして次の第三の注意事項は、應用昆蟲學には最とも必要な事であると信じます、即はち害蟲驅除の時期に最後の判斷を與へる事で、蟲類により驅除の時期は多少違ふにしても、成蟲とならん間に早く驅防の方法を講じさへすれば、蟲害は左まで恐ろしいもので無いと云ふ事を悟り得る一段である。前に申述べましたイラムシで見ますと、成蟲となれば殆んど驅除の方法が無い、幼蟲時代でも之を見出すには容易で無いが、偖繭を作ッて蛹となる期間でありますと、少しも煩ひ無しに、有らん限り絶滅さする事が出來、又球蠅でありますと、形が小さいだけ其卵期には能く解りませんが、幼蟲期より蛹期の間には、誰にも解りますから、苦も無く取盡す事が出來る道理でありますに依ッて、之を尙ほ弘く害蟲驅除に應用して、專ら豫防的驅除法に重きを置き、更にまた敵蟲即はち益蟲の効力の多い譯を悟りまして、益蟲は是非保護せんければ成らぬと云ふ方針を立て、衆力を以て同じ軌道を歩みました日には、今後如何でか去る三十年の樣な悲慘極まる事が無からうと存じます。私が今日縷々長い時間を惜氣も無く申述べましたのも、畢竟この三つを御話したいと存じましたからの事であつて、成るべくば今後この道理の應用を望むのであります。特に昨今はイラムシと球蠅を採集なさるには、屈强の時節でありますから、試ろみに私の話しを問題として、一二度は御實見を願ひたいのであります。（完）

◎本邦昆蟲研究家叢話（其三）

北勢　丹波修治記
古奥　青蓑白笠人補

◎松平君山先生の遺澤　先生は尾張名古屋の人なり。本姓は千村氏、名は秀雲、字は子龍、君山と號す、又別に龍吟子の號あり、その俗稱をば太郎左衛門といひき。元祿十年を以て三河に生れ、長じて尾藩の門閥松平忠久に養はる、因りて松平氏を冒せり。享保九年、年二十八、家を嗣ぎ、儒學を以て本藩に仕へ、書物奉行に擢用せらる。

先生博學强記、夙に萬卷の史書を讀破し、文詩筆に隨うて立どころに成る。又居常名物の學を好み、講學の傍ら、本草を修め、能く動植庶物を辨別せり。藩すなはち先生をして、舶來の藥卉菜菓の民用に益あるものを擇び、適地を相して之を栽植せしむ。當時儒を以て口を糊する者、多くは經書の字句を解釋するに跼蹐し、その眞に實學を重んずる者に至りては、寥々聞く所なかりしに、先生獨り意を經世濟民に專らにし、兼て力を後進の誘導に致し、絶えず活學の振作に努められぬ。後年、尾州藩に博物學の勃興し、一時その淵叢を以て、海内の耳目を聳動せし所以のものは、實に先生訓陶の遺澤によれり。故理學博士伊藤圭介氏曰く「我愛知に於て、蚤く本草學を唱へしは、松平君山なり」と。

安永五年、先生年八十、本草正譌十貳卷を上木し、以て貝原益軒、松岡恕庵、直海元周諸氏の所說の謬妄を辨駁す。中に蟲類に關するもの凡そ五十餘條を擧げ、之をその第八卷に收めり。其他、毛詩翼、博覽錄要正續二篇、年中行事等、昆蟲學者の參考に資すべき著述また少なからず。年八十七、卒にその家に歿しぬ、時に天明三年四月十八日なり。

先生もと著書に富む、特に群書品節正續兩篇、表海英華、君山漫錄、詩經國風衍義、弊帚集、孝經直解、南軒日課、故實考、張州府志、吉蘇行記等の如きは、粗ぼその蘊蓄を伺ひ知るに足れり。門下に奇才多し、太田恒可、岡野滿雅、恩田宣充、千村諸成、石川安貞、人見黍、大河内重昌、小見山順友、山田重

問、岡田挺之、磯谷正卿等みな秀雋の名を得たり。その子鶴山、孫伯邦また文學に長せり、明和元年、朝鮮の使節南和玉の名古屋に次するや、父子三人之を賓館に訪ひ、唱和應答遂に三世唱和の著あり。世に傳へて之を文壇の一佳話となすと云ふ。

本草正譌の成るや、高足岡田新川これに叙していはく「君山先生吾藩望族、職爲書室監、兼掌編脩、素以博雅鴻儒、著稱於世、鉛槧之暇、最好物産、每遊歷山澤、値嘉卉異常者、則采而收之、移置家園、朝夕玩之、徵諸歷代本草、待名實相副而後已」と以て先生の行狀の半面を知るに足りぬべし。而して磯谷滄洲の同書の序を爲るや、叙事更に詳密を加ふるものあり。その略に曰く「然先生退食之暇、非披帙軒窓、則灌花庭塢、觀禽魚之親人、弄奇石於懷袖、新異日集、珍怪旁至、從而辨之、莫不明了、故其十畝之園、醫藥者往焉、樹藝者往焉、推爲葯圃一大主盟(中略)是以其從如雲、年已八十矣、筋力不衰、聰明視昔、諄々誨人不倦、兄彼以本草者流自任者之屬也哉」と、是言蓋し先生の聲望、學德を披陳して遺憾なかるべし。嗚呼、先生の如きは、寔に達觀の士といふ可きなり。

按ずるに、一書には、先生を以て松本氏となし、其先は三河の人となせり。然れども、未だ其據れる所を詳にせざるを以て、兩つながら之を斥けり。又按ずるに、先生の英名の遠く他に傳はらざるは、是れその門生の多くは名古屋封内の出身なると、其著書の上梓せしもの少なきに因れるか。

◎昆蟲見聞漫錄

長野縣南佐久郡　小山海太郎

怠り勝ちなる身には、別に面白き研究も出來ぬものから、とんと御疎音仕りました、久し振りにて相も替らざる無駄口を叩き申す、以前の御厚意に依り、一通り御目を通し下さらば本望であります。

○なべふたむし　余は見聞と云ふ事の最も少なきものかな、自國に如何なる蟲が居るかと云ふ事も更に解りませんでした、昨年當地に住ふことゝなりしより、家業の傍ら住居に近き小川の底を注目すると只見一箇の圓形の蟲の蠢くのがある、是れは余が見慣れぬ物ドやと思ふて、再三見る中に何時しか其形を見失ふてしまうた、偖て變なことよ、今居たものが如何したのか知らんと、尙も瞳を擬らせば豆粒大の礫の間より、先の小蟲の再び表はれ出でたれば、すは御座んなれ逃しはせじと指頭に心を集めて遂に捕獲すれば、一個の有吻蟲類にしてタガメ、カツパムシなどに近きものなれども、其何と云ふものなるかを知らず、其後鮒やアランボ等の小魚を漁らんとする度に、ケイサンダイ（魚を捕ふる器にして四つ

手網に以たるもの）の網目細なるものを用ゐるときは、夥しく此蟲を得べく、蟲は水を離れて、人体に觸るゝと、忽ち鋭き吻を以て皮膚を刺傷し、痛さを感ぜしむることを見出した。其形態より推想すれば、タガメなどと同じく、肉食性なるものゝ如し、爾后時々之れを捕獲するに、常に大小數種あるを見れども、嘗て翅を有せるものを見ぬ、本年一月中も時々採集を試みたが、有翅のものとては無く、唯稍小形にして幼蟲なるが如きもの又少なからず、是れに依りて之を觀れば、恐らくは該蟲は常に流水中に生活するものにして、產卵孵化の如きは、殆んど一定の時期なく、又其住所は常に水の絕ゆることなきを以て、飛翔力を有して他に移轉するの必要なきより、終に翅は退化せしものにあらずやと愚考せり、思ふに此の如き蟲は尙ほ他所に產するべければ斯の學に熱心なる諸君子幸に其研究せられたる所あらば垂敎ありたし。因に記す、當地方にては該蟲をナベフタムシと稱せり、其形の圓形なる故にや。

ナベブタムシの圖

◎クサカゲロフ稻の花粉を食ふ　ちと舊聞に屬することである、一昨年即はち三十三年の十月であつた、余が田圃に出でゝ稻の穗並を見廻はつて居る中、無端稻の穗先にクサカゲロフの靜止して居るのを認めた、常なら直に捕獲する所であるが、其の習性を觀察せばやと、足を止めて暫時見張りて居ると、クサカゲロフは余が見張りて居ることを知るや知らずや、依然として穗にあり、怪んで之を熟視すれば花粉を食ひつゝある。稻は風媒植物の恒として、頗る多量の花粉を有するものなれば、之か爲めに何の影響をも被らざるべけれど、又意外の事ならずや。

◎ヲバボタルの幼蟲光を有す　ヲバボタルは其形螢に似たるも、光を有することなく、能く晝間出でゝ飛翔するものなるが、昨年余も少しく螢の研究に志さし、二三の幼蟲を飼育せしに、其中にヲバボタルと化せるものもありしが、然れども其の幼蟲又は蛹は、著しく青光を發して美麗なるものなりき。然ればヲバボタルも螢と同しく有光なるも、其成蟲は晝間性のものとなりたる爲め、自然光明の必要を有せざるに至り、斯く無光のものと變せしものか、自然淘汰も亦面白き者にあらずや。余が地方にて月夜に灯燈を燈すときは、「月夜に提燈、アンボンタン」と嘲る語あり、蓋しアンボタンは愚者の意なり、ヲバボタルを見れば此言又さこそと思はる。

◎野遊び（昆蟲分類）

愛知縣三河國額田郡 山本秋三郎 原作
名和昆蟲研究所長 名和靖 改作

發足

野山のかすみ樹々の花。空さへ晴れて風匂ふ。
春は樂しきものなるを。わけても今日の長閑さよ。」
柳の糸のゆら〳〵と。招ぐあたりに鳥も呼ぶ。
いざ打連れて諸ともに。すゞろ歩きを試みん。

膜翅類

看よや小蜂の急しげに。花蜜數多あさり來て。
冬の糧をば備へんと。倶に勉むる彼のさまを。」
仇とし見れば勇ましく。宿るもあれど咬むもあり。
やがては國の爲めをなす。是ぞ膜翅の類ひなる。

鱗翅類

よしや優しく飾るとも。風に驚き露に怯ぢ。
短かき夢をカラ蝶の。戯ふれ暮らす花の庭。」
幼なき折は仇をなし。老ての後も香に迷ふ。
實に淺ましき限りかな。是ぞ鱗翅の類ひなる。

雙翅類

賢こき人に忌まはれし。うるさ蝿やら蚤と蚊の。
絶間あらせず今になほ。仇をなすこそ心得ね。」
二つの翅にうなる聲。親子のさまは異れども。
穢れを好くは皆同じ。是ぞ双翅の類ひなる。

甲翅類

いのち短かき夏蟲の。火蟲のころも二重着て。
葉裏に潜み隱れつゝ。綱なす計り食み荒らす。」
たとひ羽色の似るとても。世に卑しめるあだむしを。
コガ子と呼ぶは最と憎し。是ぞ甲翅の類ひなる。

半翅類

憩ふ芝生の此處かしこ。横ばふものは小糠蟲。
薔薇の若芽に群がりて。あぶらを吸ふは蚜蟲。」
草木の蟲の數あれど。國を賊なふあだむしは。
斯かる族らに外ならじ。是ぞ半翅の類ひなる。

直翅類

青葉が下に身を屈め。あだなすものを薙ぎ倒す。
カマキリ蟲の雄々しくて。龍車に向ひし故事もあり。」
善きも惡きも押なべて。形大きく身は輕く。
つばさは直に脚太し。是ぞ直翅の類ひなる。

羅翅類

空疾く翔けるカゲロフや。琴の花てふウドンゲの。
多かる年は豊かにて。國の榮への本と聞く。」
痩せし姿に似もやらぬ。鏡のまなこ虎の牙。
あだ蟲捉らぬものは無し。是ぞうす翅の類ひなる。

教訓

この分類を約むれば。膜鱗雙甲半直羅。
鱗双半は液汁を吸ひ。膜甲直羅は物を咬む。」
中にも膜羅は益をなし。外の五つは害多し。
益をすゝめて害を避く。是ぞ吾等の義務なる。

歸途

けふ學びてし蟲の名は。小蜂カラテフ蠅ノミ蚊。
名を詐りのコガ子ムシ。小糠蟲よりアブラムシ。」
花の梢に三日月の。磨ぐカマキリも朧ろにて。
もゆるは何處カゲロフの。影を便りに歸る樂しさ。

編者云ふ、この野遊び分類の歌は、山本氏より、名和當昆蟲研究所長にあて、校訂の上は、雜誌ニ掲載を望む旨申越されたるものなるが、原作は口翅の搆造のみを詳述するニ偏し、更ニ農作ニ關係ある益害蟲の區別より、小學兒童の德性涵養に必要なる、勸善懲惡の意を寓する所なかりしを以て、其字

句は勿論、全躰の結搆にも、すべて改訂を施こせり。例へば原作は、九章なりしを增して十章となせしが如し。是れ或ひは山本氏の本旨に背くやも測り難けれど、昆蟲學思想の普及を圖ふんが爲めゝ、此種の作を歡迎すべき折なれば、其用意を愛づるの餘り、扨は斯く計ひしなり。覽者其心してよ。

◎播磨の昆蟲に就て

兵庫縣揖保郡香島村　大上宇一

○子孑の越冬　子孑は小用所等に越冬するも、常には浮ばず、雪を澤山小便溜等へ入れて見るべし而後雪の解かゝる充分に居たら浮出す其理は知らず、雪を入たら何か化學的の變化の爲に水が温かになるか冷かになるかの作用なるべし。又種類に依りて越冬するものと、せざるものとあるべし、我等如き素人の眼よも、三四種は居るかと思はる。越冬するものはクロカとなるや否や未だ詳ならざ、蚊の幼蟲が越冬せざるものなりせば、クロカは如何にある可きか。此頃マラリアと蚊の關係云々あり參考迄に。

○リスノミ家鼠にも生ず　家鼠の毛中よ狹長の蚤を負ふを見る、是れリスノミと同種なるべし。去れど松村氏の昆蟲書には子ヅミに寄生すとの記事なし。

○アサギマダラの食物　アサギマダラと同屬の D.Euripus,L が、南米よて白前科のタウワタを食ふ事を知れるを以て、動物學雜誌には、食草未詳とあるよ關はらず、幼蟲は白前科の植物を食ふべしと推考せしも、未だ見當らざりしよ、神村氏は、カモメヅルを食ふとを發見せられぬ。されど余が推考の如く、白前科のものなり、然も余が村內の山中にては、十一月上旬に、此蝶を兩三度見るも、カモメヅルは未だ之を採らず。思ふよカモメヅルの外にも、同科のもの多く、イヨカヅラ、カヾイモ、コケイマ等を產すれば、此中の何れかを食ふ事必せり、此等植物に注意せられなば、其幼蟲を發見するとあらんなり。

○冬日の採集品　一月十七日に田中よてマグソムシ一疋を、十八日にブチヒゲカメムシ一疋を、十九日にシミを標本中より、十一日に植物標本中より衣蛾の幼蟲を、二十日よハリガ子ムシを、二月八日よ越年せる小蛾類一疋を、二十日に松の切株の朽たる皮下よりホシコメツキ一疋を、二十三日よ池邊にてサシガ子トンボ二疋を、(是も越年するかと思はる)同玄池中の水の乾きたる際、水草を除きてスナムグリ一疋と同科の新種二種を、廿六日にムギガに似たるもの一疋を、廿七日にマグソ蟲一疋を、三十日にツチイナゴ一疋を、一月二日よノミバツタ一疋を獲さ。想ふに讀者諸氏の採集品も之あらん、其名稱の確定せしものは巨細報道ありたし、昨年名和梅吉氏が城ヶ嶋へ冬季採集を試みされし際、只其類別のみ

を報告せられしは甚ざ遺憾なりし。可成的種名をも報知ありたき事なり、採集の參考ともなふん。余昆蟲世界を見るに殆んど驅除方に止り、種類の報知、分布の報知等は甚だ稀（普通種の方言は度々掲げあるも）あり、希くは今後種類學の材料を供給せらるゝやう、一言同志の人に望む。

◎貿易品と昆蟲摸樣の關係

在靜岡縣靜岡市　岡田忠男

去る二月初旬、官暇を得て西遊を試む、途に名和昆蟲研究所を過ぎり、岐阜縣冬季昆蟲展覽會を觀る。岐阜縣に於ける昆蟲學の進步や實に著しく、昨年第一回全國昆蟲展覽會出品物に比較して優に其上に出づること數等なるを知れり。次で名和昆蟲研究所陳列舘を縱覽す、名和先生の說明大に要領を得たり、曰く陶器の昆蟲を描寫するものゝ如きは、實に日進月步の狀を呈せり、若しそれ當業者にして、愈々進んで倦まずんば、其佳境に入るは、蓋し遠きにあらざる可しと。是れ我國應用昆蟲學の發達なり、豈に視せずして可ならんや。而して漆器に對する同所長の言に曰く、岐阜縣物產舘に出品する所の漆器は、槪むね靜岡縣の製出にして、其圖する所は多く昆蟲摸樣を以てせり、故に世人の嗜好に投じ、販路頗ぶる廣し、當業者能く岐阜と昆蟲との關係を知るものかと。歸路その所謂、靜岡產漆器なるものを見るに其圖する所は多く陳腐に屬する支那風昆蟲の圖畫にして、吾が靜岡漆器業家が改良の念に乏しきを嘆じ歸岡直ちに某漆器店を訪ふて、漆器に施こせる昆蟲畵の改良の急要と、岐阜縣物產舘の陳列品等に關し縷々卑見を述べたるに料らずも意外の談話を聽得たり。其言に曰く、靜岡の特有物產とも稱すべき漆器は、昨年五月以降頓に昆蟲摸樣輸出品を增加し、之が流行に伴れ文庫、額面等にも皆昆蟲（蝶蛾）を畵くに至れり、同時に岐阜縣物產舘に出陳して、偶然にも岐阜と昆蟲との關係を生ずるに至りしなり。斯く昆蟲摸樣を施こせる漆器の好景ありしを以て、漆器業家は意匠に意匠を加ひ、新品を製造したるの結果端なくも輸出品に一大頓挫を來せり、他にあらず黑色彩色の蝶畵是なり。そも黑色彩色蝶は外國人の最とも嫌忌するものあるを、當業者その事情に通せず、濫りに此かる製作をなし、而して輸出漆器に不況沈滯を來たし、此打擊を被ふれる結果は、海外に於て昆蟲に對する嗜好の實際を調査せざる可からざるを感知せり、云々と。是れ昆蟲を描くに些々たる彩色の、能く外國貿易品に影響を來すとは、何人も夢想せざる所なるべきも、其實情は却つて此くの如きものあり、應用上の注意は實に寸分の微も欲く可からざるなり、敢て工業に關係を有する斯學研究家の一讀を煩はさん。

◎山形縣の昆蟲雜記

山形縣北村山郡田麥野村　村山榮太郎

○昨年の昆蟲　昨三十四年ハ實に昆蟲の多く發生したる年にて、先づ近き例は、俚諺に、田植の握飯に蠅が三疋止まれば豊作なりと傳ひ居るも、何の三疋所か、數多く集り來りて、實に拂ひども去り難かりき。次で蚊も亦前年よりは遙かに多く、螟蟲の如きは發生甚はだしくて、郡衙よりは移植後二回の驅除命令を發せり、白髪太郎は漆の葉を食盡し、遂に桑の枝を借りて巣を結び、桑毛蟲は頑陋なる農家をして、自から手を下して之が驅除をなさしめたる程なりき。然し天候順に復したる爲め、馬鈴薯を除き他の農産は一般に豊熟を致せり、因是觀之、昆蟲の多く發生する年は、先づ豊年と見て可ならんか。

○食用昆蟲　普通は蝗蟲、ガムシ、（ゲンゴロウを併稱す）の二種にて、間々蠶蛹、水蠆、蜉蝣の幼蟲コホロギ等をも食する者あり。

○螢狩の童謠　ほた來へ〳〵、よね來へ〳〵、にしんの、あたまの、つゆけんぞ。（ほたハ螢ニテよねトハ大螢ヲ云フ、にしんのあたまノハ主ノ頭ニノ誤ナルベシけんぞハ呉レンゾナリ）ほほほたるさん、さがらんせ、おやまの、ぼんぼこ、高提灯、ほほ。

○昆蟲の方言一二　螢をホタ。蜻蛉をアッケ。蝗蟲をナンゴ。蠶蛹をマイミ。蠶蛾をヒロ。蛹を總て西東。蚜蟲をアブラコ。瓢蟲をムカサリ蟲。（蓋し嫁入をムカサリと云ふなり）蠶をオコサマ。螟蟲をズイムシ。泥負蟲をデロムシ。（是れ泥をデロと云ふによる）蝶をチョウマ。カゲロフの幼蟲をシリコザリ蟷螂を蠅取り蟲。螵蛸をイベムシ。イラムシの卵を太平樂又は雀の卵。米牛をコメムシ。山カマスをヤマビコ。野蠶をクハゴ。ニイ〳〵ゼミをムギセミ。

○雪上の昆蟲　寒過ぎて、陽光麗なるの日、白雪皚々たるの所、二三種の昆蟲飛翔し、又は這ひ廻るものあるを見る、然れども未だ其名稱をも知らざるは遺憾なり。

○蜻蛉釣りの童謠　あッけ來へ〳〵、そッちやいくづと、のまのびーるに、呑まれんぞ。（註）あッけハ蜻蛉ナリ、そつちやハそちらへナリ、いくづトハ行クトナリ、のまハ沼ナリ、びーるハ蛭ノ事ナリ。

編者云ふ、螢狩の童謠中、ニシンの頭の云々を、主の頭と云ふては、意義通せず、是は恐らくハ鰊の頭の事なるべし、蓋し北村山郡地方にては、鰊を愛食するを以てなり。又雪上の昆蟲とは、方言ユキムシを指すなるべし。

◎蟲螽驅除の報告

茨城縣猿嶋郡郡農事巡回教師　秋元祐太

事既に舊聞に屬したれども、蟲螽の驅除をなせしは未だ甚だ多からずと信ずるを以て、茲に驅除の方法及び實蹟の概要を報道せんとす。

吾が猿島郡飯島村に於ては、明治三十年以降、蟲螽の水田に加害するもの、特に劇甚を加へ、三十三年に至りて最とも旺盛を極め、被害甚しき處に於ては、平年に比して、五割の減收即はち半作を見るの慘狀を呈したるのみならず、苗代に於て稚苗の生長を害せられ、爲めに挿秧の際に苗不足を告ぐるの珍事さへ多かりき。然るに昨三十四年五月三十一日、該村農事熱心家臼倉某氏は村農會長森某氏と共に、之が驅除方法等に就き、本郡農會に報告する所ありしを以て、實地につき踏査をなせしに、既に挿秧期に迫り、蟲螽は今や恰かも發生の最中にて、其早生のものは、盛んに苗葉を蝕害するを認めり。去れば既に驅除の好機を逸したるものなるも、幸ひ挿秧前なると其悉く未だ發生せざると、假し發生せしものと雖も、或は畦畔の叢中、若くは苗田に群集するに止まるとを以て、多少の望みを繫ぎ、直ちに驅除の準備をなし、六月五日より十日迄、五日間の豫定を以て之に着手せり。抑も該村は八大字より成り、水田總反別三百八十九町にして、驅除施行反別百六十三町歩なりしが、驅除の出役人夫は三百五十九人、採取せし卵量は一石三斗九升許にして、なほ驅除施行前後に於て採卵せし卵量も多大なりき。而して驅除の方法は、耕作人より鎌(草刈鎌)及び捕蟲網を携たる人夫を出さしめ、村農會評議員數名は之れが監督の任に當れり。

蟲螽卵は、水田の畦畔に、地表下凡そ五分位ゐの深さに產卵しあるを以て先づ水田に水を湛へ、鎌にて畦畔を五分乃至八分の深さに、卵と共に水田中に掻き落すときは、膠質樣のものにて構造せられたる卵塊は、悉く浮游するを以て、之を捕蟲網にて掬取り、後壓殺を加ふるか、採取後直ちに沸湯中にて蒸殺せり。此の如くにして驅除せしも、惜ひ哉時期少しく遲れたるを以て、完全を期し難かりしに、昨三十

四年秋季に至り、稲作の收穫額を調査せしに、之を一昨年に比して、増收を得、而して其被害額は約前年の三分一位ゐに止りき。去れば多少驅除の効ありしならんかと一般農家は評し居れり、なほ本年も繼續事業として特に好機を俟ちて同法を執行せんとす、若し幸ひに本誌愛讀諸賢の驅除良法を敎へらるゝあらば、當地方全躰の幸福なり。

◎小學生徒の害蟲驅除の成績

大分縣北海部郡臼杵町　藤澤節太郎

吾が大分縣廳は昨年四月、訓示學第六七四號を以て、小學校生徒に稲田の害蟲驅除豫防を行はしむべきことを訓示せられしも、新らしき事業と云ひ、且つは小學校敎員と雖ども、亦實物を知得し居るもの少なかりしより、本郡に於ては、郡農會より便宜實物に就き指示する等の便宜を與へたり、而して其結果初年としては先づ良好の成績を得て、生徒には其採集の數に應じて、石筆、鉛筆、紙、紙製石盤等の賞品を授與したり、今其大要を報道すれば左の如し。

北海部郡内各尋常高等小學校生徒が、明治三十四年中稲作期間、苗代田に於て害蟲驅除豫防に從事せる成績を見るに、其採集せし害蟲は螟蛾、螟卵、いなご、椿象、うんか、稲螟蛉、螟蟲(本田なるべし)等にして、其頭數は頗しき多數なり、殊に螟蟲卵を採集せし成績は顯著なるを見る、今各學校別に示せば。

校名	螟卵塊數
宮河内尋常小學校	四六七
大在同　螟蛾卵合計	五、四六六
神崎	九、一一六
一尺屋同	一、〇四五
藤河内同	一五〇
上浦同	四一二
日代同	一三
西大在同	一、八七二
佐賀同	八、一八二
佐賀關同	三〇〇
丹生尋常小學校	一、五〇〇
木田同	四、九三〇
大志生木同	六、八九七
下ノ江同	五六三
上南津留同	二、五三七
青江下同	一四六
種道同	五五
市尾同	一五、一〇〇
木佐上同	四、五一四
佐志生同	二、九三八

熊崎同	一七六	上北津留同	七〇
下南津留同	二〇〇	板知屋同	一一五
青江上同	二五八	北部高等小學校	四、二二四
北津留高等小學校	三五	南津留高等小學校	一〇〇
合計	六六、〇一三		

（備考）　此他の學校に於ても實際は驅除に從事せしが、記錄無かりしため不明のものもあり。而して其他の害蟲に於ては螟蟲一千百一萬五千百十六頭、螟蛾三萬二千七百二十五、イナゴ五千七百三十三頭と一升四合七勺、臭椿象七千六百五十頭、浮塵子一千百三十一頭と九合、稻螟蛉一千五百五十一頭等より。

今前表に就て、螟卵が孵化して、稻を蝕害する概況を計算せば、左の事實（凡て二化生螟蟲として計算す）あるを知るべし。

螟卵一塊の粒數を平均四十五とせば、總卵粒數は二百九十七萬五百八十五粒にして、此卵粒の三割を、敵蟲のため又は他の事情にて孵化せざるものとせば、其卵數は八十九萬一千百七十五粒にして、殘數は孵化して、第一回の發生をなし二百七萬九千四百十四の幼蟲となる、此幼蟲を雌雄相半するとせば、其雌蛾の數は百三萬九千七百四にして、各雌蛾は又平均二百粒を産卵するとせば、其總卵粒數は二億〇七百九十四萬粒なり、此卵粒の三割は又前記の事情にて孵化せざるときは、其數六千二百三十八萬二千粒にして、殘數は孵化して第二回發生幼蟲數一億四千五百五十五萬八千四となるなり、此前後二回發生の幼蟲總數は、一億四千七百六十三萬七千四百十頭にして、稻一本宛を蝕害せば即ち一億四千七百六十三萬七千四百十本となる、今一穗に平均百粒の籾を付着するものとせば、其籾總數は百四十七億六千三百七十四萬一千粒となり、一升の籾數を三萬八千粒とせば、其升量三千八百八十五石一斗九升五合となる更に籾摺歩合を五割とせば、玄米量一千九百四十二石五斗九升七合五勺となるべし。郡の廿九年以降五ヶ年平均玄米收量は三萬七千八百十六石六斗なれば、前記各學校生徒の豫防し得たる計算上の數量は、平均收量の五分一厘强にして、尙此半數と見積るも、九百七十一石二斗九升餘となり、即ち平均收穫高の二分五厘强に當る、豫防の効果豈に大ならずや。

◎岐阜縣土岐郡の螟害報告

岐阜縣　土岐郡農會

本郡に於ては、昨年螟蟲の發生劇甚なりしを以て、郡役所は町村役塲を、郡農會は町村農會を督勵し、各々之が驅除を勵行し、其効果大に見るべきものありたりと雖も、猶其損害は尠少にあらず、今郡役所の調査表を以て之を示さば、別紙の如きものあり。（二月十五日附）

發生シタル町村名	被害反別	全反別ニ對スル損害歩合百分率	減損見積石高	同上概價
土岐津町	三一二、〇〇〇反	一、〇割	七八、六〇	九〇四、一三〇円
多治見町	一二〇、〇〇〇	一、二	三六、〇〇	四〇〇、〇〇〇
市之倉村	五〇、〇〇〇	二	二〇、〇〇	二三八、〇〇〇
笠原村	—	—	—	—
妻木村	八〇〇、〇〇〇	一、七	四二、〇〇	五〇四、〇〇〇
下石村	六三四、六〇〇	二、〇	二七九、〇〇	三、三五〇、〇〇〇
鶴里村	三〇〇、〇〇〇	五	一八、〇〇	一八〇、〇〇〇
曾木村	四五〇、〇〇〇	一、五	一三、五〇	一六二、〇〇〇
秋知村	二八八、四二〇	七	一一、一二	一三一、六三四
肥田村	一七三、三〇〇	一、四	一九二、〇三	二、二八五、一五七
瑞浪村	一、五〇〇、〇〇〇	五	一八、九九	一九〇、〇〇〇
稲津村	六〇〇、〇〇〇	一	三〇、二四	三三二、六四〇
土岐村	八五五、〇〇〇	三	六九、二六	七六一、八〇四
餘戸村	一、〇〇〇	一、〇	二〇	二、八〇〇
日吉村	七八三、〇〇〇	四	七二、九六	七二九、一二〇
明世村	二二〇、〇〇〇	九	五五、九二	一、三九九、〇二〇
泉村	九一〇	五、〇	四七	五、五八〇
合計	七、〇八八、三〇〇	—	九三九、二五	二、五七六、三〇五

(備考) 就中發生夥多なりしは土岐津肥田下石にして最土岐瑞浪稲津之れに次げり而して驅除勵行の度に應し減損石高區々たるを致せり。

◎岩手縣和賀郡の昆蟲方言

第六回全國害蟲驅除講習修業生　岩手縣　佐々木寛五郎

我が地方は昆蟲思想に乏しく、今に熊蟻を蚜蟲の親蟲と信ド居れる有樣なれば、農作物の害を被ること

甚たし、而してこれをばクセと稱して自然的驅除に委ね、人力の如何ともしる能はさるものと誤認せり去れば蟲名とても定からざる事多きも、左の數種ゞ就き知り得たれば斯くは報じぬ。但し是は和賀郡西部に於ける方言と知り玉ふべし。

蜻蛉をダブリ。●大丸蜂をダンゴバチ。●花蜂をハナアブ。●瓢蟲をヒヤゲムシ。●蟷螂をタンリヨウムシ。●足長蜂をノギバチ。●ヒラタ虻をハヤアブ。●尺蠖をハカリムシ。●兜蟲を鬼蟲。●同幼蟲をシロコムシ。●がめむしをイチゴムシ。●金龜子をブンブ●浮塵子をコヌカムシ。●殿樣飛蝗をトラフハツダギ。●螟蟲をザエムシ。●稻の青蟲をイ子ムシ。●一文字せゝりをヨナカムシ。●泥負蟲をクソセオヒ。●天牛をウシムシ。●行夜をヘッピリムシ。●熊蟻をクロアリ。●蟻牧をアリコザガ。●龍蝨をヒラカ。●水蜘蛛をカツパコ。●寫字蟲をワンアラヒ。●蚊をヨガ。●米牛をベゴムシ。●砂むぐりをシリコザリ。●こほろぎをコロゲ。●螢をホダロ。●蚜蟲をアリクヒ。●蠹螽をハツタギ。●蛹類を西東蟲。●蛄螻類をガエザガ。●蝶蛾は總てテビラ。

◎農作害蟲豫防の訓令發布

大分縣　小野覺太郎

吾大分縣の、稻作害蟲の度合は、屢々報導せし如く、殆んど縣下全般に互るを以て、昨年來當局者ハ全力を注きて、豫防驅除の實施をなさしめたり。而るに局外者より之を視るときは、或は時機を失したるやの感をなせしか、其結果も亦充分ならさりしか如し、此を以て本年そ、今より左の如き訓令(第三號)を發布して着々豫防ゞ着手せり。

稻田に於ける害蟲驅除豫防の精粗は、實に國家の休戚國力の消長に關する極めて重大なりとす、然るに昨年は督勵の結果、浮塵子の驅防はやゝ周到を見るに至りしも、螟蟲蔓延の區域は、意外に廣く、然かも其害毒の猛烈なる誠に驚くへきものあり、其他黄葉捲蟲各地に發生不測の災害を被りたるもの亦鮮からす、當業者たるもの宜しく既往に鑑み、斷然意を決して協同一致、本年の米作に對する覺悟なかる可らす、郡町村長は深く此意を體し、熱誠以て驅防上大に督勵を加へ、左の各項を實地に施行せしめ米穀の改善と共にこれか奏効を期すへし。

明治三十五年二月四日　大分縣知事　大久保利武

一、苗代は蔭地を避け風通し善く、日光遍照の位地を撰定し、可成一所に集め共同設置すべし

二、苗代は成規の通り、必幅四尺以内の短册形に整理せしむるは勿論、苗の一二寸に生長したるときより、本田移植迄は、怠らず害蟲驅除豫防を行はしむへし。

三、稻種を撰擇するは、米穀改良上最も必要に付、適當の良種を、町村農會に於て、選定配付の方法を設けしむへし。

四、郡町村は害蟲驅除委員を設け、專ら驅除豫防督勵の任に膺らしむへし。

五、苗代田に於ける害蟲驅除豫防の精粗は、本田移植前委員に於て、實地之れを踏査し、不行屆のものは、充分驅除豫防を行はしめたる後にあらされは移植せしむへからす。

◎害蟲驅防の訓諭告

宮崎縣　第十回全國害蟲驅除講習修業生　竹井繁滿

本縣は一昨三十三年、大に浮塵子の害を被むりたれば、昨年は亦も害毒の甚だしからんことを恐れて、早々より其驅除豫防に注意せり、之れが爲め害蟲の發生夥しきに拘はらず、被害少なく、農家は豐年を謳ふに至れり。故に本年は又農家の慢心を生ぜんことを恐れ、茲に去る一月十七日、別記の訓令及び諭告を管內に發布し、今や正に驅除豫防を勵行しつゝあり、農家の爲め慶賀すべきの至りなり。（一月廿三日附）

◎訓令第四號　害蟲の發生頻年夥しきは農家の爲め大に憂ふるところなり、依て是れが豫防の爲め、害蟲驅除豫防法并に同法施行規則に據り、一月二十五日より二月十五日に至る間に於て、當業者をして田圃の畦畔及び耕地附近の雜草を燒棄せしむべし。

◎諭告第一號　稻作害蟲驅除豫防の急務なるは、今更贅言を要せさるところなりと雖とも、一昨三十三年浮塵子の著しく發生蔓延するや、縣下到る處其慘毒を流布し、被害損失蓋し壹百萬圓の巨額を下らざるへし、豈遺憾の至りならずや、是れ當時農家の害蟲に對する觀念の極めて薄弱にして、多くは其發生蔓延を以て專ら天候の如何に歸し、而して是れが防除の周到ならざるに因由すべし、而して害毒は尙殘存して昨年再び其發生を見るに至り、當初の狀況を觀察するときは、敢て前年に劣るところなかりしも、幸ひに其發生の夥大なるに比し、被害の激甚ならさるを得たるもの、主として農家の一般之か驅除に精勵せるの結果に外ならさるを信ず、農家旣に害蟲の侵毒甚た恐るべきを覺り、而して之れか防除の効果偉大なるを知る、鋭意熱心茲に努むる所ありと雖とも、或は恐る、今一歲の豐穰に偷安して再勁敵の襲來を蒙ることなきを保せず、是れ本官が特に今日より其豫防を慫慂する所以なりとす、仍て浮塵子豫防にありては、昨年一月諭告第一號の方法により、畦畔其他耕地附近の雜草を燒棄するは勿論、其燒け難きものは土と共に削りて之れを堆積し蒸殺するか、若しくは之を深く土中に埋め、椿象にありては畦畔の孔穴、若くは石垣等の間に潜伏するものを燒殺するの法を講し、共同一致して之れか豫防に彊むべし。

◎土佐產の蟲報（第二の二）

高知縣土佐郡　武內護文

○刺蟲科

イラムシ。八月下旬の頃幼蟲多く出て、陰濕の地に於て柿葉に大害を加ふ。

○木目蛾科

ゴマダラアヲムシ。春夏の二候、幼蟲の野生草本或ひは蔬菜に加害せるを見るも、其數

甚だ多からず。

○螟蛉科　タバコノアヲムシ。往年烟草栽培の全縣に行はれたりしときは、到る所此害蟲の發生を見ざることなかりしが、近時は一部地方に於て其發生を見るのみ。

○粟竊科　（一）アハノヨトウムシ。（二）オホズキムシ。（一）（二）共に全縣下到る所に產す。（一）は稻麥其他禾本科作物に大害を加ふるのみならず、夏日藺田亦其大害を被る、追年縣下花莚業益々盛んに、又麥稈眞田製造業漸く興る、將來此害蟲の發現するの時あるを慮らざるべからざるなり、既往に在ては高知市附近の稻田其慘害を被りたること、殆んど浮塵子、螟蟲に讓らぞ、永く農家の忘るべからざる所なり、一年二回餘の發生をなし、成蟲の石下、塵埃下に越冬するは往々見る所なるも、幼蟲の土中、石下、稻株、枯草間等に越冬せるは實に多く、冬期温暖なれば出て野生の禾本科植物を食して生長すること、浮塵子、イチモジセヽリ等に異ならず。（二）は米作を害すること少からずと雖ども、主に玉蜀黍、薏苡、甘蔗等、大莖の禾本科作物に發生し、又薑をも害することあり、殊に瀕海の地方に在ては、甘蔗は農產物としては米作の上に在るを以て、此害蟲は亦最も注意を要するものなり、多くは充分老熟せる幼蟲を以て越冬すと雖ども、野生の禾本科植物に在るものは、体長二三分乃至四五分のもの多く、冬期と雖ども敢て食害を止めず。

○糖蛾科　（一）ハチノジネキリ。（二）ネキリムシ。（三）スヂキリムシ。此三種中、（一）は菜園に見ること多からずと雖ども、他の夜盜蟲と共に、稻株、枯草間等に越年し屢々出て野生の十字花科植物及び紫雲英等を食することは往々目擊する所なり。（二）は菜園の諸作物及び麥類には其害實に少からず、麥類に加害するは、冬期及び早春に於て最も甚しとなす。（三）は當地方にて粟竊と稱するものなるが、是れ果して名和先生の「昆蟲世界」第五十一號に採筆せられし、スヂキリムシなりや否やを詳かにせず、余が昨年飼育せるものは、四月中旬に蛾化し、其幼蟲を屢次冬季に石下、土中等にて發見せり、其他は未詳に屬す。疑がひあるを以て、假に此に入れて他日の研究に竢たんとす。

○地蠶蛾科　エンドウノキリムシ。麥類、蔬菜類、豆類、麻類等皆此害を被ると雖ども、蕎麥の被害に至ては其慘實に言ふに堪へざるものあり、多くは蛹狀を以て越年するも、冬期幼蟲態にて越年せるものは、時に出て紫雲英、イヌガラシ等を食することは屢々目擊する所なり。

○樹尺蠖科　（一）エダシヤクトリ蛾。（二）トンボ蛾。（三）ウメシヤクトリ蛾。（四）ツノシヤクトリ蛾

(一)は到る所の桑園其害を被ること少からず。(二)(三)は成蟲の發生殆んど其期を同うし(未だ二の幼蟲を見ず)。(三)の幼蟲は五月中旬、多く出て梅に大害を加へ、蛹期三週間にして成蟲羽化す。(四)は山林に於て稀に見る所なり。

○螟蟲蛾科　(一)ニクワメイチウ。(二)サンクワメイチウ。(三)ハカジ。(四)アハノズヰムシ。(五)クハノスキムシ。(一)は全縣下到る所に滿布し、殊に山間に在ては其害實に甚だし。(二)は縣の東方に在て慘害を加ふ。(三)も亦到る所に滿布すと雖ども、北方の山間は殊に多く其の害を被る、經過は未詳に屬すと雖ども、野生の禾本科植物にも亦發生するもの丶如し。(四)は陸生の禾本類には其發生敢て少しとせず、然れども亦山間地方にも多し。(五)は全縣下多少の害を被らざるなし。

○葉捲蟲科　モモノシンクヒ。全縣到る所に發生し、桃、梨に大害を加ふるも、海邊の地方には其害多きを認めず。

○羽蛾科　フヂマメトリバ蛾。土佐に於ては菜豆の害蟲なり、年二回以上の發生をなすもの丶如く、五月中旬及び八月下旬、十一月上中旬の頃、成蟲の發現を見たり、昨年初冬余が飼育せしものは、十月廿四日蛹化し、十一月三日蛾化せり、野外にては十二月中、成蟲の晝間出現せるを見るは屢次なり。此他此科のものにして、形色を異にせるものは山野に於て、二三種あるを知る。

○擬尺蠖科　(一)カラムシ蛾。(二)トモヘ蛾。(三)オホトモヘ蛾。(四)キンモン蛾。(五)イチノアヲムシ蛾。(一)は全縣下到る所に分布し、年二回の發生を見る、成蟲の越年するもの少からず、主に野生の蕁麻科植物に發生するも、時に楮葉に加害するを見る、農家の語る所を聞くに、屢々全圃の楮樹を禿にすることありと、果して然らば、縣下の一大事業たる製紙業上亦大に注意を要するの害蟲たるべし。(二)(三)は夏月晝夜最とも普通なり。(四)は甚だ稀なり。(五)は到る所多少其害を受けざるなしと雖ども、殊に山間地方に在ては屢々大害を被る。

○穀蛾科　(一)コク蛾。(二)サツマイモハマキ蛾。(三)ヒケナガ蛾。(一)は貯藏の穀物に普通に見る所。(二)は甘藷に加害すること甚しく、成蟲は十一月多く之を見る。(三)は晩春山野に多し。

以上土佐の鱗翅類中、胡蝶類はヘウモンテフの一種、ジヤノメテフ及びアカマダラノ三種を除くの外は、殆と採集せざるものなきを信ずと雖も、蛾類の多種多數なる、其人生に害否の不明なるが爲め、名稱の詳ならざるもの、蓋し甚だ多からん。余は唯だ其一斑を知るを得るのみ。殊に小蛾類に至ては、吾人の研究を要するもの少からざるべしと雖ども、其飼育に甚だ難く、且つ標本製作も亦容

易ならさるものあり、一個の寒生一兩歳の研究を以てしては、固より其九牛の一毛をも詳にするを得ず、但だ其中吾人に害を與ふることを認めたるものは、勉めて其飼育を試み、栗實の蠹蟲、薑の螟蟲、栾豆の莢蠹蛾は目下幼蟲の越年中に在り、葡萄の葉蟲、檜葉の葉蟲、大豆の葉蟲、リーキの蠹蟲、ワサビの綴蟲は、皆數回其成蟲を獲たるも、名稱未た明ならざるを以て後報に讓らん。而して大形の蛾類中、殊に余が注意を惹きしものは、四萬十川の上流地方に多く産して、全体黒色に、後翅外縁部に數個の新月形赤紋を列し且つ尾樣突起ありて、一見クロアゲハの觀あるもの、及び高知附近の山林に産して、全体に異光を放ち、青赤黒白の斑紋ありて、之に近けば異臭あり、之を捕ふれば、胸部より黄色の泡沫を噴射して、劇臭鼻を衝くもの是なり。二者共に擧動極めて遲鈍にして、手を以て捕ふべし、蓋し其体中に一種の毒性を有するものならん、又幼蟲には尺蠖にして、其体の中央背面に、植物の卷鬚に擬似せる二岐の長突起二個を動して運行するもの及び白色の綿狀物を全体に裝ふて其体を保護せるものあるも、共に未だ其成蟲を見ず。

◎昆蟲に關する葉書通信　（第二十報）

（九十五）着色圖説を望む（神奈川縣三浦郡、木下周太）　昆蟲世界第五四號に、名和助手は龍蝨の小觀察てふ學説を掲げ、末尾には其種名をも列擧せられしが、願くは着色寫生圖として之を解説せんことを望む、余輩後學の徒を益すること、頗ぶる大なるものあらんと信ず。

（九十六）童狩の童謠（在岐阜縣岐阜市、長野菊次郎）　余が舊里福岡縣福岡市近傍にて、螢狩の時に歌ふ童謠は『ホータル來へ、ホータル來へ、河の水が、よーいか、井戸の水が、よーいか、小柄杓もッてへ、汲んでやろー』と云ふあり。

（九十七）農桑害蟲驅除（三重縣多氣郡、坂口幸之助）　本郡内の桑樹害蟲姫象蟲驅除の件は、小生の發議を以て、多氣郡昆蟲研究會より郡長に建議せし處、大ひに好意を以て迎へられ、郡告示を以て各町村に傳達あり、目下枯枝剪取中あり、尙ほ二毛作田に於ける螟蟲驅防の爲め、稻株堀取の事は、詮議中なれば、未ざ何れとも決定せざ。

（九十八）桑の姫象蟲共同驅除（岐阜縣稻葉郡、後藤宇三郎）　前報の如く、本郡長良村長良區内の桑園約そ六拾町歩に對し、去一月廿九日より二月二十日までに、共同驅除を行なひ、右期間に八割以上を實施せり、其方法は、二十餘箇處に於て摸範切をなし、其箇處每に摸範切の標札を立て、數名の監督者は絕ゑず桑園を巡視して注意を與ふると共に、其越年の狀態、習性經過等を示し居れり。

●（九十九）螵蛸を分與すべし（栃木縣下都賀郡小山町、松本瑠）　昆蟲世界第五十三號、名和先生のカマキリ記事を一讀するや、直ちに採集を試ろみしに、幸ひにもオホカマキリのもの二塊、コカマキリのもの數十塊を獲たり、依てコカマキリに限り十名限り分與せんとす、郵劵封入にて申越されよ。

●（一〇〇）蟲類のなぞ〳〵（福井縣大野郡、明石助太郎）　驟雨の時とかけて、三つの蟲類と解く、心は：クモ（雲）ノミ（蚤）アリ（蟻）。想ふに此等の戯ふれも、斯學普及の一策ならんか。

●（一〇一）柳蠹蟲の採取（靜岡縣濱名郡、大山恒一郎）　本年一月六日、畑地の古柳を倒せしに、樹心には五條の孔穴を存し、中に八頭の天牛と三頭の幼蟲の潜伏するを捕へたり、而して成蟲は雌雄四對にして、雌雄は互に離れず、且つ恰かも死狀をなして靜息する狀を詳にせり、此實驗に依りて察すれば、成蟲は下部に、幼蟲は上部に居るもの丶如し、又同時に益蟲マヒマヒカブリをも獲たりしが、是れ天牛の作れる空隙に入りしものと覺しく、其擧動も活潑にて絕えず歩行をなせり、記して同志に報ず。

●（一〇二）伊賀の昆蟲報（三重縣阿山郡、西岡嘉十郎）　伊賀國阿山名賀二郡聯合物產共進會を、本年一月廿日より一週間名賀郡名張町に開設せしに、參考品として陳列せしは左記の昆蟲標本等にてありき、又同月十六日より一週間、名賀郡昆蟲學講習會を開き、八十二名に修業證書を授與せり。

分類標本十二函〇寄生蟲標本一函〇食肉蟲標本一函〇完全變態標本一函〇自然淘汰標本一函〇雌雄淘汰標本一函（以上は阿山郡東柘植村興農會出品）桑害蟲標本一函〇稻害蟲標本一函〇蔬菜害蟲標本一函〇浮塵子經過標本一函〇分類標本三函（以上は阿山郡玉瀧村同志研農會出品）〇螟蟲發生圖（以上は名賀郡農事試驗場出品）〇楕圓形捕蟲袋（以上は阿山郡農會出品）

●（一〇三）蟲類に就ての迷信（群馬縣多野郡、山田省藏）　本縣にては古來多くの迷信を有する中に、蓑蟲の繭を破る時は、其祟りにて、成人に至り衣服に窮乏を告ぐべしと云ひ、竹の節蟲に指を觸るれば、直ちに死すべしと云ひ、蛇に螫さるれば、軀肉腐ると云ひ、蚯蚓に旋すれば、陽莖膨腫すと云ひて、若し斯かる塲合ある時には、蚯蚓に對つて其婿と爲ると謝言を述べしむるなり。

●（一〇四）昆蟲思想の厚薄（宮城縣柴田郡、稻垣益穗）　當地方は未だ昆蟲思想振起の塲合に至らざるも舊臘の昆蟲世界にもある如く、縣下志田郡は多少進歩の狀を呈し、郡內物產共進會の際には、昆蟲標本の出品ありて、其益害蟲標本は農家の注目を惹き、粧飾用のものは兒女に興味を添へ、斯學普及の上に不少の効益を與へたり、何處も斯く有たく思はる。

雜報

◎昆蟲月令（第三月）

此月に配すべき昆蟲記事は、概むね下に列擧するが如し。

○氣候　舊暦の二月の節にて、日脚著るしく長きを加ふ、即ち月の六日より啓蟄に入り、十八日より彼岸に入り、二十一日は春分に當る。梅花既に零落し、桃椿綻唇の佳候に移るを以て、輕暖軟風頗ぶる身に適すと雖ども、寒地にはなほ積雪ありて、梅花滿開、時々奇寒を感ずべし◎內地にて平均溫度は、零下四度より十一度の間にて、東京は七度內外なり◎雪雨の日數は前月に比して增加し隨うて其水量も一般に多量なるべし◎暖地は概むね、此月を以て終雪を見るべく、又時々大風の幼芽を害ふ事あるべし。

○蟲類　暖地なれば、桑園の束藁を解きながら、蟲巢蟲卵の有無に注意し、兼てカミキリ蟲の加害部を細檢すべし、其枝幹に五六分の白色をなせる傷痕あるは、是れ同蟲の產卵部なるが故に、樹皮を引おこして幼蟲を潰殺すべし、但し蛆狀をなすものは寄生蜂の幼蟲なれば、厚く保護し置くを要す◎梅樹の枝に、宛ながら指環狀をなせる卵塊あらば、直ちに除き去るか、又はその上に石油の類を塗抹し置くべし、ウメケムシは日ならずして孵化加害すべければなり◎蔬菜類にアブラムシ及びカブラバチを生じ、瓜哇芋に僞瓢蟲の發生を見ば速やかに驅防を行ふて、其蕃殖を妨たぐべし◎麥圃にはウンカ横行すべく、桑樹にはエダシヤクトリの二三齡のもの特に多きを認むべし、共に速かに豫防的驅除を行ふべし◎紫雲英、麥類、雜草の伸長に伴れ、害蟲も漸次多きを加ふべく、圃場にはまた地蠶類を多く見るに至らん◎蝶類にありては越年種は勿論、ギフテフ、ヒオドシテフ、モンシロ蝶等各處に飛行すべし◎早く姬象蟲の驅除を行ふべく、又溫床の害蟲に留目すべし◎此月の下旬に、室內を洒掃し、特に床下、疊間の塵埃を燒捨つる時は、夏月に至り蚤の害を減滅せしむべく、溝渠、止水等を清潔にする時は、蚊族の蕃殖を妨止するの効あるべし◎螟害多かりし地なれば、此月の中に刈株を掘取りて、燒却を行ふも、驅除の一方たるべし。

（ウメケムシの卵塊）

○雜事　此月の中に害蟲驅除の準備を整のへ、器械藥劑を調製せされば、後日狼狽する事あらん。

◎蟲害驅除豫防法改正

第十六議會に於て、政府提出案として議題となりし、蟲害驅除豫防法中改正の件は、近ごろ法律第九號を以て、公布ありき。その全文は左の如し。

府縣知事を「地方長官」に改む。
第九條中「府縣稅」の上に「北海道地方費」を加ふ。
第十條中「動物」の下に又は「黴菌」を加ふ。
第十三條、本法中市町村に關する規定は、北海道の區町村、沖繩縣の區間切島及市制、町村制を施行せざる地方に於ける市町村に準ずべきものに之を準用す。

◉蟲害地租免除の可決　蟲害驅除豫防法改正の議の如きは、目今急要の事に屬し、農作上頗ぶる益する所ろあるべきも、之と正反對の蟲害地租免除に至りては、寧ろ其必要なかる可きに、我が帝國議會は遂に豫察の如く、該法案を可決し、其相伴として雹害地をも通過せしめたり。今更言ふまでも無き事ながら、昆蟲ろの物に精通せぬ人々の、徒づらに地方の爲めをのみ想ふて、全局の利害を考量せぬには呆然たらざるを得ざるなり、これに就ては後日更にまた言ふ所ろあらんとす。

◉名和昆蟲研究所國庫補助の建議　當昆蟲研究所へ國庫補助の件は、去月末を以て、天野若圓、稻垣示、恒松隆慶、石井鼎、金森吉次郎、早川龍介、杉下太郎右衛門の七氏より建議案を提出したるに、衆議院の容るゝ所となり、內藤守三、山口定省、持田若佐、北田豐三郎、橋本久太郎、山崎庸哉、西田收三、今村千代太、天野若圓の七氏調査委員として調査を加へ、之を院議に附したるに、多數を以て可決し、之を政府に建議せりと云ふ。

因みに云ふ。本問題は第十四議會に於て貴衆兩院は無事通過せしも、政府の都合により今に補助交附の運びに至らざれば、扨は斯く今回も前議決の實行を政府に促せし迄の事なりと。然るに世には此事實を誤解して、早や三十三年度以降、多額の補助を受居たるが如くに信じ、或ひは祝意を表せらるゝもあれば、又或ひは延て其他の事に言及ぼす讀者も少なからず、是れ實に悅ぶべきに似て迷惑千万の至りにて、何れよりも未だ鐚一錢の補助を交附せられし事なければ、以後は其心せられんことを。

◉昆蟲分布の調査に就て　昆蟲分布の調査は、恰かも人類に對する戶口調査と同じく、科學的に研究する上に於て、將また農作害蟲驅除の上に於ても、共に緊要切實の事業にて、もし之なき間は研學、驅防兩つながら其正鵠を得るに難し。然るに本邦には不幸未だ此事を行ひし者無かりしより、心ある者は皆多大の不便を來たし、今になほ津涯に迷ふの觀なきにあらず。是を以て當昆蟲研究所は年來こ

れに着手し、又昨年以降は昆蟲展覽會の力を假りて、其目的の一端を遂行せんと試ろみたるも、そも此事業たるや頗ぶる廣遠にして、能く一人一己の微力を以て全般を網羅すべからざるは勿論、また決して急遽の間に成し得べきものゝ非らず。依りて同志の熱誠ゝ訴たへ、又今後數年の時日を期し、左圖の樣

採集年月日	採集場所	採集人名
何年何月何日	何縣何郡何町村	何之誰

アケビコノハガ（木通木葉蛾）
Ophideres tyranus, Guen.

式によりて其原簿を作り、稍完成の日を俟て、漸次之を公表し、以て斯學研究者の參照となすは勿論、從來晦冥裏にありし昆蟲の品種を明らかならしめんとす。あはれ世の同志者の、此擧を以て斯學振作の基礎を定むるものある事を悟り、翼賛の厚意を寄せられんことを望む。

◉第拾壹回全國害蟲驅除講習會　豫期の如く、本月一日より同會を當昆蟲研究所内に開催せしに、入會者は都て六十一名にて二府二十四縣に亘り、北は岩手縣、西は宮崎縣よりも來集せり。開講式は形の如く、名和當昆蟲研究所長の挨拶、來賓堀内岐阜縣農事試驗場長の祝詞、會員總代小山田武夫氏の荅辭等ありしが、開會中にハ、折よくも文部省派遣圖書調査員小山正太郎、沖繩縣師範學校長安藤喜一郎、福井縣師範學校長朝夷六郎三氏の演説ありき。又會員一同は何れも能く晝夜の勤學に餘念なく、特に冬季昆蟲展覽會出品その他見學の便ありしかば、成蹟また良好にて、五分時演説に、幻燈説明に、中々の出來ばいを現はせり。尙は來る十四日に修業證書授與式を擧行する豫定なれば、遺憾ながら其氏名、演説筆記等は之を次號にて報道せん。

◉冬季昆蟲展覽會記事　岐阜縣昆蟲學會主催となりて、去月八日より同十七日まで十日間、岐阜縣物產館構内第二號舘に開設せる、岐阜縣冬季昆蟲展覽會は、豫ても略記せる如く、實に意料外の出品あり、且つ其成蹟優良にして、冬季のものとしては感歎措かざらしめたるも多かり。今その始末を左に述べんに、此會の計畫は客年十月の下旬にて、もと同志の首唱に係ると、極めて咄嗟の間に成立せしが故に、皆その結果を危ぶみしに、各郡市委員長、地方委員、其他農事及び敎育に從事する團躰の意氣込盛んなりしかば、主意書配付後その設備に着手し、冬間の閑隙を利用して、採集製作を了へ、豫定期日までに盡ごとく陳列するに至らしめぬ。偖また會場整理、裝飾陳列等の事務は、各委員擧げて之を擔任し、夙夜奔走の結果、些少の日子間に全部の完備を見き。

開會は二月八日卽はち陰曆正月元旦なりしが、私立會の事とて、別に公けの儀式をも擧げず（閉會また同じ）同十一日に至り、岐阜縣會議事堂にて褒賞授與式に開閉會式を併せ擧行せり。當日式に臨みたるは、縣内のあらゆる名望家、有力者二百餘名にて、中には諸官衙を代表せる文武官また少なからざりしが、午後一時、音樂隊の吹奏につれ一同着席、次で會長川路利恭氏代理顧問笠井信一氏着席あり、是に於て事務委員長三宅貞次郎氏は、左の事務報告書を朗讀せり。

岐阜縣冬季昆蟲展覽會ハ、昨年十月岐阜縣昆蟲學會ノ計畫スル所ニ係リ、其設備ノ時日甚ダ僅少ナリシニ關ハラズ、有志ノ之ニ應ズ

ル者二百數十名ノ多キニ上リ、出品亦豫定數ニ二倍シテ、總數二百二十八点、七百八十函、七萬六千七百二十頭、之ニ參考品十三点百四十九函、一萬七千四百二十六頭ヲ加フレハ實ニ九百二十九函、約十萬頭ヲ算シ、遂ニ會場ヲ變更スルノ已ムヲ得サルニ至レリ。經費ハ固ヨリ主催者岐阜縣昆蟲學會ノ負擔ニ歸スルヲ以テ、會員ハ皆義務上ヨリ分擔ノ事務ニ鞅掌セリト雖トモ、尙ホ補足ノ必要アルヲ以テ同志ノ醵集金ヲ促カシタルニ、各郡委員長及ヒ地方委員諸氏ノ盡力ニ依リ、稍收支相償フノ途ヲ得タリ、而シテ此事業ノ縣下農業上ニ裨益アルヲ認メラルヽヤ、本縣廳ハ特ニ補助トシテ褒賞費ヲ交附シ、及ヒ諸般ノ便益ヲ與ヘラル、之レ本會ノ最モ面目トスル所ナリ。

本會開設ノ要旨ハ、啓蒙解疑以テ昆蟲學ヲ農業ニ應用シ、併セテ教育上ノ智識ヲ得セシメントスルニ在リ、故ニ出品ニ就テ、昆蟲ト產地ノ調査ヲ加ヘ、及ヒ成ルベク學生一般ノ利益ヲ圖ルハ、蓋シ目的ノ主腦トスル所タリ、然ルニ出品ハ一市十七郡ニ止マリテ全管ニ及ハズ、又奬勵ヲ欲ケルガ如キ形迹ヲ存スル地方アルハ、未ダ斯種ノ開催ノ眞味ヲ解セサルノ過失ナリトハイヘ、本縣ノ爲メ誠ニ遺憾ナリトス。

參觀人ハ初日以來、已ニ數千人ニ超ヘタリ、既往ノ成績ヲ以テ豫後ヲ推斷スルニ、或ハ意外ノ多數ニ上ルモノアラン、而シテ其結果トシテ農事ノ改良ト、理科思想ノ發達ニ鴻益ヲ與ヘ、又近クハ明春ノ內國勸業大博覽會ニ一光彩ヲ添フルニ足レル者アランヿヲ信ス

本會ハ斯學ノ普及ヲ圖ランカ爲メ、專ラ團體出品ヲ奬勵シタル結果、各級農會、昆蟲研究會、小學校ヲ以テ出品者ノ主腦ト假定セシニ、幸ニ縣立諸學校ヨリモ多數ノ出品ト、參考品ノ出陳アリ、又朝鮮海ニ於ケル品種ヲモ展列ニ供スルヿヲ得ルニ至レルハ、本縣ノ爲メ特ニ悅フ所ニシテ、斯ク區域ノ擴張スルニ伴ヒ、利益波及ノ廣濶ナルヘキヲ疑ハス。其他雜務ニ關スル事項ノ如キハ、追テ報告書ニ詳記シテ本會ノ關係者ニ公示セント欲ス。爰ニ褒賞授與式ヲ擧ケラルヽニ臨ミ、本會經過ノ梗槪ヲ陳述ス。

明治三十五年二月十一日　　事務委員長　三宅貞太郎

次に審査委員長名和靖氏は左の申告書を朗讀し、褒賞の授與を請へり。

岐阜縣冬季昆蟲展覽會は、審査委員諸氏夙夜精勵の功に依り、些少の日子間に各部出品の審査を終了したるを以て、中に就き、褒賞を擬すへき優等のもの一百廿四点を選拔し、既に會長閣下の裁定を仰けり。今其成績を通觀するに、專ら冬季蟄伏の蟲類を採集し、一は以て應用昆蟲學の發達に資し、一は以て科學思想喚起材料となすを以て目的とし、從來世人の眼中に映せさりし微軀醜狀のものに限れるに關はらず、幸に同志の此擧を賛襄する者殆と管內に渉り、出品函數九百に餘り、頭數實に約十萬を算せり。爲に縣下に於ける農業及學術の上に、偉大の便益を與へたるのみならす、出品の過半は在學兒女の勞苦より成れるを以て、他日の好望蓋し意料の外に出つるものあらん。而して之を昨年當地に開設せる第一回全國昆蟲展覽會に較ふるに、其規模と其外觀に於ては、共に遙に其下風に立つへきも、之が內容に至りては、優に一頭地を抽出して斯學の普及伸暢を現實にせるものあるを知る。想ふに必すや一兩年の

後には、其特長を外に發揚して、本縣の名利を併得する機會に到達すへきを疑はす。以上陳ふる所は出品全体に對する觀察なるも、一之を各部別に批評すれば、概れ左の如きものあり。

分類標本は点數に於て首位を占め、昆蟲の種類また蕃く排列往々觀るに足れるものあるも、其科目の整備したるものに至りては、寥々極めて少なく、未だ科屬品種の別をすら辨知せすして製作に從事したる者、若しくは單に各類目を代表すへき五七の蟲種を、一小函内に排列して、分類式と誤信するもの亦珍しからず、特に甚しぎは各類目を交錯混亂し、爲に却て初學者を迷はしむるか如きものあり、將來濫りに斯かる輕擧を試みさらんことを望む。

害蟲標本は害蟲としての普通種を綜合し、被害植物より天敵、發育等の事由を知らしむるに足れるもの少なからす。但製作に重きを置かさるを以て、概して究明の利便と、保存の經久を期し難きやの憾みあり、加之食肉性種を混同したるか如きは、最も指摘すへきの缺点とす。

益蟲標本は之を害蟲標本に比較すれは、其數少なく、且成績不良の点あるを認む、而して製作を加へさる蛹卵等を排列して、其宜しきを得たりとなすもの多きか如き、又比較研究用に充つるに非すして、或一二の種類のみを多く收容し徒らに空處の塡塞に努めたるか如き痕迹のものあり、此等は漸次改善の實を擧けんことを望む。

教育用標本は出品点數の多きこと分類標本に亞く、然かも或は高尚に失するもの、或は兒戯に類するもの、又或は裝飾用に偏するものの等其半を占め、眞に教授用の目的に副ふものに至りては僅々數者に過きす、是れ頗ふる遺憾とする所なり、將來此等の病患に陷いらざるの工夫を講するの深く且大なるものあるを知る。

裝飾用標本は比較的少なし、是れ其採集の昆蟲に大形にして且鮮麗の色彩を帶有するもの、少なかりしに因れるならんも、亦實用を重視するの傾向あるは悅ふへし、但此種の標本は意匠、圖案、配色、製作、外觀等に留意し、以て高雅優麗の趣味を現出せしむへきものなるに、其製作の生硬なるに加へて、其意匠は卑野に、其容器は劣惡に失し、未だ美術の神髓を得たるもの多からさるは惜むへし之を要するに、本會の出品は未た固より大成に遠しと雖とも、弘く種類を蒐聚し、各一頭若くは一種毎に、蟲名採集月日及產地等を記載したるか如き、又巧みに化育の狀態を示せるか如きは、確かに進步の一端と視るへき事項にして、其他製作、排列共に苦心を徵すへき佳良のもの少しとせす、是れ本縣の爲に最も慶賀すへき事たりと信す、唯手腕の熟練を缺き、製作容器を疎略に附し去り、肯て保存を顧みさるか如き、又夏秋の候に採集せる品種を混へて、冬季の採集と詐はるか如きは、共に到底與みし能はさる所なるを以て、相當の減点を加へり、大に反省を促ささるを得す。而して總出品函數に比し、出品者の少なきは、主として團体出品を奬勵したるの結果に外ならされば、此大勢より推して審査の上に於ても、亦團体に重きを置き、總て審按は細密嚴正の規程に照して前後二回之を行ひ、以て神聖公直を保持するに努めたり。爰に審査の概要を開陳し謹て褒賞の授與を申請す。

明治三十五年二月十一日　　審査委員長　名和　靖

右につぎて、笠井會長代理は左の式辭を朗讀し、尋で優等者に一々褒賞を授與せり。

茲ニ本日ヲトシテ、岐阜縣冬季昆蟲展覽會褒賞授與ノ式典ヲ擧クルニ際リ、一言以テ諸氏ニ告クル所アラントス。夫レ本會開設ノ大旨ハ、載セテ趣意書ニ在リ、マタ余ガ喋々ヲ要セサルナリ。然リ而シテ出品ノ狀況ヲ通觀スルニ、能ク本會ノ主旨ニ適合シ、斯道發達ノ微候顯著ナルモノアルハ、余ガ特ニ嘉尙スル所ナリ。即チ昆蟲ノ多クハ、石塊草根ノ下、樹皮落葉ノ間ニ蟄伏シ、世人ヲシテ冬季ニハ種族絕滅ノ感想ヲ懷カシメタルニ、今ヤ其迷謬ヲ破リ、其疑惑ヲ解キ、茲ニ害蟲驅除、益蟲繁殖ノ觀念ヲ厚カラシメ、又品種ノ調査ト、科學的研究ニ資スヘキモノ鮮カラス、之ヲ前開設ノ全國昆蟲展覽會ノ成績ニ比スルニ、其進步發達ノ度正ニ著シキモノアリト信ス。抑モ斯ノ事業ノ完成ハ普及ノ廣狹ト、協同力ノ强弱如何ニアリ、將來倍々精研ヲ遂ケ、以テ縣下ノ福利ヲ增進シ、兼テ學術界ノ光明ヲ期センコトヲ望ム、之レヲ以テ式辭トス。

明治三十五年二月十一日　岐阜縣冬季昆蟲展覽會長　從五位勳五等　川路利恭

褒賞の授與終るや、來賓岐阜市長堀口有一、縣會議員春日善一、縣農會理事田中榮助、濃飛日報主筆原眞澄諸氏の祝詞演說あり、次に受賞者總代不破郡農會長代理江崎貞三郎氏の答辭ありて退散、別席に於て茶菓の饗應ありしが、軈て會場一巡の後、午后三時といふに終了を告げたりき。當日褒賞を授與せられたるは左記の百廿四名にて、之を細記されば次の如し。但し(分類)とは分類標本。(害蟲)とは害蟲標本を指す、以下之に倣ふ。

◉壹等賞　（五名）

不破郡垂井尋常高等小學校(分類)　◉海津郡西島尋常小學校(分類)　◉不破郡農會(害蟲)　◉羽島郡竹ヶ鼻尋常高等小學校(益蟲)　◉不破郡垂井尋常高等小學校(敎育用)

◉貳等賞　（十五名）

海津郡昆蟲研究會(分類)　◉大野郡農會(分類)　◉本巣郡昆蟲學會第六部落(分類)　◉羽島郡上中島尋常高等小學校(分類)　◉海津郡大
◉山縣郡昆蟲研究會(分類)　◉羽島郡農會(分類)　◉稻葉郡農會(害蟲)　◉揖斐郡川合尋常高等小學校(害蟲)　◉羽島郡江尋常小學校(害蟲)　◉羽島郡農會(益蟲)　◉羽島郡足近尋常小學校(益蟲)　◉羽島郡博文高等小學校(敎育用)　◉羽島郡松倉尋常高等小學校(敎育用)　◉海津郡石津尋常小學校(敎育用)　◉郡上郡昆蟲學會(裝飾用)

（參等賞四等賞は次號）

會場は第二號館の大建物を用ゐしが、入口には冬季昆蟲展覽會旨趣書を書ける大額を揭げ、其下には名和昆蟲研究所よりの參考品たる昆蟲分布調査數十葉を陳列し、其右方には岐阜縣昆蟲學會幹事五名の出

品せる「農夫が冬季に姫象蟲を驅除するの飾物」の實物を以ての說明あり、進んで陳列場に至れば、右方は名和昆蟲研究所助手の冬季に採集せる分類新式標本に引續き、他の出品を處狹きまでに排列し、左方は各郡市別の出品を順次陳列して、其郡市名と部類とを掲示せり、斯くて一折又一曲、次第に通覽すれば、七百餘函の出品に二百餘函の參考品は壘々として架上に堆たかく、岐阜縣立農學校、岐阜中學校の生徒の製作品を始めとし、當昆蟲研究所の瓢蟲分布圖說等何れも衆目を惹きしが、特に長崎縣對馬國嚴原平田駒太郎氏が、其學童四名と共に冬季山中に採集せる昆蟲標本四函と、岐阜縣本巢郡船木尋常小學校に於て、其兒女をして採集せしめたる百舌鳥の揷餌數百とは觀者に感歎の聲と興味を與へたりき。出口にもまた當昆蟲研究所の出品に係る蟲瘿、山野兩處の採集品、冬季採集圖解の大額面五枚等ありて右顧左眄殆んど應接に暇なからしめたり。其參觀人員は今之を言ひ難きも、遠路來觀の學生も數多ありしのみか、閉場後數日間はなほ特に內覽を許したれば、此間に世間に分ちたる利益は少なからぬ事なる可し。又出品の優等及び成績の善惡、品種の如何、成立の顚末等は、本號の學說欄を始め、事務報告、審査委員長申告書より悉したれば、更めて茲に言はざるべし。但審査上の諸件及び役員氏名、執務狀況等は同會の紀念として三四等受賞人名と共に、之を次號にて詳報せん。

◉中川久知氏の來所　農商務省農事試驗場在勤の中川久知氏は、蜂類特に鋸蜂につき、研究中なりしが、去月二十日來岐の上、一週間日々當昆蟲研究所備附の標本に就て細檢精研を遂げ、同廿六日を以て東歸せられぬ。

◉昆蟲叢書の版行に就て　去月中其原稿を印刷所より送附し、今月は各豫約者諸彥に送附の筈なりし同書は、假かより太き字体の假名文字を用ゐる事に變更（往々植物書にも用ゐたるもの）せしに、東京築地活版所其他有名の活字製造所よりも字型なしとて斷はれ、今や新たに鑄造中の由なれば少しく豫期よりは後るべし、仍りて此事實を既約の方々に報道す。

◉昆蟲標本陳列舘の參觀人　去二月中より、當昆蟲研究所の標本陳列舘を參觀せし人員は、總計九千七百十七人にして、最とも多かりしは、十二日の千五百六十一人、最とも少なかりしは、二十日の六十五人にて、一日平均三百七十八人强に當れり。其中主なる者は青森、三重、愛媛、石川、愛知、長野、靜岡、德島、滋賀、千葉諸縣の農事若くは學術に關係ある人々なりき。（以上三月十三日脫稿）

◎害蟲圖解未刊の分豫告

◎桑樹害蟲キンケムシ（金條蛅蟖）
◎稻の害蟲フタホシズヰムシ（三化生螟蟲）
◎稻麥害蟲キリウジガガンボ（切蛆）
◎稻の害蟲セジロウンカ（背白浮塵子）
◎稻の害蟲ヒゲナガアブ（長角虻）
◎桑樹實蟲クハハマキ（桑葉捲蟲）
◎蠶の害蟲カヒコノウジバヘ（蠁蛆）

◎松樹害蟲マツケムシ（松蛅蟖）
◎藍の害蟲アヰノゾウムシ（藍象鼻蟲）
◎粟の害蟲アハノズヰムシ（粟螟蟲）
◎胡麻害蟲メンガタスズメ（胡麻蠋）
◎赤楊害蟲ハンノキケムシ（赤楊蛅蟖）
◎櫟の害蟲カミキリムシ（天牛）

◎桑樹害蟲クハケムシ（桑蛅蟖）
◎稻の害蟲イナゴ（蝗螽）
◎稻の害蟲トビイロウンカ（褐色浮塵子）
◎稻の害蟲クロクサガメ（黑色椿象）
◎桑樹害蟲アヲハマキムシ（青色葉捲蟲）
◎桑樹害蟲クハゴ（野蠶）
◎蔬菜害蟲モンシロテフ（菜の螟蛉）
◎蔬菜害蟲サルハムシ（菜の葉蟲）
◎大豆害蟲ヒメコガネ（姫金龜子）
◎梅樹害蟲ウメケムシ（梅蛅蟖）
◎梅樹害蟲ウメシヤクトリ（梅尺蠖）

◉圖解の紙幅縱一尺三寸濶九寸 ◉壹枚の代價拾五錢郵稅貳錢
◉百枚以上一纏壹枚拾錢郵稅百枚に付き貳拾錢

◉豫約代價 壹枚拾錢郵稅貳錢 但申込の際前金添附の事
圖解代金 凡て前金にあらざれば回送せず但郵券代用壹割增の事

◎梨樹害蟲ナシゾウムシ（象鼻蟲）
◎梨樹害蟲ホシハマキ（星葉捲蟲）
◎果樹害蟲イラムシ（刺蟲）
◎稻の害蟲オホズヰムシ（大螟蟲）
◎藍の害蟲アヰノズヰムシ（藍の螟蟲）
◎粟の害蟲アハノヨトウムシ（粟蠶）
◎里芋害蟲セスヂスズメ（鳥蠋）
◎桐樹害蟲シモフリスズメ（桐蠋）
◎果樹害蟲ホシカミキリ（白斑天牛）
◎果樹害蟲ドウガネブンブン（金龜子）

發行所 岐阜市京町 名和昆蟲研究所

守隨商店の特色と營業種目

◎秤は何種に拘はらず〇の商標并に守隨製の打込印を御認めの上御買入相成候事必要に候
◎〇の商標并に守隨製の打込印なき者は拙店の製品ょ無之候
◎拙店の製品ょあらざるものは多く原料粗惡にして耐久の見込無之候
◎耐久の見込なきは今回の定期檢定成績ょ於て既に御了解相成候と存候
◎耐久の見込なきのみならず損所修覆の時原料の取替又ハ各異形の爲め非常の手數を要し候
◎非常の手數を要し候故に修覆料も亦隨て高價に相成候
◎修覆料の高價ょ止まらず無據御斷り申上候品ぁ澤秤有之候
◎拙店は三百年來斯業ょ從事し陸軍省所有の大砲掛製鐵道局使用の車輛掛秤臺灣總督府の標本秤等を製造せしのみにても技術の巧妙にして堅牢なる品を出すと明白に候
◎拙店は全國に於て三支店四分店四十出張所七百八代理店を有し修覆又は取次をなさしむるを以て損所修覆の際は獨得の便利有之候
◎定期檢定を受けざる秤又はポンド目カン〳〵等を御使用相成候方往々見受け候得共右は法律上嚴罰有之候間速ょ御棄却可被成候
右は將來秤御買入の諸君に對し豫じめ御注意申上候也

尚弊店の漆器營業種目は左の如くに有之候

美術漆器、一閑張、張拔、螺鈿入漆器、朱塗物、重箱、本膳椀椀盛、菓子椀、吸物椀、折敷膳、會席膳、吸物膳、菓子器、杯洗、盃類、盆類、鏡臺、針差、枕類、鏡類、額縁、塗板額、貿易漆器、紀念木杯、卷煙草箱、料紙文庫、硯箱、香合、棗類、香盆、小箱、塗煙草盆、行燈、衣桁、切手盆、机類、箸箱類、下駄箱、紅葉箱、簞笥、長持、用簞笥、櫛簞笥、膳簞笥等は御注文に依り十分入念調製可仕候
御嫁入道具、家具類、玩弄物を始め其他漆器類一切營業可仕候

●特ょ蒔繪は自宅の工場內に技師雇入れ有之に付美術蒔繪は無論其他意匠圖案の求めに應ぞ

名古市榮町一丁目

度量衡
漆器業

守隨本店

（電信略符シスイ）

名和昆蟲研究所長名和靖著

五版

薔薇の一株 **昆蟲世界** 全

定價貳拾錢 郵税貳錢 郵券代用一割増

臨時刊行第一編

日本昆蟲分科表 全一冊

定價（郵税共）金貳拾八錢（郵券代用一割増）

臨時刊行第二編

通俗益蟲集覽 第一輯（説明書附）

定價（郵税共）金貳拾貳錢（同上）

臨時刊行第三編

貝殼圖説 全一冊（再版）

定價（郵税共）金參拾七錢（同上）

雜誌昆蟲世界合本出來廣告

昆蟲世界第一二巻品切

本邦唯一の昆蟲雜誌

昆蟲世界合本

第五巻（昨年分）出來

西洋綴 金文字入 美装

●昆蟲世界第三巻合本壹冊　定價金壹圓貳拾錢 郵税金拾貳錢
●昆蟲世界第四巻合本壹冊　同上
●昆蟲世界第五巻合本壹冊　同上

右昆蟲世界の義は發刊以來、非常の高評を博し斯學研究上の寶典として又農事改良の先驅として歡迎せられしも、未だ之を合本とするに至らざりしに、今回讀者の勸告により毎一年分を裝釘して閲讀索引に便にせり、請ふ愛讀を玉へ。

◎害蟲圖解既刊の分廣告

●第一。桑樹害蟲エダシヤクトリ（枝尺蠖）（三版）
●第二。桑樹害蟲トゲシヤクトリ（刺尺蠖）（再版）
●第三。稻の害蟲イネノズヰムシ（二化生螟蟲）
●第四。煙草害蟲タバコノアヲムシ（煙草螟蛉）
●第五。稻の害蟲イチモジセセリ（苞蟲又葉捲蟲）
●第六。桑樹害蟲ヒメゾウムシ（姫象鼻蟲）
●第七。桑樹害蟲シンムシ（心蟲）
●第八。稻の害蟲イネノアヲムシ（稻螟蟲）
●第九。茶樹害蟲ミノムシ（避債蟲）
●第十。豌豆害蟲エンドノキリムシ（夜盗蟲又地蠶）
●第十一。桑樹害蟲クハカミキリ（桑天牛）
●第十二。稻の害蟲ツマグロヨコバヒ（浮塵子）
●第十三。桑樹害蟲イトヒキハマキムシ（糸引葉捲蟲）
●第十四。茶樹害蟲チヤケムシ（茶蛄蟖）
●第十五。馬鈴薯及び茄子の害蟲テントウムシダマシ（擬瓢蟲）

以上十五種は既刊の分にして發行以來既に多くの各級農會は勿論、諸學校にも備へ付けられたり。

蟲塚保存義金募集廣告

蟲塚保存義金募集の趣意

現時、本邦各地に散在の蟲塚（害蟲に關する石碑）は其數凡そ十基に下らざる可し而して當初その建立の旨意を尋ぬれば、多少の異同ありて、石川縣のもの、如く害蟲埋瘞の紀念碑たるあり、大分、宮城、福井諸縣のもの、如く蟲害掃攘の祈祝碑たるあり、又福岡縣のもの、如く害蟲驅除の記功碑たるありと雖ども、要は農作害蟲の怖るべく、之が驅防の等閑に附す可からざる事を訓戒するの誠意より出づ、豈にこれを路傍の供養碑と同視して可ならんや。然るを其現狀を聽くに、或ひは桑圃の間に顚倒するものあり、或ひは風雨に曝され文字の剝蝕に任するものあり、或ひは空しく山中の荊叢に埋もるものある等、今にして早く之が保存の道を講ぜずんば、久しからざるに事蹟湮滅の虞れなしとせずと。

當昆蟲研究所深くこゝに感ありて、當所創立七年の紀念事業として、本年四月を期し、之が保存修補の計畫をなせり。然れども到底少數者の微力を以て完成すべきにあらざれば、博く同志を全國に募り、其義捐を仰ぎて、古人が今日に遺したる洪恩に答ふる所あらんとす。世の農桑業に從事し若くは昆蟲學を研究せらるゝ諸士の、半瓶の酒、一塊の肉を節して、此擧に贊襄の意を表せられんことを冀ふ。

一義金は一口金五錢以上とす。（郵券代用にて宜し）

一義金は一人一口以上とす。

一義金取扱は來る四月末日を以て終了期限とす。

一義金には受領書を出さず時々「昆蟲世界」紙上に芳名を掲げて領收の證となす、精算報告もまた同じ。

一醵集義金は之を平分して、四月末日までに判明せる、各蟲塚所在地の官廳に依托すべし。

一義金送附の際は、蟲塚復舊工費若くは雨覆ひ埓柵修造費に限り支出せられ度旨を指定すべし

一義金醵集總額幷に寄附者名簿は、配分金と共に各官廳に送附して、義捐者の意思を傳達すべし

義捐金申込所　岐阜市京町　**名和昆蟲研究所**

◎岐阜縣冬季昆蟲展覽會經費寄附金受領第五回報告（人名イロハ順）

一金拾圓（海津郡委員長）古田兼彌君
一金拾圓（不破郡委員長）後藤信明君
●小計金貳拾圓　●通計金百四拾參圓五拾錢

右今般本會計畫の趣旨に賛同し各頭記の金額寄附相成候ニ付此段及報告候也

明治三十五年三月

岐阜縣昆蟲學會

◎昆蟲世界購讀紹介者芳名

德島縣　阿部万太郎君（一名）

◎昆蟲世界改良廣告

雜誌「昆蟲世界」は今や愛讀諸彥の厚庇と、昆蟲思想の發達とに伴はれ、漸次順運に向ひたるも、昨年までは字數增加に止めたりしが、斯くては未だ讀者に酬ゆるに足らざる事を悟り、本號より紙數の增加を斷行し、なほ六號活字を多用して、內容を潤むるに勉め、更ニ毎號精巧の木版圖を挿入して、記事を補足する事となせり、希くは一層愛讀を賜ふと共ニ續々玉稿を寄せられんことを。

明治卅五年二月

名和昆蟲研究所編輯部

◎岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條ニ依り、毎月第一土曜日午後正一時より、岐阜市京町名和昆蟲研究所內に於て開く筈なれば、毎會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所內

岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會本年中の日並は左の如し

第四十同月次會（四月五日）
第四十一同月次會（五月三日）
第四十二同月次會（六月七日）
第四十三同月次會（七月五日）
第四十四同月次會（八月二日）
第四十五同月次會（九月六日）
第四十六同月次會（十月四日）
第四十七同月次會（十一月一日）
第四十八同月次會（十二月六日）

⋮市街界　‖案内道　｜町　イ研究所　ロ縣廳　ニ病院　ハ中學校
ホ監獄　ヘ郵便局　ト西別院　チ公園　リ長良川　ヌ金華山　ル停車場

◎名和昆蟲研究所案內

當研究所の位置は上の圖の如く停車場よりは僅十餘町にして養蟲室あり、又ロとへとの間なる新設の岐阜縣物產館構內ニは常備の昆蟲陳列館（五間ニ十六間）あり有志諸君の來訪を俟つ

岐阜縣岐阜市京町

名和昆蟲研究所

◎本誌定價並廣告料

壹部郵稅共金拾錢　〔見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す〕
壹年分拾貳部郵稅共　金壹圓八錢

《注意》　本誌は總て前金ニ非れば發送せず◎郵券代用は五厘切手にて壹割增とす◎爲替拂渡局は岐阜郵便電信局

廣告料五號活字廿二字詰一行ニ付金拾貳錢、三十行以上一行ニ付き金拾錢とす

明治三十五年三月十五日印刷並發行
岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二
（岐阜縣岐阜市京町）

發行所　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二
發行者　名和梅吉

同縣武儀郡下有知村三百七十四番戶
編輯者　天野秋二

同縣安八郡大垣町大字郭百五十三番戶
印刷者　河田貞城

（明治三十年九月十日內務省許可）
（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

（大垣西濃印刷株式會社印刷）

Vol. VI. APRIL. 15TH, 1902. No. 4.

THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.

EDITED BY Y. NAWA.

GIFU, JAPAN.

（四月十五日發行）

（毎月一回十五日發行）

昆蟲世界

（第六巻第四冊）　第五拾六號

（明治三十五年四月十五日發行）

（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

目次（禁轉載）

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU, JAPAN

◎寄附物件受領公告

一金四拾圓也　英國人 ロスチャイルド君
一金貳拾五圓　第十一回全國害蟲驅除講習生一同
一金參圓也　岡山縣 邑久郡農會
一金壹圓也　和歌山縣 正富獨藏君
一鼈甲製卷煙草入（蝶形彫刻）一個　福岡縣 男爵 高千穗宣麿君
一蝶形巾着一個　岡山縣 秋山華子君
一蝶摸樣古帛紗一枚　宮城縣 梅森實子君
一蝶形石板掃除器一個　靜岡縣 岡田忠男君
一蟬形刻茶合一個　在京都 名和淵海君
一昆蟲摸樣畫雜誌外一品　岐阜縣 三吉艾君
一蝶摸樣入廣告紙一葉　石川縣 高多信久君
一日高牟婁郡害蟲驅除顚末書一冊　和歌山縣内務部第四課
一農事試驗場成績第一報一冊　埼玉縣農事試驗場

右當所に寄贈相成候仍て茲に芳名を掲げて其厚意を謝す

岐阜市京町　名和昆蟲研究所

第十二回全國害蟲驅除講習會員募集

開期（自五月十五日 至同月廿八日）**二週間**（凡貳拾名）

全國害蟲驅除講習會は既に第拾壹回の經驗を重ねたれば、本回よりは有用にして實行に適切の方法に賴らんとす、入會希望者は來五月五日以前に申込ありたし、尚ほ今回の講習には左記條々の利益あるべしと信ず。

一、今や恰かも昆蟲採集の好季期なれば實地經驗上、幾多の利益ある事。
一、開會季節の早き爲め、本田は勿論、苗代田害蟲驅除の準備をもなし得べき事。
一、本年春生の益蟲、害蟲より漸次採集して、完全なる四時の昆蟲標本を製作し得べき事。
一、當昆蟲研究所陳列舘の整理と共に、新たに陳列せる新式昆蟲標本に就て研究の便ある事。
一、回は一回と新科目を講習するが故に、研學に益あるべき事。

今回は補足員廿名以内の募集に止まれば、期限以内と雖ども、當所の都合に依り、隨時入會を謝絕することある可し。規則書入用の向は郵券を添へ至急照會あれ、直らに回送致すべし。

明治三十五年四月

岐阜市京町　名和昆蟲研究所

◎蟲塚保存義金喜捨第二回報告

金貳圓　第十一回全國講習生一同
金五拾錢　岐阜縣 篠田五郎君
金廿五錢　千葉縣 澁田愛藏君
金貳拾錢　靜岡縣 増田秀雄君
金貳拾錢　岐阜縣 篠田國子君
金貳拾錢　宮城縣 草間宗軒君
金貳拾錢　千葉縣 高橋民之助君
金廿錢　和歌山寺 田鬼子右衛門君
金拾錢　徳島縣 堀龍資君
金拾錢　岐阜縣 足立喜市君
金拾錢　和歌山縣 林良太郎君
金拾錢　愛知縣 杉原孝君
金拾錢　大阪府 辻岡彦次郎君
金拾錢　福井縣 宮本三之亟君
金拾錢　岐阜縣 篠田靜枝君
金拾錢　兵庫縣 三枝角太郎君
金拾錢　島根縣 川島吉太郎君
金五錢　鳥取縣 浦木銀平君
金五錢　岩手縣 中田谷藏君
金五錢　千葉縣 東勇君
金五錢　岐阜縣 安江才市君
金五錢　和歌山縣 澤田楠之助君
金五錢　福井縣 田中茂藏君
金五錢　靜岡縣 村松悦音君
金五錢　山口縣 村上善治君
金五錢　和歌山縣 的場定楠君
金五錢　大阪府 尾花徳藏君
金五錢　神奈川縣 長阪村太郎君
金五錢　神奈川縣 露木惣藏君
金五錢　千葉縣 杉山安之亟君
金五錢　千葉縣 湯淺秋藏君
金五錢　徳島縣 林寅藏君
金五錢　奈良縣 岡本一夫君
金五錢　奈良縣 森井猶次郎君
金五錢　和歌山縣 阪上彌太郎君
金五錢　栃木縣 高柳源太郎君
金五錢　英國ウォルター、ロスチャイルド君

金壹圓　靜岡縣 松島十湖君
金五拾錢　靜岡縣 松島さの子君
金貳拾錢　山梨縣 小山田武夫君
金貳拾錢　岐阜縣 篠田れい子君
金貳拾錢　石川縣 高田信久君
金貳拾錢　宮城縣 梅森三郎君
金廿錢　神奈川縣 小泉和雄君
金拾五錢　宮崎縣 竹井繁滿君
金拾錢　男爵 高千穗宣麿君
金拾錢　靜岡縣 大山恒一郎君
金拾錢　宮城縣 加藤久之助君
金拾錢　福岡縣 添田喬藏君
金拾錢　愛媛縣 青木亮一君
金拾錢　岐阜縣 村井正元君
金拾錢　香川縣 山田竹八君
金拾錢　香川縣 井上芳三郎君
金五錢　愛知縣 伊藤米吉君
金五錢　愛媛縣 宇野傳君
金五錢　愛媛縣 森支作君
金五錢　愛知縣 松井佐助君
金五錢　愛媛縣 安永宏太郎君
同上　和歌山縣 堀昇君
金五錢　福井縣 有馬堯哲君
金五錢　山口縣 藤井二郎君
金五錢　千葉縣 中村庸三君
金五錢　大阪府 山元貞太郎君
金五錢　埼玉縣 田口弘君
金五錢　佐賀縣 古賀四郎一君
金五錢　福井縣 手塚清右衛門君
金五錢　埼玉縣 駒崎増次郎君
金五錢　神奈川縣 關野光之助君
金五錢　和歌山縣 山中正之助君
金五錢　埼玉縣 風間七郎兵衛君
金五錢　千葉縣 木内巳之助君
金五錢　神奈川縣 安藤蓁太郎君
金五錢　英國ロスチャイルド君

●小計金拾圓五錢（二百壹口）●累計金拾四拾五錢（二百八十三口）

明治三十五年四月

名和昆蟲研究所

Hestina japonica, Feld. ゴマダラテフ

論説

◎害蟲驅除を論じて宗教家の反省を促がす（續）

（三）神道は如何　神道家の弊風とも云ふべきは、たゞ祈祝禁厭の二方を以て、害蟲を驅防するの最良手段となし、肯て他の確實の方法を信者に知らしめざるに在り。勿論、此等の溯原とする所ろは、多く古史傳に存せるを以て、强がちに之を尤むるに非ずと雖ども、時勢の推移を思はず、人智の發達を稽へず、往古大少二尊が禽獸蟲魚の災害を掃攘せる故事をのみ根據として、依然之を幾千載後の今日に襲用せんとするの非なるを言ふのみ。古史に或ひは昆蟲の災ばひを害することあるも、皆これ衛生上の害蟲に止まる、然るを深くこれを辨へず、祝詞に載せて怪しまず、神符に印して憚からず、謬れるも太甚しからずや。謂ふ勿れ、上古には禁厭の方あり、中古以還また攘災の神事ありと。彼はその時代にのみ施こし得べき一の奇跡のみ、則はち其遺風を追ふて神苑の岩石を授與するが如き、神影呪文の類を樹てしむるが如きは、早晩廢滅に歸すべき方便に過ぎざれば、寧ろ始めより害蟲驅除の必要を細説し、其敎徒の腦裏に國家的觀念を注入するの優れるに若かず。而して神道家が、未だ誠心實意より敎導訓誨の策を把らざるは、有意か、將た無意か、二者其一を擇ぶに窮しむと雖ども、鬼神は誠心の祈誓に感應を與ふと云へば、恒にこれに奉事する神道家の必らずや、利の爲めに動かず、愚人を益々愚化するの愚を學ぶ

に非ずして、終始神威神德に賴りて、國害國損を防禦するに汲々たる可きを疑はず。然るにても、從來何が故に、人力を盡したる後にあらざれば靈神は照鑒を垂るゝものに非ざるの理を示さゞりしか、又古代の祝詞は、害蟲を重罪の一に加へたるも、現行の刑律には全たく之を缺けるが如く、その驅防方法も亦自づから相異なる可きに、なほ紙符木牌の類を以て、能く蟲害を救濟し得べしと說くか、吾人は神道家の行爲より推して、其本旨とする敬神愛國てふ文字を解決する上に、多少の遺憾なきこと能はず。顧ふに、神道家の大半は、農作害蟲と衞生害蟲を同一視するの奇觀を呈するが故に、會々世人の攻難を蒙ふるも、若しそれ『古語拾遺』には人工驅除、藥劑驅除、禁厭驅除の三方あるを說き、『日本書紀』と『古事記』には昆蟲の變態と、之が飼育とを載せ、祭事の『祝詞』の裏面には、害蟲驅除の輕視すべからざるの眞理を含有し、なほ神道家の著書には、氣候の激變と害蟲の死滅をさへ述べ置けるものある等の事例を擧げ、更にこれに歷朝の正史に散見せる事實を加味して、一般敎徒に告諭し、以て害蟲驅除は實に國家事業なることを知らしめざらんには、上は歷代の聖德仁惠を彰揚し、且つは其躰面をも保持し得べきに、嘗て其事なかりしは、畢竟神に近づき、而して民に遠ざかれるの過失なるべし。吾人は我が國體の上よりも、將た瑞穗國、蜻蜓洲てふ國號より言ふも、特に神道家が害蟲驅除には一段の精勵を加へられんことを望まざるを得ず。

(四)**佛敎は如何**　古來、佛敎ほど邦人の心底に蟠根せしものは無く、佛敎ほど上下の間に潛勢力を得しものは無かる可し、而して佛敎ほど害蟲驅除に障害を來せしものはあらじ。其原因は一にして足らずと雖ども、中に就き、害蟲驅除を障害するものは、主として其戒律と其敎理に在るべきか。聞く戒律には殺生禁あり、敎理には因果應報の說ありと云へば、敎徒の恒に生物を殺害するを忌み、また種々の迷

信の之に伴うて湧出するは理數の當然なるも、苟くも國家の蠹賊とし云へば、人類の尊なほ直ちに誅戮を加へらるゝに、佛敎家は動もすれば、この道理を忘却して、强て其戒律と敎理とを、害蟲驅除事業の上にも適用せんことを試ろみ、往々損害を傳播せしめたるの形蹟なきにしもあらず。特に其右手を擧げて害蟲の驅除を制止し乍ら、陰に左手を以て害蟲退散の符札を授くと云ふに至りては、言行の矛盾も亦甚だしからずや。吾人はよも此かる事實の隱伏すべしとは信ぜざるも、目今害蟲退散の符札の過半は、皆佛敎の代表者たる大寺巨刹の發售する所ろに係り、中には益蟲驅除用のものすら之あり、爲めに他の緊要なる驅防を懈たらしむること、宛から無智の病者が、淫祠邪敎の指導に迷ふて、藥水の服下を肯んぜざると同一の結果を來たせるものありと云へり。按ずるに、中古屢次、佛寺に勅して蟲害掃攘の祈願を執行せしめたる事あるも、是は既に陳腐に屬したるのみか、凡そ斯かる事は、一時人心の動搖を抑壓するの外、貴ぶべき價値なきを以て、五彩の旌旗も、千部の讀經も、若くは梵字の呪符も、害蟲蔓延の際にはまた顯著の効驗なからんのみ。而して實際は理論と相協はず、近時一層の昌熾を致せりと聞く、此に至りて始めて方便の弊害を認む。吾人はもと佛經に暗し、故に如何なる記事あるやを詳らかにせずと雖も、其有と無とに論なく、佛敎家が國家に對する義務に顧りみ、また人心拓開の急切なるを悟らば、全然小乘的の方法を捨て、其絶大の潜勢力を此國家事業に傾盡するの日あらんことを豫期す。蓋し私かに害蟲の發生を念ひ、これを好機として奇利を其間に收めんとするが如き卑穢の行動は、超然名利の俗界を脱出せる出家には、有得べからざる無上の汚辱なるが故に、其寃を雪がんが爲めにも、又佛敎より起因せる幾多の迷信を打破して、敎理の眞光彩を示現せんが爲めにも、其敎徒とゝもに、事に此業に從うの責ありと信ず。況んや權宜の策を以て感化の祕奧となすは、到底永續すべきものに非ざるをや。

（完）

◎昆蟲頭部の骨格の記載

農商務省農事試驗場　中川久知

米國理學博士河内忠次郎氏は、其の嘗てカムストック博士と、研究の功を積める昆蟲頭部の骨格に關し英文の一書を公行して、近ごろ之を本邦の同人間に寄せられぬ。乃はち之を閲讀するに、會々一二の氷解し難き節あるも、分科的研究者の爲めには、良好の參考書たるを失はず。依て其の記述の要旨を抄出して、肯て之を本誌の讀者に紹介せんとす。

昆蟲の頭部は、數多の環節の集合して、組成せらるゝものなりとは、古來學者間に唱道せられたる事實あるも、唯その環節の員數に至りては、或ひは之を四環節なりと云ひ、又或ひは其以上なりとも云ひ、全然未だ確定するに至らざりき。此を以て、氏は此疑問を解決せんが爲めに、主はら解剖的の觀察を下し、これに因りて、果して幾個の環節が、この主要部を構造するやを確かめんと期せられぬ。又胎生學上より、蟲胚の頭部の神經節の、正に七對なる事由を證明せし者は、

第一圖

既に世に之あるも、その成蟲の孰れが、七環節に相當すべきかを斷定せし者に至りては、未だ之なかりしを以て、氏はこの未了に屬せる部局に、精緻の剖拆を加へて、是非を明確ならしめんと試めり。

氏は先づ、胸部の環節を以て、之を完全のものなりとし、其各節は互ひに前後兩部に分れ、兩部間には、内方に皺疊せる皮膚の骨化し、遂に突起と爲りて存するものあるが故に、即はち此突起を標準として、頭部環節の算へ得らるべき事を、證言するに努められぬ。

この研究の材料としては、昆蟲中、特に分化の低度なる直翅類と脈翅類とを採擇せられしが、結局、此種の頭胸兩部は、膜によりて相互の聯繫を保ち、膜中には若干の骨片の、その背面、側面及び腹面に排列せらるゝありて、往々前後に接續する二片より成り、稀には内方に向ひて突出する骨片を有せること、恰かも胸部の環節の、これに於けると等しければ、則はち之を以て環節を代表すと論ぜられぬ。固より節足動物のものたる、その分化の度の進むに隨がひ、軀幹の後方の環節は、漸次前方に加はるものなれば、原と胸部の一端を占めたる環節の、今や頭部最後の環節と化成せしは、是れ自然の道理なるが故に、膜中に存在の骨片を目して、頭部の環節を代表すと言ふとも、決して背理の推定と謂ふこと能はず。

第二圖

又氏は頭部の内面に突出して、腹背二腔を區畫せる間膈の搆造をも究明し、この間膈を以て、前述の環節間（一環節を搆成する前後二片間の環節）の内方突起より成れるものとなし、斯くて固着せる頭部の骨格の環節を定められにき。

第三圖

上記の方法に據り、昆蟲頭部の骨格を調査したるに、實に左に表出するが如き結果を得たりと。

環節	骨片	付部
一、眼環節	顱頂及前頰 頸部	眼圍の骨片
二、觸角環節	觸角根基周圍の骨片 楯板	觸角
三、第二觸角環節	上唇	カムポテラアの第二觸角
四、大顎環節	後頰 基節前骨片（コリダリユの幼蟲の楯） 咽頭骨片（板の左右にある骨片）	大顎 回轉基節（コホロギ類の大顎の根基に横はる一帶）
五、舌背骨片環節		舌の奥に位する一帶の骨片
六、小顎環節	後頰の後緣に沿ふ一帶の骨片（コホロギ類に有する） 舌	小顎
七、下唇環節	頸背骨片。頸側骨片。頸腹骨片	下唇

●説明　第一圖の（ト）は回轉基節を示し、第二圖の（ヘ）は基節前骨片を示し、第三圖の（チ）は（リ）の背を示すものなり。

（他の符號は省略す）

編者云ふ、右の一篇は中川氏が行裝匆々の際に口述せられしを筆記し、同氏の訂正をもうけずして、茲に登載せしものに係れば、或ひは誤謬無きを保せず。文字の責は一に編者にあり、讀者の諒讀を乞ふ。

◎ゴマダラテフに就て（第四版圖參看）

名和昆蟲研究所助手　名和梅吉

ゴマダラテフは、鱗翅目の蝶類中、蛺蝶科（Nymphalidae）に屬するものにして、山林原野に普通なる中形種とす。其學名を Hestina Japonica, Feld. といひ、舊名を Euripus Japonica, Feld. と稱せり、此種に就ては曾て故プライヤー氏は自著日本蝶譜に左の如く記載せるを見る。

○産地　横濱　○食草　朴樹　○期節　六月、八月、十月

此種は年に二回現出す、樹の周圍に飛翔するを視察すると屢々にして、殊に其食餌となす朴樹に多し、「ユ、カロンダ」の如く「コスサ

ス」其他の鱗翅類及甲蟲類の爲めに蝕せられたる槲樹、栗、柳等の蠹孔に於て常に發見せらる、此蛹は樹梢の皮裏に冬眠をなすを以て當時は鼠色を帶ぶると雖も、春候萌芽を生ずるや、其皮忽ち變じて綠色を呈す、其形狀通常の「アパチュラ」の如き光りたる圓筒形にして分岐せる頭を具ふ。

其後宮島幹之助氏は、動物學雜誌第一卷第百廿九號に左の如く記述せられぬ。

中形の蝶にして期節により形狀及び紋樣に差あり、翅は黑色にして蒼白色の紋多し、雄は一般に雌よりも形小に、且つ其他色濃し、翅脈は黑く、白斑は後翅にて中央列と外緣列とをなす、中室及び內緣は白色なり、裏面の色及び紋は表面と大差なきも、只其色少しく淡し、普通の種にして、一年間六月及び九月頃に二回あらはる、本邦內九州より北海道に至るまで、到處の朴樹其他の樹林に飛翔す

仔蟲　其幼時には樹皮上にありて鼠色を呈す、樹に葉生ずると共に仔蟲は脫皮し、綠色に變じ、葉上に移る、コムラサキの仔に似て、頭部より二個の角狀突起を出す、朴の葉を食し、左右扁なる蛹を作る。

前揭兩氏の記事に據て見る時はブライヤー氏は蝶の形狀に就ては一も記せず、其習性を記し產地を只橫濱とせられたるのみなれども、宮島氏はまた習性を省き、形狀に就きて記述し以て九州より北海道までとせられたるを以て見れば本邦內に該蝶の分布の如何に廣きやを知るべし。食草は同じく朴樹なるも但そが發生期節に於てブライヤー氏は六月、八月、十月の三月の中とし、宮島氏は六月及び九月頃とせられて、多少の前後を立てらる。而して一年二回の發生なるの一事に至りては、兩氏とも全く一致せり。固より其年の寒暖、土地の南北により、發生の遲速は免がれ得ざるものなるも、余が岐阜地方に於て觀察せし處に依れば、一年都て三回の發生を爲すものゝ如し、今次にその大要を揭げて之を將來の觀察に徵せん乎。

ゴマダラテフは岐阜地方にては普通の種にして、山林原野に普ねし。其現出の時期は第一期のものは五月下旬より六月中旬に亘り、第二期は七月下旬より八月中旬に及び、而して第三期は九月中旬より十月上旬の間にあり。但八月中旬より九月中旬の間に於ては、常に飛行するもの少なきも、前期に接して多

少此間に發現するもの丶如し。而して九十月の頃に發現する第三期のものに至りては、産卵后全たく死滅し、冬季は其繼嗣たる幼蟲の狀態にて越年するを常とす。其卵子は葉裏に産附せられ、幼蟲は始め鼠色或ひは灰褐色を呈し、冬季越年の際には樹枝に棲止するも、其色を樹枝に擬するが爲め容易に檢出し難し、充分成長する時は長一寸三四分に達し、圓筒形をなして全躰綠色なり、頭部の上方には、尖端の岐れたる二個の長き角狀突起を有し、第七節上にも腹端と同じく稍や大形の突起を有し、且加ふるに第二節第五節及び第拾節上にも亦微突起を有せり。蛹は枝梢或ひは葉裏に懸垂す、其形ち扁平にして淡綠色を呈し、全面に白粉を被覆せし如き觀あり、大さ一寸一分位ゐを常とす。

成蟲卽ち羽化せし蝶は、第一期に發現するもの大形に、第二期のものは小形なり、卽ち第一期の雌蝶の躰長は約一寸(第二期のもの八分五厘)翅の擴張二寸八分內外(第二期のもの二寸五分)にして雄蟲は少しく小形なり。複眼は大にして赤褐色を呈し、觸角は黑色に尖端は漸次太まりて棍棒狀を爲す。胸部及び腹部は、共に黑色に、蒼白色の細短毛を生せり、特に胸部に於て然りとす。その前翅に於ける第二半徑技脈はムラサキテフの如く、第三半徑技脈と分れず、ろが基部の接近部に於て合一し、第三半徑技脈よりは、第四、五の半徑技脈を分技せり、臂脈は唯一個を有するのみにして、アゲハノテフの如き横脈を欠如し、且前後翅ともに第二中央技脈より、第三中央技脈に連なる所ろの中横脈を缺くを以て、中央室は全たく空座を有す。

次に翅上の紋樣其他を叙述すれば、全面の地色は先づ黑色に、これに蒼白色を呈する大小の斑紋を有し、其排列は中央室に於て稍方形の大なるもの、第五半徑枝室及び第一第二の中央枝室には各二個を有し、こは相分れて並列せり、而して第三中央枝室に於ては、一個の外基部に於て暗微紋あれ共、是は第一期

生のものに限り、第二期生のものに至りては之を有するを見ず、又別に外縁に近く一小紋の顯はるゝとあり、第一肘枝室には、基部に於て最とも大形紋を有し、外縁に近く大なるものと微小紋とを有し、第二肘枝室に於ては、其翅底より翅の中央に走りたる縦帶を有し、外縁に近き處ろに二個の微小紋と、其内部即ち縦帶の終りたる處との中間に於て、大なる紋あり。後翅に於ては蒼白紋部は翅底の大部分を占め、亞前緣室の基部は、廣くして僅かに黑色にて界ひせられ、再び中央に於て廣き蒼白紋を爲す、是より下部は各室とも紋様を存し、所謂中央列を爲すも、外縁部に於ては小圓紋を各室に有して、外縁列をなせり。右の外、中央室は全たく白く、引きて中央列に加はり、臀部は蒼白色をなして、單だ一條の翅脈のみは黑色を呈せり。脚部は六脚中、前脚は他脚に比し、短かくして且つ細く、中後脚は共に粗ぼ同長にして黑色なり。

此種は常に高く飛翔するの性あるを以て、採集には甚だ困難なりと雖ども、プライヤー氏の說の如く槲樹、栗及び柳等の樹幹より浸出する液汁を舐食せんが爲め、恒に斯かる處ろに集來するを以て、此等の方面に注意するときは案外容易に捕獲し得べし。なほ同種のもの、又はコムラサキ種等の近づく時は、之を追隨するの性をも有するを以て、其際急に弱點を衝くも亦採集の一方なるべき歟。

說明(第四版圖解)　(イ)は葉裏に產附したる卵子　(ロ)は三眠起の幼蟲　(ハ)は四眠起の幼蟲　(ニ)は蛹　(ホ)は雄蝶飛翔の狀　(ヘ)は雌蝶棲止の狀

◎明治卅四年の氣象と害蟲の發生(續)

北總　大竹義道

◎四月　此月もまた其特象を缺き、晴天少なくして陰雨の日特に多く、概むね濕暖を感ぜり。就中、

重なるものを擧ぐれば、三四の兩日は暖風吹きて頭痛を感ぜしめぬ、即はち三日は曇天よして最高溫度は攝氏の二十度を示し、四日は小雨を促ふせり、五日は晴天に復したるが、泥土中よキリウジガガンボの産卵せるものあるを檢出せり、十五日は朝晴午陰痛く暖氣を増せり、是れ次日變調の前兆なりしよや、十六日は終日の降雨にて、雨量は二七粍（一坪に四斗九升四合餘）を示せり、十八日よ至り俄然寒氣を増し、綿服を着するも猶ほ寒氣を覺ふ、十九日は曇天にて、正午頃に日暈を睹き、是れ降雨の前兆ならんと思惟したるに、果然翌廿一日に至りて小雨と變じ、斯くて雨日繼續せしが、廿四日に始めて回復せり、廿五日は午后より曇天となり漸次惡象を示して廿六日よは過半暗曇となり、且暖氣を催ふせり、廿九日午後に微雨を降し、三十日は晴天となりて暖氣を増し、最高は攝氏の廿六度を示しき。

◎五月　前月と同じく順調を失し、濕潤不定の日多かりき、即はち雨日十六を算し、曇天また十餘日に亘れり、ろも此月の上半月中九日より十四日までは陰雨勝なりしが、此間の雨量の合計は七四粍（一坪一石二斗八升一合）を算しき。是より先、一日は南の和風にて最高二十七度強を示すほどの暖氣なれば、或ひは單衣を着けし者もありしに、三日を過ぎ四日となるや、氣溫降下して天候一變せり、此日前年の秋季よ稻莖內に蟄伏せる螟蟲を檢せしに、蛹化せるを見き。（九日より廿三日まで關西地方を旅行したれば、之を詳述すること難しと雖ども、過半は陰雨の候を現じたりきと云ふ）廿四日には恰かも梅雨の節の如き天氣なりしかば、氣分勝れざるを覺ふ、此日去月四日よ麥畑よて捕獲し、蚜蟲を以て飼育を試ろみたる瓢蟲死す、廿五日某地に出張の際、火光を慕ひ來れる螟蛾を捕ひ、瓶中に入置きしに廿七日に至り産卵せり、廿九日は大半快晴なりしが、最高三十度を示し、翌三十日天氣變はりて雨摸樣となる此日イナゴの卵塊より幼蟲孵化し始む、但し其三四日前既に田中にて幼蟲を目擊せり、三十一日早朝よ

り曇り、北の冷風吹き、前八時頃より晴兆を呈し、后一時半頃までは晴天ありしが、同二時半頃西方に黑雲起り、三時半頃雷鳴と共に小雨を降し、五時頃までこれを持續せり、此日午后信州北佐久郡に發したる雷雨は、暴れすさみて上州高崎より熊谷、東京附近を經て當國印旛郡より千葉郡を通過し、夜九時上總國茂原より海に出でたるが、爲めに其通過區域内の農作物に非常の慘害を與へたりき、恐らくは通過路に當れる土地の害蟲は痛く撲殺の難をうけしあらんか、但し當地は幸はひにして無事なりき。

◎六月　上半月は此月の特象を呈し、空氣濕潤して梅雨の狀態をなせり、然るに中旬に入るや、數日間は晴天を保續し、空氣乾燥して氣温大ひに昇騰したれば、所謂涸梅雨の天候に變じ、乾田地は概むね灌漑水の欠乏を來せり、斯くて下旬に遷るや、天候一變遂に陰雨冷氣の狀態を以て經過せり。此月三日には去月廿七日管瓶内に産下せる卵子より螟蟲孵化し、十三日には藜の葉に夜盜蟲の卵塊あるを發見しき。下半月には菜類、大根等十字科植物のあらざる大地にモンシロテフの飛行して頻りにイヌガラシと稱する野草に産卵するもののあるを見き。此月の中にて風雨の最とも烈しかりしは、三日と三十日の兩日ありき。

◎七月　上半月は前月と同じく多雨冷濕を重ね、陰鬱の日特に多く、梅雨は一日より延て十八日に亘れり、中にも二日は四五粍(七斗二升三合五勺)八日は三七粍餘の多量を降下し頗ぶる冷氣を感せり。其後廿一日も亦多雨を算したるが、此日や早朝濃霧、午前十時頃には曇天にて蒸熱を催ふし、且つ南と西に雷聲轟ろき十一時過より豪雨を見たり、后二時に至り小雨となり、次で三時には雨歇み晴天に復しき。超えて廿三日よりは全たく夏季の常態に復し炎暑高熱、氣温は常に三十度左右を昇降せり。　(未完)

◎冬季昆蟲展覽會の結果 附 冬蟲採集試驗（後）

名和昆蟲研究所長　名和靖

第三、木皮採集法　此法は專はら樹皮を搜索して蟄伏の昆蟲を採集する方法あるが、之を行なひたるは、一月十日より同月二十日までの間にて、採收種類は百四十五、頭數は二千二百六十なりしが、其中山に於て七十一種、六百十二頭を、野に於て七十四種、千六百四十八頭を獲たりき。而して更に之を細說すれば、山に於てはヤニサシガメ、木クヒムシの類多かりしもムシクサ象蟲は殆んど棲息するもの無く、之に反して野に於ては象鼻蟲の類多きを認めたり。去れば山野によりて其種別の多少を言へば、山に於ては甲翅類最多を占め、膜翅半翅の兩類之に次ぐも鱗直羅の三類は極めて僅少にて、野に於ては甲半膜双鱗の順序なるが、羅翅類のみは一も捕ふる所ろなかりき。今之を七類分類式に表出せる時は、次に掲ぐるが如き結果を現出す。

冬季に木皮採集の圖

（イ）は樹皮間搜索の處（ロ）は選蟲の處

第四、石起採集法　この法は河畔といはず、路傍といはず、將また山腹といはず、石塊を反覆して其下に潛伏せる昆蟲を採集するの方法あるが、之を行ひたるは、同じく一月十日より十九日まで十日間なりき。而して其間に獲たるは、都て百十一種、千

四百七十七頭にして、山に於ては三十一種、六百八頭を算し、野に於ては九十種、八百六十九頭を算せり、今其大躰に就て言へば、山には守瓜最とも多く、スナガメムシ、アヅキガメムシ之に亞ぎ、野に於ては大ひに其趣むきを異にして七星瓢蟲最とも多く、ゴミムシ類、アヲバハチカクシ、スナガメムシ、コメツキムシ等また多かり。故に農作の上より見れば、山には

（木皮採集成蹟表）

類目	野 種類	野 頭數	山 種類	山 頭數	計 種類	計 頭數	備考
膜翅類	六	八七	八	一八六	一四	二七三	野とは今泉本村より新村、忠節林の邊を指し、山とは權現山、金華山等を指せり採集人は前同断なり
鱗翅類	二	四	一	一	三	五	
双翅類	七	一八	八	二一	一五	三九	
甲翅類	五一	一三一六	四七	三六六	九八	一六八二	
半翅類	七	二二〇	六	三七	一三	二五七	
直翅類	一	三	—	—	一	三	
羅翅類	—	—	一	一	一	一	
計	七四	一六四八	七一	六一二	一四五	二二六〇	平均一種に付十五頭強の割合

害蟲多く潜伏し、野には益蟲多く越冬するものと謂ふべし。これまた甲半直の三翅類多數を占め、膜翅類多少之ありしも、前法に比すれば其半ばに過ぎざるのみか、鱗双二翅類の如きは一頭だも捕獲するも

冬季に石起採集の圖

(イ)は石塊を反覆の處(ロ)は捕蟲の處

の無かりき。寧ろ奇異の結果の如きも、其躰驅の構成及び性質の上より考ふれば、これを當然となきも可きか、即はち之を表出するが如し。

第五、叩網採集法　この法は打墜法とも稱ミ、捕蟲網に墜落する蟲類をうけて採集する方法とす、これを山地に於て行なひたるは、一月九日より同月二十日までの間都合十回にて、總計二百十九種、二千四百六十頭を獲たりき。之を調査せしに、浮塵子類多く、双翅類に屬するもの及び草蜻蛉の種類また少なからざりしが、直翅類を除き、他は一般に多種多頭なりき、前例に依りその分類を示せば次表の如し。

冬季に叩網採集の圖

（イ）は打墜を行ふ處（ニ）採集用の小瓶

（石杷採集成蹟表）

種目	野 種類	野 頭數	山 種類	山 頭數	計 種類	計 頭數	備考
膜翅類	三	一二	四	九	七	二一	
鱗翅類	|	|	|	|	〇	〇	採集地前法同
双翅類	|	|	|	|	〇	〇	斷
甲翅類	六二	六七七	一九	四六一	七一	一一三八	
半翅類	一八	一四六	一五	一二一	三三	二六七	採集人また同じ
直翅類	六	三二	三	一七	三	四九	
羅翅類	一	一	|	|	一	一	
計	九〇	八六八	三一	六〇八	一二一	一四七六	平均一種に付十二頭强に當る

（叩網採集成績表）

種目		山	備考
膜翅類	種類	六一	山に於てのみ之を行ひたるは、此法の野に行ひ難きに依る
	頭數	六〇九	
鱗翅類	種類	一三	
	頭數	六七	
双翅類	種類	六〇	
	頭數	九四二	
甲翅類	種類	三八	採集地は公園より伊奈波山金華山の邊一躰なり
	頭數	一三一	
半翅類	種類	三二	
	頭數	六〇七	
直翅類	種類	五	採集人も前同斷なり
	頭數	七	
羅翅類	種類	一〇	
	頭數	九七	
計	種類	二一九	平均一種に付十一頭強に當る
	頭數	二四六〇	

以上記述したるが如く、採集法の異なるに隨うて其蟲品を異にし採集地の異なるに隨うて、種類と員數に異なる所ろあるは明確なるが、要するに世人が深く注目せざる冬季採集には、却つて注目すべき蟲種を含有し、またその研究の目的を遂ぐる上に、偉大の利益ある事を示せるものと謂ふべし。特に石起採集法を行なひたるものにはツチイナゴ、クビキリバッタの如き大形種を混じへ、叩網のものと、篩網のものとには、比較的小形種のもの丶みを見、木皮採集のものに至りては最微小形種多數に居るの事實の如き、又この試驗によりて甲翅類のものと半翅類のものとは、其大半を占め、他は少數なるが中にも、鱗翅類のもの最とも少なきを立證せるが如きは、頗ぶる些々たるに似て、決して看過すべき事にはあらざる可し、蓋し臆想を以ては、或ひは斯かる事ある可しと判定せられしも、實地の試驗によりて多寡を定めたる者は、未だ本邦に之れ無かる可ければなり。余は是より年毎に此等の試驗を行せんとするの希望を懷く者なる事を茲に告白すると丶もに、また斯學研究者の熱心に冬季採集に努められんことを禱る。

●説明　本誌前號の口繪となしたる冬季採集圖の上部に掲げたる四種の甲蟲は、皆これ冬季展覽會に出品せる新種のみなるが、其中(イ)は瓢蟲の一種にして、岐阜縣海津郡に於て採集せるものに係る、其躰色は黄褐にしてこれに黒斑を有せり。(ロ)は步行蟲の一種にて、岐阜縣海津、羽島、武儀の數郡に

産す、全躰黒色にて翅鞘上には四個の黄色をなせる大紋を有す。（ハ）は葉蟲科の一種にて、岐阜市よ於て木皮採集の際に捕獲せるものなり、全躰は淡黒黄褐色にして、上に黒斑を有す。（ニ）はキクヒムシの一種なり、是また岐阜市に於て樹皮間より獲き、其全躰は黒色よて細短毛を密生せり。（完）

◎第拾壹回全國害蟲驅除講習會員の五分時演説

去三月一日より同十四日まで二週間、當昆蟲研究所内に開きたる、第十一回全國害蟲驅除講習會席上に於て、同講習生のなしたる五分時演説に就き、三四を物すれば左の如し。但し蟲送り等の如き迷信に關するものは、追て雜報欄内に收錄する事となせり。

（一）岐阜は眼病の治療地たり

神奈川縣　長坂村太郎

私は國民教育の職に居る者でありますから、農業に就ては、別に實驗とては有ませぬ、隨つて失敗談もありませんが、一昨年頃らふ眼病よ罹りましたので……蠶さへも見れぬ程の眼病をやりましたから、曠職の虞れがあると思ひまして、退職の事を監督者に願ひ出ました、併し何分聞屆けて呉れませんもので、其儘繼續はして居りましたが、實よ困難でありました。御承知の通り、神奈川縣は東京よ近いが、東京には流石、生馬の眼をさへ拔取る者が有ると聞いて居りましたから、或ひは私の眼病位ゐを治療する名醫が居るかも知れんと云ふので、色々探して見ましたが、適當の人が見附らんから、快々として歳月を送りつゝも、心窃かに人の子を賊ふことは無いかと心配致した次第でしたが、今回監督者から、君が年來困難をして居る眼病は、岐阜市よ開く全國の害蟲驅除講習會で治療を加へて見ては如何だと言はれましたから、喜こび勇んで此土地に參りました處が、僅か七八日を經つか經たんのよ、日は一日と奏効しまして、今は蠶どころか、細かい幼蟲から、多くの益蟲害蟲の區別さへ出來るやうに成りましたので、心の中の愉快は言ふに言はれん程であります、是は實に名和先生の恩惠であると思ひます。扨先刻來、諸

君の演說を聽きまするに、國民敎育者の多くは、私と同樣の眼病に罹らるゝやに承はり、殊に關東のみでは無く、關西地方にも同患者が續々あるやうに見受けましたが、斯かる眼病者に帝國の第二の繼承者を托して敎育して貰ふのは、前途のため實に懸念に堪へません、それで敎職以外の諸君は、各鄕里に御歸りましたならば、先づ自分の兒女を御委ねに成り居る敎員の眼病の輕重如何に深く注意されまして、私と同樣に之が爲め困難をして居る者がありましたなら、成るべく當所に轉地療養をさせまして、一日も早く平癒するやうに、助力もし且つは御勸めなさるが宜しいかと存します。就ては昨夜枕上で讀みました十一首の俳句がありますから、之を眼病平癒の證に讀上げまして、諸君の御笑草に致さうと存じます。(俳句は略す)

(二)三化螟蟲の加害豫防の急務

福岡縣　添田喬藏

私は螟蟲の本場と唱へられたる福岡縣の者でありますが、私の縣では餘程以前より之が被害がありまして、舊藩時代からシンガレ(心枯)、カラクサレ(稿腐)抔申して、筑後國の或部分にその害毒を流して居りましたものであります。そこで時の農事試驗場技手吉田昌七郞君は兩三年間これが飼育試驗をなされましたが、之が爲め僅か明治廿三四年頃には、全たく螟蟲の變態その他習性等も解かりまして、驅除豫防法を奬勵する事に成りました、今日でさへ實行上隨分多くの困難がありますから、當時は一層多くの骨折であッたであらうと想はれます。併し追年經驗を重ぬるに隨がひ、農家の腦髓にも、害蟲と云ふものは驅除すれば、それだけ害が薄らぐものと云ふ事が判ッて參りましたので、自づから之を行ふやうに成ッたのであります、處が廿六年は、非常に螟害の劇しい年であッて、損害額が廿五萬石で、被害稻田の如きは到底形容し盡せぬ程の慘狀を呈しました、それは實に目も當てられぬ有樣となりましたので、此刺戟のために農家の害蟲に對する覺悟も一新致すと同時に、驅除法にも馴れて參り、又當局者の奬勵監督も益々嚴重に成りまして、餘程善く成ッたのであります。そこで只今では苗代田整理に、誘蛾燈の點火に、苗代田の採卵に、又本田の採卵、莖切、秡穗、株堀の諸法に、皆これを行ふては居りますが、未だ其害源を絕つことが出來ずに困ッて居ります、これを見ても三化生螟蟲の頑健で大害を致す事が能く解ります。然るに螟蟲加害の結果として、栽培稻種にも自然の淘汰が行はれ、早種なれば非常に早い種類を、晚種なれば最とも晚ひ種類を選擇するやうに成りました、それは早稻なれば第三回の發生加害を免がれしめんため、晚稻なれば第一期の害を豫防するの手段に出でたるのであります、之が爲めに米

質を劣惡に導びきましたが、去りとてまた巳むを得ないのでありますから、一たび蔓延を致した日には之が驅除は容易の事ではありません、故に驅除の千金は豫防の一金に及かずの金言に基づき、其初期に十分の方法を講ぜんと到底慘害、否吾が福岡縣の覆轍を免がれ得んのであります。勿論これら大害蟲を擊退するの任務は、かゝりて諸君の双肩に在るのでありますから、夙く十全の方策を立つると同時に、現時聽講せられつゝある昆蟲世界を跋渉して、實地に消化應用し、國利民福を圖ふるゝやう、敢て希望を抱く次第であります、これで御免下さい。

（三）農作害蟲の米質に及ぼす實例　　愛媛縣　森　玄作

私の住んで居る愛媛縣越智郡からは、何ンな米を産したかと言ひますと、三寶米とて縣下でも屈指の良米でありまして、之を兵庫港の市場へ積出しましても伊豫の三盆米かといはれて、永らく上等の位置に据へられてあッたのです。然るに近頃は如何であるかと云ふと、諸君の中で大阪朝日新聞の物價欄を御覽の方は既に御承知でもありませうが、昔しとは打ッて變ッて價格が頓と下ッてあるのであります、誠とに遺憾には堪へませんが、また致方の無い事があるのであります、これは二化生螟蟲は申すに及ばず、其他の害蟲の爲めに減收も來たし、且つは其品質を惡化した結果に外ありませんのである。斯かる有樣でありますから、品質の極めて好良で、價格の貴とくあッた三寶米も遂に農家に見捨てられまして、年一年と耕作者が減少致し、今では多く此種類を見んのであります、蟲害も玆に至ると恐ろしいものと言はねば成りませぬ。それで私は歸縣の上は是非品質の改良と同種の增殖を圖り度いと存じますが、其方法としては今回修得の事柄を實行すると否とに在ると思ひまそ、即はち行なふとの決心さへもあれば、餘り困難の事では無からうと信じて居る次第で、此實行の有無はまた世の中に對する責務を盡すか盡さんかの岐れ道でもありますし、折角敎導の任に當られた、恩師名和先生への第一の報酬の如何も畢竟玆に在ることゝ信じて疑はんのである。

（四）昨年に於ける大阪府の害蟲驅除一斑　　大阪府　辻岡彦次郎

昨三十四年は、吾が大阪府が三萬圓以上の農作害蟲驅除費を補助致しまして……驅除用の石油代及び人夫賃其他器具費等を合算すると非常な多額に上りますが、多數の府吏員すなはち驅除委員と云ふ者を任用しまして、之を各郡に五六名若くは拾名位ゐづゝ配置の上、驅除法を厲行せられ、又その下級の町村には共同苗代改良委員と云ふのも置きまして、何んでも苗代は短冊形にせんければ可かぬ、する以上は

必らず五畝歩以上の面積でなければ許さぬ、害蟲驅除の方法は何處も同一の方針でなければ成らぬ、萬が一この命令に從はんと行政權で以て服從せしむると云ふ嚴行主義を把られまして、徹頭徹尾、奬勵嚴行を期せられました結果、何うか先づ好成績を擧げましたのである。斯う申せば中々立派の樣に思ふ方も有ませうが、飜ッて其内部を伺ふと左樣でも無い事實がある、と申すのは大阪府下は商工業こそ發達はして居るもの丶、農業界の不振は自白せんければ成らん程で、既に厲行とか嚴命とか行政處分とか申す言葉は、強制執行の換言であるから、此文字の上でも其程度が知らる丶位ゐである、それに委員と申す者の中には、先刻失敗談と云ふ題で御話しになりました樣な驅除法を辨別せぬ方もありましたやに聞いて居りましたから、是で大概は推測らる丶のであります。去り乍ら此かる強硬の手段も頑農輩に對してはまた必要で、實地驅除の普及は焦眉の急務であると信じますれば、今後は當局者も地方の有力者も、毎月一回位ゐは町村農會の爲めに講話會を開くとか、又は短期の講習會を開きまして、恒々害蟲の恐るべき事柄や、益蟲の保護すべき事を敎へまして、漸次進取的驅除の精神を注入致しました日には、其失ふ所ろが少なくて、得る所ろが多いのみならず、それよりも始めて完全の驅除法が行はる丶事と存じます。私は斯かる事を好んで申すでは有ませんけれども、段々諸國の有樣を聽聞致しますと、大概同一の樣子のやうに承はりましたから、一日も早く此思想を養成して、國家の大害を除きたいものと望みまする餘り、少さか卑見を述ぶるのであります。

（五）御義理合的驅除の不成績　　栃木縣　高柳源四郎

私は四五年以前より燕は益鳥で、害蟲を取ること實に妙であると云ふ事を考へて居りましたが、それは私の地方では、五月二十日頃に、アラクレと申しまして水田を馬耕で搔ならすのでありますが、其時田一面へ一時に水を湛へまするものですから、螟蛾が飛出します、そうすると何處からか、燕が飛んで參ッて、其蛾を飛違ひさま捕獲するのが奇々妙々で、其輕捷の早業は驚ろく計りであります、斯くて螟蛾か多く飛出しますとまた多くの燕も飛來りまして、一蛾も餘さず捕獲するのでありますが、私は屢次田間で此有樣を見て、知らず〳〵も燕や蜻蜓の如きものは、私共農民に益を與へるであらうと云ふ事を悟りました。さて顧りみて螟蟲の方は如何かと見ますると、稻穗の白くなりましたもの丶中には、三十六七頭の幼蟲が居ると云ふ次第でありますから、知友や農會等に勸誘して之を驅除したら如何だと申しても、更に深い心配が無い樣子でありますから、私一人で以て苗代田の近處で誘殺法を行ひましたが、更に功

能が無く却つて害の有ることを確かめましたから、斯う一夜に螟蛾六七十も取る以上は、共同的に行ふたら屹度澤山捕れるだらう、又効能も多いだらうと云ふので、昨年始めて農會で決議の上に、螟蟲一疋一厘、卵塊一個貳厘で買上げる事に致し、全町通じて午后七時より製板所の滊笛を合圖に三夜ほど、一夜各番に點火誘殺法を施行致しましたが、唯御義理合的に火を點じた儘で、眞に見廻りをする人が殆んど無い位ゐであッた、隨ッて一向心配する人もありませんであッたから、其殺蟲數も至極僅少で、却つて日中に捕蟲器で掬取るか又は卵塊を取る方が多くありました。併し私は成るべく精出しまして一昨年非常に螟害のありました苗代田には特別に注意しまして驅除を行ひましたから、最早これで十分だと心得て居りました處が、今日に至るも猶ほ大概螟蟲の害を認めて居ります。そこで私は眞實に一時の御義理合的驅除法の役に立たぬ事を感じまして、是は皆人目を瞞過するに外ならない、今後は如何あッても一歩進んざる完全の方法を行ひ、又益蟲益鳥をも保護しまして國家の慶福を圖るの必要を悟りましたのである。

◎本邦昆蟲研究家叢話（其四）

北勢　丹波修治　記
古奧　青蓑白笠人　補

◎水谷豐文先生の敎化　先生名は豐文、通稱は助六、鉤致堂と號し、又有斐軒とも號しき、尾張名古屋の人なり。幼より博物學を好み、夙に笈を負ふて小野蘭山氏の門を敲き、動植鑛物の各科を研磨するもの數年、造詣する所ろ頗ぶる多く、遂に優に一家を成せり。性洽聞強記、兼て書圖をも善くせり。その學業に忠實なる刻苦精勵、旦より夕に至るも曾て倦怠の色を現はさず、又屢次崇岳高峻を跋渉し、庶物の採集に勉めり。こゝを以て學殖年に進み、名聲遠邇に轟ろき、諸國及門の徒、尤とも多かりき。今先生の家系を按ずるに、寛政六年五月、謁を藩主源明公に賜はり、享和二年三月、その父退隱するに追

び繼嗣を命せられて馬廻組ゝ入り、三年昇格して大番組の斑に伍し、尋で藥園監守の職に補せられて、尾州藩の植物園を監督しき。文化六年物品識名二卷を著はし、次年六月信濃美濃の諸山に藥獵して木曾採藥記を作る、文政八年物品識名拾遺二卷を印行し、越えて三年、同志とゝもに灌園餘錄を公けにし、又本草綱目記聞等を草して、專はら斯學の普及開發ゝ資せり。當時此種の著述少なかりしを以て、學者座右の好侶と稱せられきと。天保四年三月病みて其家に逝けり、時に年四十三。

先生恒に心を後進の誘掖啓導に用ゐ、之が機關として尾張甞百社を創設し、時々同志をこゝに會して、斯學の攻究、實物の鑑定をなさしめぬ、就中、後年名を成せる者を、大窪薜荔、岡本清達、柴田洞元、西山玄道、大河内恒庵、石黑濟庵、神谷三圓、舍人重臣、吉田雀巢、大窪舒三郎、伊藤圭介等の諸氏となす。人或ひは評すらく、尾藩の博物學は、松平君山氏に萠芽して、水谷先生ゝ生育すと、蓋し至言あり。彼の甞百社創始沿革記事に、嘖々ろの偉德を賞揚せしに徵するも、先生の敎訓感化の功課を想見するに難からざる可し。

先生は先天的に植物の研鑽を好まれしかど、また重きを動物に置けり、即はち蟲譜、魚譜、鳥譜等の著述は、其嗜好の如何を判定するに足れり。但概むね上梓するゝ至らざりしを以て、今日ろの家ゝ傳はる所ろのものは、蟲譜の手寫稿本その他數種ゝ過ぎずと云ふ、惜むべき哉。先生の歿後、義子助六氏ろの業を襲げり、初名は義三郎、名は光和、少壯先生の門ゝ入りて博物を講じ、諸同人と共に甞百社員たり後先生の繼嗣となるや、常に左右に待し、記述寫生より研學に至るまで、多く補翼する所ろありき。天保十三年三月大番組與頭勤務を命せられ、弘化三年十二月を以て病歿せり、時に年齒未だ知命に達せざりきと云ふ。嗣あし、乃はち吉田雀巢氏の門人某を養ふて後繼となす、すなはち第三代の助六氏是なり、今現ゝ名古屋市ゝ在り。先生の父翁を覺夢といふ、初名は友之右衛門、性植物を愛翫し、草花の培養に精通せり。一書に翁を以て柳藥師の僧となせるは、蓋し誤聞に出でしなる可く、而して先生の志を博物ゝ立てしは、實ゝ父翁の嗜好の感化によれるに似たり。

按ずるに、世に水谷蟲譜と稱するものあり、他にまた先生の遺著ならんかと擬せらるゝもの一卷あり、共に文化文政年間の著述に違はざるも、之を水谷家藏の稿本に對照するに、その圖畵の劣惡なる、解說の不備なる、先生の著述としては疑ふべき節少なからず、故にこれに言及ばさず。又按ずるに、此本文に從へば、年齡に於て事實と合はざる所ろあり、恐らくは十年前後の違算あるべし、然れども未だ確證すべきもの無きを以て、暫らく原書に據る。

◎附錄(吉田平九郎先生及び石川八太先生の事歷)

吉田平九郎先生は尾張の人なり、名を高憲といひ、號を雀巢庵といひき。水谷鈎致翁の門に出入して博物學を修め、好んで動植二物を研究せり。當時未だ分類の學あらざるに、先生深く昆蟲の性狀を精硏し、遂に蟲譜十一冊を著はし、又雀巢庵蜂譜を作れり。其秩序の整然たる殆んど前哲を凌駕せんとするものあり。先生最とも實驗を重んじ、幾たびか信山濃岳を蹈破して庶物を蒐集し、又後園にも多く異品珍種を栽培しき。去れば飯沼慾齋氏の如きも、常にその鑒定を仰ぎ、草木圖說を編輯するに際りては、特に先生の示導に竢つもの多かりきと。別に物殊品名等若干の著書あり、然れども先生易簀の後皆散逸して、今やその歸する所ろを知らず。安永五年六月を以てその家に逝けり、行年未だ詳ならず。

石川八太先生は尾張の人なり、只憾むらくは未だ其人となりを知る者なし、或ひはいふ、石川內藏允氏の先代ならんかと。天保の末年に蟲譜二卷を作り、主として蜂、蜻蛉、草蟲、蜘蛛、蛙、水屬及び鱗蟲を圖說せり、その書色彩を施こさずと雖ども、全篇寫生に出で狀態頗ぶる精確なり。神谷三園氏の卷尾の記事に據れば、此書は吉田雀巢氏の補筆を竢ちて始めて完備したるものゝ如し。因みに云ふ、石川內藏允氏は博物學を好み、その家藏書に富み、慷慨家を以て知られしが、明治の初年、朝命によりて他の尾藩士十二人とゝもに死を賜はれりきと。

◎木葉蝶の棲息如何に就て

静岡縣静岡市　T. O. 生

鱗翅類蛺蝶科に屬する木葉蝶は、多く熱帶地方に產し、我が本州に棲息するものなりや否やは、未だ明了ならざるが如し。然れども是は全く、本州に於ける風土、寒暖等と昆蟲分布の關係を調査せざるの結果なるを以て、暫らく一つの疑問とするも可ならん、而して此蝶に就て從來世に知られたる諸說を窺ふに、左の如く記載せらる。

(一)日本昆蟲學　琉球等には普通なり。

(二)博物學雜誌第十一號(明治三十四年四月二十日)　此蝶は琉球の如き熱帶地に產するものにして、印度地方に至る迄廣く分布するの種類なり。

(三)動物學雜誌(第十一卷百二十九號)　宮島幹之助氏の日本蝶類圖說には、琉球にのみ之れを產す云々。

斯く諸說は共に本州に產するの有無を記載せられず。焉んぞ知らん、此の珍奇なる木葉蝶は、本縣伊豆

國田方郡地方に於て昆蟲研究者の手に依りて採集せられたらんとは。生は去月中、同地方に到り昆蟲熱心家と聞へたる仁田謹三氏を函南村に訪ひしに（同氏は八九年前、米國に渡航し、歸國の後同地方の昆蟲六七百餘種を採集せりと）同地にて採集せりとて此種を示さる。又去つて第七回全國害蟲驅除講習會修業生石井沘平氏を訪ひしに、昨年九月廿日午前十一時頃同地方の山林にて採集せりとて同じく木葉蝶を示さる。余は一たびは迷へり、從來熱帶地方にのみ産すと信じたる此種が然かも同縣内に棲息すと云へる事實に驚けり。想ふに是れ同國に於ける地勢山川の宜しきを得、一つは各地に温泉湧出するが如きは、自然昆蟲の棲息に關係するものならんか、記して茲に木葉蝶の本州に産することを紹介す。尙昆蟲研究家にして同地方に採集を試みんと欲せば、先づ天城山附近を第一とし、熱海、伊東、修善寺、吉奈の地方（但し以上は温泉地なり）之に次ぎ、箱根峠の附近も最とも適當なるべしと信ず。

編者云ふ。本州中三重、靜岡、千葉、神奈川諸縣の東端には必らずや暖地特産の異品あらんことを信じ、多年關心せしに果して此吉報に接せり。そは岡田氏は地勢山川と言はれしも、編者の見る所ろは地文學より推して、暖流接近の結果斯くある可しと臆想せしに因る。これ啻り木葉蝶にのみ限れるにあらざれば、爾後斯學者の地勢、潮流及び植物に注意しつゝ昆蟲の分布區域調査を實行せられんことを望む。

◎有害蟲の利用法

第七回全國害蟲驅除講習修業生　愛媛縣　矢野延能

其一（蓑蟲の容器）　吾が隣郡今治地方に於ては、大蓑蟲の巢すなはち繭を取り來り、之を縫合して蟇口又は眼鏡筒等に作ること流行し、之が爲め繭一斗は壹圓參四拾錢に値ひせり。其の製品を見るに、繭の外皮を其儘外面に露はしたるものなれば、粗糙なるも尙ほ雅致掬すべく、强靱なること殆んど革製のものに讓らずと云ふ。古來各種の樹木を蝕害し、人をして驅除に困しましめしもの、今や變じて貴重の材料と變ぜ、、容易にその所在を發見すること能はざる迄に減少せりとは、實に快絕の事ならずや。少しく蜀隴の誹りはある可きも、野生のものを採收し盡しなば、更に之を飼育しても、帽子その他に製造し輸入品防止の一策を講じなば、國用に資すること蓋し極めて大なるものあらんと信ず。

其二（地蠶の魚餌）　縣下越智郡大島の東部南面の地方は、大根の地蠶即はちヱンドノキリムシの加害多き處なるが、去る明治十四年の冬にやありけん、余は之を泥水を盛れる器に拾ひ取りて海中に投入し

たるに、海鯽（方言チヌ）の多く集まり來りて、之を食とするを目擊し、地蠶の活發なるものを選び、釣餌として數尾を獲たることありしも、其後採卵を勵行したるため、圃場に老蟲を絶ちたれば、また之を試ろむるに由なかりしが、一昨年同地の一農家の採卵を怠たりて、殆んど大根を喰害し盡されし折、端なくも其地蠶を以て同魚を釣取り、之を市場に販賣せしに、却つて大根の收穫に勝れる利益ありきと。漁村の地蠶に苦しめらるゝ地方にては、之を試驗するも一興ならん乎。序に云ふ、地蠶を餌とするには、泥水に浸して殺したるものを宜とす、生きたるものは水上に浮び流るゝの恐れあればなり。

◎林檎の蟲害驅除法（一）

第七回全國害蟲驅除講修習業生　石川縣　高多信久

林檎の米象　此蟲は五六月の頃より林檎、梨、桃等に簇集し、花部又は葉柄等を咀嚼す、之を驅除するには、（一）五六月の間に於て該虫を目擊せば、之を振ひ落して收集し、熱湯にて浸殺すべし。（二）梢枝の咬折せられしもの、及び萎狀を呈せしものは、悉く伐採して薪料に供し、菓實の自ら落下するものは、家畜に與へて其中に潜伏する蟲仔を殺すべし。（三）蟲の羽化するや、幹によつて攀登するものなれば、宜しく䌫を其樹幹に圍纏し、之れに松脂七分、燈油三分を混和して溶解したるものを塗抹し、上端を外反し以て捕獲すべし。

林檎の蚜蟲　此蟲は春季孵化し、脫皮すること四回、其子は胎生にして子々孫々相代謝し胎生すること前の如く、十代に至るまでは皆蟲にして翅を生せす、猛夏の頃に至りて初めて有翅の雌を胎生し、此雌忽ち群飛して他幹に歸付し、其屬を蕃殖すること尙ほ蜜蜂の如し、秋期に至りて初めて雌雄の兩性を生す、爰に於て相交尾して卵を林檎の皮上に產付して害を次年に遺すものなり。凡て蚜蟲の種類は數多ありて、各々其害をなす所の植物により体色を異にすと云へども、其子を產する順序に至りては皆同一にして、其蕃殖の熾んなること全動物中此蟲より甚だしきはなし、之を驅除するには先づ、（一）冬月石灰に煤を混して濃厚の液を製し、其卵のある所に塗抹すべし、粘土又は牛糞の類を以て代用するも宜し。（二）僅かに枝葉を生せしものは、蟲と共に之を剪除し、以て火中に投入すべし。（三）若し該蟲發生せば晴天暖和の日を期し、石鹼水、煙草汁、石灰水の類を以て洗滌すべし。

コンモンオルチヤド、カツトルビルラ　春陽の候、林檎の嫩芽將さに發萌せんとするに際し孵化する所のものあり、此時に當りて長さ一分に足らざる微小のものたりと云へども、漸々生長して數週間の後

に至りては、長さ殆んど一寸五六分の大蟲に至り、玆ゝ於て繭巢を營み蛹に變形し、夏末に至りて茶褐色の蛾となり、以て樹園中に翺翔し、卵を枝上に殘え終に死去するなり、一巢內ゝある所の卵數は三百乃至五百個にして、枝上僅かゝ一巢を止むることあれば、漸次にして寸靑を見ざるに至るなり、此蟲を驅除するには(一)秋冬の候卵巢の附着する小枝を剪斷し、火中に投して燒殺すべし、或ハ春暖の候、小蟲の一齊に孵化するを待ちて、剪採燒殺するも可なり。(二)蛾の飛翔するを目擊するときは、速かに之を撲殺すべし。

◎瑞祥甘露の宿る樹種に就て

千葉縣長生郡　高橋徵一

近刊の昆蟲世界(第五三第五四號)誌上に晴耕雨讀子の「瑞祥甘露の事を記す」と題する一文を閱讀するに行文流麗、引証正確、頗る時宜に適ひ、誠ゝ斯學發達史上の一大補弼とも稱すべく、頗る吾人の意を得たるものあり。然れとも其文の末尾に於て「甘露の宿る樹種を松柏とするもの多きも、これ亦道理上如何あるべきか、古人が松柏を愛づるの餘り、故さらに斯く書したらんやは知らねど、昆蟲學より觀察して頗ぶる疑ふべき節ありと思はるゝなり」と述べられたるが、蚜蟲即ち甘露の宿る樹種に就き、聊か卑見を吐露し、斯學の參考に供するも敢て徒事にあらざるべしと信ずるが儘、余輩の目擊實見せし一端を左に記述すべし。

原來、余は南總の紅鶴巢山と稱する峻嶺の麓に居住するものなるが、此の山上には往古より、參天の巨松數百株蓊鬱として繁茂せり、而して如何なる理由ゝや、一株の老松三四年以前より、氣勢頓ゝ衰ろへ加ふるゝ地上四尺計りの處も一つの空穴を生じ、絕ねず蟻群の出入するを見たりしが、樹勢漸次衰凋、昨夏に至り全く枯損せしを以て、止むを得ず之を伐採せしめしに、此空穴中ゝ數萬の蟻群棲息し、今此の不時の大災厄ゝ遭遇して、周章狼狽、右往左往ゝ遁逃するの有樣、笑止さあんど云はん方なく、又以て氣の毒千萬の次第ありし。かくて余は其の空穴の內面を窺ひしに、何物やらん、灰黑色をあしたる小塊の數多存在するを以て、靜かに引出し子細に之れを檢せしゝ、是れなん世に謂ふ蟻の塔と稱するものにして、樹木轉倒の際、震動の爲め微塵に破壞せしと雖とも其搆造の奇異なる、彩色の妙なる、余輩をして頗る熱心に之れを注視せしめぬ。不可思議なる哉、余は蟻の塔の發見すると同時ゝ、最も不可思議なる事實を發見せり。そは他ゝあらず、蟻の塔の內面に於て、無數の赤褐色を帶びたる蚜蟲隊の蠢爾と

して棲息するを發見せるにあり。そは蟻群狼狽の狀に引換へ平然として或は觸角を振り或は尻を動かしつゝ、少しも外部より降りかゝる危險を意ょ解せざるものゝ如し、於此乎、余輩は頓悟せり、蚜蟲は獨り蔬菜、梅李の類ょ止まらず、古人の所謂、甘露降る松柏なる事實を證明することを得たり、爾來幾日ならずして、散亂せし蟻群は更らに隣樹ょ移轉し、蚜蟲隊と共に同棲して盛んに生活を營みつゝありき。余再び兒童と共ょ行きて、試に松樹の枝葉に附着する粘液を舐るに、其甘きこと飴の如し、彼の支那人の言の如く、眞に甘露を神靈の精にして延命不老の仙藥なりとすれば、東方朔ょあらされとも、余輩は確かょ無窮の天壽を了有すべきものと謂ふべし、呵々。兎ょ角、今人が自己研究の足らざるを顧みず、古人の遺著を指して、僻見異説なりと斷定せるゝ、余輩の最も採らざる所なり、聊か實見する所ょ因りて所感を記すること此の如し。

編者云ふ。此記事を熟讀するに、曩に本誌學説欄に收めたる「瑞祥甘露の事を記す」てふ記事を難じて、自己研究の足らざるを顧みずとか、僻見異説と斷定すとか言はれたれど、そは却つて高橋氏の讀違ひなる可し。彼の文は高橋氏も首めに引かれたる如く、疑ひの言葉を以て局を結びたるものにて、古人の記載方法を怪しみたるに止まる。特に松柏科のものに甘露の多き道理なきも明白の事にて、普通は他の薔薇科若くは殼斗科に多きは今更爭ふ可きにあらず。然るを僅かに一例を以て他を卑下するは少しく穩かならさる可し。事實を示すは可なれど、延て用なき爭論の種子を播き、紙面の狹き本誌を以て戰鬪場に充てらるゝは頗ぶる遺憾とする所るなり、今後は十分注意を加ひて輕擧の無からんことを望む。又該執筆者に向つても、高橋氏に應戰せんが爲めとて、故に反駁文を寄せざらんことを望む。

◎巖手縣産の蝶類（第二）

巖手縣　特別通信委員　鳥羽源藏

余は昆蟲世界第三十三號誌上ょ於て、岩手縣産の蝶類を報し置きたりしが、其後同志者と共ょ、去る三十三年及び三十四年の八月に昆蟲採集旅行を試ろみ、又昨三十四年十一月には、縣下和賀郡の昆蟲展覽會の審査員として同郡に遊び、昆蟲の分布を知る上ょ於て大に得る所ありき、左に蝶類の第二報をなさむ。

○鳳蝶科　ヒメギフテフ。ミヤマカラスアゲハ。
○粉蝶科　ツマキテフ。ヤマキテフ。
○蛺蝶科　サカサハチモンジ。キベリタテハ。オホミスヂテフ。ホシミスヂ。オホムラサキ。ゴマダラ。コムラサキ。
○蛇目蝶科　クロヒカゲテフ。ツマシロウラジヤノメ。キマダラモドキ。ヒメキマダラテフ。オホヒカゲ。
○天狗蝶科　テングテフ。
○小灰蝶科　アカシヾミ。オナガシヾミ。ツバメシヾミ。ミドリシヾミ。トラフシヾミ。ウラナミアカシヾミ。
○挵蝶科　ダイメウセヽリ。チヤマダラセヽリ。オホチヤマダラセヽリ。オホチヤバ子セヽリ。アヲバセヽリ。キバ子セヽリ。ヘリグロチヤバ子セヽリ。イチモンジチヤバ子セヽリ。コチヤバ子セヽリ。ギンイチモンジセヽリ。キマダラセヽリ。スヂグロチヤバ子セヽリ。ホシチヤバ子セヽリ。（この挵蝶科の分は前回の報告を宮島氏の名稱に從ひて校正し再掲せるものなり）

班蝶科のアサギマダラらしきを目撃せしことあれども、未だ捕獲せしにあらざれば、果して本縣下に産するや否を確めず。今前回の分と合せて表示すれば左の如し。

科名	鳳蝶科	粉蝶科	蛺蝶科	蛇目蝶科	天狗蝶科	小灰蝶科	挵蝶科	合計
種類數	九	七	一二	一〇	一	一〇	一三	六二

◎香川縣害蟲驅除吏員心得

香川縣綾歌郡　井上芳三郎

香川縣に於ては、近年農作害蟲の驅防に努め、各方面より之を絶滅するの策を講じ居れる事あるが、先に害蟲驅除に干與する官吏々員心得を發布せられたるに依るも、粗ぼ其要を知ることを得べしと信ずれば、左に梗概をものして、讀者の參考に供せん。

第一條　當該官吏々員とは縣官、警察官、郡市長、郡書記、縣郡市吏員及町村長とす。

第二條　苗代は左の方法に依り、驅除豫防を施行せしむべし。(一)捕蟲　捕殺は捕蟲網其他便宜の器具を以て晝間之を捕獲せしむべし、但夜間に於て捕殺するも妨げなし。(二)採卵　採卵は蛾の發生期の都度、必ず二日を隔つる毎に一回以上之を行はしむべし。

（三）石油注入　石油は適度（一反歩に付五勺乃至二合）を注入し、挿秧前に於て全く驅殺し終るまでは、幾回も之を行はしめ、殘苗に過度の石油を（二合以上）注入し全滅を期すべし。（四）點火誘殺　誘蛾燈は苗代田毎に必ず點火せしむべし、其割合は一反に對し六七個乃至十個を下ることを得ず、點火は午后七時より天明迄とす、本田移植迄は雨天月夜と雖も間斷なく點火せしむべし。

第三條　本田は左の方法に依り、驅除豫防を施行せしむべし。（一）捕殺　第二條第一項第一に同じ。（二）採卵　採卵は蛾の發生期の都度必ず四日を隔つる毎に、一回以上之を行はしむべし。（三）石油注入　石油は適度に（一反歩に付一升乃至三升）注入し、全く驅殺し終る迄は幾回も之を行はしめ、全滅を期すべし。（四）螟蟲被害の稻株　螟蟲の被害（稻被害稻一坪凡二穗以上）のものは秋熟苅取前、當該官吏々員立會、被害全株を堀取らしめたる後、苅取に着手せしむべし、尤も被害株は其穗を作人に收納せしめたる後、害蟲驅除豫防規則第九條に依り相當處置せしむべし。

第十二條　害蟲驅除豫防に顯著なる功勞ありと認むる者は、町村吏員は郡長に申告し、郡市長及警察官は知事に具狀すべし。

◎昨年に於ける大分縣下の害蟲驅除成績

大分縣　小野覺太郎

昨年本縣に於て農作害蟲驅除豫防奬勵の結果、心枯、穗枯、卵塊摘採數及び捕殺數等を算すれば、實に左表の如し。

郡別	心枯穗枯堀取本數	卵塊採集個數	捕殺蛾數	計
西國東郡	一九、五三八、〇三四	四〇四、一〇五		一九、九四二、一三九
東國東郡	一、三一五、七三七	五、二四四		一、三二〇、九八一
速見郡	一、二一九、六二〇	二五二、三四二		一、四七一、九六二
大分郡	一五、九三四、八〇一	六〇四、二六六		一六、五三九、〇六七
北海部郡	四、九五六、六〇四	一六三、六〇〇		五、一二〇、二〇四
南海部郡	九二、五五〇	一斗三二		九二、五五〇
大野郡	一三九、六二四、九六八	五七四、一四二		一三二、五四二、三一五
直入郡	二〇、二五一、九八七	八、二一四、七四六	七五〇、七一一	二九、二一七、四四四
玖珠郡	二、一九五、一八一	二、八九五		二、一九八、〇七六
日田郡	四、九三六、三一六	一、六五〇、七八四		六、五八七、一〇〇
下毛郡	二八、二三一、八二四	九〇、三三六		二八、三二二、一六〇
宇佐郡	一六、一九〇、七七一	二〇四、一八八		一六、三九四、九五九
合計	二五三、四八八、三九三	一二、一六六、六四八 一斗三二	七五〇、七一一	二六六、四〇五、七五二

◎長野縣下伊那郡昨年の害蟲

長野縣下伊那郡　代田彦一郎

一、浮塵子　郡下處々に發生蔓延の兆ありしも、被害を逞うせられし土地は僅少にして、本村の如きは殆んど其害を見當らざる程なりき。

一、螟蟲　發生多からず、但し二化生種の爲めに被害を蒙りし土地處々にありとも、亦餘り大ならず。

一、苞蟲　本年度も亦本村に甚だしく發生し、部落に依り其被害に大差あれとも、非常の不作を見し處あり、實に今迄豊年蟲呼りせし該蟲の加害の大なるを知り、少しは驅除に盡力するものありと雖とも蠶業多忙の際大に勞力を要するより、農家一般に困難し居るものゝ如し、若し驅除豫防の良法あらば、實驗家諸君の示敎を乞ひたし。左に本村農會試作場に於て昨年度捕集頭數及び三十三年度に比較表を物すれば左に表示するが如し。(表は畧す)

一、枝尺蠖　三十三年に越年せしもの昨春大に發育し、郡下各所に加害甚しかりき、殊に多き處にては驅除捕集するに量衡器を用ゐて、一合何錢、百匁何錢と約束して買收せしに、實に豫想外の採集ありしと、斯くても尙ほ秋期に至り幼蟲大に發生したれば、落葉后に驅除せしも、發見に不便にて十分の驅除を行ふと能はざりしより今春を待て大に驅除せんと其時機を俟つ者多きか如し。

一、天牛(トラカミキリ)　は年々被害加はり、昨今に至りては高木仕立は勿論、中刈仕立に至るも其害を受け桑樹栽培に困却を極め居れり、漸く近頃に至り當業者は其害蟲の成蟲はトラカミキリなるとを知り追々驅除に盡力するものあり。

一、貝殼蟲　は年々各處に發生し大に慘害を逞うす、其驅除法としては中刈仕立を根刈仕立にし、又石油乳劑及び石灰汁を以て驅除しつゝあり。

一、葉捲蟲(方言クワコウジク。シンムシ)　此方言は發生期に依り名を異にせり、前者は秋期に發生し桑葉を包み食害するを以て、稻の苞蟲の名稱に因りて附せしものゝ如く、后者は春夏期桑梢の生長点即ち心芽を食害するを以て名つけし者の如し。此蟲年々發生大に增加し、昨年秋期の如きは、郡下各處に大發生し、就中下川路村の一部及び龍丘村上川路區等殊に甚しく、爲に村內有志者は郡試驗場より技手の派遣を請ひ、郡衙よりは吏員の出張を煩はして驅除策を講し、被害葉を採葉して燒棄又は殺蟲劑を混じて土中に埋め、或は其儘水田中に埋め、又は被害桑株の根際へ該蟲の下りて越冬の準備

するものは殺蟲劑を注く等の方法を以て大驅除を執行せり、本村また同樣なり、而して前驅除法中燒棄法は綠葉を燒くには甚至難にして多く燃料を要す、其簡便少費にして有効なるは水田埋沒法となす。

一、ヒメゾウムシ　歳々養蠶を早飼するに隨ひ其被害甚しく、該蟲の繁殖も亦年々增加し、栽桑者の困難一方ならず、其驅除法としては春桑切取後其株上に匍上りしを種々の方法を以て驅除し、又は春桑切取の際、株際より五六寸乃至一尺位古梢を切殘し置くときは、其上部の芽に匍ひ昇り喰害し居るを以て見當り易く驅除に容易なり。又其間に發育經過して食害時期を越したるときは、一齊に殘梢を切取るなり、斯くすれば其害少なく發芽少しは後るゝも寧ろ發育良好なり、故に此法を行ふ者多し、枯株切取驅除は未た一般に行はざるが如し、此蟲の被害は一株に三四頭居るときは全株發芽せず、甚だしきは全く枯死するに至る、隨うて其害も直接に人目に觸るゝを以て、一般人の注意驅除するは他害蟲の比に非ず。

◎昆蟲月報　（第一信）

第八回全國害蟲驅除講習修業生　埼玉縣　櫻井倚畊

昆蟲月報とは、月每に余が眼に映じ、余が智力の其名を知りたる事實を報導するの謂ひなり、去れば看者昆蟲月令となす誤なり賜ひぞ。こゝには去る二月のものより漸次掲載を乞ふべし。

二月　此月二十日より晴和軟風の天氣打續きて温暖を催ふし、廿三日に至り俄かに春氣に向き、廿五日は全たく中春の節の如く、正午には華氏の六十二三度を示し、四隣の梅花滿開となれり、此の時群集せしは蜜蜂、姬葉切蜂、花虻及びヒラタ虻の一種等にて室内には家蠅、蒼蠅自由に飛廻れり、又庭前には金龜子の一種と蚋の二三種と蚊族の飛揚を見、夜に入りては木蠹蟲科のヘウホンムシ五頭とゴミムシダマシとを捕へたり、恐らくは新たに運べる松薪の中に居りしものか、時經て寢所に於てアカウマと稱する蚤を捕ひき。此他樹心に於て蟻の蠢めくもの、蚊白蝶の靜止するもの、ユキムシの飛行くもの等をも目擊せりき。

三月　六日南の軟風にて好日和なりしが、モンシロテフ始めて能く飛びアカタテハ亦よく高翔せり、同十三日家園の竹林にてヒゲナガサキリの幼蟲の三齡位ゐのものを捕ふ、十七日にキリウジカガンボ（方言カドンフ）を見、カグロフの一種の羽化せるものを溝邊にて目擊す、十八日より暖氣著しく增加し

たる爲めか、蟲類の發生も亦多くヒオドシテフ、モンシロテフ、ツバメシジミ、チヤマダラセセリ、ヒメハンメウ、ヤドリバヘの一種、越冬せるイトトンボ、ゴパウゾウムシ、アカハチカクシ、七星瓢蟲、姫赤星、アトボシ瓢蟲、タテハ科の一種、ホシクサバヘ、ヒゲナガガメの一種、茶の蓑蟲、ノミバッタヒシバッタ、アカケバヘ、鋸蜂の一種、草蜻蛉、褄黑横這、白翅横バヒ外三四種の浮塵子を捕ふ、中にも褄黑種の如きは越冬の成蟲頗ぶる多かりき、此日また落葉下に於てトビムシ類、ツチイナゴ等を獲、天牛の幼蟲の加害し始めたる、甘藍の蚜蟲及び林檎の綿蟲の發生せるをも見き、夜に入りてはヒメホタルの幼蟲の發光と地蠶蛾の慕光とを認め、又室内害蟲の多くあれるを知れり、廿二日よりは氣候一變して寒冷となり、廿三日の夜半より積雪二寸餘とあり、廿四日また一寸餘の降雪ありしが、廿五日に至りて回復し、廿六日にはクロバヘの幼蟲とウメケムシの孵化とを認め、林檎よりは或種の産卵せる卵塊を採れり、此日より水産昆蟲のミヅスマシ、アメンボウ等游泳し始め、廿八日には百舌鳥のケラを插餌せるもの多きを見き、廿九日はゴモクムシ、コニハスズメ等を砂礫の間にて捕獲し、又桑のシャクトリの發生を知りて之を驅除す、其間ケムシ蛾の一種の接尾せるものを捕へたり。

◎浮塵子螟蟲調査要領（續）

島根縣農事試驗場　田中房太郎

○第一、苗代田に於ける螟蛾并産卵の調査　稻螟蟲第一化期に於て、苗代に飛翔し來り産卵せる卵塊并に蟄伏蛾の捕獲數を調査するに左表の如し、但し苗代田は七十歩を以て之に充つ。

月日	螟蟲 雌	螟蟲 雄	合計	一歩ニ對スル捕蛾數	卵塊	一歩に對する採卵數
六月十二日	一六四	四六	二一〇	三、〇	一三三	一、九
六月十三日	一二七	三〇	一五七	二、二	二〇二	二、九
六月十四日	一四八	三一	一七九	二、六	二七八	四、〇
六月十五日	六四	九	七三	一、〇	三〇七	四、四
六月十六日	三八	八	四六	、六	九七	一、四
六月十七日	一三二	七九	二一一	三、〇	一八二	二、六
六月十八日	五八	二一	七九	一、一	一〇七	一、五
六月十九日	二九	一七	四六	、六	四八	、七
合計	七六〇	二四一	一、〇〇一	一四、四	一、三五四	一九、四

（參考）　本調査は螟蛾發生の最も盛なる時期を撰びて施行せりしものにして、一日一回（午前十時）の捕獲に係るものとす。

前表によりて見れば、螟蛾の襲來せるもの僅か八日間に於て實に壹千に達し、就中雌蛾は雄蛾に比し凡そ三倍の多きを見る、又其採卵數は一千三百五十四塊にして、之を一歩の面積に換算するときは十五塊の産卵に相當せり、仮りに一卵塊凡百疋の孵化力を有するものとせば、僅か一歩の苗立に千九百疋の幼蟲發生蕃殖すべき割合なり、豈寒心すべき至りならずや、宜しく共同一致捕蛾、採卵を怠るべからず。

○第二、螟蟲の出蛾期調査　稻の螟蟲發蛾の時期及之れが發生と温度とは如何なる關係を有するやを調査せんが爲め、田地の邊りに於て誘蛾燈壹箇を裝置し、毎夜薄暮より終夜點燈し、毎朝其殺蛾の數を調査せしに、其結果左表の如し。但し本表中螟蛾數は毎五日間を合算し、又温度も其平均を示す。

月日	温度		平均	螟蛾數
	最高	最低	午前十時	
自五月二十三日 至同二十七日	二三、〇	一四、二	二〇、一	六
自同二十八日 至六月一日	二七、一	一六、三	二二、九	六〇
自同二日 至　六日	二〇、八	一二、九	一七、八	六一
自同七日 至同十一日	二五、三	一八、〇	二一、四	一六三
自同十二日 至同十六日	二八、〇	一五、八	二四、一	三三一
自同十七日 至同二十一日	二九、三	一九、一	二四、一	一三四
自同二十二日 至同二十六日	二八、〇	二〇、五	二四、〇	八三

月日	温度		平均	螟蛾數
	最高	最低	午前十時	
自六月二十七日 至七月一日	二四、七	一九、〇	二四、一	二三
自同二日 至同六日	二四、一	一九、八	二一、九	四一
自同七日 至同十一日	二三、七	一九、七	二〇、六	三〇
自同十二日 至同十六日	二六、三	二〇、八	二三、三	二四
自同十七日 至同二十一日	二八、四	二三、四	二五、四	
合計日數六十日				九五七

（備考）　右表は第一化期に於ける螟蛾燈火誘殺表とす。（未完）

◎岐阜縣養老郡昆蟲研究事項報告

岐阜縣養老郡　原田晟

本郡にては今四月一日より、害蟲驅除講習の爲め、名和昆蟲研究所長を聘し、高田町專念寺に於て開會せり、講習は毎日六時間にて會員は五十四名なりしが、何れも熱心に聽講せり、斯くて同五日には閉會式を擧げ、且修業證書授與式を行ひしに、山田郡農會副會長の證書授與、名和講師の訓戒、東養老郡長

の演說、其他來賓の祝詞及び講習生總代の答辭にて式を終り、茶菓の饗應ありて散會せり。又同時に昆蟲學會を組織し發會式を擧行して、役員選擧を行ひたるに、會長には山田貞策、副會長には山幡清、幹事には村上定吉、栗田慶之助、森貞之助、川瀨小左衛門、桑原濱次郎、佐藤作之亟、原田晟の七氏當選し、評議員として各町村より一名つゝを選擧せり、其規則は左の如し。

第一條　本會は岐阜縣養老郡昆蟲學會と稱し事務所を養老郡高田町に置く○第二條　本會は岐阜縣昆蟲學會と氣脈を通し、昆蟲學の研究をなし、害蟲驅除の普及を圖るを以て目的とす○第三條　前條の目的を達せんが爲め、毎年二回便宜の地に於て開會し、講話演說討論其他必要事項の協議を爲す、但必要の塲合は臨時開會することを得○第四條　會員は害蟲驅除講習生又は本會の目的を賛成し入會するものに限る○第五條　會員は常に實物の採集、標本圖畫の調製等に務むべきものとす○第六條　會員は會費として毎年金拾錢を納むべし○第七條　本會に左の役員を置き會務を掌理せしむ、其任期を二ケ年とし總會に於て選擧するものとす　會長　一名、副會長　一名、幹事　若干名、評議員　(各町村一名つゝ)○第八條　本會々議は總會及評議員會の二種とす總會は毎年春期に之を開き評議員會は必要に應し開會するものとす○第九條　評議員會は本會經費の決議をなし事業の進捗を圖るものとす○第十條　本會の目的を達せんが爲め郡內各町村又は小學校の區域に依り支會を設くることを得○第十一條　本規約を改正加除せんとするときは總會の決議を要す。

◎昆蟲に關する葉書通信　(第二十一報)

(一〇五)蟻蠶飼育の困難(鹿兒島縣鹿野屋、生態與一郎)　當地は昨今葉櫻時で蝴蝶の飛舞最中であるが、此頃の陽氣に誑されてか、蠶兒孵化したる爲當業者は一方ならず迷惑を感ぜり、時節から申せば別段怪しくも無き事ながら、桑の發芽の遲き故とては狼狽を來せしなり。(三月廿六日附)

(一〇六)粉蝶の捕獲(宮城縣名取郡、堀內英力)　吾が名取郡は比較的暖地なるも、粉蝶の發生は大概三月下旬なるに、本年は怪しくも、三月九日にモンキテフの雄を、同十三日にはモンシロテフの雌を捕獲せり、本年は假令烈寒なりしとは云へ、此分にては害蟲の發生も想見せらる。(三月十四日附)

(一〇七)昆蟲記事の請賣(在東京高等農學校、イ、サ生)　他人の說と雖ども、能く之を消化して自說とするの力量あらば、拔萃も剽竊もなほ恕すべし、併し此際には請賣者は幾分か德義を守りて其出處を示すの覺悟なかる可からぞ、然るに近頃刊行の雜誌其他の昆蟲記事を讀むに、昆蟲世界誌上より切取して

知らぬ顔する生物識れ無きか、余は斯學界のため憤慨に堪へず、讀者試みに其引用書と熟字等に注目せよ、必らずや之を看破せん、心ょ疚しき者は今後此等の非行を慎しめ、敢て省慮を俟つ。

(一〇七)螢狩の童謠(三重縣阿山郡、西岡嘉十郎)　當地方にて兒女の螢狩する時に謠ふ歌を左に。

(一)ほッたる來へ、山道來へ、行燈の光りで、蓑きて笠きて、こ—へ、こへ。

(二)ほッたる來へ、山道來へ、彼處の水は苦ひぞ、此處の水は、甘ひぞ、此處へ來へ、とろろ。(とろろは捕るの意なり)

(三)ほッたるさん、かなくりさん、晝はお母さんの乳飲んで、夜は提灯高のぼり、はよ來へ、とろろ。

(一〇八)蝶ょ關する實地授業問題(愛知縣額田郡、山本秋三郎)　此頃實地授業批評會の際、蝶といふ題にて國語科綴方を教授せり、其時小生は、其目的は(一)文法(二)昆蟲思想の養成=蝶の形態と發生經過及び加害の大要を知らしめ、延て害蟲驅除の心を起さしむ(三)德育=形美なりと雖ども、惡行あるもの〻不可を悟らしめ、以て善行を奬勵すべしと述べしょ、同僚の賛同を得たりき。

◉昆蟲月令(第四月)

此月に配すべき昆蟲記事は、概むね下ょ列擧するが如し。

○氣候　舊暦三月の節にて、晝間と夜間の差ますく著るしく、凡そ一時間以上に及ぶ。月の六日より清明の氣に入り、十八日は土用にて廿一日より穀雨となる。暖地は早く櫻桃零落するも、北地に在りては、下旬に入りて始めて百花滿開の佳節に移る◉内地の平均温度は、七度乃至十六度の間にて、東京は平均十二度半位ゐとなす◉雪雨の日數は前月よりも多く、隨うて濕氣また增加し、漸やく夏氣の特兆を呈すべし◉南海にては雨量特に多きも、中國の一部より、東山道の過半は比較上少量なり◉暖地は概むね此月を以て終霜の季節となすも、寒地はなほ綿衣を脫せず。

○蟲類　刈株または藁稈に潛伏の螟蟲化して蛹となり始む◉浮塵子の類また發生す、特にツマグロ種多かるべし◉地蠶の類、豌豆またば麥に加害す◉蚜蟲類一般に蕃殖を遂げ、各種の植物に寄生すべし◉松苗に鋸蜂の幼蟲發生加害すべし◉水面に浮べる孑孑あらば

適宜驅除を行ふべく、又蠅蚤等衛生上の害蟲豫防に注意すべし●馬鈴薯苗に僞瓢蟲の飛來を見ば、速かに捕殺すべし●蝗螽の害多き水田あらば、耕鋤の後、湛水して卵塊を掬ひ取り、燒潰の處置をなすべし●苗代田造りの際には、特に諸害蟲の發生如何に留目し、播種後の驅除を考ひ置くべし●梅ケムシ生長して加害盛んとなるべく、又桑樹の諸害蟲は幼芽を蝕損すへし●クハシラミ發生せむ、大瓢蟲をして捕食せしむるやう心掛くべし●麥圃には大浮塵子、蔬菜園には蕪菁蜂、果樹園には綿蟲、象鼻蟲等著るしく多きに至るべく、竹林庭園にも亦蟲害を増すに至るべし、各々巡視を怠たる可からず●瓢蟲、虻等の益蟲漸次其種族を増すに至るべく、螵蛸また將に孵化の狀を呈すべし●地方によりては蠶兒の孵化するものある可ければ、早く其準備をなし置くべし●蝶蛾類より、各種の害蟲到處に蕃殖すべし●其他は前月の項に記載したるが如し。

オホテントウムシの圖

○雜事　古へは陰曆二月を以て啓蟄と稱し、其後を諸蟲の發生加害期と認めし爲めにや、二月下旬より三月上旬にかけ、暖氣早く來れば、蟲螟害を爲すなど云へり●支那にては、此月に蚕蠶するを以て、異名を蠶月とも云ひて春の季月となせり●此月の寒暖は農作の豐凶と、蟲類の盛衰に關係あれば注意すべし。

◉今年の害蟲の多少

虎年に蟲害の稀少なる事は既に報導せし如くなるが、豫想に違はず一月來の寒氣は大ひにその發生を挫きしもの丶如し。而して三月中旬より遽に變調を呈して、二三日の間は暖氣を增し、恰かも六月の交と同一の高温となり、爲めに全國一般の櫻桃開花期を五日乃至七日早めしめ、人をして少さか危惧の念を發さしめたるも、是は固より違例の事なれば、深く此間に關係を及ぼすまじと思惟したるに、本月に入り、十日より十一日に亘りて甚はだしく冷寒を感じ、內地は概むね雹雪の降下を見るに至りたれば、茲に再たび蟲類の蔓延力を殺減せしめたるを知れり。將來、下半月に至り、高熱過濕の續くことあらば格別、既往の象候を以て察するに、本年は昨年の如き憂ひは之れ無かるべきか。併し乍ら斯かる倏ちにして寒、倏ちにして暖を覺ぼるの激變候は、果樹、茶桑其他畑作物にとりて損害の媒だちとなる事論なければ、蟲害なかる可しとて安堵すべきに非らず、只管農桑家の注意を望む。

（參考）　岐阜市に於て、既住三十年來四月に降雪の例を求むれば、明治二十年の四月四日、廿二年の四月七日、廿五年の四月十日と及び今年の四月十日のみなりと。

◉第拾壹回全國害蟲驅除講習會續聞

前號に大要を報じ置ける同會は、去月十四日午后二時

を以て修業證書授與式を擧けたるが、名和昆蟲研究所長の證書授與及び訓戒、來賓川路岐阜縣知事の祝詞、修業生總代增田秀雄氏の答辭等ありて、同三時退散せり、其人員は都て六十一名にて二府二十餘縣に亘り、特色として觀るべきの成績また多かりき。式後一同は懇親會を開き、各講師を招待したるが、餘興としては、當所寄附の昆蟲福引、其他思ひ〳〵の昆蟲唱歌等ありて、同夜九時頃散會せりき。今その氏名を揭ぐれば左表の如し。

組別	府縣	郡市	町村	族籍	役名	氏名	生年月	履歴摘要
第一組	愛知	寶飯郡	長澤村	平民		伊藤米吉	明治三年十月	小學校訓導、校長
	山梨	南都留郡	瑞穗村	同	副組長	小山田武夫	慶應二年十月	島根縣蠶絲業巡回教師
	愛媛	松山市	櫻井町	同	組長	宇野傳	明治三年二月	農業、初等中學科第七級卒業
	島根	仁多郡	三成村	同		川島吉太郎	慶應三年五月	郡書記
第二組	愛媛	松山市	新玉町	士族		安永宏太郎	明治十三年二月	蠶種蠶具商
	宮崎	宮崎郡	宮崎町	平民	組長	江川定次郎	明治十四年五月	宮崎縣第四課臨時雇
	大坂	中河内郡	長吉村	同		辻岡彦次郎	慶應三年五月	郡農會幹事
	愛知	渥美郡	田原町	士族		杉原孝	明治十三年七月	農業、高等小學校及農事講習會修業
第三組	千葉	香取郡	香取町	平民		東勇	明治十四年三月	農業甲種農學校卒業
	山口	佐波郡	防府町	同		藤井二郎	明治十四年二月	佐波郡技手
	靜岡	引佐郡	都田村	同		村松悅音	明治九年五月	曹洞中學林卒業
	山口	阿武郡	小川村	同	組長	村上善治	明治十二年十月	農業、山口縣農業學校卒業
第四組	群馬	新田郡	生品村	同		荒井寅市	明治十一年五月	蠶病消毒講習修了生
	和歌山	那賀郡	東貴志村	同		的場定楠	明治二年十二月	農業
	靜岡	志多郡	靜濱村	同	級長	增田秀雄	文久元年正月	小學校訓導
	大坂	南河内郡	長野村	同	組長	山元貞太郎	明治四年八月	農業、大坂府立農學校別科講習修業
第五組	大坂	南河内郡	川上村	同		尾花德藏	明治四年八月	農業、大坂府立農學校別科講習修業
	靜岡	濱名郡	芳川村	同		大山恒一郎	明治十五年八月	農業、濱名郡養蠶學校卒業
	福井	大野郡	村岡村	同	組長	宮本三之亟	明治七年八月	農業、福井農學校別科卒業
	岐阜	加茂郡	東白川村	同		安江才市	明治八年八月	農業、高等小學卒業

組	府縣	郡	町村	族籍	組長	氏名	生年月	經歷
第六組	福井	大野郡	平泉村	平民		手塚清右衛門	明治二年三月	福井農學校別科卒業
	佐賀	神埼郡	三田川村	士族		古賀四郎一	明治十四年八月	農會幹事
	埼玉	北足立郡	安行村	平民		田口弘	明治十四年十二月	青年農會頭
	神奈川	足柄上郡	金田村	同	組長	長坂村太郎	慶應二年正月	小學訓導兼校長
第七組	埼玉	北足立郡	新田村	同		駒崎増次郎	明治十四年七月	青年農會幹事
	千葉	千葉郡	大和田町	同		杉山安之亟	明治四年六月	農事講習科修得
	宮城	志田郡	志田村	同		加藤久之助	明治八年六月	農事講習會第一期第二期修業
	神奈川	足柄上郡	坂田村	同	組長	露木惣藏	明治九年十一月	小學校訓導
第八組	埼玉	北足立郡	新田村	同		風間七良右衛門	明治十二年九月	青年農會幹事
	千葉	千葉郡	千葉町	同		湯淺秋藏	明治七年十一月	郡農會書記
	神奈川	足柄上郡	南足柄村	同	組長	關野光之助	慶應三年八月	小學校訓導
	和歌山	那賀郡	鞆淵村	同		山中正之助	明治十年五月	農業、高等小學卒業
第九組	愛媛	喜多郡	菅田村	平民		青木喜一	明治五年四月	農業、養蠶法全科習得
	神奈川	足柄上郡	寄村	同	組長	安藤蓁太郎	明治七年一月	小學校訓導
	和歌山	那賀郡	岩出村	同		林良太郎	明治十一年一月	農業、高等小學卒業
	千葉	香取郡	大戸村	同		木田已之助	明治二年十月	農業、高等小學校卒業
第十組	福井	大野郡	乾側村	同		田中茂藏	明治十五年五月	農業、福井縣農學校別科修了
	靜岡	志太郡	靜濱村	同		多々良理吉	明治三年十月	農業、靜岡縣農業倶樂部志太郡幹事
	和歌山	那賀郡	上名手村	同		澤田楠之助	明治十四年三月	農業
	愛媛	越智郡	立花村	同	組長	森玄作	明治六年一月	農業、勳八等瑞寶章拜受
第十一組	徳島	名東郡	八萬村	士族		林寅藏	嘉永元年三月	郡書記
	愛知	寶飯郡	長澤村	平民	組長	松井佐助	慶應三年十月	小學校訓導
	和歌山	那賀郡	志賀野村	同		堀昇	明治十年九月	農業、高等小學卒業
	奈良	北葛城郡	浮孔村	同		森井檜次郎	明治十二年五月	郡吏員
第十二組	栃木	塩谷郡	矢板町	同		高柳源太郎	明治二年四月	農事講習科習得
	奈良	北葛城郡	陵西村	同	組長	岡本一夫	明治九年一月	郡吏員
	和歌山	那賀郡	池田村	同		坂上彌太郎	嘉永五年十一月	農業
	福岡	鞍手郡	古月村	同		添田喬藏	明治五年五月	鞍手郡技手

第十三組	宮城	名取郡	増田町	同	組長	山司房治	明治六年四月	農事巡回教師
	和歌山	那賀郡	東野上村	同		谷口眞之助	明治九年二月	農業、蠶業講習修業
	岩手	稗貫郡	湯口村	同		中田谷藏	明治十四年八月	湯口農學校雇教員
	新潟	中蒲原郡	金津村	同		佐藤亘太郎	明治二年四月	農會試作擔當人、新潟縣農學校二年後季卒業
第十四組	茨城	稻敷郡	長竿村	同	組長	長竿繁	明治七年一月	宮城縣立農學校卒業
	和歌山	那賀郡	下神野村	同		前中正男	明治九年十月	五ヶ年間警察奉職、高等小學校卒業
	京都	何鹿郡	東八田村	同		上原治亘藏	明治十一年十一月	農業補習學校訓導
	鳥取	岩美郡	稻葉村	同		浦木銀平	明治十二年二月	農業
第十五組	岐阜	山縣郡	保戸島村	同	組長	篠田五郎	元治元年二月	東京高等農學校夏期講習修業、郡農會副會頭
	和歌山	那賀郡	龍門村	同		辻野甚次郎	安正二年八月	農業、
	和歌山	那賀郡	小倉村	平民		寺田鬼子右衛門	文久三年二月	農業、村役場助役
	福井	坂井郡	北潟村	同		有馬堯哲	明治五年三月	大野郡吏員
	千葉	山武郡	増穂村	同		中村庸三	明治十年十一月	農事講習科修得

◉昆蟲調査のいろ〳〵　去月十七日には、福岡縣高千穗昆蟲研究所長男爵高千穗宣麿氏が、蜻蛉種類調査のため來所し、當昆蟲研究所所藏の特別標本を一覽せられぬ。○同ㄠく十九日には、當所長名和靖氏、岐阜縣害蟲調査囑托の資格を以て岡山廣島兩縣へ出張の上、主はら螟蟲驅除に關する裏面の調査を遂げ、廿八日の夜を以て歸縣せり。○本月八日には、英國の富豪ロスチャイルド男爵家の男ロ氏來訪、專はら蝶蛾を調査せられぬ。氏が渡來の目的は、本邦の鱗翅類を採集及び調査するに在れど、傍はらまた蚤類の採收に努め、九州琉球間に於て十數種を集めたりと。斯く遠來の珍客なれば、當所は氏が懇望の鱗翅類十餘を贈呈せしに頗ぶる滿悦の容子を現はせり、唯蚤類の少なきには、確かに失望せりと不平を漏せしも可笑なりき。

◉岐阜縣養老郡の害蟲驅除講習會　同會を本月一日より開會せしにより、名和當昆蟲研究所長は講師として同地に出張の上、規定の科目を教習し更に旅行採集を養老山下に試ろみ、又養老郡昆蟲學會の組織を終へて同七日に歸所せしが、其物語る所ろに依れば、日々八十餘名の來會者ありて中には郡內の有力者また少なからざりしが、同郡に於て此種の會の始源としてい百事行届き、修業證書授與式後に用ゐる茶菓の類に至るまで、盡ごとく昆蟲模樣を用ゐし程なりきと。（別項通信欄參看）

第十一回全國害蟲驅除講習會員　（名和梅吉氏撮影）

◎島根縣の昆蟲講習會

島根縣の大原郡にては去月二日より十日間、同縣農事試驗場長田中房太郎氏を招聘して昆蟲講習會を開きしに、講習生は都合九十名にて、學科は普通の短期のものと同玄かりしが、十一日を以て修業證書の授與式を了せりと。又この講習中特に左の諸件につきては不少の利益ありきとの通信ありたり。

一、桑樹害蟲の越冬　エダシヤクトリの二三齡のものゝ越年の狀態並びに蛄蟖類の蟄伏のさま。

二、螟蟲の越冬　乾田の刈株なれば一株に一頭若くは十株に一頭を發見し、又水田なれば刈跡より凡そ二寸の水底にて棲息し居れるさま。昨年稻蟲退散の符札を建てたる小竹に、螟蟲四頭潜在するを認め迷信を打破するの材料を得たると、螳螂の卵塊中にも潜伏せるを捕ひたるによりて、その必らずしも稻株等にのみ越冬せざる事實を知り得たる事等。

◎第拾貳回全國害蟲驅除講習會員の募集

去月開催の第拾壹回全國害蟲驅除講習會は、豫定員より二十餘名の超過を來たしたるも、尙ほ其他續々應募者ありて、早や三十名足らずは確定名簿の登載を經たる次第なるが、六月は農家一般に多忙の季節なれば、右の既定會員に十餘名の補足員を加へて、第十二回の講習會を、來五月十五日より二週間、例により當昆蟲研究所內に開くことに確定せり。斯く餘日も無く、また其募集員も僅々十餘名に過ぎざる事なれば、入會希望者の遲くも本月末までに其手續を履まざるに於ては、或ひは次回に繰下げら

る丶憂ひなしとせず、注意かた〳〵茲に記す、委細は卷首の廣告にあり。

◉啓蟄の蟲信

英國のロ氏とし云へば、唯富豪と云ふので名高いと思ふ人が多いが、研究用の昆蟲標本が澤山にあるさうで、其中世界の蚤の種類が百五十種計りあると聞たから、英國産の蚤はと反問すると、四十三種で、其中鳥類のものを六種持ッて居ると答へたげな。金は金、學問は學問と區別するゞけ外國人は感心だ、五十や百の目腐金を貯へて、無職無業で一生涯を送らうと云ふ東洋流とは、鳥渡眼の色が違ふ。●彦山權現を對手に、唯一人廣い研究室に參籠して、蜻蛉の解剖と出掛けた、高千穗男爵の洒落かたも面白い、德大寺家の御曹司様が、鎭西へ島流しにされた悔しまぎれに、神様を助手に使ふて、毎日蟲イヂリ抔といふた日には、少くとも小說的事實で、良く言へば役の行者小角の二代目、惡く言へば先づ安く負けてもキ印の親分たる直打がある。斯う申しても、御本人一向平氣なだけ、言ひ甲斐の無いのが殘念だ。●一躰華族と昆蟲とは前世何かの因緣があるものと見ゑる、先づ中川君と高千穗君は有名なものだが、次は德川侯に、堀田子に、立花伯に、三島子なども皆蟲好きでは錚々たるものである。●清國の名士劉坤一は新年早々マラリヤ病に罹ッたので三ヶ月の賜暇を乞ふたさうだ、流石に頑老爺も、蚊には一目を置くと見へる。●昨夏來遊して東洋の貝殼蟲を調査した、米國のマァラット博士は該蟲の原產地として、北支那の温帶地方を指定したさうである、此婉曲巧妙の觀察報告には誰しも驚ろかぬ者は無からうョ。●長崎縣と香川縣では、害蟲驅除に熱心して、他の摸範たるべき者には褒賞を與へる事とした、近頃快心の考案ではあるまいか。●奈良縣の磯城郡では、他郡で螟卵の買收や、懸賞法で失敗したに鑒みて、六百五十圓の補助金を郡內各小學校に分與して、螟卵採摘を行ふ事にした、學童先生だち此處一番、確ッかりするが宜い。●紀伊阿波兩國間の海上の最大國たる淡路ヶ嶋に住み給ふ中野君より、蚊の睫に寄生する蟲に就ての質問があッたが、あれは百年以前に栗本丹洲先生が見付たものであるから何れ十萬億土へ無線電信で以て聞合してから答へる事にしやうョ、それにしても可笑のは、中野君は何故淡路の名物の中へ、多賀神社と鳴門の難處と戀の辻占と、モウ一つ、千鳥の啼音とを加へんでおッただらうか。●在獨乙國の松村松年子の手許に集ッてある本邦產の浮塵子は百七十餘種で、其中ジャシチー族は三十二種に上ッた、そこで「日本のジャシチー族の記載」てふ一書を著はして印刷に附して居るさうだ、定めて有益のものがあるだらう、序でに此次には是非「日本種天狗橫這科の記載」を著はして貰ひたいのだ。●昨年大阪府では參萬圓の害蟲驅除補助費を支出したが、之が爲め縣下では貳

拾壹萬圓を遣ひ、岡山縣では誘蛾燈のために、貳拾萬圓の油代を拂ッたさうだ、害蟲と云ふものは作物の露に飽足らで、油をも啜るものかしらん。(なよがし生)

◉第卅九回と第四十回の岐阜縣昆蟲學會　同會第卅九回例會を三月一日午后一時より開きしに、時恰かも第十一回全國害蟲驅除講習會開講の當日とて、會衆は無算九十餘名に上り、最初に名和當昆蟲所長の挨拶に兼ねたる冬季昆蟲展覽會の景況報告、次に村井正元氏の同展覽會に關する件、次に長野菊次郎氏の昆蟲の雌雄淘汰談、次に德島縣人林寅藏氏の三化生螟蟲談、次に靜岡縣人多々良理吉、德島縣人堀龍資兩氏の談話ありしが、右終りて名和所長は愛知縣愛知郡寛政村の害蟲驅除法調査談ありて同五時過ぎ散會を告げたり。又第四十回の同例會は、本月五日午后二時より是また同處に開かれしが名和梅吉氏の開會挨拶に次での蟻と蜜蜂の靈智に關する談話、次ぎに永澤小兵衛氏の千葉縣夷隅郡に於ける昆蟲談と其調査せる工藝美術昆蟲摸樣談等ありて散會せり、是日は生憎や岐阜市大祭のことゝて會衆は僅少なりき。

◉岐阜縣昆蟲學會臨時總會　去二月十二日午后二時より、之を岐阜縣會假議事堂樓上に開會せしに、會衆は四十餘名にて、概むね各郡市より出席したり、會長不在につき名和副會長代はりて會長席に着き、左の諸件を協議の後、名和梅吉氏よりは、岐阜縣冬季昆蟲展覽會出品の分類標本審査の結果を永澤小兵衛氏よりは、同害蟲、益蟲、教育用、裝飾用各標本審査の始末を報告して、同五時頃散會せり。聞く所ろに依れば、同會は今回の冬季昆蟲展覽會の催主なれば、之が會員に限り審査上の秘密より、其等差の岐るゝ事柄に至るまで、內部の事情を一應知らしめ置くの必要もあり、且將來多少の參考ともなる可ければ、各審査委員は其分擔に從うて、各々報告の豫定なりしも、時刻切迫のため、斯くその部を代表して報告するに至りしものなりきと。

一、博覽會出品準備の件　(一)各郡市よりは害蟲標本を出品すること。(二)右の外餘暇あるときは他の標本を出品することを妨げず(三)出品は本年十一月までに岐阜縣昆蟲學會に送付し其監査を經べき事。(四)前項の標本箱は一樣に調製すること。(五)標本箱の作製及前項鑑査の順序方法は別に本會に於て協定する事。

二、小學校に昆蟲學教授程度の件　尋常高等小學校に於て生徒に昆蟲學を教授すべき程度を定むること。

三、展覽會出品の件　(一)今回展覽會の出品は來二十日頃まで陳列し置くこと。(二)出品の昆蟲は研究所に託し總て名稱を附し還付することゝし其研究調査の爲め必要なる昆蟲は研究所に留置くこと。

◉千葉縣夷隅郡の害蟲驅除講習會　昨年五月以來、害蟲驅除講習會を開催せんとて、再三名和當昆蟲研究所長の出張を促がしゝは千葉縣夷隅郡農會なりしも、種々の事情ありて延引を乞ひ置き、遂に去三月廿七日より五日間、これを同郡大多喜町郡衙内に開會せり、會員は學校職員、農會員、町村選抜員の三者より成り日々百六十餘名の出席なりしが、其内修業證書を得たるは百三十餘名なりき。開會中は、木村郡農會長、加藤同會幹事、古谷巡回教師を始め、農會役員諸氏の盡力にて最とも圓滿に終了し、閉講と同時に夷隅郡昆蟲研究會をも組成せりと、但名和當所長は前項記載の如く、急に中國へ出張せしに付、永澤小兵衛氏代りて講師の任に當りき。

◉奈良の害蟲驅除の御守札　目下其舊里岡山縣に歸省中なる、當昆蟲研究所助手福井克雄氏より編輯部宛の書信に、奈良縣奈良市に於ける害蟲驅除守符に關する一節あれば、左に收錄す。

舊冬（十一月廿三日）奈良市を經て無事歸鄕仕候が、其節、猿澤池邊の興福寺の一堂にて、縱四尺許り、幅八九寸の新らしき木牌に「田畑害蟲驅除御守授與所」と筆太に書きたるを目擊致し、其由來と其驅除方とを一僧に相尋ね申候處、僧の申候には、現時當局者の稱道する驅防法は半厘の價ひだも無之、彼の年々宇治近傍にて害蟲を採取するを見るに少しも減退の摸樣なきにても、其効否を判ぜらる、抑そも此御守護符と申すは、大日如來、葉衣觀音、孔雀明王の衛護を以て、自然に諸惡蟲を掃攘せしめんが爲めに授與するものにて中にも葉衣觀音の護力は總ての害蟲を流轉して蠶兒の如き有用有益の蟲に變化再生せしむ、次に孔雀明王の冠には孔雀の羽毛を簪ざせり、故に其毒を以て如何なる害蟲をも即座に死滅せしむべしとて、大氣焔を吐かれ候には少々煙に捲かれ申候、この貴き御守札は昨年一月より販賣否、授與するものゝ由にて餘りに珍らしく存候まゝ、名和先生まで獻上仕置候、此事實を以て、佛者が一方には害蟲驅除を殺生罪と惡口致し乍ら、他方の御祈禱に對しては全力を注ぎて守札の普及に努むるものなる事を悟り、ほと〳〵有がた淚に兩袖を濕らし申候。云々

田畑害蟲驅除御守授與所

◉對馬に於ける昆蟲標本の展覽　長崎縣對馬國に於ては、去月初旬より對馬製品共進會を嚴原の金石館に開會せしにつき、同地の昆蟲採集家平田駒太郎氏は、當昆蟲研究所出版の害蟲圖解拾餘枚に添へ、數函の昆蟲標本を出品せしに、昨年は浮塵子の大害を被ふりし同地の事とて、頗ぶる農家の注目を惹起し、それより稍昆蟲の觀念を懷かしむするに至れりとぞ。

◉岐阜縣第五回害蟲驅除講習會　本月を以て岐阜縣農會構内に開催の豫定なりし同會は、期の如く去る十日にその開講式を擧げたり、當日は川路岐阜縣知事の告諭、名和講師の挨拶にて式を終へ

しが、開會中には旅行採集その他數多の企畫ありと云へり。詳細は後號にものす可し。

◉岐阜縣冬季昆蟲展覽會拾遺　前號にも物せし如く、この冬季展覽會は岐阜縣昆蟲學會の主催に係り經費其他の設備も完たからざりしかば、執務者は皆晝夜餘暇を以つて從事し、外にありては各郡市長の地方委員長となりて聲援を與へしより、扨は斯く好果を收めたりしなりとぞ。又役員には十數名の顧問と地方委員とありて、前者は重要の會務を商量し、後者は專はら地方に在りて勸誘の勞を取りしが、是亦本會の進行上に非常の利便を與へたりと云ふ。次に審査規程は大躰昨年の全國昆蟲展覽會のものに異ならざりしも、其區域、其品種、其季節の異なるものあるより、取捨斟酌の上之を修正して準繩に充てたりしなり。次に賞狀は未定なるも、成るべく高尙のものを作るの方針にて、其式を昨年の全國昆蟲展覽會に取るに粗ぼ內定し、賞品は會長の意向を以て決する事に評定したれば、近々實行の運びとなる可し。其他報道すべき雜事なほ多きも、煩ひを避け總てこれを省略に附す。

◉參等賞　（三十九名）

（分類標本）海津郡三郷小學校◉海津郡城山尋常高等小學校◉武儀郡富之保村池田利八◉羽島郡江吉良小學校◉羽島郡竹ヶ鼻尋常高等小學校◉同堀津小學校◉稻葉郡加納小學校◉海津郡大江小學校◉武儀郡下之保村森庄次郎◉羽島郡下中島尋常高等小學校◉岐阜市岐阜高等女學校◉羽島郡足近小學校◉海津郡今尾尋常高等小學校◉本巢郡小學校第五小部落◉岐阜縣師範學校生徒平田桐三郎◉安八郡昆蟲學會

（害蟲標本）稻葉郡那加村小野鐵次◉羽島郡竹鼻尋常高等小學校◉海津郡吉里小學校◉羽島郡足近小學校◉可兒郡害蟲驅除講習生

（益蟲標本）海津郡吉里小學校◉稻葉郡常盤小學校◉海津郡海西小學校◉揖斐郡川合尋常高等小學校

（教育用標本）武儀郡關尋常高等小學校◉稻葉郡加納小學校◉羽島郡敬恪尋常高等小學校◉本巢郡第四部落教育會◉海津郡三郷小學校◉羽島郡福壽小學校◉武儀郡富野尋常高等小學校◉安八郡昆蟲研究會◉海津郡內記小學校◉郡上郡昆蟲研究會

（裝飾用標本）可兒郡害蟲驅除講習生◉羽島郡松倉小學校職員三名代表者津屋基◉武儀郡關尋常高等小學校◉土岐郡昆蟲學會

◉四等賞　（六十五名）

（分類標本）羽島郡八劍小學校◉土岐郡昆蟲學會◉稻葉郡三里小學校◉武儀郡安曾野小學校◉稻葉郡鶉沼村藤田喜市◉武儀郡南武藝村澤邊與一◉可兒郡教育會◉稻葉郡鶉沼尋常高等小學校◉稻葉郡本莊小學校◉養老郡農會◉海津郡海西村古川はつ◉羽島郡笠松尋常高等小學校◉稻葉郡農會◉羽島郡松倉尋常高等小學校◉稻葉郡鶉小學校◉羽島郡駒塚小學校◉加茂郡昆蟲研究會◉海津郡石津小學校◉武儀郡吉田小學校◉本巢郡船木村矯風會◉武儀郡中有知村古田恒彥◉不破郡字留

生小學校●稻葉郡黑野尋常高等小學校高等科女子部●武儀郡小金田尋常高等小學校●武儀郡神淵高等小學校

（害蟲標本）羽島郡農會●郡上郡昆蟲學會●羽島郡下中島尋常高等小學校●羽島郡笠田小學校●海津郡城山村伊藤靜夫●羽島郡上中島尋常高等小學校●羽島郡松倉尋常高等小學校●稻葉郡常磐小學校●海津郡城山尋常高等小學校●稻葉郡鶉沼村藤田喜市●羽島郡堀津小學校

（益蟲標本）羽島郡松倉尋常高等小學校●郡上郡昆蟲學會●稻葉郡農會●羽島郡上中島尋常高等小學校●海津郡海西小學校●羽島郡堀津小學校●武儀郡大矢田小學校

（教育用標本）土岐郡昆蟲研究會細野支會●羽島郡西小藪小學校●稻葉郡茜部小學校●武儀郡下ノ保尋常高等小學校●武儀郡中有知小學校●武儀郡片知小學校●羽島郡小熊尋常高等小學校●武儀郡下有知尋常高等小學校●武儀郡神洞小學校●羽島郡八神小學校●海津郡境小學校●海津郡城山尋常高等小學校●大野郡渚小學校●安八郡中川尋常高等小學校●武儀郡蕨生小學校●武儀郡武藝尋常高等小學校

（裝飾用標本）郡上郡昆蟲學會●加茂郡昆蟲研究會●稻葉郡教育會第四部落●稻葉郡茜部小學校●土岐郡昆蟲研究會●羽島郡竹ヶ鼻尋常高等小學校　（備考）單に小學校とせしものは皆尋常小學校を云ふ（完）

◎山梨縣の昆蟲研究會

山梨縣甲府の有志より成立せる昆蟲研究會は、去頃其總會を縣農會事務所内に開き、害蟲驅除豫防法調査のため、會員岡田隆次郎氏は椿象、浮塵子、天牛を、中澤樂平氏は夜盜蟲、羽蟲、青蟲、金龜子を、赤澤榮助氏は螟蟲、尺蠖、心蟲を、大須賀藤勝氏は蝗蟲、泥負蟲、僞瓢蟲を分擔する事に決し、なほ左の諸項をも協定せりと。

○本會の事業として昆蟲列陳所を設置する事。○會員の採集したる昆蟲標本は、此際至急に本會に送附する事。○標本の蒐集及其他研究の爲め、昆蟲の野外採集を施行する事。但期日及方面を定めて本會より會員に通牒する事。○昆蟲講話會を各處に開設し、一般の農家に害蟲思想を注入する事。但其第一回を西八代に、第二回を西山梨に、第三回を中巨摩郡に、順次開設する事。○汎く會員を募集の事。○名譽會員及顧問を推選する事。但會長に一任する事。○本會の徽章を調製する事。○昆蟲陳列は縣廳内の會員二名に依托する事。○害蟲の發生豫報を印刷して、農家に注意を與ふる方法を講ずる事。

◎昆蟲標本陳列館の參觀人

昨三月中に、當昆蟲研究所の標本陳列館を參觀せし人員は、總計五千四百八拾壹人にて、其內最とも多かりしは、二日の參百參拾貳人、最とも少なかりしは、四日の六拾九人にて、一日平均貳百拾壹人強に當れり。また重なる者は、奈良、岐阜、滋賀、福井、群馬、神奈川、大阪、和歌山、愛知、鳥取等の各府縣に於ける農事當局者又は敎育者等にて、外に文部、農商務兩省の派遣員數名の來觀ありき。因みに云ふ、同館は修繕、陳列替等の爲め、去月二十日以後は閉鎖し居たるが、最早內部の整頓を告げたれば、近々舊に依り縱覽に供するに至るべし。（以上四月十二日脫稿）

守隨商店の特色と營業種目

◉秤は何種に拘はらず⊕の商標并に守隨製の打込印を御認めの上御買入相成候事必要に候
◉⊕の商標并に守隨製の打込印なき者は拙店の製品ょ無之候
◉拙店の製品ょあらざるものは多く原料粗惡にして耐久の見込無之候
◉耐久の見込なきは今回の定期檢定成績ょ於て既に御了解相成候と存候
◉耐久の見込なきのみならず損所修覆の時原料の取替又ハ各異形の爲め非常の手數を要し候
◉非常の手數を要し候故に修覆料も亦隨て高價に相成候
◉修覆料の高價ょ止まらず無據御斷り申上候品も澤山有之候
◉拙店は三百年來斯業ょ從事し陸軍省所有の大砲掛秤鐵道局使用の車輛掛秤臺灣總督府の標本秤等を製造せしのみにても技術の巧妙にして堅牢なる製品を出すこと明白に候
◉拙店は全國に於て三支店四分店四十出張所七百八代理店を有し修覆又は取次をなさしむるを以て損所修覆の際は獨得の便利有之候
◉定期檢定を受けざる秤又はポンド目カン〳〵等を御使用相成候方往々見受け候得共右は法律上嚴罰有之候間速ょ御棄却可被成候
右は將來秤御買入の諸君に對し豫じめ御注意申上候也

尙弊店の漆器營業種目は左の如くに有之候

美術漆器、一閑張、張拔、螺鈿入漆器、朱塗物、重箱、本膳椀椀盛、菓子椀、吸物椀、折敷膳、會席膳、吸物膳、菓子器、杯洗、盃類、盆類、鏡臺、針差、枕類、鏡類、額縁、塗板額、貿易漆器、紀念木杯、卷煙草箱、料紙文庫、硯箱、香合、棗類、香盆、小箱、塗煙草盆、行燈、衣桁、切手盆、机類、箸箱類、下駄箱、紅葉箱、簞笥、長持、用簞笥、櫛簞笥、膳簞笥等は御注文に依り十分入念調製可仕候
御嫁入道具、家具類、玩弄物を始め其他漆器類一切營業可仕候
特ょ蒔繪は自宅の工場内に技師雇入れ有之に付美術蒔繪は無論其他意匠圖案の求めに應ず

名古屋市榮町一丁目

度量衡
漆器業

守隨本店

（電信略符ミスイ）

第五回內國勸業博覽會農產物獎勵懸賞廣告

本年より我が硫曹肥料を使用して明卅六年當大阪市に開會の第五回內國勸業博覽會に出品したる主要農產物即ち米、麥、豆、雜穀、蔬菜、綿、麻、桑、製紙原料(特に楮、三椏)及糊料、藺、藁稈、其他纖維類、(特に亞麻、ラミー)煙草、染色原料(特に藍)製油原料(特に菜種)牧草、藥草、種子苗、茶、砂糖果實類、花卉、其他一般農作物よして我が硫曹肥料の爲に名譽金賞牌を得たる者全銀賞牌を得たるもの及一等賞、二等賞、三等賞を得たる者拾數百名へ金參百圓、百圓、五拾圓、貳十圓、十圓等の五級に分ち金數千圓を特に褒賞として贈呈すべし

硫曹肥料は在ゆる農產物に用ひて其品質を宜しくすること驚くべき者あり德嶋福岡に於ける藍作岡山廣嶋に於ける藺作兵庫鹿兒嶋に於ける煙草作香川鹿兒嶋に於ける砂糖作其他各地に於ける米、麥作其他各種作物に於て明に之を證せり硫曹肥料の詳細は新農報各號に掲げたれば就て熟覽あるべし

大阪市西區西野下之町
電話番號 西四一九番

大阪硫曹株式會社

動物學雜誌
第十四卷 百六十一號

目次

發行所 東京動物學會

名和昆蟲研究所長名和靖著

五版

薔薇の一株 **昆蟲世界** 全

定價貳拾錢 郵稅貳錢（郵券代用一割增）

臨時刊行第一編

日本昆蟲分科表 全一册

定價（郵稅共）金貳拾八錢（郵券代用一割增）

臨時刊行第二編

通俗益蟲集覽 第一輯（說明書附）

定價（郵稅共）金貳拾貳錢（同上）

臨時刊行第三編

貝殼蟲圖說 全一册（再版）

定價（郵稅共）金參拾七錢（同上）

雜誌昆蟲世界合本出來廣告

昆蟲世界第一二巻品切

本邦唯一の昆蟲雜誌

昆蟲世界合本

第五巻（昨年分）出來

西洋綴金文字入美装

●昆蟲世界第三巻合本壹册　定價金壹圓貳拾錢郵稅金拾貳錢

●昆蟲世界第四巻合本壹册　同上

●昆蟲世界第五巻合本壹册　同上

右昆蟲世界の義は發刊以來、非常の高評を博し斯學研究上の寶典として又農事改良の先驅として歡迎せられしも、未だ之を合本さするに至らざりしに、今回讀者の勸告により毎一年分を裝釘して閱讀索引に便にせり、請ふ愛讀を玉へ。

◎害蟲圖解既刊の分廣告

●第一。桑樹害蟲エダシヤクトリ（枝尺蠖）（三版）

●第三。稻の害蟲イ子ノズヰムシ（二化生螟蟲）

●第五。稻の害蟲イチモジセセリ（苞蟲又葉捲蟲）

●第七。桑樹害蟲シンムシ（心蟲）

●第九。茶樹害蟲ミノムシ（避債蟲）

●第十一。桑樹害蟲クハカミキリ（桑天牛）

●第十三。桑樹害蟲イトヒキハマキムシ（糸引葉捲蟲）

●第十五。馬鈴薯及び茄子の害蟲テントウムシダマシ（擬瓢蟲）

●第二。桑樹害蟲トゲシヤクトリ（刺尺蠖）（再版）

●第四。煙草害蟲タバコノアヲムシ（煙草螟蛉）

●第六。桑樹害蟲ヒメゾウムシ（姬象鼻蟲）

●第八。稻の害蟲イ子ノアヲムシ（稻螟蛉）

●第十。豌豆害蟲エンドノキリムシ（夜盜蟲又地蠶）

●第十二。稻の害蟲ツマクロヨコバヒ（浮塵子）

●第十四。茶樹害蟲チヤケムシ（茶蛅蟖）

以上十五種は既刊の分にして發行以來既に多くの各級農會は勿論、諸學校にも備へ付けられたり。

蟲塚保存義金募集廣告

◎蟲塚保存義金募集の趣意

現時、本邦各地ょ散在の蟲塚(害蟲に關する石碑)は其數凡そ十基ょ下らざる可し而して當初ろの建立の旨意を尋ぬれば、多少の異同ありて、石川縣のもの丶如く害蟲埋瘞の紀念碑たるあり、大分、宮城、福井諸縣のもの丶如く蟲害掃攘の祈祝碑たるあり、又福岡縣のもの丶如く害蟲驅除の記功碑たるありと雖ども、要は農作害蟲の怖るべく、之が驅防の等閑に附す可からざる事を訓戒するの誠意より出づ、豈にこれを路傍の供養碑と同視して可ならんや。然るを其現狀を聽くょ、或ひは桑圃の間ょ顚倒するものあり、或ひハ風雨に曝されて文字の剝蝕ょ任するものあり、或ひは空しく山中の荊叢ょ埋もるものある等、今にして早く之が保存の道を講せずんば、久しからざるょ事蹟湮滅の虞れなしとせずと。當昆蟲研究所深くこゝに感あり、當所創立七年の紀念事業として、本年四月を期し、之が保存修補の計畫をなせり。然れども到底少數者の微力を以て完成すべきょあらざれば、博く同志を全國ょ募り、其義捐を仰ぎて、古人が今日に遺したる洪恩に荅ふる所あらんとす。世の農桑業に從事し若くは昆蟲學を研究せらるゝ諸士の、半瓶の酒、一塊の肉を節して、此擧に贊襄の意を表せられんことを冀ふ。

● 義金は一口金五錢以上とす。(郵劵代用にて宜し)

● 義金は一人一口以上とす。

● 義金取扱は來る四月末日を以て終了期限とす。

● 義金には受領書を出さず時々「昆蟲世界」紙上に芳名を揭げて領收の證となす、精算報告もまた同じ。

● 醵集義金は之を平分して、四月末日までに判明せる、各蟲塚所在地の官廳に依托すべし。

● 義金送附の際は、蟲塚復舊工費若くは雨覆ひ埒柵修造費に限り支出せられ度旨を指定すべし。

● 義金醵集總額幷に寄附者名簿は、配分金と共ょ各官廳ょ送附して、義捐者の意思を傳達すべし。

義捐金申込所　岐阜市京町　**名和昆蟲研究所**

昆蟲世界

第六卷第五拾六號

（明治三十五年四月十五日發行）

（每月一回十五日發行）

◎岐阜縣冬季昆蟲展覧會經費寄附金受領第六回報告（人名イロハ順）

一金壹圓（岐阜縣揖斐郡）大岬祐夫君
一金壹圓（同上）長屋米次郎君
一金壹圓（同上）長屋四郎兵衛君
一金壹圓（同上）野口新太郎君
一金壹圓（同上）小森省作君
一金壹圓（同上）遠藤熊次郎君

●小計金六圓　●通計百四拾九圓五拾錢

◎昆蟲世界購讀紹介者芳名

岐阜縣　原田晟君（貳名）
岡山縣　入江澄兄君（壹名）
山形縣　齋藤朝之助君（壹名）

◎昆蟲世界愛讀諸君に敬白す

雜誌「昆蟲世界」の義は、假ひ御注文有之候とも、前金にあらざれば、發送致さゞる規定に有之候處從來の厚誼上、前金相切れ候時は、其旨を朱書の上、特別に御扱ひ致し候ひしに、往々却つて意外の御取計ひに相成る向も有之候故、以後は不得止發送を見合はせ可申候、依て封書に前金切れのしるし相附し發送致候場合には御不用なれば其趣き御一報願上度、若し御通知無きに於ては、舊の如く御購讀相成るものと見做し可申候間、豫め御承知置願上候

三月十日　名和昆蟲研究所會計部

◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條に依り、每月第一土曜日午後正一時より、岐阜市京町名和昆蟲研究所內に於て開く筈なれば、每會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所內　岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會本年中の日並は左の如し

第四十一回月次會（五月三日）
第四十二回月次會（六月七日）
第四十三回月次會（七月五日）
第四十四回月次會（八月二日）
第四十五回月次會（九月六日）
第四十六回月次會（十月四日）
第四十七回月次會（十一月一日）
第四十八回月次會（十二月六日）

◉名和昆蟲研究所案內

當研究所の位置は上の圖の如く停車場よりは僅十餘町にして養蟲室あり、又ロとへとの間なる新設の岐阜縣物產館構內には常備の昆蟲陳列館（五間に十六間）あり有志諸君の來訪を俟つ

岐阜縣岐阜市京町　名和昆蟲研究所

◉本誌定價並廣告料

壹部郵稅共金拾錢（見本は五厘郵劵貳拾枚にて呈す）
壹年分拾貳部郵稅共金壹圓八錢

（注意）本誌は總て前金に非れば發送せず◉郵劵代用は五厘切手にて壹割增とす◉爲替拂渡局は岐阜郵便電信局

廣告料五號活字廿二字詰一行に付金拾貳錢、三十行以上一行に付き金拾錢とす

明治三十五年四月十五日印刷並發行

發行所　岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二（岐阜縣岐阜市京町）名和昆蟲研究所

發行者　岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二　名和梅吉
編輯者　同縣武儀郡下有知村三百七十四番戶　天野秋二
印刷者　同縣安八部大垣町字郭百五十三番戶　河田貞城

（明治三十年九月十日內務省許可　明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

（大垣西濃印刷株式會社印刷）

Vol.VI. MAY. 15TH, 1902. No.5.

THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE
EDITED BY Y. NAWA.
GIFU, JAPAN.

昆蟲世界

（五月十五日發行）

（毎月一回十五日發行）

第五拾七號　（第六卷第五册）

目次　（禁轉載）

（明治三十五年五月十五日發行）

（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU ,JAPAN

◎寄贈物件受領公告

一金五圓也　愛知縣　寺島昇君

一歐州製蝶摸樣更紗七種
一支邦製蝶摸樣緞子壹種
一臺灣製蝶形簪　貳本　} 愛知縣　寺島昇君

一リボン蝶形　壹本　岐阜縣　大野勇君

一對馬產昆蟲六百五十五頭　長崎縣　平田駒太郎君

一東海新聞（昆蟲記事掲載）貳葉　千葉縣　菰田愛藏君

一伊豫日報（昆蟲記事掲載）壹葉　愛媛縣　上月朝太郎君

一沖繩縣昆蟲標本數拾種　沖繩縣　安藤喜一郎君

一昆蟲書　壹冊（彩色圖入歐文）　兵庫縣　前川清一君

一昆蟲摸樣商標其他數種　東京市　{田中五一君 田中健太郎君}

一害蟲驅除豫防報告壹冊　大阪府　澤田幸作君

一養蠶新書　壹冊　東京市　內外出版協會

一丸瓶（昆蟲用）貳拾本
一角瓶（昆蟲用）三拾本　} 岐阜縣　林正一君

右當所へ寄贈相成候に付茲ゝ芳名を掲げて其厚意を謝す

明治卅五年五月　名和昆蟲研究所

◎昆蟲世界購讀紹介者芳名

京都府　谷口鶴藏君　貳名
大坂府　辻岡彥次郎君　壹名
兵庫縣　居田槌平君　壹名

◎蟲塚保存義金喜捨第三回報告（イロハ順）

金壹圓六十五錢　第五回岐阜縣害蟲驅除講習生一同
金五拾錢　岐阜縣　大野本十郎君
金廿五錢　岐阜縣　高橋貫一君
金廿五錢　岐阜縣　松尾國松君
金廿五錢　岐阜縣　小竹浩君
金貳拾錢　青森縣　新渡戸稻雄君
金貳拾錢　福井縣　吉井消一君
金貳拾錢　東京市　田中隨太郎君
金拾錢　宮城縣　伊藤靜子君
金拾錢　香川縣　吉川笹市君
金拾錢　香川縣　保井此子君
金拾錢　福井縣　堺佐喜子君
金五錢　山口縣　原田民三君
金五錢　岐阜縣　川口助太郎君
金五錢　山口縣　田中安之進君
金五錢　山口縣　桑原繁亮君
金五錢　山口縣　藤村俊雄君
金五錢　山口縣　阿部權三君
金五錢　山口縣　佐川松太郎君
金五錢　山口縣　白松教亮君
●小計六圓六拾五錢（百卅參口）●
金廿五錢　岐阜縣　河田貞城君
金廿五錢　岐阜縣　圓山包吉君
金廿五錢　岐阜縣　後藤宇三郎君
金廿五錢　岐阜縣　江崎貞三郎君
金貳拾錢　兵庫縣　東郷隆次君
金貳拾錢　東京市　田中五一君
金貳拾錢　新潟縣　櫻井熊治君
金拾錢　福岡縣　南守文子君
金拾錢　宮城縣　永澤甲子君
金拾錢　京都府　松村兼子君
金五錢　山口縣　伊藤英雄君
金五錢　山口縣　渡邊善次郎君
金五錢　山口縣　横山茂樹君
金五錢　山口縣　田中要藏君
金五錢　山口縣　松田龜之進君
金五錢　山口縣　藤井彝眞君
金五錢　山口縣　齋藤木三君
金五錢　山口縣　佐崎門治君
金五錢　福井縣　森井榮次郎君
●累計金廿圓八拾錢（四百拾六口）

右蟲塚保存費中へ義捐相成候に付報告候也

尚ほ募集締切期限は、四月末日までの處、長野縣及び福井縣にも從來知られざる蟲塚有之趣きも相聞へ、且つ應募の同志續々有之のみならず、其金額も未だ豫定額に達せざるゝ付、旁々向ふ三ヶ月間引續き募集の事に變更致候、

明治三十五年五月五日　名和昆蟲研究所

Tipula parva, Loew. キリウジガガンボ

論說

◎害蟲驅除の眞意を誤解すること勿れ

吾人が年來の宿論たる、害蟲驅除實行の聲の、漸やく各地に傳播するに至りしは、國家の慶事たるに違はざるも、中には其何が故に之を必要とするやの理を究めず、漫然蟲類を捕殺するを以て、能事となす者あり、少さか遺憾の節なきにあらず。蓋し吾人の夙に此議を唱道せしは、或目的を貫徹せんが爲めにそのこれに到るの順序として、其楷梯を示し、其渡津に導びくの意に過ぎざればなり。斯くいはゞ、人或ひは應に眞意の存する所ろを疑ふあるべし。論ふまでも無く、目今の情勢より觀れば、毎歳蟲害の爲めに損失する所ろの額、實に國費の三分一よも餘り、國家の經濟上、至大の關係を有するを以て、之が實行には固より異議を挿まざるも、單だ最終の目的と方法との別を知らず、彼の衰弱の細民を驅使して強ゐて器械的に從事せしむるを本旨とする者を難ずるのみ。

それ害蟲の驅除を行ふは、農産の利益を保護するに外ならず、農産の利益を保護するは、蒼生の慶福を增進するに外ならず、而して蒼生の慶福を增進するは、國家の堅實を期するに外ならざれば、此範圍を脫離せん限りは、齊しく蟲類の捕殺を行はざる可からず。たゞそれ捕殺をのみ是れ事とし、此を以て眞目的と誤解したらんには、竟に大功を一簣に缺くの日あるや必矣。是故に害蟲驅除を實行するに當りて

は、絶えず各方面の事物に留目し、特に機微の間の觀察注視を怠たるべきにあらず。
大局の上より論ずれば、蟲害の爲めに假し凶作を來たすことありとも、金力を以て食料を外に求め得べく、金力足らずんば、一時外資を輸入し得べきを以て、害蟲の生滅と、農作の凶豐とは區々介意するに足らざるが如し。然はいへ、人心の動靜と、社會の安危とは、一に皆豐凶、貧富の上に繋がる。故に其方法として、豐稔を致さしめんが爲めには、害物を殲滅せざる可からず、富力を全うせしめんが爲めには、增收の手段をも講へざる可からず。もし否らずして、一朝擅ひまゝに其包藏隱匿の惡分子を散飛せしめんか、之が撲滅消盡の難きは、每に害蟲驅除の難きよりも難く、延て意外の憂患を釀すは、唐明兩朝の末路に於て、之を明らむべし、即はち蟲害と凶作とに伴ふて激發すべきは、金力を以て得て左右し易からざる人心の動亂なるが故に、これを欲せざる限りは、必らずや、先づ害蟲驅除を行はざる可からず、況んや國家無算の損失を救濟するをや。

害蟲驅除の事業とは、偏へに蟲類捕殺の謂ひに非ず、社會の安泰を目的とするものなるの理は、概むね此くの如し。然るを其半面のみを窺ひて、鋭意捕殺をこれ努め、爲めに過重の負擔を課して厭かざるあり、生硬煩雜の技術を示して怪しまざるあり、甚はだしきは過分の設備をすら命ずる者は之あれど、未だ細民の智囊を拓開し、大農に天職を行ふことを慫慂し、以て兩者間に道義の制裁を設けしめ、其步調を整齊し、惡分子を排除し、而後國家の慶福を胚胎するの策に出づる者に至りては、極めて鮮なし。聞かずや、福岡、山口、岐阜、愛知、茨城の諸縣には、往々當業者間に不祥の兆候を現出せしことを、害蟲驅除の衝に當る者は、豫じめ深く緩急を稽査する所ろなかる可からず。近ごろ會々、蘇軾が預救荒を乞ふの上書を讀み、頗ぶる時事に感あり、記して弘く同志に似す。（前卷第四十三號參看）

左の一篇は、當昆蟲研究所長名和靖氏が、今より十年前に採筆せる舊稿にて、一昨三十三年二月發行の「昆蟲世界」第三拾號及び其次號に收錄せる、枝尺蠖の記事と同時の脫稿に係る。故に或ひは今日の現狀に適せざるもある可く、又その徵證の如きは一に當時の事例を改めざるを以て、稍新事實に乏しきやの憾無きを保せず。去れど大體に至りては、固より實地應用上の支障之なきのみか、其細緻なる各種の實驗、飼育の如きは、時節柄利すべきものあらんかと信ずるを以て、之を本欄に收む。　編者記す

◎稻麥の害蟲キリウジと其驅除法に就て（第五版圖參看）

名和昆蟲研究所長　名和靖

キリウジは、啻に稻苗を蝕害するのみならず、また麥苗をも損傷する所ろの、一種の農作害蟲なるを以て、近ごろ之に注目する者漸やく多きを加へたるに似たり、依りて之が生涯の一斑、飼育の成績、及び其驅除方法の梗概を順次叙述すべし。

（第一）キリウジの地位と其名稱　キリウジを昆蟲學上の地位より言へば、こは雙翅目の大蚊科に屬する一種にして、其學名を Tipula parva, Loew. といひ、最とも蚊子に近似せるものとす。蓋しキリウジとは切蛆の義にして、こは幼蟲期の名稱なるも、一たび羽化するに至れば、カノオバ、カオヤ、カガンボ、ガガンボ等と稱せらる。カノオバは蚊の祖母の義にして、本は蚊姥より來り、カオヤは蚊親の義なるべく、カガンボとガガンボとは共にカノウバの音便訛なるべしと云へば、古人はこれを以て一種大形の蚊子と思量せしや知るべきなり。又東京地方に於ては、之をカトンボとも稱し、栗本丹洲翁は熊蚊と云ひ、貝原益軒翁また蚊伯母と云はれたれど、實は此等の和名は皆此科に屬する蟲種の總稱にして、決して或一

種に限れるにはあらず。故にキリウジの成蟲に對しては、余はキリウジ、カガンボの名を擇び、これに假りに切蛆蚊姥の漢字を適てたり、而して其キリウジ云へる幼蟲名に至りても、多くは義を土蠶に取り小野蘭山翁は蠐螬の一とし、水谷鉤致翁は群芳譜を本として、黑小地蠶の字を用ゐられぬ。然し乍ら、此種は他の地蠶、蠐螬とは加害の狀を異にするが故に、單だ切蛆の俗字を適つるを至當とすべき歟。

（第二）形態と其變化　　キリウジ、カガンボの習性經過は、敢て著るしく他の蚊族と異ならざるも、また興味ある變化無きにしもあらざれば、其生涯を四期に分ちて、各別に記述すべし。

（い）卵子　　卵子の形狀は第五版圖の（イ）に示すが如く、少しく曲みたる長橢圓形をなし、長三厘、濶一厘許りありて黑褐色を帶べり、その尖端に三稜形のものを附着するも、未だ効用を詳らかにせず。

（ろ）幼蟲　　幼蟲すなはち切蛆の實體は（ハ）圖に示せる如くにて、其軀幹の兩端は稍細まりたる圓筒形をなし、老熟の後は約そ八九分の大さとなる。其體色は背面に淡黑褐を帶びて、有機質を多く含有せる膏壤の土色と一見異なる所なく、腹面は前者よりも少しく淡し。斯かる體色をもて、常に爛泥軟土の中に潜伏し、多少の汚泥を附着するを以て、容易く之を發見し難きも、時々軀を彎曲するの性あるが故に、少しく注目する時は、意外に速やかに認め得べきなり。捕獲の後、軀上の泥土を洗滌して子細に之を點檢する時は、假し肉眼なりとも（ホ）圖に示すが如く、淡黑褐の地色の間には、橢圓形をなせる小黑點の規則正しく微かに横列するものを見ん、又之を反覆して腹面を檢する時は、關節每に必らず二小突起を具ふることを知らん、此突起こそ、此害蟲の匍行する運動器なれ。頭部には二小觸角を有し、口部にある顎齒は堅强にして、能く植物に加害するに足ることは（ニ）圖を見て粗ぼ推知し得べし。腹部の末端には、車輪狀をなせる二箇の氣門を有し、恒に之を水面上に駢列して吸氣の用に

供するも、其一たび水中に入るや、互ひに相聯結閉鎖せしめて、全たく浸水を防ぎ、尙は此等の作用を確實ならしむる爲め、氣門の周邊には六箇の小突起をも具有し、氣門開放の際には自づから放線狀をなして浸水を防ぎ、且つ水中にありても氣門と同一の動作をなし、肯て涓滴の其軆內に侵襲するを容さず、圖中の(ト)は卽はち氣門の構造を示すものとす。肛門は二箇の呼吸口の下部に開口し、其近傍よりは、六箇の柔軟にして且つ長短不同なる突起を生ず、其効用はまた未だ詳びらかならざるも、恐らくは運動器の一たるに過ぎざる可し。盖し切蛆の玻璃板面を匍行するに方りてや、水平面上に於ては敢て甚はだしく之を活用せざるも、其玻璃板を直立し、これをして上行せしむる時には、著るしく此等三双の突起を伸張して、抵抗力を起さんとするの狀態を現はせばなり。惟ふに泥土の中を潜行するに臨みては、大ひに利する所ろあるならんか。

(は)蛹　蛹の狀態は(チ)號にある如く、圓筒形をなし、頭胸部は稍肥ひ、腹端に至るに從うて少しく窄まる。胸部の第一關節の上方には、細長管狀をなせる、二箇の呼吸口の突出するものあるを見る是れ幼蟲の腹端にある氣門の位置を變せるものとす。腹部の內方には、每關節の終りに、横列せる堅硬の小突起の數箇を有するを見、又その末端のもの丶特に大形なるを見ん。而して蛹期にありても、なほ頭部に於ける双眼、胸部に於ける兩翅幷びに皮下に藏せる脚部の存在を認め得べきなり。蛹の地色は初め灰白なるも漸次黑褐に變じ、十數日の後に羽化す、其長は約そ七八分の間を以て通例とす。

(に)成蟲　第五版圖の(リ)號は切蛆蚊姥卽はち成蟲の雄にして(ヌ)號はその雌とす。今この兩者を比較するに、雄の腹端は肥大なるも、雌は尖銳なれば、直ちに之を見別し得るのみならず、其觸角もまた自づから相異なる所ろありて、雄のものは(ル)號の如く、雌のものは(オ)號に示せるが如く、長短、

形狀互ひに齊しからず。但翅脈（ワ）と全躰の色彩に至りては未だ異點あるを認めず。而して其體色は何れも淡褐を帶び、翅は透明なるも、上部特に末端に近き邊にありては、少しく濃色とあり、あは其傍らに淡色を現はすが故に、此配合の結果として、一種の斑紋を呈するなり。脚はその身長に幾倍し、極めて軟弱のものにて、末端に至るに從がひ、漸やく黑色を增す。複眼は圓く且つ大に、直ちに頭側に凸出して、その色は黑褐を以て彩どらる。身長は雌雄によりて著るしく異あり、雄は五分貳厘强なるも、雌にありては六分七厘弱を算し、其翅張は雄に於て一寸二分五厘弱、雌は一寸三分七厘弱を中數となす、即はち次の測定表によりて、身長翅脚等の大概を知るに足らん。

身長測定表

雄

頭數	身長
三	五五厘
一	五三
五	五二
二	五〇
一	四八
計 三頭	平均 五二厘

雌

頭數	身長
一	七〇厘
二	六八
一	六〇
―	―
―	―
計 四頭	平均 六七厘

翅張測定表

雄

頭數	翅張
一	一三六厘
一	一三三
二	一二八
一	一二五
一	一二四
一	一二三
五	一二〇
計 三頭	平均 一二五厘

雌

頭數	翅張
一	一四四
一	一四〇
一	一三四
一	一二八
―	―
―	―
―	―
計 四頭	平均 一三七厘

（此表は蟲體乾固後に側りたるものなれば實際はこれより稍大なるべし）

前記の如く、その身長と翅張とに於ては、雄は雌に及ばざるも、之に反して脚長は遙かに雌のものに勝れり。之を測定の結果に徵するに、雄のものは雌のものに比較し、前足は一分八厘、中足は一分九厘、後足は一分三厘の長さに居る、其の事實は左の統計によりて明らかなり。

脚長測定表

雄

頭數	前足
一	一四六厘
七	一四〇
一	一三八
一	一三五
二	一三〇
計 三頭	平均 一三八厘

雌

頭數	前足
一	一三〇
一	一三三
一	一二五
一	一二二
―	―
計 四頭	平均 一三〇厘

雄

頭數	中足
一	一五五厘
一	一四八
二	一四五
二	一四四
一	一四三
一	一四〇
二	一三八
一	一三五
一	一三〇
計 三頭	平均 一四二厘

雌

頭數	中足
一	一三七
一	一三〇
二	一二八
―	―
―	―
―	―
―	―
―	―
―	―
計 四頭	平均 一二三厘

雄

頭數	後足
一	一六八厘
一	一六五
三	一六三
一	一五六
三	一五五
二	一五〇
一	一四四
計 三頭	平均 一五七厘

雌

頭數	後足
一	一五六
一	一四六
一	一四〇
一	一三三
―	―
―	―
―	―
計 四頭	平均 一四四厘

（第三）發生加害の區域　此蟲は發生の區域甚はだ廣く到る處ろに其飛翔を見ざるは莫し、現に岐阜縣下の如きは發生せざるの土地なく、又靜岡、愛知、埼玉、千葉、廣島、島根、鳥取、大阪、滋賀等の諸府縣に於ても田圃の被害ありと云へば、本邦内何れの土地と雖ども、恐らくは分布せざる處ろなけん。去れど暖地に多くして、恒に寒地に少なきは、斯學研究上注意すべき一事項なるに似たり。

（備考）　明治廿六年四月廿三日、滋賀縣下を湖東鐵道并びに關西鐵道に乘じて往復の際、彦根驛と草津驛との間、草津驛と柘植驛との間に於て、此蟲の群飛するを目撃し、車窓より捕蟲網を揮ふて採集せりき。後之を鏡檢するに普通種と同一なることを確めぬ。

（第四）發育と經過の狀態　冬季は幼蟲の狀態を以て經過し、翌年四五月頃に到り温暖の候を以て蛹に變じ、次で羽化して成蟲即はち蚊姥となり、生殖作用を遂げて、葉上その他に數百顆の卵子を産附す。卵子巳に孵化する時は、幼蟲即はち切蛆となり、漸次成長を遂げ、冬寒の來る頃より蟄伏して、春暖の來るを俟てまた加害老熟をなす。時ありて八月下旬に成蟲を見ることあるも、是れ氣候、食物等の關係より、偶々甚だしく遲生するものと覺しく、此を以て直ちに年二回の發生とは斷言し難きが如し。彼の四月上旬より羽化し、連綿六月に亘ることあるは、肯て奇とするに足らぬ事實なれば、其生長には蓋し非常の差異あるを見るべし。

（備考）　明治廿三年六月以來飼養せし幼蟲の八月下旬に到り始めて化蛹し、續て羽化成蟲となれる事を試驗せり。又同年九月上旬には、岐阜縣不破郡并びに岐阜市近傍の稻田上に、往々成蟲を目撃せしを以て、乃はち土中の幼蟲を調査せしに、十頭中、三頭は化蛹し、一頭は羽化せるを知れり。次に明治廿四年四月の初め、岐阜市の某處に於ては、概むね羽化を遂げたりしも、他の某處の未だ然らざる事を實驗しき。是れ實に變態化育の時期の一定せず、且つ其土地によりて早晩の別あるを證するに足らん。

（第五）性質と加害の狀況　切蛆はその性腐敗物すなはち有機質に富める濕潤肥沃の土地を好む、去れば決して乾燥土若くは貯水等には發生することなし。蓋し思ふに、乾燥土に於ては、十分に食料を得難

く且つ移動の不利ありて、適當の生殖をなし能はざるに因るある可く、又恒に大氣の吸収を必用とするも、其體量の重さは水上に浮遊するを容さゞるを以て、到底貯水中の生活をなし遂ぐること能はざるに本づくものならん。原來切蛆は有機質を好み食するを以て、其食料の多かる土地には聚合蕃殖を遂ぐるも、會々生植物を蝕損すること無きにあらず。嘗て實驗せし所ろに據れば、日中は概むね土中に潛伏し夜間潛み出で丶稻苗を蝕害しき。依りて試ろみに、三四日間絶食せしめたるの後、始めて硬直性の雜草（禾本科植物の一種）を與へたるに、多く出で丶之を食用としたるのみか、又柔軟なるタウヂサをも併せ食とせり、是に於て更に腐敗有機物と丶もに、生植物を混へ與ひしに常時は多く之を好まざる事を確認しぬ。此等の試驗によりて、生植物を食とするは其本性にあらざる事と、日中と雖ども多少は食を取るものなる事とを知りぬ。加之、全たく生植物を與ふることを廢め、有機質のものを多有する土中に居らしむるのみにても能く成熟を遂げ、其排泄物の殆ど無機質より成ること恰かも蚯蚓のそれに同じきと苗代田に多生の割合に加害の少き等は、明かに切蛆の生植物を嗜好せざる事を説明し得べきあり。（未完）

説明　第五版圖の（イ）は卵子の放大圖（ロ）は幼蟲即ちキリウジの稻苗を嚙切るさま（ハ）は幼蟲の放大圖（ニ）顎齒の放大圖（ホ）は幼蟲の背面の斑紋（ト）は幼蟲腹部の末端（チ）は蛹の放大圖（リ）は成蟲即ちキリウジ、カガンボの雄（ヌ）は成蟲の雌（ル）は雄蟲の觸角の放大圖（オ）は雌蟲の觸角の放大圖（ワ）は翅を放大して脈管を示せるもの。

◎鳥類の食物と昆蟲との關係（續）

岐阜中學校教諭　長野菊次郎　抄譯

◎燕　燕は哺育の期間全く昆蟲を食とし、雛を養ふにも亦昆蟲を以てす、ウキドマン（Widmann）氏は紫燕（Progne subis）の習性を觀察せしに、親鳥は雛を養ふに蜻蛉、蝶、蛾、甲蟲、蠅を以てし、巣を訪

ふこと一日に一百回乃至三百回なることを知れり、ラッセル(Russell)氏は或る燕の巣箱より一種の甲蟲(Diabrotica vittata)の鞘翅六合餘を得たることを述べたり、又倉燕(意譯)(Hirundo erythrogastra)及び岸燕(意譯)(Clivicola riparia)の雛百二十六羽の胃を驗したるに、其食物は成鳥と同一なりき。斯く燕は有害なる蠅、米象、小蠹蟲類及び多少有害なる蟻を除くにより、其の有益なるや論を竢たず。

◎雀　亞米利加雀は其食物の三分の二以上は全たく穀物を取る、然れども其幼鳥は全たく昆蟲を以て養はるゝこと明白なり、マリーランド州のマルシャル、ホール(Marshall Hall Me)に於て蝗蟲雀(Ammodramus savannarum Passerinus)の親鳥が、四羽の裸雛に食物を給することを十分に注意しゐるに、三頭の長角蝗蟲(Xiphidium)と二種の短角蝗蟲(Melanoplus. Dissosteira)一の蛹及び一の蚱蜢を親鳥の嘴によりて携へられたるを見たり。又他の蝗蟲雀は同所に於て少しく成長したる雛に、二頭のガメムシ類、二疋の蜘蛛を與ふることを知られ、又其雛の胃中には、同種の蜘蛛二疋と、一疋のガメムシ類と、二疋の食葉甲蟲、一疋の米象、一疋の地蠶、蟋蟀の顎、雜草の種子、麥粒等を含みたりき。カンサス(Kansus)に於て集めたる、十羽の雛と十四羽の成鳥との胃中の試驗に於ては、成鳥の食物の半ばは、穀物の種子なるも、雛の食物は全たく昆蟲即はち蝗蝻、蝗蟲類及び僅少の蜘蛛なりき。

チッピー雀(Spizella socialis)の雛の食物につきては、ニユー、ハンプシャー(New Hamp-shire)試驗場のウヰード(Weed)氏により、漸やく羽毛を生したるばかりの三羽の雛につき、精細に觀察せられたり。抑そも此觀察は一千八百九十八年の六月に於て行はれたるものにして午前の三時四十分より間斷なく午後の七時五十分に及びたり、親鳥が雛に食を與へ初めたるは、朝の三時五十七分にして、終りたる

は夕の七時二十二分なり、此間親が最とも多く巣に來りしは、一時間に二十一回にして。終日に殆んど二百回を重ねたり、休憩の最とも長かりしは午後に於て唯二十七分間の一回ありしのみ。而してその食物の多量は螟蛉にして、蟋蟀カガンボ及び蚯蚓の少量をも混じ一羽の雛につき一日間に給せられたる螟蛉の數は五十疋より少からざりき。今假に或る田圃に於てチッピー雀の雛二十羽ありとせよ、ウキード氏の實驗に從へば、一日間實に一千疋の螟蛉を要する譯なり、豈に多量ならずや。但しウキード氏の觀察中に、螽蟲を缺けるは甚はだ異しむべし、何となれば此蟲は幼鳥の食物の最とも主要なるものなればなり、而して實驗所に於て殆んど一週間生長したる三羽の雛の胃を驗したるに、全たく螽蟲と甲蟲となりき。

（第壹圖）亞米利加雀の食物の割合

一

イ　ロ　ハ　ニ　ホ

幼鳥

（イ）鱗翅類（ロ）蜘蛛（ハ）種々のもの（ニ）甲蟲（ホ）直翅類

二

ロ　ハ　ニ　ホ　イ　ヘ

成鳥

（イ）甲蟲（ロ）直翅類（ハ）鱗翅類（ニ）蜘蛛（ホ）種々のもの（ヘ）穀類

（第貳圖　同上）

英吉利雀(Passer domesticus)の成鳥は殆んど全たく植物を食とし、假ひ動物を食とするも、こは僅かに十分の一にも及ばず、然れども雛の時期に於ては、其食物の過半は昆蟲類にして、其餘は穀粒、重に燕麥を取る、然れどもこは僅かに全量の三分の一に過ぎず、マリーランド州(Mariland)及びビルジニア州(Virginia)の村落に於て未だ羽毛の生ぜざる位ゐの雛六十五羽の食物を驗したるに、其主なるものは螽蟲にして、之に加ふるに少數の螟蛉、蜘蛛及び米象を以てし、時には菜の葉の螟蛉及び甲蟲の幼蟲を交へ、稀には蚯蚓をも取りたることあり。幼き英國雀の食蟲の性質につき興味ある觀察をなせしは、ベリー(Berry)氏なり、彼れは三羽の雛の棲みける巣の内に、二疋の大なる蛾即はちオホミヅアヲテフの一種

(Tropoea luna) とセクロピア蛾 (Samia Cecropia) と及び一疋の鳳蝶の一種 (Papilio turnus) と一疋のヒヲドシテフの一種 (Vanessa antiopa) と及びオホギヤテフの一種 (Orgyia leucostigma) の幼蟲とを發見せり。

斯くて氏は他の雛に近く此等の幼蟲の多數を載せたる木片を置きしに、最初は其親鳥少しも之に頓着せざりしが、漸次彼等は其雛に其幼蟲の三疋を與へ、畢に三時間に雌雄の雀は六十疋の小さき螟蛉を雛に與へしことを驗し得たり、此の如くなれば之が爲に驅除せらるゝ昆蟲の少數にあらざること知るべきなり

又著者は一朝、道路の空際に群集する數千の白蟻を啄ばむ英國雀を注意したることありしが、其中の一雌は十二疋の白蟻を啄ばみて巣に赴むき、直ちに歸り來りては、復た啄みしが此後五分間に三回往來して百六十二疋を除去したり、之を要するに英國雀の幼鳥の、植物を害すると害蟲を除くとの利害略ぼ同じく、米國雀の幼鳥は植物を食せざるを以て、前者に比し昆蟲を驅除する効寧ろ大なるものあり。

◎烏　成長したる亞米利加烏 (Corvus americanus) の食物の三分の二は植物にして、其植物の半ばは重に穀粒なり、然れども其雛は地蠶、螽蟲、及びコガネムシ類の成蟲及び幼蟲の多量を取るを以て、成鳥に比すれば農業上有効なるものなり、而して其有害なる昆蟲を除くことは、彼等が取る所の穀粒の一倍乃至二倍以上に當れり。實驗所に於て百三十九羽の幼鳥の胃を驗せしに、孵化後日を經ざるものは、幼き螽蟲、蜘蛛の類或は軟かなる地蠶等を取ると雖ども、漸次食物の變化を來たし一週乃至二週間を經るに從ひ、其食物の四分の三は甲蟲及び脊椎動物（例へば魚、蛙、鯢魚、龜、蛇、鳥、鼹鼠及び兎）の肉の同量を取るに至る、孵化後一週間位ゐの雛の要する穀粒は、略ぼ一定の限りあれども、成長と共に漸次其量を增加し、巢立の頃に及びては全量の四分の一に達し、殆んど哺育期に於ける親鳥の食量の半ばと其割合を均しくせり。此時に於て甲蟲は全たく穀粒と同量に取られ、之に加ふるに哺乳類の幾分を

以てし、其殘餘は殆んど地蠶、螽蟲及び蜘蛛等なり。

タケガラスの一種(Nucifraga columbiana)の食物につきベンダイル(Bendire)氏の言ふ處によれば、松類の種子、漿果及び昆蟲大なる螽蟲なりと、又メーリヤム(Meirram)氏の言ふ所によれば此鳥の常食は白皮松(意譯)(Pinus albicaulis)の種子なり、然れども之が缺乏を來たす時は、重に螽蟲、甲蟲及び其他昆蟲の幼蟲を取ると。シャスタ山(Mount. Shasta)に於て一年生長せる幼鳥がツガ及び樅を害する少さき綠色の螟蛉を捜索するとも既に觀察せられたる所なり。

◎魚狗　此鳥は魚類を常食とするものなり、然れども折には蛙又は鼴鼠を食ふことあり、然れば雛に於ても魚を食ふことは通例なれども。時には他のものを混食することあり、實驗所に於て、半ば生長せる五羽の雛と五羽の成鳥との胃を驗したるに、唯魚類のみなりき。然れどもハーワード(Harward)氏によりて驗せられたる、羽翼の生じたる許の二羽の幼鳥は、魚の外三種の甲蟲を食とせりき。(未完)

(1圖)クラツバメの成鳥の食物の割合
(イ)膜翅類(ロ)双翅類(ハ)甲蟲
(ニ)蜘蛛(ホ)蟻

(2圖)クラツバメの幼鳥の食物の割合
(イ)種々のもの(ロ)甲蟲(ハ)蟻
(ニ)膜翅類(ホ)双翅類

(3圖)クラツバメ羽翼を生ずる頃の食物の割合
(イ)蟻(ロ)膜翅類(ハ)双翅類

(4圖)英國雀の成鳥食物の割合
(イ)甲蟲(ロ)直翅類(ハ)穀類

(5圖)英國雀の未だ一週間を經ざる幼鳥の食物の割合
(イ)鱗翅類(ロ)蜘蛛(ハ)種々のもの(ニ)穀類(ホ)甲蟲(ヘ)直翅類

◎明治卅四年の氣象と害蟲の發生（續）

北總　大竹義道

◎八月　此月は夏季炎暑の特象を示し、天氣の變化少なくして、氣温昇騰の日多く、最高は三十度乃

至卅六度に升れり、月の過半は晴天を算し、數日間は驟雨ありき。斯く氣温は高まりたるも、八日より十日に亘りて稀有の變調を呈し、此數日間は北の冷風吹きて陰濕の天氣を持續し、之が爲めに最高氣温その極度に降れり、月の四日頃にやありけん、褄黒浮塵子、金龜子、小蛾の類燈下に聚まり、十二日よりは第二化生の螟蛾點々飛來り、机上の文房具若くは板戸等に産卵せるもありき。

◎九月　此月に到るも猶は夏季の狀態を保續し、概して甚はだしき變調なかりし、但一日より七日まては稍陰鬱に、十一日に微雨ありしも、二十日までは何事も無く、最高二十七八度、最低十六七度の氣温にて經過せり。二十日午前より積雲らしき濃雲現はれ、天候險惡に傾むき、夜半より暴風雨となり、風は暫時にして薄らぎたるも、翌曉に至る間の降雨は二七粍の多量なりき、其後廿四日までは雨無く、此日より廿七日まで細雨若くは曇天となり、人をして聊さか快心を感ぜしめざりき、而して此廿七日は實に本月中の最低氣温を齎らし、攝氏十九度まで低下せり。

◎十月　此月は特に例年の特象を脫れ、雨天がちなりしを以て、往々温暖にして不定の天氣を繼續せり。即はち一日は早朝冷寒に過ぎ、午前は快晴なりしも、午后は薄曇りとなり、二日は早朝より煙霧を罩め終日半ば曇天にして頗ぶる温暖を感じ、午前にキリウジガガンボの飛行を認めり、三日は快晴、四日また同じかりしも、前九時頃より黑雲出現、十一時よりは驟雨を催ふし、終日不定の候を呈せしが、五日よりは頗ぶる不良の兆候をあらはして、東の和風吹き、夜に入り蒸熱甚はだしく最高二十八度を示しき、六日早朝微雨、南西方に流るゝ雲脚迅く、七日は雨となりて特に夕刻より多雨を算し、八日また雨九日朝雨歇みたるも北に向ふの雲脚は頗ぶる早く、軈て前九時過ぐる頃豪雨あり、午后晴天に復しまた大ひに暖氣を感ぜり、此日の雨量は九〇粍なりき、越へて十二日には曇天となり、夜半より雨降る、斯

くて十七日までは陰雨の候を以て持續せり、十八日は風雨激甚よ、十九日は北々東の風さへありて雨なほ歇まず、夜に入り風力は衰へたるも細雨霏々として降下せり、而して此數日間の總雨量は一二十一粍を積算せりき、二十日より廿三日までは快晴若くは晴天を以て通過したるも、廿三日の午后三時頃よりは天候一變、遽かに暖氣加はり黄昏よ至り復舊せり、廿四日過暖、午前八時頃より雲現はれ、未だ二時ならざるよ俄然南の強風となり、更に夜に入れば雨とあれり、廿五日は過半曇天、廿六日は全たく快晴に復し、廿七日も朝は晴を報じたるに、午前十時頃より次第に雲量を增し、夜は遂に雨となれり、廿八日午前に小雨あり、午后雨歇みたれども、暗曇の天候にて夕刻に至り少しく日光を漏せり、廿九日は終日曇天にて、夜の八時頃より小雨とあり、三十日午前九時頃まで降續く、此雨量は三五粍餘と聞へし、斯くて十時頃よりは北の疾風吹起り、少しく日光を見るよ至りしが、夜に入り快晴となり、三十一日には終日の快晴、北の和風を報せり。此くの如く十月は多雨曇天がちにして雨日十九、此雨量二百八十二粍餘、曇天十六日、快晴僅かに五日に過ぎざりき、實に近年に觀ざる稀有の變候と云ふべし。

(備考) 曇天を十六日と算したるが中には暫時小雨ありて曇天なるも、雨曇の兩日よ區別せり。

以上月別を以て、一昨三十三年十二月以來の天候の本順の狀態を失せる概樣を列記せりと雖ども、今亦一目の下に、其變調の主なる期月を明瞭ならしめん爲め、更に之を左に概記すべし。

一、三十三年の十二月より三十四年の一月の間は、冬季の特象を欲き、概れ濕暖に過ぎたり、是れ平年とは大に異なる所ろにして、氣流の緩慢なるに歸因せり。

一、二月上半月は冬季の特象を呈したれども、下半月となるや暖濕の日多く、爲めに蟄伏せる昆蟲類の飛揚せるもあり。

一、三月上半月中は概れ冬季の特象去ることなく、天氣の變化繁しく、寒風吹きて雨雪の降りし日もありしに、下半月となるや冬季の氣象大に去り、氣温頗る高まりて晴天勝なりし、故にモンシロテフなど飛揚しあるを見受けぬ。

一、四五の兩月は矢張此期月の特態を失し、曇雨の日多くして概れ濕暖に過ぎたり。

一、六月上半月中は概して此月の特象を呈せり、即ち濕潤勝にして梅雨の狀態なりしが、中旬に入り氣溫昇昂して晴天持續したれば、所謂カラツユの狀態なりしに、下旬となるや再び陰濕梅雨の天候に復せり。
一、七月上半月も引續き陰鬱濕潤にして、冷に過ぎ本月の特象を失せり、下旬より天氣一變して常態を呈し、大に氣溫を高めたり。
一、八月は七日より十日まで稀有の冷かなる天候ありしも、其他は夏季炎暑の天候を保續して、氣溫は近年に罕なる高度を持續せり。
一、九月は尙ほ夏季の狀態なりしも、例の暴風雨なかりし、依て降雨量の平年に比し、甚だ尠なかりしは又近年に稀有の事なりとす。
一、十月は前月に反し風雨多く、爲めに天氣陰濕に過ぎ、變化頻繁なりし、是れ又此月にありて稀有の天候なりき。

（未完）

◎第五回岐阜縣害蟲驅除講習會員の五分時演説

去四月十日より同月廿九日まで二十日間、岐阜縣主催の第五回岐阜縣害蟲驅除講習會開會中、同講習生のなしたる五分間演説の一斑を左に掲ぐ。茲に收錄せしもの必らずしも秀逸なるに非ず、掲げざるものまた優れるにも非ず、たゞ演說筆記綴の順序を追ふのみ。

（一）農作害蟲の侵襲と其防禦方法

養老郡　兒玉齊治

私の居村は養老郡中の南端で、縣下第一の低地でありますから、數年前までは年々水害を被ふッて居りました、之が爲めに自然的驅除が行はれまして、農作害蟲の侵襲といふても極めて少かでありました……幸か不幸かは知りませんが、然るに縣下三大川分流工事が出來ましてからは、大ひに水害を減じまして稻作も中々豐稔となり、收穫は以前に比して增加致しました、處が害蟲は最好の殖民地を發見した彼の如くに思ふと見ゑまして、近ごろ螟蟲や青蟲が年每に多くなり、昨年の如きは確かに一二割の損害を受けました、此損害に對しても是非之を驅除するの必要を認むるのであります。然るに一般農民の申すには、害蟲の發生するのは、畢竟、神佛の祟であッて、蟲と云ふものは原と時候の爲めに自然に涌くものであるから、驅除をするも無益である、それよりは蟲送りでも致すが宜しいと云ふのです。偖斯かる實況でありますから、之を感化して驅防の必要を知らしめることは餘程困難と思ひますが、之を感化

致すには、唯それ昆蟲の何物たるかを知らしめて、舊來の迷信謬想を破り、斯くて着々歩武を進めて眞正の驅除を行はんければ成らぬと存じます。一体私は職を小學に奉じて居るものでありますが、本年からは取敢へず兒童をして採卵法を實行せしめやうと思ひます、これぞ唯り兒童に昆蟲思想を注入致す計りではありませんで、其父兄をも動かすべき第一の手段かと思ふのである、否子弟にして實地之をなすの日あらば、父兄も大ひに同情を表して、自然の感化を受くるは違ひが無いと信じます、依て此席に於て、豫め誓ひを立てゝ置く次第であります。

（二）吉城郡地方に於ける農家の昆蟲思想

吉城郡　千島清次

私は飛驒國の吉城郡の者でありますが、御承知の通りの僻地で御座ります、さて人間には都鄙と云ふ區別がありますが、農作害蟲となりますと、決して都鄙の區別がありませんで、年々その加害力を增すやうに覺へます。それは私の地方すらも螟蟲や苞蟲は非常の勢ひで、蝕害高は尠少ではありません、尤とも是迄も一文字弄花蝶發生の際には、捕蟲網でもッて驅除致して居りましたが、螟蟲、蚜蟲、枝尺蠖、姫象蟲、金龜子などに成りますと殆んど眼中に置きませんで、特に蚜蟲と參ッた日には蟻の子などと申して、手を束ねて傍觀するのみでありました、それで別段驅除と云ふ事も無く、隨ッて其發生經過のさまを知る者が少なくあッた、一例を申せば蝶と云ふものは小麥の羽化したものであると云ひ、又去る三十年に浮塵子の大發生の時には、是は全たく天狗の仕業だと申して、態々天狗祭りといふをさへ執行した程でありましたから、其他の事は大概御察しが出來る事と存じます。然るに私は今回幸ひにも、本會講習生の末席を瀆しましたので、非常の利益を得て從來少しも解らん事柄まで稍理解し得る事が出來ましたから、歸郡の上は一般農家のため、將たまた本縣のためには十分心力を盡す心得であります。それに致しても蟻の何物たるか、浮塵子の何物たるか、害蟲とは何ンなものか、益蟲とは何ンなものかと云ふ事をすら、是迄存じませんであッた吾が地方の實情が誠とに耻かしい次第であります。

（三）農作害蟲驅除の實驗談

武儀郡　松村菊太郎

去る三十一年來、吾が武儀郡では苗代田の改良を奬勵して居りましたが、唯その拵へ方を長方形に變へさせました計りで格別害蟲驅除を厲行する場合には到りませんでした、依ッて三十三年度に於ては、郡費を支出致しまして、若干の不正三角形捕蟲器を造り、之を見本として各町村に配布しました結果、各農家でも之を造りまして其々驅除を行ふ事となりました、然るに何の爲めか稻苗の葉先が黄色となりま

して丁度枯れたやうに成りました、そこで道理の十分解らぬ農家などは、これおそ害蟲驅除を行ふた爲めに傷めたものであると騷ぎ立ましたから、之がため實行上に一大障害を來たしました。當時此損傷云々に就ては、實は私共も心配致して、或ひは農家の云ふ通り捕蟲網の爲めに傷んだのではあるまいかと半ばは疑ふて居ッたのでありましたが、中には全たく黄變せないものもあるが先づ十中の八九は皆黄色に成りました、聽てその趣むきを本縣廳に報告致しました處が、それはムクゲ蟲の害では無いかとの通知に接しましたから、直ちに檢査を致したるに、如何にも左樣で、全身黑くて極めて小さい蟲が稻の葉先に多く集まッて居ッた、そこで始めて此蟲の害に罹ッた爲めに黄變した事が判明致しました。斯うも原因が解りました以上は洽ねく之を知らすするが宜いと云ふので、廓大鏡で以て各處の當業者に見せました處が、斯かる小さい蟲が全村の苗代に大害を與ふるとは實に恐るべきものである、それにしても害蟲驅除は是非完全に行はんければならぬと云ふ感じを起しました者が多く、それよりは事業の實行上非常の好都合を來たしました。それ只今申す通り、實物に就て研究を遂ぐる時は、小蟲と雖ども大害を釀すが故に、驅除豫防は必らぞ之をなさゞる可からざるの理を會得しまして、之が爲めに其地方の福利を增進するの助けとなります、故に將來は實物を對手に研究の功を累ね、舊來の迷夢を破り、大ひに指導啓發に努むるは、此會員の責任かと存じます、少さか經驗談を述べて、五分時演説の責を塞ぎます。

◎柑橘の害蟲（靜岡縣庵原郡に開設の第十三回農事講習會席上に於て）

靜岡縣農事試驗場技手　岡田忠男

私は本日當郡庵原村の柑橘を調査したる結果、之が害蟲に就て諸君の御注意を願はんければ成らぬ。この害蟲も亦他の農作物のものと同じく怖る可きもので、其驅除には十分意を用ゐんければならぬ。庵原村は土地も當を得て居り、又種類の選擇、手入、施肥、耕耘等は先づ不注意では無いが、一つ柑橘の害蟲に就ては餘程注意するの要がある。私は從來これが蟲害に就ては、左迄に感じて居らなんだが調査の結果實に恐るべきものなることを知ッた、それで其一部に就て説明を致さうと思ふが、備何故に甚いかと云ふに、先づ此害蟲を其儘放任して置かば、此地方の收利に餘程の損失が來る、現に米國や獨逸では其蝕害が甚いと云ふ事で、昨春米國からはマアラットと云ふ博士が其調査の爲めに態々日本へ來たのである。庵原郡の蜜柑を橫濱から米國へもやると見へるが、若し此儘にして置た日には、日本の蜜柑が外國へ賣れないやうに成ッて、日本の蜜柑、否靜岡縣のものが、それだけ賣口が狹くなる、加之今日でも

之が販賣には餘程困ッて居るらしい。申す迄も無く外國へ輸出が少なく成る日には、價ひは非常に安くなるに違ひが無い、故に縣下の一物産たる以上は、農作物に於けると同一の保護を加へんければ成らぬそこで何ンなものが害をするかと云ふと、第一はホシカミキリで、是は方言ケキリと云ふものである、即はち背に白星のある甲蟲で、能く蜜柑の根を嚙ッて卵を生むのであるが、其卵は木の皮を剝いて産附けられ、また皮を被ぶして置くのであるから、鳥渡見ては解らぬ。併し一旦これが孵化すると幼蟲は幹へ食込む、さうすると木が枯れる、故に安部郡麻財村邊りでは、毎年七八月の頃になると、一日に一二回見廻はないと害が多くて困ると云ふて居る。コガネの類にも幹を喰ふのがあるが、未だ調査を遂げませぬ。特に甚い害蟲は貝殼蟲であるが、何故斯ういふかと申せば、下に蟲が居て其上には貝殼を被ッて居る、一目見た處では分らんが、蟲眼鏡で見ると澤山蟲が居る、一枚の葉の上にも五六十疋居るのもある、そして其蟲は大概年中休みなしに樹の液汁を吸取ッて居るから、遂に木は枯れるやうになる、是は葉ばかりに附くでは無く枝にも幹にも實にも附く。加之此蟲には種類が多くあッて、草を除くの外は大概の木に附て、蘭や万年青にまで蕃殖をして居る。斯樣なものでありますから、此蟲が多くなると木が段々に衰へて遂には枯れて了う、夫れ故に獨逸國などでは、嚴令を下して一疋でも附てあるものは一切國内に入れぬ、これは氣候や土地が違ふと害蟲の蕃殖が甚しいから入れないのであるが、現に日本や支那、朝鮮、印度諸島から往く果實も苗木も、一昨年來一切國内に入れぬ事とした。特に前にも言ふた通り、昨年は米國から此郡へも調査員が參ッたやうな具合であるから、速かに之を驅除せんければ將來非常なる影響を及ぼすのであります。

此貝殼蟲は浮塵子や蜈蟲とは事異ッて居る………昆蟲綱の有吻類ではあるが、夫して種類も亦多い、偖當郡のものは背が龜の甲のやうに成り居るため龜甲貝殼蟲と云ふ名であります、一般に就て少しく其習性經過のさまを申すと、毛の如き吻を四本持ッて居ッて、それを皮なり實なりへ衝込み汁を吸取るのであるが、冬は親でも子でも越す、暖かになると段々大きくなッて、種類にもよるが親即はち雌で越したものは五月頃に卵を生み、子で越したものは雄と雌とになる、一体この蟲は雄と雌とは成長の仕方が違ふもので………普通の蟲とは違ふのである、双方卵から生れて二度脫皮をする、雄になるものは一處に寄ッて其處に繭を作る、蜜柑の皮や葉の裏に白い小さなものが澤山附てあるのが即はち皆この雄である一方の雌の方は二脫皮の後に自分の体からゴム質の樣なものを出し、貝殼を作りて其下に潜んで、此處

が適當な塲處だと思ふと其處へ吻を銜入れる、其時には最早觸角もなければ、足も取れて仕舞ふて、其以外には決して動くことが出來ない。兒供の時代迄は鬚が二本と足が六本あッて能く歩くが終に斯うい ふ樣になるのである。そして一年大抵三四回親になるから、春の一疋は年末に數万疋の家族となる譯で實に恐るべき蕃殖であります。

この繭を作ッた雄は蛹となり、次で親となッて雌と生殖作用をなすのであるが、其時には雄には吻が無くなり間もなく死んで了う、僅か一二日の中に、そして雌も貝殼の中に卵を産下して死んで了う。それから生れた子は木一面に擴がッて好な處で生活して居るが、其際に鳥や風や蜘蛛の巣などの爲めに四方に擴まるのである。それで一ッの果園に少しでも發生すると右述べました關係や又は苗木等のために數百里の外へも蕃殖する、であるから銘々注意せんければならぬのである。

然らば之が驅除はと云ふと。左まで困難ではないと思ふ、それは剪枝法を行ふ事であるが、當郡でも志太郡でも安倍郡でも、從來一般に剪枝法を怠ッて居ッたから果物收穫上の利益は勿論、此害蟲驅除の上に最とも必要であッて、これを一つ滿足に行ふ時には必らずや良好の結果が現はれると思ふ、現に私の郷里にも少しの柑橘はあるが、年來貝殼蟲に害せられて結實の不良なりしものが、私が十分に此法を行ふてから害蟲も除けば又生育も立派に成りましたのである。

何故剪枝法に驅除の効があるかと云ふと、此蟲はもと空氣の不流通で、太陽の光線の弱い處若くは直射せぬやうな處に計り必ず居る。その證據には黒ソブの附て居る處、此蟲の附て居る處と云ふと必らず屋敷の隅とか、風通りの惡い塲處である、加之梨でも林檎でも葡萄でも鋏を入れんと良い收穫が無いのであるから蜜柑もその道理で、光線の直射と大氣の流通は必要であるのである。そして之ふ行ふ時期は二月が宜しい、若し枝に蟲が附て居ッた日には成るべく果園より遠くへ持ッて行くのである、葉が枯れば蟲も自然に死んで了うから。唯一つ注意すべき事は、伸過ぎの枝は惜くも之を剪るのであるが、其目的は無用な枝を剪るのであるから其心得が無くては成らぬ。次は鋏の能く切れるものを用ゐんと枝を傷めそれから遂に腐れが入るやうに成る、もし切味が良ければ其患ひが無い、又剪るには根元から切るが宜い、さうすると皮が丸くなッて切跡が塞がるのであります。

然らば黒ソブは如何して附くかと云ふと、是は貝殼蟲や蚜蟲が木に附けば必らず附く、又晴天が續くと葉の上に甘い露が生する、その時にも多く附く。一体黒ソブと云ふものはメリオラ屬の黴で、是が一面

ょ廣がると葉の呼吸が止まり自然と衰弱をする、又子實ょ附くと甘い蜜柑も酸くなるから油斷が出來ない、そして其誘因は貝殼蟲や蚜蟲であると云ふ事は、一般の學者の認めて居る說である。尙ほ貝殼蟲の豫防としては、先づ苗木の買入の時ょ十分注意するが一番で、石油乳劑や其他のもので驅除するのも肝要の事である。右樣の次第であるから、黑ソブを防ぐにも、良い子實を取るょも、害蟲を驅除せんければ成らんが、之を驅除するには先づ剪枝法を嚴行するが捷徑であると信じますから、何卒御實行を願ひたいものと存じます。

◎本邦昆蟲研究家叢話（其五）

古奧　靑蓑白笠の人

◎松岡恕庵先生の奇行　稻生若水氏を師としては、其學派を傳統し、小野蘭山氏の師となりては、遂ょ出藍の聲譽を博取せしめたる偉傑を誰とかなす、恕庵松岡先生こそ實に其人なれ。先生は京都の人、幼にして異質あり、初めは山崎闇齋氏ょ學び、後伊藤仁齋氏の門に遊びて、螢雪の功を積みき。斯くて業成るの後、詩經を講ぜしょ、屢次物名を知らざるに困しみしかば、遂に博物學攻究の念を發し、乃はち稻生氏に就て本草を問へり、これを先生が斯學研鑽の端緖となす。而して將來その如何に闡明に努めたりや、又如何に蓄蘊の深かりしやは、多紀桂山、木村蒹葭諸氏の文ょよりて略ぼ之を伺ひ知るを得べし。先生もと洽覽强識、才氣縱橫、各科の學術に達し、兼て醫を善くし、又國學ょ通せり、最とも本草學に精しく、竟にこれを以て盛名を一時に顯はし、諸國より負笈從學する者、恒ょその敎堂ょ滿てり。享保二年、蕃藷錄を公行して甘藷の卓効多用なるを叙述せり、これを本邦に於ける甘藷記錄の嚆矢となす、後年靑木昆陽氏の甘藷先生の名を得たるも、蓋しこれに得る所ろあるょ因れりと云ふ。六年二月、江戶に抵り幕命を奉じて、藥品を鑑定するもの半歲、七月歸程に上る、幕府その勞を多として、之に黃金十兩を賜はる。その江戶に在るや、或ひは諸友を伴うて地錦抄の著者橐駝師伊藤伊兵衞を染井の莊に訪ひ、又或ひは後進の質疑ょ應答して啓誘開發ょ勉めぬ、後幾ばくもなくして、太田大洲、田村藍水等の名家

を東都に出だしたるは、其感化の功に歸せざるを得ず。十一年、用藥須知前編三冊を上木す、この書稍簡約の嫌ひあるも、當時斯學者の爲めに推重せられ、小野氏の本綱啓蒙また粹を此に拔くものありと。十六年、門人江村氏詩經名物辨解を梓行す、これ先生の學說を經とし、なほその校訂を經て而して後に發刊せしものに係る。延享三年七月十一日終に京都に歿しぬ、行年未だ詳ならず。名は玄達、字は成章、通稱は恕庵、怡顏齋と號しき。門下に良材多く、就中、津島彭水、小野蘭山、江村復所、熊谷玄隨、甲賀敬元の諸氏はその巨擘と稱せらる。

先生は頗ぶる富裕の身なりしかど、華飾を遠ざけ、儉素を以て旨となし、其愛子にすら恒に布袴を穿たしめ、又家人には南天燭の笄を戴かしめぬ、偶々人の絹袴を遺るものあるも、紹ねて之を用ゐることを許さゞりき。去れども典籍に至りては、毎に價の高下を問はず之を購ふの癖ありて、未だ嘗て一たびも吝かなる色を露したる事なかりしと云ふ。邸後に二大庫を造り、その一には國書を藏め、他には漢籍を納れ、老境に迨ぶも、拮据攻學に怠たらざりしかば、益々その學藝を進め、遂に若水、蘭山二氏とゝもに斯學の三祖を以て、併稱せらるゝに至れるなり。

先生は植物の鑑定に長け、梅品、廣參品、蘭品、菌品、苔品等の著あり、また櫻花を愛づるの餘り、櫻品一卷をも草せり。さばれ動物の研究も亦その好める所ろにして、介品、本草一家言、大和本草一家言、本草彙言摘要の如きは、明らかに其蘊奥を知るに足るものあり。特に江村氏をして「蝗ハ螽類中ノ尤ナル者ナルコト明シ、蝗ハ和ニ未的識、何レノ蟲ヲ指テ蝗ニ充ツルコトゾ、異邦ハ水旱ノ外、蝗ノ患ヲナスコト甚シ、和邦此一害ヲ免ル、三代實錄ニ云ヘルモ、蝗類ニ係ルトイヘドモ、直ニ漢邦ノ蝗ニ的シ難キカ、貝原損軒翁ハ實盛蟲ヲ以テ蝗ニ充ツ、未タ的否ヲ知ズ、鄕俗鐘皷ヲ鳴シテ害苗ノ小蟲ヲ除フコトアリ、此亦蝗類ニシテ眞蝗ニハアラズ」と斷論せしめて、古來飛蝗の本邦に加害の少なきを說き、及び浮塵子の支那の所謂蝗なるものと異なる點を擧げたるが如きは、實に敬服の至りにて、前人未發の識見とやいはまし。其他なほ板本として、また寫本として世に傳はるものは、詹々言、用藥須知後續二篇、千金藥編註、日用食用提經、食療正養、結耗錄等數種あり。

先生の奇行に富める事は畸人傳、近世叢語、名醫傳、藝苑叢話等に詳らかなるが、その嘗て物徂徠翁の

病蓐にあるを聞き、これに調藥を贈らんとて「調合進申芎藥湯。生姜一片煎如常。平生食物肝要事。唯許大根與牛蒡」と包紙に戯書したるは、最とも人口に膾炙する所ろとす、以て其性行の異常なるを察すべきなり。

按ずるに。諸書未だ先生の歿年を明記せしものあるを見ず、遺憾といふべし。去れど其經歷を以て逆算する時は、粗ぼ之を推知するに難からじ。すなはち山崎闇齋翁の歿年は天和二年にて、これを先生十歳の頃とすれば、歿年延享三年は七十四歲に當り、その稲生若水翁と共に、泉涌寺の佛桑花を觀覽せしは、三十九歲の時にて、幕命により江戸に往復せしは四十九歲すなはち若水翁の歿後七年の事とす。是れ固より想像の外に出でざるも、其子の絹袴を穿つを戒むる語に「昔し余仁齋に侍せし時、東涯年なほ少し」云々とあれば、天和貞享の間を以て、東涯の十三四の頃と假定せざる可からず、隨うて先生の年歯もまた其左右たらざる可からず。而して此推算に依れば、若水翁に從學せしは、三十歲の頃となるを以て、或ひは疑ひを插むの餘地あるが如きも、こは已に學業の成れる壯年時代なる可ければ、晩しとて咎む可きにはあらずと思はる。そは兎まれ、斯かる名家の事蹟の不明に歸するを惜むの餘り、茲に附記して疑ひを讀者に質す。

◎標本製作用展翅板の構造に就て

在大隅　生熊與一郎

昆蟲標本の調製に當り、最とも必要を感ずるは展翅板なるべし、展翅板には其構造種々ありて、其に甲是乙非の中にあり、一策一失は免かれずと雖とも、要するに自然に適ひ、標本としての体裁を失せずんば事其れにて足れるなり、而して余は昆蟲標本の製作に就き常に遺憾なき能はざりし、そは既成の展翅板に依りて膜翅類、直翅類、双翅類等の標本を造らんとせば、勢ひ肢は殺したる儘になし置くか、若しくは翅の所に肢を擴げざるべからず、斯くする時は一昆蟲に活きたる翅と死したる肢とを附けたる如く、左なくんば胸部の背面より出でたる翅と、腹面より出でたる肢と水平となりて非常に見惡きのみならず種類によりては殆ど標本としての價値なきものさへありたればなり。依りて余は昨年六月一の展翅板を造り試みしに、大に好成績を得たれば茲に紹介せんに、要は從來の展翅板に少しく訂正を加へたるに過ぎず、即ち上圖の如く長さを一尺とし、幅及び高さ等は昆蟲の大小に從ふこととゝせり。今普通の蜂類、中形の蜻蛉等を整翅する展翅板を取りて之を示

さんよ、圖中(イ)を二寸二分(ロ)を七分五厘とし(イ)と(イ)との間を四分(ロ)より(イ)迄の高さを三分(ハ)を四寸八分とし(ハ)より(イ)迄の高さを七分乃至八分位とし尙(ロ)の中央に五厘の間を設け其直下に蜀黍の葉を置きて、留針を止むるよ容易ならしむるなり。此展翅板に據る時は翅は上方即ち(イ)の所に擴げ、翅は一段下りたる(ロ)の所よ整ふることを得て、前記の如く翅肢水平となる等の憂ひなく、從前に比し數等優りたる標本を造り得ふるべし、幸に試作あらん事を。

編者云ふ。展翅板の改良は標本製作に利する所ろ頗ぶる大なれば、競ふて完全のものを考案するやうになしたし、但此圖にある斜面形のものは、早や既に舊式に屬したりとて、歐米の專門家は之を採用せずと云へば、豫じめ知る所ろ無かるべからず。又云ふ、これと同一の形式のものを、昨年四月より開會せる第一回全國昆蟲展覽會へ出品して、褒賞を受けし者あり、生態氏は未だ其事實を知らざるやう見ゆれば、念のために玆に報じ置く。

◎野遊びの唱歌(昆蟲分類)の曲

靜岡縣志太郡　增田秀雄

本誌第五十五號雜錄欄内に載せたる、名和靖先生の改作に係る野遊びの唱歌を、弘く小學生徒よ謳はしめなば、興味と利益とを併せ得るならんかと信じ音樂敎師に該歌を示して之が作曲を囑したるに、ト調二拍子ならば宜しからんとの事にて、上の曲譜を贈らる、これにて善く謳ふに堪へ得るや否やを知らざるも、斯學普及の一策としては、實に快味ある業なれば、同好の士の爲めに之を報ぞ。因よ云ふ、近ごろ唱歌の流行に伴れ、言文一致躰のもの、方言交りのもの、さては筑良文躰のもの等種々世にもてはやさるれど五十年百年後はいざ知らず、今日の處にては、成るべく高雅優麗の句調のものを擇びたし、特に語格を無したるものなどは國文と云ふ點よりも如何かと思はる、今後昆蟲唱歌の作者たらん者は、先づ大ひに其邊に熟考ありたし。蛇足ながら、胸に浮びたる儘こゝに附記す。

(ト調二拍子)

1. 1 1. 2	3. 3 3	5. 5 5. 3	2、0
ノ ヤ マ ノ	カ ス ミ	キ ギ ノ ハ	ナ
や な ぎ の	い さ の	ゆ ら ゆ ら	さ
3. 3 3. 2	1. 2 3	2. 2 3. 2	1.、0
ソ ヲ サ ヘ	ハ レ テ	カ ゼ ニ チ	フ
ま ー れ ぐ	あ た りに	さ り も よ	ぶ
2. 2 2. 2	3. 2 1. 3	5. 5 6. 6	5、0
ハ ル ハ ー	タ ノ シ キ	モ ノ ナ ル	チ
い ざ う ち	つ れ て ー	も ろ さ も	に
3. 3 3. 3	5. 3 2. 1	2. 2 5. 5	1、0:
ワ ケ テ モ	ケ フ ー ノ	ノ ド ケ サ	ヨ
す ー ず ろ	あ ろ き を	こ こ ろ み	ん

◎林檎の綿蟲驅除試驗に就て

山形縣北山村郡 村山榮太郎

東北地方の大害蟲リンゴノワタムシに關しては、種々の驅除法を試みたる結果、世間に知れ渡りたるものにても、凡そ十二三方もあるやに聞けるが、吾が山形縣農事試驗場にては、昨年夏季に燻烟驅除其他の試驗を行ふて良果を得たり、依りて其顚末を報告して、本誌讀者の判定に任せんとす。但其記事は改記するの煩ひを省く爲め、暫らく茲に山形縣農事試驗場害蟲驅除試驗成蹟摘要を抄出すべし。

綿蟲は苹菓栽培家の最も恐るべき害蟲にして、一度蔓延するときは到底之を完全に驅除すること能はず之が爲め結實惡しく、奥羽地方の特產たる苹菓も、年々綿蟲の爲めに其產額を減少するの悲境に陷れり本縣農事試驗場にては昨年以來之れが驅除法に付て反覆試驗を實行し、溫熱若くは瓦斯燻烟驅除法の有効なるを發見せり、其方法は左に述ぶる所の如し。

此驅除を實行せんには、先つ果樹の大さに相當したる袋（袋の製造及之を以て果樹を覆ふの裝置は後條に述ぶ）を作り、被害の果樹を被覆し、火力を以て次第に內部の空氣を溫め、華氏百十五度の溫度に達したる後、二十分間を經過するときは、果樹に無害にして完全に綿蟲を殺滅するを得るなり。（溫度は百二十五度に至るも三十分以內ならば少しも果樹に害を及ぼすことなしと雖も五十分に亘るときは胡桃大の果實にては果面に褐色の汚點を生じ且つ新葉に於て多少の害を及ぼすなり）然れども朝夕外氣の溫度低まり、華氏七十度內外なるときは、强て內部の溫度を百十五度以上に高むるには頗る多量の火力を要し、往々果樹の下枝を燒殺し、然らざるも木綿製の袋に對しては甚だ危險なるが故に、然るときは煙草の粉末を百立方尺に二十匁の割合に燻烟すべし、八十五度以上の溫度にては三十分間の後完全に殺滅するを得るなり。右の方法は綿蟲の蔓延したる場合に於て行ふものにして、幹枝に點々附着するものゝ如きは濃厚の石油乳劑（石油壹升、水五合、洗濯石鹼三十六匁にて製すべし先づ熱湯五合を以て石鹼を溶かし其冷却せざる間に微溫の石油を加へ良く攪拌すれば乳狀を呈す之に壹升乃至壹升五合の水を混じて使用す稀薄なるときは粗皮の裂目空隙等に十分浸潤せずして効少なし）を筆又は刷毛を以て時々被害の局部に塗抹すべし。

溫度又は燻烟にて驅除するには、植物全躰を庇覆し、同時に空氣の交通を遮斷する袋を製造せざるべからず、東置賜郡に於て製造したる袋は、高さ十二尺、直徑十尺の圓筒狀のものにして、唐木綿を用ひ、之に蒟蒻粉を水に浸して良く攪拌し、糊狀を呈するに至りしものを塗抹して空氣の流通を斷ち、其乾燥

したる後、コールターを塗りて日光の透射を遮斷し、之を(第一圖)の如く竹製の輪を連接したるもの丶外圍及上面に張り、恰かも提灯の如く伸縮を自由ならしむ。袋の上面は(第二圖)の如く四本の綱を掛け、其の中央部の交接點を束ねて、外部鳥居形の横木の中央部に連結し、横木の長さは十一尺とし袋の兩端より左右に各五寸の間隔あるか故に、其部分に一個の滑車を附し、之に紐を通し、袋の最下部より連接し、紐の他端を引く時は袋は(第四圖)の如く上部に縮少す、然る後に框と共に袋を果樹の上部に持行き紐を弛むるときは、袋は下りて果樹を覆ふなり。

以上は果樹を被覆する装置の大要に過ぎず、尚不明の點あらば東置賜郡農會に備付のものを實施し、或は本場に問合はさるべし、且つ此装置は外國に於て實施したるものを參酌し、本縣萃菓園に適當する樣改造したるものにして、尚改良を要するの點多く、且つ一層簡易に果樹を被覆するの装置なきに非ざるべし、故に本場に於ては今後尚幾多の研究と實驗とを重ねて、其成蹟を得るに從て報告を怠らざるべし。

◎キリウジ、カガンボの加害

千葉縣下總佐倉町　山田茂

キリウジ、カガンボの幼蟲期に苗田に加害する事は、農家の等しく知る所ろなるが、昨年の如きは、本縣下に於て山武、香取、印旛の各郡に發生し、就中山武郡の如きは被害甚はだしく、稚苗の秧田に倒れしさま誠とに痛はしく感ぜられき。今年も最早その期節となりたれば、農家は之に注意を缺く可からざるは勿論、適宜驅除の方法を講ぜずんば、移植以前に非常の痛苦を感ずることあらん。而して其驅除法には種々あるも、(第一)夜間に點火誘殺を行ない(第二)日中に草間に潜伏せるものを捕殺し(第三)發生地の泥土中に甘藷を埋め置き、之に集まれる幼蟲を捕殺し(第四)發生地に少量の油劑を點注し(第五)發生苗代の水を三四日間排除乾燥の後、急に灌水するは輕便にして農家一般に實行し得べく思はる。

編者云ふ。此原稿には習性經過を詳記せしかど、多くは農作物害蟲篇と同一なるのみか、往々誤記さへ見ゑたれば、茲に其大要のみを收む、なほ本號學說欄にも、詳細の記事を登載したれば參看せよ。

◎土佐産の蟲報（第三）

高知縣土佐郡　武内護文

○毛翅類石蠶科　（一）ドロツトムシ。此種は多く産すと雖ども、被害の狀は未詳に屬す、其此目に屬するものは、小形種に在ては水畔に成蟲を見ること其種類少からず、中形種に於ては稍少く、大形の種類は未だ之を獲ず。

鱗翅類毛翅類附報（俗傳）　胡蝶類の成蟲は俗に之をテフと稱し兒童に示すには之をテフ〳〵と云ふ、其形色の艷美にして、花際徘徊の狀、愛すべきを以て多く童謠に上る、其俗名は多くは黑白紅黃の色彩に由て附せらる。蛾類及び毛翅蛾亦胡蝶に準してテフと稱せらる、而して殊に天蛾類の黃昏花上に飛來するものは、概して之をユフガホベツトウ、ユガモリ或はユフコウモリと稱す。幼蟲は髯蟲類をイラと稱し、烏蠋類をイモムシといふ、天蛾蠋の腹蛇に擬するものは、或地に於ては籬邊のイモムシ化して腹蛇となると唱ふ、尺蠖狀に歩行するものは之をスントリムシといひ、エダシヤクトリは特にエダムシと稱す、苞蟲と葉卷蟲とは之をハマキと稱し螟蟲類は之をスドウシと稱す、カラムシ蛾の幼蟲はヒウジ或はハドムシと稱し、子キリムシをモトキリと稱し、エンドウノキリムシはヨドムシ又はヨムシと稱す。幼蟲は大牛人の厭忌する所なりと雖も、臭梧桐の蠹蟲、天蠶及び疣取蟲は藥効ありと傳ふ。避債蟲は其被蓋を破て之を離脱せしめ、小筺中に紅黃白紫等の小布片と共に之を投入し、美衣を纒はしめて、兒女の愛翫に供せらるゝことあり。蛹の土中より出つるものはニシドチと稱し、時に小兒の笑翫に供す。

○脈翅類擧尾蟲科　（一）シリアゲムシ。（二）アカシリアゲムシ。此科に屬するものは以上の二種なるを知る、（一）は海岸を距ること北方約四里餘の山中の溪畔に多く、（二）は更に其より深山の地に産するもの多し。

○長角蜻蛉科　（一）ツノトンボ。此一種を産するを知る、而して全縣下に普通なり。

○蛟蜻蛉科　（一）ウスバカゲロフ。（二）オホバカゲロフ。此二種を産するを知るも、其産數は甚だ多からざるもの丶如し、晝間は之を見ること難し。

○草蜻蛉科　（一）クサカゲロフ。林間に普通なり、其産數亦多し、其他猶ほ數種を産するを見る、他

日擬草蜻蛉科と特徵の區別を明にせば、各種に就て形狀色彩を詳報すべし。

○長頸蜻蛉科　（一）クビナガカゲロフ。夏日山野に林間に或は叢間に棲止するを見るも、其產數多きを認めず、未だ他種あるを知らず。

此目に屬するものは之を產すること其種類至て少く、擬蟷螂科及び黑條蜻蛉科のものは未だ一種をも發見せず、向來更に山川の踏査を重ね、異種を獲取することあらば時に隨て細報すべし。

◎淡路三原郡の昆蟲方言

第七回全國害蟲驅除講習修業生　兵庫縣　中　野　壽　郎

吾が兵庫縣は其面積廣濶なるを以て、各地に於ける昆蟲の稱呼相同じからず、其中淡路國に隷する三原郡のものを摘錄すれば、左の如きものあり。

竹蝨をキラリ、ゴリ●瓢蟲をサルムシ●螟蟲をドウムシ、サシムシ、シンムシ●金龜子をブイ〳〵●田鼈をガタラ、ガヘルノシリヌキ●負子をハヂシラズ●促織をチンメ、ハタオリ●螳螂をホトケウマ●夜盜蟲をサイゾウムシ●擊蝨類をハタト●貝殼蟲をカサベタ●稻螟蛉をホウジヨ●夏蟬をコセミ●龍蝨類の幼蟲をヤマメムシ●蝦魚コホロギをカマゴ●青肌蜻蛉をオナツ●青羽衣をヒヨコ●キリウジカガンボをヒトリムシ●蓑衣蟲をニノムシ●蜻蛉をドンボ●椿象類をガイダ●サルハムシをコガ子、ナゴタレ●螢をホータロ●尺蠖をスントリムシ●毛蟲類をヒゲムシ●米牛をツノジ●田鼈の卵塊をイナゴ●蝨の卵をケガシ●蛹をニシドツチ●螵蛸をジヤフン、ジヤフグリ●豉蟲をゴマヽヒ●獨角仙の幼蟲をニユドウムシ●蝶蛾類をテフテフ。

◎浮塵子螟蟲調査要領（續）

島根縣農事試驗塲　田　中　房　太　郎

前揭の第一化期螟蛾燈火誘殺表に次ぎ、更に第二化期に於ける、燈火誘殺表を揭ぐれば左表の如し。

月　日	溫度（平均）最高	最低	午前十時	殺蛾數
自八月十日至同十四日	三二、八	二六、二	三〇、三	二八
自同十五日至十九日	三二、三	二五、四	二九、七	一〇
自同二十日至同廿四日	三〇、六	二二、一	二七、五	一二
自同廿五日至同廿九日	三一、四	二五、〇	二八、六	八
自同三十日至九月三日	三〇、三	二五、〇	二七、三	二二
自同四日至同八日	三一、二	二六、五	二八、一	四三
自同九日至同十三日	二八、三	二二、三	二五、八	一〇
自同十四日至同十八日	二五、一	二六、二	二三、二	一
合計日數四十日				三四四

（參考）一化期中六月下旬、二化期中八月下旬に於て來蛾數の頓に減少せしは晴夜明月なりしに由る。

前表によれば、第一期に於ける螟蟲の出蛾最も多きは六月七日より同廿一日まで、即ち十五日間にして温度は最高二十五度乃至二十九度、最低十五度乃至二十度、午前十時の氣温は二十四度内外なり、概して温度高くして持續する氣候之に適するもの丶如し。第二期にありては八月十日より發顯して順次其數を増し、八月廿日乃至二十四日の間は最も多く、九月十八日に至りて全く來らず、温度は最高三十度内外、最低二十五度の氣候にして第一期と仝しく高温なり。之を要するに螟蛾の出現最も多かりしは、第一期に於ては六月中旬を中心として、其前後即ち當地方の移植前、第二期に於ては八月中旬にして、中稻の抽穗晩稻の孕穗中なり。

○第三、螟蛾捕獲時期試驗　本試驗の目的は苗代田に於て、三角形捕蟲網を以て螟蛾を捕獲するに、如何なる時刻が最も容易にして、効力多きやを研究せんとするに在りて、苗代面積は四坪を以て之に充つ、其成績は左表の如し。

月日	午前六時 捕蛾總數	午前六時 捕蛾 雌	午前六時 捕蛾 雄	正午十二時 捕蛾總數	正午十二時 捕蛾 雌	正午十二時 捕蛾 雄	午後五時 捕蛾總數	午後五時 捕蛾 雌	午後五時 捕蛾 雄
六月十二日	―	―	―	一四	一三	一	一〇	一〇	―
六月十三日	四	三	一	四	四	―	四	四	―
六月十四日	一一	九	二	一一	一一	―	一四	一四	―
六月十五日	一	一	―	八	六	二	六	二	四
六月十六日	一六	一五	一	二	二	―	九	九	―
六月十七日	六	五	一	七	五	二	一四	九	五
六月十八日	一	一	―	四	四	―	四	四	―
六月十九日	六	四	二	八	五	三	七	二	五
六月二十日	一二	九	三	一五	八	七	八	三	五
六月廿一日	二四	一一	一三	六	一	五	二四	八	一六
六月廿二日	四	一	三	一三	四	九	一七	七	一〇
六月廿三日	二	二	―	一二	八	四	一四	五	九
計日數十二日	八七	六一	二六	一〇四	七一	三三	一三一	七七	五四

上表を以て之を見れは、午後五時區最も多獲にして、正午十二時之に次き、午前六時最も少し、されど其差異僅少なるを以て、唯壹回の試驗を以て茲に其優劣を批判し難し、尤も午前六時迄は朝露未だ乾かず、網の使用に便ならざるは爭ふべからざる事實にして、且蛾は動作純く容易に飛び出さゞるの傾あり。

○第四、稻の收獲時期に於ける螟蟲が莖中に潜伏する位置　稻の收穫時期に際し、莖中に潜伏する螟蟲の位置を知るは、該蟲の驅除上甚だ必要なるを認め、本年十一月八日「日の出」一種の被害莖を刈撿し、蟲數七十八疋に就て調査せしに、最も上部

なるは根際（即ち根基部）より一尺四寸一分、最も下部なるは同一寸三分の位置に蟄居し、平均六寸一分七厘九の位置に相當せり、乃ち調査の結果を擧ぐれば左表の如し。

蝕入高低表

頭數	位置
一	一、三
三	一、五
一	一、六
二	二、〇
一	二、一
一	二、二
二	三、〇
一	三、一
二	三、二
二	三、五
一	四、〇
一	四、二
一	四、四
五	四、五
一	四、七
一	四、九
三	五、〇
一	五、二
一	五、三
四	五、五
二	五、六
一	五、八
五	六、〇
二	六、五
三	六、六
六	七、〇
一	七、三
三	七、五
三	八、〇
一	八、五
三	九、〇
一	九、二
四	九、五
二	一〇、〇
一	一〇、五
一	一〇、七
一	一三、〇
二	一三、〇
一	一四、一
合計／七十八頭	
平均	六寸一分七厘九毛

前表よりて之を觀れば、第二化期の螟蟲加害の稻藁は、可成低刈をなして之を燒殺し、又は廐肥等に混じ十分腐敗せしむるを良しとす。（完）

◎三重縣農會の警告

第八回全國害蟲驅除講習修業生　三重縣　西岡嘉十郎

三重縣廳よては、去る三月二十二日よ、縣令第十七號を以て、改良苗代の實行方を命じたりしが、今また古莊縣農會長より、左の意味の警告を發したり。

本縣下稻田の害蟲發生ば頻年夥しく、之れが驅除豫防に要する費用と、被害の損失實に幾十萬圓の巨額に達せんとす、今にして相當の處置をなすにあらずんば、途に如何なる慘狀を呈するや測り難し、凡そ害蟲の驅除豫防は、發生の初期蔓延未だ甚しからざるに先ち行ふにあらざれば、其効を完ふする能はざるを以て、苗代期中之を撲滅し、災害を未然に防ぐより急なるはなし、而して苗代を改良して短冊形とするは、啻に害蟲驅除のみならず、播種施肥を始め病苗雜草等の芟除に於ても頗る便利なる可し、本會は茲に鑑み改良苗代を縣下擧りて實行の義務あるものとし、曩に總會の決議を經て知事に建議する所ありしに、幸に之れを採容せられ、去月二十二日縣令第十七號の發布を見るに至れり、斯の如きは一般當業者の懈怠に基因し從來改良苗代の利益を知りつゝも、僅かの勞力と出費を吝み、普く實行せざるの結果にして、我が農界の不面目たるを免れずと雖も、亦已むを得ざる事なりと信ず、故に此際各級農會は協力一致克く當業者を督勵して、苗代の改良と害蟲の驅除を遺憾なく實行せしめ、縣令發布の趣旨を徹底せしむる樣特に盡瘁あらん事を切至の望りに不堪。云々

◎農作害蟲豫防驅除後の處分　千葉縣長生郡　高橋徹一

吾が千葉縣長生郡鶴枝村農會にては、近年農作害蟲の蔓延夥たゞしきを憂ひ、之を豫防する爲め、本年一月農閑の時を利用して、畦畔原野の雜草を燒拂ひたるが、其際無數の害蟲を捕獲し、之を一函に盛り左の文句を添へて、參考品として郡農會に送れり。

越年の害蟲　アラ恐ろしや〳〵、今般村の蟲驅りに、田のあぜ芝地へ火を掛けて、殺した數は數千萬、逃ぐる葉武者を生捕りて、鶴枝の里から遥々と、郡農會へと擔ぎ出し、諸君の御目玉喰せた上、再び被害の出來ぬ樣、程遠からぬ太平洋、水葬禮でサラリ〳〵。村の田畑で稻穗や麥穗。食はろゝ何ンとしょう。豫防なさいよ蟲の害。反步で四斗ストライキ。さりとはつらい子。

◎愛知縣渥美郡昆蟲研究會總會　愛知縣三河國　渥美郡昆蟲研究會

本月四日を以て本會總會を豊橋町に開會し、事務會計報告を終へ、次に左記の議題に就て協量し、次に役員の改撰を行ひたるに、會長には山田正氏、副會長には宮林桂次郎氏何れも再撰せられ、第一部長には小柳廣三郎(新)第二部長には彥坂利作(再)第三部長には高橋譽四郎(再)第四部長には間瀬半助(新)の四氏當選せり、夫れより名和昆蟲研究所長名和靖氏の有益なる講話ありて散會せしが、當日は意外に會衆多く盛會を致せり、昨今現在の會員は各部を通じて六十四名なるが、外になほ轉任等のために休會中の者十九名あり。

一、明治卅五年度豫算の件。(異議なく原案に可決す)
二、明治卅四年度決算報告。(これまた決算を認定す)
三、明治卅六年の大博覽會出品に關する件。(分類標本及び昆蟲分布圖を調製する事に決す)
四、改正害蟲驅除豫防規則に對する件。(害蟲の發生を調査して豫報を發し、常に小學生徒をして注意せしむる事に決す)
五、町村昆蟲講習會開設の件。(町村農會の請求あり次第之を開設する事に決す)

◎兵庫縣の害蟲に關する取締方法　兵庫縣明石郡　井上藤太郎

本縣は農作害蟲のため、屢次大害を被ふりしを以て、服部縣知事は去月五日左の縣令を發布し、更に農商務省の認可を經て、害蟲驅除豫防規則をも改正したるが、新則規定の蟲種は七種にて、螟蟲、浮塵子、

椿象、苞蟲、螟蛉、桑蛄蟖、桑尺蠖とす。而して其方法は從前に比し一層嚴密にしたるものにて、都合十六ヶ條より成り、驅除豫防報告表式をも併せ示し置けり。

兵庫縣令第二十三號　本年稻田畑ニ於テ稻螟蟲及浮塵子發生ノ虞アルヲ以テ、該田畑ノ作人ハ左ノ通リ、其驅除豫防ヲ行フ可シ。

一、稻苗代ニ於テ三回(津名郡三原郡ハ五回)以上、移植田ニ於テ二回以上、螟卵採取ヲ行フ可シ。

二、稻苗代ニ於テ二回以上、注油驅除ヲ行フベシ。

三、前各項市町村ノ施行日割ハ、郡市長ノ定ムル所ニ依ル可シ。

四、稻苗代ハ壹反歩三個(百坪未滿ハ壹個トス)ノ割合ヲ以テ誘蛾燈ヲ裝置シ、播種後十五日ヨリ移植ヲ終ル迄ノ間、每夜點火シテ螟蛾ヲ誘殺ス可シ。

◎昆蟲に關する葉書通信　(第二十二報)

(一〇九)蟲類に關する迷信(横濱市神奈川町、小泉和雄)　古來言傳へたる數々の迷信中、蟲類に關するもの丶みを報ぞれば(壹)尺蠖の爲めに身體の尺を度らるれば、其人は死す。(二)優曇華の咲く事あれば、其家には必らず凶事あり。(三)女子もし吉丁蟲の雄を守袋に入れ置く時には、新衣を得べし。抔云へり、其他鼠婦が出づれば來客ありとか、蚯蚓に溺をすれば、身体に異常ありとか、蛇の蛻皮を密かに貯置けば、幸福が來るとか、青蛙は治肺の奇劑とかなぞ數へ來れば屈指に遑なし。

(一一〇)三月捕獲の蝶種(宮崎縣農事試驗場、竹井繁滿)　當地に於て去る三月中に採集せる昆蟲の中蝶種のみを擧くれは、概むね左記の如し。

鳳蝶●紋黃蝶●スヂクロ蝶●ツマキ蝶●紋白テフ●キテフ●山キテフ●オホハヤバ●アカタテハ●ルリタテハ●雌黑豹紋蝶●ベニシヾミ●姬アカタテハ●ヤマトシヾミ●シヾミテフ●アカシヾミ●Cyrestis thyodamas, Boisd.等。

(一一一)螢狩の童謠(岩手縣氣仙郡、鳥羽源藏)　當地方に於ける螢狩の童謠には、優勝劣敗常ならざる生物界の現象を、巧みに述べ盡して、最も面白き節あり、曰く『螢よ螢、空に揚れば夜鷹(蝙蝠のこと)に吞まれ、地上に降れば蛙に吸はる、寧ろ煙草の露を嘗め、露を嘗め』これ實は義譯なり、依りて更に方言もて之を直寫すれば。

ほたーる、ほたる、天上に、あーがれば、夜露に、のーまれる、しッたい、さーがれば、びッきに、すーわれる、たンばこ、ばだきの、露のーめ、露のーめ。

（一一二）蟲骨牌の調製を望む（島根縣農事試驗場、田中房太郎）　昆蟲世界誌上にて、蟲合せの答案を見、至極面白く感ぜり、願くは彩色の蟲畵として之を骨牌に仕立て、兒童の翫弄に供せしめたし、斯學思想の養成には、尤とも屈強の幇助たる可しと信ぞればなり。

（一一三）昆蟲よみ込の駄句（石川縣石川郡、高田信八）　またく駄句二ッ三ッを、葉書に托して。

蟬と鳴き螢とこがれ世は憂しや」　地藏尊の頭のあたり蜻蛉とぶ」　うない子の袖もれて浮ぶ螢哉」　夜に入りて蜂の巣を見る手燭哉」

◎ヤマキテフに就き質問

山梨縣北巨摩郡新富村　溝口登

本年三月十六日、昆蟲採集の際に、竹林中に於て別封の如き黄蝶を捕獲せりと雖ども、其が名稱、經過及び加害植物等不明のため困却せり、委細垂敎ありたし。

答　名和昆蟲研究所調査主任　名和梅吉

現蟲を見るに、蝶類中粉蝶科に屬するものにて、ヤマキテフ（Gonopteryx rhamni, L.）と稱するものなり。該蝶は一年一回の發生にて、七八月頃現出し、冬季は成蟲の儘越年し、翌春三四月の頃現はれて蕃殖をはかる。其幼蟲は鼠李科植物のクロウメモドキ（Rhamnus japonicus, Maxim.）に生じ、其葉を食害して成育するものとす。

因に云ふ。ヤマキテフは躰長七分、翅の開張二寸三分内外にして、前翅の翅尖及び後翅の外緣の中央は著しく尖れり。雌雄は其色彩を異にし、雄は濃黄色を、雌蟲は淡黄白色を帶ぶ。而して春季に現はるゝものは概むね褪色を常とするが故に、夏秋の候に採集するものとは殆んど別種の如きの觀あり。

◎螟蟲驅除法に就き質問

宮城縣名取郡舘腰村　堀内英力

昆蟲世界第五十二號（昨年十二月發刊）の學說欄內『小貫氏の螟蟲驅除方針論を讀む』てふ文中に『……這は是れ遠く二十年前に、農務局が全國に公布して、遂に不可行聲裡に葬ふられたる一の迂策たるに非ぞや』云々とあり、然らば藁稈密藏說は近來、農事試驗場の考案に出でしものに非ざるか。又此頃頻りに議論ある藁稈熱殺法は、何人の創意實驗によりて擴まりしものか、螟蟲驅除の諸方法說明の際の參考として、斯學發達史料調査の結果を承まりたし、成るべくは其淵源をも示教を乞ひたし。

答

名和昆蟲研究所內　永澤小兵衛

右質問の要項につきては、必ずや何らか據る所ろあるなる可し、去れど余は起艸者の意中を知悉せざれば茲に明言し難し。詳言ずれば、此種の質問に對して、露骨に答ふる如き愚者は、恐らく今日の本邦にはあるまじ、蓋し正答を與へんと欲せば、勢ひ小貫信太郎氏は論なく、其他幾多の知人の名譽を殺がさる可からざればなり。問者其心して暫らく堪忍するが却て華ある可し、答へぬはられにも增さる華かと思はる。

（參考）明治維新以來、螟害を認めて、中央政府より吏員を派遣せしは、同十年の事にて、青森縣の津輕郡は其發生地たりき、時の調査主任は勸農局屬鳴門義民氏なりしが、翌年また九州にその害發りしかば、氏は福岡熊本二縣は固より、遠く薩日の邊までも巡廻して、精しく調査を遂げたる結果、緻密なる復命書を呈出せり。すなはち螟蟲驅除豫防法を上中下の三策に分ち、藁稈密藏法も幼蟲熱殺法も皆これを記述し、なほ當時早已に二化生のものと三化生のものとの二種ある事をも言明せり。恐らくはこれぞ、本邦に於て驅除豫防法を講せるの嚆矢にて、小貫氏の說も將た中川氏の學術試驗說も、皆これらに基因せしものならんか。尤とも其後三年目に出版せる、練木喜三氏の螟蟲圖解には、二化三化の兩者を混同したれど、これとても已に密藏說を示し置けり。故に此等の來歷より言ふ時は、現今流行說の新說として驚くべきものならぬは勿論、實際は西原試驗場にても、未だ正式の密藏試驗を行はずと言へば、左まで重きを置くの價値なかる可し。終始默せんとは思ひしかど、折角の質疑なれば、左に鳴門氏復命の一節を錄して、問者の參考とせん。

第三、刈株は採集乾燥してより土を掃ひ落し燒て、其灰を肥料にするか、或は耕肥等となすとき地表に掻き出さゞる樣、田中の處々に穴を穿て深く埋むべし。

第四、五月中旬後に用ゐる必需の藁は、之を蒸て乾かし置くか、或は其蟲を打潰し置くか、或は倉庫等に入れ蛾の出ざる樣、八月迄密閉し、戸隙等を目塗りなし置くべし。云々

◎昆蟲月令（第五月）

此月に配すべき昆蟲記事は、概むね下に列擧するが如し。

○氣候　舊暦四月の節にて、晝間は夜間に比し、凡そ三時間乃至四時間半の長きに至る。此月の三日は八十八夜、六日は立夏、二十二日は小滿に移り、温冷頗ぶる身に適す◎內地の平均溫度は、十九度乃至十二度を昇降し、東京は十七度弱、京都は十六度强を示す◎濕度は概して前月に勝り、雪雨の日數は、一部を除くの外は、却つて稍少なし◎暖地は上半月に終霜を見るも、寒地に於ては始めて終雪を報すべし◎時々强風襲ひ來りて茶桑の新芽を害し、又霜雪のために果木、葉樹を害せらるゝことあり◎百花殆んど盡きて新綠杜鵑の候に入る。

○蟲類　養蠶地にては晩くも此月の初旬までに掃立をなす、隨うて桑樹の諸害蟲も漸やく發生すれば內外の注意肝要なり◎桑の害蟲の中、とりわけ毛蟲類、葉蟲類、尺蠖類は幼芽を害す。又地方によりては、桑の心蟲の害を心附かで、霜害と誤解するもあれども霜害なれば一圓黑變し、蟲害は局部に止まるを以て、判然と區別し得べし◎切蛆蚊姥の幼蟲苗代田及び麥田の稚苗を害す、適宜驅防を施こすべし◎黑髭蟲も苗田に發生加害し、苗の葉端を黃變せしむることあり、速かに藥劑驅除又は刈取驅除を行ふべし◎大豆發芽の頃小甲蟲類加害して生長を妨たぐる時は、藥劑又は捕蟲網にて驅除すべし◎前月に引續き浮塵子、地蠶、竹蝨、鋸蜂、偽瓢蟲、大浮塵子、象鼻蟲、蝗螽等に注意し特に苗代田と蔬園の被害如何を監視すべし◎山林の害蟲、果樹の寄生蟲類にその數を增すべし、貝殼蟲、梅毛蟲、松毛蟲、天牛等を驅除するに怠たる可からず、又寒地なれば綿蟲、黑毛蟲の發生盛んなる可し、何れも地方適切の方法を速かに用ゆべし◎螟蟲蛹に化し、軈で羽化產卵すべし、便宜共同驅除を行ふべし◎苗代田に於ては、少くとも三四回は捕蟲網等にて、諸蟲を捕掬すべし◎益蟲、益鳥はもとより、蛇蛙、蝙蝠の類を保護して、天然驅除をなさしむべし◎昆蟲標本の製作に益々忙殺せらるゝに至る可ければ、採收物は成るべく其日に處分すべく、又黴菌と蟲類の害を豫防するやう、藥品を新たにすべし◎床下、下水その他不潔の處を掃除して、衞生上の害蟲の發生を妨たぐべし◎麥蛾の產卵ある可ければ注意すべく、收穫後は數日間烈日に曝して之を死滅せしむる等の心掛あるべし、又種子用のものは、直ちに鹽水選を行ふて、蟲害に罹らぬやう保存すべし◎桃子、梨子の墜落せしものは決して打捨て置かず、便宜處分すへ

（黑ムクゲムシ）

I

し、又果樹の害蟲も、漸次加害すべければ注意すべし◎昆蟲學研究者は成るべく春生種を多集して、夏秋生種との比較研究用に充てなば非常の利益あるべし◎其他は概ね前月記載の事項と同じ。

○舊説　此月に激怒して、心を傷ぶる事あれば、秋に至りて必らず瘧をうれふと云へり◎佛家にては此月より解夏をはじむ、これ蟲類其他の生物を傷らざらんが爲めなりと◎禮記の月令には、立夏の三候の中に、螻蟈鳴とあり◎明治十七年までは、本邦の暦本にも、小滿の氣の項に、蠶起食桑など、記し置けり。

○雜事　此月より昆蟲發生豫報を傳へて、害蟲加害その他の警戒を與へなば、一般の利益最とも多からん◎農桑業多忙のため動もすれば驅除に怠たるの風あり、去れど此月の中に、内外の害蟲に對する準備を缺かば、其年は絶えず蟲害を被ふると知るべし◎耕作の際には、煩を厭はず捕蟲と云へる心掛を忘却せざるやう、家人奴婢にも諭し置くべし。

◎蟲塚保存の擧に就て

全國に散在する蟲塚保存の爲め、其保存義金を募集せしことは、讀者の既に知らるゝ所なるが、右は斯學界の美擧なりとて、今に至るも猶ほ續々應募の同志あり、特に近頃長野縣と福井縣とに於て新たに此種のものを發見せしやにも傳へ聞きたれは、是迄の金員にては分配額も多からざるにより、旁々來る七月まで繼續募集をなすことゝなせり、去れば此際本誌愛讀者の奮つて加盟贊同の意を表せられんことを望むと共に未だ世人に知られざる蟲塚の所在地を急速報道せられん事を祈る。茲に載せたるは、宮城縣磐城國伊具郡大張村にある蟲塚にて、第七回全國害蟲驅除講習修業生棟方儀比郎氏が、遠路同地へ出張の上、石摺となしたるものゝ縮寫圖なり。

寛延四未天
虫害供養
十月廿一日

南　丸森　七右衛門
門三郎
八之丞
從是西は　だて通
正之丞
林兵衛
東かくだ

(だては伊達郡、かくだは角田町)

◎第十二回全國害蟲驅除講習會

本月十五日より二週間當昆蟲研究所内に開會の同會は、頗ぶる咄嗟の間に成立せしに關はらず、約二十府縣よりの申込人員は五十名以上もありて、又々豫定人員よりは超過せりと、次號にてその詳細を報道することゝせん。

◎第五回岐阜縣害蟲驅除講習會

既記の同會は會員三十三名ありしが、或ひは伊吹山への旅行採集に、或ひは晝夜の講學に堪へ得て、好良の成績を擧げ、去月廿九日午后三時を以てその閉講式と修學證書授與式とを兼行へり、當日は川路岐阜縣知事不在に付、代理笠井書記官臨場の上、講師名和靖

氏の申告によりて修業證書を授與し、且つ告諭を述べ、次ゝ名和講師の訓戒あり、次に修業生總代松村菊太郎氏の答辭ありて散會せしが、津田稻葉郡長、大野縣勸業委員も亦臨席したりき。此日別室ゝは講習生の成績物を陳列して衆覽に供し、又一同よりは冗費を節約したればとて、岐阜縣昆蟲學會經費、蟲塚保存費及び名和昆蟲研究所備附書籍費等の寄附ありき。但し其書籍は永く紀念となるべき性質のものを擇ぶゝ決し、取敢へず四種だけは之を購入せしも、殘部は目下照會中なれば、次號に於て之を披露する事となしぬ。倩今回の修業生の氏名を擧ぐれば左の如し。

（△印ハ補欠にして◎印ハ退會者なり）

組別	郡市	町村	職業	役名	氏名	生年月	履歷摘要
第一組	吉城郡	阿曾布村	農	組長	△和仁鐵三	明治十二年十月	尋常高等小學校卒業
	稻葉郡	三里村	同		安田千代松	明治十五年一月	同上、農事講習修業
	海津郡	大江村	同		△安藤則太郎	明治十五年一月	同上、中學校二年間在學
	羽島郡	中屋村	同		松尾喜八	明治十三年一月	尋常高等小學校卒業、農事講習修業
	羽島郡	松枝村	同		岩越富三	明治十五年三月	同上、同上
第二組	海津郡	高須町	同		中西鎌太郎	明治十四年九月	尋常高等小學校卒業
	海津郡	大江村	小學准教員		鈴木喜代治	同十三年七月	同上、海津郡昆蟲學講習修得
	養老郡	池邊村	小學校教員	組長	兒玉齊治	同十年八月	同上、師範學校乙種講習科修了
	養老郡	日吉村	農		佐藤喜一郎	同十三年八月	同上、農事講習修業
第三組	不破郡	荒崎村	同		柳江清之助	明治十五年一月	農事講習修業、不破郡害蟲驅除講習修業
	不破郡	荒崎村	郡役所雇	組長	廣瀨頁藏	同十三年二月	中學校四年間在學
	安八郡	三城村	農		◎殘馬桑次郎	明治十年二月	尋常科小學校卒業
	同	南杭瀨村	同		◎奥田精一	同七年二月	尋常高等小學校卒業
第四組	揖斐郡	豐木村	同	組長	所喜久	文久二年十二月	村役場收入役、村會議員、西部水利組合會議員
	同	富秋村	同		稻川莊治	明治十五年五月	高等小學校卒業、農事講習修業
	本巢郡	合渡村	同		鷲見操	同十年九月	要塞砲兵射擊學校卒業、豫備陸軍砲兵軍曹
	同	山添村	同		青木榮	同十五年一月	中學校二年間在學
第五組	山縣郡	春近村	村役場書記	組長	武藤百太郎	明治六年一月	山縣郡役所雇、岐阜稅務署雇、春近村收入役
	同	保戸島村	農		櫻井宗市	同十三年七月	高等小學校卒業、村役場雇、郡役所雇
	武儀郡	富野村	郡書記	級長	松村菊太郎	同五年九月	高等小學校卒業
	同	東武藝村	農		藤井安吉	同十三年十月	同上、農事講習修業

組	郡	村	職業	役	氏名	生年月	學歴
第六組	惠那郡	坂下村	農		△西尾助五郎	明治十年七月	東京交友學校中學科卒業
	郡上郡	奥明方村	同		正儀原治郎左衛門	同十五年三月	高等小學校卒業、養蠶飼育講習科修業
	加茂郡	和知村	同		長瀬白	同十三年九月	同上、農事講習修業
	同郡	西白川村	同	組長	島崎庄左衛門	同元年三月	同上
第七組	可兒郡	小泉村	小泉村助役	組長	柴田源太郡	明治三年二月	尋常小學校卒業、村役場書記
	同郡	伏見村	農		吉田與三郎	同十四年七月	高等小學校卒業
	土岐郡	肥田村	同		小栗木六	同十二年四月	同上、農事講習修業
	同郡	餘戸村	同		◎河野力三	同十三年八月	同上
第八組	海津郡	大江村	同		△鷲野八三郎	明治十一年五月	中學校二年間在學
	惠那郡	苗木町	同		小川鎌次郎	同十五年四月	高等小學校卒業、農事講習修業
	養老郡	上多度村	同	組長	△栗田幸三	同九年十月	中學校一ヶ年在學
	揖斐郡	池田村	同		△原齋治	同十一年三月	高等小學校卒業
第九組	益田郡	萩原町	農事巡回教師	副級長	◎近森熊次郎		農業補習學校訓導
	本巣郡	穗積村	農		△廣瀬亮	同十五年四月	尋常高等小學校卒業、農事講習修業
	吉城郡	神川村	同	組長	下休場正一	同十五年三月	同上、農事講習修業
	同郡	小鷹利村	同		千島淸次	同十三年十二月	同上、農事講習修業

◎岐阜縣昆蟲學會春季総會　去月廿九日午後四時より之を當昆蟲研究所内に開きしに、會衆は無慮五十餘名にて、最初に幹事村井正元氏の事務報告、同高橋貫一氏の會計報告あり、副會長名和靖氏の冬季昆蟲展覽會殘務處分の件並びに內國大博覽會へ標本出品の件に關する一場の演說あり、次に幹事澤小兵衞氏よりは會員特別待遇並びに機關報に關する注意談あり、次に特別會員大野本十郎、會員小竹浩、仝江𥔎貞三郎、仝後藤宇三郎、仝松村菊太郎の諸氏其他の談話あり、次に特別會員推選の件等をも協定して同六時頃散會したるが、なほ冬季昆蟲展覽會賞褒狀及び物品も最早出來したれば、近々發送の手續に及ぶ都合なりと。

◎諸國の蟲送り　（其三）頃は六月の初旬にて稻苗の移植已に終へ、一番除草も粗ぼ終り、漸やく暑氣に向ふて、蟲害の將に起らんとする色ある際、村老相會して一應の協議を遂げ、其議纏まれば、翌日よりは、父老內にありて酒宴の準備をなし、少壯者は飾物、蟲人形等を造るに忙はし、其式樣は神輿

大名の行列の摸倣なるも、其器具に乏しきより或ひは摸造し或ひは假用して、各々一時の喝采を博取するゝ努むるが如し。斯くて準備の成るや、午前十一時頃より、小蟲を携さへ、大小旗を押立、鐘皷を敲き、喧騷をなしつゝ田畔を巡回し、各自の水口ゝは小蟲を据附く。その式の終りて家に歸るは、午後なるが、これよりは酒宴を催ふし、三時頃より村内を繰行く、其樣は少年はダシを押立てゝ前驅し、次ゝ大蟲を負ひて進み、次に人形數十個を擔ひ、太刀振等八人許り之に續ぎ、槍隊銃隊十五六人二列となりて其後ゝ進み、次に五六の壯强者飾物を擔ぎ、次ゝ傘の前ゝ騎馬武者あり、衰瘠の老馬にオホアシを附け、これに其顏を彩どれる人を乘す、次に醉歩蹣跚たる父老どもの愉快氣に鐘皷笛は申すゝ愚か石油罐、さては空樽などを亂打しながら引續くあり、次に扮裝せる老幼男女の敗れイビを結び尾をつけたるものを着たるが、兩三人網を曳く、此行列中は觀る者も觀らるゝ者も中々の騷ぎなるが、三方位に蟲及び人形を安置し祭り終れば、最後に南端にて飾物を下し、こゝにて太刀振、弓舞等の舞をなす、斯くて式全たく終了すれば黃昏の頃となるなり。こは靑森縣北津輕郡水越村附近の蟲送りなるが、三本木地方とは痛く異なる處ろあるを覺ゆ(右、靑森縣上北郡、新渡戸稻雄氏報)。(其四)或地方に於ては、稻の生育中ゝ害蟲發生することあれば、各々菩提寺に集まり、地主銘々に松明を點じ、鉦太皷等の合奏を以て奇快なる行列をなし、年長者の發音ゝて『うむけ、ろむけ、實盛樣の御吊ひ、あとさきゝ、とふてやろ』と呼べば、一同ハ其聲に和しつゝ村境ゝ至りて松明を投棄せりと。右唱ひごとの中、うむけは右向け、そむけは左向けの意ならんかと云へり、詳しくは知らず(右、和歌山縣那賀郡、增田操氏)。

但馬地方蟲送りの圖
(瓢蟲女史縮寫)

◉蟲合せ答案の披露(三)

第五十四號に載せたるもののよ次ぎ、披露すべきは、左の二答案あり◎

◎蟲合せ答案（第五）

巖手縣盛岡市大清水小路　小山幸右衛門氏　選

（壹等）

大黒コガ子　吉丁蟲　米搗蟲　麝香アゲハ　小紫　大將ムシ　キク吸　一文字テフ　三井寺斑猫　尺取ムシ　ミヅバヘ
豐年ダハラ　金龜子　木伐蟲　ヘツペリ蟲　落文　帝寄生蠅　巴繪蝶　八ノ字地蠶　幽靈横バヒ　物差蜻蛉　蟻ヂゴク

瓢簞蟲　稜黒ヨコバヒ　天狗テフ　提灯ムシ　水スマシ　源五郎蟲　踊り子蝶　イシノミ　トビムシ　地蚤　大名羽隱シ
徳利蜂　赤緣サシガメ　ヒヲタ虻　火取蟲蛾　泥カツギ　孫太郎蟲　舞々掉頭　カナブン　羽カクシ　天牛　姫ハサミ蟲

鎌キリ　腰細バチ　ハタオリ　河原バツタ　鬼ヤンマ　殿樣バツタ　臺灣飛蝗　菱形バツタ　虎ムシ　キリギリス
鍬形蟲　腹廣蟷螂　糸引葉捲　山ジヨラウ　姫コガ子　大名羽隱シ　蝦夷白蝶　圓ガメムシ　豹紋蝶　ツク／＼ボウシ

ツユムシ　ヨコバヒ　首キリバツタ　エンマコホロギ　白髮太郎　マツムシ　鈴ムシ　犬毛ツラミ　クサ蜻蛉　太皷ウチ
霜降シヾミ　トビケラ　クビククリ蟲　アリヂゴク　孫太郎蟲　アトシザリ　鐘敲キ　サルハムシ　日グラシ　鐘タヽキ

猩々蜻蛉　團扇蜻蛉　銀ヤンマ　オハグロトンボ　駱駝蟲　ヘビトンボ　メクラアブ　ミン／＼（氏々）
白髮太郎　軍配ムシ　金ケムシ　ア子サマトンボ　象ムシ　蛇ノ目テフ　ミヂチシヘ　カン／＼（官々）

編云評云。此答案に厭味少なく、往々適切の配列あるは嘉すべし、但しその病ないへば、野鄙なる蟲名を用ゐたるさ、同名を多用せしさにあり。同名を多用する、必らずしも惡しさ云ふにはあらざるも、僅々五十對の配合に六七對も之あるは、何さなく耳障りなるな覺ふ。中にコメツキ蟲さキコリムシを、キクスヒさトモヱテフを、三井寺斑猫さ幽靈横バヒを合したる等は如何、米搗蟲の古名は木伐蟲にて、キクスヒは菊牛にて菊水にあらず、三井寺さ幽靈さは聯絡を缺くにあらずや。其他には許すべき程の事も無けれど、密賣を開かしたる水蠅を蟻地獄に配し、麝香揚羽に行夜を配したるが如きは、共に取らざる所ろなり。

◎蟲合せ答案（第六）

福島縣河沼郡若宮　新國豐七氏　選

（壹等）

蟲曳アブ　鷸ガメ蟲　天蠶　斑猫　雀ノタゴ　足長蜂　象蟲　藥蟲　松蛅蟖　梅ケムシ　ハマクリ蟲　閻魔蟋蟀
馬追ムシ　シギムシ　地蠶　虎蟲　鶉ノヨド　腰細蜂　牛蟲　花虻　竹蛅蟖　櫻ホウ黑　シジミテフ　鬼ヤンマ

緋威テフ　頰グロテフ　綠シヾミ　黄金蟲　岐阜テフ　竈横這　クソコガ子　ハタオリ蟲　蓑蟲　豹モンテフ
黒アゲハ　赤尾オーギヤ　黄テフ　玉ムシ　長崎揚羽　カゲロフ　ヘヒリムシ　コメツキ蟲　羽衣　虎斑シヾミ

鳶色椿象　金ケムシ　野蠶　天狗横這　天蛾　象鼻蟲　翅長イナゴ　薊虎　菓子蛾　天牛　短銃蓑蟲　クサガメ
鴉アゲハ　銀ヤンマ　家蠶　叩頭ムシ　地蜂　馬尾蜂　小翅浮塵子　薊馬　飴バチ　地蠶　鐵砲ムシ　麝香揚羽

一文字セヽリ　木ノ葉蝶　尾ナガ揚羽　蜜蜂　日暮蟬　根キリ蟲　ツノトンボ　木クヒムシ　アリノ塔　カマキリ
八ノ字根キリ　木ノ目蛾　ヒゲ長バチ　糖蛾　燈蛾　心切ムシ　ヒゲコガ子　木ツヾリ蟲　蟻地ゴク　クワガタ

スズメ蝶　琵琶ムシ　穀盜　庄屋トンボ　德利蜂　水スマシ　蚊ノオバ　源五郎ムシ　大白蝶　アマンジヤク
ツバメ蝶　皷ミノ蟲　瓜守　飴賣（アメンボウ）　瓢蟲　泥カツギ　蟻ノオヤヂ　孫太郎ムシ　小灰蝶　カツパムシ

（スカシ俵／福ダハラ）（陣笠ミノ蟲／カブトムシ）（寶盗ムシ／辨慶ムシ）（毛センㇰ蛾／天鵞絨蟲）（花五倍子／楢ダンゴ）（孔雀蝶／鳳テフ）

編者評云。此答案は僅かに六十對に過ぎざれは、固より選擇の自由はある事ながら、配合の妙に至りては、恐らく二三位に下らざる可し、察するに選者には漢詩癖あらんか。惜むらくは例のクソコガ子等の名稱を用ゐたると、二三の方言を混じたるとの缺點あることを。此等の節を改めなば極めて申分なかるべく、特に孔雀蝶に鳳蝶の對は、未だ多く他に見ざる例なり、敬服に堪へず。左は云へ天狗ヨコバヒに叩頭蟲を配したる、葉卷蟲に蜆テフを配したる、庄屋トンボにアメンバウを配したる等は他人には一向聞へぬ合せ方にて、牽强附會も甚だし、再考ありたきものなり。又クワガタとのみして蟲を略したるは悪しく、蟻の塔に蟻地獄の對も妙ならず、斯る際には何か反對のものを用ゐたし。

◉作り替の蟲歌　愛媛縣農會報にありとて、岐阜縣海津郡伊藤佐太郎氏より寄せられし、作り替の蟲歌を左に轉載す、但し間々テニハの誤れるもの及び語呂の悪しき點ハ二三筆を加へたり。

○益蟲（アサクトモ）
（一）細くとも、太き手柄の寄生蜂、三百餘種と變れども、變らぬ功は皆一つ、情けを込めて、護りたや。
（二）鳴きもせず、身をも焦さず、炎天の、朝もとうから夕べ迄、農家に盡す蜻蛉へ、與へてやりたい功勞賞。
（三）蟷螂の斧だ何んぞと、卑下すまい、此斧故に害蟲を、薙捕ることは數知れず、味方に欲しき强の者。

○害蟲（エンカイナ）
（一）春の日永に、澤山な、子を産み殖す蚜蟲、之を食ふのが瓢蟲、脊中に七つの紋かいな。
（二）夏の初は螟蟲うんか、時を得顔に跳廻る、ふやす本家は苗代よ、取られば、こちらの損かいな。

◉千葉縣夷隅郡昆蟲研究會　前號に報告せる如く、夷隅郡昆蟲學會にては今後の活動を期せんため、井上郡農會長を同會長に、古谷郡農事巡回教師を副會長に推選し、外に幹事三名を各部落に置き、規約八ヶ條を議定せりと、なほ前號に木村農會長とせしは井上氏の誤植なり。

・・・・・・

◉昆蟲叢書の發刊　昨秋發行の豫定なりし昆蟲叢書の第一編は、中途非常の障害に遭ひ、延期に延期を乞ひたる爲め、豫約讀者には一方ならぬ迷惑をかけ、當所また多大の痛苦を感じたる事尠少にあらざりしが、既記の如く先月來印刷に着手したれば、本月中には製本を終へて申込順により發送の都合なり。尤とも斯く延引したる爲め、木版圖は豫告に對し、四十餘も増入し得る事となりたれば、或ひは讀者を利する點の増加せしかとも思はる、次に收めたるは、第一編『全國昆蟲展覧會出品目錄』第二章、膜翅目の一節なり、これを觀て、その如何に調查、印刷等に煩累ありしやを察知せられよ。

一六、きほしやどりばち　黃星寄生蜂　(Ichneumon sp?)　堀口(岐阜)　小幡(岐阜)　大矢(三重)

一七、はらあかやどりばち　腹赤寄生蜂　(Ichneumon sp?)　下飯坂(岩手)

一八、ひげじろやどりばち　髭白寄生蜂　(Ichneumon sp?)　岩見(京都)

一九、やどりばちの一種　寄生蜂一種　(Ichnoumon sp?)　伴野(三重)　大橋(岐阜)　高橋(岐阜)　津屋(岐阜)　水野(岐阜)　下飯坂(岩手)

二〇、うすばやどりばち　薄翅寄生蜂　(Paniscus obturiceps, Kriech.)　岩見(京都)　小里(岐阜)　吉澤(岐阜)　松崎(愛知)　水野(岐阜)

二一、うすばやどりばちの一種　薄翅寄生蜂一種　(Ophion sp?)　大橋(岐阜)　松崎(愛知)　阿刀田(宮城)　水野(岐阜)　下飯坂(岩手)

フクダハラバチの圖　(イ)は繭(ロ)は成蟲

二二、きすぢやどりばち　黃筋寄生蜂　(Gn? sp?)　後藤三二(岐阜)

二三、やどりばち　寄生蜂　(Ophion sp?)　伴野(三重)　大矢(三重)　吉澤(岐阜)　高橋(岐阜)

二四、こやどりばち　小形寄生蜂　(Ophion sp?)　堀口(岐阜)　小里(岐阜)

二五、ふくだはらばち　福俵(フクダワラ)寄生蜂　(Ophion sp?)　岩見(京都)

◉岐阜縣下昨年の螟害　今年一月二十日に岐阜縣廳の調査する所ろに據れば、昨三十四年に於ける螟害は次表の如しと云ふ。之を一見するに未だ各郡市とも報告を了へざるのみか、其被害數に至りては、往々議すべきものあるも、多少信據すべき材料たるを失はざれば、又以て螟蟲加害の狀を知るに足らん、或ひは云ふ如何に巧みに驅除すとも其被害額は此表の如く、百分三ごときに止まる郡村あるものにあらず、少なくも七八以上を算するならんと。其は兎も角、此表に依るも一管內にて旣に拾數萬圓の損失あり、害蟲の驅除豈に忽諸に附す可けんや。

郡市名	發生シタル町村數	被害反別	同上反別ニ對スル損害步合百分率	減損見積石高（合）	同上概價（圓）
岐阜市	—	—	—	—	—
稻葉郡	一九	一五七三、八〇〇〇	百分ノ八、〇	三一九八、〇〇〇	三六、六三〇、〇〇〇
羽島郡	—	—	—	—	—
海津郡	五	五四四、八〇〇〇	百分ノ五、〇	四八八、四〇〇	五、〇七九、〇〇〇
養老郡	六	一三一三、三〇〇〇	同　二、八	七九六、〇〇〇	八、四五〇、〇〇〇
不破郡	六	一〇五六、二〇〇〇	同　三、四	五一六、〇〇〇	五、四一七、〇〇〇
安八郡	二二	六〇八九、三〇〇〇	同　四、〇	五〇一、〇〇〇	五、〇一〇、〇〇〇
揖斐郡	八	六九七、二二〇〇	同　一五、〇	九七〇、〇〇〇	一〇、二五四、〇〇〇
本巢郡	一八	一五五三、二〇〇〇	同　九、〇	八一七、〇〇〇	八、九八七、〇〇〇
山縣郡	一五	八四一、九〇〇〇	同　一二、三	一四八八、九〇〇	一六、五二七、一〇〇
武儀郡	二〇	一一三〇、八三二八	同　七、〇	八六一、二七七	一〇、〇六〇、五五四
郡上郡	五	二二、〇〇〇〇	同　五、〇	九八、〇〇〇	一、二三二、〇〇〇
加茂郡	九	三〇〇、五六〇〇	同　五、七	三八八、一〇〇	四、七三四、〇〇〇
可兒郡	一六	七七一、二〇一〇	同　五、二	四七一、五二一	五、一三一、二九〇
土岐郡	一六	七〇八八、三〇〇〇	同　一一、五	九三九、二五〇	一一、五七六、三八五
惠那郡	七	一〇三、二二〇〇	同　二一、八	七七、一一〇	八三二、二二〇
計	一七二	二三〇八五、八四〇八	同　八、二	一一六一〇、五五八	一二九、九二〇、五四九

飛驒大野郡	—	—		—	—	—
益田郡	一	一、〇〇〇〇	同	三〇、〇	六、二〇〇	七二、三〇〇
吉城郡	一	五〇、〇〇〇〇	同	一〇、〇	一二〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇
計	二	五一、〇〇〇〇	同	二〇、〇	一二六、二〇〇	一、五七二、三〇〇
合計	一七四	一三一三六、八四〇八	同	一四、一	一一七三六、七五八	一三一、四九二、八四九

●春綠の蟲品　むかし京極宗輔と云ふ大政大臣は、蜂を好むために、蜂の相國と云ふ異名を附られたさうだが、聞けば今の貴族院にも、將來の大臣を以て自から擬して居る蟲學者もあるげな。蟲學者と云ふが已に變に思はれ居るのに、蟲大臣閣下、蟲殿樣、蟲宮司抔と來た日には、誠に早や恐悅至極の至りである。●佛蘭西の一學者は、世界に鳥禽が居らん日には、今日の儘で九年を保てない、それは蟲が蕃殖加害を逞ふするからである、と云ふて居る、恐ろしい話ではあるまいか、益鳥其他を保護する事の必要は、此一例でも解かる。●目下臺灣島に多いと云ふものゝ中に、蠅と蚊をも加へて、東朝新聞は書いてある、流石厄介國だけ、土匪以外の厄介物も中々多いと見える。●高千穗蜻蛉男爵からの手紙に『小生の正躰をすッぱ抜きたる事のあるのに、搗てゝ加へてキ印なぞゝは言語道斷である、卽座に一刀兩斷と云ふ處だが、何分汽車で二日以上もかゝる遠地であるから、左樣にも行かず、又考へて見れば、吾ながら矢張キ印の親分位ゐなるらんと思はれる節もあるから、先々斷念した』とあッた、そうして見れば前號で筆の引導を受けて、キ印の往生成佛をした事だけは請合ひである、併し隨分罪作りをした側であるらう、どうせ極樂淨土なぞへは、思ひも寄らん事だ。●米國のバファロー博覽會へ陳列された、無花果の媒助蜂は、初め米國政府が太平洋海岸へ無花果樹の移植を奬勵した時分に、大まい三万二千圓を費やして飼育した紀念であるさうだが、顯微鏡でなければ見えぬ程の小さいものであるげな。●日本國内には、蟬の種類が十種位ゐしか判ッて居らんのに、米國の昆蟲家は、本邦產のものを十五六種も集めて居ると聞いた、とは蜻蛉男爵の茶呑咄であッたが、此蟬に就て面白い話がある。それは名和先生の許へ去年臺灣から贈ッて來た一種で、草の中に棲んで居るものである、これさへ既に奇異なのに、近頃長野菊次郎君が、九州で捕つたと云ふて持つて來た一種は、夜間に鳴くたちであるさうな。そこで蜻蛉男爵の咄を追想して成ー程と思ふたから、支那の博物書を調べて見ると、如何にも兩種とも書いてあつた。一躰支那人は、何事も頭から五六割の掛直をするから、是迄は其事を讀んでも又も例の空言かと思ふて

心に留めなんだが、近頃始めて感服した。●唯り蟬の物語ばかりでは無い。支那の本には善く蟻の害を書いて置く、然かも白蟻の事をいふて居るが、これもチト怪しいものと思ふて、碌々注意をせなかッた然るに三井物產會社の寺島昇君の直話に依ると、彼地では白蟻の害は非常なもので、綿布類は皆ンな蝕害されるが、九州地方にも多少は分布されてあるとの事ぢ。そうして見ると、何もかも各々壹万八千歲的の筆鋒ばかりでは無いかも知れぬ。（なにがし生）

●第四十一回岐阜縣昆蟲學會例會　本月三日午后二時例によりて當昆蟲研究所內に開會せり、劈頭名和當所長の挨拶に次ぎ『植物と蟲種及び家事衛生と害蟲の關係』等に關する說話あり、次に永澤小兵衛氏の『各方面より觀察せる婦人と昆蟲の關係』談あり、次に名和梅吉氏の『岐阜縣本巢郡の紫雲英に發生せる蚜蟲調查の報告』談あり、次に長野菊次郎氏の『昆蟲の摸樣化と寫生方法』と題する談話あり、次に市守文子氏の『所感』談等ありて午后五時散會せしが、席上には寺島昇氏より寄贈に係る歐洲及び清國產の昆蟲摸樣布帛を陳列して衆覽に供せり。此日の會衆は二十餘名にて、其中珍らしくも外來婦人六名の出席ありき。

●紫雲英の蚜蟲驅除試驗　紫雲英種の本場と稱する岐阜縣下本巢郡船木、本田村地方に於ては近年紫雲英の開花時期に際し一種の蚜蟲發生繁殖して收穫皆無の結果を來すより今回該蟲の豫防驅除を完ふせんが爲め兩村とも各大字に一ヶ所宛の試驗地を設定し驅除試驗を爲す事に決定せり。

●所員の來往　當昆蟲研究所の名和梅吉氏は、本月一日、岐阜縣本巢郡へ出張、紫雲英の害蟲を調查し翌々日歸所。永澤小兵衛氏は、同日昆蟲學史料蒐集のため、愛知縣名古屋市へ出張の序を以て、同夜開催の名古屋經濟會例會に臨み、名和所長に代りて一場の演說をなし、直ちに歸所。名和當所長は去八日を以て武儀郡へ出張、調查と講話とを終へ、十二日を以て歸所されぬ。

●昆蟲標本陳列館の參觀人　昨四月十九日までは館內の修繕、陳列替等のため入場を謝絕し、二十日より開館せり。其參觀人員は、總計千百〇壹人にて、最とも多かりしは、二十日に於ける三百七十四人、最とも少なかりしは、廿六日の二十一人とす、即はち一日平均百十八名弱に當れり。又重なる者は、大島第八師團長、農商務省視學官をはじめ、大阪、福井、山梨、石川、茨城、京都、愛知、和歌山の諸府縣より來れる敎育農事の當局者並びに敎職學生等の一行ありき。

（以上五月十二日脫稿）

名和昆蟲研究所長名和靖著

五版

薔薇の一株 昆蟲世界 全

定價貳拾錢 郵税貳錢（郵券代用一割増）

臨時刊行第一編

日本昆蟲分科表 全一冊

定價（郵税共）金貳拾八錢（郵券代用一割増）

臨時刊行第二編

通俗益蟲集覧 第一輯（説明書附）

定價（郵税共）金貳拾貳錢（同上）

臨時刊行第三編

貝殼蟲圖説 全一冊（再版）

定價（郵税共）金參拾七錢（同 上）

◎害蟲圖解既刊の分廣告

●第一。桑樹害蟲エダシヤクトリ（枝尺蠖）（三版）
●第二。桑樹害蟲トゲシヤクトリ（刺尺蠖）（再版）
●第三。稻の害蟲イ子ノズヰムシ（二化生螟蟲）
●第四。煙草害蟲タバコノアヲムシ（煙草螟蛉）
●第五。稻の害蟲イチモジセセリ（苞蟲又葉捲蟲）
●第六。桑樹害蟲ヒメゾウムシ（姫象鼻蟲）
●第七。桑樹害蟲シンムシ（心蟲）
●第八。稻の害蟲イ子ノアヲムシ（稻螟蟲）
●第九。茶樹害蟲ミノムシ（避債蟲）
●第十。豌豆害蟲エンドノキリムシ（夜盜蟲又地蠶）
●第十一。桑樹害蟲クハカミキリ（桑天牛）
●第十二。稻の害蟲ツマグロヨコバヒ（浮塵子）
●第十三。桑樹害蟲イトヒキハマキムシ（糸引葉捲蟲）
●第十四。茶樹害蟲チヤケムシ（茶蛅蟖）
●第十五。馬鈴薯及び茄子の害蟲テントウムンダマシ（擬瓢蟲）

以上十五種は既刊の分として發行以來既に多くの各級農會は勿論、諸學校にも備へ付けられたり。

外に
●第十六。稻と麥の害蟲キリウジ、カガンボ（切蛆蚊蛇）
●第十七。桑樹の害蟲キンケムシ（金色蛅蟖）

右の二種は本月を以て出版せり、時節柄利する所ろ多からん。

◎害蟲圖解未刊の分豫告

◎桑樹害蟲クハケムシ（桑蛅蟖）
◎稻の害蟲フタホシズヰムシ（三化生螟蟲）
◎稻の害蟲セジロウンカ（背白浮塵子）
◎稻の害蟲ヒゲナガアブ（長角虻）
◎桑樹質蟲クハハマキ（桑葉捲蟲）
◎蠶の害蟲カヒコノウジバヘ（蠁蛆）

◎松樹害蟲マツケムシ（松蛅蟖）
◎藍の害蟲アヰノゾウムシ（藍象鼻蟲）
◎粟の害蟲アハノズヰムシ（粟螟蟲）
◎胡麻害蟲メンガタスズメ（胡麻蠋）
◎赤楊害蟲ハンノキケムシ（赤楊蛅蟖）
◎櫟の害蟲カミキリムシ（天牛）

◎稻の害蟲イナゴ（蟲螽）
◎稻の害蟲トビイロウンカ（褐色浮塵子）
◎稻の害蟲クロクサガメ（黑色椿象）
◎桑樹害蟲アヲハマキムシ（青色葉捲蟲）
◎桑樹害蟲ツハゴ（野蠶）
◎蔬菜害蟲モンシロテフ（菜の螟蛉）
◎蔬菜害蟲サルハムシ（菜の葉蟲）
◎大豆害蟲ヒメコガ子（姫金龜子）
◎梅樹害蟲ウメケムシ（梅蛅蟖）
◎梅樹害蟲ウメシヤクトリ（梅尺蠖）

◎圖解の紙幅縱一尺三寸横九寸 ◎壹枚の代價拾五錢 郵税貳錢
◎百枚以上一纏壹枚拾錢郵税百枚に付き貳拾錢

◎豫約代價 壹枚拾錢郵税貳錢
但申込の際前金添附の事
圖解代金 凡て前金にあらざれば回送せず但郵劵代用壹割增の事

◎梨樹害蟲ナシゾウムシ（象鼻蟲）
◎梨樹害蟲ホシハマキ（星葉捲蟲）
◎果樹害蟲イラムシ（刺蟲）
◎稻の害蟲オホズヰムシ（大螟蟲）
◎藍の害蟲アヰノズヰムシ（藍の螟蟲）
◎粟の害蟲アハノヨトウムシ（粟蠶）
◎里芋害蟲セスヂスズメ（鳥蠋）
◎桐樹害蟲シモフリスズメ（桐蠋）
◎果樹害蟲ホシカミキリ（白斑天牛）
◎果樹害蟲ドウガ子ブンブン（金龜子）

發行所 岐阜市京町 名和昆蟲研究所

昆蟲世界

（明治三十五年五月十五日發行） 第六卷第五拾七號 （毎月一回十五日發行）

（明治三十年九月十日內務省許可）
（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

◎岐阜縣冬季昆蟲展覽會經費寄附金受領第七回報告（人名イロハ順）

一金拾五圓　（稻葉郡委員長）　津田顯孝君
一金五圓　（土岐郡委員長）　柿本一兵君
一金五圓　（大野郡委員長）　伊藤祐之君
一金五圓　（郡上郡委員長）　大津政布君
●小計金參拾圓　◎通計金百七拾九圓五拾錢
一金拾圓　第五回岐阜縣害蟲驅除講習生一同
但し右は本會維持金に指定寄附の事

右本會計畫の趣旨を賛同し各頭記の金額寄附相成候に付此段及報告候也

明治三十五年五月　岐阜縣昆蟲學會

◎岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條に依り、毎月第一土曜日午後正一時より、岐阜市京町名和昆蟲研究所內に於て開く筈なれば、毎會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所內　岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會本年中の日並は左の如し

第四十二回月次會（六月七日）　第四十六回月次會（十月四日）
第四十三回月次會（七月五日）　第四十七回月次會（十一月一日）
第四十四回月次會（八月二日）　第四十八回月次會（十二月六日）
第四十五回月次會（九月六日）

⋮ 市街界　‖ 案內道　| 町道　イ 研究所　ロ 縣廳　ニ 病院　ハ 中學校
ホ 監獄　ヘ 郵便局　ト 西別院　チ 公園　リ 長良川　ヌ 金華山　ル 停車場

◎名和昆蟲研究所案內

當研究所の位置は上の圖の如く停車場よりは僅十餘町にして養蟲室あり、又とロへとの間なる新設の岐阜縣物産館構內には常備の昆蟲陳列館（五間に十五間）あり有志諸君の來訪を俟つ

岐阜縣岐阜市京町　名和昆蟲研究所

◎本誌定價並廣告料

壹部　郵税共　金拾錢　（見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す）
壹年分拾貳部郵税共　金壹圓八錢

（注意）本誌は總て前金に非れば發送せず◎郵券代用は五厘切手にて壹割增とす◎爲替拂渡局は岐阜郵便電信局

廣告料五號活字廿二字詰一行に付金拾貳錢、三十行以上一行に付き金拾錢とす

明治三十五年五月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二（岐阜縣岐阜市京町）
發行所　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二　發行者　名和梅吉
同縣武儀郡下有知村三百七十四番戶　編輯者　天野秋二
同縣安八郡大垣町字郭町百五十三番戶　印刷者　河田貞城

（大垣西濃印刷株式會社印刷）

Vol.VI. JUNE. 15TH, 1902. No.6.

THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.
EDITED BY Y. NAWA.
GIFU, JAPAN.

昆蟲世界

(六月十五日發行)

(毎月一回十五日發行)

第五拾八號 (第六卷第六册)

(明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)

(明治三十五年六月十五日發行)

目次 (禁轉載)

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU, JAPAN

◎寄贈物件受領公告

一金貳拾圓也　第拾貳回全國害蟲驅除講習生一同
一金拾圓也　新潟縣　佐藤榮君
一金五圓也　三重縣　和波久司君
一金壹圓也　高知縣　布川敬夫君
一金壹圓也　三重縣　大矢圓三郎君
一名物六帖
一國產考
一和語本草
一桃洞遺筆
一本草綱目
一名物辨解
（以上）各一部　岐阜縣第五回害蟲驅除講習會修業生一同
一黑塗掛額（蝶模樣）壹枚
一水產字彙　壹冊
一昆蟲類　數種
（以上）東京市　田中芳男君
一蟬付陶製掛花筒　壹個　岐阜縣　丹羽高通君
一螢の話　壹冊　理學博士　渡瀨庄三郎君
一生物界之現象　壹冊　岐阜縣　安東伊三次郎君
一府報　二葉
一臺灣日々新聞（昆蟲記事）四葉
（以上）在臺灣　中村辰治君
一山梨日々新聞（昆蟲記事）一葉
一峽中日報　一葉
（以上）山梨縣　中澤樂平君
一伊賀日報（昆蟲記事）一葉　三重縣　西岡嘉十郎君

右當所へ寄贈相成候に付茲に芳名を揭げて其厚意を謝す

明治卅五年六月　名和昆蟲研究所

◎昆蟲世界購讀紹介者芳名

京都府　加佐郡農會　壹名
岐阜縣　森島勘次郎君　貳名
京都府　谷口鶴藏君　壹名

第十三回全國害蟲驅除講習會員募集

開期（自八月一日 至同月十四日）二週間（凡八十名）

全國害蟲驅除講習會は、回は一回と同志の歡迎をうけ、既に前回までに、三府四十縣の出身者六百拾餘の有爲なる修業生を出せり。依りて此際益々斯學の奮興を期せんことを欲し、又應募者の便を圖り、來る八月一日を以て第十三回の開講式を擧げんとす。斯學に志あるの士は、それこの容易に得難き夏季の講習を利用して、將來國家のために盡す所あれ。

今回は多少增員の設備をなす可しと雖ども、入會希望者も極めて多からんと推察せらるゝを以て、その正式の手續を了し、確定名簿に登錄せられたる正員のみを以て、會を組織する事となしたれば、入會の諾否は一に申込の遲速に由る。

尙申込期限を、**七月二十日以前**と定むると雖ども、當所の都合により、隨時入會を謝絕することあるべし。規則書入用の向は郵券を添へ至急照會あれ、直ちに回送致すべし。

明治卅五年六月　岐阜市京町　名和昆蟲研究所

スバカゲロウの各種

◎大竹、矢野の兩氏に答ふ

在歐洲匈國ブーダペスト　松村松年

昆蟲世界第四拾八號に於て、在北總大竹義道氏は一論文を草し、其中殊更、余に質せる一項あり、曰く、稻の小螟蛉の學名を Erastria sp. となし、稻の苞蟲（甲）ハカジ又ツトムシの學名を Nymphula (Hydrocampa) sp? と掲げられしに關はらず、名和氏の所謂イネノアオムシの條下に於て Naranga diffusa, Walk. と改められしは如何に、余は甚はだ之に迷へり云々、と。余は素より斯かる質問に應ずるを欲せざるも、今や本邦昆蟲學幼稚の時代にありては、時にまた幼學者を障害するものあらんことを慮はかり、聊さか爰に説明する所ろあるべし。然りと雖ども、此質問は甚はだ曖昧にして、殆んど其意の在る所ろを知るに困しめり、仍りて其要領は、稻の小螟蛉の屬名を質されたるものと假定して應答する所ろあらんとす。」

そも Erastria 屬は、千八百十八年ヲクセンハイメル（Ochsenheimer）氏の歐洲產蝶蛾類（Die Schmetterlinge Von Europa, 1807—16）と稱する書中に、始めて記載せられしものにて、今を去ること八十六年の昔日よりあり。其當時 Erastria の屬名を冠せる蛾類は、今や變じて Rivula 屬となり、Hydrelia 屬となり、Hyela 屬となり、Anthophila 屬となり、Xanthodes 屬となり、或ひは Naranga 屬となりて、其當時の屬名は、今日の科名となるに至れり。而して此 Naranga 屬は、千八百八十一年にムーール（Moore）氏の Procee-

dings of Zoological Society of London P. 359, 1881. に記せしもの、又種名のDiffusaは今より三十八年前、ウォルカー (Walker) 氏の英國博物舘鱗翅類目錄 (Catalogue of Lepidoptera Hetrocera in the Collections of the British Museum P.779,1865.) 中に記せしものにて、その始めて本邦産の記事を公けにせられしは今より六年前に、ハンプソン(Hampson)氏の英領印度産の蛾類 (The Fauna of British India moths Vol 11, P 333,1894.) と題せる書中に現はれしを以て嚆矢とすべし、すなはちウォルカー氏は、此昆蟲を始めて印度に發見し、Xanthodes の屬名を以て之を發表し、次でバットラー(Butler)氏は Anthophila の屬名を擇び、スウヰンホー(Swinhoe)氏は Hyelaの屬名を冠せしめぬ。若し此蛾を李那 (Linne)氏に記載せしめたらんには、Tortrix屬を用ゐしあるべく、更にファブリシャス(Fabricius) 氏に記載せしめなば、或ひは Noctua 屬と命名せしやも、未だ測り知る可からず。

日本鱗翅目錄中に、Naranga diffusa, Wk. の見えたるは、近く一昨年の事にして、其以前は不明に屬せり。去れば余が日本害蟲篇編纂の當時は、其學名を知るに由なく、爲めに勘合の用に供せし書籍は十數部の上に出でたり。斯くて其幼蟲の裝へる尺蠖狀の脚部に重きを置き、又その翅脈の夜蛾科(新稱) Noctuidae に類似せるを探り得て、遂にオクセンハイメル氏の所謂 Erastria 屬なることを確かめぬ。今にして之を想へば、當年幸はひに其識別の鵠に中ることを得たりしは、余が心私かに快とする所ろなり。其後この害蟲は、リーチ氏の目錄 (1889) 五百二十八頁の第二四四號 Erastria seculifera, Walk. に最とも近類することをも知り得たり。然るに氏が一昨年公行の目錄を見るに、始めて茲に Naranga の屬を掲げ、前記の Erastria seculifera をば左の如くに改訂せられぬ。

Naranga curvifera, Walk.

Hydrelia curvifera Walk., Trans. Ent. soc. Lond. p. 91. (1862—64).

Erastria seculifera Walk., Journ. Linn. Soc. Lond. P. 58 vol. iv; Leech, Trans. Ent. Soc. Lond. p. 158, 1889.

Hyela senna Swinhoe, Trans, Ent. Soc. Lond. p.148, 1891.

Naranga curvifera Hamp; Faun. Brit, Lond. p. 334, 1894; Leech, Trans, Ent. Soc. Lond. 158, 1900.

夫れ學術の進歩と共に、屬名の變更は到底免がれ得べきにあらず。蓋し學術のなほ幼稚に、昆蟲學名の左まで多からざる時代にありては、名稱の變更を行ふの必要なかる可しと雖ども、苟しくも鱗翅類のみにても、能く八萬餘の學名を有する今日には、此等を盡ごとく HomByx 若くは Noctua の下に揔括し得べくもあらざればなり。例へば、稻の害蟲なるツマグロヨコバイは、始めて米人ウーラー（Uhler）氏によりて Selenocephalus cincticeps. Uhler. と命名せられぬ。當時この學名は、該屬を以て冠名するも敢て不可なかりしに、漸次多數の浮塵子發見せられて、斯かる不完全の分類法にては、到底包括し能はざる理由を感せらるゝや、乃はち Nephotettix屬を冠ふらすに至れり。而して昔日の Jassus 屬は、今や分れて Deltocephalus屬となり、Thamnotettix屬となり、Athysanus屬となり、又 Cicadula 屬となれり。翻來れば屬名の變更は、時に隨がひて行はれ、昨非今是、決して牢固不動のものにあらざるを知らん。たゞ牢固不動、今古變らざるものは一の種名となす、則はち劃然としてプリオリテートの規定あるに因る。

曩に余は稻の小螟蛉、名和氏の所謂イチノアオムシの學名として Erastria spp? を適てたり、若しその時種名の判明して、これに Erastria diffusa, Wk.と記し置きたらんには、大竹氏の質疑の點は何處にあるべきや。畢竟屬名を Naranga と記せしも、亦 Erastria と記したるも、是れ學術の進歩に伴へる異稱にし

て、毫も誤謬とは認むること能はざるにあらずや。看よ前に李那氏の始めて Erastria fasciana を記するや Tortrix 屬を冠せしめしに、ボルクハウゼン(Borkhausen)氏の如きヒュブネル(Hubner)氏の如き有名なる鱗翅族專攻學者が同蟲を記載するに Noctua屬を擇び、ファレーン(Fallen)氏はこれに Bryophila 屬の稱呼を與へたるを。すなはち李那氏の時代(1761)にありては、Tortrix 屬を以て現はれ、ボルクハウゼル氏の時代(1788—90)には Noctua 屬となり、ファレーン氏の時代(1864)に至りて Bryophila屬と再轉し、更にバットラー氏の時代(1878)に逢ふて、茲に始めて Erastria 屬の通稱を得たるの事實あるを知るに足らん。而して此學術の進步に伴へる屬名の變更を以て、迷謬を來たすの基因なりといふ者あらんか寧ろ日進の新著を繙かざるを以て足れりとすべし。蓋し屬名の半ばは、時々刻々に、改訂を加へらるゝの恐れある可ければなり。

以上は、大竹氏の質問の係る、稻の小螟蛉の屬名に對する卑見なり。次に種名に就ても、少しく述べ置かんに、そも sp? の二歐字は Species の略字にして、拙著日本昆蟲學の凡例にも記せる如く、種名不明の意なり。然るを大竹氏は、この sp? の二字を以て直ちに種名と速斷せしにあらざる莫きか。若し疑點の茲に存せずとせば、余は氏が迷へりと言へる要領の、何れに歸着するやを知るに迷はずんばあらず。特に其質問中に、稻の苞蟲ハカジをも引用したるも、本問には果して何の必要かある、ハカジと稻の小螟蛉とは言はずして各々異なり。是れ氏の質問を以て、其深意を解するに苦しむといふ所以なり、氏それ幸はひに焉を諒せよ。

又在豐前の矢野宗軒氏の質問あり、其要は松毛蟲の學名に就て、松村氏は Gastropacha pini, L. となし、佐々木博士は其著樹木害蟲篇に於て Odonestes superans, Butl. の名稱を用ゐられたり。然るに此事に關し

博物之友第二號に於て、三宅恒方氏は日本昆蟲學の學名は誤れり、此種は歐洲産のものにて、日本産のものは Odonestes suprans と云へり、其是非は如何、と云ふに在り。

◉附記　佐々木氏の稻の黄葉捲蟲蛾は、稻の苞蟲ハカジ(第六十七圖)にして、稻の青尺蠖蛾は、稻の小螟蛉なり。(但し圖書の「第六十七圖」は「第七十一圖」と轉倒せり)然るに同書の卷末に、其正誤あるに注意せずして、曩に余が之を引例の一に加へしは、頗ぶる疎漏に出づ、氏に對し深く謝せざる可からず。

(未完)

◎鳥類の食物と昆蟲との關係（續）

岐阜中學教諭　長野菊次郎　抄譯

◎啄木鳥　啄木鳥の類は、昆蟲と漿果とによりて、生活するものなり。或啄木鳥「Dryobates pubescens」の三羽の雛と、二羽の親鳥との胃を驗せしに、蟻、蜘蛛、及び甲蟲を含み、而して幼鳥は成鳥よりも、蜘蛛を取れること多數にして、甲蟲を取れることは少數なりき、然れども、主なる食物は共に蟻なりき。吸液啄木鳥(意譯)「Sphyrapicus varius」の幼鳥の巣立後、間もなきものを驗したるに、其胃中には、大なる黑蟻を以て滿されたりき。然るに成鳥に至りては、其食物の三分の一は殆んど蟻を取ると雖ども、其他は樹木の津液及び白木質等を取るを以て、屢々樺木類を枯死せしめ、時には林檎其他の樹木を害すること少からずといへり。

◎杜鵑　杜鵑類は、全たく昆蟲を食とするものなり。而して或る他鳥よりは、樹葉を保護する上に於て、園藝山林家は、非常に有効のものとなす、蓋し樹園の葉を害する所ろの毛蟲及び他の仔蟲等を驅除するを以てなり。此類は又甲蟲をも食ふ、八羽の黑嘴郭公(意譯)「Coccyzus erythrophthalmus」の雛につきて試驗せしに、其食物は成鳥と異にして、甲蟲及び毛蟲の如きは之を取らず、此に代ふるに、蝗螽、及び螟蛉を以てせりき。尙ほ其食物の割合は左圖によりて之を知るを得べし。

ホトトギス類の食物の割合圖

(イ)は蜘蛛類(ロ)は椿象類(ハ)鋏く(ニ)は蟲螽類(ホ)は毛蟲類(へ)蜈蚣類

◎鷹及び梟　鳥類の中にても、鷹及び梟類の如きは最とも慘酷なるものなり。陸の全幅を通じ、個人に向ひ、共同に對し、州に郡に、皆彼等の攻擊を被らざるはなし。ペンシルバニアの一州に於てすら鷹類の驅除の爲めに支出する金額は、一年間五千弗の多きに及べり然れどフイッシャー(Fisher)氏の明かにせる所ろによれば、米國に於ける七十三種(亞種をも含む)の中、人類に害を及ぼすものは僅かに六種にして其他は甚はだ有益なるものとなり。凡ろ鷹類の多くは鳥類、家禽、鼷鼠、蛙、蛇等によりて生活すれども、中には昆蟲を食とするものあり、赤尾鷹(意譯)赤肩鷹(意譯)の如きハ、家禽を害するを以て、通常牝鷄鷹さ呼はるゝものなれども、其成鳥すら大ひに昆蟲及び鼷鼠によりて生活することと明かなり、然れば雛の食物は尚一層此等の動物を要するや論を俟たざるべし。

雀鷹(意譯。ハヤブサの一種)「Falco sparverius」の如きは殆んど昆蟲のみを食とするものにして、フイッシャー氏の説によれば、哺育期間に於て、蟲螽の驅除者として甚はだ有効なりとあり。さて翼の生じたる許りの雛數羽と、十二羽の成鳥さを驗したるに、蟲螽類の外何れも取る所ろなかりき。

スクリーチ梟「Megascops asio」も、鼷鼠及び有害なる昆蟲乃多量を

驅除す、二羽の成鳥と二羽の將に巢立せんとする雛との胃を驗せしに、共にコフキコガ子の類を取り、又雛は蜥蜴をも取りたりき。又籠の內に置かれたる同鳥の雛に、其親がコフキコガ子の類、蛙及び少數の蟲螽とを齎らせしことは、著者の親しく驗する所なり。

フロリダ穴梟(意譯)「Speotyto Cunicularia floridana」も亦昆蟲と鼷鼠を驅除するものなり。ローヅ(Roads)氏の言ふ所によれば、幼鳥の在りける穴の內に蟲螽、甲蟲、鼷鼠、魚類、蛇、蛙、蜥蜴、小蝦、及び三種の鳥の羽毛の遺物を見たりと。

◎鳩鴿　鳩鴿の類も、穀粒や種子のみを取るものにして、動物質をば取らざるものなり。

◎鶉鷄類　鶉鷄類に屬する松鷄、鶉、雉子等の如きは、一般に植物質をのみ食するものと信せられども、實は動植物質を混食するものにして、特に孵化の初めに於ては、重に昆蟲にて養はるゝなり。鶉の一種「Colinus Virginianus」及び野鷄(意譯)「Tympanuchus americanus」は地蠶類ウリコガ子(意譯)カメムシ類及びロツキー山蝗等の恐るべき害蟲を驅除するものなり。新に孵化したる野鷄は、昆蟲を食とするものにして、ベンダイル(Bendire)氏の說によれば、蟲螽の類多きときは、全たくこれのみを取るとなり。或る研究所にて、孵化後間もなきテキサス野鷄を驗せしに、五疋の螟蛉、一疋の穀蛾の一種、一疋の食葉甲蟲(意譯)「Monoxia puncticollis」及び十九疋の十二點ウリコガ子「Diabrotica 12-punctata」等を食ひたりき。ワーレン(Warren)氏は一週間生長したる松鷄の一種「Bonasa umbellus」の一雛を驗せしに、一疋の白き仔蟲、七疋の蜘蛛、及び十三疋の螟蛉とを食したりき。蒙古雉子「Phasianus torquatus」も昆蟲を食ふものにして、若し此鳥が捕獲せらるゝ時は、昆蟲の仔蟲にて養はるゝものなり、而して此鳥は又他鳥に先だち好みて馬鈴薯コガ子(意譯)を驅除するものなり。

◎鶴　ビール(Beal)氏ハ砂丘鶴(意譯)(Grus mexicana)の毳毛を生じたる許りの雛の、僅か一磅許の重さありけるを捕へて、之を飼ひしが、其食物は蚯蚓、ヲサムシ類、及び肉類なりき。かくて二ケ月生長しけるに、恰かも十七年蟬の地中より脱出する時に際しければ、彼は好みて之を食ひ、時としては一日に六合餘を要することありき。

◎水禽類　水禽類は重に魚類を食とし、雛を養ふにも、魚類を以てすること通例なれども、稀には昆蟲を食ふものあり。鳧の胃中に蟲螽を含みたる事はフイッシャー(Fisher)氏の驗する所ろにして、家鴨が蜉蝣類を食ふ事は著者によりて知られたり。又鴛鴦の一種「Aix sponsa」の雛が、池の水面より蜉蝣、蝗、其他の昆蟲を啄める事は、ビール(Beal)氏によりて見られたる所ろなり。

◎結論　以上述ぶる所ろによれば、鳩鴿類を除くの外、他の諸鳥は幼時皆動物を以て養はれ、成長するに從がひ、漸次食物の變化を來すものなり、盖し動物性食物は、植物性食物よりも滋養分に富み、且消化し易ければなり。雛が毎日自身の五分の一、乃至二分の一の重量を增加せん爲めには、生長の時期によりて、日々彼自身の重量よりも、なほ多量の昆蟲を要するものなれば、勢ひ速かに取られ、速かに消化せられざる可からさるや當然の理なり。凡そ蜘蛛、蟲螽、蜈蚣及び蟋蟀等は燕雀類の雛に適當の食物なり、而して植物質を食ふ所ろの鳥、例へば鳥、コマドリ、レンジヤク及び英國雀等は、雛の殆んど成育するまで、重に昆蟲を要すとはいへ、果物又は穀物の量も漸次增加するものとす。併し此等の鳥は、他の鳥が柔かなる昆蟲を要する場合に、多くコフキコガ子、米象等の如き堅き甲蟲類を取るなり、諸鳥によりて啄ばまるゝ仔蟲は重に尺蠖、地蠶及び木綿の蜈蚣の如き害蟲にして、刺毛を有せざるもの多し。然れども亦有毛の仔蟲も全たく無きにしもあらず、フォールブッシュ(Forbush)氏は十三種の鳥が

其雛にウメケムシ類、烏蠋類を與へたる事を報じたり。而して雛の要する食物の量及び親鳥の非常の熱心と注意とは驚くべきものにして、害蟲の驅除には實に有効なるものあり。二三の例は上述の如し、尙ほ害蟲の移動に對し、其害を除くことの如何をも茲に附記すべし。

一千八百七十四年より一千八百七十七年の間、ネブラスカ（Nebraska）に於て、ロッキー山蝗を發生せしとき、ミソサザイの一種は、一時間三十疋の割合にて此蝗を取り、以て其雛に給せりき、爲めにサミユール、アウグー（Samuel Aughey）氏は云へり、此割合を以てすれば、一日に七時間動作するものと見做して、二百十疋を取る割合あり、然れば今假りにネブラスカの西半の燕雀類が、一方哩に僅々二十羽の雛を哺育するものとするも、一日に一億六千二百七十七万一千疋の蝗を驅除する理あり、而して蝗は平均十五グレーンの重さを有し、一日に玉蜀黍、麥其他の穀類を取ること、殆んど己の躰重に均しきものなれば、此等の蝗は、一日實に十七万四千三百七十九噸の穀類を損害すべし、今假りに一噸の價ひを十弗とすれば、百七十四万三千七百九十弗に値せりと、豈に莫大の量ならずや。（譯者曰く、ネブラスカの面積は大略七万六千方哩なり）

然り而して鳥の營巣時期は、農事の繁忙にして最とも害蟲を驅除すべき必要ある時なる事を記臆せざる可からず、勿論、寄生蜂、寄生蠅等が、有害昆蟲を斃すべき時期の至るを待つに遑あらざるなり。然らば則はち巣を營ましむるやう、鳥類を奬勵すると同時に、鳥巣に對ひて害を及ぼすものを防禦することの有効なるは、徒らに机上の空論にあらずして、實に現金と價値を齊ふし、收穫の多少、結實の良否の如何は、皆是によりて左右せらるゝものなり、諸人須らく此理を思はざる可けんや。　（完）

◎稻麥の害蟲キリウジと其驅除法に就て（續）

名和昆蟲研究所長　名和　靖

（第六）特性其他の要點　キリウジの土中に潜居の際に、土表に小孔を穿ち、時々その腹端を露はして四五寸以上の高さまで、排泄物を放射する狀態は、また一奇とすべし。是れ何れの動物にもあれ、その廢棄物は衞生の害毒たるを以て、棲處以外に之を將去るを通例とすれば、キリウジのこの妙用れ、恐らくは其に代ふるものならんか。彼の田面に、小塊をなせる汚泥の、恰かも降霰の如くに散布せるは、全たく其痕を留めたるにて、即はち田中に此害蟲の棲息を證明するものとす。

（備考）　嘗て試驗のためにとて、數多のキリウジを器中に容れ、之を枕頭に置きしに、翌朝その周邊に、泥土樣の小塊の點々墜落せるものあるを見、或ひは夜間に逃竄せしにあらざるやを疑がひ、之を細檢したるに、豈に圖らんや、是は全たく排泄物の散亂せるものなることを認めり。仍りて其後注目を懈らず之を監視せしに、或ひは直上に放射するあり、或ひは斜迸して容器の內面を漬すあり、又或ひは遠く逸散して其外に墜落するもの等ある事を確かめぬ。

此幼蟲の濕土中にあるや、吸氣の時、ポカポカと聞ゆる一種の音聲の如きものを發するを恒となす。又これを六日間水底に沈めて、其死活を試驗せしに、たゞ衰弱を呈せしまでなりしかば。後更に之を三十度の酒精に浸漬して、强弱を試ろみしに、半時を經て始て死狀を呈はせり、是れその外皮の極めて厚硬なるが爲めに直に酒氣の侵透せざるの結果たるべし。藥品驅除の至難なるは、以て證すべきなり。

明治廿三年六月のことなりき、岐阜縣多藝郡鷲巢村の苗代田に、多くのキリウジを生じ、全たく幼苗を害し盡したれば、詮方なき儘これを放任したる爲め、用水の乾涸したるより、滿田に蕃殖蔓延せり。斯るべしとは夢知らず、再たび播種せんとて、同月十三日不意に灌水をなせしに、キリウジは吸氣を妨げられしと見ゑ、初めは頭部を土中に挿入れ、腹端を水面に露はし居たりしも、水量漸やく增すに及び

て、直立吸氣の効なきを知りてにや、遂に倒行して急遽畦畔に聚集せりき。斯かる危急の際と雖ども、能く浮游するに堪へ得ざるは、その常に無機質を多食して體重を増すに因る、驅防を講ずる者は、逆じめこの弱點を知らざる可からず。而してこの害蟲は、年々各地の苗代田に、多少の發生あるは勿論、時としては夥たゞしく群集して、殆んど稲苗を皆無に歸せしむることあり。唯り苗代田に發生するに止めず、濕潤なる紫雲英田若くは麥田等にもまた發生加害をなす、故に此等の土地を直ちに苗代田となすか或ひは苗代田の附近に發生地多きか、又或ひは紫雲英肥若くは臭氣の烈しき肥料ありて、且つ土壤柔軟なる時には多くは被害の災厄をうく、蓋し稲苗を嚙食せんとにはあらざるも、其嗜好の腐敗有機質に誘なはれて遂にこゝに至るなり、彼此混視すべきにあらずと思はる。

（備考）　明治廿三年六月十二日、美濃國安八郡南頬村の或苗田にて實驗せし時、甲田は被害の見るべきものなかりしに反し、僅に一畦を隔てたる乙田は實に慘狀を呈せり。依りて其原因を探りしに、甲は赤褐色を帶べる硬質土にて、乙は黑褐色をなせる軟質土に屬し、一は有機質の少なきに、他は多く含有せりき。更に之を確かめんとて、耕作者に質したるに、果して甲地には燒土等を肥料とし、乙地には紫雲英及び人糞等を多用せしとなり。以て明らかに肥料と該蟲との關係を知り得べし。

今苗代田に於ける被害の順序を云へば、初めは畦畔の附近に起り、漸次中央部に及ぼすを普通とす。すなはち苗田滿水の時には、悉ごとく畦畔に集合し、その減水して、田土漸やく露頭するに至れば、直ちに中央に侵入す、これ灌水の高低に伴れて、進退をなすものなるが故に、落水の時にあらざる上は、幾日たりとも畦畔に潜伏するに因る。去ればその發生の多き時に永く灌水せざる事あらんか、忽ちにして中央部に群居するを認め得べく、而してその往返のために、或ひは稲苗の倒さるゝもの、稀には嚙斷せらるゝもの等、次第にその數を増すに至るべし。就中、畦畔には絶えず其隱棲を見るが故に、隨うて害も亦多く、滿水數日に渉れば、その土壤をも膨軟ならしむる事あり、嘗て跣足にて畦上を歩行せしに、

蹶底ょ異様の刺戟を受け、一時感覺を惡しうせりと云へる實話のあるに徴するも、被害田の畦畔地下ょは幾百千のキリウジを伏藏するやを想察せらる。余が知る所ろによれば、之が加害の最とも旺盛なるは苗の一二寸ょ生長する迄の頃ょあり、勿論、直接に苗を蝕害するものょはあらざるも、有効肥料分の減少と、其蹂躙の爲めに倒死する稲苗の損害とは、また農家の収益を減殺するょ等しく、重きは全たく秧苗を絶無に歸せしめ、輕きも亦五六割の加害をなすことは屢々各地ょ之あり、思ひ且つ備ふる所ろ無かる可からず。世間或ひは未だ其害を知らずといふ者あるも、少害の時には農家の眼中ょ入らざる事多ければ、直ちに其説を信憑し難かる可し。想ふに彼のキリウジの害ありとて、倉惶驅防を講ずるの時期の如きは、概して三四割被害の後にありと言ふも、敢て不可なきに似たり。

（備考）　明治廿三年六月、美濃國安八郡、不破郡、多藝郡等に該蟲多生したりき。當時其被害額を調査せしに、安八郡東前村大字田中地方の苗田は、平均凡そ二割、不破郡靜里村地方は凡そ一割五分、多藝郡口ヶ島村地方は凡そ二割五分、同郡鷲巣村地方は凡そ三割の歩合なりきと。平均數に於てすら、斯くの如くなれば被害劇甚地に至りては、往々稲苗絶無となり、再播三播をなしたるも、遂に好結果を得ること能はざりき（多少は雀の害もありき）。
以上の事實を、同年五月下旬の新聞紙上にて時々報道ありしを以て、六月八日に、前發生地と近距離の羽栗郡笠松附近より、柳津、小熊及び厚見郡茶屋新田を經て鏡島村の苗代田に到り、其の被害の輕重を視察せしに、皆多少の被害を認め、特に甚はだしき地方にありては、再播をなすもありき。去れど驅除法に至りては、一も之を實施する者無く、少害地の如きは未だ殆んど害蟲の有無ょすらも注意せざりき。

キリウジの加害は決して、稲苗ょのみ止まらず、秋季には、大小麥田に發生して痛く嫩苗を損害すること多し、而して其麥田が初めに乾燥する地形なりせば、到るところ潜伏ょ適するより、被害の多きは論を俟たざるも、若し耕種、發芽の前後ょ停水の土地ある時は、苗代田と同じく、先づ畦畔の近傍より、漸次その害を中央ょ及ぼすを見るべし、而して之が被害の多きは、概むね堆積肥料の如き、有機質ょ富

めるものを用ゐたる耕地にあり、其理由ゝ至りては、また茲ゝ再説するの要なかる可し。唯記臆すべきは、キリウジの斯く多く麥田に群棲するは、之を蝕害せんとてにはあらざるも、其性全く植物を嚙斷せざるにあらざれば、夥しく發生の際には、往々再播種を感ぜしむるまで、麥苗を害すとの一事なり。

(備考)　明治卅三年十二月七日、美濃國大野郡深坂村の或麥田にて、其大發生加害の狀を見しに、畦畔には特に其害多かりき、而して最初田水を湛へたる間は、畦畔にのみ群居せしも、その麥田さなりて乾涸するに及びてや、漸次各處に移殖加害の形蹟を留めたり。此等被害地は、大抵再播種をなしたりしが、其肥料は緑肥若くは堆積肥なりきと云ふ。又群棲の處には、鴉の降下し來りて、堆積肥の間よりキリウジを啄食するをも認めぬ。

(第七)化育の狀態　前にも述べたる如く、キリウジすなはち幼蟲期には、腹端に開口せる兩氣門を以て、吸氣作用を行ふが故に、腹端は常に上向す。斯くて一たび化蛹するや、氣門の位置自づから變じて胸部の兩側より突起せる細管の呼吸口となるゝより、蛹期には其腹部を土中ゝ藏し、たゞ頭胸部のみを地上に露出す。已に蛹期を過ぎ、成蟲即はちキリウジ、カガンボとなれば、專はら産卵の準備を營み其適處として、濕潤なる軟泥の多き地を擇ぶに至る。さて産卵の狀は、先づ長足を以て地上ゝ立ち乍ら、急ゝ腹部の尖端を軟土中に衝入れて下卵し、幾たびも斯くして、個々別處に産附するものなるが、其敏速なること實に意外にして、急劇に尾端を上下すること數回、數粒乃至十數粒を連續産附の後、始めて少しく憩らふ、此間にも更に産卵の位置を擇び、後また蕃殖作用を開始すること初めの如し。然は云へ産卵毎ゝ蚑行を絕たざると、また巧みに腹部を屈曲し、肯て同一位置ゝ放卵せざるを以て、卵子は初めより、各々恰當の位置を保つゝ似たり。余が實驗ゝよれば、一雌の産卵數は、約二百五十粒に下らざるが如し、而して之が生育を遂ぐれば、自由に飛翔して、或ひは花蜜を吸收し、又夜間燈光に誘致せられて、往々室内に入來る。

（第八）切蛆の天敵　キリウジの天敵は一にして足らざるも、主なるものは鴉と蛙の類なるべし。鴉はもと好んで小動物を生食するより、キリウジの多生せる麥田等には、群飛して之を啄ばむ。然るを之を指して直ちに麥田の害鳥となすものあり、是れ未だ鳥蟲の關係を知らざるの結果にて、其農家を益せるの功は、田面蹂躙の害に較べて、寧ろ多きものあらん、そは鴉群の有無を見て、キリウジの多少を卜知するに足るればなり。但こゝに鴉腹を解剖して、捕食蟲の實數を記載するの機會を得ざりしを憾むのみ。

（備考）　斯氏農書第千九百十一章に云ふ。白嘴鳥はオート（燕麥）の田野蛆害に罹りて、嫩葉の色常ならざるを見れば、一々其土地を覆へして蛆を驅る特に忙はし。ペルケリー、グラントレイ氏の説に據れば、白嘴鳥の蛆を食ふ一日に其量一磅（本邦の百二十目）なり、云々。是れ鴉の如何にキリウジを悪食するやの一例として見るべきなり、讀者それ本邦産と英國産の相違を以て、鴉の捕蛆益鳥たるの事實を沒するこさ勿れ。

鴉に亞ぎて、この害蟲を多食するは、蛙類なり。こは敢て徵證するまでも無く、キリウジの發生せる田地には、多くの蛙族の來り聚りて、頻りに捕食する事實に照ふして明白なるべし、更に試ろみに、蛙を解剖して胃中を檢すれば、多くのキリウジの殘留を認むべく、又數次これにキリウジを與へて、其の貪食の度を實驗する時は、豫想外にこれを好み食ふものあることを會得するに至らん。

去れば以上の二動物は、確かにキリウジの天敵にして、その之を保護すると否やとは、直ちに被害の多少に關はるものあるを知るに足らん。其他、なほ家雞によりて得たる成績を擧ぐれば、初めこれをキリウジの發生地に放養するや、何となく捕食を好まざるが如くなりしも、その二三頭を啄ばみ試ろみたる後にありては、反つて悦びて多食の狀を呈したりき。又昆蟲類ありせば、蜻蜓の如き、蟷螂の如きも、暗々裏に天然驅除を行ふの一强敵たるべしと雖ども、是は精確の記載をなし難きものなるを以て、玆に明言すること能はず。

（第九）豫防及び驅除法　凡そキリウジの加害を豫防驅除するの方法に關しては、從來幾種か唱道せらるゝも、孰れも十全とは言ひ難し、蓋し土地の實情により、また其發生の遲速によりて、大ひに斟酌を要するものあればなり。故に先づ此害蟲の性狀、經過等を知得し、其地方に適切の方法を實行するに非ざれば、決して確然たる奏功を期し難し、世人或ひは煙草の浸汁を以て、其死滅を圖らんとする者あるも、前にも敍述せるが如く、三十度の酒精に投入してすら、三十分時の後にあらざれば、死狀を呈せざるものなれば、斯かる薄弱の藥劑にては、直ちに族滅せしむること容易にあらず。

（備考）　明治廿三年六月初旬、美濃國多藝郡口ヶ島村に於て、苗代田四步（即はち二間四方）に石灰一貫五百匁、魚油一合を施用せしに、之が爲め一時全たく殲滅せしめたる如くなりしも、其後未だ一週日ならざるに、またキリウジの縱橫に跛行するものあるを見たりき。これによりて之を考ふれば、全滅せしが如くにして、猶ほ生存せし遺族ありしか、或ひはまた一時は全滅せしも、藥劑の効力を失ふに至れば、重れて容易に侵襲するものなるか、二者その一に居らん。而してこの藥劑の施用量を、一反步に換算すれば、實に石灰百十二貫五百目と魚油七升五合を要する割合なれば、假し永久に殺蟲力を保續すとも、農家經濟上、之が使用の不可なるを認むべし。

是故に、藥劑驅除の硏究の如きは、之を他日に讓り、その得失相償ふに足るべしと自信する數法を左に列擧し、以て每歲キリウジの害に罹る地方の讀者の參考に供せんとす。

（一）苗代田には、舊來の窒素肥料のみを施用するとなく、特に臭氣ある有機質に富めるものを避くべし。舊慣法の苗代田なりせば、過燐酸石灰の如き物を混用するも多少蟲害を豫防するの効あらん。

（二）濕潤なる土地にありては、常に乾燥ならしむるやう注意し、疏水法若くは外溝を設けて、溜潴を排除すべし。是れ啻り、蟲害を除くに足るのみならず、地力增進の上より見るも、將來非常の利益あるべし。

（三）鶉、蛙その他の益蟲類を保護し、これをして天然驅除を行はしむるに勉め、又適當の時期に、時々家雞を放養せば、農家の利便特に多かるべし。

（四）畦畔に害蟲の群集するを窺がひ、熱湯を注ぎて死滅せしむるも一方なるべし。去れど煩累多ければ、棍棒の如き物を以て、群棲の地上を強く亂打するか、若くは其土壤と共に深孔中に投入するを佳とす。

（五）田面に廣く蔓延して驅防に困難を感ずる時は、腐敗したる藁稈を處々に堆置き、こゝに集合せしめ

て後、急に灌水を行ふべし。斯くなす時は、害蟲は遽たゞしく、其の積堆物の間に集まり潜むものあるを以て、直ちに家雞を放ちて捕食せしむるか、又は多く集まれる藁稈を、養雞場に送りて雛餌に充てしむべし。

（六）苗代田に湛水を續くれば、蟲害の憂ひ極めて少なきも稻苗の生長を障害するの恐れあり、之を救はんと欲せば、豫じめ畦畔の四周に、深き小溝を穿ちて、常に水を滿たし置くべし。斯くなす時は、假令、數日間排水を行ふ事ありとも、概むねその害に罹ることなかる可し。

（七）羽化の際に其成蟲たるキリウジ、カガンボを撲殺するは、實に容易の業なれば、勉めて之を行ふべし。又點火誘殺するも、之が減滅の一助たるべし。

（完）

◎瓢蟲類の分布と食物調査

名和昆蟲研究所調査主任　名和梅吉

本邦に產する瓢蟲は、其種類甚はだ多く、且つ有益種と有害種との一類兩種あり。そは嘗て本誌第廿四號より第廿五、六號第三卷に渉りて、廿九種の瓢蟲に就き圖說もし、又本年二月、岐阜縣昆蟲學會の開設せる冬季昆蟲展覽會に際し、積年採集せるものゝ中より、三十種を選拔して、其食物區別の略表を製し、之を一般の觀覽にも供したれば、爰に再說せざるべし。たゞ同展覽會に岐阜縣下の各郡市より出品せしものに就て、他方面より之に調査を加ひ、以てその分布と食物の一斑をものせんとす。

一、テントウムシ、ダマシ（僞瓢蟲）（Epilachna 28-maculata, Motsch.）產地 岐阜市、羽島郡、海津郡の一市二郡（第三卷第八版第二圖）

二、オホ、テントウムシダマシ（大形僞瓢蟲）（Epilachna 28-punctata, Fab.）產地大野郡（第三卷第八版第一圖）

三、ジフイチホシ、テントウムシ（十一星僞瓢蟲）（Epilachna admirabilis, Crotsh.）（第三卷第八版第三圖）

以上の三種は、植物質を食するを以て、農作上の害蟲とすべし。其重なる加害食物を茄、胡瓜、馬鈴薯等となす。

四、テントウムシ(瓢蟲)(Ptychanatis axyridis, Pall.)產地岐阜市、羽島、海津、不破、本巢、武儀、加茂大野の一市七郡(第三卷第十版第一回より第二十四迄)

五、ナナホシ、テントウムシ(七星瓢蟲)(Coccinella 7-punctata, L.)產地岐阜市、稻葉、羽島、海津、養老不破、安八、揖斐、本巢、山縣、武儀、土岐、可兒、加茂、大野の一市十四郡(第三卷第八版第六圖)

六、ココノホシ、テントウムシ(九星瓢蟲)(Coccinella 9-notata, Harbst.)(第三卷第八版第七圖)

七、シロホシ、テントウムシ(白星瓢蟲)(Vibidia 12-guttata, Poda.)產地岐阜市、稻葉、羽島、海津、安八揖斐、本巢、武儀、土岐の一市八郡(第三卷第八版第四圖)

八、オホシロホシ、テントウムシ(大白星瓢蟲)(Coccinella 12-maculata, G.)產地岐阜市、羽島、海津、養老不破、武儀の一市五郡(第三卷第八版第五圖)

九、ヒメカメノコ、テントウムシ(姬種龜甲瓢蟲)(Propylea conglobala, L.)產地岐阜市、稻葉、羽島、揖斐本巢、山縣、武儀の一市六郡(第三卷第八版第九圖)

十、コカメノコ、テントウムシ(小龜甲瓢蟲)(Coccinella japonica, Thunb.)第三卷第八版第十一圖)

十一、ムツボシ、テントウムシ(六星瓢蟲)(Coccinella transversoguttata, Fald.)(第三卷第八版第十二圖)

十二、マクガタ、テントウムシ(幕形瓢蟲)(Coccinella crotchi, Lew.)產地岐阜市、羽島、山縣、武儀の一市三郡(第三卷第八版第八圖)

十三、ヨツボシ、テントウムシ(四星瓢蟲)(Platynaspis Lewis, Crotch.)產地岐阜市(第三卷第八版第十八圖)

十四、フタホシ、テントウムシ(二星瓢蟲)(Hyperaspis japonicus, Crotch.)(第三卷第八版第十九圖)

十五、クロイロ、テントウムシ(黑色瓢蟲)(Scymnus ferrugatus, Moll.)(第三卷第八版第二十一圖)

十六、コクロ、テントウムシ(小黑瓢蟲)(Scymnus liaris, Motsch.)(第三卷第八版第二十圖及第二十六圖)

十七、セスヂ、テントウムシ(脊筋瓢蟲)(Scymnus sp?)產地岐阜市、羽島、海津、揖斐の一市三郡(第三卷第八版第二十二圖)

以上の拾四種は、常に如何なる種類の植物にも、發生加害する彼のアブラムシ(蚜蟲)の類を好んで食物と爲す。故に之に保護を加ふる時は、著るしく天然驅除の功を奏し得べし。

十八、ヒメアカボシ、テントウムシ(姬種赤星瓢蟲)(Chilocorus similis, Rossi.)產地岐阜市、稻葉、羽島、

海津、安八、本巣、武儀、土岐、大野の一市八郡(第三卷第八版第十七圖)

十九、アカボシ、テントウムシ(赤星瓢蟲)(Chilocorus tristis, Fald.)産地土岐郡(第三卷第八版第十六圖)

二十、アトボシ、テントウムシ(後星瓢蟲)(Scymnus bipuncta, Kugel.)産地岐阜市、羽島郡(第三卷第八版第二十三圖)

二十一、オホフタホシ、テントウムシ(大形二星瓢蟲)(Scymnus sp?)産地岐阜市、海津郡(第三卷第八版第二十四圖)

二十二、クビアカ、テントウムシ(頸赤瓢蟲)(Scymnus sp?)産地岐阜市(第三卷第八版第廿五圖)

二十三、ベニヘリ、テントウムシ(紅縁瓢蟲)(Novius limbatus, Motsch.)産地岐阜市(第三卷第八版第廿七圖)

二十四、アカイロ、テントウムシ(赤色瓢蟲)(Novius concolor, Var.?)(第三卷第八版第廿八圖)

二十五、ムヂ、テントウムシ(無地瓢蟲)(Novius concolor, Lew.)(第三卷第八版第廿九圖)

二十六、ギフ、テントウムシ(岐阜瓢蟲)(Aspidimerus orbiculatus, Gyll.)産地岐阜市(第三卷第八版第三十圖)

以上の九種は、絶えずカヒガラムシ(貝殼蟲)等の害蟲を食物となして、其口腹を飽かすもの丶みなれば、これまた前者と同じく、常に保護するを良とす。

二十七、キイロ、テントウムシ(黄色瓢蟲)(Coccinella 10-punctata, Var.?)産地岐阜、稲葉、養老、山縣、武儀の一市四郡(第三卷第八版第十三圖)

二十八、ダニクヒ、テントウムシ(喰壁蝨瓢蟲)(Gn? sp?)

以上の二種は、各種の植物に加害する、彼の壁蝨類を食物となすを以て、同じく有益蟲たるなり。

二十九、カメノコ、テントウムシ(龜甲瓢蟲)(Ithone hexaspilota, Hope.)産地岐阜、羽島、海津、安八、揖斐、本巣、武儀、加茂、土岐、大野の一市九郡(第三卷第八版第十四圖)

此種ハ、特に柳樹の害蟲ヤナギハムシ(柳葉蟲)の幼蟲及び蛹等を以て常食となす。

三十、オホ、テントウムシ(大瓢蟲)(Synonycha grandis, Thunb.)海津、武儀の二郡(第三卷第八版第十五圖)

此種は、桑樹に多く發生加害するクハジラミ(桑蝨)の幼蟲、蛹等を貪食するものなれば、クハジラミに困しめらる丶桑園にありては、固より之を移殖保護の要あるべし。

斯の如く、唯々一のジフイチホシ、テントウムシを除くの外は、皆岐阜縣下に捿息するは事實なり。而して此分布區域たる、全たく同展覽會出品の標本(元來瓢蟲類の冬季越年は殆んど成蟲の有樣なり)を本としたるものなれば、實際はなほ弘く各郡に分布するも、之を採集し得ざるの結果、斯く小區域に止まりしならんかと思量せらる。啻に岐阜縣下の分布區域を調査するに止めず、今後數年の後には、全國各地の所産をも、對比研究以て斯學講明の用に供せんとの希望なれば、吾が同志の讀者の續々此種の報道に吝さかならざらんことを冀ふのみ。

因に云ふ。冬季昆蟲展覽會の際海津郡よりの出品中に、本誌第六卷(第五拾參號)第三版(イ)圖に描出せしが如きものあり、此は瓢蟲類の一種にして Hippodamia 屬のものかと思はるれば、參考として茲に附記す。

◎第拾貳回全國害蟲驅除講習會員の五分時演説

去五月十五日より二週間、當昆蟲研究所内に開設せる第十二回全國害蟲驅除講習會開會中に、例により同講習生のなしたる五分時演説の一部を左にものす。但紙面の都合により、茲には各方面を代表すべきもの丶みを收錄し、他は永く研究所に存稿することゝなしぬ。

(一)農業界に對する吾が希望　三重縣　和波久司

私は永らく書生生活をして居りまして、學校を出た時に或講習會に招ばれました、主賓は或老生で、外に新學士二人と、其他は皆私と前後して學校を出た人達でありました、此時私も其人々の末班に列して一席の講話を致してみました處が、閉會の後に老先生が、君は感心な事を言ふた、併し君の食ふたもの

は未だ十分に消化して居ないで、飯は飯、肉は肉、大根漬は大根漬と云ふ様に、どれもこれも全然原形の儘である、消化せないでは身體を肥やすことが出來ないではないかと申された、私は之を聽て實に冷汗を流した、是れは畢竟學問の製造販賣を仕損じた爲めであります、勿論、受賣販賣は宜しくは無いが製造販賣を致さうと云ふに就ても、餘程土臺を確ッかりせんければ成らぬのである。そして私の希望と云ふのは外ではありません、曾て京都嵯峨天龍寺の管長たりし峨山老和尚が、東京に居られた時に、或人が東京の摸樣を尋ねた、それに答へた和尚の手紙を見ましたが、斯ふいふ事が書てある、……昔佛在世の時魔王あり、曰く吾れ佛弟子となりて佛法を滅ぼさん云々と、これは惡魔が手を替へ品を替へ、種々の手段を廻ふして佛法を亡ぼさんと企だてたが、如何しても目的を達する事が出來ぬ、それで是非とも佛弟子となり、佛の仲間入をせなければ、佛法を亡滅さする事が出來ぬものと認めたのでありませう其次には、政治家は政治を亂し、學者は學問を亂し、宗教家は宗教を亂し、實業家は實業を亂して、實に嘆かはしい有樣であると云ふ意味に書いてある。私は此言葉に就て大層面白く感じて、或ひは社會半面の眞理が表現せられて居ないかと迄思ふたのであります。凡そ物の亡ぶるのは、外部からよりも寧ろ內部から起因する事が多い、他處から泥棒が入ッても決して身代に疵が付かないが、若しも內の息子が財産を攫み出すやうであッたら、其れこそ家の破滅であります。偖これを我が農業界に引當てゝ見たならば、如何であらうか、天下泰平國家安穩と空嘯で居るならば格別、若しも農界の前途に憂ふべしとするものが有ッたとすれば、その憂ふべき原因は何處に在るだらうか、果して外部に在るだらうか、將た內部に潜伏して居るだらうか、是れ大に研究すべき問題ではあるまいかと思ふ。私は必らずや此危險が農界自身の內部に潜んで居ることゝ確信致します、既に內部に潜んで居るとすれば、害蟲の害よりも更に大なる災害が含まれては居らぬか、これぞ夙夜私らに憂ひとする所であります、而してこの危險の大驅除を行ふには、是非とも共同一致でなければならぬ、就ては少くとも此全國害蟲驅除講習會員が、先覺者となりて、早くこの驅除に力を盡されん事を希望致すのであります。

（二）應用昆蟲學の擴張に就て　栃木縣　渡邊新三郎

農業を以て國民生業の最大要部となす我が國に於ては、農林業の豐凶に密接の關係を有する益蟲の利益を圖り、兼て害蟲の驅防を行ふのは、實に焦眉の急務であらうと思ふ。私は漸ッと三年前から、社會の必要に促されて昆蟲と云ふ事に注目は致しましたが、地方には一人も熟達の人がありませんので、空し

く月日を遲らし居る中、昨年溝部縣農會長は茲に見る所がありましたと見ゑて、佐々木外山の兩學士を聘して、害蟲驅除豫防の講習會を三週間開く事に致されました、そこで宿望を達したいと存じ河內鶴見郡農會長に請ひまして、入會を致して見ますると、昆蟲學と云ふものハ、緻密深遠なもので決して容易く研究し得べきもので無いことを悟り、漸やく五六の蟲種の性質を略記したに過ぎませんであッた。併しそれからは多少歩き乍らも蟲が目に注く樣にもなりましたから、尚一層と思ひまして今回の講習會へ入會した譯でありますが、當研究所の摸樣を窺ひますと、其標本といひ、幼蟲飼育といひ、組織といひ、設備といひ、將また方針といひ、加ふるに名和先生の熱心といひ、陰で聞きましたよりは數倍も增して完全して居ることを認め、早く入會せんであッた事を悔ひましたのです。而して害蟲驅除上の要件の如きは、既に先生より懇切に且つ緻密に敎授せられまして、作戰計畫の方針も明らかでありますから、將來は互ひに氣脈を通じ、今日の示敎を實地に應用して、斯學思想の普及を圖るのが吾等講習生の任務であらうと存じます。なほ終りに一言述べ置きたい希望があります、それは我が國では農事改良の件に付種々の獎勵がありまして、農會を系統的に組織させ、又品評會なども同樣の方法として、各方面から莫大の補助督勵を行はれますが、唯り昆蟲學の研究に對しては、比較的十分でないやうに考へられます、依つて私は名和先生は勿論、又その他斯學に功勞あり名望ある學者で、昆蟲學に精しい先生達を帝國議會に加ひ、全國の利害を他の議員に知らしむるのが最とも必要で、是は害蟲驅除よりも差向急務の事と信じます、少々漠然たる希望のやうではありますが、此處に居らるゝ同窓會員ばかりでも、一府十七縣下の選抜者で、地方に歸ふるゝと其々地位を有せらるゝ方々であるから、衆心協同事に當る以上は、輿論を喚起する位ゐは難事でなからうと思ふのであります、希くば豫じめ此抱負を懷いて自重自愛、以て他日の成功を期せられんことを冀ふのである。

（三）金龜子の驅除物に就ての質疑

鳥取縣　龜田繁治

私は國に居りますと、少かばかりの養蠶を……それも一昨年からやッて居りますが、昨年の事でありました、蠶沙が不思議にも野菜の害蟲金龜子の驅除劑となる事を見出しました、是が果して驅除の功を奏するや否やは、固より疑問で、僅々一年間の試驗でありますから、之を是認するの價値が無いのでありますが、今ろの茲に至りました次第を申述ぶるならば、私の屋敷から一段低い處には、一枚の畑がありまして、其畑には年々野菜ばかりを作ッて居るのであります、然るに其隅の方をば蠶沙の捨場と致して

居りましたのは、如何なる譯か、捨塲の近傍に限り蟲が附きませんで、少し隔つと一躰は蝕害せらるゝのでありますから、偶然蠶沙のために斯かる奇効を奏したのでは有まいかと存じまして、早速之を全園地の野菜に振かけ置きました處が、未だ一週間も過ない中に、金龜子は十中の七八確かに死滅致したのであります。そこで私は蠶沙にして除蟲の効がありますれば、頗ぶる愉快い事であらう、即はち一方では窒素分に富んだ肥料として之を蔬菜に施こし、一方では驅蟲劑として之を重用するに至らば、所謂廢物の利用で、農家は取ッては鋭利なる武器を備へたものであると思ふのでありませ。就ては諸君に、その試驗を願ひまして愈々効能が有るか無かを確めていたゞき、次には果して有効とすれば、何のために驅蟲劑となるかと云ふ事を講明して欲しいのであります。併し乍ら、前述の如く、全たく偶然の結果から、獨り自から驅除の功を奏しはしまいかと疑ッて居る次第でありますから、玆に奏功の有無は申しません積りで、なほそれは就ても本年は再たび試驗を積む心得であります。（未完）

◎蟷螂の飼育と其保護法

第三回全國害蟲驅除講習修業生　静岡縣　神村直三郎

益蟲が農作物の害蟲を斃すの、はたらきあるの側より言へば、蜻蛉と蟷螂は、大形のものにして誰人も、これを益蟲といふことを、憚らぬ様になりました。併し如何に益蟲でも、他の益蟲を時々捕殺することがありますが、これは致方がない、たま〳〵一二の失策がありましても、大躰を誤らねば宜しい、つまり害益を天秤にかけて、益が多ければ、益蟲といふであります。

そこで、私は遠江には幾種類の蟷螂が居るかと、頻りに注意して見ますが、四種はたしかに居ります、それはオホカマキリ、カマキリ、ハラビロカマキリ、コカマキリであります。ハラビロ種には緑色種と紫褐色種とありまして、コカマキリには淡緑色のものと、褐色のものとあります。多少の割合は、別に精しくは取調べませんが、普通のカマキリ最とも多くてオホカマキリ之に亞ぎ、ハラビロ又之に亞ぎ、コカマキリは、最少數であります。ハラビロとコカマキリとに、二種づゝあることは前に申しましたが、其二種はどちらも、同じ程位ゐづゝ居ります。それでオホカマキリとコカマキリは、山林原野に多く、ハラビロは川原堤防に多く、普通のカマキリは田圃に多く、殊に桑園に多く居ります。此割合を精しく調べんには、卵塊を取りて比較して見るが、近道だと思ひます、私は確固と表はは出來ませんが、數年卵を採集した結果を申述るのであります。それで蟷螂が益蟲で、他の害蟲を捕食するは、人の許す所でありますが、然らば何々の種類

を、何頭位ゐ食ふかと言ふことは、まだ確かには分らぬでありますから、私はこれを試みんと思ひ、昨年八月から一頭のハラビロを試育いたしました。然しこれは中年もので、孵化當時のものではありませんから、餘り面白くはありませんが、それでも、一斑は參考になるかと思ひます。

私の捕へましたは、明治三十四年八月廿九日でありました、此時は綠色でありまして、まだ成蟲には成つてをりませなんだが、九月十日に脫皮して成蟲となり、十月十二日に第一回の產卵をいたしました、其卵の大きさはあたりまへ位ゐでありました。それから前に言ふのを忘れましたが、成蟲となる時に變色して、綠色のものが紫褐色となりました、これは飼育の籠が細き針金製のホタル籠でありますから、其色に即はち外面の色に、保護色を造ッたのかと思ひしましたが、外のものを見ましても、此の如き色のものがありましたから、これは種類であるといふことを悟りました。それで產卵を濟しても、活潑で大食をしますから、變だと思ッて、養ッて居りますと、十二月一日に第二回の產卵をいたしました、これも其卵塊の大きさが、並のもの程あります、是を以て考へて見ますと、野外に居るものも二回位ゐは、產卵するものがあると見へます、此卵は交尾せぬものでありますから、孵化は致しますまいが、念のため試みるつもりであります。

其後此カマキリが、壽命を何程位ゐ保つかと、種々置き處をかへて保護をした結果、三十五年一月廿五日まで生存いたしまして、大寒のために斃死しました。其飼育の日數が、百五十日で、十二月の十三日以後は、一切食を取りません、又蟲をころすこともいたしませんが、其うちたゞ一月十八日に、大に暖かでありましたから、蠅を殺しましたが、食ふの勇氣はありませんでした、そうして見れば先づ百日の間食をしたでありますが、其間に何頭の蟲を食ひましたか、日記に就て調べて見れば、實に左記の通りであります。

○八月廿九日　小蛾　一、
○八月三十日　{オンブバツタ雄一、イナゴ雄一、}
○八月卅一日　{ツユムシ雌一、鼈甲羽衣一、}青葉羽衣五、金筋蓑切一、
○九月一日　アチバハゴロモ　三、
○九月二日　一文字セゝリ　三、
○九月三日　一文字セゝリ一、小蛾一、
○九月四日　小蛾　二、
○九月五日　一文字セゝリ　二、
○九月六日　一文字セゝリ　一、
○九月七日　オンブバツタ　一、
○九月八日　一文字セゝリ　一、
○九月十一日　一文字セゝリ　二、
○九月十二日　一文字セゝリ　一、
○九月十四日　{一文字セゝリ一、ウスイロコジヤノメ一、}
○九月十五日　一文字セゝリ　六、
○九月十六日　一文字セゝリ　八、
○九月十七日　一文字セゝリ四、クダマキダマシ雌一、ウスバキトンボ一、
○九月十八日　一文字セゝリ　四、
○九月廿日　京女郎　一、
○九月廿三日　一文字セゝリ　二、

○九月廿五日 一文字セヽリ 四、キチヽバツタ 一、
○九月廿六日 一文字セヽリ 四、
○九月廿七日 一文字セヽリ 一、
○九月廿八日 一文字セヽリ 一、
○九月卅日 一文字セヽリ 二、
○十月一日 一文字セヽリ 二、
○十月二日 一文字セヽリ 一、
○十月三日 一文字セヽリ 一、
○十月九日 一文字セヽリ 二、
○十月十三日 一文字セヽリ 五、
○十月十六日 モンキテフ 一、
○十月十七日 イナゴ 雄一、
○十月廿一日 モンキテフ 一、
○十月廿三日 一文字セヽリ 四、
○十月廿七日 キテフ一、青葉羽衣一、オンブバツタ 雄一、
○十月廿八日 オンブバツタ雄一、ツユムシ雌一、同雄一、キテフ 雌一、
○十月卅日 オンブバツタ 一、
○十月卅一日 オンブバツタ 一、
○十一月一日 クモガメ 一、
○十一月三日 ハナアブ 一、
○十一月四日 ハナアブ 一、
○十一月十日 ハナアブ 四、
○十一月十三日 ハナアブ 一、大ハナアブ 一、
○十一月十五日 ナツアカ子トンボ一、
○十一月十六日 ハナアブ 一、
○十二月七日 ハナアブ 一、
○十二月十日 ハナアブ 一、
○十二月十一日 ハナアブ 二、
○十二月十二日 ハナアブ 二、
○十二月十三日 ハナアブ 一、

合計百十六頭

以上の結果を見れば、實に驚くべき貪食と云はねばなりません、これは毎日與へらるゝが故に、多食するを得て、然も二回まで産卵したる言はゞ果報ものかも知れませんが、女郎花の傘形をなしたる、花の下に潜みて、花に來る一文字セヽリなど、捕ふる手際は、實に老練なものです。此手際を拜見しては一日に八頭の一文字セヽリ位ゐはかせぐだらうと思はるゝです、食物の中で最とも好むは一文字セヽリとオンブバツタと、其外蝶蛾類の樣に見うけました。これで兎に角大食の證跡があがりましたから、保護法を研究してやらねばありませんが、扨其保護法に就ては差當り良い考もありませんが、まづ卵塊を保護するがよいと思ひます、卵塊をどういふ樣に保護するかといふと、これには一種の寄生蜂がありまして、卵を斃死せしむることがあります、この蜂は黑色の蜂で、雌蟲は産卵器の身長より長い位のものを持て居ります、昨年中川先生が、其蜂の解剖を本誌上に出されましたし、又松村先生の日本昆蟲學にも載ッて居ります。私が實驗しました所によりますと、オホカマキリとハラビロカマキリの二種に限つて、此寄生蜂が出る樣でありますが、これはまだ研究の足らぬので、どの種類からも出るや知れないであります、それで一昨年は、一月以後に多く卵塊を採りました處が、蜂が大層出ましたが、昨年は其以前に採りました爲めか誠に少なうございました。又友人も早く取たから蜂が出ない、蜂の標本が無いから、蜂を貰ひたいなどと言ふた位ゐであり、ますこれから推測して見れば、産卵後久しく野外に置けば蜂の害は多く、早く

採り入れば害は少いではなかろうかと思ひます。これが果して識者の是認する所でありますれば、産卵後成るべく早く採集して、之を飼育籠ニ入れ、孵化せしめてこれを園圃ニ放つの策を取るのは、蟷螂保護の一方かと思はれますが、これも餘程注意せぬときには、孵化しても放つことを怠るか、又せまき箱等に入れて、壓死する樣な事があッては、蜂の害よりも多く仔蟲を殺すかも知れません。結局は一般農家の昆蟲思想を高めるニあるですが、卵を冬の中ニ取るは、學校生徒の運動などニ際して、益蟲保護法の一として、奬勵するは便法では無からうかと存じます。

◎害蟲と益蟲の定義を論ず

第八回全國害蟲驅除講習修業生　岡山縣　藤田政勝

昆蟲學上に於ける害蟲、益蟲の定義ニ就きて、從來諸家の論ずる所を見るニ、人生に對する利害の輕重を以て、之が分界となせるものゝ如し、即はち彼のカヒコが人生に對して、絹絲を給し、利益を與ふるの程度は、桑害上の程度よりも遙かに高きを以て、稱して之を益蟲となすが如きは其適例とすべし。吾輩熟々この定義を味ふるに、能く廣義に包括し盡せるが如き觀ありと雖とも、未た以て完全なりと云ふ可からず、何んとなれば昆蟲の種類によりて之が變態中、他に及ばす害益を異にする者亦少からざる可く、或ひは往々其害益の輕重をすふ比較し能はざる性質のものも之あればなり。況んや害益の輕重を、今日の時代ニ比較決定すと雖とも、將來如何なる變化を來たすべきやは、是れ亦豫想し難き問題なるに於てをや。今試みに、蚊に就て其例證を求むれば、此蟲や直接に人體を傷害するが故ニ、乃ち之を害蟲と論斷するか如きは、實に速斷と云はざるを得ず、蓋し細かに其變態中の狀態を見る時は、之が成蟲こそ衛生上の害蟲ならんも、其幼蟲に至りては水産上の益蟲なりと云はさる可からざればなり、而かも其利害の輕重を比較しなば、何人と雖とも輕易ニ判斷を下すこと能はさるべし。是れもと人類の衛生を以て無上の重大事となし、遂に此稱呼を與ふるニ至りたりとは云へ、苟くも學語を人生の産業上に於て論

ずる場合に在りては、遙かに半面の觀察を以て、其全體を判定すへきものならさるべし。是に於てか吾輩は害益蟲の分界を定むるに當り最とも緊密なる要件は、人生の產業の種別に在りと唱道せんと欲す。看よトンボてふ成蟲は、農業上の益蟲なるも、幼蟲のヤゴは則はち水產上の害蟲なるに非ずや。要は各產業に關して、之が利害の結果を人生に及ぼすの如何にあり。此推理にして謬らずんば、更に之が區別的定義としては、凡ろ害益蟲の區別は、人生の各產業に對する利害を以てすべし、との意見を提出せんとす。則はち各產業に於ける利害を以て其名稱を區分し、其範圍に於て之か驅除と保護とを講ずべきの至當なるを認るなり。以上の結果によりて、各產業上の應用的昆蟲學の必要は自つから之を生ずべし、例へば吾輩の如き水產學を修めたる者にありても、また之が究明の急務なるを感得すへきに依り、同志の參考として水產應用昆蟲學の定義及び範圍に關する卑見を述ぶれば、水產應用昆蟲學とは、水產昆蟲の性狀形態は固より論なく、苟くも漁撈、製造、養殖科に干繋を有する昆蟲に就きて、應用的に論究する學術を云ふと言はんと欲す、而して此範圍に於て其害益を分類し及び之を實用に供せしめ、彼クリケムシ蛾の如きものを益蟲と稱し、カツヲブシムシの如きものをば害蟲と呼ばしめ、更に又水產學上の分類に準じて、漁撈科に於ては前者の保護を論じ、製造科に於ては後者の驅除を說き、養殖科に至つてはゲンゴラウ蟲等の驅除を知らしむるに在るなり。以上は唯大要を示すに止まるも、先づ此方針によりて硏鑽の功を積まば、蓋し大過なからんと信ず。

編者いふ。本邦に於て昆蟲學を水產業に應用せし者の未だ之れなきは事實なるべし、隨て其定義も將た範圍も確定するに至らざるならん、藤田氏の着眼頗ぶる多とすべし。然は云へ、冒頭の害益蟲の定義云々は稍正鵠に中らざるの憾なきか。氏はよも通例害蟲とし云へば、主として農作上の有害種を、益蟲とし云へば、其敵者を指すものなる事を忘るまじきに、例證を衛生上の害蟲に籍りて之を論難し、又有効有用の蟲類と有益種とを、殆ど同視せるが如き語氣あるは、直ちに與みし能はざる所なり。これ本文に於ける瑕瑾とやいはまし。なほ昆蟲叢書第壹編害益蟲の部を參看せられなば、自づから了解せらるゝものあらん。

◎三化生螟蟲の蓑蟲狀移轉作用

第七回全國害蟲驅除講習修業生　愛知縣　矢野延能

夏季に於ける三化生螟蟲の蓑蟲狀移轉は、奇異ある一事實にして、嘗て德島縣及び和歌山縣に於て發見せられたる、秋季のものと通じて、彼が移轉上の特性を明かにし、併せて應用上の注意を喚起するに足るものありと信ず。其事實は左記の如し。

昨三十四年七月五日、三化生螟蟲を飼育中、第一化期の三四齢(多くは四齢)の多數が、蓑蟲狀を爲して運動するを見認めたれば、日々注意せしに、適々一頭の午前八時頃に蓑を作り始むる(多くは夜中に作るものゝ如し、晝間見當ることは甚はだ稀なり)を見る、其狀は稻莖の內部を蝕盡し、其莖に小孔を穿て歧出でたる幼蟲の稻葉を攀ぢ表面の中央にあり乍ら、匆惶として頗ぶる敵の侵襲を憂懼するものゝ如く頻りに頭部を左右に運び、葉の緣邊に絲を掛けつゝ徐々に退却し、その躰長の一半內外に達せる頃、また葉面に上り、斯くて最初掛けたる絲の內面より糸を掛け下り、數回反覆經營に努めり。屢次掛くるに從がひ絲は乾燥緊縮して葉面を彎曲ならしむれば、自つから圓筒形を成するに至る、兩緣漸やく接近すれば、復た葉面一体に絲を掛け、次に筒の上端を嚙み切りて、其切口には粗く絲を掛け、更に立返りて筒口を嚙む、斯く切斷するも、筒は豫しめ掛置ける絲によりて殘葉に垂下するか故に決して墜落することなし。已に準備全たく整へば、筒口に頭胸部を出して、蓑蟲狀の歧行を開始し、頻りに稻莖を昇降運動し、其水面を渡る時の如きは躰軀の六七分を出して蛇行狀の游泳を爲せり。而して其行進中試みに物を以て之に觸れしむれば、倏忽ち筒中に潛伏して容易に出でず、其狀恰かも一片の塵芥の如し(歧行中も絕ゑず絲を吐くを以て、葉端にあるときと雖とも墜落することは少なし)此被覆物の作用により、幸ひに敵の侵害を免かれて、其目的の稻株に達するや、筒中に在り乍ら、稻莖に橫孔を穿ちて蝕入す、此時筒は蝕入孔口を隱くして、塵片の附着するに擬せり、唯一種橫腕の如き異樣の觀を呈するのみ。既にして內部を蝕盡せば、徐ろに出て筒蓑を造り、隨時隨處に移轉することまた初めの如し。其奇巧實に驚くべきにあらずや。

此現象は啻り飼育箱裏のものに止らず、また野生のものに於ても屢次之を見、尋て第二化期に於ても之を認めり。而して被害稻を積置くときは、此より出て同狀を爲すことは、彼の德島縣下に唱道せらるゝ狀況と肯て異なることなし。

是に因て之を見れば、此蓑蟲狀の移轉たる、自然淘汰に基づける特有の移轉法あるを知るべし。由りて以て被害稻の處分に注意して其逃逸を防ぎ得べく、除草等に際して、稻莖に橫さまに葉片の附着するを見ば、則はち其加害を察して驅除を行ふべく、其移轉の盛んなる時を候へて之を捕殺するが如きも、豈に驅除の一方として試むべきの價ひ無しと言はんや。然し乍ら、稻の生育尙ほ幼稚なるときは、速かに其柔軟部を蝕盡するを以て、屢々出て他稻に移ふさる可からざれば、每に蓑衣を造るに多時を要し、自躰

の發育經過を遲延せしめ、遂に或ひは第二期幼蟲の越年にて終れるものも之あらん。之に反して本蟲の加害劇甚地に普通なる、所謂適作の如き、早植早稻の生育旺盛なるものに蝕入したる蟲にありては、自つから他稻に移轉の場合少なければ、發育經過促進の結果として第二化期は晩稻に蝕入し、遂に完全なる第三化期の發生を營むに至らん、要するに此作用は、多少其蕃殖力に影響するものあらん乎、是れ今より注目すへき點なりと信ず。（明治三十五年五月末日東豫農事試驗支場に於て之を記す）

名和靖云ふ。こは先年余が實驗せる事實に符合せり、たゞ記事簡約にして、少しく物足らぬ點もあれど、一の確説として讀者に紹介するの價値ありと信ず。但し余が實驗後に、幾たびか之を三化生螟蟲被害地の人士及び同志に質したるも、嘗て一人の正答を與ふる者無かりしを以て、今日まで其成績を公けにせざりき、今この實驗説を閲し、始めて積年の疑惑を解くことを得たり。

◎隨見隨聞蟲記

愛知縣渥美郡牟呂村　小柳津廣三郎

○尺蠖の數は幾何　本年は尺蠖の發生特に多かりし樣思はれしが、四月中旬の頃、學校兒童が各々桑の小枝に多く枝尺蠖を附けて、互ひに其數を當て合ふて戯ふるゝ樣の可笑しければ、余も其列に加はりしに、數回其附着の數を問はれしには困却せり、或時の如きは、一尺許りの小枝に十六頭を附着せしが桑樹の性質より考へて、彼れと此れとは確かに枝ならんかと心算し、十二頭なるべしと答へたるに、是はそも如何に、滿枝尺蠖のみにてありき、これを以て見るも其擬枝狀の巧みなるを知るべきなり。

○蟹螽の產卵　昨年の事なりき、余が通勤の途すがら、堅路の中央に蟹螽の直立するを目擊せしかば試みに之を捕獲せしに、圓徑二分許りの穴に腹部を挿し込めるなり、如何にせしならんかと思ひ、腹部を壓せば、意ひきや二三粒の卵子出でたり、偖は產卵中なりしかと思ひしも、斯くて又思ふやう、如何に蟹螽なればとて、斯かる堅き地盤に孔穴を穿ち得べきにあらざれば、必ずや敵蟲の爲め其巢穽に陷いれられしものならん、則はち卵子の如きは偶然流出せしに過ぎざるべしと。頃日名和先生の來臨を機とし、之を質したるに全く其產卵期に違はざることを說明せられ、本年ころはと希望を屬し居れり。

○塞翁が蟲　一日、降雨の前に當りて桑枝の剪入を援く、少焉ありて頸邊に苦痛を覺ふ、試みに人をして見せしむれば、毛蟲あり吾が衿緣を徐行するなりけり、乃はち捕へて之を破璃函内に收め、十日の後之を啓けば業に結繭を見る、後また一週を經て之を撿すれば既に成蟲の飛翔するものありて、函の一隅には、黄毛を以て被包せし卵塊さへも殘しありき。

◎土佐産の蟲報（第四）

高知縣土佐郡　武内譲文

○擬脈翅類、積翅蟲科　（一）カハゲナ。（二）ヒメカハゲナ。此科に屬するものにありては、此二種を産するを知る、共に海岸を距ること約四里以上の山中、溪畔に多し。

○蜉蝣科　（一）フイウ。（二）カトンボ。二種共に山中溪澗に産すること少なからず、其他猶ほ數種を産すと雖も、夏月炎天の候に、遠く數里の外に於て捕獲したれば、翅翼の完全を得て歸りしものなく皆考徵の要件を失へり。

○蜻蛉科　（一）ハグロトンボ。（二）カハトンボ。（三）ヤナギトンボ。（四）ミヤマトンボ。（五）青イトトンボ。（六）キイトトンボ。（七）イトトンボ。（八）アカイトトンボ。（九）ヤンマ。（十）カトリトンボ。（十一）ヒメヤマトンボ。（十二）オニヤンマ。（十三）キトンボ。（十四）テフトンボ。（十五）シヤウジヤウトンボ。（十六）シホヤトンボ。此中（一）と（三）とは海岸を距ること、四里以上の溪畔に多く（四）は更に其れより北方の山中に多産す、其他は皆到る處に之を產し、唯其習性に依りて稍棲處を異にするあるのみ、外に猶ほ數種あるも、皆捕獲當時標本に製する能はずして止みにき。

今や蜻蛉科を草するに當り、直ちに大和の蜻蛉野の古事を聯想せしを以て、序に之を記すべし。余は去る明治三十年を以て、大和に入りしが、それより吉野の山中に潜居すること三年、其間實跡を尋ね又深秘の舊誌に索め、舊家に就き古老に聞きたる結果として、蜻蛉野及び秋津離宮の古趾とは、少しく舊來の諸說と異なり、實は川上村井光の地に在る事を信ずるに至れり。川上村は上世賀美と稱し、中古小倉或は河野鄕の名あり、三里あり井光高原及び柏木と云ふ、之を小倉鄕三保と稱す、而して井光は其中央に在り。井光の山中に大なる古宮趾あり、土俗之を古皇と稱す。口碑に上古皇居の地たりと傳ふ、是れ即ち秋津離宮の古跡なるべし。蓋し其附近の山腹の草原をば秋津野といひ、又カゲロフノシバとも稱するに依りても推知せらる。それより一溪流を隔てゝ古樹鬱蒼たる靈山あり、山中に古祠あり、俗に之を井光の奧院と稱し、山を御船山といふ、飛泉あり御船の瀑といひ、溪流を船ヶ溪といふ、古歌に「瀧の上の御船山より秋津邊に來鳴きわたるはたれよぶこ鳥」とあるに徵するも、御船山と秋津野とは、少しく距たりて、遠く距たらざるを證

す可きなり。古宮趾の邊に一古祠あり、傳へて鄕祖井光を祀りし所なりと云ふ、今は其祠を人里の在る所に遷して井光神社といふ傳へて言ふ、此地は昔時數世間吉野の首長井氏の居里なりきと。(井氏後ち井戸井頭と稱し、其一族南部吉野、天の川の地に分移し、其中央金峯山上に井光神社を遷祀し、多く佛閣をも建造し、吉野執行此地に出て郡の政事を執りたり、今の吉野の地是れなり。)

○白蟻科 (一)シロアリ。此科のものは唯一種を產するのみ、山中に在ては松其他の老木に多く、屢次濕地の家屋又は屋材を害す、其害や實に大なり。

○羽蝨科 (一)ハジラミ。家禽を飼養する處には、殆んど產せざるなし、頗ぶる大害を逞うす。

脈翅類擬脈翅類附報　脈翅類をば土俗槪して蜻蛉と同視す。而してカハゲナの方言をカワ子コガヤリといひ、水畔柳樹の下より水蟲の化する所なりと稱す。イトトンボ類は之をホトケトンボと稱し、佛に對して之を殺す可からずと信ずるものあり、然は云へ、蜻蛉の種族は往々兒童の愛玩に供せらる。ヤンマをヤマといひ、オニヤンマをオホヤマトンボ、アカトンボをアカチ、シホヤトンボをモギチと稱し、シロアリをばハアリと稱す。

◎稻苗の害蟲キリウジの發生

在島根縣農事試驗場　田中房太郎

島根縣下隱岐國周吉郡北方村に於ける本年稻苗は、其生育例年に比し頗ぶる不良なりしも、農家は一に氣候の變調に歸し敢て怪むものなかりしが、漸次黃色に變じ、甚だしきは苗代の局部點々枯損し、去る五月十五六日頃に至りては、益々劇甚の兆を呈はし、被害苗代田十三ヶ所、此見積反別二町五反歩に波及せしを以て、農家は始めて恐慌を來たし、疾驅島廳に至りて應急の策を需めたり。依て農事試驗場八田分場長是光技手出張の上、調査を遂げたるに、是は全たくキリウジカヾンボの少しく濕氣を帶びたる地に產卵したる爲め、それより孵化したる幼蟲切蛆の苗代に集まりて、苗の幼根を傷害したるに因づるものなることを認め、乃はち戸長、村農會長、耕作人等を招集して該蟲の經過習性の大略を說明し、なほ驅除の方法を指示して之れが實行を督勵したるにより、辛うじて其害の彌蔓を豫防し得たりと云ふ。

◎農作害蟲發生景況報告

第八回全國害蟲驅除講習修業生　三重縣　西岡嘉十郎

當阿山郡新居村地方に於て、目下發生の農作害蟲中、最とも加害の甚しきもの數種を左に報告す。

螟蟲　去る五月二十五日、始めて螟蟲蛾の燈火に飛來せしを見し以來、日々苗代田を撿視し居りしに面積一畝十歩の苗代田より、廿七日には卵塊二個と、成蟲一頭とを捕ひ、次で三十日には五十三卵塊と

廿三蛾とを捕收せり、之れを昨年に比較すれば、大に減少の傾きあるも、尙ほ例年よりは決して尠少なりと云ふ可らず、而して第一化蛾の發生最とも盛なる時期は、この六月上旬より中旬迄ならんと推察す之れが驅除豫防としては、郡役所にては、例年の如く卵塊買收費補助法を設け、各町村に向て切りに卵塊の採取を奬勵せし結果、各町村に於ても卵塊買收を實行し、其他點火誘殺等をも併せ行ない、官民一致全力を注ぎて、採卵捕蛾に從事中なり。

浮塵子　去る五月十八日頃も、稻苗僅かに水上二三分位ゐなるに、既に浮塵子の發生加害せるを見き、例年に比し其發生極めて夥多あり、目下半圓形捕蟲器にて驅除し居れるものあり、其種類はツマグロ種最とも多く、白色種及び電光種は少なし。

蚜蟲　去る三月頃より、大小麥、蠶豆、紫雲英等に發生加害せり、就中、被害最とも多かりしは蠶豆にして、收獲皆無となりしもの往々之あり、本月に入りては更に蕓薹に發生し、益々蔓延の徵候あり。

フクロケムシ　越年せる幼蟲は櫟の新芽を悉ごとく蝕害し、到る處に發生加害を見ざるはなく、全林(櫟林)其害を被ふりて一の新梢を見ず、甚だしきに至りては往々枯死せるものも之あり。

其他桑及び茶の蛄蟖、枝尺蠖、守瓜、螟蛉等多少發生せるも、例年と敢て異なる事無きが如し。

◎大分縣大分郡驅除の稻作害蟲

大分縣　小野覺太郎

昨三十四年は吾大分郡の各町村に於て、蟲害を受けざる稻作あかりしが、毎度乍ら直接其衝に當る農家の比較的驅防心に乏しきは國家の爲め憂ふへきことなり。左に揭ぐる表は、當局者督勵の結果、驅除を行ひたる心穗枯及び螟蟲卵塊數あり、之を前に報導せる縣下の害蟲驅除表と對照せば、應に害蟲に對する觀念の如何を察知し得べきなり。

町村名	心穗枯	螟卵塊
西植田村	二一七、五〇〇	二、〇五五
賀來村	一三三、六〇三	三、七〇〇
石城川村	一〇〇、三〇〇	二、七〇〇
由布川村	七七、六八〇	—
狹間村	三七四、三九〇	—
阿南村	三九、〇八二	—
谷村	一九一、二〇〇	—
明治村	一四六、七〇〇	—
高田村	(田地ナシ)	
松岡村	四五、五〇〇	九五
判田村	六六、〇〇〇	二、一三〇
戸次村	四二、二〇五	—
吉野村	一五、八一五	九、二〇〇
河原内村	一三、八〇三	—
大分町	一二〇、九〇〇	一三〇
西大分町	八六、〇五五	六五九
八幡村	二八、〇〇〇	—
荏隈村	一九七、一〇〇	五一、九九八
豐府村	四五、五六三	二、六八九
瀧尾村	一一、三〇一	一、一九六
東大分村	五七〇、八八〇	三一七、一〇〇

日岡村	一七、九七〇	一〇八
桃園村	四〇、一三九	四三、五三一
三佐村	二八四、五五二	八六、八〇八
鶴崎町	三七、〇〇〇	—
別保村	一六六、九八四	—
竹中村	一〇五、六二〇	四、三二八
東稙田村	五六四、七六〇	—
稙田村	九、五三九、〇五三	—
野津原村	三二〇、二四六	三〇、一四四
諏訪村	三〇、二〇〇	—
東庄内村	一、〇六〇、〇七一	三、五〇〇
西庄内村	五二四、四一六	四、九二〇
南庄内村	五一九、二一三	三〇〇
湯平村	二二三、五〇〇	三七、〇〇〇
合計	一五、九三四、八〇一	六〇四、二六六

◎昆蟲講話會景況

岐阜縣武儀郡　富野尋常高等小學校

名和昆蟲研究所長名和靖氏は、武儀郡桑の心蟲調査の途次、同行員松村篠田古田の三氏と共に、五月十日午后三時富野尋常高等小學校に臨まれ、尋常四年生、高等科生、青年會員並に有志者等四百餘名に對し一塲の演說をなせり。其要旨は人々其祖先を辱かしめざるやう國家に對し忠實ならざる可からざる所以より說き起し、將來實業を盛んにするには理科思想を發展するにあり、然るに我國民は理科思想に乏しきを以て、之を進歩せしむるには兒童自から試驗を成し、又は實驗を積むやうに仕向けざるべからざ而して之をなすに最も利便なるものは昆蟲の研究にありとて、昆蟲分布の廣さ及び昆蟲と農業との關係に說き及ぼし、更に之を近年の蟲害の事實に徵證して、其平易滑脫の辯を以て縷々三時間の長演說を試ろみ、大に聽者を感動せしめぬ。次に氏は同校高等科生七十一人に對し、昆蟲世界一册づゝ寄贈せられしにより、兒童は昆蟲千數百頭を採集して之に酬ゆる所ありしに、大に滿足を表せられ、之を紀念として昆蟲分布調査の材料に充つべき旨をも物語られたり。

◎昆蟲月報（第二信）

第八回全國害蟲驅除講習修業生　埼玉縣　櫻井倚畊

四月　此月の上旬は百花爛熳の好季にして、中旬は所謂葉櫻時なりしが、三日は前日來の雨霽れ西北風强かりしも暖かにて、上中條村農會總會に臨む途中ヒメハンメウ、アカサシガメ、ゴミムシダマシを手捕り、風陰にてはシャミテフを追ひ、會塲たる同村實相院の庭内にてはテングテフを見たり、此日又前年使用せし糠味噌の陳腐せるものにヌカガ(?)の一種產卵するを見る。五日林中にてミドリシヾミの一種を獲、蟻類の多く蠢動するを見る、また菜種花にてアシブトハナアブ、クロハナアブを始め、名稱を知得せざる花虻及び花蠅數種を捕ひ、マルクマバチ、キマルバチ、クロマルバチ、ヒゲナガバチ、ヒメキスヂバチを獲、水棲昆蟲マツモムシの雌雄をも獲へり、夕方屋後の井戸側に靜止せしイボタノテフ

(蜀江錦蛾)を捕ふ。八日スヂグロテフ、モンキテフを獲たり、此上旬に於ては、蛅蟖類の多く孵化し、蠶卵の貯藏惡かりしものは發生して食桑なきに困却せる者あるを見き。十四日始めてキアゲハの飛翔するを見、林中にてはアカシヾミの如き蝶種を追へり、野木瓜(方言シドミ)の嫩莖にて小形なるテンタウムシダマシ(?)の交尾せるものを獲、藤の稚芽にて黑頭赤翅及び暗褐色のハムシに似たる甲蟲を捕ひ、檜のタマアブラムシの蟲癭膨らみて、此より無色透明の糖樣甘液を分泌したるに、クロアリの多數群來して舐食するもののありき。十六日桑花にて天狗蝶及びツマキテフの雌雄を獲、柳樹にはモクメテフの發生交尾するもの多かりき。十七日始めてクジヤクテフを桑花にて捕ひ、アヲクサガメ及び越冬せるトノサマバツタを見、またウマオヒムシ幼蟲の孵化せるを見る。十九日アゲハノテフを獲たり、此日鱗翅目擬尺蠖科の一種と認むる蛾を桑花にて數頭を捕ふ。中旬に入りしよりヒヲドシテフは著しく減少し、モンシロテフ甚はだ多く、モンキテフ之に亞ぎ、シヾミテフ、スヂグロテフまた稍々多く、足長蜂も多く、桑の花には蜜蜂科の各種、双翅目の花虻及び花蠅殊に多く、其翅音最とも高かりき。余は採集に出る每に、馬尾蜂を獲んとして切りに林樹の洞孔を眺むれども未だ一頭も見出さず、而して諸草木の嫩莖稚葉には、ミドリアブラムシの蕃殖愈々多く、隨うて瓢蟲類の飛翔多く、產卵また多數なり、扁虻の產卵も多く幼蟲愈多し。また汚水には子孓の發生多く、桑のヒメハムシ出でゝ蒲公英の花瓣を食するを見き。之に次ぎカヾンボモドキ甚はた多く、キカヾンボも現出しき。廿二日自家の蠶兒孵化を始む、クハノヒメゴマダラテフの雄を捕ふ。廿四日寒冷降雨上毛諸山及び秩父山脈に降雪あり。廿六日前記檜タマアブラムシの蟲癭黑褐色に變じ、塊中の幼蟲大に發育せり。廿八日ベニカミキリ、コタマムシ、ビロウドゾウムシ、ヒメゾウムシ、オホノラバイ、ケバイの一種、ヒメアカボシ及び十八星瓢蟲、オトシブミ、ヒメクロオトシブミ、カラスバアゲハを獲たり、此日栗の黑蚜蟲孵化し、檜の新梢間にて、梅子大に始め蒼白色にして、後に紅色と綠色とを併有する肉塊狀圓形の蟲癭を發見せり、また瓢蟲の幼蟲化蛹せるもの多し。下旬に至りクサカゲロフ多く出て產卵するを見き、此頃ツマグロバヒの幼蟲紫雲英田及び方言ノヽと稱する禾本科の矮生草ある田に發生し、オホヨコバヒの林叢近き麥畑に時々蚑行するを目擊せりクハハムシ、ヒメザウムシ盛んに發生して、嫩葉を食害し、枝尺蠖も同樣なれども一般農家は夢之を知らざるものヽ如し、蚊は愈出現して人畜に刺螫を試ろみ、蚤もまた稍多くなりぬ、不潔の鷄舍には羽蝨多く發生して雛を斃すもの多ヽ、薔薇樹には鋸蜂の幼蟲發生して嫩蕾を横より蝕損せり、蝶類にはツマ

キテフ稍多く、ルリタテハ、アカタテハ等をも散見せり、ツチバチ、ヂカバチ、トツクリバチ、ドロバチ、アナバチ類の頻りよ孔洞又は土中に巣を營なみ、産卵の準備に忙はしきを見、ハ子カクシの各種多く地上を疾走し、又は飛翔するを見る、蜻蛉類はキリウジカゲンボ及び小蛾類の捕食最とも盛んなり。

○補遺　前項記載の後、之を再讀すれば、脫漏あるを覺ふ、依りて之を左に補足す。

四月五日　林中にて始めてサナヘトンボ雄、アチハダトンボ雄、ハグロトンボ雌及びイトトンボ并びにホソイトトンボの交尾せるもの等を林叢間の潴水地にて獲たり。十四日　アチハダトンボ雌を捕ふ。十七日　菜花にてビロウドウツリアブを始めて多數に捕ふ。十八日　ハサミムシの路上を疾行するを獲、桑園塵下にてアチゴミムシ、アカガ子ゴミムシを捕ふ。廿二日　ムギワラトンボ及び之に類似せる一種を獲たり。廿五日　前年十月中採集貯存のジヤカウアゲハの蛹三頭より、皆寄生甲蟲一頭つゝを發生せり、但遺憾にも貯藏ランプホヤの口布を嚙み切り、二頭は何れへか逸逃し去り、漸やく一頭を獲たり。廿七日　林中にて金花蟲科に屬する黃翅黃頭にて、頭部に大小の黑紋六個、翅鞘に各大小四個を印し、觸角は絲狀鉢黑色のもの及び同蟲にて翅鞘の中部過半鈍白色を呈せるもの各一頭を獲、楢タマアブラムシの蟲癭にて、鞘翅目の一種にて恰も木枝を小切したる如き黑色の小蟲を得たり。三十日　オニヤンマの飛翔するを見一頭を捕獲せり。

◎昆蟲に關する葉書通信　（第二十三報）

●●●（二一四）五月中に採集の蟲種（岩手縣稗貫郡、中田谷藏）　當地に於て、去五月中よ採集せる昆蟲の種類を擧ぐれば、次に列記するが如くなり。

七星瓢蟲、大小二星瓢蟲、ミチチシヘ、アチチサムシ、ゴミムシ、行夜、蜻蛉類、菱形バツタ、翅長バツタ、切蛆蚊姥、大褄黑横バヒ、スヂグロ蝶、モン白蝶、黃アゲハ、ベニシジミ、姬ジヤノメ、ジヤノメテフ、オホスカシバ、モンキ蝶、トモヱテフ、岐阜テフ等にて、特に岐阜蝶は五月十九日と同廿二日とに、各々一頭を獲き。

●●●（二一五）桑の心蟲驅除報告（岐阜縣武儀郡、古田恒彥）　去月十三日より郡內中之保村の桑心蟲の驅除に從事せしに、此朝は頗ぶる寒冷よて、蟲害の外降霜の加害多かりき、村內蟲害の劇甚地は間吹、多々羅外一區にて其慘狀實に酸鼻に堪へず、其一端を言へば、一人能く二貫目以上の被害桑芽を摘取し、又長さ二尺許りの一小枝に十五六頭の寄居あるをも目擊せり。余は西部禮市、丹羽忠義の兩氏と共に、晝夜風雨の別なく之に從事中なるが、方今は十中の三位ゐを驅除せりと自信す、又村內にて驅除の最初よりの桑量は、凡ろ三四十貫目以上に及びたり。

（一一六）昆蟲學研究會開會（山口縣玖珂郡、引十萬次郎）　吾が山口縣玖珂郡昆蟲學第三回の研究會を去る五月十二日より三日間、郡內西部高森村役場議事堂に開會せしに、本縣農事試驗場技師武下松治郎同場技手昆蟲掛細田胖の兩氏を始め、郡農事巡回教師も三名臨場し、日々百餘名の會員出席して、質問應答より講話演說等あり、意外の盛會を致し其利する所ろも亦尠少にあらざりき。

（一一七）桑樹害蟲の發生（飛驒國益田郡、松下千吉）　本年は氣候の爲めにや、當地方の桑樹には、シンムシ、イトヒキハマキムシ、ハムシ類の發生多く、其被害極めて少なしとせず、特に心蟲の害甚はだしく、之が爲め、霜害後重ねて桑葉の收量を減少せるが如し。

（一一八）赤蟻の害と驅除（三重縣多氣郡、阪口幸之助）　拙家に於ては、蠶兒上簇の際にアカアリ（方言）のために加害せられ、年々困難を來せしが、本年も亦同害に遭へり、依りて注目を怠たらざりしに庭園の梅樹の洞中に其巢窟あるを發見し、盡ごとく之を破壞捕殺せしに、爾後また其憂ひなきに至れり同感者の注意までに右の次第を報ず。

（一一九）桑樹貝殼蟲の燒殺驅除（岐阜縣不破郡、廣瀨圓藏）　吾不破郡の桑種は、もと不良なるも、其早生なるの故を以て、刈桑として江州の蠶種製造業家の需用多く、隨うて年々得る所の收利も少しとせず。然るに近年痛く貝殼蟲の害をうけ、收葉皆無の處すら敢て珍しからず、依りて余は去る明治三十二年來燒殺驅除を行ひたるに、幸はひに其奏効ありと覺しく、本年は健全のものと毫も違ふ所なきに至れり。其方法は、被害樹を五月に刈取り置き、普通の藁束を二分してネヂ藁となせるものを其上に配列し之に點火するに在り。余は一昨年と昨年との兩回、名和昆蟲研究所長の講習をうけ、以來大ひに悟る所あれば、成るべく之を實地に應用せんことを期せり、世の同士にして若しなほ一層適切の方法を知らるゝあらば、希くは示敎の勞を吝むなからんことを。

（一二〇）丹波福知山附近の蟲報（京都府天田郡、菅沼岩藏）　當地方にてはエンマコホロギ及び其他の蟋蟀類をば、推なべてケラと稱へ、昆蟲學上のケラをば、アゼムクロと呼ぶ。又螟蛾は去る五月廿五日より飛行を始め、螢火も同日より兒女の翫弄物となれり、今筆の序でに螢狩の童謠を二つ。

○ほーほー、ほーたろ來へ、菖蒲（勝負？）來へ、柳のしんごう、傳ふて來へ。
○ほーほー、ほーたろさん、山吹の、おちょちん、さぼして、飛んできなァ。

●昆蟲月令（第六月）

此月に配すべき昆蟲記事は、概むね下に列擧するがし。

○氣候　舊暦五月の節にて、晝間は夜間に比して、五時間餘の長さに至り、なほ炎熱未だ甚だしからされば、採集には極めて好時期さす。此月の七日は芒種、十二日は入梅、二十二日は夏至の候さなり、陰雨多濕漸やく深綠の夏季に入る●內地の平均溫度は、十六度乃至二十二度半の間にて、東京は二十度半、京都は二十一度強を示す●濕度は前月に比して益々加はり、西部よりは東部に降雨多かるべし●暖地は中旬までに收麥するも寒地の高山にて、殘雪斑々さしてなほ存し、農家の百忙裏に盛んに螢火の飛行するを見る●此月に入れば、北海道を除き、全たく霜雪の降下加害のあることさなし。

○蟲類　春蠶は概むね月末を以て終了を告ぐるさ雖ども、蠶蛆の蕃殖も此時にあれば、驅除豫防の注意を要す●前月より此月にかけ、桑心蟲の加害多し、毛蟲の產卵、尺蠖の生育また此前後にあり●苗代田に於ける諸害蟲の驅除に努め、移植前に必らず數回の捕殺驅除を行ふべし●苗代田に於ては、また螟卵を採摘し、大害を未然に防ぐべく、塲合によりては共同して、螟蛾の誘殺を行ふべし但し中旬下旬は、月明のために効力極めて薄かるべし●穀菽果菜の害蟲すなはち横𧏛蟲、僞瓢蟲、象鼻蟲、葉蟲、椿象、地蠶、金龜子、守瓜、蚜蟲、綿蟲、蓑蟲、蠹蟲、貝殼蟲等の蔓延加害を防ぎ、兼て杜鵑、燕、蛙、蟷螂、蜻蛉等の益鳥蟲を保護し、これをして自由に害蟲を捕食せしむべし●苗代田に横𧏛蟲等多生して、捕殺し盡くすこさ能はざる時には、極めて少量の石油乳劑を用ゐて驅殺すべし、石油乳劑なき時は、一畝步に石油壹合以內を注ぎて、其全滅を期すべし。但し移植の際には、苗代田の中央に、必らず若干の殘苗區を存せしめ、四方より追蹙せる害蟲を此一局部に集めて、注油滅殺を行ふべし、●秋收の果樹には、今月より尤も注意して枝幹子實兩つながら保護を加ふべし●山林、園藝、養魚事業また同じ●稻苗移植後は、特に頻々採卵、捕殺を行ふて、他日の減收を豫防すべし●此月よりは、夏生の昆蟲さ春生さ更代するが故に、斯學研究者は只額精密の觀察を施すべし●標本類を始め、衣書に蟲害黴害を見るべければ、換氣交樂を怠たる可からず●其他は前月記載の事項を斟酌實行すべし。

○舊說　禮記の月令には、螳螂生、蟬始鳴さあり●此月に米苞を改束すれば蟲蝕せず、苞を綏ふすれば必らず蟲生ず。又蛤殼の灰を多く米苞に塗置く時は、蟲はまずさも云へり●明治七八年

（ツマグロヨコバヒ）

頃より、同十五年までの間は、暦本の六月の節の項に、腐草爲螢と明記しき。

○古儀　明治の初年までは、伊勢大廟に於て御田祭を執行し、農作害蟲驅除用の御田扇を農人に頒てり。奈良春日神社にも、之に類する儀式ありきと云ふ。

○雜事　害を蟲驅除するには、成るべく共同一致の態度に出づべし、否らざれば却つて行はざるに劣れる結果を來たす事あらん●地方によりて小學校に、田植休暇をなさしむる處あり、斯かる地方にては、兒女を奬勵して、專ら採卵捕蛾に從事せしむべし●時々田圃を巡視して、除害興益に怠たる可からず。

●本號の口繪の說明　本號の卷首に收めたる第六版圖は、脈翅目薄翅蜻蛉科に屬するもの丶寫生なり、世間或ひはこの科のものを以て、極めて少種の如くに信ずるもあれど決して然らず、茲に揭ぐる當昆蟲硏究所所藏の標本によりて見るも、正しく一類八種以上に出るを知るべく、また之を昨春の全國昆蟲展覽會の出品等に徵すれば、其分布も狹隘にあらざるを認め得べし。この幼蟲には、スリバチムシ、アリヂゴク、ウシムシ、クボクボムシ、ヂゴクムシ、アマノジャコ等の方言ありて、普通は砂搔子と書し、時としてハ鉤嚢駝と書せらるゝ事あり、即はち樹根屋下の如き、乾土輕沙に乳鉢狀の凹孔を造り、蟻螘その他の小蟲の轉落するものある時は、中より鋭鉤を出して之れを捕食するもの是なり。本誌に載する所ろは皆岐阜縣下及び滋賀縣下の產に止めたれど、前にも言へるが如く分布區域の廣濶なる種類なれば、地方によりてはまた多少の異種なしとも限られず。讀者もしこの圖に對照比較を遂げ、別種異品と認むべきものあらば、幸はひに其標本と共に產地其他の記事を贈惠せられんことを、乃はち之を本邦產昆蟲分布調査臺帳（本誌第五十五號、雜報欄參看）に登錄して、永く其の厚志を斯學界に紹介すべし又圖中の（イ）は薄翅蜻蛉の幼蟲にて（ハ）はそが營める繭を示し（ロ）は蛹期の狀態を現はしゝなり。更に之を各種に分別して略記すれば、下に擧ぐるが如し。

（壹）ウスバ、カゲロフ（薄翅蜻蛉）　產地は岐阜及び伊吹山。發生は多數。

（貳）コ、ウスバカゲロフ（小形薄翅蜻蛉）　產地は岐阜及び伊吹山。發生は稍多數。

（三）ホシ、ウスバカゲロウ（星薄翅蜻蛉）　產地は岐阜。發生は多數。

（四）マダラ、ウスバカゲロフ（斑薄翅蜻蛉）　產地は岐阜、揖斐及び伊吹山。發生は稍多數。

（五）カスリ、ウスバカゲロフ（綛薄翅蜻蛉）　產地は岐阜及び揖斐。發生は稍多數。

（六）オホ、カスリ、ウスバカゲロフ（大形綛薄翅蜻蛉）　產地は岐阜及び加茂。發生は稀少。

（七）コガスリ、ウスバカゲロフ（小絣薄翅蜻蛉）　産地は岐阜、揖斐及び伊吹山。發生は稍多數。

（八）ヒメ、ウスバカゲロフ（姫種薄翅蜻蛉）　産地は岐阜、揖斐及び伊吹山。發生は稀少。

◉再たび蟲塚保存の擧に就て

（福井縣下にある蟲塚）

本邦現在の蟲塚即はち蟲供養碑の保存に關する記事は、前號記載の如くにて、ろの之を保存するに就きての要領は、廣告欄にある如くなるが、近頃傳聞する所ろに依れば、既に募集せる費額のみにては、到底十分の工事を起すこと難ければ、同感の士は半瓶の酒、一塊の肉を節しても、此際多少の義金を投ぜられんことを望む。而してその多費を要するは、次に轉載せる吉井氏の書簡の如く、また茲に一の新蟲塚を增したるによりても之を知り得ふる可し。要ハ本誌愛讀者の賛同を求むるにあれど、特に害蟲驅除講習同窓會員諸氏に向つては、公共的の發憤を促さゞるを得ず。

（前略）過日來、苗代巡視のため、居村國富村太貢庄區に參り、談偶々蟲塚の事に及び候處、同區に於て又々一の蟲塚（碑の高さ五尺）を發見仕候。もと同區は、夜盜蟲の發生地を以て目せられ、昔時は蔬菜類栽培禁止令を施行せられし位ゐにて、其發生の旺盛なる時の如きは、一反歩の圃場より、同幼蟲を五六升乃至一斗餘も捕集仕候由に有之、而して其起源は今や之を知るに由なきも、口碑に依れば、齋藤別當實盛の亡魂の化生なりとて、實盛塚と呼做し、村民は古來厚く信仰罷在候。隨うてその建設時代も不明には御座候も此塚に祈誓を籠むれば、立どころに夜盜蟲の害を絶滅せしめ得べしと確認し居るもの丶如く、去る明治十七年に該蟲發生の際には、現に僧侶を請じて供養せしめ、其功德を以て退散せりと今に申居候。斯る有樣なれば、同區にて夜盜蟲をば實盛蟲と稱するも面白く感居候。如何に迷信強しとは申し乍ら、同じき遠敷郡内、しかも國富村に於て、二基までも蟲塚を發見すとは、能々害蟲に因縁之あるものと存ぜら候、實を申せば口外するも今更耻かしき次第に候へども、是亦致方無之候、云々。

福井縣遠敷郡國富村（第八回全國害蟲驅除講習修業生）　吉井涓一

因みに云ふ。此蟲塚の圖を見るに、古風の塔婆形にて、俗に五輪塔と稱するものあれば、近年の建立にはあらぬなる可し、扨刻める梵字は、佛家の空風火水地を表はせるキャ、カ、ラ、バ、アの五文字なるべきに、少しく其字形を違へり、恐らくは苔蝕等のため字體の判然せぬを、強ゐて寫せしより、斯く誤れるもの歟。

◉**德島縣よりの蟲報**　德島縣那賀郡今津浦村農會にては、今春三月を以て、稻作害蟲驅除豫防施行方法九ヶ條を決議し、首として螟蟲と浮塵子驅除に關する規約を定めたる旨通報あり、乃ち之を一讀するに中々嚴重の制裁を設けしものにて、就中、水陸兩稻苗の移植期を五月十八日より六月六日までとし、これより短縮することを得ずとて、豫じめ各大字挿秧の日割を定めたるが如き、又毎月一回村治と農作に關係ある者の協議會を開くと云ふが如きは、行末頼母しく感じぬ。但し惜むらくは基礎より之を改造せずして、技術的に傾むけりと思はるゝ節なきに非ぞ、此等は宜しく注意すべき事項たるべし。

◉**河內忠二郎氏の書翰**　近ごろ在米國、米國理學博士河內忠二郎氏より來書あり、左に紹介す。

昆蟲世界誌上に御掲載の論說并に記事の體裁も、兩三年前に比すれば、號一號と進步致したる樣見受られ、實に邦家の爲慶賀致す所に御座候。就ては甚だ失敬の至に候得共、此後は成るべく純粹の學術の指導に關する投書のみを御掲載相成候樣致度、彼の蟲合の答案とか、某々氏の書畫とかは、多少讀者に興味を與へる如く思はれ候も、是等は昆蟲を研究する人々に對し、更に攻學の料とならざるのみならず、殆んど巷間に流布する通俗の雜誌に似て、甚だ面白からざることゝ存候。且つ投書家中、往々種々の雅號異稱を附して實名を世に公けにせざる者も有之候處、凡て己れが研究實習したる學術上の論說并に記事を世に出すに當りては、十分責任を負ふて筆を下さればならぬものに候へば、以後は屹度實名及び居處を記せざるものは御登載相成らぬ樣致度候。聞く所に依れば、故福澤諭吉翁は、其在世中に一たびも變號を用ゐたる事なく、常に福澤諭吉を以て世に鳴りたる由、是れ後進輩の手本として傚ふべき事と存候。斯く申せば世間或は小生を稱して、文學の妙味を知らざる不風流漢の如く思ふ者もあらんと存候へども、科學の研究を遂ぐるに當りては、成るべく風流とか、粹雅とか申す粗雜なる支那風を廢し、充分精密なる調査を加ふることこそ最も肝要と存候。小生は豫て多くの論說などを世に出すは好まぬ方にて、過日贈呈致置候蟲の頭を論じたる一篇の如きも、コムストック翁が二十五年以來の希望を承ぎ、滿四年間晝夜を分たず研究の上、發行したるものにて、翁は常に小生に語りて申す樣、世に論文を書きて出す程なれば、數十年の後に至るも、人の參考書となるべきものを書かざる可からず云々と、翁は實に決して多きを貪ぼる人には無之候、故に小生も是より死する迄に、今二三の論文を綴り終れば、それにて滿足致す心得に御座候。云々

此一書を閲讀して、讀者は如何なる感想を懷きしぞ、彼我人智の程度を異にすとは云へ、邦人より言はしむれば、乾燥無味砂石を嚙むが如しと評する、眞個學術的の諸說のみを掲載せよとの忠告に對つては誰しも彼邦の學術界に於ける趨勢に敬服せざるもの莫かる可きなり、當所また河內氏這般の苦言を容るゝに吝さかならさる可し。然は云へ、現今の斯學界は遽かに斯かる高尙の理想を實行し得べからざるのみならず、當所また一定の所信を漸行するの決心なれば、他山の石としては河內氏の說を歡迎するも、

全然之を採納するや否やに至りては、今豫め之を明言するを憚かるものあり。なほ序で乍ら言ふよはあらざるも、斯かる他評のあるに就ても、將來願はしきは寄稿家の其記事の撰擇よ勉められんこと是れなり、實は紙上狹隘のためとは云へ、從來屢次記事を遲延せしめ、又は沒書せしもの等あるは、寄稿家の自知せらるゝ如くなるが、是れ將た調査、文躰等の如何にも關する次第あれば、向後は其心して本誌に光彩を放射せしむるやう、斯學のため切よ冀望して已まぞ。今念のために好ましきものと、否らざるものとを左に揚げて參考となさんよ。

●事實精確、記事簡明にして、嶄新明晰の實驗論及び之に準ずべき學說。●親しく調査、試驗を遂げたる學術記事、又は溫故知新の材料たるべきもの。●用紙ば竪半紙又は罫紙にて揩書したるもの。●通常の文體にて綴りしもの。●每月三日以前に到着するもの。●他人を利するに足れる有益のもの。●飾らず阿ねらず、己れを賣らず、他を擠陷せぬもの。（以上は好ましき分）●事實亂雜、文章冗漫にして、陳言套語の論說若くは剽竊の嫌ひあるもの。●筆記の轉寫又は長文の紀行類。●草躰にて亂書したるもの、又は半切、葉書等へ顯蟲鏡を用ゐるに非れば見得ぬ程の細字のもの。●言文一致文躰のもの。●每月五日以後に到着するもの。●單に利己心より筆を下したる驕慢の記事。●濫りに形容辭を用ゐたる不正確のもの、又は政治の得失に涉るもの。（以上は好ましからぬ分）

◉山梨縣の昆蟲研究會　山梨縣の有志より組織せる同會よては、先よ稻作害蟲驅除のため、西八代郡下岩間村に於て講習會を開きしが、同會は輕々しく事業に下手せざる方針を把り、目下內部の基礎を固むることに勉め、又昆蟲陳列場設置の計畫をなし、其標本等は旣よ整頓したれば、位置確定次第何時にても開始をなし得る趣むき、同縣甲府市の中澤樂平氏より通報ありき。

◉保戶島の昆蟲講話　岐阜縣山縣郡保戶島村農會にては、去月八日春季總會を開きしに、折しも名和當昆蟲研究所長臨場せしかば、ろが講話を乞ひしに先づ害益蟲の區別より小學兒童の採集に係る蟲種別、之が標本の製作法に次ぎ、桑蟲及び稻蟲驅除の必要とその方法等を詳密講說せられ、一同をして頗ぶる斯學の興味を感ぜしめたるが、當日は農會員及び傍聽者、小學兒童等を合せ、凡そ二百六拾二名の出席者ありて、午后六時といふに散會せし由、同地櫻井宗一氏の信書に見ゆ。

◉宮城縣の挿秧と驅蟲　宮城縣名取郡館腰村堀內英力氏より、本月五日附の通信によれば、同地方は大概十六七日頃より挿秧の見込あるが、當年は螟蛉の發生も可なり多ければ、早く嚴密の驅防法を行はんと焦心すれど、何分農家は無慾に、當路者は形式を固守するの傾向あるより、到底滿足の結果を得難かる可しとの事。害蟲の御慶、千里同風、先以て芽出度しとは、今日此頃の光景をやいはまし。

◎第拾貳回全國害蟲驅除講習會

第拾貳回全國害蟲驅除講習員

既記を經たる如く、同會を去月十五日より同廿八日まで當昆蟲研究所内に開會せり、初日には形の如く開會式を擧げ、名和當所長の辭、堀内縣農事試驗場長の祝辭、會員總代年長者中尾猪太郎氏の答辭ありて、其日より授業を開始せしに、爾後二週間は一同能く晝夜の苦學に耐へ、最とも優良の成績をあらはせり。軈て閉講日に到り、折能くも貴族院議員田中芳男氏の來臨ありて、一場の演說あり、其日午后三時といふに修業證書授與式を擧行したるに、先づ名和當所長の挨拶を以て始め、次に證書の授與幷びに訓戒あり、次に來賓笠井岐阜縣書記官及び岐阜日々新聞主筆林氏の祝辭、次に修了生總代三輪好孝氏の答辭あり、これにて式を畢へ、次に一同へ茶菓の饗應あり、それより袂を連ねて當日の懇親會場濃陽館に到り、最と盛大の宴會を催ふしたるが、當研究所より招待せる來賓十餘名も此中に打混じ、昆蟲福引等の餘興に一同歡樂を盡して散會せりき。同講習中、一同は養老山に旅行採集を試ろみ、尙ほ愛媛縣の白石大造氏（第四回全國害蟲講習修了）の東北地方害蟲視察談及び三重縣の大矢圓三郎（第二回全國害蟲講習修了）の關西府縣聯合共進會出品昆蟲標本談もありたれば斯學研究上資する所ろ多かりしならん、扨その修業生は都合五十七名にて、其出身地は一府十六縣なりき。（氏名は次號に揭ぐ）

◉昆蟲標本寄贈者のために　曩に本誌第五十五號の雜報欄にて、昆蟲分布調査の事を報道せしに、其後續々標本を寄贈せらるゝも、多くは珍奇の種類か或ひは又微小にして容易に鑑別し難きものゝみにて、斯學研究上得る所ろ比較的に大ならず、依りて初めは先づ大形の普通種即はち蝶、蜻蛉、瓢蟲の如き種類を擇び、何分多種類にわたりて採集寄贈あらんことを望む、後號の紙上には、各地より寄贈に係る蟲種及び採集者の氏名を掲載して、其厚意に酬へんとす。

附記　現蟲なぞ必らず一頭づゝ紙に包み、これに採集年月日、地名(山又は野の區別なも)採集者氏名を細記し、之を成るべく堅固なる容器に入れ(紙箱などにては、概むね途中にて破損し、標本となすことを得ず)表面に博物標本の四字を明記する時には、重量三十目までの郵税は貳錢にて足れり。

••••••••••••••••

◉第拾三回全國害蟲驅除講習會の開期　全國害蟲驅除講習會の價値と、夏季に昆蟲研究の快味とは、今更めて言ふまでもなし、當昆蟲研究所は有志の希望に促がされて、來る八月一日より二週間、第十三回の全國害蟲驅除講習會を開くにつき、入會志願者は成るべく速かに其手續きを履行せられたし。恰かも夏期休暇の際とて、申込數は毎會の比にあらずと思はるれば、今回は期限內と雖ども、確定名簿登錄以外の應募者の入會を許諾せぬ事に內定せり、なほ卷頭の募集廣告を參觀せよ。

◉昆蟲諸會一束報　兵庫縣三原郡にては、豫記の如く、本年十月を以て、郡農會事業として昆蟲展覽會を開く爲め、有志者は目下盛んに昆蟲採集、標本製作に盡力中なりと。(中野壽郎氏報)○岐阜縣海津郡にても、來る八月中旬に、昆蟲展覽會開設の企畫あり、これ亦目今設備中なりと。○第四十二回岐阜縣昆蟲學會月次會を、本月七日午后に開會、名和當昆蟲研究所長の特別標本說明、長野菊次郎氏の植物蜜腺(特に梧桐芍藥)と昆蟲の關係試驗談等ありて散會。尤とも前日來の大雨にて、來會者の少なからんことを氣支へ、談話會となしき。○鳥取縣敎育會にては、來る八月下旬より短期害蟲驅除講習會を開く都合。○岐阜縣養老郡昆蟲學會にては、夏期敎員講習會までに、標本を整備して敎育者の斯學思想を喚起し、次で之を養老公園に陳列して、品評審査を加ひ、又公衆に示して農業上の利益を圖る豫定なり。(原田晟氏報)

◉桑名氏の歸朝　米國スタンフォード大學にありて多年貝殼蟲の專攻を事とせる、米國理學士桑名伊之吉氏は、去月中旬彼地を解纜し、同末日を以て無事歸朝せられぬ。久しく寂寞たる本邦の斯學界

に、新たに一明星を增したるやの觀なきにあらぞ。

◉諸國の蟲送り(二二)　(其五)當地方の蟲送りは、多少他地方と異なり、每年七月三十日と其次日とに之を行ふ、土俗はウンカ蟲送りと稱す、當日は各部落の少壯者相會して一團となり、各々松明を手ましで鎭守の神社に詣て、携へる松明に銘々神燈の火をうつし、斯くて後、稻田の畔道を巡行し乍ら、可笑な大聲を揚げつゝ「ウンカァムーシを、おーくれやィ」と呼ばり、已に其區域內を經巡り終れば、其松明をば道辻若くは堤上等に集めて、熾んに燒燃やすなり。さて此松明は各村の競爭の種にて、長さ三四間もあるべしと思はるゝ大松明を造り、歸途に之を橋杭などに立てゝ、何部落の火は尙は今に消盡せずなど言罵りつゝ、互ひに燃燒時間の長きにわたるを誇るなり。(右、遠州濱松の濱湖氏報)。(其六)當地方には、昔し蟲送りの風ありしも、維新後は絕へて之を行ふ者無し。たゞ其遺風とも見るべきは、每年陰曆六月十六日に、村の神主より蟲除の符札といふを每戶に頒與すると、同じ十月十六日に、蟲供養と稱して、農家は團子を作り調へて會食するの一事なり。想ふに前者は惡疫除けの爲め、京都にて牛頭天王を祭れる故事を襲ふものなる可く、後者は秋收後に除蟲の供養をなせし事の、今に遺れる紀念なるべきか。(右、陸前志田郡志田村の愛讀子報)

◉本年の蟲害　去月二十日以後の天候は、如何にも蟲類の蕃殖に適すれば、本年も或ひは不測

除蝗錄記載の蟲送の圖　(瓢蟲女史縮寫)

の災害ゝ罹ること無しとも言ひ難き次第なるが、特に蚜蟲の發生加害甚はだしきやう覺ゆれば、何れも其心して之が驅防策を講ずること宜けれ。

◉農事會の希望　去月の初め、農商務省に召集の、各農事試驗場長等を以て組織せる農事會ゝては蠶蛆の驅防に關し、次の如き開申書を當局大臣に呈出せりと云ふ。

蠶蛆の蠶業界に及ぼす慘害は、逐年激甚を加ふる事實あり、然るに該蟲の發育習性等に就ては、略研究せられたるものありと雖も、其驅除豫防の方法に至りては未だ完全なるものあるを見ず、就ては東西兩蠶業講習所に於て、此等調査研究の設備を大に擴張せられ更に充分の研究を遂げられん事を希望す。

◉蟲害視察員の派遣　當年も各地ゝ害蟲發生の模様ありとて、其筋にては去月を以て例により例の如く、左の通り蟲害視察員を派遣せり。

熊本、宮崎、鹿兒島縣へ　農事試驗場技師本場在勤　堀　健
大阪、兵庫、和歌山縣へ　農事試驗場九州支場在勤　大塚由成
福岡、大分縣へ　農事試驗場九州支場在勤　莊島能六
長崎、佐賀、愛媛、高知縣へ　農商務屬農務局員　田口國三郎
滋賀、廣島、德島、香川縣へ　農事試驗場技師本場在勤　堀正太郎
千葉縣へ　農事試驗場技師本場在勤　中川久知

◉昆蟲標本陳列館の觀覽人　昨五月中に、當昆蟲研究所の標本陳列館を觀覽せし人員は頗ぶる多く、其全數壹万餘あらんとは推算せらるゝも、生憎岐阜縣製產品評會開會のために、閉鎖せし事もあれば精確ならず。其中重なる者は、東京、京都、群馬、熊本、三重、愛知、新潟、廣島、千葉、石川滋賀、愛媛、德島、大坂、高知の諸府縣に於ける農事當局者、敎育者、視察員及び縣會議員等にて、外に岐阜縣の有力者は特ゝ多かりき。

・・・・・・

◉愛讀者ゝ謹告す　雜誌『昆蟲世界』は記事輻湊のため、盡ごとく投寄の玉稿を收錄すること能はず、暫らく後號の出づるを竢たれよ。又昆蟲叢書第一編は、全國昆蟲展覽會ゝ關係せし有力者より、附錄添附の勸告をうけ、印刷終了の頃より、急に本文の二十餘頁と、寫眞版二葉とを增加の事に變更し、目下再び補足印刷に着手中なれば、遠からず竣工送本の都合なり、此旨併せて謹告す。（以上六月十三日脫稿）

登録商標

硫曹

第五回内國勸業博覽會農產物獎勵懸賞廣告

本年より我が硫曹肥料を使用して明卅六年當大阪市に開會の第五回内國勸業博覽會に出品したる主要農產物即ち米、麥、豆、雜穀、蔬菜、綿、麻、桑、製紙原料(特に楮、三椏)及糊料、藺、藁稈、其他纖維類、(特に亞麻、ラミー)煙草、染色原料(特に藍)製油原料(特に菜種)牧草、藥草、種子苗、茶、砂糖、果實類、花卉、其他一般農作物よして我が硫曹肥料の爲に名譽金賞牌を得たる者全銀賞牌を得たるもの及一等賞、二等賞、三等賞を得たる者拾數百名へ金參百圓、百圓、五拾圓、貳十圓、十圓等の五級に分ち金數千圓を特に褒賞として贈呈すべし

硫曹肥料は在ゆる農產物に用ひて其品質を宜しくすること驚くべき者わり德嶋福岡に於ける藍作岡山廣嶋に於ける藺作兵庫鹿兒嶋に於ける煙草作香川鹿兒嶋に於ける砂糖作其他各地に於ける米麥作其他各種作物に於て明に之を證せり硫曹肥料の詳細は新農報各號に掲げたれば熟覽あるべし

大阪市西區西野下之町
電話番號　西四一九番　大阪硫曹株式會社

名和昆蟲研究所長名和靖著

五版

薔薇の一株 **昆蟲世界** 全

定價貳拾錢 郵税貳錢（郵劵代用一割増）

臨時刊行第一編

日本昆蟲分科表 全一冊

定價（郵税共）金貳拾八錢（郵劵代用一割増）

臨時刊行第二編

通俗益蟲集覧 第一輯（説明書附）

定價（郵税共）金貳拾貳錢（同上）

臨時刊行第三編

貝殼蟲圖説 全一冊（再版）

定價（郵税共）金參拾七錢（同上）

◎害蟲圖解既刊の分廣告

第一。桑樹害蟲エダシヤクトリ（枝尺蠖）（三版）
第二。桑樹害蟲トゲシヤクトリ（刺尺蠖）（再版）
第三。稻の害蟲イチノズヰムシ（二化生螟蟲）
第四。煙草害蟲タバコノアヲムシ（煙草螟蛉）
第五。稻の害蟲イチモジセセリ（苞蟲又葉捲蟲）
第六。桑樹害蟲ヒメゾウムシ（姬象鼻蟲）
第七。桑樹害蟲シンムシ（心蟲）
第八。稻の害蟲イチノアヲムシ（稻螟蛉）
第九。茶樹害蟲ミノムシ（避債蟲）
第十。豌豆害蟲エンドノキリムシ（夜盜蟲又地蠶）
第十一。桑樹害蟲クハカミキリ（桑天牛）
第十二。稻の害蟲ツマグロヨコバヒ（浮塵子）
第十三。桑樹害蟲イトヒキハマキムシ（糸引葉捲蟲）
第十四。茶樹害蟲チヤケムシ（茶蛅蟖）
第十五。馬鈴薯害蟲テントウムシダマシ（擬瓢蟲）
第十六。稻と麥の害蟲キリウジ、カガンボ（切蛆蚊蛇）
第十七。桑樹の害蟲キンケムシ（金色蛅蟖）

以上十七種は既刊の分にして發行以來既に多くの各級農會は勿論、諸學校にも備へ付けられたり。

第十八。桑樹の害蟲アヲハマキムシ（青色結桑蟲）圖解

右は本月を以て出版す、時節柄農桑家に利する所ろ多からん。

◎害蟲圖解未刊の分豫告

◎桑樹害蟲クハケムシ（桑蛅蟖）
◎稲の害蟲フタホシズヰムシ（三化生螟蟲）
◎稲の害蟲セジロウンカ（背白浮塵子）
◎稲の害蟲ヒゲナガアブ（長角虻）
◎桑樹害蟲クハハマキ（桑葉捲蟲）
◎蠶の害蟲カヒコノウジバヘ（蠁蛆）

◎松樹害蟲マツケムシ（松蛅蟖）
◎藍の害蟲アヰノゾウムシ（藍象鼻蟲）
◎粟の害蟲アハノズヰムシ（粟螟蟲）
◎胡麻害蟲メンガタスズメ（胡麻蠋）
◎赤楊害蟲ハンノキケムシ（赤楊蛅蟖）
◎櫟の害蟲カミキリムシ（天牛）

◎稲の害蟲イナゴ（蝗螽）
◎稲の害蟲トビイロウンカ（褐色浮塵子）
◎桑樹害蟲クロクサガメ（黑色椿象）
◎桑樹害蟲アヲハマキムシ（青色葉捲蟲）
◎桑樹害蟲クハゴ（野蠶）
◎蔬菜害蟲モンシロテフ（菜の螟蛉）
◎蔬菜害蟲サルハムシ（菜の葉蟲）
◎大豆害蟲ヒメコガ子（姫金龜子）
◎梅樹害蟲ウメケムシ（梅蛅蟖）
◎梅樹害蟲ウメシヤクトリ（梅尺蠖）

◎圖解の紙幅縱一尺三寸橫九寸　◎壹枚の代價拾五錢郵稅貳錢
◎百枚以上一種壹枚拾錢郵稅百枚に付き貳拾錢

◎豫約代價　壹枚拾錢郵稅貳錢
但申込の際前金添附の事

圖解代金凡て前金にあらざれば回送せず但郵券代用壹割増の事

◎梨樹害蟲ナシゾウムシ（象鼻蟲）
◎梨樹害蟲ホシハマキ（星葉捲蟲）
◎果樹害蟲イラムシ（刺蟲）
◎稲の害蟲オホズヰムシ（大螟蟲）
◎藍の害蟲アヰノズヰムシ（藍の螟蟲）
◎粟の害蟲アハノヨトウムシ（粟蠶）
◎里芋害蟲セスヂスズメ（烏蠋）
◎桐樹害蟲シモフリスズメ（桐蠋）
◎果樹害蟲ホシカミキリ（白斑天牛）
◎果樹害蟲ドウガ子ブンブン（金龜子）

發行所　岐阜市京町　名和昆蟲研究所

寫眞

夜中撮影。不變色寫眞。
光澤附寫眞。引伸寫眞。
其他各種。

昆蟲學研究家に對しては特別低價を
以て御需めに應ド可申候

岐阜市伊奈波神社前

河村寫眞館

◎昆蟲標本及び昆蟲學研究用具

● 農作物害蟲標本　壹組（桐箱入解說附）金四圓五拾錢
● 農作物益蟲標本　壹組（桐箱入解說附）金參圓六拾錢
● 教育用昆蟲標本　壹組（桐箱入解說附）金四圓九拾錢
● 自然淘汰標本　壹組（桐箱入解說附）金五圓五拾錢
● 雌雄淘汰標本　壹組（桐箱入解說附）金五圓五拾錢
● 氣候變形標本　壹組（桐箱入解說附）金四圓

（壹組の荷造費金貳拾錢小包料は百里迄貳拾錢百里外四拾錢）

● 昆蟲學研究用書籍及び器具一式

明治三十五年第六月　名和昆蟲研究所會計部

雜誌昆蟲世界合本出來廣告

○第十二號以下完備

本邦唯一の昆蟲雜誌

昆蟲世界合本

第五卷（昨年分）出來

西洋綴金文字入美裝

● 昆蟲世界第三卷合本壹册　定價金壹圓貳拾錢郵稅金拾貳錢
● 昆蟲世界第四卷合本壹册　同上
● 昆蟲世界第五卷合本壹册　同上

右昆蟲世界の義は發刊以來、非常の高評を博し斯學研究上の寶典として又農事改良の先驅として歡迎せられしも、未た之を合本とするに至らざりしに、今回讀者の勸告により每一年分を裝釘して閱讀索引に便にせり、請ふ愛讀を玉へ。

◎昆蟲世界愛讀諸君に敬白す

雜誌「昆蟲世界」の義は、假ひ御注文有之候とも、前金にあらざれば、發送致さゞる規定に有之候處從來の厚誼上、前金相切れ候時は、其旨を朱書の上、特別に御扱ひ致し候ひしに、往々却つて意外の御取計ひに相成る向も有之候故、以後は不得止發送を見合はせ可申候、依て封皮に前金切れのしるし相附し發送致候場合には御不用なれば其趣き御一報願上度、若し御通知無きに於ては、舊の如く御購讀相成るものと見做し可申候間、豫め御承知置願上候

六月十日　名和昆蟲研究所會計部

蟲塚保存義金募集廣告

◎蟲塚（蟲供養碑）保存義金募集の趣意

現時、本邦各地に散在の蟲塚（害蟲に關する石碑）は其數凡そ十基に下らざる可し而して當初その建立の旨意を繹ぬれば、多少の異同ありて、石川縣のもの丶如く害蟲埋瘞の紀念碑たるあり、大分、宮城、福井諸縣のもの丶如く害蟲掃攘の祈祝碑たるあり、又福岡縣のもの丶如く害蟲驅除の記功碑たるありと雖ども、要は農作害蟲の怖るべく、之が驅防の等閑に附す可からざる事を訓戒するの誠意より出づ、豈にこれを路傍の供養碑と同視して可ならんや。然るを其現狀を聽くに、或ひは桑圃の間に顚倒するものあり、或ひは風雨に曝され文字の剝蝕に任するものあり、或ひは空しく山中の荊叢に埋もるものある等、今にして早く之が保存の道を講せずんば、久しからざるに事蹟湮滅の虞れなしとせずと。當、昆蟲研究所深くこゝに感あり、當所創立七年の紀念事業として、本年四月を期し、之が保存修補の計畫をなせり。然れども到底少數者の微力を以て完成すべきにあらざれば、博く同志を全國より募り、其義捐を仰ぎて、古人が今日に遺したる洪恩に荅ふる所あらんとす。世の農桑業に從事し若くは昆蟲學を研究せらるゝ諸士の、半瓶の酒、一塊の肉を節して、此擧に贊襄の意を表せられんことを冀ふ。

◎義金は一口金五錢以上とす。（郵劵代用にて宜し）
◎義金は一人一口以上とす。
◎義金取扱は來る七月末日を以て終了期限とす。
◎義金には受領書を出さず時々「昆蟲世界」紙上に芳名を掲げて領收の證となす、
◎精算報告もまた同じ。
◎醵集義金は之を平分して、七月末日までに判明せる、各蟲塚所在地の官廳に依託すべし。
◎義金送附の際は、蟲塚復舊工費若くは雨覆ひ埓柵修造費に限り支出せられ度旨を指定すべし。
◎義金醵集總額幷に寄附者名簿は、配分金と共に各官廳に送附して、義捐者の意思を傳達すべし。

義捐金申込所　岐阜市京町　名和昆蟲研究所

昆蟲世界

第六巻第五拾八號

(毎月一回十五日發行)

(明治三十五年六月十五日發行)

◎蟲塚保存義金喜捨第四回報告(イロハ順)

- 金拾圓 新潟縣(故)佐藤八榮太君
- 金四圓 三重縣 和波鑛太郎君
- 金壹圓 三重縣 和波久司君
- 金壹圓 新潟縣 佐藤榮君
- 金參拾錢 岐阜縣 田中榮助君
- 金貳拾錢 岐阜縣 田中きく子君
- 金貳拾錢 秋田縣 佐藤多吉郎君
- 金貳拾錢 三重縣 三輪好孝君
- 金八錢 群馬縣 六本木重太君
- 金五錢 三重縣 伊藤龜太郎君
- 金五錢 鳥取縣 生田英雄君
- 金五錢 埼玉縣 土生津勘吉君
- 金五錢 三重縣 新貝二市郎君
- 金五錢 三重縣 川瀬時次郎君
- 金五錢 島根縣 龜井金次郎君
- 金五錢 三重縣 吉岡亥之助君
- 金五錢 愛媛縣 田邊福太郎君
- 金五錢 愛媛縣 武智義一君
- 金五錢 山口縣 中尾猪太郎君
- 金五錢 兵庫縣 井本哲二郎君
- 金五錢 京都府 大石瀧之助君
- 金五錢 三重縣 葛山彦太郎君
- 金五錢 愛媛縣 山田泰君
- 金五錢 三重縣 山崎常樹君
- 金五錢 徳島縣 山下新五郎君
- 金五錢 山口縣 安永源吾君
- 金五錢 兵庫縣 松尾繁君
- 金五錢 千葉縣 後藤新佐久君
- 金五錢 香川縣 寒川孫三郎君
- 金五錢 三重縣 諸岡梅次郎君
- 金五錢 徳島縣 本生良三君
- 金五圓 新潟縣(故)佐藤さだ子君
- 金貳圓 新潟縣 佐藤たけの君
- 金壹圓 愛知縣 寺島かよ子君
- 金卅五錢 青森縣 新渡戸君母堂
- 金貳拾錢 秋田縣 伊藤泰藏君
- 金貳拾錢 愛媛縣 矢野廣太郎君
- 金貳拾錢 秋田縣 佐々木茂助君
- 金拾五錢 兵庫縣 堂本俊次郎君
- 金廿錢
  - 愛媛縣 影浦次男君
  - 鳥取縣 木村壽祖次君
  - 三重縣 水越熊次郎君
- 金五錢 鳥取縣 西谷善八君
- 金五錢 栃木縣 渡邊新三郎君
- 金五錢 鳥取縣 龜田繁治君
- 金五錢 愛媛縣 龜本團藏君
- 金五錢 香川縣 多田佐一郎君
- 金五錢 鳥取縣 田中熊治君
- 金五錢 愛媛縣 武智守吉君
- 金五錢 廣島縣 井口廣助君
- 金五錢 京都府 井本義三君
- 金五錢 愛媛縣 雀田頴吉君
- 金五錢 鳥取縣 山田豐藏君
- 金五錢 鳥取縣 山桝專藏君
- 金五錢 愛媛縣 山下福太郎君
- 金五錢 京都府 八木助治郎君
- 金五錢 香川縣 前田茂太郎君
- 金五錢 三重縣 近藤泰助君
- 金五錢 兵庫縣 芦田隆太郎君
- 金五錢 兵庫縣 見谷松藏君
- 金五錢 鳥取縣 森壽平君
- 金五錢 東京府 前田正名君

◎小計金貳拾八圓參拾八錢(五百六拾七口強)

◎累計金四拾九圓拾八錢(九百八拾參口強)

右蟲塚保存費中へ義捐相成候に付茲に及報告候也

明治三十五年六月十日

岐阜市京町 名和昆蟲研究所

◎岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條に依り、毎月第一土曜日午後正一時より、岐阜市京町名和昆蟲研究所内に於て開く筈なれば、毎會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所内 岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會本年中の日並は左の如し

- 第四十三回月次會(七月五日)
- 第四十四回月次會(八月二日)
- 第四十五回月次會(九月六日)
- 第四十六回月次會(十月四日)
- 第四十七回月次會(十一月一日)
- 第四十八回月次會(十二月六日)

◎本誌定價並廣告料

- 壹部 郵税共 金拾錢
- 壹年分拾貳部郵税共 金壹圓八錢

(見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す)

(注意) 本誌は總て前金に非れば發送せず ◎爲替拂渡局は岐阜郵便電信局 ◎郵券代用は五厘切手にて壹割増とす

廣告料五號活字廿二字詰一行に付金拾貳錢、三十行以上一行に付き金拾錢とす

明治三十五年六月十日印刷並發行

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二

(岐阜縣岐阜市京町)

發行所 名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二 發行者 名和梅吉

同縣武儀郡下有知村三百七十四番戸 編輯者 天野秋二

同縣安八郡大垣町字郭百五十三番戸 印刷者 河田貞城

(明治三十年九月十日内務省許可)
(明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)

(大垣西濃印刷株式會社印刷)

Vol.VI. JULY. 15TH, 1902. No.7.

THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.
EDITED BY Y. NAWA.
GIFU, JAPAN.

昆蟲世界

（七月十五日發行）

（毎月一回十五日發行）

第六卷第七册）　第五拾九號

目次　（禁轉載）

（明治三十五年七月十五日發行）

（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU, JAPAN.

◎寄贈物件受領公告

一グラス壜(明治初年舶來 昆蟲摸樣附)壹個　東京市　田中芳男君
一蝶形花簪(富山市製)五本　和歌山縣　淺尾重敏君
一蝶形花簪　三本　岐阜縣　篠田靜枝君
一報知新聞(昆蟲記事掲載)二葉　岐阜縣　山本守三君
一河北新報(同上)壹葉　宮城縣　河北新報社
一代理石昆蟲彫刻物壹個　岐阜縣　野村安太郎君

右寄贈相成候ニ付茲に芳名を掲けて其厚意を謝す

明治三十五年七月十日　名和昆蟲研究所

◎蟲塚保存義金寄附第五回報告(イロハ順)

金五拾錢　岐阜縣武藤治郎吉君　金五拾錢　岐阜縣宮島助三郎君
金貳拾錢　埼玉縣　櫻井倚耕君　金貳拾錢　岐阜縣　三間　孃君
金拾五錢　兵庫縣　關　太平君　金拾錢　福井縣西野市太郎君
金拾錢　靜岡縣增井林太郎君　金拾錢　岐阜縣福田金次郎君
金拾錢　千葉縣　齋藤桂二君　金拾錢　愛知縣　味勝正義君
金拾錢　千葉縣杉谷彌之吉君　金五錢　千葉縣石崎精五郎君
金五錢　三重縣西岡嘉十郎君　●小計貳圓廿五錢(四十五口)
●累計金五拾壹圓四拾參錢(千二十八口强)

右蟲塚保存費中へ義捐相成候ニ付茲ニ及報告候也

明治三十五年七月　岐阜市京町　名和昆蟲研究所

第十三回全國害蟲驅除講習會員募集

開期(自八月一日 至同月十四日)二週間(凡八十名)

全國害蟲驅除講習會は、同は一回ニ同志の歡迎をうけ、既ニ前回までに、三府四十縣の出身者六百拾餘の有爲なる修業生を出せり。依りて此際益々斯學の奮興を期せんことを欲し、又應募者の便を圖り、來る八月一日を以て第十三回の開講式を擧げんとす。斯學に志あるの士は、それこの容易に得難き夏季の講習を利用して、將來國家のために盡す所あれ。

今回は多少增員の設備をなしたりと雖ども、入會希望者も極めて多からんと推察せらるゝを以て、その正式の手續を了し、確定名簿に登錄せられたる正員のみを以て、會を組織する事となしたれば、入會の諾否は一ニ申込の遲速に由る。

倘申込期限を、**七月廿五日以前**と定むると雖ども、當所の都合により、隨時入會を謝絕することあるべし。規則書入用の向は郵券を添へ至急照會あれ、直ちに回送致すべし。

明治卅五年七月　岐阜市京町　名和昆蟲研究所

◎昆蟲世界購讀紹介者芳名

千葉縣　杉谷彌之吉君(參名)
京都府　山崎久藏君(壹名)
山梨縣　中澤樂平君(壹名)
兵庫縣　前田米太郎君(壹名)

ツノトンボ並にカマキリカゲロフの各種

論説

左に掲ぐるは、今回發行の昆蟲叢書第一編「全國昆蟲展覽會出品目錄」附錄、第拾壹節に收錄せる昆蟲名稱一定に對する意見なり。勿論、該書の各節及び例言の記事と對照せずんば、本論の要旨に明瞭を缺くの嫌ひあるも、數年間喧囂を來したる難問題にもあり、且將來、名和昆蟲研究所の取るべき方針の、其何れにあるやを知らしむるに足るものあるべしと信じたれば、茲に轉載して未だ「全國昆蟲展覽會出品目錄」を閲讀せぬ同志に似す。

編者記す

◎昆蟲の名稱に對する意見

昆蟲の邦稱を一定して、國としての體面を維持し、及び斯學研究者と、一般農家の便益に資すべきの急要なるは、既に齊しく衆議の認諾する所、而して今になほ之を決行せざる所以のものは、幾多の障害の其間に蟠延せるものあればなり。そも本邦の昆蟲には、異種同名のものあり、同種異名のものあり甚だしきは、一種能く數十の方言を有するもありて、久しく紛糾錯雜の裏に埋了せられしに、明治初年以還、斯學の進步に伴れ、ます／＼濫稱杜選の弊に陷いりしもの丶如し。是に於て乎、之を括摠統一するの議、夙に有志の間に發り、四方これに唱和する者また多しと雖ども、其濛霧を排し亂麻を斷つの困難を感ぜしにや、誰ありて輕易に手を下さず、遷延數年、遂に今日に至れるなり。斯れば、科學を專攻する者の如きは、初めより邦稱を假名視して、之を口にするだに厭ひ、學名則はち蟲名、蟲名則はち學名の惡風を釀成し、每に自國の言語を擯けて、主はら他國の稱呼に賴り、尋常の農家に對つてすら、羅甸

語を以て應答することありと、思はざるも亦太甚しからずや。而してこの病患の因て來る所を究むれば凡そ二源あるが如し、一は學者の考徴鑒定を輕んずるに歸し、他は命名の方式の定かならざりしに本づく則はち學者にして探討捜求を事とし、又命名に則とるべき標準のありたらんには、如何に外聞を衒ふ世なりとも、よも吾を捨て彼の死語のみを弄すまじく、假ひ封建割居の餘臭を帶ぶるとは云へ、斯くまでに稱呼上の分裂を來さゞりしや知る可きなり。遮莫、今や之を嘆つも詮なし、たゞそれ宜しく乘すべきの機會を窺ふて、斯學者の公正なる商議協定に竢つあるのみ。然かも今になは、其好機の到着せずして紛々擾々の間に後進を彷徨せしむ、斯學の發展を害ふや、蓋し大なり。

偶々今年、全國昆蟲展覽會の開設ありて、一時同志の視線を此場に集中せしかば、吾が名和昆蟲研究所は、事の成否、自力の輕重、時の早晩を論ふに暇なく、名稱一定の稿本として、爲に日本昆蟲分科表を發行し、其持論の向背を知るの試金石に供しぬ。固より急遽の間に、採筆印行の業を終へたれば瑕瑾の多かりしは、既に讀者の認識せらるゝ如くにて、且中に收めたる蟲種も、纔かに二百餘を算ふるに過ぎざれば、命名の標準は故らに省略しき。然るに今回本書を編輯するに及び、この積弊を革ため、紛塵を淸めんが爲には、復た容易に得難きの機會なりと思量せしを以て、遂に次に列擧するが如き規矩を編制して、私かに名稱の訂正を實行しぬ。蓋し名稱一定の必要は、今や近く目睫の間に逼り來り、得て左右を顧慮するに暇なかりしが故なり。

（一）昆蟲の名稱は成蟲に對して之を命す。但舊慣に從ひて其中に幼蟲名を加ふることを妨げず。（イヌガヤノシヤクトリノガの如し。）

（二）昆蟲の名稱は、現在本邦各地に普通のものを以て正名となす。（ホタルの如し。）

（三）正名と雖とも、多く用ゐざるもの、又は卑野のものは、之を採らす。（蛾のヒヒル、氣蠻のヘヒリムシに於けるが如し。）

（四）俗名と雖とも、其特に人の記臆に上れるものは、之を正名に准す。（カガンボの如し。）

（五）方名は、主として都會に行はるゝものを採用す。（東京のミヅスマシの如し。）
（六）古名と死名とは、或場合にのみ之を採用す。（カナカナゼミをヒグラシゼミとし、クソコガ子をマロムシとなすが如し。）
（七）約名と略名とは、記載の上に採用せず。（トンバウの約をトンボとし、カブラハバチの畧をカブラバチとするが如し。）
（八）正名は、假名遣法に據りて記載す。但略記には發音直寫法を用ゐる。（アヰノザウムシと書して、アイゾウムシと略記するが如し）
（九）漢名は便宜上、科屬名に適用し、其他は釋義にのみ之を用ゐる。（蟻科と書し、又ヒヂドシテフと書するが如し。）
（十）漢名は雅俗を問はず。但文字難澁、不適なる時は、註解若くは修正を加ふ。（蠼螋に挾蟲を添へ、拼蝶を弄花蝶に作るが如し。）
（十一）學名は最近普通のものを取りて、之を正名と併記す。但其書式は總て慣用の法に據る。（Oxya velox, Fabr. の如し。）
（十二）學名の判明せざるものには、總て定式の疑印を記入す。（キスヂヤドリバチ(Gn? sp?)の如し。）
（十三）漢字を附せざる科屬と普通昆蟲には、學名を義譯するか、漢名を捜求して、之に適字を充つ。（短角類、水龜蟲の如し。）
（十四）漢名は、其別稱異名を、各別に分用するを妨げず。（胡蝶の別名蛺蝶を以てタテハテフと呼ばしむるが如し。）
（十五）時代によりて、名稱に異同を來たしたる昆蟲には、舊稱を捨て新稱を命ず。（コホロギとキリギリスの古今相反するが如し。）
（十六）擬似態の昆蟲を三樣に區別す。（益蟲に扮する蟲類にはゴミムシダマシ、他の害蟲に扮する蟲類にはキクスヒモドキ、植物の葉皮に扮する蟲類にはカキノハマガヘと命名するが如し。）
（十七）既に適當の名稱を有する昆蟲には、濫りに新稱を命ぜず。（ハゴロモヨコバヒの如し。）
（十八）新稱には、其昆蟲の特殊點、若くは種屬を表明せしむるを要す。（ツチイロバッタの如し。）
（十九）正名ありと雖ども、辨別に宜しからざるものは、他名を以て之に替ふ。（カゲロフをフイウとするが如し。）
（二十）姫、菱、大、山等の形狀を言ひ、黑、赤等の色彩を表明すべき冠頭詞には、成るべく他字を副へて意義を判明ならしむ。（姫ササキリに種を、菱バッタに形を、大サシガメに形を、山キテフに產を、黑ゴミムシに色を、赤ウシアゾに色字を副ふが如し。）
（廿一）蟲名の讀下し難きもの、誤り易きものには、斷續連綴法を用ゐる。（ヒメ クロ オトシブミ、アカ イト トンバウの如し。）

假りに此規程によりて、鑒査を加ひしに、其躰軀の淡紅なるを形容せしものか、將た桃蟲の蛾なるかを分ち難きモモスズメ、語呂惡くして稱呼に自由ならざるキノカハガ、命名の不正確より一時人を迷はしむるモンキテフ、幼蟲の毛色を指すか、または成蟲の翅色を指すか、區別の明かならぬチャノシモフリシャクトリガ等の蟲名續出し、結局根抵より洗掃するに非れば、其目的を貫通し難き事由を悟り、亦急

劇の變動を避くるの得策ならんことをも想ひたれば、成功を他日に讓りて昆蟲分科表と出品蟲種中、特に稱呼適字の穩かならぬものを校訂補正するに止めき。是れ同一のゴミムシに歩行蟲と塵芥蟲との兩樣を存し、其他の名稱また刪定を悉さゞる所以なり。

今や、本書の刊行によりて、吾が名和昆蟲研究所れ、宿望の一端を事實に遂げ得たるは違はざるもその大半は之を異日の考定に俟たざる可らざれば、爾後勉めて之れが責に任ずるの微力を致すに怠らざる可し。便はち昆蟲叢書第十二編に於ては、應用上必須の種類のみなりとも、適實の名稱を附し去り、肯て今日の如く同一色の形容に、或時は紋黄といひ、或時は黄紋といふの奇觀無からしめんとす。而して此希望を達せんには、前記の標準に據るの他、或は其大小、肥瘠、斑紋、色彩、擬態、特性等の位置に關しても、細緻の標準を作り、更に命名の摸範をクロアゲハノテフ、アカイトトンバウなど其名によりて、其種を辨別すべきものに取り。又其色彩の異同に重きを置きて、青と碧との別を立つるは論なく、從來慣用のそれの如くに、黄褐を曲げて赤といひ、黄赤を誤りて紅と呼ぶことをなさず、次にはウンモンクチバガ、オホマダラキシタバガ等の成語に遠ざかれるもの、タマゴバチ、キバチの如く極めて誤られ易きものにも、或範圍に於て、多少の修正を加ふるの必要あるに似たり。讀者豫め焉を諒鑒し、將來もし、昆蟲分科表を化して一片の故紙となし、また出品目錄に異動を生ぜしめて、過半雌黄を施すの日あらば、即はちこの至難事業を成就するの徵候と知られよ。人或ひは、その暴擧に失するを哂はんも斯學界の刷新は早晩、脫がるゝこと能はずとならば、唯速成斷行に利あるの事由を認むべく、又北海の土蠻、南島の生蕃と雖とも、各々定まれる昆蟲名を有するに、祖先以來言語の發達を以て誇稱せる本邦に、獨り之れを缺くを想はゞ、此謀圖の强がち無用の業に屬せざるを知るに足りぬべし。斯くいはゞ、

また邦名と學名とを、併せ研究するの煩累を唱ふる者なしと限らざるも、學名と近似の語言を操つる歐米諸國すら、各別に自國の蟲名を稱するに、況して東西全く其趣むきを異にする本邦に於て、學界共通語外の正名を定むるとも、何の不可かあるべき、寧ろその時期の遲かりしを惜むのみ。

◎螳螂の卵塊と飼育法

名和昆蟲研究所長　名和靖

本誌第五拾三號(本年一月發行)に『カマキリ類に就て』と題せる實驗說を載せて、邦產五種の螳螂の特質と經過の大要を述べたるに、其後なほ詳密の記述を望む旨の忠告をうけ、且神村氏の飼育試驗に關する寄書もありて、今や漸やく此益蟲に對する注意を惹けりと覺しければ、玆に其卵塊及び飼育法の一斑をものして、前說の補遺に充てんとす。

そも螳螂の古くより、和漢の學者に知られし昆蟲たる事は、旣に擧證し置ける如くなるが、其然る所以は、醫藥上の需用と、肉食蟲種たるに因れるが如し。則はち『說苑』に吳王が荊を伐たんとせし時、少孺子の螳螂と蟬との諷刺に悟りて、其兵を罷めたりとの記事あるが如き、唐土の博物書には、比較上此蟲に詳密の說明を與ひたるが如き、又本邦に於ても、早く千年以前の正史實錄に其名を留め、七百餘年前の物語本に、稍詳びらかに例證に擧げられしが如きは、その他蟲に先んじて世人に知られたるに因りしか。然は云へ、近世に至るまで、これを以て益蟲とは涓埃も思量せざりき、現に明代の朱之蕃が詩に、

昂頭双眼映レ林ニ明ナリ。會出當レ車ニ奮レ臂テ行ク。利口信ニ難レク防ニ雀啄一ヲ。狂鳴端ニ是レ惱ニス蟬聲一ヲ。蓬蒿ハ滿レツ徑ニ

堪孳息。楡柳成陰寄化生。靜默非闘能養勇。幕羶羞與蟻爭衡。とあるは、以て左券となすべく、三代實錄、續紀、和名鈔、延喜式等に散見の文字また皆比喩、識名に過ぎざるなり、特に今人の最とも奇異の感に堪へざるは、本朝の中古に、毎年二三月の交に採取せる卵塊（螵蛸）を蒸殺して、之を朝廷に進献せし一事なるべし。固より未だ益害蟲の區別なかりし當時の事なれば、多く之を蒸殺すとも、國家に損害を招致すべしとは、得て悟る可くもあらず、加之、漢方醫のこれを以て無二の强壯劑と信認せしが爲めに、斯く年々朝廷に納めしめたるも、亦藥劑の用に供せんとの目的にて、其國々は、今の大坂府、兵庫縣、三重縣、愛知縣、靜岡縣、滋賀縣、岐阜縣、鳥取縣、島根縣、岡山縣等にわたる十四國なりき。而してその納入の量は、國により異同ありて、一樣ならざるも、重量二兩より十片に至るの間なりしと云へば、毎年幾十万頭の益蟲の蕃殖を害せしや、測り知る可からざるものあらんそは兎も角、此記事を材料として、他にまた古へを稽がひ得べし。乃はち此等十數國には、蠶業の發達の顯著なりしに反し、其以外の寒國には、未だ蠶業進步せざりしか、又は蟷螂を多産せざりしかを推及するに難からざる事是なり。蓋し此等の諸國をのみ、卵塊進献地と指定したるのみならず、其卵塊は所謂桑螵蛸とて、桑枝に産附せしものに非れば、決して採用せざりしが故に、進献地には桑樹の多かりしを知り得べく、且この指定地には、寒國と目せらるゝ土地の加はざりしを見れば、蠶業の不振若くは蟷螂の少數、二源孰れかなりしを追想するに足りぬべし。

蟷螂の卵塊を藥物視し、また之を害蟲視するの舊思想は、近く明治の初年まで繼續せしも、今やこれを以て有益種の一に加ふるに至り、恒に保護を與ふべきは論なく、其益蟲たる眞價値を定むるの必要より飼育實驗の功を累ねざる可からざるを感じ、隨ひて第一に其食料を究むるの必要を知らしめぬ。是に於

て乎、斯學に從事する者は、各種の方面より觀察を下して、如何にせば、滿足に之が調査を遂行すべきやに焦慮するものゝ如し。時勢の變遷とは云へ、蟷螂の境遇にも幸不幸ありと謂ふべし。

余が實驗より得たる成績を以て之を言へば、昨今の時期に蟷螂の幼蟲を捕ふるか、又は卵塊より孵化せしものあらば、之を飼ふに蚊子を常食とせしむるを利便とす。すなはち捕蟲網を以て群蚊を掬ひ來り、之を飼育器中に投入すれば足れり。去れど、日々捕蚊の煩ひを厭はゞ廣濶なる容器に孑孑を放養するにあり、斯くなす時は、幼期のものは忽ち化して蛹となり、蛹は軈て成蟲すなはち蚊子となるが故に、有繫に暴食の蟷螂と雖ども、三四日間は更に飢うることを知らざるが如し。

飼育函中の光景

（蚊を以て蟷螂の幼蟲を飼ふ）

蟷螂の孵化後、數日間は、其常食たる蚊子の比較上大なるより、往々逸去せしむる事あるも、その躰を地物に寄せて緩歩敵に接近し、適度の前進距離に達するや、鋭尖なる半月の利鎌を伸べて、一揮之を薙倒さんとするの蟷螂と、急かに双翅を張りて、進行の方向を更へ乍ら、應變の策を講ずるの蚊子とは、正奇相當り、上下相爭ひ、一は之を捕へんと欲し、他は厄を脫れんと欲するより、絶ゑず此兩者間に演ずる活劇は、頗ぶる巧妙悲慘を極む。斯くて蟷螂の漸やく化育を遂げて、三、四眠の後に到れば、孵化當時とは全たく其趣むきを異にし、蚊の如き小形のものにては、食に飽足らぬ狀を呈はすに至る。此時蠅族螽類等は、適宜の食料たるも、試驗のためとて、故さらに蚊子のみを與へて、無事に其生涯を終

へしめたる事もありき。

飼育に先だちて、注意すべき事項一にして足らざるも、卵塊の鑑別保存を輕忽に附するか、一函内に多數を混養する時は、試驗の苦辛を無効ならしむる事無きにあらず。すなはち卵塊の乾燥に失したる時か又は寄生蜂の寄居するものある時は、化生の成績良好ならざるを以て、宜しく其形狀の正しきものを冬季に採收して、適度の濕氣を與ふべく、若し一函内に多數を收容する時は、茲に生存競爭の端を啓きて同類相害あひ、骨肉相食むの極、纔かに一頭を剩すに至ることあらん。然かも、其函内に生殘の一頭こそは、勇猛なる雄蟲のそれならで、性質の靜温ならんと假想せらるゝ雌蟲なる可し。斯かる下等の動物には、一種雌尊雄卑とも稱すべき天則のありて、雌は雄を喰害するの性を有すると覺しく、時には相交し乍ら雄體を咬傷する事すら之あり、假ひ蕃殖上より來れる要約とは云へ、また驚くべき事實にて、昆蟲界に特に顯著なる雌雄淘汰の原由は、また等しく此に存するなる可し。

以上記述する所ろは、主はらカマキリ種と大形種とに於ける現象なるが恐らくは小形種にも、將た濶腹種にも、これと近似の事實を認むることとを得ん耶。たゞ姫種に至りては、初めより蚊食を以て飼育することは難し、何となれば、其幼期には到底、輕飛駛走を事とする大形の蚊子を捕獲するの技倆なく、爲めに屢次飢餓に逼りて衰弱を來たす事あればなり。余は其飼育に困難を感ぜし結果、不圖、雜草に掬網を試ろみて、小蠅、浮塵子、寄生蜂其他の小蟲を與ふるの適當なる可きことを案出し、この混淆食料を以て、都合六十日間の試驗を終へたる事ありしが、初め食料を函中に投入するや

ヒメカマキリの圖(雄)

♂

姫種の悦ぶべは譬へんょ物なき狀貌をなし、食蟲を見る瞬間ょ、先づ小蠅を捕ひ、次で小蟲に及ぼせしも嘗て他の寄生蜂には其害を加ふるに至らざりき。是れ蜂種には、蟷螂の嫌惡すべき器官を具備するに因るか、將た造化の妙用ょよりて、兩益蟲間に訂盟の天約あるに因れるかは、得て知る所ろょあらざるも、亦一の奇異なる事實にあらざる莫き耶。

あほ他に螵蛸寄生蜂、卵粒、變化等に就きても、多少材料無きにあらざるも、余かカマキリ種を記述の目的は、一般農家と學童とょ、習性經過の梗概を知らしむるにあれば、强がち益蟲對益蟲間の細故にまで論及せざ、茲には普通に益蟲と稱するカマキリ種が、如何に多くの害蟲を捕食し、其極如何に人生を利するかを、解決せしむるを以て程度とすべし。若しそれ敎職に任ずる者にして、一たび之が飼育を試ろみ、學童をして厚く益蟲を愛護するの念を起さしむるに至るか、農會の事を視る者ょして、田圃間に於ける放養を奬勵し、少さかたりとも蟲害を免がれしむる事を得ば、余が蟷螂に對する希望は、則はちこれを以て足れりとすべし。

◎明治卅四年の氣象と害蟲の發生（續）

北總　大竹義道

◎平年に比して多く發生蔓延せる害蟲類　上述の如く、三十四年は氣候の本順を失せしが、冬季越年せし彼のゴマタラテフの幼蟲即はち蛅蟖は、自然減殺を享くるの境遇に遭はざりしが、平年に比して春季に頗ぶる多く、各圃塲に散在して、種々好む所ろの草木葉を咀嚼し、其他ムメケムシ、ブランコケムシを始め、各種の蛅蟖類も甚はだ多かりき、併かし又寄生蟲の其等蛅蟖類に寄生して減殺ょ力むるを屢次見受けぬ。

五月上旬に、或村の作人キリウジを携さへ來り、斯種苗代に多生して、苗を痛く害せりと告げしより直ちに其被害地に出張して實査するに、作人の云ふ如く既に非常の慘害を呈せり。此時期にはキリウジは最早老成せるもの過半、多くは畦側面に塗抹したる泥土中に蟄伏し、中には往々蛹に變体せるもあり又既に羽化して成蟲キリウジカヾンボとなれるも多かり。斯かる慘害の未だ他の町村にありたることを聞知せざれども、有機肥料を過度に施こせる苗代には、多少何れにも此害蟲の發生せるを認めき。此のキリウジは苗代に限らず、濕泥地等に產卵して、孵化後有機物を食し生活するの性あるが故に、羽化時期に苗代附近に點燈する時は、隨分多く誘殺し得ることは實驗上明らかなり。(附言埼玉縣下の某地方にても、五月中旬後に、苗代にキリウジの多生加害の事ありしを聞知せり。)又五月中にコフキゾウムシ(方言サルコムシ)の例年發生せる地方に多く發生して、大豆の發芽後十數日經たる軟葉を痛く喰害せる事を目擊せり。

七月中は山間の水田に、イチノアヲムシ(方言ハムシ)多く蔓延し、無慘にも稻葉を蠶食せり、發生初期には豫防の効著しけれども、作人等は未だ害蟲の發見力極めて乏しきが爲め、四眠後蔓延し遂に局部々々の水田に慘害を觀るまで加害を逞ふせしめぬ。

八月上旬頃に、利根川附近の某地に廣くイナゴ發生して稻葉の咬害に罹るもの多く、當時捕蟲網を以て一掬するに、忽ち二合程捕獲せし事もありき、斯の如くイナゴの發生を檢出せし頃は、今一眠起せば大概成蟲となるべき危險の時期なりき。此害蟲たるや前年土中に產附の卵塊より、初夏孵化せる當時努めて驅除せんには、其奏効の著大なるべきに、久しく放任せしが爲め、氣候の變化又は其他自然の減殺力に遭はず、悉とく成蟲期に至るまで發生蔓延せしより、扨は斯く劇しき悲境の慘害を蒙むるに至りた

るものあらん。又同月中、山間の水田に、南部の地方にありてはハマクリムシ甚だしく發生し、稻葉の咬害を睹るに至れり、是また初期に驅除せば、格別の慘害を見ることなかりしも、其實害蟲の何ものたるを知らざるより、遂に尠なからざる損害を睹るに至りしなり。

螟蟲は春夏の初期には、或る地方々々の局部にのみ幾分か多く發生して加害ありしも、先は平年と異ならぬ發生ありしが、第二期の發生數は、初期より一層多きを認めたり、併し氣候一般に後れたれば、出穗前既に莖内に侵蝕せし螟蟲少なきより、平年の如くには白穗を見ること無かりし、但稻の成熟中にその害に罹りたるもの多かりき。其被害稻莖は早期に枯色を呈し、倒伏し乍らも不完全の成熟をなしたるより、當業者は蟲よ蟲よと騷ぎ立つるに及ばずして已みぬ。

浮塵子の一種なる髭丸横這（トビイロココバヒとも云ふ）は十月上旬頃より、地方の局部々々の耕地に發生して甚だしく慘害をなせり、之れが實況を目擊したる當業者は、浮塵子の大害を始めて怖るゝ程なりし、中には全たくその害を思はず、只單に陽氣の致せるものならんと信じ居るもありき。此等浮塵子は初め早稻種に多少發生しありたるに、九月中の氣候によりてか敢て減少することなく、中稻晩稻の成熟期頃非常に增殖し、降雨の頻繁なるより、耕地の局部々々にありて、蕃殖上都合よき處に多く群集したるが爲め、其等局部の耕地は一層痛き慘害を受けしが如し。而してこの慘害の北總地方のみならざる事實は、昨年十月中旬頃に武州上州及野州地方に旅行せし際、滊車の車窓より稻田を瞥見して其各處にありしを知りき、即はち普通風雨の爲め倒伏せるものとは、其趣むきを異にして、稻穗の既に登熟せる莖の白枯となりて多く倒臥せるを目擊せしかば、其耕地に就き親しく踏査せんとて降車の後、一方に風呂敷を置き之れに逐ひ込て、如何なる浮塵子ならんかと仔細に點撿せしに、北總地方のものと同種なる髭丸

横這並びに電光横這ありし、此時成蟲のみならず幼蟲も多く跳歩し居れり、尚ほ他の稻莖の鮮黄色を呈して能く直立せる稻田に就き親しく實査せしに、斯る田には絶えて浮塵子を發見せざりき。斯くて地方作人に倒伏せる稻にして莖の白色を呈せるは、浮塵子並びに螟蟲の害に罹りたる爲めなりと説明せしに初めは全く陽氣の致せるものならんと固信し居れりしが、遂にこれぞウンカと云ふ蟲なるかと始めて覺知せしものゝ如く、尚検蟲鏡を以て示せしに、一層驚怖の狀を呈せりき。歸途は栃木縣より奥州線路を取りて、沿途の狀況を視るに、畦畔に沿ふて長く、又は路傍に生長しある榛の枝葉の下にある稻田の稻も、痛く蟲害に罹り、その莖の白色を呈して倒伏せるを認めしも多かり。然れども當業者は一般に、稻穗は既に成熟して倒伏したるものと誤信し、敢て介意の色なかりしなり。併し如何に成熟すとも、其穗籾の到底不完全なるを免がれざるや知るべきのみ。

夜盗蟲は十月上旬頃より、下總の蕎麥畑に廣く行き亘りて蔓延し實に甚だしき慘害を極めたり、蕎麥は其葉のみならず、花實共に貪食せられ、其他なほ菜大根にも移りて大害をうけたり。斯の如く夜盗蟲の廣く耕地に蔓延せしことは、古老も始めてなりとて大に驚きぬ。過般利根川の對岸にて茨城縣下に屬する地方の當業者が、該地方にも夜盗蟲非常に發生蔓延して蕎麥を始め其他の冬作物を害せりとの談に徴すれば、此時の分布區域も略ぼ推知せらる。然るに予は斯く甚だしく蔓延の聲の世間に傳播せざる前、或る耕地を通行する折、蕎麥葉にボツ／＼小なる穿孔を認め、是れ必ず夜盗蟲の處業ならんと信じ、親しく細検せしに、果して二眠又は三眠起後の幼蟲を認めしより、此の際努めて驅除せざれば、四眠起後貪食を逞ふするならん事を其作人に告しとありしに、十月中旬頃となるや、果して各地方より續々其加害を報告し來りぬ。

上來列記したる主なる害蟲類の、平年より非常に多く發生蔓延せしは、全く昨卅四年度の天候に異狀を呈し、大に本順を缺きたるに歸因せしものと信ず。去らば害蟲驅除委員は勿論、當業者たるものは、氣候の變調如何に注目し、害蟲類發生の初期に驅除豫防するに至らば、其奏効の顯著なることは、吾人が身体を侵害せんと欲する彼の傳染病豫防の最とも一般に通じて行ひ易く、且奏効あるべき清潔法を冬季に行ふと等しかるべし、然らば從來害蟲の蔓延したる後始めて發見し、惣掛りとなりて驅除よ豫防よと騒ぎ立てんよりは、經費少なく奏効の大なる豫防を講ずるに勝れるはなかる可し。是れ當地方に於ける氣候と害蟲とに關する卑見を陳述して、敢て斯業者の參考に供する所以なり。（完）

因に云ふ。氣象の變化に就きて各地方に於ける害蟲の多寡如何は、緯度高低の差と地勢上に於て大に異ならんと思はる、然らば各地にありて常に氣象並びに害蟲類の發生の狀態に注目せらるゝ讀者諸君は、其既に研究に係る高説の多少に限らず、本誌に寄稿せられたらんには、吾人が研究上に取りて頗ぶる稗益する所ろあらん、予は續々此種の寄稿あらんことを切望して止ます。

◎第十二回全國害蟲驅除講習會員の五分時演説（續）

青森縣　新渡戸稻雄

（四）青森縣下に於ける諸種の害蟲

私の郷里青森縣下の重なる害蟲を申述べやうと思ひますが、御承知の方も中には有るやも知らんが、青森縣下は到處見渡す限り原野が多くありまして、隨ツて昆蟲も少ないから、農民は絶へて害蟲驅除を行なひませぬ。此油斷即はち驅除を行はん爲めに年々多くの蟲害に罹りまして、農作といはず、山林といはず、養蠶といはず、蟲害に罹ることは夥しいものであります。畢竟地積が廣くて飢餓の憂ひが無いと云ふのが、昆蟲思想に乏しい源因であらうかと思はれます。そして其蟲種はと云ふと、先づ森林には、

松毛蟲、粉吹金龜子、松鋸蜂、柏毛蟲、緋威鎧蝶、剪綵金龜子、天蠶が居り、牧畜業の害蟲としては馬蠅、蜘蛛椿象、天狗横蟲、蝗蚱、稻蝨、蚜蟲その他が居り、特用作物には大麻天牛、苧麻蝶、赤蛺蝶が居り、蠶業の害蟲としては蠶蛆、桑尺蠖、金毛蟲、桑毛蟲、桑葉蟲、結桑蟲、桑蝨が居り、園藝上の害蟲として蔬菜には蚜蟲、地蠶、葉蟲、羽蟲、蕪菁葉蜂、守瓜、螻蛄、豌豆地蠶、僞大瓢蟲が居り、果樹には貝殼蟲、林檎巣蟲、白點天牛、花天牛、叩頭蟲、象鼻蟲、姫金龜子、梅毛蟲、栗象鼻蟲、桃果蠹蟲その他各種の蚜蟲と蠹蟲を以て滿たされ、普通作物よは泥負蟲、稻蚜蟲、稻椿象、葉蛆、螟蛉、苞蟲、稻蝨、横蟲、稻螟蟲、粟螟蟲、米牛、金龜子、切蛆蚊蛇、夜盜蟲等が居りまして、中にも松毛蟲、粉吹金龜子、稻螟蟲、僞瓢蟲、泥負蟲、蠶蛆、蚜蟲は加害劇甚であります。處で青森縣目下の蠶業の狀況と申すものは頗ぶる低度であッて、秋田縣の十分一、沖繩縣の上に居りますが、是は地積の廣大なるに比して人口の稀疎(青森縣は津輕五郡と南部三郡より成り、津輕は有名の米作地なるも南部は之に反せり)あるより養蠶區域の狹少なるよ原づくとは云へ、また農家の智度の低き爲めでありまして、將來有望の土地の多きに關はらず、數年前より蠶蛆の蕃殖特に甚はだしく、年々六割以上の損害を被ふります。斯かる樣でありますから蠶業家よ一頓挫を來たしまして、困難を極め居りまする處へ、北海道よりは廉價の蠶種を續々輸入せらるゝので、蠶種製造家の困難は更に一層の困難を來たしました。大略申せば前述の通りでありますが、今よして早く害蟲驅除よ注意したらんには、國產を興し害源を絕つことも左まで至難でなからうかと存じます、それには唯一般農家の智識の進歩を望む次第であります。

(五)勤勉者の不幸、懶惰者の幸福　　愛媛縣　武智守吉

去明治三十年は全國一般よ、ウンカが發生致しまして大損害を來たしましたが、當時私の縣では用水に欽乏しました爲め、慣用の注油驅除法も之を行ふことが出來ませんので、農民は概むね袖手傍觀と云ふ冷淡な態度を取り、恰かも他人の稻に對するが如き有樣でありました。然るに眼前この有樣を見聞せる有志者は非常に嘆きまして、此儘で居ッては何れ雨が降ッて用水が出來たとしても、害蟲の蝕害のために收穫の見込が無い事になるから、早く是非とも驅除せんければならぬと云ふて、先づ一つの粗末なる布袋を作ッて掬殺を試ろみました處が、中々澤山捕れました、併し多數は害蟲の發生に關心致しませんで、これは用水の缺乏の爲めであると申し乍ら、却つて驅除する者を見て笑ふて居る次第ですから、如何よ勸告を致さうが馬耳東風で、偶々これを行ふ者がありましても、只形式に過ぎないから其効力が極

めて薄く、少數の者許りが晝夜熱心に從事した處が全たく驅除を致さん田面が大半を占めて居りますから其等の田から追々と驅除した田に飛込んで參るので、勤勉者が不幸で、懶惰者が慶福と云ふ奇觀を呈し、結局驅除者も驅除せぬ者も同一の成績を得ると云ふ事になりました。そこで共同驅除でなければ効能が無い、又此く大發生を遂げぬ中に、何とか方法を講じなければ、秋後には致方が無いと云ふ事に注目するやうには成りました。併しもと少數者の意見であるから弘く之を實行し難い處から、此事實を確めた以上は、農會が中心となッて强制的に實行せしめねば成らぬとの說に歸着しまして、只今では苗代時期から豫防的の驅除を行ふやうに成りました。則はち移植數日前には、農會から數名の審查員とも云ふべき役員が苗代田を巡回致しまして、若し十分に驅除が出來て居らんと認むる時には、田植をさせぬとまで强制しましたので、近頃は餘程順序が立ッて參ッたのでいありますが、未だ害益蟲の區別をも知りませんから、蟲と見れば何でも片端から驅殺するのであります。兎も角害蟲と云ふものを認むるやうに成りましたのも、三十年の大發生の餘響で、一時勤勉者の不幸を來たしたる賜ものと信じます。

（六）害蟲驅除と過信の弊害に就て

新潟縣　佐藤榮

今より五年前の事で、丁度私が宮城農學校に居りました時でありましたが、夏期休暇と云ふので歸省を致しました、處が父が最とも鍾愛して栽培致しましたる金柑に、夥たゞしく蚜蟲が發生して居りましたから、如何にもして之を驅除して亡父の意を慰さめ且は學校で修業した腕を見せたいとは存じましたもの丶、實は其驅除法を知りませんであッたから、土地の誰彼に問ひました、併し一向要領を得ませんものであッたから、遂に書面を以て私の學校の或先生に之が驅除法を照會致しました。程經て先生の許から回報がありましたから、悅んで披て見ると、蚜蟲の驅除法としてはケレオソートと云ふ藥劑を塗抹するより外に致方が無いとの仰せでありました、そこで早速村の醫者の許に參ッて、之を貰ひ受けて塗ッて見ますると、成程見事に蚜蟲は死にましたから、非常に悅びました。然るにそれより僅々一二日の後に金柑を見ましたならば、新芽が少しく萎れかゝり、何となく妙な樹勢となッたので、是は不審と思ひました、不審も其筈で其後十日許りで枯凋して仕舞ひましたのである。則ち蟲は殺したに相違ないが樹もまた殺したに相違なかッたのであります、若し斯かる場合に「薔薇之一株、昆蟲世界」でも讀ンで置きまして益蟲を保護するとか、又は着實な驅除法でも行なひましたならば、決して父の遺愛の盆栽をムザと枯らしはせなんだ事と信じます。是は一例を引くに過ぎませんが、今回入會致しました爲めに、私の

一身に得たる新智識は非常なもので、歸縣の上實地應用に際しては、特に利益の多大なる可き事を感じた次第でありますから、茲に懺悔談を致して本會が鴻益を與ふる一端を申す次第であります。

（七）小學兒童と害蟲驅除　　山口縣　安永源吾

私は山口縣の美禰郡の片田舍に居て、教職に居る者でありますが、今回本會に入會致しましたので、愈々共同事業の緊要なることを感じたる次第でありますから一言申述べやうと思ふ。扨先日、名和先生の講話で承はりまするに、某縣の一郡長が益蟲と知らずして瓢蟲を捕殺したとの事でありましたが、私も丁度其通りで、今日までは益蟲害蟲の區別も無く、植物につく昆蟲と云へば、只濫りに殺して居りました、今より想へば誠に面目も無き次第で、嘆かはしい事を致しました。段々實地を探ッて見まするに、從來農家が害蟲驅除に勉めぬと云ふは、昆蟲思想に乏しい爲めであッて、吾が縣で苗代田を改良して長方形と致しは致したものゝ、其長方形に致したる眞目的即はち捕蟲の一段になると、一向之に頓着を致さんで、只命令の嚴しい爲めに已むことを得ぬ申譯に驅蟲する位ゐであります。是は自分の利益や不利益を顧りみぬのでありますから、誠とに憐れむ可き有樣ではありますが、其實を穿てば、蟲の何物たるかを知らんと云ふに歸着致します。幸ひにも私は今回害蟲驅除、益蟲保護と云ふ事に就て、其端緒を學び得ましたから、歸縣後は及ばず乍ら先導者の任を帶びまして、全郡の教育者と協心戮力、成るべく實地教授即はち野外に於て捕蟲もし、標本を作りも致したいと思ひますると同時に、從來の如く席上教授すなはち圖面教授の弊を改めやうと存じます。そして兒童は極めて新奇を好むものでありますから、各々競爭して捕蟲する事を無上の樂とするだらうと思ひます、左ある場合には、何時と無く益蟲害蟲の區別も知り、益蟲は保護すべく害蟲は厭ふべきものとの念慮を起し、漸次父兄に吹込むと云ふ次第になりますから、如何に頑迷な父兄でも害蟲驅除の必要を感じ、之を感ぜると共に共同驅除に非ざれば奏効の少なき事を悟り、遂には郷村を擧げて全力をこゝに注ぎ、兩三年内には乾度愉快なる結果を現はす事が出來るものと信じます。

（完）

◎螻蛄の豫防方法

靜岡縣農事試驗場內　岡田忠男

螻蛄は昆蟲類中直翅目に屬し、常に濕地に棲みて作物に加害するを以て、農家はこれを害蟲の一に數ふ而して之が加害の時期たる、殆んど一定せずして當地方の如きは、一二月の嚴寒時を除くの外は、常に加害するが如し、是れ畢竟發育の順序不正にして、越年の如きも發育の齡を異にし、或ひは幼蟲なるあり、或ひは成蟲なるもありて、現に本年の如きは四月上旬已に多くの卵子を採集せり。然るに多くの昆蟲書に據れば、五月以降七八月迄も産卵するものヽ如くに見ゆ、然すれば四五月の頃に産卵し、其發生したるものが、七八月の交産卵したるものヽ未だ孵化せざる前、已に加害するが如き有樣にて繼續し十二月に至るも尙ほ麥作等に加害すべきか、斯くも加害の時期長きに亘るを以て、從うて之が驅除豫防に困難を感ずるは、夙に農家の認むる所なり。

嘗て名和昆蟲研究所長云へることあり、驅除の一貫目は豫防の一匁に劣ると、實に然り、余は此害蟲に對して豫防の驅除に勝れると數等なるを悟るのみならず、なほ諸書を窺ふも此蟲に對する驅除法の其當を得たるもの少なきやの感あり。是れ土中に棲息して縱橫出沒、朝に此處を害するかと見れば、夕には彼處を害し、晝は隱れ夜は出で殆んど其所在を知るに困しむに由る、故に驅除劑を散布するも効を奏せず其被害作物は麥、陸稻、蔬菜の類にして、加害時期の長きことは前已に述ぶるが如し。去れば特に豫防の必要を感じ、昨年より二三の方法を實施して稍有効を驗するに至れり、即はち左に。

其一、施肥に注意すること　諸作物を栽培するに當り、原肥として多く施用するは堆肥なり、然るに螻蛄は其内に進入して作物の根部を喰害するを以て、此害蟲の被害多き所に於ては、原肥即はち堆肥の充分腐敗したるものを用ゆるにあらざれば、害を招くこと特に多し、是れ原肥の施用に注意せざる可からざる所以なり。

其二、中耕を多くすること　麥にあれ、其他の作物にあれ、螻蛄の多き處にては、成るべく中耕回數を多くするを要す、若し之を怠るときは、自然作物播種の下に進入す、故に畦間を耕起して、種子下に進入するを防ぐは、また緊要の一事となす。

右は豫防法として昨年より實行して奏効せるものヽ一なり、而して被害後に注射驅除劑を使用すとも容易に地下一二寸の所に達せしむること能はざるのみならず、揮發性のものは早く飛散して其効果極めて

薄し、故に此蟲に對しては適當の豫防法を施すを以て、最良の方法なりと確信す。次ぎに普通蔬菜の苗床（即ち小區域內）に螻蛄の進入して數次加害することあり、依りて之が豫防法に就き、簡易なる試驗をなせしに成績は次の如し。（明治三十五年四月十日、苗床は尺坪六坪）

項目／藥品	（數量）	（摘　要）
硫黃華	五匁	施行の翌朝已に螻蛄の進入を來せり
除蟲菊粉	五匁	施行の翌朝已に螻蛄の進入を來せり（普通坊間に販賣する蚤とり粉）
テレビン油	五匁	五日目初めて進入す
ナフタリン	最多量　五匁	十日の後に至るも臭氣發散せす爲めに少しも進入せず
仝	最少量　一匁	仝　斷

右は藥品を表土に散布して混合し、甘藍を播種したるに硫黃華、除蟲菊粉は更に効なく、テレビン油は少しく効あるも飛散し易く、ナフタリンは十日以上も臭氣ありて且つ發芽を妨害するの恐れなかりし。更に之を茄子、胡瓜等に使用せしに、なほ同樣の結果を生ぜたり、故に小區域圃地に螻蛄の進入を防ぐの藥品はナフタリンの低價にして且つ有効なるを用ゐるに及かず。

因に記す。圃地にありて土塊を耕起する時に、能く螻蛄の白色を呈して斃死し居るものあるを認むべし、或地方にては螻蛄化して子ンブリ（木の名、方言）と成り、又は此蟲化してモムギ（草の名、方言）となると云ふものあれ共、當地方採集のもの數個を、農商務省農事試驗場病理部に送りて堀正太郎氏の鑑定を仰ぎたるに、全たく一種の黴菌の發生して白色を呈はしたるにて、Cordyceps militares（コーヂセップス　ミリターリス）と稱す、是は此害蟲に對する唯一の寄生菌なりとの報ありき。

◎幼蟲飼育の實驗を記す

第十一回全國害蟲驅除講習會修業生　千葉縣　東　勇

本年四月十六日、昆蟲採集を試みし際、蟲卵を温床外に栽培せる甘藍に於て採收せしを以て、之か飼育を試みたり。即はち（卵）淡黃色橢圓形にして、一粒つゝ葉下及び莖に產付しありしか故に、之を洋燈のホヤに投入したるに、仝月十八日に至り暗黑色に變したれば、必らず遠からず孵化するならんと思ひ一時間每に撿視を加へたりしに、其日午後四時頃に孵化を遂げたり、依て直に甘藍と共に飼育箱內に入れ之を視るに、（幼蟲）　孵化したる當時は、肉眼にては其体色等判然たらざりしも、顯微鏡下に照せば淡綠色にして背線及び氣門上線は細くして少しく黃色を呈し、其中に暗黑色の氣門あり、腹部は黃線に

して頭部は淡綠褐色を呈し、體面には白色の短毛を密生せるを認めり、而して之が加害の狀は、初め其上部の葉を食盡し次で莖を食し、莖葉共に盡くれば更に其の軟心を食害するも常に葉裏にありて其下部にあることは稀なりき。斯くて五月八日頃よりは其擧動活潑ならず、食草甘藍を離れて板面に附着し、仝十日午前八時より漸々蛹狀を現はし、十二日に至つて仝たく化蛹せり。即ち該蟲の卵子より孵化して蛹に至るまでの日數は實に二十四日間とす。其後二週間を經、廿五日至りて、蛹色少しく暗黑に變じ頻りに動搖を始め、次で翌廿六日午前八時を以て羽化成蟲となれり。(成蟲) 體長は平均六分三厘許、翅を伸張するときは一寸八分許あり、而して雌は白色にして少しく黃色を帶び、前翅の翅底の大半は淡黑色に、後翅は廣くして前紋の少しく中央下に至つて黑色の紋を有し、雌は白色にして淡綠に、前翅前緣の翅底に近き處は灰色を呈し、黑色部は雌よりも少なく、其翅の裏面は美麗にて、翅底の前緣は淡黃色を帶び、眼は淡褐にして蛹角は黑褐なりき。是れぞ蔬菜類の害蟲にて、鱗翅目粉蝶科に屬する有紋白蝶なるべし、記して之を昆蟲世界に寄す。

◎林檎の綿蟲の驅除試驗成績

山形縣北村山郡　村山榮太郎

先に報導せる本縣農事試驗場の綿蟲驅除試驗たるや、唯一方法を以てこれをなせるにはあらで、同時に數方法を行ふて、其結果の如何を試ろみしあり、依りて茲にはば同場に於て公表せる成績を報導し、昨今發生加害の該蟲に對する當業者の參考となさんとす。

(一)瓦斯驅除　液劑驅除にては、一旦他樹に蔓延したるときは、之を實施して其効を見る事能はさるか故に、瓦斯を以て驅除し得るやを撿定するにあり。

本試驗は二尺立方尺の箱を用ゐ、其兩側及上面は一寸板にて張り、他の兩側は硝子張りとなし下面は開放せり、此の內に被害果樹の枝梢を水を盛りたる瓶に挿し、又檢温器を其一隅に掛けて、內部の温度を撿するに供せり、而して此箱の外部は黑色の綿布を以て覆ひ光線を遮れり。

第一、青酸瓦斯試驗　青酸瓦斯を以て、驅殺し得べきやを撿定せんとするにあり。

青酸瓦斯を發生せしむるには、青酸加里に同量の硫酸(水を以て稀釋したる者)を加ふ。

(青酸加里ノ用量)	(青酸加里ニ曝露シタル時間)	(瓦斯內ヨリ取出シタル當時ノ狀態)	(二十四時間後ノ狀態)
青酸加里　一匁	三十分間	概子死狀ヲ呈スルモ多少肢脚ヲ動カスモノアリ	全ク復活ス
	一時間	死狀ヲ呈ス	過半復活ス

同上二匁	三十分間	同上	凡ソ三分ノ二復活ス
	一時間	同上	殆ト死滅セルモ多少肢脚ヲ動カス物アリ
同上三匁	三十分間	同上	凡ソ一割復活ス
	一時間	同上	全ク復活セス
同上四匁	三十分間	同上	四肢及觸角ヲ動カスモノアリ
	一時間	同上	全ク復活セス
同上五匁	三十分間	同上	同上
	一時間	同上	同上

之に因りて見る時は、青酸瓦斯にては、一時死狀を呈するも、一晝夜の後には又回生復活するもの多し即ち三十分間瓦斯中に曝露したるものは、青酸加里の分量四匁に至るも、完全に死滅すること能はす。然れども曝露の時間長くして一時間に及ぶ時は、二匁の青酸加里にて殆んど死滅せしめ、三匁に至るときは又復活するものなし、果樹に及ぼす被害は五匁、一時間に亘るも殆んど之を認むる事なし。

第二、煙草燻烟試驗　此試驗は、煙草の燻烟を以て、綿蟲を驅除し得べきやを撿定するにあり。

百立方尺ニ對スル煙草ノ分量	燻烟ノ時間	燻烟中ノ溫度八十五度以上（取出シタル當時ノ狀況）	燻烟中ノ溫度八十五度以上（二十四時間後ノ狀況）	燻烟中ノ溫度八十五度以下（取出シタル當時ノ狀況）	燻烟中ノ溫度八十五度以下（二十四時間後ノ狀況）
十匁	三十分間	凡二割生存	復活シテ凡三割生存	凡二割以上生存	復活シテ凡四割生存
	一時間	多少生存	同上凡一割生存	多少生存	同一割生存
十五匁	三十分間	同上	復活スルモノナシ	同上	同二割生存
	一時間	死狀ヲ呈ス	同上	死狀ヲ呈ス	復活スルモノナシ
二十匁	三十分間	同上	多少肢脚ヲ動カスモノアルモ復活セス	同上	復活セス
	一時間	同上	復活セス	同上	同上
廿五匁	三十分間	同上	同上	同上	同上
	一時間	同上	同上	同上	同上

是によりて之を見るときは、煙草燻烟に在りても取出したる當時は死狀を呈し、一晝夜の後に至りては多少復活するもののなきにあらざるも、青酸瓦斯に於けるが如く甚しからず、而して燻烟にて驅殺せんには、溫度の高低によりて相違あれども、三十分間にて八十五度以上ある時は二十匁を適量とし、八十五度以下にては其分量を增して二十五匁を使用し、一時間に及ふ時は十五匁にて完全に撲滅するを得るあり、而して果樹に及ぼす被害の度は青酸瓦斯と異なる所なし。

（未完）

◎本邦昆蟲研究家叢話（其六）

古奥　青蓑白笠の人

◎平賀源内先生の智巧　非常の人ありて非常の事を好めり、噫、非常の人は非常の死を遂げぬ。とは杉田鷧齋氏が、平賀先生の末路を傷めるの碑銘にあらずや。先生名は國倫、字は士彝、通稱は源內、鳩溪を以て其號とせり。享保十八年、讃岐國志度に生る（今の香川縣大川郡志度村）。其祖を入道源心といふ、世々信濃の豪族たりしが、武田晴信の爲に滅ぼされ、子孫落魄、讃岐に移り、數世の後、高松侯に仕へて其賤吏となれるなりと云ふ。先生資性聰敏、髫齔早く呑牛の氣あり。幼時嘗て途に遊ぶ、偶々國老の將に登城せんとする者あり。戯ふれて曰く、兒よ何ぞ我に過ふざる、與ふるに菓を以てせん、と先生仰ぎ視て曰く、阿翁何ぞ我家を訪はざる、獻ずるに茗を以てせん、と聞者みな驚怖せざるは莫かりき。稍長じて、藩閣眞田宇右衛門に事へて茶童となり、名を休慧と稱す。餘暇あれば則はち書を繙とき、毫も倦息の意なし、これより儁秀の名一藩に轟き、遂に天狗小僧の稱を得たり。後また藩主穆公に仕へて藥園方の小吏となり、俸四口銀十枚を給せらる。時に侯尤も心を博物學に寄せ、弘く內外の昆蟲獸魚より鑛植諸物を蒐收し、之を寫生して和漢洋の名稱を註せるに努めり、先生即はち日々其事を賛助し、爲に君寵にあづかる、此時名を改めて源內といふ。後年、本邦物產學の巨宗として、近世物理學の始祖として、偉傑の名を天下に成せるは、實に此前後の修養に原づく。居ること五年、醫學攻究の大志を起し强に乞ふて其職を辭し、長崎に之きて譯官彭城東吾に憑る。これより唐館に出入し、又蘭國の事情を探求し、發明する所多かりき。或ひは傳ふ、先生の國に在るや、要路の俗輩は、その賤族なるを以て之を輕視し、僚友はその漸やく君寵の加はるを嫉視せしかば、到底奇才を暢ぶること能はざるを察し、便はち名を修學に托して、蹶起此行を企圖せしなりと。

先生の長崎に在るや、唐商舶載の藥品に贋物相半ばし邦人の損失を來たすこと多きを聞き、譯官と與に其舘に就て鑒査を加ひ、悉とく贋物を還へす、唐商乃の識明に服し、爾後また不正品の輸入を止めりきと。後去て大阪に往き、豪商中島屋喜四郎に勸めて、備後に糖業を開き、且白糖を製せしむ。次で京都に入り、又諸國に歷巡して庶物を探討し、兼て知名の士に交は

る。寳曆三年始めて江戸に出て、富山侯の儒三浦瓶山氏に寄食し、專はら物派の古學を修む、時に年齒わづかに二十一。己にして業を田村藍水氏に受け。潜心物產學を講修す。七年、田村氏始めて物產會を江戸湯島に開き、次年また之を神田に開く。九年九月、先生會主となりて、三たび之を湯島に開く、十年、社友松田氏また之を市谷に會す。是歲讃岐に歸省して、庶物の採集を試ろむ。十一年冬、官命を以て藥物を伊豆に採集し、多く珍異奇品を獲たり。此より先、四たび物產會を開くと雖ども、海內未だ其效用を知らざりしを以て、出品を主客に分ち、主品は百種を限りとなし、これに客品を混へて出陳排列の內規を定め、前二回は主はち田村氏の藏品を展列し、後二回も半は其の助力に出でたるに、四會を通じて纔かに七百數十點に過ぎざりき。是に於てか、先生檄を四方の同好に傳へ、普ねく山海東西の物類を蒐收し、十二年を以て、重ねて之を湯島に開けり。これに加盟するもの三十餘國、其品物一千三百餘種を算し、中に不少の昆蟲を出陳せりき。乃はち之が佳惡を品評し、又その效用、分布の梗概を知らしめんが爲めに、各類を部屬別とし、且圖畫十數葉を加ひ、翌年これを上梓して、博く同志の間に頒てり物類品隲六卷すなはち是なり。想ふに封建制居の制を嚴守し、海陸の交通殆んど梗塞せる百四十餘年前に、此空前の壯擧を經營し、なほ能く三十餘州の標品千三百餘點を拾收せりと云ふに至りては、洵とに今人を慙死せしむるに足る。此一事以て先生の非凡なるを忖度するに難からじ。

初め先生の國を去るや、固より一時の賜暇に止まる、依て後屢々乞ふに、永く藩籍を脫せんことを以てす、是に至りて聽許せらる、時に寳曆十一年九月廿一日なり。其辭令の末文にいはく。

其方願の趣御內々達御聽、格別之思召を以て、御扶持米被召上、永御暇被下置候、尤御屋敷へ立入候儀は、只今迄の通に可被相心得候、但他へ仕官之儀は、御構被遊候。

これより帷を垂れて儒學を講じ、兼て醫を業とし、又ます〳〵力を物產學に竭せり。相馬侯、一見其有爲の良材たるを知り、且その貧窮を憐れみ、眷顧推重、每に巨資を給するを吝まず。又諸國訂交の富豪も、能く其生計を資けしを以て、幸ひに後慮の煩累を脫がれ、天賦の才智を庶物の試驗、機器の創製に專らにすることを得たり。時に舘林藩侯また深く先生を器とし、二百苞の厚祿を以て之を禮聘せんとす先生傲然として其內照を斥ぞけ、爲に一書を作りて、士を遇するの道を知らざるを諷刺しぬ。

明和元年二月、石綿を原料として火浣布を創織し、これを以て防火の用に充てしめんとせり。偶々是歲三月、蘭使の江戸に來謁する者あり、應待使青木昆陽氏これを蘭使に示せ、驚きて曰く、萬國未だ之を

製織する者あるを聞かざと。八月、勘定奉行一色安藝守を經て、銅錢大の布片數枚を將軍家の覽に供ふ然れども、保守的の治國主義は、斯かる新奇の製品を欲せざりしかば、其發明の功勞に酬ひざるは勿論其議を採用するを容さず、多年凝思の結果を水泡に歸せしめぬ、當時先生の不滿以て知るべきなり。是冬、幕府より渡來の淸人趙可欽、黄恪齋の二人に贈るに、嘗て先生獻ずる所の布片を以てせしに、二人この空前の發明に感服して、謝狀を呈しき。其文に曰く。

蒙賜。觀火浣布。隔火一事。予等俱已公同領觀。但此物。從古傳名。近所未覩。今貴國有此名人。博綜廣識製精奇。實爲罕見。筆難盡述。予等幸在崎館。得異叩遇見此奇珍。公同賞嘆。欲通知在唐之人此異寶。然有空言。若無實據諒難見信。今給領數枚帶圓。俾在唐博物之人。一同賞鑒。爲此具單。謹復。

明和七年、先生再たび長崎に往き、大通事吉雄吉左衛門氏の許に寓し、數次蘭國の博物學を問ひ、又多く蘭人舶齎の器機を見ることを得たり。中に發電機あり、最とも珍貴と稱せらる、先生謂ひらく、是理を曉りて摸製するは敢て難事にあらざらんと、此より横臥して考察を費やすもの數晝夜、已にして曰く吾これを得たりと、卽はち工に命じて造らしむ、果して原物と異ならず、人皆以て神となせり。淹留三年、江戸に還りて電機器を公にし、又少なくも開物の考覈に懈らざりき。然れども、資力に乏しきを以て、傍ら金唐革、寒暖計、伽羅櫛、玻璃鏡、松風酢等、未だ邦人の夢想せざる雜貨を製作し、暇あれば則はち著述に勵精し、人蔘の移植を說き、北海道のイグマ、異邦の倍子の內地に產出することを唱道し砂糖精製の急要を說きて、白糖氷糖を製するの術を傳へ、又絕へず庶物の採集に努め、學生の訓董に從事する等、斯學の發達に貢し、功利國に施こす所擧て數ふべからず。但榮路數々蹶足を暢ぶるに處なく遂に自から韜晦して、放縱遊逸の間に高談壯言以て一世を愚弄し、天竺浪人、松籟子、風來散人、森羅萬象翁、無根叟、福內鬼外等の戲號を用ゐて、筆を院本小說に執り、以て纔かに其鬱悶を破れり。嘗て其志を述べていはく『かゝる時何とせんりの小間物屋、伯樂も無く小づかひも無し』と。

先生才氣豪邁、頗ぶる任俠に類し、常に家に食客の多きを厭はず、好んで權貴に阿ねらず、たゞ黄白に乏しければ抱負を實行し難しとなし、諸國を漫遊する每に多く交りを素封家に結びき。又人の書齋を窺ふを忌み、外出に際しては、塾長に命じて、必らず內に入るなからしめぬ。然れども、簡默寡言、且其長者を崇敬するの厚きに至りては、全たく先生の素行と相反するものゝ如く、苟くも一能一藝あるの先輩に對しては、其故人と今人とを問はず、曾て知ると知らざるとに論なく、口に將た筆に、皆先生とし

て之を尊重しき。

安永八年十一月廿日の夜、事を以て激怒し、喪心人を傷つけ、十二月十八日四十七歳を以て、病みて獄舍に殁しぬ。官これを憐れみ、遺骸を從弟某に賜はる、友人杉田氏爲めに財を捐て、碑を其墓橋場の總泉寺に建て、自ら銘を作りて其死を悼めり。寺僧謚して智見靈雄居士といふ。先生繪畫に巧に、其著述は等身の多きを致し、今に世に傳はるもの幾十種あり、就中、物類品隲、萬國圖、淨貞五百介圖、日本貝譜、日本魚譜、神農本草經圖、神農本草和名考、四季名物正字考、本草比肩、食物本草、火浣布考、火浣布略説、祕傳花鏡、日本物產譜等は、共に其奥祕を窺ふに足れり。

（火浣布の一片）

編者云ふ。平賀先生の逸事は、諸書に散見すれども、未だ完全の傳記あるを見ず、故に其年歴の違ふもの、其事實の誤れるもの頗ぶる多く、特に甚だしきは、其終焉の年齢を五十七歳とするものと、四十七歳とするものとの兩說あり、又第二回の長崎行を以て、恰も前回の如くに記載せしも之あり。而して四十七歳說は、日本洋學年表獨り之を唱ふるも、他は概ね後說を採り、大日本農功傳の如きすら、事蹟錯雜の嫌なきにあらず。依りて江戸作者部類、美術名家詳傳、萬國人名辭書、日本物產年表、帝國人名辭典、萬國大年表、日本歷史辭典、日本洋學年表、藝苑叢語、大日本農功傳、物類品隲、骨董雜誌外二三書を參酌し、其實に近かるべしと思量せしものを擇びて本篇を作れるなり。外に奇事逸話の傳ふべきものは、啻に五七種に止らざるも、物產學に關係なきもの及び戲作に屬する著述は擧て之を省きつ。

又云ふ。先生五代の孫を平賀熊太郎と云ふ、現に鄉里志度に住し、先生の究明に係る交趾燒の遺法に從ひて、陶窯を業とし、雅趣愛すべきの陶器を製するを業とせり、世に之を源内燒といふ。其家また先生の遺物若干種を藏む、中に先生手製の平鉢、花瓶各一個、石綿一包、發電機一具及び書簡自畫等は、珍とするに足れりと。

◎薄翅蜻蛉の卵子に就て

岩手縣氣仙郡　鳥羽源藏

（第一信）　昆蟲世界第五十八號の卷首の圖版として、薄翅蜻蛉科所屬昆蟲の研麗精緻の圖を收められ為めに讀者を利することと多大なるべしと信ず。而して口繪の說明中に『分布區域の廣濶なる種類なれば地方によりては、また多少の異種なしとも限られず』云々の附記ありしを以て、茲に聊さか報導し置かんに、昨年の事なりき、余は山中の地上にて、一小枯枝に圖の如き蟲卵の產附せられたるを拾ひたるより、之を撿するも其何種の卵子なるやを詳らかにせざりしが、其卵形より推定して初めは或蛾のものならんかとの想像を下しき。其後孵化の幼蟲を見れば、何ぞ圖らん、一種のアリヂゴクなりしならんとは、依りて孵化の狀を熟視せしに、卵中には胸部と頭部との接線に於て二ッ折となり、其卵殼を出づるには先づ後頭を壓出し、それより彼の大顎を張上げぬ。是れ卵子の微小なるに似ず、其幼蟲の比較上大形なる所以なるべし。而して卵數は十餘粒を算し、小枝の兩側に正しく駢粘し、形狀は正楕圓にて、其色澤は淡黃を帶べる灰色のものなりしと覺ゆ。今にして想へば、其際或故障のために、詳細の實驗を缺きしを遺憾とす。（第二信）　蛟蜻蛉科（薄翅蜻蛉科）の卵子に就き、不十分なる報告を呈せしに、折返し反問に預かりしにより、重ねて茲に記載せんに、該卵子より孵化せるは、確かにアリヂゴクの一種なることを認定せしも、飼育を果さゞりしかば、其何種に屬するやを明言することを得ざるは、頗ぶる慚愧の至りなり。云々

カゲロフの卵

編者云ふ。去月下旬第一信の如き寄書に接したるも、其種名の判明せざると、產卵圖には、當昆蟲研究所のものと違ふ點もあるより鳥羽氏に照會する所ありしに、本月に入り第二信に接したれば、異聞を弘むるの料にもと併せ之を登載す。實は當所には多少の蜻蛉卵を藏するも、その何れの種の卵子にや確然たらざる所あるより、前號の口繪には故らに卵子の挿入を省きし折柄、幸ひにも鳥羽氏の寄書あり、扨はと思ひて急き照會せし次第なるが、今や此回答を得て更に遺憾の度を增せるを覺ふなり。

◎痘苗廢管の利用とスプレー球

第一回全國害蟲驅除講習修業生　奈良縣　中野木喜

缺損せる洋燈ホヤと古蚊帳とは、薄資なる昆蟲研究者の好材料として既に世に知らる、而して余は今茲

に痘苗廢管の利用を唱導するの機會に達せり。余は從來普通農事の改良を望むの餘り、多數の害蟲標本を製作して之を有志に配布せりき、然れとも幼蟲標本の製作には少なからざる時間を要するを以て、多くは之を添加せざりしなり。但簡易に廉價に、幼蟲液浸法を求めんとを研究し、遂に痘苗廢管の利用に着目せり。そも痘苗廢管とは、徑二三分長二寸餘の小玻璃管にして、一方には同徑の管口あり、他の一方は鈍錐狀に尖りて、其尖端は、半は折り去られ、其管內にはまた更に紡錘狀の極小管を有するもの是なり、而して之を利用せんとするには、管內の極小管を取り去り、酒精燈上に燒きて尖端の孔口を閉ぢたる後酒精を盛り幼蟲を投入して、木栓をなすの裝置にて、この廢管は到る處に多く得らるべければ、最便最低の液浸壜として之を應用するも、決して不可ならざるべし。これに次ぎて、スプレー球は、靜岡縣農事試驗場岡田氏に據りて購求したるものなるが、從來の吹乾法に比すれは非常に便利なるを以て、幼蟲標本の製作には、廣く之を使用するに至らんことを希望す、而して余は此スプレー球に附屬するゴム管の先端に附すべき玻璃管の代りに、同じく廢管を試用せしに、製作に恰好なるを覺へき。則はち大なるものには、直に其尖端を肛門に串通したる後、糸にて縛し之を后方に引く時は蟲體脫却の憂なく、小蟲には、廢管の尖口に極小管の兩端を折りたるものを更に嵌入して、之を蟲腹に挿む時は巧に其用を便すべし。要するに痘苗の廢管は此二途に使用し得べきを以て、同窓諸君の試用を勸告して已まざるなり。

◎小學兒童採取の螟蟲卵塊

第十一回全國害蟲驅除講習會修業生　靜岡縣　增田秀雄

我か靜岡縣に於ては、本年四月縣令第三十一號を以て、苗代田を幅四尺以下の短冊形となすべく、犯すものは科料に處す、と布達せられたり、蓋し苗代田を短冊形となすは、害蟲驅除に便なりといふにあれば、驅除にして行はれずんば、折角の良法も何の益なくして終らんのみ。然るに此縣令に從ひて短冊形になし乍ら、四尺幅とは如何敷思はるゝものなきにもあらぞ、況して害蟲の驅除をや。予は小學兒童こそ害蟲驅除の最適任者なれ、との名和先生の高説に同感を抱く者なれば、今回吾が志太郡小川村外二ヶ村高等小學校にて之れか實行を試みしに、頑迷なる農民多きにもかゝはらず、能く多數の卵塊を採集するを得たり。然かもこれ皆勤學の餘暇に得たるもの、若し尚は村農會などの助力を得、兒童をして十分に採集することを得しめたらんには、其數非常に多かりしならんも、頑民の中には螟蟲の害蟲たるを知りながら、其卵塊を驅除するの必要を知らざると同時に、兒童の苗代田又は本田に入り込むを非常に

恐るゝもの多きより、予は採集を命ずるに先ぢち、螟蟲は稻の大害蟲なる事を標本にて示し乍ら教授し且卵塊採集の方法と、苗代田に於て採集するは最とも容易にして時間を要せざること等をも懇話し、歸宅の後は其父兄にも、能く話すべき旨を宣告して、左の條件をば堅く守らしめたり。

一、自家の苗代田及び本田に於てのみ採集すべき事。
二、他人の苗代田に於て採集せんと欲せば、其作主の承諾を得べき事。
三、苗を踏込む者は害蟲と同資格なれば、深く注意を加ふべく、又卵塊を採集すると同時に、雜草をも除くべき事。
四、螟蟲蛾は見當り次第必らず之を捻殺すべき事。
五、教科の妨げとならざる樣、日々少時間づゝ苗代田と本田を巡視すれば足れり、朝に登校の途上にては、遲刻の恐あるを以て採集すべからざる事。
六、卵塊は小紙片或ひは袋に包み、其表面には學年氏名及び卵塊の數を記し、毎朝主任受持教員或ひは一定の場所に差出すべき事。

斯くして採集したるに、その捕收の日計は實に左表の如くなり。尤とも後には組合村農會長の賛助を得たるを以て、最多數を獲たるものに對し、近日褒賞を授與する事に内決せり。すなはち今回は苗代採卵を第一期として獎勵の褒賞を授與し、七月よりは本田に於て採集せしめ、これには第二期の褒賞を與ふるの豫定なれば、目下なほ採集を繼續せしめ居れり。誰か云ふ小學兒童の採卵に其効なしと、請ふこれを將來の成績に鑑みよ。

月日	採集人員	卵塊數
五、二六	二	四
二七	三	六
二八	二	四
二九	○	○
三○	三	七
三一	○	○
六、一	｜	｜
二	○	○
三	○	○
四	○	○

月日	採集人員	卵塊數
六、五	○	○
六	九	二八
七	一七	八一
八	｜	｜
九	七一	一、○五七
一○	七九	一、七九三
一一	七○	二、四八七
一二	五七	二、四一○
一三	九一	五、九二七
一四	八四	八、三四三

月日	採集人員	卵塊數
六、一五	｜	｜
一六	七○	八、○九七
一七	七二	一○、五二三
一八	五六	九、四八四
一九	三六	四、九六七
二○	三六	九、一一二
二一	二三	三、五九七
二二	｜	｜
二三	一九	二、○五五
二四	一○	一、四一六

月日	採集人員	卵塊數
六、二五	五	四○二
二六	四	二八七
二七	五	二三三
二八	五	五三四
二九	｜	｜
三○	一七	七九四
計		七三、六四八
採集總員		一六八
平均一人ニ付採集數		四三八ョ

（備考） 五月廿一日より六月五日まで一人も採集せざりしは不案内の爲なりしと、但日曜日分は其翌日持參せり。又六月下旬に至りて採集數の減したるは、父兄等の本田に於て採集するを禁じたるによりてなり。

◎除蟲菊の媒介者は何れの蟲種ぞ

和歌山中學校 岩本定右衛門

春夏の候百花の爛熳たるを待ちて、胡蝶は何時しか尋ね來たりてこれに狂戯するもの丶如し、然れどもこは決して徒爾にはあらで、自己の爲めには食餌を取り、花の爲には花粉交媒の勞を取るなりけり。然るに花中獨り除蟲菊てふ白花のみは如何に咲亂るれども、曾て胡蝶の訪來るを見ず、余は不圖疑惑の念を生じて、その風媒、蟲媒、何れに屬するかを考へり、良熟思して終に其風媒花にあらざる證を思ひ出せり。即はち（一）開花期久しきを以て、其間に昆蟲は訪來ることを得べく（二）花瓣の美麗なるは蟲類を誘ふに足るべく（三）花粉に粘着性のあるより察すれば、蓋し蟲媒花たるを疑はず。但其除蟲の名と現に之が花粉葉莖とを以て除蟲の料となすを想はゞ、交媒の主人たる昆蟲は、そも〳〵其毒に堪ふべき強性を有するにや、將た先天に之を好むの致す所に依るにや、と余はまさ此疑惑を避くること能はず、遂に此を師に問へり、師は曰く、能く實地に撿察して其結果を雜誌昆蟲世界に投じ、以て誨へを世の有識者に乞ふべし、是れ植物學上又昆蟲學上最とも趣味ある問題なり。と、乃はち家に歸りて之れを實驗に徵したるに、（一）蝶は一も飛來らず（二）蠅の花中に出入するものあるも、又花粉に附着して死せるもあり（三）キリギリス の花上にありて頻りに花粉を舐むものありき。これ實に、六月二日に觀察の結果なりしが、媒介者として最とも正確なるは唯一の蠅あるのみ。然れども中に死せるもののあるを見れば、或ひは或時間のみ媒介して遂に刺戟に堪へ得ざるの極茲に到りしやも未だ測られず、又キリギリスは能く其毒に堪ふと雖ども、只靜止するのみにて、蠅の如く出入するの狀なければ、是亦斷定を下し難しと信じ、翌々四日にも重ねて觀察を加ひしに、此回は（一）蝶は猶ほ來らず（二）蠅は前日の如し（三）キリギリスも前日の如し（四）アブは蠅に同じ（五）コガ子は花上に在りて花粉を舐むるも、稍其身躰の活潑を失へりき則はち是日は稍異なれる結果を得て、アブ乃花粉を齎らして花中に出入するを見たれば、他蟲に比して少しく精確の媒介者たるを知れり。而して其結果媒介者は蝶蛾の類にはあらで、アブ之を行ふならん蠅は或程度まで之を行ふも、得堪へで死滅するにあらずやとは、余が現に抱く所の臆想なり。今後なほ數回の實驗を累ねて之を確むべしと雖も、疑團の氷釋せざるもののあるを以て、記して識者の判定に仰ぐ。

◎膜翅類保護の奬勵を望む

第五回岐阜縣害蟲驅除講習會修業生 岐阜縣 長瀬白

近時山林に原野に將た耕地に、害蟲の繁殖跋扈するもの年々多きを加ふるは、各報告によりて明らけし然るに事理に暗き農家は、秋穫の少なきを見るも、言を天候に歸して其原因を究めず、害蟲驅除の如きは、徒勞無効の業として之を顧みざる者多きが如し、其心情寧ろ憫れむべき哉。斯かる事由あるを以て予は當路に向て一の希望を述べんと欲す、即ち農家に諭して昆蟲界に於ける自然陶汰を行はしめんこと是れなり、換言すれば、告示若くは諭令を發して、膜翅類の如き益蟲の保護をなさしむるに在り。夫れ膜翅類のクマバチ、ヘボバチ、アカバチ、オホクマバチ等は、常に他の植物を害する螟蛉其他を捕捉して仔蟲を養育するものなるに、其幼蟲の美味に且つ滋養分にも乏しからざるより、本縣下の或地方にては、七八月より十一二月の間は、絶えず其巣を探りて幼蟲を捕去るのみならず、成蟲をも麥稈、火藥等にて麻酔せしめ、甚しきは鳥黐に貼捕し或ひはまた炬火に焚殺して、平日の功勞に酬ゆるも之あり、是に至りて予は農家子弟の無頓着なるに驚かざるを得ず。然れども是れ多くは罪惡たるを知らずして犯す罪惡のみ、故に之が上たる者又は要路に當る者は、宜しく之を導き之を諭して、益蟲を悲慘の極刑より救出し、併せて害蟲驅除の實を擧げ、亟かに國利民福を保護せられんことを望む。

◎鳥取縣八頭郡の害蟲報告

第三回全國害蟲驅除講習修業生 鳥取縣 蓮佛萬吉

我が八頭郡には、五月二十二日頃より螟蛾發生し、漸次温氣に連れて暴發し、六月三日頃には苗床一坪に對し蛾三十七八頭平均に産卵せしにより、郡衙に於ては、之が豫防驅除に鋭意熱心し（昨年數千圓を支出して大に螟卵蛾の買收を行ふて、挿秧後の被害を免かれたるとは、一般當業者の知悉する所なるが故なり）本年は疾くより郡農會に驅防督勵委員五名を置き、苗田に發生の害蟲を驅除監督せしめ、又絶えず郡内を巡行せしめたり。而して各高等尋常小學校長に對しては、放課后の害蟲捕獲を訓示し、亦一

面監督員報告の狀況に由りては、郡吏を要處に派して說諭を加ふる等日夜忙劇を極めり。特に本年は村農會事業として、害蟲の購入に着手し、日々多數の蛾及ひ卵塊の捕殺に勉め、郡內擧つて孜々たるの狀あり。其買上代價は十蛾二厘五毛、十卵塊五厘の割にて、六月一日より十日までに既に三十八萬九千十二蛾、九十七萬四千三百二十卵塊（蛾の少なさは誘蛾燈にて捕獲し石油の浸漬せるものを除きしに依る）の多きを算せり、今後一週の間には略ぼ挿秧を終ふるならん。小生また之か監督の衝に當れる爲め、尤とも繁忙を極めり。因みに云ふ、郡內各處に於て農事幻燈會ある毎に、小生は左記の主意を以て、螟蟲驅除の必要を說話せり。（六月十一日附）

○螟卵千塊　（但し一塊に付卵顆百）是は第一期發生のものにて買收金額五拾錢、十塊に付五厘の割合。

內二百塊は寄生蜂の爲め斃るゝもの（二割）同しく二百塊は空卵又は天候の爲に孵化せざるもの（二割）殘存卵塊六百個（一塊百顆）此螟數六萬頭。

蝕入莖數は六萬莖（但し一莖一蟲の割合）にて此稻株は一萬株（但し一株六本）此換算反別額五畝十六步損耗高（蟲の爲め損失）一石九升六合（但し一反步に付二石の割）時價拾圓九拾六錢（但一石を拾圓と假算す）。

買收代金五拾錢を差引殘金拾圓五拾六錢　是は害蟲驅除に由て得たる利益。

然れとも螟蟲は、少くとも稻の一生期間に二回發生すべし、即ち第一期の螟蟲は移植田に於て草稻を蝕害する前揭の如し、而して此螟蟲は七八月の交、蛹となり軈て蛾に化し、八月下旬頃よりは產卵を始め中稻抽穗前より孵化して、稻莖に蝕入す。是は恰かも養蠶家か五齡まで健全に飼育し、今や上簇せんとするに方り蠁蛆の爲めに僵されて繭を作らざるものと等しく、草稻は地中の養分を十分吸收して見事に成長し、今や特に登實せんとする最とも必要時期に方り、螟蟲は盛んに蝕害するを以て、天候の適順を得、又風水旱の三害を免かれたるものと雖とも、此蟲の爲めに凶歉を見ること往々にして之あり。今第一期に殘存して、成育したるもの六萬頭の中より、雄を三分、雌を三分の二と假定すれば、雌の數は四萬頭にて其內の八千頭を氣候の爲めに斃るゝものと見るも、則はち殘存蛾數は三萬二千頭となり此產卵塊は三萬二千塊（一蛾一塊）となるべし。然るに其內の六千四百塊を寄生蜂の爲めに害せらるゝもの（二割）とし他の六千四百塊を天候の爲めに孵化せさるもの（二割）とするも、尙ほ殘存卵塊は一萬九千二百塊の多數なれば、此卵塊より孵化したる螟蟲は百九十二萬頭（一塊に付百頭）を算し、蝕入莖數は九十六萬

(一莖に付二頭)の多さに至り、此株數六十四萬株(一株に付十五本)となる、之を面積ょ換算すれば、一萬六百六十六坪(一坪に付六十株)にて三町五反五畝十六歩の廣袤に達し、其收穫米の損耗高は七十一石一斗六合(一反歩ょ付二石)之が時價代金七百拾壹圓六錢(一石拾圓)となるの割合なり、畢竟第一期の千個を採收せざるが爲め、遂に此の被害を見るに至る、害蟲の驅除豈に等閑ょ附すへけんや。云々

◎大分縣の害蟲驅除豫防規程

大分縣　小野覺太郎

去月十七日ょ、吾が大久保大分縣知事は訓令農第二十一號を以て、本年度害蟲驅除豫防委員設置規程を定めらるゝと同時に、昨年六月訓令農第十一號は廢止せられたるが、其改正規程は左の如し。

第一條　稻害蟲驅除豫防方法の普及實行を期する爲め、害蟲驅除豫防委員を置く。○第二條　前條委員を統轄する爲め、左の委員總長、副長等を置く、縣委員總長(書記官)同副長二名(警部長、參事官)郡委員長一名(郡長)同副長若干名(警察署長、警察分署長)。○第三條　縣委員は技師、屬、技手、警部、雇員を以て之に充て、郡委員は其郡書記、雇員其警察署又は分署在勤の巡査部長巡査を以て之に充つ。○第四條　知事は縣委員を、郡長は郡委員を、巡査部長及巡査に係はるものは警察署長又は警察分署長之れを任命す。○第五條　委員總長は害蟲驅除一切の事務を總理し、委員長は郡內害蟲驅除豫防の事務を管理するものとす。縣委員副長は委員總長を補佐し、總長事故ある時は之を代理す。郡委員副長は委員長を補佐し、委員長事故あるときは之を代理す。○第六條　縣委員は委員總長の指揮を受け、害蟲驅除豫防の事務を處理し、總て郡の受持區を定め、常に其持區內を巡視督勵するものとす。○郡委員は委員長の指揮を受け、郡內害蟲驅除豫防の事務に從事して、町村受持を定め、常に其持區內を巡回し、害蟲の狀況に注意し、驅除豫防方法實施の精粗を視察し、町村以下を督勵指導するものとす。

◎京都府の螟蟲驅防法

京都府天田郡　菅沼岩藏

客年十一月二十日、吾が京都府內務部長より、各郡市長へ通牒せし害蟲豫防驅除法の中、その螟蟲ょ關するものは左記の如し。尤とも浮塵子に對しては、天田郡長山縣氏の名を以て、去月十四日に、郡內一般へ告示を發したれば、郡農會は之を一葉刷として、普ねく各町村ょ配布せしが、其箇條は凡て八ケ條なりき。

一、二化生螟蟲にありては、幼蟲の多數は莖中に潛伏するを以て、甚しき被害の藁は、屋根葺及俵裝等、總て原形の儘用途に充てざるを要す。

二、螟蟲の害に罹りたる藁は、本田又は適宜の場所に於て燒却すべし。

三、螟蟲の幼蟲は、概れ刈株に潜伏し越冬するを以て、株を堀取り燒却し、又は堆積し、石灰を撒布し蒸殺すべし。

四、刈取後は冬期稻株を株切器又は鍬にて切り、耕鋤して寒氣に曝し、凍死せしむべし。

五、肥料として使用するには、厩舍の蓐藁に用ひ、后堆肥として施すべし。

六、苗代田及本田近傍の畦畔は、冬期の間に雜艸を燒却するか、或は潜伏の恐ある畦畔は、是を削り凍死せしむべし。

◎螟蟲採卵實驗報告

第八回全國害蟲驅除講習修業生　三重縣　西岡嘉十郎

我が地方に於ける本年發生の螟蟲に就ては、本誌第五十八號に、其大略を報じ置きしが、其後予は面積一畝十歩を有する自家の苗代田に於て、去る五月廿七日より六月廿二日迄の間に、都合十八回の單獨採卵を行へり、すなはち左表の如し。

採取月日	塊數	備考
五月二十七日	二	溫半曇天なりき
同月三十日	五三	昨夜暑熱甚しかりき螟蛾も亦多し
六月一日	五七	昨夜快晴寒かりし本日后二時より雨
同月三日	七八	昨夜暑かりし螟蛾五十餘頭を捕ふ
同月四日	一、三二	昨夜大に曇り隨て暑熱甚しかりき
同月六日	三、五一	本日は小學生徒二名に採卵を命ぜり
同月七日	三、一六	二三日前より氣候俄かに冷氣を增す
同月十日	一、二五	冷氣の爲め産卵數を減じたり
同月十一日	六三	昨夜俄かに暑氣を增せり
六月十二日	八	何故か産卵數俄かに減じたり
同月十三日	七	昨夜曇り暖氣なりしに卵塊少し
同月十四日	一八	昨夜暑熱甚しかりき
同月十五日	二七	昨夜來降雨あり降雨中採卵す
同月十六日	一四	農務繁忙なりし爲過半採取せしのみ
同月十八日	三四	同十五分時間程採取せしのみ
同月十九日	二六	昨夜降雨甚だしかりき
同月廿一日	一四	螟蟲蛾の發生漸々減ぜり
同月廿二日	一二	小學生徒三名に採取を命す

此日數十八日、此採取卵數千三百三十七塊

（附記）　六月廿三日より既に挿秧し始めたるを以て、一時採卵を中止せり。

次に當阿山郡にては、例年の如く螟蟲卵の買收を爲し居れるが、去る六月十三日迄に、郡衙に受付けたる箇數は、合計百〇一萬三百五十三塊なりとぞ、内一村に於て最とも多きは河内村の三十八萬塊、府中村の十四萬個、島ヶ原村の十二萬個等にして、其他の町村は大抵五六萬塊の間にあり。（六月二十三日附）

◎岐阜縣武儀郡害蟲報告

岐阜縣武儀郡　古田恒彦

當地に於ては本月十九日より、上有知町及び中有知村の苗代田の害蟲驅除に從事せしに、本年は螟蟲非常に發生し、蝕害劇甚なるも、地方人民は害蟲の恐るべき事を知らず、儀式的の驅除をなすのみなれば止むことを得ず警察權を借りて、日々綿密に嚴重に苗代田螟蟲蛾及卵を捕殺すべきことを示し、其植付を二三日間中止せしめて、撿査未濟のものには小札を立て、强て驅除を行はざる者をば、警察署より出頭せしめ、百方說諭を加ふることとしたるに稍効果を奏したり、取敢へず目下の現況を報告す。（六月廿五日附）

◎昆蟲に關する葉書通信（第二十四報）

（一一一）襲套の害蟲豫防秘法（千葉縣君津郡、石崎清五郎）　從來當地方に行はるゝ害蟲豫防法は、所謂迷信の方法にて、毎年陰曆六月一日を以て、鷹鳥の半身を畫きたる小符札の封じたるものを、細き青竹に結付け、これを田畑の間に立つるなり。抑もこの符札は、鹿納山神納寺にて販賣する一種の呪符にて、近頃は之を眞面目に信仰する者を減じたりしに、本年は驅除豫防の奬勵盛んなるより、又々尊信の頑迷者數を增加せしこそ悲しけれ。外にまた蟲送をなすの舊例もあれど、茲には言はざるべし。

（一一二）螢狩の童謠（鳥取縣日野郡、舩田繁治）　吾が地方にて、兒女の螢狩する夕、聲高々と謠ふを聽けば、必らず左の如き謠ならざるは莫し、未だ土況を知らぬ人の爲めに、方言をもて寫出さんに。

ホータル、ホータル、來へ來へ。あッちのシイチ（汁の方言にて此には露の義）が、にーがいぞ。こッちのシイチが、あーまいぞ。

（一一三）六月中の農作害蟲（岐阜縣揖斐郡、所喜久）　去月中、本郡豐木村地方に發生の害蟲は、稜黑橫這、綠色橫這、螟蛾、螟蛉、稻蝨等の種類にて、之を平年に比すれば、左まで多からざりしも、警戒のため六月九日よりは、各區に苗代田害蟲驅除委員を置き、其受持區を二三日目毎に驅除し、本田移植前には、少なくも四五回施行せしを以て、目今幸ひに蕃殖加害の模樣あるを見ず。（七月二日附）

（一一四）志摩國の螢うた（三重縣志摩郡、大矢圓三郎）　當地にて先頃螢火の出盛りの頃、それとも無く、兒女の謠ふ螢狩の歌を聞きしに、他國のものとは稍異なる節あれば、葉書に托して之を報ず。

ホータル來へ、ヨ子ンヂヨサ（米牛の方言）ヨ子ンの蟲吳れる。大皷が鳴ッたら、買ふて吳りヨ。笛が鳴ッたら買ふて吳りヨ。山田のささ水買ふて飲まそ。

（一一五）島根縣の蟲報（島根縣大原郡、高木久太郎）　本郡に於ては先頃小學兒童をして螟蛾螟卵を捕集せしめたるに、結果頗ぶる良好にて、多きは一校にて十萬餘、少なきも一万餘を集收せり。又第八回講習を修業せる栂啓之助氏は、多く郡内の蟲種を採集して其調査に着手し、且標本の製作にも熱心にて集會ある毎に其標本を携帶しては、之を一般會衆に示し、時機を見ては害蟲驅除、益蟲保護談を試ろみ特に小學校に對つては巡廻講話をなせるも多し。

（一一六）昆蟲學會の組織と捕蟲（岐阜縣山縣郡、篠田五郎）　本郡保戸島村に於ては、本月四日村内選抜の青年のみを以て昆蟲學會を組織し、第一着として昆蟲の採集をなせり。去五月以降本日までの間に捕集の蟲數は、螟卵六万千三百八塊と桑天牛三百九十九頭となり、外に農作有害動物としては、鼹鼠十五頭を獲たり。（七月五日附）

（一一七）小學兒童の手腕（兵庫縣有馬郡、堂本俊治郎）　余が住處小柿村に於ては、試ろみに小學兒童をして螟卵を摘採せしめたるに、一人能く四百五十塊を獲たる者も之あり、固より未だ斷言は致し難きも、到處意外の多數にて、兒童は孰れも喜んで之に從事中なり。此狀を見たる校長山本又治郎氏は、その効果の佳良なるを嘉みし、頻りに之は奬勵するのみならず、昆蟲學思想の必要を說き、且その普及を圖り居れば、遠からずして卵塊採取に對する迷謬を破る事と信せらる。

（一一八）螢狩の歌の種々（埼玉縣北埼玉郡、櫻井倚畊）　當埼玉郡近傍に於ける螢狩の童謠四種をものして、讀者の一樂に供せん。

一、ホーホーホータロコ。夜は提灯高のぼりー。ひーろは、草葉でツイ（露）を吸へ。（是は尤も廣く知られたる謠の一にて、黄昏に數十人異口同音に謠ひつゝ叢間河畔にて螢火を追ふなり。）

二、ホータロこ、ゐろこッこ。ゐろこに負けたら、こッちへこ、こッちへこ。（是また前者に同じきも、夜間飛螢の盛んなる時などに捕器を手にして謠ふものと知るべし。）

三、ホータロこゝ、ホータロこー、そッちの川深いぞ、こッちの川ア淺いぞ。あさアい方へさーンで來へ。（是また前二首と共に多く謠はるゝなり。）

四、ホタル、ホタル、螢の嫁ごりは、御提灯はいらぬから、御尻の光りで飛ンで來ー。（是は螢の高く飛揚せし時、又は遠くにある時に、之を招ぐの意にて謠ふなり。）

（一二九）昆蟲標本の陳列（岐阜縣養老郡、原田晟）　本年冬、本縣安八郡大垣町に於て、東海農區實業大會開會を機とし、吾が養老郡昆蟲學會員の採集製作せる昆蟲標本を、養老公園に陳列の件は、先頃學會役員會に於て愈々確定し、今は右に關する設備及び其方法を攻究中なり。

（一三〇）講習修業生の同窓會（三重縣員辨郡、横田鍬太郎）　名和昆蟲研究所の開設に係る全國害蟲驅除講習會へ入會せし、本郡の修業生集合商量の末、今回愈々同窓會を設け、規約十六條を編み且その役員等を選定せり。其目的は云ふ迄も無く、害蟲驅除、益蟲保護に努め、又郡内の福利を增進せんが爲めに斯學思想の普及發達を圖るにあるなり。各地の同窓會にても、互ひに氣脈を通せられんことを望む。

●昆蟲月令（第七月）

此月に配すべき昆蟲記事は、概むね下に列擧するが如し。

○氣候　舊暦六月の節にて、晝間は夜間に比して、月の初めには五時間長きも、月末には漸やく減じて四時となる、即はち此月よりは、日一日と短日になり、夜は毎夜長きを加ふ●長雨期全たく經過するも、暑熱は次第に加はり、三日の半夏生、八日よりの小暑、二十一日よりの土用を經れば、廿四日よりは大暑となる●内地の平均溫度は、攝氏二十度より廿六度の間なるが、最高の日に至りては、廿五度乃至三十度を示すこと無きにあらず●溫度の增進に伴ひて濕度また加はり、概むね八十度以上に昇り、水量多く前月に讓らず●寒地にては、此月の下旬までは、平家螢の飛行するものあり。

○蟲類　春蠶の晩きものよりは、此月に入るも尙ほ蠶蛆を生ずるを以て、之を拾收して魚禽に與ふべし●諸害蟲の本田に蕃殖するは恰かも移植後數日の間に當れば、苗代田に於けるよりは、却つて注意を缺かざるを要す●移植後なほ點火誘蛾を行ふ地方あるも、損失多くして効少なく、剩つさへ他の耕地より害蟲を招致するの危險あれば、之をなすには考慮を要すべし●移植五七日後より、二三番除草期までの間に、螟卵採取に勉めざれば、後日の悔を遺すべし●本田にヨコバヒ類多生せば、早く驅除法を行ふて、これをして羽化せしめざれ、其方法は掬殺を以て安全とすれども、若し注油驅除を行はんとせば、其油量に嚴重の制裁を附し、漫りに多量を望

む可からず、否らざれば蟲と稻とを併死せしむるの愚を學ぶことあらん●ヨコバヒ既に羽化せば、先づ始めは咽喉附捕蟲網を用ゐて一齊驅除を行なひ、其後多數協同して注油法を施行するも可なり、用量は一反歩五六合を標準とし稻葉の蕃茂甚はだしからず、且用水の充滿せる初生期に行ふべし●豆科、瓜科、茄科の植物には甲蟲類の被害多かるべく、果園には半翅甲翅より鱗翅の害蟲多かるべし、山林害蟲また發育して、松栗楢櫟の類を喰害し、次で結繭するに至らん。其他桑茶の如き葉樹より、桐、藍、煙草等の各用植物にも、無數の害蟲を増すを目擊せん、何れも些少の勞を厭はずして、努めて早く驅防すべし●蝶類は第二期の產卵を行なひ、蛾類また自族の蕃殖を圖るべく、又秋蟲も多少發生すべければ、斯學研究者は成るべく夏季の發生種と、初秋の蟲種とに注目すべし●衣服書籍の濕氣を去るに努め、又標本類の寄蟲黴菌を驅防するを怠たらざる可し●蚊蠅蚤蝨の如き衞生上の害蟲益々多かる可ければ、溝渠の疏通、惡水の排除、床下の洒掃を行なひ、又時々藥劑油類を用ゐて卵蛹仔蟲を併せ殺去すべし●其他は前月記載の事項に同じ。

○舊說　禮記の月令の小暑の三候の中には、蟋蟀居壁といひ、大暑の候には、腐草爲螢とあり。又昔時は、蚊を去るに專はら藥物香木等を薰燒し、蠅を去るに一種の咒術を行へり。當月より果實を多食すれば、瘧痢に罹るともいひ、舊曆七月七日に素麵を食へば、瘧を病まずとも云ひき。

○雜事　快晴極熱の日を選びて、午前より蟲乾を行ふべし、午後には驟雨來ることあれば危險なり。此月よりは農作の害蟲に最とも深く注意すべきは勿論なるも、決して室內害蟲の恐るべき事を忘る可からず。又害蟲の多生を機會に奸商出沒して、無價無效の藥物を高價に販賣すること多ければ、豫じめ用心すべし。各級農會にては、此等の詐僞漢を徘徊せしめざるやう、適宜の方法を講ずるも時節柄農家保護の一策なるべし。蜂類蜻蛉類を始め、その他の有益蟲を漫りに捕殺さざるやう、幼者又は僕婢にも諭し置くべし。

◉昆蟲叢書第壹編の發行　第一回全國昆蟲展覽會の出品目錄は、既記の通り去月末に印刷その工を竣へたれば、本月八日附を以て發行の上、それ〳〵豫約者に送本を了せり。同書は二百餘頁の浩澣にして、中には約九百種の蟲品と七十餘の圖版とを收め、三種の標本に就き各別に種屬を表示し、名稱に訂正を加ひ、且一々出品者名と其產地とを明記したれば、方今最上の缺點と稱せらるゝ地理上の分布調査には、特に參考すべき節多かるん歟。外に附錄としては、展覽會當初よりの來歷を敍述し、これに關する一切の事件すなはち審查內規、出品者人名、關係役員、參考品種目等の如き未だ公けにせざりし事實をも網羅して、一讀の下に斯會の眞相を知らしむるに勉め、なほ口繪としては會場內外の寫眞銅版圖四葉を添附せり、其記述目次の如きは、本誌廣告欄にあるを以て、玆にれたゞ斯書の發行を紹介し置かんのみ。なほ第二編の『昆蟲標本製作全書』は、來八月中旬には讀者の瀏覽に供し得べし。

◉蟲合せ答案の披露（四）

前々號に載せたるものに次ぎ、披露すべきは左の答案なり。

（優等）◎蟲合せ答案（第七）　靜岡縣磐田郡岩田村　神村直三郎氏　選

キンガメムシ／ギンヤンマ　カ子タヽキ／タイコウチ　シジミテフ／カヒガラ蟲　イボタムシ／コクゾウムシ　ベニカミキリ／オハグロトンボ　ベッコウトンボ／クロタイマイ　トラフトンボ／ヘウモンテフ　ジヤコウアゲハ／ヘコキムシ

スリバチムシ／トックリバチ　シギゾウムシ／ウヅラガメ　カマキリ／クハガタムシ　テングヨコバイ／オカメコホロギ　スミナガシ／ベニシヾミ　トビイロガメ／カラスアゲハ　馬オヒムシ／牛ムシ　マルガメ／ヒラタアブ

ドロカツギ／ゴミカツギ　イナヅマヨコバイ／カミナリハムシ　ゴマダラテフ／ケシキスヒ　アブラムシ／ロフムシ　ヂンガサムシ／エボシヨコバイ　ヒチドシテフ／カブトムシ　ヒゲコメツキ／ヒゲコガ子　カレハテフ／キノカハ蝶

ヤマトシヾミ／カラムシテフ　腐草爲螢／螻蛄成蓬　ピストルミノ蟲／テツパウムシ　クサムグリ／ハナムグリ　赤スヂガメ／青スヂアゲハ　ウミグモ／カハグモ　モンシロテフ／モンクロバチ　トノサマバッタ／ダイメウセヽリ

小一文字テフ／大ミスヂテフ　ミチチシヘ／ニシドツチ　アリヂゴク／エンマムシ　トゲガメ／トゲ尺トリ　ハサミムシ／ハリガ子ムシ　テンマリケムシ／テフチンムシ　マツケムシ／タケケムシ　コガ子ムシ／アカヾ子チサムシ

ミツバチ／シホカラトンボ　ハリガメムシ／ハリバイ　ハゴロモ／カミシモ　ベニスヾメ／臙脂蟲　オビヨコバイ／ヅキンヨコバイ　カブラバチ／イモムシ　サラサモン蛾／ビロウドツリアブ　イトヒキハマキ／クダマキダマシ

ヒゲナガテフ／ヒゲナガバチ　ツバメシヾミ／スヾメテフ　一文字セヽリ／二スヂテフ　三スヂテフ／四星カミキリ　五倍子／六点横這　七星瓢蟲／八ノ字根キリ　ヤマ女郎／京女郎　アチメアブ／アカヒゲガメ

サチホコムシ／カッチムシ　ヘビトンボ／ヂヤノメテフ　ガイコツテフ／セウレウバッタ　タマムシ／イサゴムシ　鹿ノ子テフ／熊ゼミ　大ノミ／猿ハムシ　土スガリ／砂ムグリ　家バイ／庭スヾメ　アトマルゴミ蟲／ヒゲマル横バイ

二十八星／十七年蟬　五節類／六脚蟲　菊虎／穀象　イシアブ／カ子ブン〳〵　カマキリ／サヽキリ　シロホシ瓢蟲／アカホシキスヒ　ミヽヅク／フクラスズメ　アシナガバチ／アシナガパイ　アチバ尺トリ／アチバハ子カクシ

カスリヒカゲ／シマサシガメ　星カミキリ／ミカヅキ尺トリ　天蛾／地蠶　トウスミトンボ／アブラセミ　クロスヂカゲロウ／シロスヂコガ子　イトヽンボ／ナハメカゲロウ　茶柱蟲／菓子蟲　ユウガホベットウ／ヘウタンゴミムシ

日カゲテフ／日光白テフ　エンマコホロギ／オニヤンマ　カメノコテントウムシ／シヤウ〳〵トンボ　カサハラハムシ／ミノムシ　クダマキ／ハタオリ　コウカバチ／センチコガ子　天牛／薊馬　モノサシトンボ／尺トリムシ

トンボテフ／テフトンボ　タイコムシ／ツヾミミノムシ　一スヂ尺トリ／二スヂ尺トリ　ツチハトンボ／グンバイムシ　象鼻蟲／トラカミキリ　タイワンバッタ／エゾ白テフ　トモヱテフ／ヒシバッタ　ヒグラシ／ユフマダラ

ウリバイ／カボチヤガイヅ　シラガタロウ／マゴタロウムシ　コシボソトンボ／ハラビロカマキリ　駱駝蟲／熊鈴蟲　クソバイ／マグソムシ　馬蠅／牛虻　サヽゲガメ／アヅキガメ　獨脚蜂／獨角仙　赤鞭使者／葛上亭長

銀バチ／銅ガ子ブン〳〵　アミガサハゴロモ／コムラサキ　ゴミムシ／スクモムシ　笹魚／松團子　ブランコゲムシ／テマリバイ　トラフハナムグリ／クマアリ　メクラアブ／オシゼミ　ハルセミ／ナツアカ子

歩行蟲 / トビムシ　風船ムシ / クルマバツタ　マツムシ / スギカミキリ　根ムシ / 葉ムシ　桃スヾメ / 梨バチ　泡フキムシ / 露ムシ　長崎アゲハ / 岐阜テフ　糖蛾 / シホヤアブ　寄生蜂 / 寄生蠅

イブキキリ〴〵ス / チンタケエテフ　アメバチ / アメンボ　のゝ字ムシ / サカサ八文字　粉蝶 / コナジラミ　コオヒムシ / オンブバツタ　ビロウドムシ / 毛氈蛾　黑雲テフ / 雲紋スヾメ　米俵 / 麥俵

子コガホヤナギムシ / サルメンヨコバイ　ハ子カクシ / カホカクシテフ　エビガラスヾメ / サソリバイ　トリバテフ / クジヤクチフ　夜盜蟲 / 殺ヌスト　ツノ尺トリ / ツノトンボ　ヤマカマス / スカシタハラ　髓蟲 / 心蟲

アトビサリ / ヨコバイ　三井寺ハンメウ / ツク〴〵ボウシ　キクスヒダマシ / カマキリモドキ　ダンゴヨコバイ / ダンゴバチ　アゲハノテフ / シリアゲムシ　ツマグロイナゴ / ツマグロウンカ　縊蟲 / クビキリバツタ

ケイトウバチ / ナンキンムシ　エダ尺トリ / コノハテフ　ヒゲナガサヽキリ / チナガウジ

編者評云。この答案は都て百五十組あれば、其蟲名の多き點に於ては第一位に居る。去れど蟲名の多きだけ、拙劣の合せ方も亦多く到底玉石同架の誹りを免かれ得ず。今一二の例證を求むれど緋威蝶と兜蟲とは何の緣故かある、天幕毛蟲と提灯蟲とは何故好對なるか、其他龜甲瓢蟲と猩々蜻蛉の如き、大和蜆蝶と苧痲蝶の如き、鹿子蛾と熊蟬の如き、若くは蟻地獄と閻魔蟲の如きも、甚はだ的中せざる配合ならずや、就中、三井寺斑猫にツク〴〵ボウシを、髓蟲に心蟲を配したるを見るに及びては、誰しも抱腹に堪へぬなるべし而して其眞に蟲合の神髓を得たるものを擧ぐれば、紅天牛に齒黑蜻蛉、天蛾に地蠶、腰細蜻蛉に腹濶蟷螂、馬蠅に牛虻、カ子タタキに太皷打、笹魚に楢團子、鞦韆毛蟲に手毬蠅、風船蟲に車輪紋蜈蚣の類なりと思はるゝが、扨此等の長處に重きを置くの意なりせば寧ろ他の野卑、附會のものを盡ごとく芟除するの優れるに及かざる可し。選者は知るや否や、この答案中には少なくも二三の病患あることを、則はち一は對聯の性質を失へることと（ヒゲ何蟲にヒゲ何蟲、アシナガ何蟲にアシナガ何蟲、ベニ何蟲にベニ何蟲、アメ何蟲にアメ何蟲の如し。）二は汚穢不淨の名稱、若くは醜賊淫婦を名とせる蟲類を憚からざりしこと（ヘコキ蟲、クソバイ、マグソムシ、センチコガ子、穀盜人、京女郎等の如し。）三は他人には得て了解せぬ蟲名を、數多蒐收せしこと（二十八星、ハゴロモ、カミシモ、ミミヅク、ハタオリ等の如し、特に獨脚蜂の如きは、恐らくは選者自身も、其如何なるものなるやを說明し難き奇蟲なるべし）、是れなり。若しこの病患無く、又初めより百對を標準として、其優良のものゝみを擇びたらんには、極めて佳作を得たる可きに、誠に口惜しき事してけり。

●第十二回全國害蟲驅除講習生氏名　前號の本誌上に、其概況をもるしたる、第十二回全國害蟲驅除講習會ニ於ける修業生の氏名出身地等は、左ニ表出するが如し。

組別	府縣	郡市	町村	族籍	役名	氏名	生年月	履歴摘要
第一組	三重縣	員辨郡	笠田村	平民	組長	和波久司	明治八年七月	東京專門學校文學部卒業
	新潟縣	岩船郡	神納村	同		佐藤榮	明治十三年五月	高等小學卒業、宮城縣農學校修業
	岡山縣	赤磐郡	西高月村	同		小坂唯太郎	明治十四年十二月	高等小學卒業、赤磐郡農事研究會幹事
	香川縣	木田郡	西植田村	同		鎌野熊二	文久二年十二月	現職西植田村助役
第二組	栃木縣	河内郡	姿川村	平民	副級長	渡邊新三郎	元治元年二月	現職村長、郡農會副長、郡會議員
	京都府	北桑田郡	黑田村	同	組長	井本義三	明治八年二月	京都府農學校別科講習、現職役場書記
	三重縣	員辨郡	治田村	同		葛山彦太郎	明治九年三月	高等小學卒業、村役場書記
	愛媛縣	伊豫郡	佐禮谷村	同		龜本園藏	明治十三年二月	高等小學卒業、村役場書記
第三組	愛媛縣	伊豫郡	南伊豫村	平民	組長	山田泰	万延元年四月	現職南伊豫村助役
	三重縣	員辨郡	北石加村	同		伊藤龜太郎	明治元年五月	中學校四ヶ年在學
	廣島縣	芦品郡	服部村	同		井口廣助	明治三年十月	普通農事科第二期修業、現職郡農會議員
	德島縣	勝浦郡	多家良村	同		本生良三	明治十年二月	高等小學卒業、農事講習修業
第四組	愛媛縣	伊豫郡	南伊豫村	平民		武智義一	明治六年十月	農事講習修業、村役場書記
	香川縣	木田郡	川添村	同		前田茂太郎	明治八年一月	農事講習修業、現職學務委員
	三重縣	安濃郡	新町	士族		山崎常樹	明治十五年二月	中學卒業、現任小學教員
	三重縣	員辨郡	治田村	同		新貝二市郎	慶應三年八月	村役場書記、收入役、現職治田村助役
第五組	山口縣	阿武郡	德佐村	士族	組長	中尾猪太郎	嘉永五年十二月	現職德佐村助役
	三重縣	員辨郡	南石加村	平民		諸岡梅治郎	明治三年十二月	農事講習修業
	德島縣	德島市	下助任	同		山下新五郎	明治九年十二月	中學二年級修業、農事講習修業
	埼玉縣	北葛飾郡	田宮村	同		土生津勘吉	明治十一年二月	東京高等農學校卒業、群馬縣農事試驗場技手
第六組	秋田縣	河邊郡	和田村	平民	組長	佐々木茂助	明治元年十二月	害蟲驅除豫防委員、農事講習修業、現職村農會長
	兵庫縣	氷上郡	竹田村	同		見谷松藏	明治二年四月	現職助役兼村農會長
	三重縣	名賀郡	上津村	同		岩脇淺次郎	明治十二年五月	養蠶實業習得、三重縣農事講習科修業
	鳥取縣	西伯郡	成實村	同		生田英雄	明治十四年十二月	高等小學卒業
第七組	三重縣	員辨郡	中里村	平民	級長	三輪好孝	文之三年四月	村長、郡會議員、現職郡參事會員
	德島縣	名東郡	加茂名村	同		山城常三郎	明治六年九月	高等小學卒業、德島縣農事講習修業
	鳥取縣	氣高郡	大郷村	同		西谷善八	明治十二年十二月	鳥取縣吏員、現任郡書記
	秋田縣	河邊郡	和田村	同	組長	伊藤泰藏	明治九年六月	高等小學卒業、野戰砲兵下士適任

組	府縣	郡	町村	族籍	役	氏名	生年月	經歷
第八組	香川縣	木田郡	十川村	平民		多田佐一郎	明治十三年十二月	養蠶傳習修業、農事講習修業、現職村役場書記
	秋田縣	河邊郡	種平村	同		佐藤多吉郎	明治十四年十二月	小學補習科卒業、農事講習修業
	愛媛縣	伊豫郡	砥部村	同		田邊福太郎	明治十五年四月	高等小學卒業、村役場事務員
	山口縣	美禰郡	大嶺村	士族	組長	安永源吾	安政二年十一月	現職高等小學校訓導
第九組	三重縣	員辨郡	七和村	平民	組長	水越熊次郎	慶應三年十一月	家蠶飼育法傳習、村役場書記、農事講習修業
	愛媛縣	伊豫郡	原町村	同		影浦次男	明治十一年十一月	高等小學校卒業、村役場收入役
	兵庫縣	氷上郡	國領村	同		芦田隆太郎	明治十二年十一月	小學補習科卒業
	鳥取縣	日野郡	米原村	同		木村壽祖次	明治十三年十二月	米子製絲合名會社見習技手
第十組	鳥取縣	東伯郡	上灘村	平民	組長	山桝專藏	安政二年三月	鳥取縣簡易農學校乙科卒業
	千葉縣	印旛郡	安食町	同		後藤新左久	明治十年七月	小學校敎員、農事講習修業
	愛媛縣	伊豫郡	南伊豫村	同		窪田類吉	明治十二年十二月	高等小學卒業、現職村役場書記
	三重縣	員辨郡	十社村	同		川瀨時次郎	明治十四年二月	高等小學卒業
第十一組	千葉縣	安房郡	出基村	平民		原貝造	明治十一年八月	高等小學卒業、村役場書記
	鳥取縣	氣高郡	中鄉村	同		森壽平	明治十七年六月	縣立農學校卒業
	京都府	南桑田郡	曾我部村	同		並河桂太郎	明治十五年四月	高等小學卒業
	兵庫縣	氷上郡	成松村	同	組長	松尾繁	明治三十年四月	小學中等科卒業、小學補助敎員
第十二組	三重縣	員辨郡	七和村	平民		近藤泰助	明治十六年十二月	私立赤心中學校卒業
	鳥取縣	八頭郡	佐貫村	同	組長	田中熊治	明治十二年一月	鳥取縣簡易農學校乙科卒業
	京都府	南桑田郡	千代川村	同		八木助次郎	明治十四年九月	小學校授業生、現職衛生組長
	兵庫縣	氷上郡	石生村	同		井本哲二郎	明治十三年五月	高等小學校卒業
第十三組	鳥取縣	岩美郡	津井村	平民		山田豐藏	明治十六年十二月	鳥取縣農學校農事講習修業
	三重縣	名賀郡	錦生村	同		吉田亥之介	明治八年八月	農事講習修業、名賀郡昆蟲學講習會修業
	島根縣	能義郡	廣瀨町	士族	組長	龜井金次郎	明治十四年二月	現職郡農會書記
	京都府	南桑田郡	稗田野村	同		大石瀧之助	明治十五年七月	府立農學校卒業
第十四組	鳥取縣	日野郡	米原村	士族		龜田繁治	明治十七年六月	簡易農學校乙科修業
	香川縣	木田郡	井戸村	同	組長	寒川孫三郎	明治八年一月	小學中等五級卒業、農事講習修業
	青森縣	上北郡	三本木村	同		新渡戸稻雄	明治十六平六月	青森縣畜產學校卒業
	愛媛縣	伊豫郡	南伊豫村	同		武智守吉	明治十年十一月	小學校准教員
	愛媛縣	東宇和郡	渓筋村	同		山下福太郎	明治二十年十月	小學校第一級卒業

◉本號の口繪の說明　本號に口繪とせる第七版圖は、脈翅目長角蜻蛉ツノトンバウ科（Ascalaphus japonicus M. L.）及び擬蟷螂蜻蛉カマキリカゲロフ科（Mantispidae）に屬する蟲種の寫生にて、兩つながら有益蟲と稱せらる。而して前者は、本誌前號の口繪（第六版圖）とせる薄翅蜻蛉ウスバカゲロフ科と近似し、後者は草蜻蛉クサカゲロフ科のものに相類する點多し。此中（五）號は、今春岐阜中學校敎諭長野菊次郎氏の寄贈に係る珍種にて、なほ外に長角蜻蛉種の異品をも藏せり、其種は近ごろ沖繩縣國頭郡大宜味尋常小學校の親泊朝擢氏より贈られしものにて、黃翅長角種に彷彿たるも、實は新種に屬せり。生憎この原版調製後に落手したれば、讀者に紹介の機を失せりと雖ども、他日更に記載することあらん、讀者豫じめオキナハツノトンバウ（沖繩長角蜻蛉）の新稱を記臆し置かれよ。又圖中の（イ）は自然大の卵塊（ロ）は其放大形なるが、更に之を各種に分ちて畧述する時は左の如し。

（一）キバ子ツノトンバウ（黃翅長角蜻蛉）Ascalaphus japonicus M. L. 產地は揖斐郡。發生は多數。廣く分布す。

（二）ツノトンバウ（長角蜻蛉）A. subjacens Walk. 產地は岐阜。發生は多數。廣く分布す。

（三）オホツノトンバウ（大形長角蜻蛉）A. sp? 產地は伊吹山、靜岡縣。發生は稀少。

（四）コツノトンバウ（小形長角蜻蛉）A. sp? 產地は伊吹山。發生は稀少。

（五）オホカマキリカゲロフ（大形擬蟷螂蜻蛉）Mantispa sp? 產地は福岡縣。發生は稀少。

（六）ツマグロカマキリカゲロフ（褄黑擬蟷螂蜻蛉）M. sp? 產地は稻葉郡。發生は稀少。

（七）ヒメカマキリカゲロフ（姬種擬蟷螂蜻蛉）M. sp? 產地は岐阜、宮城縣。發生は稀少。

（八）カマキリカゲロフ（擬蟷螂蜻蛉）M. sp? 產地は伊吹山、飛驒。發生は稀少。

◉實驗瑣談　本月四日の事、一名の年少助手に命じて、モンキテフ（Colias hyale L.）のみを無意味に採集せしめたるに、其總數八十五頭の中、四十一頭の雄と、四十四頭の雌とを獲たりき。然るに不圖、雌には二形態あることを撿出せしかば軈て之を調査せしに、殆んど雄を凌がんばかりの黃色を帶ぶるもの十六頭、淡黃にして白色のもの二十八頭を算し、加之、雌雄飛舞の際には、白色の雌の、頻りに雄に追隨の狀ある事をも目擊しき。是豈に雌雄淘汰の結果として、雌に變化を來たしたるものにあらざる莫きか。◉近頃、助手名和梅吉の岐阜縣下巡回の折、加茂武儀の二郡にて採集せりとて、齎らし歸れる一種の象鼻蟲は、桐葉を常食とするものなるが、恐らくは未だ世に知られざる新種なる可し。◉此月の九日と覺ゆ、助手森惣太郎は、岐阜市の郊外にて採取せる螟卵を調査せしに、都て百九十塊の中、稻葉

の表面に產下せしもの百十八塊、裏面のもの七十二塊ありき、斯く變則的產卵の多きは、實驗上稀有の事實に屬せり、各地に於ける成績をも、汎く聞かまほし。(ナ、ヤ老生手記)

◉第十三回全國害蟲驅除講習會　目下會員募集中の同會は、愈々來八月一日より二週間、當名和昆蟲研究所内に開會の運びに立到りたるが、夏期休暇の折の事とて、遠地よりの申込も多く、又異種類の人物も多かるやう思はるれば、極めて目新らしき事實も發現すべく、場合によりては伊吹山に躋攀して、旅行採集の實地指導をなさんかとも云へり。なほ前回までに修業せしは、三府四十一縣の出身者六百十一名あるが、之を小別する時は、實に左表の如し。

府縣名＼開會數	第一回	第二回	第三回	第四回	第五回	第六回	第七回	第八回	第九回	第十回	第十一回	第十二回	計
東京府	—	—	—	—	—	一	—	—	—	—	—	—	一
京都府	七	八	一	三	一	二	—	一	三	三	一	四	三四
大阪府	—	—	一	—	—	一	—	一	一	—	三	—	七
神奈川縣	—	—	一	—	—	一	—	—	—	—	四	—	六
兵庫縣	二	一	二	一	二	二	一	三	三	六	—	四	二六
長崎縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
新潟縣	—	—	—	—	—	一	一	—	—	一	一	一	五
埼玉縣	—	—	—	—	—	—	—	一	—	—	三	一	五
群馬縣	—	一	二	—	—	—	—	—	—	—	一	—	四
千葉縣	—	—	—	—	二	—	三	一	二	二	五	二	一八
茨城縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一	—	一
栃木縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一	一	二
奈良縣	—	一	—	—	一	一	—	—	一	一	二	—	七
三重縣	三	七	八	一	一	一〇	三	一二	九	五	—	三	七九
愛知縣	八	三	—	三	五	一	—	四	三	二	三	—	五二
靜岡縣	二	三	三	—	六	一	四	五	一	—	四	—	二九
山梨縣	二	—	五	一	—	一	三	—	—	一	一	—	一四
滋賀縣	—	—	二	—	—	—	—	—	四	一	—	—	七
岐阜縣	五	一	七	二	三	二	—	一	二	—	二	—	二五
長野縣	二	三	—	一	二	二	二	二	—	—	—	—	一四
宮城縣	—	—	二	—	—	一	六	一	—	—	二	—	一三
福島縣	—	一	—	—	—	—	—	一	—	一	—	—	三
岩手縣	一	—	—	—	—	四	二	—	—	二	一	—	一〇
青森縣	—	—	一	—	—	—	—	—	—	—	—	一	二
山形縣	—	—	六	一	—	—	—	—	一	—	—	—	八
秋田縣	—	—	一	—	—	—	—	—	—	一	—	三	五
福井縣	一	五	—	—	五	三	—	一	二	一	四	—	二三
石川縣	—	—	—	—	二	—	一	—	三	一	—	—	七

府縣名＼開會數	第一回	第二回	第三回	第四回	第五回	第六回	第七回	第八回	第九回	第十回	第十一回	第十二回	計
富山縣	—	—	一	一	—	—	—	—	一	三	—	—	六
鳥取縣	—	—	一	—	一	三	五	八	三	一	一	八	三一
島根縣	一	一	—	—	一	一	—	二	一	—	一	一	九
岡山縣	—	—	一	—	—	一	—	四	一	一	—	一	九
廣島縣	—	一	—	—	—	—	一	一	—	—	—	一	四
山口縣	一	—	—	—	一	一	—	—	三	—	二	二	一〇
和歌山縣	一	一	—	七	一	三	—	九	—	一	一〇	—	三三
德島縣	—	—	二	—	四	一	—	一三	—	—	二	三	二四
香川縣	一	—	—	—	—	—	—	—	四	—	—	四	九
愛媛縣	一	—	三	一	—	一	二	一	三	一	四	八	二四
高知縣	—	—	—	—	—	二	—	七	四	—	—	—	一三
福岡縣	—	—	—	—	—	—	一	—	—	—	一	—	二
大分縣	—	一	—	—	—	四	一	二	三	一	—	—	一二
佐賀縣	—	—	三	—	—	—	二	一	—	—	一	—	七
熊本縣	一	—	—	—	—	—	五	—	—	三	—	—	九
宮崎縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一	一	—	二
鹿兒島縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
臺中縣	—	—	—	—	—	—	—	一	—	—	—	—	一
計	一府十五縣三十九名	一府十四縣三十九名	二府十七縣四十九名	一府十一縣三十五名	一府十五縣三十八名	三府廿二縣五十一名	十八縣五十三名	二府二十二縣九十二名	二府二十縣五十六名	一府二十一縣四十名	一府廿四縣六十二名	一府十六縣五十七名	三府四十一縣六百十一名
開閉月日	三十二年九月二十五日ヨリ十月八日迄	同年十一月二十五日ヨリ十二月八日迄	三十三年三月二十一日ヨリ四月三日迄	同年六月一日ヨリ同月十四日迄	同年七月二十六日ヨリ八月八日迄	同年十一月二十一日ヨリ十二月四日迄	三十四年三月一日ヨリ三月十四日迄	同年七月十五日ヨリ七月二十八日迄	同年八月十五日ヨリ八月二十八日迄	三十四年十一月六日ヨリ二十九日迄	三十五年三月一日ヨリ十四日マデ	三十五年五月十五日ヨリ二十八日マデ	

◉蠅ごりの種々　如何よ歐陽公が憎めばとて、如何に淸少納言が嫌へばとて、如何よ王恩が拔劍して嚇せばとて、細川頼之を苦しめし程の豪者なれば、容易に蠅群の去るべくもあらぞ。去れば我國には、古來種々の除蠅法ありて、劇藥を混じたる蠅取紙より、下よ圖したる幾多の器具あるも、結局好ましき驅除法とては無きもの丶如し。就中、經驗上最とも簡易にして確實なるは(ホ)よ示せる粘黐にての捕獲なる可し、讀者の比較試驗を望む。圖中の(イ)は厚紙又は薄板よて作れるもの、(ロ)は椶櫚製のもの、(ハ)は蚊帳切又は針線製のもの、(ニ)は硝子製の誘殺器なるが、此他なほ網目製のものもあり。尤とも室內害蟲の害毒は、毎戶注意すべき事なれば、遠からぞ『蚊蠅圖說』と云へるを臨時に刊行して、此二蟲の性質經過は勿論、其驅除せざる可からざる事柄より、瘧病との關係をも、說明することとせん。

◉蟾前の蚊雷　重野文學博士といへば、人も知る抹殺老先生の事であるが、近ごろ出來た名家訪問錄と云ふものを見ると、此名家先生大得意で以て、詩經の細腰蜂の事を講釋して、小雅の小宛篇の螟蛉とは桑蟲で、螺蠃は土蜂即はちツチバチの事だが、螟蛉が子を產むと土蜂は之を負ふて樹の株の中へ入れて我に似よ我よ似よと言ひ乍ら、七日の間ずッと其子を育てれば、自然土蜂の子に成ッて仕舞ふのだと云ふてある。流石の抹殺博士も、蟲の事ばかりは、毛詩の陳言腐語すらも、抹殺し得ぬと見ゑる。◉今年は衞生害蟲の騷ぎが多いやうだ、先づ東京では麻布の兵營や、二ケ處の監獄で南京蟲の騷があッて、岐阜縣內よも南京蟲が發生して、直ぐ毒蝶が千葉縣と、東京銀座の中央に涌出したのである。今より十三年前よ。仙臺に夥たゞしく毒蝶が發生した時こそあれ、宮吉と云仙臺隨一の材木屋に火事が起きて、其夜の中に幾千圓と云ふ木材を薪よました、翌朝におッて見ると近傍には何萬頭とも算へきれぬ程小黃蛾の死屍があッたが、頓に毒蝶騷ぎが絕ゑたのである。◉目下獨逸に留學中のヨコバビ一天張りの松村松年氏は、去五月に地中海の一孤島シシリーよ旅行して、新種二十餘を發見し、同月上旬よブータペストに還ッたとの事であるが、捕ッた御本人は嘸愉快だらうが、見付られた蟲こそ萬國への恥さらしである。◉疾くよ米國から歸る筈であッた桑名伊之吉若翁は、船脚の遲いのよ

出遭ふて、去月初めに上陸したが、乃て逢ふて見ると歸朝早々意外の迷惑を感じたとの事で、其はサンホゼー種の原産地は日本であるとの學說に、桑名氏も同意したと、先頃誰かゞ書いて又言ひ觸らしたらしい、そこで夢にも知らない桑名氏は、人に問はれて當惑したのなさうである、今の如く島國根生の殘ッて居る間は、別に怪しい話でも無いが、新歸朝者の身に取ッては成程困ッたであらう。●農商務省では、近々また害蟲視察員を派遣するさうだが、其れに就て一策がある、少々皮肉かは知らないが、此二三回分の旅費を以て、害蟲驅除に最とも功勞ある團躰若くは私人に與へたならば如何であらうか、一府縣平均百圓位ゐづゝれ分配する事が出來るのであるから、奬勵するには澤山である、左樣になると自然に、保養視察の何のとの中傷的駁評も薄ふがり、却つて御役目の威信を高める事が出來るであらう。併し是は、到底實行し難い事と知りつゝ、徒ざ言ふて見るのであるから、誰もが心配するには及ばん。●今より八十五年前に、岩崎灌園先生がハジラミ一名カイガラムシと書いて置かれたが、抑そも我國で貝殼蟲と云ふ名を記載した始めであらうと思ふから、貝殼蟲圖說第三章の正誤をする。●學生百名計りを募ッて、富士山へ修學旅行を試みるの壯擧があるから、小藤理學博士其他の名家と共に、昆蟲指導の任に當ッて吳まいかとは、此頃東京から名和先生への申込であッた、斯ある企圖は國の爲めに喜ばしい限りである。●凡そ今年ほど諸縣で盛んに螟卵を採取した事はあるまい、それも皆申合したやうに小學兒童が取ッたのである、害蟲驅除講習會などは確かに其主力となッたものと思はれる。　（なにがし生）

●岐阜縣昆蟲學會記事．　第四十三回岐阜縣昆蟲學會例會を、本月五日午後五時に開會せしに、第一席名和靖氏の『西濃地方に於ける觀察昆蟲談及び第五回內國勸業博覽會出品標本に關する意見』あり次に永澤小兵衛氏の『北海土人の眼に映じたる蟲種及び東西上古に知られたる昆蟲』談あり、次に長野菊次郞氏の『寄生蟲に對する定義の疑問』談あり、次に名和梅吉氏の『岐阜縣下各郡に於ける害蟲驅除實查』談ありて閉會せしは六時頃なりしが、農桑多忙期のことゝて會衆は二十餘名に止まりき。

●昆蟲標本陳列舘の觀覽人　昨六月中に、當昆蟲研究所の標本陳列舘を觀覽せし人員は、總計二千七百三十九名にて、最とも多かりしは八日に於ける三百八十三人、最とも少なかりしは十八日の四十一人にて、一日平均百九人强に當り、其中には福岡縣外十數府縣の農事當局者、敎育者も多かりき。

◎御斷り　本號には昆蟲標本を寄贈せられたる各地の同志の姓名、全國各府縣に於ける小學兒童螟卵採取の景況、本誌讀愛者より寄送に係る蟲送り其他通信等を揭載すべきの處、餘白なきため遺憾乍ら、後號に讓れり、諒焉。（以上、七月十四日脫稿）

◎昆蟲世界愛讀諸君に敬白す

雜誌「昆蟲世界」の義は、假ひ御注文有之候とも、前金にあらざれば、發送致さゞる規定に有之候處從來の厚誼上、前金相切れ候時は、其旨を朱書の上、特別に御扱ひ致し候ひしに、往々却つて意外の御取計ひに相成る向も有之候故、以後は不得止發送を見合はせ可申候、依て封書に前金切れのしるし相附し發送致候場合には御不用なれば其趣き御一報願上度、若し御通知無きに於ては、舊の如く御購讀相成るものと見做し可申候間、豫め御承知置願上候

七月十日

名和昆蟲研究所會計部

◎害蟲圖解未刊の分豫告

◎桑樹害蟲クハケムシ（桑蛄蟖）
◎稻の害蟲アタホシズヰムシ（三化生螟蟲）
◎稻の害蟲セジロウンカ（背白浮塵子）
◎稻の害蟲ヒゲナガアブ（長角虻）
◎桑樹害蟲クハハマキ（桑葉捲蟲）
◎蠶の害蟲カヒコノウジバヘ（蠁蛆）

◎松樹害蟲マツケムシ（松蛄蟖）
◎藍の害蟲アヰノゾウムシ（藍象鼻蟲）
◎粟の害蟲アハノズヰムシ（粟螟蟲）
◎胡麻害蟲メンガタスズメ（胡麻蠋）
◎赤楊害蟲ハンノキケムシ（赤楊蛄蟖）
◎櫟の害蟲カミキリムシ（天牛）

◎稻の害蟲イナゴ（蝗螽）
◎稻の害蟲トビイロウンカ（褐色浮塵子）
◎稻の害蟲クロクサガメ（黑色椿象）
◎桑樹害蟲アヲハマキムシ（青色葉捲蟲）
◎桑樹害蟲クハゴ（野蠶）
◎蔬菜害蟲モンシロテフ（菜の螟蛉）
◎蔬菜害蟲サルハムシ（菜の葉蟲）
◎大豆害蟲ヒメコガネ（姬金龜子）
◎梅樹害蟲ウメケムシ（梅蛄蟖）
◎梅樹害蟲ウメシヤクトリ（梅尺蠖）

◉豫約代價

◉圖解の紙幅縱一尺三寸橫九寸　◉壹枚の代價拾五錢郵税貳錢
◉百枚以上一纒壹枚拾錢郵税百枚に付き貳拾錢
壹枚拾錢郵税貳錢
但申込の際前金添附の事
圖解代金　凡て前金にあらざれば回送せず但郵劵代用壹割增の事

◎梨樹害蟲ナシゾウムシ（象鼻蟲）
◎梨樹害蟲ホシハマキ（星葉捲蟲）
◎果樹害蟲イラムシ（刺蟲）
◎稻の害蟲オホズヰムシ（大螟蟲）
◎藍の害蟲アヰノズヰムシ（藍の螟蟲）
◎粟の害蟲アハノヨトウムシ（粟蠶）
◎里芋害蟲セスヂスズメ（烏蠋）
◎桐樹害蟲シモフリスズメ（桐蠋）
◎果樹害蟲ホシカミキリ（白斑天牛）
◎果樹害蟲ドウガネブンブン（金龜子）

發行所　岐阜市京町　名和昆蟲研究所

登録商標

硫曹

硫曹肥料

●硫曹肥料を稲作に用ゆれは第一ニ米質を宜しくし且つ頗る收穫を増すべし壹反歩ニ付五六斗より壹石貳三斗を増す之を舊肥料を用ひたるものに比すれは見掛も遥に宜しく目方も重く土用を越して蟲附稀なり舊肥料を用ひたるものは之に反したとへ見掛は異ならざるも米質惡しく又籾の收穫は同じくとも玄米となして壹反歩三斗以上の相違あり之を舂きて白米となすに硫曹を用ひたる分は舂減尠なく飯ニ炊くに頗る炊殖すべし（例之は舊肥料の米は水壹升米壹升なるに硫曹の分は米壹升ニ水一升二合ならでは飯ニ適せず即二割以上炊殖の相違あり）●硫曹肥料を用ゆる農家は能々以上の事柄ニ注意し之を實驗して其效用の偉大なるニ驚くべし●輸出米は硫曹肥料を用ひたるものならざるべからず然らざれは南洋熱帶地方通過の際多く腐融すべし●第壹（過燐酸）を稲作ニ用ゆるには壹反歩ニ參貫目より五貫目迄を舊肥料（大豆粕、油滓、堆肥、廐肥等）ニ混交使用すべし●硫曹肥料のみ施すなれは第八號を最も適當とす壹反歩ニ拾貫目乃至拾五貫目を二回に分施すべし（堆肥は何れにも施すを宜しとす）●硫曹肥料は藍、煙草、薄荷、麻、藺其他陸稲、粟、砂糖黍、桑幷野菜物、菓物等ニ施して其效實に驚くべきものあり●第五回勸業博覽會ニ硫曹肥料を用ひたる農産物を出品し名譽金賞牌を得たるものには金三百圓づゝ、銀賞牌には金百圓づゝ一等賞牌には金五拾圓づゝ、二等賞牌には金貳拾圓づゝ、三等賞牌ニは金拾圓づゝを贈呈すべし●第八回關西府縣聯合共進會ニ出品せる農産物の内第一等賞を得たる香川縣の裸麥及德嶋縣の葉藍は何れも硫曹肥料を使用したるものなれば會社は香川縣の近藤太郎氏へ金百圓を德嶋縣仁井輝藏氏へ銀盃（三ッ重）壹組を贈與せり●硫曹肥料の明細幷ニ見本等は御申越次第贈呈すべし

大阪西區西野下之町

大阪硫曹株式會社

電話西四一九番

蟲塚保存義金募集廣告

◎蟲塚(蟲供養碑)保存義金募集の趣意

現時、本邦各地に散在の蟲塚(害蟲に關する石碑)は其數凡そ十基に下らざる可し而して當初その建立の旨意を繹ぬれば、多少の異同ありて、石川縣のもの丶如く害蟲埋瘞の紀念碑たるあり、大分、宮城、福井諸縣のもの丶如く蟲害掃攘の祈祝碑たるあり、又福岡縣のもの丶如く害蟲驅除の記功碑たるありと雖ども、要は農作害蟲の怖るべく、之が驅防の等閑に附す可からざる事を訓戒するの誠意より出づ、豈にこれを路傍の供養碑と同視して可ならんや。然るを其現狀を聽くに、或ひは桑圃の間に顚倒するものあり、或ひは風雨に曝されて文字の剝蝕に任するものあり、或ひは空しく山中の荊叢に埋もるゝものある等、今にして早く之が保存の道を講ぜずんば、久しからざるに事蹟湮滅の虞れなしとせずと。當昆蟲研究所深くこゝに感ありて、當所創立七年の紀念事業として、本年四月を期し、之が保存修補の計畫をなせり。然れども到底少數者の微力を以て完成すべきにあらざれば、博く同志を全國に募り、其義捐を仰ぎて、古人が今日に遺したる洪恩に荅ふる所あらんとす。世の農桑業に從事し若くは昆蟲學を研究せらるゝ諸士の、半瓶の酒、一塊の肉を節して、此擧に贊襄の意を表せられんことを冀ふ。

● 義金は一口金五錢以上とす。(郵劵代用にて宜し)
● 義金は一人一口以上とす。
● 義金取扱は本月末日を以て終了期限とす。
● 義金には受領書を出さず時々「昆蟲世界」紙上に芳名を掲げて領收の證となす、精算報告もまた同じ。
● 醵集義金は之を平分して、七月末日までに判明せる、各蟲塚所在地の官廳に依托すべし。
● 義金送附の際は、蟲塚復舊工費若くは雨覆ひ埒柵修造費に限り支出せられ度旨を指定すべし。
● 義金醵集總額幷に寄附者名簿は、配分金と共に各官廳に送附して、義捐者の意思を傳達すべし。

義捐金申込所　岐阜市京町　**名和昆蟲研究所**

◉本誌定價並廣告料

壹部郵稅共金拾錢〔見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す〕
壹年分拾貳部郵稅共金壹圓八錢

（注意）本誌は總て前金ゝ非れば發送せず◉爲替拂渡局は岐阜郵便電信局◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす

廣告料五號活字廿二字詰一行ゝ付金拾貳錢、三十行以上一行ゝ付き金拾錢とす

明治三十五年七月十五日印刷並發行

發行所　岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二（岐阜縣岐阜市京町）　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二　發行者　名和梅吉
同縣武儀郡下有知村三百七十四番戶　編輯者　天野秋二
同縣安八郡大垣町字郭百五十三番戶　印刷者　河田貞城

（明治三十年九月十日內務省許可）
（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

（大垣西濃印刷株式會社印刷）

Vol. VI. AUGUST. 15TH, 1902. No. 8.

（八月十五日發行）

（毎月一回十五日發行）

THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.

EDITED BY Y. NAWA.
GIFU, JAPAN.

昆蟲世界

（第六卷第八册）　第六拾號

目次　（禁轉載）

（明治三十五年八月十五日發行）

（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU, JAPAN.

◎寄贈物件受領公告

一金參圓也　和歌山縣　寺田鬼十右衛門君
一金蜻蛉化石　壹個　福岡縣　桑名伊之吉君
一菓子盆（草花に蝶彫刻）一枚
一蟲除符札數種十餘葉　｝新潟縣　佐藤　榮君
一杜鵑の落文（高野山產）貳個　岡山縣　正富彌藏君
一蟲除符札　二種三葉　和歌山縣　大野宗一君
一蟲除符札　壹葉　千葉縣　石崎清五郎君
一蟲除符札　一葉（說明書附）　埼玉縣　櫻井倚眺君
一萬朝報（昆蟲記事揭載）壹葉　神奈川縣　井上福松君
一稻作改良の歌（蟲類詠込）壹册　三重縣　西岡嘉十郎君

右寄贈相成候ょ付茲に芳名を掲げて其厚意を謝す

明治三十五年八月十日　名和昆蟲研究所

◎蟲塚保存義金喜捨第六回報告（イロハ順）

金五拾錢　群馬縣　松澤光子君　金五拾錢　大阪市由比昌太郎君
金貳拾錢　岐阜縣　長屋繁一君　金拾五錢　兵庫縣　岩本兵馬君
金拾錢　愛媛縣　河野通敬君　金拾錢　宮崎縣　竹井繁滿君
金拾錢　福岡縣長野菊次郎君　金拾錢　長野縣上原直三郎君

●小計金壹圓七拾五錢（參拾五口）
●累計金五拾參圓拾八錢（千六拾參口强）

右蟲塚保存費中へ義捐相成候に付茲に及報告候也

明治三十五年八月　岐阜市京町　名和昆蟲研究所

第十四回全國害蟲驅除講習會員募集

開期（自十月十七日至同月三十日）**二週間**（定員四十名）

全國害蟲驅除講習會は、既に前回までょ、三府四十一縣の出身約七百名の有爲なる修業生を出せり依りて此際益々斯學の奮興を期せんことを欲し、來る十月十七日を以て第十四回の開講式を擧げんとす。斯學に志ある士は、速かょ其手續を經由せられよ。

今回は全く增員の設備無きを以て、その正式の手續を了し、確定名簿ょ登錄せられたる正員のみを以て、會を組織する事となしたれば、入會の諾否は一に申込の遲速に由る。

尙申込期限を、**十月十日以前**と定むると雖ども、當所の都合により、隨時入會を謝絶することあるべし。規則書入用の向は郵券を添へ至急照會あれ、直ちょ送致すべし。

明治三十五年八月　岐阜市京町　名和昆蟲研究所

◎昆蟲世界購讀紹介者芳名

長野縣　原三喜治君（壹名）
德島縣　的場宗三郎君（壹名）
茨城縣　中林馮次君（壹名）
秋田縣　佐々木茂助君（壹名）

カ(甲)とハマダラカ(乙)との比較

論說

◎昆蟲學者の把るべき方針を論ず

本邦の昆蟲學は未だ發達せりと云ふこと能はず、將來如何にせば之を健全ならしめ得べきか。而してこれに對して議する者は曰く、宜しく根抵より改造して、摸型を西洋の昆蟲學に取るべし、曰く在來の學術を基礎として、西洋の學說を斟酌加味すべし、と。則ち一は破壞に殆く、一は改善に在り、然れども、自國の昆蟲學を以て十全のものと認めざるに至りては、其旨相同じ。

それ西洋の昆蟲學は、初めより科學的の形體を具備し、東洋のものは、主ら醫藥上の必要より起れり故に前者は微分細裂を專らとし、後者は科屬の識名を以て足れりとなせり。單この點より論へば、我の彼に及ばざること頗ぶる遼遠なるが如きも、既に千五百年來の究明を累ね、記述に將た應用に、彼に較べて毫も遜色なきもの一にして足らず、豈に漫りに土崩瓦解せしむるに忍びんや。特に農事の上より觀るも、彼は器機の力によりて廣袤數町に亘るの陸田を營なみ、我は手腕を勞して小區劃の水田に役々たり、彼は時に旱蝗に襲はるゝも、我れ毎に濕螟に苦しめらる、彼は小學兒童にすら昆蟲學の初步を授くるも、我れ陰陽說の迷信に驅らるゝの老壯なほ多し、彼は富力足り傭錢貴きも、我は貧惰業に從がひ人口また多きに過ぐ。是を以て假し彼に取るべきの長處ありとも決して之を同一規律の下に立たしむ可か

らざるは勿論、其風土の相違より、昆蟲の品種、發育の時期、加害の狀態をも異にするが故に、彼の昆蟲書を譯說して直ちに我の用に充てしめんと欲するも得べからず。斯かる覩易き道理を忘却し、純乎たる洋說を移して、之を本邦の農民に強ゐる者あり、吾人は其不可なるを知りて、遂に其可なるを見ざるなり。想ふに、一葦水を隔つる淸韓二國の蟲名を、邦稱に對譯するにすら、古來これを成功せし者無きに、今や遽かに歐蟲米豸を捉來りて、斯學の研究に資せんとす、識者の嗤笑を招くも亦當然のみ。

然らば則はち之を如何にすべきか、曰く本邦の舊說に補足するに、西洋昆蟲學の長處を以てするにあるのみ。蓋し本邦の昆蟲に關する學說は、其本源彼と相等しからざれば、固より全形完膚無し。然れどもまた自づから一種の特色を備へ、且つ根株の蟠延日已に久しく、今や輕易にこれを拔除すること能はざるのみならず、其根幹も幸ひに朽枯の狀態無きを以て、唯花實の他に比べて惡劣なるを改善せんが爲めには、彼の良枝を將來りて、固有の砧木に接續せしむれば則はち足る、然るを近來、歐米諸國の昆蟲書を換骨脫體して、これに多少の蛇足を加ひ、日本の二字を冠ふらして、世に公けにせしもの十餘種の多きに上れりと聞く、是豈に後學を迷謬に陷いらしむるものにあらざる莫き耶。

凡そ創始の時代には、輕擧妄動に失し、往々愼重の考察を缺くことあり。彼の維新後に開物成務の意義を誤解して、名區勝地の樹林を濫伐せしが如き、學術革新を標榜して、大中學より國書邦語を驅逐せしが如きは、共に顯著なる例證とすべし。然れば强がちに、今日の消極的言行をのみ尤むるにはあらざるも、夙く警醒を加へずんば、他年救ふべからざるの弊害を此裏に釀成せんことを畏るゝの餘り、吾人は固くこの方針を把持せんことに努めるなり。則はち吾人の他を擯くるは、學者其人を擯くるに非ずして其偏僻の說を厭へばなり、而して吾人の常に世に容れられざるは、主義の消極的に出でずして、その改

善說に左袒するに由るなり。

更に一歩を進めて、本問題を討究する時は、本邦の昆蟲學は、何が故に其全部を擧げて、西洋派に歸嚮せざる可らざるやを悟るに困しむものあり。蓋し業に基礎あり又歷史ありて、優に他の長處を收容するの餘地を存せんには、其本末を紊亂し及び其主客を顚倒するの要なかる可ければなり。人或ひは、目して頑迷なる排外思想に出づるとなさん、否らず。又或ひは、姑息なる修補說となさん、否らず。吾人は不敏なりと雖も、斯かる事實の判斷に迷ふ者にあらず、又一時の感情に制せられて、漫然論議する者にもあらず、唯國家百年の計圖を立るにあるのみ。看ずや、他の植物、醫藥等の諸科學の吾昆蟲學と同種同根の砧木に泰西種を接枝して好結果を得たりし事を。既に之を知り尙且消極的の言辭を弄する者あらば恐くは他に求むる所ありて然るか、若くは本邦昆蟲學の基礎の眞價を辨別するの明なきに因らんのみ。邦人の希望の如く、本邦の昆蟲學に加味するに西洋の學說を以てせんか、東西の精粹を打て一塊となし茲に大醇小疵の科學を組成し得べきを以て、之を攻究する者は、煩ひ少なくして功多く、之を應用する者は、勞苦を減退して良果を收得せんこと昭らけし。是れ固有の習俗を壞亂せず、また經濟的昆蟲學の原則に乖離する所ろ無を以てなり。由來、邦人は他國の事物を同化せしむるの材能を有せり、此際何すれぞ彼を化し我を進め、以て新たに日本派の昆蟲學を唱道し、敢て堂々學術界に馳騁を試ろみざる。吾人は確信す、區々たる蟻塔蜂窩に相據り相鬪き、眼前の小利害にのみ是れ拘泥して、斯學前進の方策を講ぜざらん間は、日本式の器具に、日本式の標本に、將た日本式の驅除法に、到底その名聲を揚ぐるの日なからんことを。又信ず。昆蟲名稱一定の擧の如きは、急は則はち急なるも、先づ此方針にして確立するに非ずんば、未來永劫得て之を一定せしむるの期なかる可きことを。學者深く考がひ、且思はざる可からず。

左の一篇は、田中芳男先生が多年纂輯の功を累ねられし「物産寳庫」乙集の初巻の玉屑にて、今より二十餘年前に曲直瀨愛氏の採筆せしものに係る。同書は未だ世に公にせられざるを惜むの餘り、斯學研究者を益せんとて、今回特に同先生に乞ふて爰に轉載せるなり、覽者その意を知られよ。

◎蝗蝻字考

東京　曲直瀨　愛　纂考

客歲、支那廣東に蝗災あり、支那人其蟲を蝻と呼ぶと聞く。按るに蝻の字、漢土古書に見へざる所にして、字典にも亦載せず、余深く疑ふ所あり、仍て諸書を獵涉して、蝗蝻の字義を搜索し、名けて蝗蝻字考と云ふ。

禮記月令曰、孟夏行春令、則蝗蟲爲災○說文曰、蝗螽也○前漢文帝記曰、旱蝗。註曰、蝗即螽也、食苗爲災、今俗呼爲簸鐘○演春秋繁露曰、徽州稻苦蟲害、俗呼橫蟲。韻會曰、橫去聲、義同蝗○詩經小雅曰、去其螟螣。傳曰、食葉曰螣。音特　陸璣疏曰。螣蝗也○說文作螣○爾雅集註曰、食葉曰蚮音貸○許愼曰、吏乞貸則生螣○集韻曰、蟘音特本作蟘、亦作螣蚮○正字通曰、蟘俗蟘字○唐韻、貣音特、同蟘、又詩疏、同螣○穀梁傳、雨螽於宋○說文曰、螽古文作螽、蝗也。又曰、螽或从虫、衆聲○公羊傳曰、桓公五年螽○陸璣詩疏曰、今人謂蝗子、爲螽子、兗州人、謂之螣。按るに蝗と同義の字古書に見ゆるもの概ね斯の如し、陸佃禆雅の說に蝗字从皇、今其首腹背皆有王字とあり、又時珍の說に、蝗亦螽類而方首、首有王字とあり、而して酉陽雜俎には蝗云頭上有梵字、然今皆

其頭有王字、理不可曉とありて其說頗る奇怪に似たり。洋書に蝗の形狀を釋するものを見るに、其頭大にして凸起せる二の集眼を具し、頭頂に三の眼點ありとあれば、蓋し漢人其頭頂の三點を認め妄に王の字となせしものなるべし、故に或は王字と云ひ、或は梵字と云ふて一定せず、之れ以て一證とすべし。

玉堂閑話曰、蝗之爲災蓋診氣所生、每生其卵盈百日、卵及翼凡一月而飛、羽翼未成跳躍而行、謂之蝻◎又曰、後漢乾佑二年、將軍許敬、遷奉命於東州、按夏苗、上言稱於陂野之間見有蝻、往十數里◎又曰、晉天福之末、天下大蝗、連歲不解、行則蔽地、起則蔽天、禾稼草木赤地無邊、其蝻之甚也、流引及無數、甚至浮河踰地越嶺渡壍、如履平地◎蟲志曰、天蟲、蝗蝻是也◎荒政輯要明人徐光啓疏曰、春夏鬱蒸乘濕熱之氣、蝦子變爲蝻◎爾雅釋蟲曰、蝗蟲子未有翅者、爲蝝、蝮蜪◎彙名苑曰、蝮蜪、蝗子未有翅者。（中略）

按るに、蝻の字義玉堂閑話の說に依れば、本蝗の未だ羽翼成長せずして跳躍し行く者にして、爾雅釋蟲の蝝蝮蜪と同義なり、然れども又常に蝗の字に通じ用ゐしものと思はる、蟲志に蝗蝻と熟字せしも、蓋し單に蝗の義に取るなるべし、故に今支那にては專ら蝗の字に通じ用ゐ、甚しきに至りては其字義を辨せざるものあるに至りしこと知るべし◎洋書に蝗は東南を指して飛行せるの性あり、幼蝗も亦必ず東南に行かんと欲すとあれば、蝻の字の蟲に从ひ、南に从ふも自ら因てする所ありと云ふべし。仍ち考れば王安石罷相、出鎭金陵、飛蝗自北而南往と云ふも、敢て奇事とするに足らざるあり。

◎蠶蛆驅除豫防法

農商務省京都蠶業講習所　荒木武雄

蠶蛆の蠶家を惱ますこと漸やく多大なり、今にして大に之れが驅除豫防の道を講ずるなくんば、他日噬臍の悔なきを知らんや。余輩の研究未だ完結せざるものありと雖とも、而も一年を緩ふせば國家一年の

不利あり、乃ち茲に第一着の方法を案出して一般當業者に告げんとす、幸ひに實行あらんことを。

蠶蛆は既に世人の知れるが如く、其生涯に蠅(成蟲)、卵、蛆(仔蟲)、蛹の四變化あり、從つて驅除の方法も亦其時期に因つて異ならざるべからず、就中、成蟲すなはち蠅の驅除豫防法に就き、余輩の嘗て實驗する所ろによれば、(第一)燻煙法　桑園に於て晝間絶えず燻煙して、蠅の來集を防ぐもの、(第二)桑園撰擇法　人家を隔てたる海岸若くは河邊等の大氣の流通宜しき土地を選びて、茲に桑園を開くもの、(第三)桑園仕立法　人家の近傍風通し惡しき土地にして、常に蛆卵の多き桑園は桑樹を密植して蠶兒の三齡餉食後五齡の半ば以前に於て、中央の可成外部に顯はれざる桑葉を與へ、上簇前及び三齡餉食以前に於て、其他のものを與ふる方法なり(詳しくは三十四年十二月發行の本誌を參照すべし)、(第四)誘殺法　蠅の好む食物、例へば蜂蜜、砂糖等に毒劑を投じて誘殺するもの是なり。而して此中第二桑園選擇法は最とも有効なりと雖ども、地方によりては這般の土地皆無なることあり、第三桑園仕立法は普通の養蠶家には効力多しと雖ども、亦一の姑息策たるを免れず、其第一燻煙法及び第四誘殺法の如きは爲さゞるに優れりと雖ども、到底大効なきに終るや明瞭なり。要するに蠶蛆蠅に就きての驅除豫防法は未だ完全なるものを發見せずと謂ふも敢て不可なし。

次に蠶蛆卵に就き實驗したるものは、(第一)桑葉洗滌法　桑葉を冷水を以て洗滌し、蛆卵を除去するもの、(第二)熱殺法　蠶蛆卵の附着する桑葉を一定時の間、高温を保持する器内に置き、以て蛆卵を燥殺するもの、(第三)瓦斯接觸法　青酸加里等の瓦斯に一定時間接觸せしむるもの是なり。此中に就て第一桑葉洗滌法は多少の蛆卵を洗滌し去ることを得べしと雖ども、結局大効なく、第二熱殺法は蛆卵の死滅する程度まで加温する時は、桑葉の萎凋甚だしくして利益なく、第三瓦斯接觸法は桑葉に害を及ぼ

すことなくして、殆んど蛆卵を死滅することを得べきも、既往一回の實驗に過ぎざれば、未だ確言し難きのみならず、之が應用の方法に就ては、更に大に研究の要あるを知る、世人の輕々しく實行せざらんことを望む。此他なほ研究したること少なからずと雖ども、何れも實行し難きものか若くは効力少なきものゝみにして、到底良法と云ふべからざるぞ、然るに蠶蛆(仔蟲)若くは蛹の驅除豫防法に至つては、其裝置甚だ困難ならずして然かも、奏効確實なるものあり、請ふ序を追ふて之を下に述べん。

蠶蛆(仔蟲)若くは蛹の驅除法を講ずるに當り、第一着に解決せざるべからざる問題あり。即はち蠶蛆は、只家蠶のみに寄生せずして、野蠶、尺蠖等にも寄生するものなれば、家蠶に寄生したる蛆をのみ驅殺するも、能く其目的を達し得べきや否と云ふこと之れなり。本問題に關して余輩の研究したる所ろに依れば蠶蛆は野蠶又ハ尺蠖等に寄生すと雖ども、此等の害蟲は他にも多くの勁敵あり、而してこの敵蟲の多くは發育迅速にして蠶蛆の如く緩慢なるものは蓋し少なし、則はち實際は蠶蛆の此等の害蟲に寄生して完全なる發育を遂ぐるものとては極めて少數なりと謂はざる可からず。之と聯貫して余輩ハ屋外に於ける蛆蛹は、屋内地下に於けるものと、同一に發育するものありや否を確めんが爲めに、一昨三十三年六月より本年六月に至るの間に於て試驗を行へり。其方法は桑園の近傍に蛆蛹を地下二寸に埋めたるものを第一區となし、同地下三寸に埋めるものを以て第二區となし、單に蛆を放置して自然に蟄伏せしめたる者を以て第三區とし、別に屋内に於ても同樣の方を行ひ以て之が標準とせり。然るに兩年共屋内に於けるものは蛹化したるもの多かりしも、屋外に於けるものは遂に一頭の蛹化したるものすら無かりき。以上の事實は蠶蛆豫防上に重大の關係あるものと認むるにより、本年重ねて同樣の方法を以て、此試驗を繼續せり、勿論この結果は、明年に到らざれば判明せずと雖ども、少なくもこの實驗に依りて、蠶蛆の

屋外に於けるものは、大に其生理を害するが爲め完全なる發育を遂ぐるもの稀少なりと斷ずることを得べし。要するに家蠶以外の昆蟲には、蠶蛆の寄生して十分の發育を遂ぐるもの稀なるに、其宿主を辭して桑園等に於て蛹化したるもの丶大部は斃死するものならんには、家蠶に寄生し屋內地下に蟄伏すべき仔蟲、若くは蟄伏したる蛹を驅除せば、殆んど蠶蛆を全滅せしむることを得べしと信ず。

夫れ然り、然らば仔蟲若くは蛹の驅除法は如何なるものを以て上乘となすべきか、これに就て余輩の實驗したる所ろのものは、實に左記の如し。

第一、藥劑撒布法　蛆の蟄伏したる地上に、石油其他の藥劑を撒布して斃死せしむる方法にして、昨年來の研究に據れば、この方を以て全たく死滅せしむることを得べし。是れ極めて行ひ易き方法にして將來大に望を屬すべきものなるにより、爾後引續き試驗中なり。

第二、床上目張法
第三、生繭容器製造
第四、床下漆喰裝置
（以上）此三方法に關しては後段の規程案に詳述せり。

第五、蠶架下金巾受器製造　蠶架の下段に、金巾を張りて蠶蛆を收容する裝置にして、長野縣（故）清水氏の發明に係るもの。

第六、蠶蛆熱殺法　生繭を一定の時間中、或溫度に感せしめ、發蛾に障害なくして殺蛆の目的を達するもの。

此六法中、第一藥劑撒布法は、極めて有望なる方法なりと雖ども、目下研究中に屬すれば、他日の成蹟を待たざるべからず。第五の方法は一の良法たるを失はずと雖ども、實驗上逃逸するの蠶蛆多く、未だ

以て完全なるものと認むべからず。第六の方法に至ては、蠶種製造家ゝ幾分の參考ゝ資するの外、殆んど價値なきものとす、其他なほ床下の蟄蛹を發掘して、殺滅するの方あれども、煩累多ければ一般に行はれ難からん。然るに第二、第三、第四の方法中、第四は新築の際に實行せば、甚たしく困難を感ずることはなかるべく。且一度施行せば連年手數を要することなし、而して第二、第三の方法に至りては之を行ふゝ困難ならざるのみならず、一般蠶業者に强制的に實行せしむる際、監督上亦甚はだ容易なるべきか。(未完)

◎蚊と羽斑蚊との比較研究

名和昆蟲研究所調査主任　名和梅吉

蚊は雙翅目の蚊科に屬する最とも普通の種にして、其種類甚はだ多く、最近の調査に依れば、旣に世に知られたる族のみにても、二百餘種ゝ達せりと云ふ。就中、本邦に産する種類に就きては、未だ十分なる調査なきを以て、之を知るゝ由なきも、現に當昆蟲研究所に所藏する種類の十餘を算するを以て之を推せば、今後數回の調査を經たらんには、或ひは米國のそれに於けるが如く、尙ほ十餘種を發見するに到るなるべし。扨茲には普通種ゝ於ける種類等の記載を事とせず、彼の近く十數年來、醫學社會の問題となり、現時之が驅防を講究するの必要を認められし瘧媒蚊すなはち翅斑蚊と稱せらるゝものと、普通種との比較に就て少しく述ぶる所ろあらんとす。

凡そ夏秋の候、人家ゝ入り來りて人畜を惱ましむる蚊と雖ども、其土地の異なるに從ひて、之が種類を異にするのみならず、亦同一地にも能く兩三種の同屬異種のものを産するが故ゝ、之を細別するは當然たるべきも、此等は概して未だ瘧媒種と認められざるを以て、便宜上これを普通の蚊種(Culex pallens, Coquillex)と稱し、翅斑蚊をば、瘧媒種として對照せしめんとす。而して後者の學名は、未だ的識する所ろ無きも、彼の米國に産する Anopheles Cru-cians, Wied 種に酷似の點あるは、一たび鏡檢を加へし者

の齊しく認知するに難からざる一事とす。今此兩種を取りて、双ん比較せば、外形の大躰に於ては粗ぼ類似するも、唯翅面に斑紋を有すると有せざるとの差異あるを認めん、更に子細に之を檢視せば實に次の如き相違あるを知らん。

普通種

（一）躰長一分八厘、翅張三分内外、全躰淡褐色を呈し、翅は透明なり、但變形せし后翅は鈍白色を呈す。

（二）複眼は腎臓形にして、始んど頭部の全位を占め、金屬性の光澤あり。

（三）觸角は細長く、淡褐色を呈し、長八厘あり、口吻は先端太まりて褐色を呈し、長九厘あり、下顎鬚は短かく、先端太まり三節より成る、長さ二厘弱。

（四）六脚共に太く、色澤は濃かなり、飛揚の際音聲を發し、靜止の時は躰を平直に置き后脚を擧ぐ。

（五）發現最とも多きも、未だ瘧病を媒介するを認められず。

瘧媒種

（一）躰長一分七厘、翅の擴張二分八厘許、頭胸部は淡灰色を呈し腹部は淡緑褐色をなす、翅面には斑紋を有し、變形せし后翅には褐色を帶ぶ。

（二）複眼は同形なれども、着位を異にし、金屬性の光鈍くして、其色青を帶ぶ。

（三）觸角は短太に、尖端は細まり、暗褐色を呈す、長五厘あり。口吻は同樣にして長さ八厘内外、下顎鬚は殆んど口吻と長さを同うし四節より成る、末節に到りて漸やく細まり、普通種の如くに太からず、色淡し。

（四）飛揚の際は音聲を發せず、靜止の時は躰を斜めに置き、后脚を擧ぐ。

（五）發現多からず、但其發生の地方にありては、瘧病を媒介す。

以上はその雌蟲に就きて、簡單に比較せしものなるが、雄蟲に於ても亦多少の差異あるを見るなり。特に雄蟲に於て著るしき相違あるは下顎鬚にして、普通種のものは、口吻よりも長く、且尖端の二節は稍肥太の傾むきあるも、瘧媒種にありては、尨大にして棍棒状を呈し、多く羽毛を密生せり。今更に卵子幼蟲、蛹等を比較して其異同の如何を示さん。

普通種

（一）卵塊は五六拾粒乃至三百餘粒より成れる木枕狀にて、常に汚

瘧媒種

（一）卵子は一粒づゝ比較上清らかなる水面に産附せられ、背て普

濁せる水面に浮游す、初めは白色なれども、漸次暗色に變ず
粒子の大さは二厘許りにして細長く、上部は細尖なり。
(二)ボウフリムシと稱せられ、不淨なる渟水に多く、稀には潢潦
に發生す。其尾端の呼吸管は長くして、常に頭部を斜めに倒
置し、物に驚く時は慌たゞしく水底に沈み、また直ちに上浮
するの奇性あり。全躰は殆んど同色にて別に斑紋を認めず。
(三)蛹は淡褐色を呈す、其呼吸管は長くして背上は水平をなす蛹
期にも活潑に運動するを以て、俗にマルボウフリの稱あり。

通種の如くに一塊をなさず、但し護謨質もて不規則に數粒を
連結せしむることあり、其大さは一厘五毛許りにして暗色を
帶ぶ。
(二)幼蟲は原より止水中に產すと雖も、多くは緩流に棲息するに
似たり。其呼吸管は短小なるが爲めに、躰を水面に平直に浮
かべ其食を求むる時には、頭部を仰向になすの性あり。頭部
は黑色にして、他は黑色と綠色の斑紋を有す。
(三)蛹は多少綠色を呈し、普通種よりは小形にて、呼吸管は短か
く、背上に多少傾むきを有し、且比較的活潑ならず。

斯く對比し來れば、兩種間に最とも甚はだしく相違せる特殊點は、其幼蟲と蛹期とに於ける呼吸管の長短にあるを知らん。そも此呼吸管は同一普通種(Culex屬)にありても、其品種の異なるに隨ひて、多少の長短あるを免がれ得ざるものなるも決して瘧媒種(Anopheles屬)の如くに顯著なるものにはあらず。終りに、本邦に產する瘧媒種(Anopheles屬)は皆同一種なりやと云はゞ、調査未了の結果として、暫らく疑問に附するを穩當なりと信ず、蓋し南北寒暖、其の土地を異にすれば、或ひは異種あるやも未だ測られざればなり。特に北海道と臺灣に產するものに至りては、本州に產するものと、全然其種を異にするにあらずとの疑がひあり、現に昨年陸軍軍醫都築甚之助氏の調査せる、北海道瘧媒種の記載に對照するも此感想無きにしもあらじ。而して此種の鑑別に就き注意すべきは、採集の巧拙、標本の良否にあり如何とあれば翅上に現はれたる斑紋も容易く剝落するものなれば、完全なる標本に據りて比較せざる時は、往々迷謬を來すことあればなり。嘗て當昆蟲研究所に於て幾たびか之を實驗せしに、假ひ同種と雖ども只翅上の斑紋のみに重きを置くときは、忽ち異種と認むべきものを檢出せる事も多かりき。去れ

ば極めて完全の標本に就て研究を遂ぐるにあらざれば、輕易に發表し難きものあり、況んや同一瘧媒種(Anopheles屬)たりとも、其種を異にすれば、醫學上必らずや病徴、經過等を異にするものあらんと信ぜべきもの之あるをや。

◎日本害蟲篇の著者松村氏に質す

千葉縣印旛郡　齋藤啓二

松村松年氏の記載せる日本害蟲篇は、現下我國に於ける害蟲書の白眉とも稱すべく、其後學者に不少の裨益を與ふることは一たび之れを繙讀せし者の夙に認識する所なり。惟余の不敏なる從來幾たびか之を玩味するも、疑惑の未だ氷釋するに至らざるもの數條あり、依りて今其二三を摘出し、敢て著者の高教を仰かんと欲す。

余が所謂疑惑の第一は、稻の小青蟲に關してあり。此蟲に就ては、曩に大竹義道氏との間に互に問答ありて、爲に局外者を益せしめたること尠少ならざりき、是れ切に同氏に謝する所なり。然るに此小青蟲なるものは、大竹氏も云ひ、且は氏も亦自證する如く、名和氏のイ子ノアヲムシを指すものならん、而して之を小青蟲とせしは、他と區別する爲めなるべければ、是は大ひに便利なるが如し、然れども之をプリオリテートより論ずれば、名和氏は已に明治廿八年十一月に、昆蟲雜誌第一號に於て發表せられたり、然るを氏がプリオリテートを無視して、之に從はれざるは、是れ夫子自から誤てるものにあらざるなきか。想ふに大竹氏質問の主意も亦必ずや此の意を含蓄せしあらん、而して氏の之に答ふるや、殆んど此要件を忘却せしものゝ如し。是れ余が疑はざる可からざる所以の第一なり。

然りと雖ども、是は甚はだ瑣事なり、要は唯學名を重んずるに在るのみ、學名にして確定せんか、和名

の異同は姑らく之を忍ばざるべからず。故に余は左まで深く之を追窮する者にあらず、而して其深く問はんと欲するものは寧ろ其の挿圖にあり、即はち同書第六十二圖中、小靑蟲成蟲雌雄の圖は果して正しきものなるか、余が所信を以て言へば杜撰錯誤と斷定するを憚らず。蓋し其誤れるは一度稻の小靑蟲を實見したらん者の齊しく首肯する所ろなるべく、試みに之を昆蟲世界第十一號の圖版と比較對照せば思ひ半に過ぐるものあらん。曩に余は蟲界雜記てふ題下に於て指摘せしが如く、日本昆蟲學に於ける稻螟蟲の記載には誤謬あり、今又日本害蟲篇に於ても亦此の誤謬を見る、而して等しく是れ最とも普通なる害蟲に關してなり、余は寧ろ氏が如何にして斯かる粗漏に出でしやを忖度するに窮しむ。是れ疑はざる可らざる所以の第二なり。

クロアゲハと、カラスバアゲハを以て別種なりとせば、必ずや其學名も異稱を有せん。然るを常に學名にのみ重きを置ける松村氏が、其双璧として公行せる日本昆蟲學と日本害蟲篇とによれば、こは全然同一種と認めざるを得ず、何となれば日本害蟲篇に於けるカラスバアゲハは、日本昆蟲學に於けるクロアゲハにして、即はち共に Papilio demetrius, Cram. なればなり。玆に至りて余は大ひに迷へり、論ふまでも無く、學名は學術の進歩に從ひて多少の變更を要すべしと雖ども、其同類異品として知られたる此兩種に、全く同一の學名を襲用せらるゝに至りては、何人も事の意外なるに驚かざるを得ざるべし、況んや初學者をや。先には本誌に於て氏が卓絶なる昆蟲の名稱論を聞く、而して這般のことあり。是れ余が疑はざる可からざる所以の第三なり。

以上は、取敢へず疑惑に堪へざるものゝみを指摘せしに過ぎず、其他の事に至りては異日重ねてまた質疑することあらん、願くは後學の爲めに、高敎を吝むなからんことを、敢て望む。

◎昆蟲の食物と植物の種類との關係（岐阜縣昆蟲學會第四十四回例會席上演説筆記）

岐阜縣昆蟲學會特別會員　長野菊次郎

今日は他の話をする積りでありましたが、午前に昆蟲と植物との關係を話したから、引續き同じ關係の事を話した方が、幾らか都合よかろうと思ふて、此問題を選んだのです。此事につきては、目下試驗中であり、又此後引續き試驗する積りでありますから、今日十分の材料を供する事は出來ませぬ、然し今日まで試驗した丈けでも話して置けば、多少諸君の御參考にもなり、傍はら後來御注意の一端とならうと思ふのです。然れど此事を話す前に、少しく植物の分類の事を話す必要があります、會員諸君は皆々植物分類の事につきては、業に既に御承知ではあらうけれども、話の順序として是非述べて置かねばならぬから、其積りに願ひます。

凡そ植物の分類でも動物の分類でも同じ事で、自然分類と申すのは、人の戸籍を調ぶるに、何郡村何姓何名と記すると同じく、植物にても科、屬、種と順序を立つるのです、之を人に譬ふれば、科は町村で屬は姓で、種は名と云つて宜しいのである。所で植物の名稱（動物にても同じ）には其國々地方によりて格別に唱ふる名と、萬國共通の名とがある、此萬國共通の名が學名といふので、羅甸の語方によりて綴り、二命法とて、屬と種とを表はす事になりて居る、恰かも人の姓名を呼ぶと同じ道理である、譬へば彼の茶梅（俗に山茶花）はツンベルグ（Thunberg）氏が日本の名を其儘學名としてカメリア、サザンクワと附けた、カメリアは姓で、サザンクワは名である。所で山茶（俗に椿）は如何である、是れ茶梅とよく似たもので、確かに兄弟とする價値がある、そこで此方には、カメリア、ヤポニカとて、サザンカより前に其名が附いて居る、つまり山茶の方が兄分と云ふ樣なものである。然るに近頃、研究が進むに從ひて山茶や茶梅は、普通の茗（茶）と別家によるよりは、兄弟にした方が適當であると云ふので、山茶や茶梅、

は途に若の弟分となりまして、テア、ヤポニカ、テア、サザンクワと改姓したのでありま す。又彼の松にも種類は數多あるでせう、譬へば赤松、黑松、五葉松、偃松、姫小松、琉球松、朝鮮松、などでありますが、是等は能く似たもので兄弟分でありますから、姓即ち屬は皆ピヌスであります、處で兄弟は血緣の關係から多少似て居る如く、同ド屬の植物は一見形狀の似て居るのみならず、其組織と構造と含有物等も多少似てれる事は事實です。然らば一歩進みて黑松を喰ふ昆蟲は、緣の遠き他科の植物よりは、比較的兄弟分の赤松とか、姫小松などを喰ふものであると云ふても餘り無理な問題でもあるまい、又松の類や、杉の類や、扁柏(俗に檜)の類を合して松柏科といふ一ケ村を作るが、是も亦多少關係があるから松や梅や竹に於ける關係よりは、餘程密接のものである。此の如く申せば昆蟲の食物が植物の種類即はち緣の近きものに對して、多少の關係を有しておることは喋々を俟たぬのである、尤とも總ての昆蟲が一科一屬の植物にのみ限りて食し、其他は全く喰はぬと云ふではない、昆蟲の中には隨分緣の遠き植物を食ふものもあるが、是は外ゝ種々の關係があるからで、別問題として差支へがない。

扨昆蟲の中で、鳳蝶の兄弟ゝは、アゲハ、キアゲハ、クロアゲハ、カラスバアゲハなど丶種々ある、是等は皆パピリオ姓である、所で此處に一寸陳べて置かねばならぬ事は、鳳蝶屬のものならば、皆同じ種類の植物を食ふかと言ふに、さう云ふ譯ではない、是は兄弟の中にも、上戸もあれば下戸もあると云ふ様な事ゝ考へたら宜からう。

餘り前提が長くなつたから、是より愈本論に入りますが、アゲハの幼蟲は如何なる植物を食ふかと云ふゝ、プライヤー(Pryer)氏の日本蝶譜又は動物學雜誌の宮嶋氏の記載ゝは狗橘(俗に枳殼) 又は蜼椒(俗ゝ犬山椒) と書いてある、併し僅か此二種には限らぬので、蜜柑も食へば臭橙(俗ゝ橙)も食ふ、所で蜜柑や臭橙は枸橘ゝよく似たものであるから、如何ゝも前の理屈によく合ふが、蜼椒は如何であろう、然るに蜼椒も精しく調ぶれば、矢張緣の近きもので、蜜柑の様なものと全ドく芸香(ヘンルーダ)科の植物とは面白いではあるまいか。然るに私は蜜柑や蜼椒の如き木本でなく、全く草本のもので一見似たりとも思はれぬ芸香を採りて、饑餓の狀態ゝ陷りたるアゲハの幼蟲に與へた處が、忽ち之を喰ひ盡したのである(此時實驗の二瓶を示す)。

我等人間でも、米の飯と粟の飯とを並べて何れを採るかと云へば、先づ米飯を選ぶが通常なれども、饑へたる時は、粟飯も何のそのである、然ればアゲハの幼蟲も柑橘類に飽食したる時には、特更ヘンルーダ

等は採らぬかも知れぬが、一旦食物の欠乏を告ぐる場合には、此等の植物を食する事は確かである。又キアゲハは如何である、是もブ氏並びに宮島氏はニンジン、ウイキヨウ等の培養繖形科植物を食すと記載してある、然し是も僅か二種のみでない事は、ウイキヨウは無論、ニンジンにても餘り廣く培養せられたるものでは無いのに、キアゲハは盛に山野に飛翔するによりても推さるゝ事である、所が私は先つ各地普通と云ふべき前胡（ノダケ）や、海濱に普通なるハマバウフウを食ふ事を確めた、然るに此等の二種も、繖形科の植物と云ふ事は面白き事である。此外注意して居たならば其他の繖形科植物を喰ふ事が見出さるゝであらう、ナガサキアゲハにつきては、仔蟲、蛹等未詳にて嗜好植物の記載か缺けてあるが之もアゲハの如く矢張芸香科の植物を食ふものと見へる、私は臭橙の葉で試育した事がある（仔蟲、蛹共にアゲハに能く似て居たが但寫生圖を作らざりしが遺憾であつた）。次に蠶は御承知の如く通り、桑が常食に相違ないが、桑葉缺乏の折には楮、構の葉を給した事がある、又ハリグハも食ふとの事ですが、孰れも蕁麻（イラクサ）科の植物である、又チサも食ひ、キバナノバラモンジンも食ふとの事であるが、此二種は菊科であります。尙テントウムシダマシの如きは如何にも多種の植物を喰ふもので、松村氏の論文中には二十八種の被害植物が記載してある、然し皆双子葉植物で、結局分類すれば九科に歸するので是等も大に參考とする必要がありませう。此他同科同屬植物に對して、共通即ち同一の害蟲を有するとは、殆んど數へ盡す可からざる所であるが、此の如く昆蟲の食物と植物の種類とを調査し來る時は、害蟲驅除などの際に、餘程注意せねばならぬ事柄が生ずるのである、譬へば草綿の害蟲を全く驅除したりとて安心するも、其近傍に木槿（ムクゲ）とか、芙蓉（フヨウ）とか、同科の植物がありまして、同一の害蟲を有せる時には、是等が又侵擊に出掛くるかも知れぬ、況んや稻の如きは之に縁近き禾本科植物は、道の傍にも田の畔にも野にも山にも繁殖するものであるから、一方を追へば一方に逃れ、一方を荒らしては一方に移るなど、千變萬化の秘術を盡すやも計るべからざる事である。然れば害蟲驅除等には十分此等の關係を心得て、根本的の驅除を施行せなければ、効果を收むるの度が存外少なかろうと思はるゝ返す／＼も會員諸君が此等の點につきて、充分御心懸あらん事を希望します。

◎外國産昆蟲の化石に就て（岐阜縣昆蟲學會第四十四回例會席上演說筆記）

岐阜縣昆蟲學會名譽會員　名和　靖

此處ょ有りますのは、昆蟲の一種の化石で、是は學者研究の功勞ょよりまして己ょ早やくより知れて居る、然し化石の中でも昆蟲は極少數であつて、本邦には未だ出た事がありませぬ。昆蟲の化石は私も年來囑目してあつたが、特に昨年の春全國昆蟲展覽會を開きました折に、斯かる化石を取り寄せて陳列したき考ひがありました、併し不幸にも當時手に入れる機會がありませんので、內外の知友へ化石要望の旨を依賴して置きました。然るに福岡縣の桑名伊之助氏が、永らく米國に留學されて居た昆蟲專攻者であるが、今回歸朝に際して當所に寄贈せられましたのは、卽ち此トンボの化石であります。

此に就て化石の事を暫らく申しませうが、橫山博士の化石敎科書と申す本ょは昆蟲化石の記事が載せてある、此化石は其の書にあるヒラトンボ（ベタリア、ロンギアラタ）と同種で、侏羅紀の土層から出たもので翅張は四寸五分もあります。昆蟲の現はれたる地層は泥盆紀ょ始り、プラテフ.ユメナと申し石炭紀にはプロトフアスマ、翅ハ脈翅類ょ似て胴は直翅類に似たりと記してありますが、何れも皆前世界の昆蟲である。そこで前世界を分けまして太古代、古生代、中生代、新生代と大別しますが、此中化石となつて地層ょ表はれて居るのは何れの時代かと云ふと、太古代は火熱時代であるから、勿論化石の出來樣筈がないから、其より下りて古生代の泥盆紀頃に成りまして始めて化石となつて居るのである、とは古生物學者の說である、扨前に申しました蜻蛉の出來た侏羅紀とは、この泥盆紀よりも一層下つて、中生代と成つてから出來たものである。して見ると、此の蜻蛉は余程古い物に違ひない、今試みに此等の紀代の順次を列擧して見ますると、太古代……〔片麻岩紀、結晶片岩紀〕、中生代……〔前寒武利亞紀、寒武利亞紀、志留利亞紀、泥盆紀、石炭紀、二疊紀〕、中生代……〔三疊紀、侏羅紀、白堊紀〕、新生代……〔第三紀、第四紀〕以上が古代を分類した者である、尤も學者によりて多少命名ょ相違いあるが、大体は同じ事であるから、此成立の順序に依つて考ふれば、侏羅紀と云ふて、蜻蛉の化石が出來た時代の新古が分明るのである。

今試みに之を人類の創成時代に比較しますると、人類が此世に現はれましたのは極々近い事で、ホンの此間の事である、それから見ますると昆蟲の出來たのは餘程古いことで、初の間は皆下等の昆蟲ばかりであつたが、段々進化に進化を累ねて今日の如くょ立派に成つたのである。然るょ一方の人類の出來たのは、極めて新らしい事ではあるが、新らしいと云ふても萬年や十萬年の事では無い、幾十百萬年經つて居るが今茲に斷言は出來ないが、兎ょ角に蜻蛉などの出來た時代から推究すると實に近い事で、僅かに新生代に移つてから出來た者である、新生代と申しても第三紀には未だ出來て居らなかつたとの學說か

ふ考へて見ますると、何れ第四紀の初の頃に現はれた者と思へるが、新らしいかふと云ふた處が、遼遠として其創始時代を勘定する事が出來ない程で、學者間には、人類も最初は水棲動物の一であつたに違いがないと云ふて居る。凡て動物は發生學を研究すると、其祖先が分ることでありますが、人類發生の順序の内には、極少かな間は、腮を備へた時代がある、是は祖先が水棲であつたと云ふ確かな証據である。段々と申述べました如く、昆蟲は人類よりも餘程早くより出來たもので、遠く古生代に現はれておることを記憶せねばならぬ、昆蟲學の一端を研究する者にても、是等昆蟲化石の事を知ると、其起原も自から明瞭となりまして、一種言ふに言はれぬ愉快を感ずることであります。

◎林檎の綿蟲の驅除試驗成績(續)

山形縣北村山郡　村山榮太郎

第三、燥殺試驗　火力を以て温度を高め、以て綿蟲を驅殺し得るや否やを撿定せんとするにあり。

	取出したる當時の状況	二十四時間後の状況
漸次温度を高め華氏百十五度に達したる後五分間放置	(生存するもの凡三分の二)	(多少復活して凡半生存)
同上拾分間放置	肢脚を動かすもの凡一割	生存せるもの一割より少し
同上拾五分間放置	多少肢脚を動かすものあり	死滅せる者多きも復活せる者あり
同上二拾分間放置	死状を呈す	死滅

華氏百十五度の温度に達したる後、十五分間を經過するときは、死滅するも多少生存せるものあり、二十分に至る時は、完全に死滅せしむるを得るなり、加温燥殺にありては、漸次温度を高むるが故に、百〇五度の温度に達するときは、既に苦悶の状態を現はして活動するが故に、地上に墜落し死を免るゝもの多し、是を以て此法を行ふ塲合には、幹枝の下部に綿布を敷き、後に之を潰殺するを安全なりとす。而して果樹に對しては二十分間に至るも甚しく害を被むることなしと雖とも、新芽の部にある小葉に於ては、褐色の斑点を表はし、終葉の肉緣枯死するに至ることあり。

以上記する所の綿蟲驅除試驗は、綿蟲の寄生したる枝梢を截採し、之に就て行ひたるものなれば、實際に施行する場合には、以上の分量又は温度にては多少死滅を免るゝものなきを保すべからず、如何となれば大なる枝幹の空洞或ひは粗皮の内部等に棲息するものにありては、十分之に接觸すること能はざればなり。故に以上記する所よりは、時間分量及温度に於て多少强からしむるを要す、之れが爲め果樹に及ぼす損害は實に甚しきものにあらざるべし。（以下略す）（完）

◎享和年間の蟲名

岐阜縣加茂郡　長瀬　白

近ごろ曝涼せんとて、篋底の古書どもを取出しゝに、享保年間に出版せる一書に、數多の蟲名を收錄せしものありしかば、讀者の參考として記して昆蟲世界に寄す。想ふに百年前の邦人には、斯く少數の蟲種のみ知られしか否やは疑はしけれど、近年その如何に長足の進歩を來したるかは、斯學の現狀に照らして歷々たるものあらんなり。

螽（イナゴ）。蛄蟖（イラムシ）。蟷螂（イボシリ）。芋蠋（イモムシ）。螻蟈（ケラ）。蜂（ハチ）。促織（ハタヲリ）。螇蚸（ハタ〳〵）。飛蟻（ハアリ）。斑猫（ハンメウ）。金蠶（ニシキムシ）。螢（ホタル）。丹鳥（ホタル）。蜻蛉（トンボウ）。水蚤蟲（トビムシ）。地蟲（ヂムシ）。蝶々（テウ〳〵）。蛺々（ブウ〳〵）。叩頭蟲（ヌカツキムシ）。蚇蠖（シヤクトリムシ）。螵蛸（ヲチガフクリ）。蜻蛉（カゲロウ）。蟷螂（カマキリ）。蠶（カイコ）。蟥蚈（カブトムシ）。紺蠜（カネツケトンボ）。蠛蠓（カツボムシ）。蚱蟬（ムマセミ）。蛘（ヨネムシ）。蛄蠆（ヨネムシ）。叩頭蟲（ヨネツキムシ）。甲蟲（ヨロヒムシ）。玉蟲（タマムシ）。[illegible]（ネキリムシ）。夏蟲（ナツムシ）。蟲蛻（チユウダツ）。松蟲（マツムシ）。蠒（マユ）。繭（マユ）。螻（ケラ）。蛅蟖（ケムシ）。毛蟲（ゲムシ）。飛蝱（ブト）。金龜子（コガネムシ）。滑蟲（アブラムシ）。蜻蛉（アキツムシ）。蟻（アリ）。蟋蟀（キリギリス）。蛬（キリギリス）。螟蛉（メイレイ）。簑蟲（ミノムシ）。蜜蜂（ミツバチ）。尺蠖（シヤクトリムシ）。紙魚（シミ）。似我蜂（ジガバチ）。蜩蟬（ヒグラシセミ）。蛻（モヌケ）。蟬（セミ）。茅蜩（セミ）。蠐螬（スクモムシ）。金琵琶（スヾムシ）。月鈴兒（スズムシ）。蠁蛆（ウジ）。蚤（ノミ）。蠶（クワムシ）。轡蟲（クツワムシ）。常山蟲（クサキノムシ）。馬蜂（クマバチ）。糞蟲（クソムシ）。野蠶（ヤママユ）。

◎播摩地方の寄生蜂類に就て

兵庫縣揖保郡　大上宇一

（壹）ズイムシの黑卵蜂（Telenomus, sp?）　余が住村香島村の螟蟲卵より、過半は此が寄生を見る、又七月中旬に稲の小青蟲の卵を採置けるに、同寄生蜂は廿三日頃より出て初めたり。此寄生蜂は中川氏の本邦産昆蟲卵寄生蜂圖説第一集に詳説あり、兵庫縣に産するの記載なしと雖、山陽道にて岡山縣廣嶋縣等

に產すと云へば播摩に產するや知るべきなり。此く多くの益蟲の宿主を他の益蟲と共に、之を郡村衙に集むるか、又は保護をも加へずして徒らに燒捨つるが如きは、益蟲保護の道に協へりと云ふを得べきか而して益蟲の不保護は、誘蛾燈の功力を殺ぐと等しかるべし、蕞爾たる一縣下に十萬圓の石油と其他の費用を投じながら、一方に益蟲の保護を等閑視す、此れ何たる不注意ぞ、無學の農家は敢て尤むるに足らざ、將來當路の反省を望むのみ。道路或ひは傳へて云、誘蛾燈などを用ゐて常に無用の蟲をも多く殺す、故に其天罰として反つて多生するの嘆あらん、現に岐阜縣は害蟲驅除の本尊たる名和氏の根據地にして、五百羅漢とも稱すべき後進生は管內に星散す、而して昨年の如きは螟蟲卵百に對する一四の多きあり、是れ之を天罰と云はずして何ぞや。而して兵庫縣は未だ岐阜縣の如く多く蟲類を殺害せず、皇天至愛、此を以て螟害は平均百分の一に及ばず、然れども誘蛾燈などを濫用して罪無き蟲類を多殺すれば兵庫縣とても早晩其天罰を加へらるゝや必せりと。宇一按に、誘蛾燈の爲に害蟲を增加するの理由なし然ども益蟲をも併殺するの一事は、誘蛾燈に投したる十萬圓の價値を四五萬圓に減殺するや論なきなり而して岐阜縣の螟害の今に尙甚だしきは、或ひは兵庫縣下の如く、害蟲驅除に事よせて益蟲をも併殺せし結果にあらざるなきか、之に反して完全の驅除方を用ゐたる結果なりとせば害蟲驅除は云ふべくして其效は少しと云ふに歸せんのみ、則ち今日是認すべきものは唯ウンカの發生に對する注油驅除方歟。

(二)クロアシクサガメの卵蜂　　ホウヅキガメ(大和本草にはホウとあり)此卵を採置きしに、一の寄生蜂をも得ざりしは甚だ殘念なり、一の寄生蜂なしとすれば、茄子、酸漿、馬鈴薯、枸杞、ハダカホヽヅキ、イガホヽヅキ等を害するも亦是非もなき次第なり、中川氏の記載には何種の椿象卵に寄生すとの詳說なければ、何種の卵より出でしものなるやを知らざれど、余は六月下旬にアヲガメ蟲の卵を採り置きしに、七月十六日に至りて此寄生蜂を獲き。

(三)ウドンゲの卵蜂　　七月五日數個の卵の木葉に附したる優曇華を取置しに、七月十五日に至り一頭の寄生蜂出たり、其色類白に見へて長一厘五毛內外と思はる、此益蟲にも此害蟲あるこそ傷はしけれ。

(四)ウメケムシの卵蜂　　ウメケムシ卵塊を六月に採集したれば、今や寄生蜂の出るかと樂しみ待居りしに、七月二十日に至り始めて一蜂の出てたるものありき。

(五)キノカハテウヤドリバチ　　七月三日キノカハテウの一繭を獲たりしかば、指頭にて蛹の有無を檢せしに完蛹と覺しきものあり、尋で六日に至り一蜂出でたり、此蜂の事に就き本誌第四十八號の神村氏

の略報には六月十一日に寄生蜂出でたりとあり、然るに余のものは、氏のよりも二十日餘り遲る、是れ年と處とにより一定せざるものか。体長は五分、產卵管は一分計り、觸角長五分許り、黑色にして中央には一個の淡白あり、翅は透明にして脉は黑く、腹末には白環を有し、前脚は少しく茶色を帶び、他脚の附節は黑褐色を呈し、其他は皆黑色に、腹は基節狹長に上向し、二節目の界より曲りて後方に行けり其形細蜂科のものに似たれども、姫蜂科のものならん。按に、モンシロヒメバチの說に似て、少異ありと思はる。

（未完）

◎本邦昆蟲研究家叢話（其七）

古奥　靑蓑白笠の人

仲村惕齋

◎仲村惕齋先生の篤實　先生は京都の人なり、寬永六年二月九日を以て生れ、元祿十五年七月廿六日を以つて歿せり、壽七十四、洛外一乘寺村圓光寺に葬むる、實に二百年以前の今月の十九日となす。諸傳記に按ずるに、先生名は之欽、字を敬甫、通稱は仲二郎、幼名を七左衞門といふ。幼にして厚重、嬉戲を好まず。その句讀を鄕師に受くるや、敢て督責を煩はさゞりきと。其家世々富豪を以て稱せらる、而して先生市井の喧囂を厭ひ、居を閑地に遷して專心講學を事とせり。性篤實にして浮靡を喜ばず、又功名財利の念に淡く、嘗て盈虛を問はず、また物價を知らず、是を以て家道日に衰ふ、然かも夷然として意に介する所ろなく、日に論學談文に耽り、また埃塵のその書齋を襲ふを許さゞりきと云ふ。

先生は性理の學を以て旗幟を樹て、當時伊藤仁齋氏と其名を齊ふし、常に醇儒と稱せられ又篤行先生の名を得たり。博學精通、藝能多く、學べは卽ち通曉せざるはなく、天文地理尺度量衡の類に至るまで、皆これを究極し、最とも禮樂に審らかなりき。寬文六年年三十八、訓蒙圖彙二十卷を刊行す、其書や類を分つこと十七、品物の圖を載すること凡そ千四百餘、天象地儀より昆蟲魚介に至るまで、悉く圖說となし、和漢名を對譯し、これに簡古の解說を附せり。時に元和偃武の後を承け、文物漸やく隆昌に趨むき、諸人物名を識らんとするの際なりしかば之を讀む者後先を爭そひ、爲めに洛陽の紙價を貴とからしめぬ。然れば未だ

數年ならざるに初版全滅し、元祿八年增補頭書の再版を發行するに至りぬ、以て其書の價値如何を知る可きなり。先生の訓蒙圖彙ょ後るゝこと四十六年にして、寺島良安氏の和漢三才圖繪成る、中に其解說と挿圖を併せて圖彙を轉載するもの頗ぶる多し、而して世人ろの前後を稽へず、圖彙を以て圖繪を剽竊すとなせり、笑ふべきの至りならずや。

先生頗る力を著述ょ致し終身探筆を事とす、其選述する所五十有餘部の多きに上り、二百五十年後の今日に至るも、重視せらるゝもの亦少なからず、特ょ詩經集傳、詩經示蒙句解等は、以て昆蟲研究の參考に資するに足る。蓋し先生は儒學を以て身を立つ、故に其記述する所ろ深く本草に涉らすと雖ども、若し當時儒醫を業とせしめなば、恐らくは稻生氏を待たずして、物產學を創始せしやも未だ知る可からざるものあり。或ひは云ふ、先生の博物學の智識は之を貝原益軒氏に得、後講說して阿波侯の儒官となれりと、說の眞僞はこれを判定し難きも、兩者の年齒殆んど相同ドかりしを以て察すれば、また此事無きを保せざる可し。其行狀記の小照に題するの詩にいふ、利名雙字胡爲者、億萬民生倶策驅、耆耋弃材懜世計、考槃林曲永言娛、と此一首以て先生の略傳に代ふべきあり。

按ずるに。訓蒙圖彙には四版ありて、其刊行は寬文六年より寬政元年に至るの間にあり、何れも圖樣は鮮明にして、概むね寫生に係り、且つ初版のものには皆彩色を施せり。就中昆蟲は其解譯共に妥當にして錯誤の少なきを覺ふ、挿圖また準據する所ろ正確にて都て五十三種を出せり、寬文の著書さしては寔に敬服すべし。又云ふ此書を原書さして著述せしは、唯り和漢三才圖繪に止らで、なほ萬物繪本大全調法記の如きも、天象人物鳥獸より器用草木蟲魚の圖に至るまで、盡ごさく之を轉寫せしなりさ、是は田中芳男先生の說なり。

◎土佐產の蟲報 (第五)

高知縣土佐郡　武内護文

○直翅類、蟋蟀科　(一)コホロギ。(二)マツムシ。(三)スヾムシ。(四)ミツカドコホロギ。(五)エンマコホロギ。(六)ケラ。此中に(一)(五)(六)は最とも普通ょゑて(四)は稍少きが如し(二)(三)は山野

ょ多し。其他小形種にして、後翅の退化せるもの等猶は他ょ種類多し、就中最とも有害あるは(五)及び(十六)にして(五)は秋期播種せる稚苗を害すること甚しく（此事實は昨年三十四年十月土佐郡旭村ょ赴て實査したる所なり、同地は郡内畑作の頗る進歩せる所なり、其他の各地に於ては未だ充分に其害を認知せるを聞かず）時としては、蕃菽實の熟せるものを食し、少しも其の劇辛を感せざるが如きとあり(十六)は春期ょ於て茄子の種苗を害すること甚しく(前同地に於て最とも其害を認む)稻其他の作物皆多少の害を被るど雖ども、未だ全縣普ねく害蟲として認めらるゝに至らず。幼蟲成蟲共ょ越冬し、其交尾産卵は春秋の兩期に於てするあくべく、早春晩秋多く其鳴聲を聞く。

○螽斯科　(一)カマドウマ。(二)クビキリバツタ。(三)サヽキリ。(四)ヒメサヽキリ。(五)ヒゲナガサヽキリ。(六)クツワムシ。(七)クダマキモドキ。(八)ツユムシ。(九)ウマオヒムシ。(十)ヤブキリ。(十一)キリギリス。此十一種中(一)は最とも普通なり、其一種にて山林幽陰の地ょ産するものは、稍大形にして暗褐なり(三)は稍小なく(十)は北方の山中に産するのみ。其の他は皆普通ょ之を産す(二)(四)(五)(六)(十一)は綠色褐色の兩種殆んど相半して之を産し、或は稀ょ兩種の間種を見る、殊に(十一)ょ於て然りとなす。就中(二)は最とも米麥ょ有害ょして、稻の如きは田面到る處に半傷の白穗を生ずるとあり、近時は浮塵子、螟蟲の聲ょ壓せられて、農家ょ其害を唱ふるものあるを聞かずと雖ども、古老の語る所を聞けば、昔時は懸賞を以て之を驅除するの巳を得ざりしと屢々ありきと云ふ。(四)(五)は主ょ野生の禾本科植物ょ發生すと雖ども、山間の稻田には屢々群を爲して來襲せるを見る、未だ農家の其害を認むるに至るを聞かずと雖ども、亦加害の少からざるを知るべきなり。

○稻螽科　(一)ノミバツタ。(二)ツチバツタ。(三)ハチナガバツタ。(四)ヒナバツタ。(五)ヒメバツタ。(六)ヒメバツタモドキ。(七)カハラバツタ。(八)クルマバツタ。(九)クルマバツタモドキ。(十)ダイミヤウバツタ。(十一)シヤウリヤウバツタ。(十二)オンブバツタ。(十三)ツチイナゴ。(十四)イナゴ(十五)コバチイナゴ。(十六)アシベニイナゴ。此十六種中(一)(三)(五)(六)は其産稍少なく(七)は河畔或は海濱に産し、其他は草原土上等其棲地を異にするも到る處ょ之れを産するを見る(八)(九)は綠、褐兩種相半し、其斑紋は綠、褐の交錯の狀種々あり(十)は全躰褐色なるもの及び褐色を交ゆるもの共ょ之を産し(十一)は綠色多きを占むるも、産地に因りては褐色種少なからざるを見る、而して往々褐綠の相交はるもの之を産す、最とも美麗あり(十二)は主ょ綠色なるも、稀に褐色種を産し（褐色種は必ず紫色

を帶ぶるが如し）（十四）（十五）は褐、綠相半ばし、又兩色相交るもの多し、其他海濱に產するものにして、体形（十六）に酷似し、其色灰白にして海砂に擬似するものあり、高山に多く產して、其色暗紫褐色にて其形（四）に似て稍大なるものあり、山林の低樹に多く、体軀圓筒形にして、深綠色に、後翅は退失し前翅微小なるものもあり、又其の酷似して形小に、兩翅稍發達し、尾端大にして上方に彎曲し、工石山上に多く產するものあり。以上十數種中（十）は稻穗を害し（十三）は麥穗を害す、而して（十四）及び（十五）に至ては其害最とも甚だしく、又屢々繭を害す、未だ農家の其驅除を叫ぶものあるを聞かずと雖ども、他年其唯り米作に止めず、花莚製造業上大に農家を困むる時あるを慮らざるべからざるなり。此科の昆蟲は概して卵子を以て越年すと雖ども、獨り（十三）に至ては成蟲の越冬するもの少からず、翌春出て麥作を害するものは即ち越冬せる成蟲とす。

○竹節蟲科　（一）ナヽフシ。（二）トゲナヽフシ。二種共に之を產すと雖ども、其數多からず、トビナヽフシに至ては全縣下絕て之を產するを見ず。

○螳螂科　（一）ハラビロカマキリ。（二）カマキリ。（三）オホカマキリ。（四）コカマキリ。此中（一）は普通にして桑園稻田に最とも有益なり（二）は之れに比して產數多からず（三）（四）は共に山林に多し、唯ヒメカマキリは未だ之を捕獲せず。

茲にコカマキリとするもの、中、土佐に產する褐色種は稀に淡色のものあれども、多くは皆濃褐色なり、而して其前翅は質薄く前肢の腿節裏に斑點あり、体長一寸六分內外、綠色種は体長雄は一寸七分許、雌は二寸を越ゆるを普通とす、前翅質薄く前肢の腿節裏に斑紋あるは前者に同じきも、雄の翅緣に黃赤條あり、コカマキリとは即ち此兩者を云ふか、記して江湖に質す。

（一）は絕て褐色種あるを見ず（二）は往々鮮褐色のものを產し（三）も亦褐色種少からず、而して（一）に比して稍濃色なるものあり。

○蜚蠊科　（一）コキブリ。（二）チヤバネアブラムシ。（三）オホアブラムシ。此中（一）（二）は最とも普通にして（三）は山中に產するも其數多きを見ず。一種山中及び海濱の沙上に產して形色（二）に酷似するも、其幼蟲と成蟲の少異あるものあり。

○蠼螋科　（一）ハサミムシ。（二）ヒゲシロハサミムシ。（三）オホハサミムシ。此科の昆蟲は餘り多種を產するを見ず（一）（二）は最とも普通にして（三）は稍少し。一種鋏尾の（三）に似て全体小に、外海波際の砂中に住するものあり（余昨夏桂濱に海濱產の昆蟲採集を試みし時、波際の砂中海水の濕す處に於て

該蟲屢々出で、余の脚肉に咬み付きたり）海生の動物を食せるものあるべし、其中（二）の幼蟲の屢々螟蟲孔内に穿入せるを目撃せり。

直翅類附報　俗にコホロギをコロオンボといひ、其鳴聲を「テ、イトシカ、ニク」と叫ぶと稱す、父は愛さし母は憎むべしとの義なり、古來俚言に蟋蟀の雄其雌に命して、兒に暖衣を給せしめしに、雌は怠りて之を與へず、兒は短褐にして凍寒に堪へず母を恨て叫ぶと傳ふるによる、想ふに何等かの寓意あるべし。マツムシはチンチロリと稱し、スヾムシと共に頗る其鳴聲を賞せらる。エンマコホロギをばサルコロと稱す、其面稍猿に似たるを以てなり。ケラの鳴聲を知る者は多からざるが如し、俗に或はミヽズの美聲を放つと云ふはこれを指すなるべし。エビゴホロギをカマコ、クビキリバッタをアカクチ、クツワムシをクダマキ、ウマオヒムシをツンヤキリギリスをキリスと稱す。就中キリギリスも亦其鳴聲を愛せられ、稍や市價を有す。バッタ類はハタトサと稱しクルマバッタ、ダイミヤウバッタは共にヤマバタトサと稱せられ、シヤウリヤウバッタをハタオリギリスと呼ぶ。カマキリ類をカマタテ或はイボウジと稱し、ハサミムシ類はシリワレムシと稱す。ゴキブリはゴセムシ、チヤバチアブラムシはアブラムシと稱せらる。竹節蟲科以下の蟲は、概して人の忌所、其以上の諸科は概して人の愛する所、全目一として有毒と認めらるゝなしと雖も、イナゴの成蟲を食用となすことは全縣絶て之を聞かず、唯家禽に與ふるの好飼料となすのみ。

（完）

◎奈良縣北葛城郡の螟卵採摘

第拾壹回全國害蟲驅除講習會修業生　奈良縣　森井楢次郎

當郡内各町村は到る處螟蛾の發生甚だしきを以て、豫て各町村役場へ蛾の捕殺及び苗代田採卵方を奬勵せしに、六月中旬に至り殊に著しく螟蛾の飛行を認めして以て、六月廿日臨時に各小學校長及び町村役場勸業主任を當郡衙に召集し、先に王寺村役場にて採卵して保護器に入れ置ける四万餘塊を示し、次に寄生蜂の寄生と之が保護の必要とを説き、併せて卵塊の買上に付左記の事項を協定し、廿一日より小學校兒童をして採卵せしめ、なほ郡衙よりは六名の吏員を各方面に派して督勵せしめたる結果左表の如く約七十六萬塊を採收せり。

一、苗代害蟲全滅を期せんが爲、左の方法に依り、六月廿三日迄に害蟲驅除厳行せしむること。（一）注油驅除法は苗代田壹畝歩に付石油壹合乃至壹合五勺の割合を以て灌注し、石油の散布したるを俟て、苗葉に附着せる害蟲を掃ひ落すこと。（二）螟蟲採卵を勵行するに、左の方法を執ること。（イ）町村役場又は町村農會をして、螟蟲採卵買上けを爲さしむること。（ロ）町村役場又は町村農會に於ける買上け費額は、貳拾圓を降らざること。（ハ）卵塊買上代金は拾塊五厘とすること。（ニ）毎日買上け數の日計表を製すること。（ホ）小學兒童をして採取せしむること。（ヘ）採取したる卵塊は、必ず益蟲保護器に入れ置くこと。

一、監督方法　町村吏員は各大字を巡視監督し、大字總代は、苗代田に就き驅除の良否を査察すること。

町村名	卵塊採取數	買上金額	町村名	卵塊採取數	買上金額	町村名	卵塊採取數	買上金額
高田町	六五五九	三二八〇	新庄村	二七五八七	一三七九四	浮孔村	七〇〇	三五〇
磐城村	二八八三一	一四四一六	當麻村	一四九〇〇	七四五〇	二上村	四一九〇〇	二〇九五〇
下田村	一四五二〇	七二六〇	五位堂村	二二二四三	一一一二二	陵西村	一三九七	六九九
磐國村	一二〇〇〇	六〇〇〇	土庫松塚組合村	一七三〇七	八六五四	上牧村	二三七一八	一一八五九
志都美村	三八八三二五	一九四一六三	王寺村	七七四九五	三八七四八	河合村	一七四〇〇	八七〇〇
箸尾村	一五五四	七七七	馬見村	五七一三	二八五六	瀨南村	九九六	四九八
百濟村	五六八五二	二八四二六	合計	七五九九九七	三八〇五〇二			

◎三重縣農會の建議

第八回全國害蟲驅除講習修業生　三重縣　西岡嘉十郎

三重縣農會にては、縣下の害蟲驅除に鑑みる所あり、曩に通常總會の際、種々決議する所ありしが、七月廿九日附を以て、古莊縣農會長より、左の建議書を縣知事に提出したり。

巡査教習所教科中に害益蟲の事項を加ふるに關し建議

害蟲の發生は頻年夥多しく、殊に稻田に於ける螟蟲浮塵子の如き其被害甚しきものとす、本會は茲に鑑み、先づ苗代を短冊形に改良せんと欲して、曩に縣令の發布を申請したるに、幸に採容せられ、普く實施の運びに至れりと雖も、害蟲の驅除豫防に對しては、當業者の觀念今に冷淡にして、充分の效果を收むる能はざるは深く遺憾とする所なり、若し夫れ斯の如くにして經過せんか、年々歲々同一轍に出で、啻に作物をして完全なる發育をなさしむること能はざるのみならず、之れが驅除豫防に要する費用と、被害の損失は實に幾何なるやを知らざるに至る可し、今や緩慢なる手段に委す可き時にあらざるを以て、其設備の一として本縣巡査教習所教科中に害益蟲の事項を加へ、町村駐在警察吏をして、害蟲驅除豫防の監督及益蟲の繁殖保護をなさしむるは、奏効最も顯著なるものと認む、依て明治三十六年度より敢て此擧に出でられんことを、右本會總會の決議により謹んで建議候也。

◎鹿兒島縣の害蟲驅防訓示

在鹿兒島縣農學校　杉原正助

七月十五日を以て鹿兒島縣廳內務部は、別記の如き訓令を發し、各郡市長に對つて其實行を促せり、中に他に多く見ざる條項もあれば、念の爲め貴誌に報ず。

一、郡農事巡回教師、市村農事教授人、郡市村吏をして、此の際郡內を巡視せしめ、若し害蟲の發生を

認むる時は、必要に應じ命令を發して作人の驅除豫防を行はしむること。
一、驅除豫防の命令を發したる時は、直に其の旨を報告し、尙は區長世話人其他郡市村吏をして、充分の監督を爲さしむること。
一、驅除に要する油類は、市村農會に於て商店と特約し、成る可く共同購入の方法を取らしむること。
一、命令違背者に對しては、充分强硬の体度を以て處分する方針を取らしむること。
一、本田に於ける螟卵螟蛾の買上は、苗代時期と等しく、螟蟲驅除の最良法なるを以て、充分是れが普及を奬勵すること。
一、螟卵採取の兒童に適當せるは勿論なりと雖も、本田の塲合に於ては苗代と異なり、幼苗を踏壓し紛議を引起すの患あるを以て、兒童に之を行わしむる塲合は、成る可く自家作田に於て採卵せしむること。
一、注油量は幼蟲(粉糖の如き)時代なれば、壹反步七合乃至壹升内外、稍成長したる時代は、壹升乃至貳升、成蟲多數を混ずる時代は貳升乃至貳升五合、以上の量を誤らず、竹筒若しくは代用器具を使用せしめ、手指にて行なわしめざる樣注意すること。
一、害蟲驅除豫防の命令を發したる塲合には、傳達を充分普及せしむること。

◎播磨明石郡伊川谷村の採卵報告

兵庫縣明石郡　井上藤太郎

拜啓仕候、當地も縣令發布以來、大に害蟲驅除豫防の念加はり、苗代期の害蟲驅除を勵行し、猶又本田の驅除に盡力し、螟卵螟蛾の採取を行なひ、豫防に於ては先づ好結果の有樣に御座候、其中本村内に於て採取したる螟卵數は、田反別五百九十町步に對し、第一回の採取數は二十二万四千三百八十個にして、一卵塊一厘宛に買收致候、然して第二回は大に減少し、同上の面積より五万四千八百十七個なりしが、是は村費の都合に依り、一塊三毛宛に買收致候、其後猶引續き第三回採收を本月十二、十三兩日に擧行致すことに決定仕候、而して採取者は各耕作者をして之に從事せしめ候のみにて、未だ學校生徒を利用するの時期に至らず候、先は右御報に及候。(七月十一日附)

◎昆蟲月報　(第三信)

第八回全國害蟲驅除講習修業生　埼玉縣　櫻井倚畊

五月　此月の一日に柳の樹液にて、上翅に縦條点列多く黃褐色の四紋を印せる扁平なる甲蟲の交尾せ

るを捕ひ、夜間は洋燈に飛び來れるホウグロテフの一種を獲たり、此日またアカタテハ、ルリタテハを目撃せり。二日サナエトンボ、ギンヤンマ、オホミヅアヲテフとを獲たり、此日前秋より貯存せる二化生螟蟲の化蛹せんとて、ランプホヤの口布を嚙切り逸失したるもの多し。三日一林中にてシリボソムシヒキアブ、ジャカウアゲハ、ハナムグリ、ハナカミキリ、センチコガチ、シロホシコアカテントウムシ等を獲き、此日に前年採集し置きたる烏燭の蛹一頭より、七十四頭の寄生蜂を發生す、春蟬始めて啼き夜に入りて蚊聲高し。四日カハトンボ俄かに多生す、此日瓢蟲の罎中に入れ置きしものより六十四卵を産下したり。六日ウマバイ、トラフトンボ、ハクロトンボを獲、また前秋採集せしオホカマキリの一卵塊より寄生蜂三十七頭を發生せり。七日始めてキマダラテフを獲。十日トラフトンボ多數を捕ひ桑園にてはベニスゞメの雌雄を獲たり。此上旬には各種の蜻蛉多く發生し、欅樹の葉には寄生の蟲癭夥だしく特に小木は全葉簇生して花蕾の果實の如し、苹果の綿蚜蟲及び蕓薹の白蚜蟲の蕃殖多く隨て之に寄食する瓢蟲と其幼蟲亦多かり。十七日ハラビロトンボを獲。十八日前年九月採集し置けるアヲスヂアゲハの蛹五頭羽化し、又栗毛蟲蛹よりオホキスヂヒメバチ二頭發生せり。二十日アシブトハナアブの一變種を獲たり。此中旬は寒冷曇雨多く、十二日大雨且寒冷を感し翌朝濃霧霽るゝや四周の諸山白雪皚々として寒中も猶ほ及ばず、果然當地方一帶に降霜ありき。廿一日ヒメドロバチ羽化す。廿二日トックリバチ羽化す、此日始めて螟蟲蛾を見る、またコアヲムシ蛾の苗代田に潜伏するをも見き。廿三日また前年取置ける蠋蛹羽化し、同時に林檎の芽蟲蛹も羽化したり。廿四日赤楊樹の液汁にてベニスヂカミキリ二番ひを獲たり。廿五日始めて麥蛾の青圃に飛翔して黃昏產卵するを見たり、螢始て飛び、金龜子の夜間飛翔するもの多し。二十七日シリアゲムシ濕林中に多數發生す。二十八日オホカマキリ發生す。此下旬も中旬に引續きて曇雨冷濕にして蟲類の出現少なかりき、然れとも瓜守及び穀象（方言ホリ）の盛んに飛翔せるを認めき。

◎小學生徒の螟卵採取數

第十二回全國害蟲驅除講習會修業生　廣嶋縣　井口廣助

吾が蘆品郡服部村に於ても螟卵採取を試みんものをと、過日小學校に臨みて先づ螟卵を實撿せしめ、次で採取に着手したるに可なりの成績を收めり。本村内には五校あるも、其中二校は里餘の遠地にて、病軀の往還に堪へざりしかば、先づ三校のみに之が實施を促がしゝ次第なるが、其概要は左の如し。

○第一尋常小學校　七月一日退校後に總數十四名に隨意採卵せしむ、其結果百八十塊を收めり。
○第二尋常小學校　七月三日四日の兩日、退校後三四年生二十名をして各一時間採卵を試ろましむ、其結果二百四十八塊を收めり。
○第五尋常小學校　七月三日より六日まで四日間退校後隨意に三四年生十二名に採卵をなさしむ、其結果千五百七十八塊を收めり。
（備考）　第一校には總數百名計り、第二校には九十名計り、第五校には三十餘名の生徒ありて、村内總數三百名の生徒を有す。
右の成績によりて判ずる時は、螟蟲驅除は小學生徒を利用するを以て上策と思量す、依て其顛末を郡長に報告し且實物をも回覽に供したり、唯不慣のため螟卵を誤りて他の有益蟲類の繭卵を採取するの憂ひあれども、是は初めより望み得べからざる事に屬せり、就ても益々斯學思想を普及するの必要を感ぜり。

◎愛知縣寶飯郡昆蟲學講習會景況報

愛知縣寶飯郡　田中周平

吾が寶飯郡にては實業教育の普及發達を圖らんとて郡下の小學教員及有志を召集して、去月十九日より五日間、郡內豊川町妙嚴寺內に昆蟲學講習會を開きたり、講師としては幸ひに名和昆蟲研究所長名和靖氏來臨せられしかば、嘗て同所開催の講習を修了せる小學教員十九名を會幹となし、其中三名を幹事長として會場の管理を委托せり、然るに開會當日より日日曇雨勝に加へて、午前八時よりの授業なれば、遠路通學の者には不便此上も無かりしょ、聽講者は每日百六十名より百九十二名の間ょ上り、斯かる險惡の天候と、七時間といへる長時の講習に堪へ得て教員百三十六名、實業者三十一名、計百六十七名の講習生は首尾克修業證書を得たり。斯くて證書授與式の終ふるや、一同は托枳尼天本殿前ょ於て紀念の撮影をなし、後名和講師の指名を以て都合十六名の會員は短時間演說を試み、各その所思を述べて散會したるが、有益の事ども頗ぶる多かりき。扨開會中は、中山郡長を始め竹內郡視學、島田平松書記等の盡力にて何事も無く極めて圓滿の結果を得たるが、本會の開設によりて將來一郡ょ利する所二三に止まらざる可しと信ず、そは左の講習生總代の答辭に徵するも其一端を伺ふに足るものあらん。

如今の急務は富國にあり、富國ならんと欲せば國民をして實業を貴ぶの心を養成せざるべからず、本郡從來講習會を開くや、其學科十餘種ありと雖、未だ甞て昆蟲學の如き最も實業に適切にして趣味ある學科の講習會を開きたることなし。今茲郡費を以て暑氣の候に際し、昆蟲學講習會を豊川町妙嚴寺參籠堂に開く、講師名和先生には此炎暑を侵され遠路をも辭せず、斯道の爲め熱心懇到なる教示を垂れらる、曰く天工の微妙、曰く迷信の打破、曰く道德の美談、曰く共同棲息生存競爭等、特に小學の兒童に興味ある好材料と實業家に裨益ある事實談とを訓諭せらる、其高恩敬して深謝する所なり、又郡長閣下には親しく來臨を辱ふし懇篤の言辭を賜はる本

會員の光榮とする所なり、玆に恭しく數言を陳して答辭となす。

明治卅五年七月廿三日　　寶飯郡昆虫學講習生總代　加藤式太郎

◎昆虫に關する葉書通信（第二十五報）

（一三一）害蟲發生短報（岐阜縣益田郡、松下千吉）　目下本郡内には二化生螟蟲、一文字弄花蝶、稲螟蛉等各處に發生せしにより、驅除中なり。（八月五日附）

（一三二）昆蟲展覽會等の開設（岩手縣和賀郡、菊池明八）　昨秋本郡に開きたる第一回昆蟲展覽會の有益なるを認め、郡費の補助を得て近々その第二回を開設せんとす。又本郡農友會員は、八月十一日より十日間、佐々木忠次郎氏を招聘して蠶業其他の害蟲談を聽かんが爲め、講習會を開く計畫なり。

（一三三）螢狩の童謠（東京府南足立郡、武者良三）　毎度各地の螢謠を拜見して、面白く感入りたれば此度は當淵江村地方のものを報道して、同好の一笑に供し申さん。

一、ホータル、來へ〻〻、しの來へ來へ、しのがみ持ッて來へ、やいてやる。

二、ホータルどんの、嫁取りは、油もいらず、ちョちんも要らず、唯ぴッかりぴッかりと、來るばかり。

（一三四）三化生螟蟲の發生（山口縣大島郡、孤島生）　當郡の西部各村にては、近年三化生螟蟲發生し年々加害の度を高めたり、依て當春苗代田に於て之が驅防法を嚴行せしも、今や本田に第二期の螟蛾を現出し、稲葉の裏に産卵中なり。斯れば第二回の驅除を行ふに先だち第二勸業區を擔任せる郡農事巡廻教師財滿字市氏は、區内を巡視して其習性經過より扨は被害額の一班を講話せしに、聽衆は皆驅除の必要を感じ、目下採卵捕蛾に從事し居れり。（八月五日附）

（一三五）本年春來の害蟲（岩手縣千厩町、伊藤丑次郎）　春來尺蠖、稲蝨、横蛺蟲等は少なきも、螟蟲桑毛蟲、栗毛蟲等は頗ぶる多し、次で七月廿五日頃よりは方言カユガリと稱する毒蛾夥たゞしく發生し其毒に罹るもの甚はだ多きより、郡衙にては各町村に命じて驅除せしめたり、當町また廿九日より毎夜戸毎に篝火を燃燒して之を誘殺せしに、四邊より飛來のもの幾千萬なるを知らざる程なりき、燈火は雌蛾に効力少しと聞けるに、該蛾に對しては其然らざる事を確めたり。

（一三六）二化生螟卵に就き（飛騨國吉城郡、中川藤助）　昆蟲世界第五十九號雜報欄内に、螟卵の變則

的産下の實驗談ありしが、余が去七月八日に採集調査の結果に依れば、都合九十八塊中に葉面のものは八十三塊にて、裏面のものは十五塊ありき。

（一三七）螢狩の童謠（青森縣青森市、狂蟲生）　螢狩の童謠は其地方によりて異あり、之を玩味すれば中々に脫俗無邪の境に入るを覺ふ、今青森市のものと、秋田市のものとを報道せん。

螢こへ、山みち來へ、あんど（行燈）の光りで、又來への來へ。（青森市のもの）

螢來へ、山みち來へ、あんどの光りで、復た來へ來へ。（秋田市のもの）

（一三八）茶毛蟲の驅除法（岐阜縣加茂郡、水野牛之介）　先年本郡西白川村の茶園に茶毛蟲多生加害せし事あり、其際如何にして之を驅除せしやと、園主今井英造氏に質したるに、葉裏の卵塊より幼蟲孵化して、未だ散亂せざる頃、石油を毛筆に浸し、群集し居る高處に塗抹せしに、忽ち驅殺の効を奏しきと、聞が儘を記して葉書集の材料となす。

（一三九）昆蟲講話會と決議事項（三重縣阿山郡、西岡嘉十郎）　去月廿七日前九時より、阿山郡與農會第三回總會を郡內上野町旭座に開會せしに、會長川田茂通氏の興利除害併行論てふ害蟲驅除に關する演說、會員仁保清作、山村寅之助兩氏の蠶業談幷びに小生の昆蟲雜話等なりしが、同日の議題たる害蟲驅防の件及び害蟲の發生經過調查の件は、滿場一致を以て可決せりき。

（一四〇）害蟲驅除の符札（千葉縣東葛飾郡、東勇）　小生の住處鎌ヶ谷村より一里許距りたる中山村にては、本年の螟害に苦しみ、中央に『諸惡蟲蜚交摸馳走』の八字を、四方に『大日天玉、鬼鬼』と書したる小紙札を細竹に挾みて滿村これを田面に立てたり、概見する所ろ一反歩に凡ろ十枚位ゐづゝはあるべし斯かる符札にて眞に被害を免がるゝ事を得ば、豈に低價に且つ輕便の驅防法にあらざや。

（一四一）害蟲發生の一班（岐阜縣山縣郡、篠田五郎）　本年は到處螟害劇甚にて、吾が保戶島村の如き小村も猶ほ苗代田以來本田移植後（七月十一日迄）迄二回の採卵に十萬塊以上を採取したるより、努めて之が驅除を行へしも、連旬の降雨は動作の自由を缺き、遂に株每に二三莖の被害稻を生ずるに至り、甚はだしきは全株枯稿に垂んたるも之あり、而して被害莖には先づ二三頭位の幼蟲潛居し追々蕃殖の姿あり、先に岐阜縣農會は挿秧早きに過ぐれば蟲害多き理由如何との懸賞問題を出したるを以て、之を實地に試驗し若し蟲害多ければ、傍らより驅滅せんとの心算にて、本年自作田三反步に早植（六月十六日よ

り植ゆ、普通よりは一週間早し）をなし三日間に終了せしに、前述の蟲害に加ふるにイモチ病をも發生したれば、目今專はら驅除に從事し居れり、何れ結果を見て再報すべし。（八月二日附）

雜報

●昆蟲月令（第八月）

此月に配すべき昆蟲記事は、概むね下に列擧するが如し。

○氣候　舊暦七月の節に當り、月初の晝間は夜間よりも約四時間長きも、月末に至れば三時間に足らず●八日より立秋にて、廿四日より處暑に入り、往々殘熱の酷烈に苦しむことあり●內地の平均溫度は、攝氏の廿八度乃至卅二度の間にて、其最高の日は卅二度強を示すことあるべし、即はち年內最熱の日多きは此月に在り、隨ひて猛雨大雷また多きを例となす●東京にては平均廿六度未滿なるも、京都は廿六度強に居る●濕熱の氣ますく〳〵甚はだしきを加ひ、地方によりては、濕度雨量共に前月に越ゆ。

○蟲類　稻螟蟲の第二回發生あるも、最早稻株蕃茂して採卵に不便を感ずべければ、其心枯穗白穗を切取るべし、是は一回に止まらず共同して數回行ふを利とす●藍螟蟲また多く加害するを以て、被害莖を摘採し、之を肥料桶等に投入して蒸殺すべし●本田にヨコバヒと泥負蟲等漸やく多からん、其驅防法は前月既述の項を斟酌實施すべし●稻青蟲多生せば、ヨコバヒ驅除用に同量の石油と米糠四升位ゐとを田面に散布し、箒にて掃落したる後處分すべし●稻に結葉蟲生せば、其成蟲たる一文字弄花蝶を捕殺するは勿論、大畑潰殺器の類にて迅速驅除を行ふへし●果樹園に金龜子その他の害蟲集合加害すべし、咽喉附方形捕蟲網若くはブリキ製の輕便器を以て捕殺するを要す、夜間は燈火にて誘殺するも可なり、但し蜂類は小害ありとも、濫りに戮殺すべからず●蔬園と森林にも被害多きを加へん、一時の偷安に時機を失すべからず●衛生上の害蟲の蕃殖は勿論、衣魚、米牛等の書籍、衣類、貯穀を害するもの亦其度を高むべし、此等は肥料の害蟲とゝもに換氣法、燻烟法を以て驅除すべし●蠅類多生せば、便處幷びに其周邊に油類を注下して、蕃殖を妨ぐるも可ならん●昆蟲採集者は努めて夏季の品種、即はち蛾類、和斑猫等の如き甲蟲類及び寄生蟲類を蒐

♂

アシナガバチの圖

收すべし、又蒿蓼多き地方なりせば、絶えず注意して聚合の種類を網羅すべし、蓋し意外の珍種あらん●蝶類の奇品も亦到處に飛行すべし、姫白蝶の如きは其一例なり●蟬類、蜻蛉、螽類を比較研究せんと欲せば此月のものより重きを置き、其生殖作用を始め、各方面に就て觀察を下すへし●桑害蟲其他諸種の卵蛹を採集して、試育をなさんとせば、是亦速やかに其手續を盡さゞる可からず●其他は前月の記事を參照して適宜處分するを要す。

○舊説　生冷のものを食へば瘧をうれひ、舊暦七月七日に素麵を食へば之を患へずとなせり●禮記の月令立秋の三候に寒蟬鳴くとあり●此月の央に、俗家にては盂蘭盆會を營なみ、迎火を燃きて死者の冥福を祈るの風あり、是れ間接には蟲類誘殺の功あれば、強ゐて廢止せしむべからず。

○雜事　秋後蟲害の爲めに收穫皆無となるは、皆此月より始まる、古來大蟲害と稱するものにて、此月に加害せられざるは殆んど稀なり、假ひ完全の驅除は春夏の間にありとは云へ、またその勤怠如何によりて不少の損得を來たす可ければ、夢輕忽に附す可からず●快晴の日をはかりて、必らず室内の掃除を行なひ、又曝涼を行ふへし●昆蟲標本の損ずるは此月までの間なれば、時々の手入を忘るべからず●除草の際には、その田畠庭園を問はず、總て除蟲の念を失却すべからず。

●昆蟲講習會と汽車賃の割引

別項(通信欄)記載の如く、愛知縣三河國寶飯郡にては、去月十九日より五日間、名和當昆蟲研究所長を講師に依賴して昆蟲講習會を開きたるが、其際特に感心せしは豐川鐵道會社發行の乘車割引劵にて、前後六日間は通學の講習員に限り、乘車賃の四割減となせしことありき、是は些事に似たるも、著るしく人心を奮勵せしめ、延て郡縣の利益を擧ぐるに至るものなれば、將來他の會社にても成るべく便益を與ふるやう望まほし。

(豐川鐵道割引乘車劵)

乘車人氏名
寶飯郡昆蟲學講習會々員乘車証
自七月十九日至七月廿四日 六日間四割引
區間 自至　級　等
此証ば切符購求の際賃金と共に係員に渡さるべし
氏名區間等級は鉛筆にて記入を許さす

●●●●●●●●
蟲合せ答案の披露(五)

前號に次ぎ披露すべきは左の答案なり、これにて完結と知るべし。

(優等)　◎蟲合せ答案(第八)　岩手縣氣仙郡小友村　鳥羽源藏氏　選

{大黑コガネ / 福俵バチ　{イチモンジテフ / フタチテフ　{ミスヂテフ / ヨツボシカミキリ　{五倍子 / 六ツテンヨコバイ　{七星テントウムシ / 八の字チキリ　{九ホシテントウムシ / 十字ガメムシ　{白髮太郎 / ヒゲナガバヘ

{ハリガメムシ / ハサミムシ　{アリ地獄 / エンマコホロギ　{鐵砲ムシ / 矢ハズカミキリ　{エゾシロテフ / タイワンバツタ　{コガチムシ / タマムシ　{アシナガバチ / クビナガバチ　{ヤマキテフ / ツミグモ　{コクヌスト / ナワメカゲラフ

アシブトバチ／ホソバ子セヽリ　カラスアゲハ／スヾメバチ　ベニナガシ／スミナガシ　猫アシ／子ズミノミ　カヮグモ／ハマベトビムシ　シロアリ／クロコガ子　コナジラミ／ダンゴバチ　カブトムシ／ヂンガサムシ

人參蟲／薄荷ハムシ　アミガサハゴロモ／ミノムシ　クマバチ／トラカミキリ　ドロコムシ／ツチハンメウ　コフキコガ子／アヮフキヨコバイ　ハラビロトンボ／コシボソバチ　砂カキバチ／石アブ　家アリ／ヤドリバイ

ミヅスマシ／ノミ　クビキリバッタ／ナキイナゴ　クモガタヘウモン／イナヅマヨコバイ　鎌キリ／鍬ガタムシ　車バッタ／ムシ引アブ　タイコウチ／オドリコテフ　殿樣バッタ／姬ギフテフ　風船蟲／ブランコケムシ

茶タテムシ／菓子ムシ　オニヤンマ／ツノムシ　日光シヾミ／ヒグラシ　ゾウムシ／トラムシ　大將ムシ／軍扇ムシ　モノサシトンボ／シヤクトリムシ　アチスヂアゲハ／アカスヂクサガメ　舟形蛄蟖／錨テフ　トゲトゲバイ／サシガメ

埋葬甲蟲／カ子タヽキ　お菊ムシ／ユウレイウンカ　クサキリ／キコリムシ　ピストルミノムシ／ケンガメ　糸引ハマキムシ／ハタオリ　トツクリバチ／ヘウタンムシ　サンカクムシ／ヒシヨコバイ　子負ムシ／オンブバッタ

シリジロカミキリ／ハラグロカツヲムシ　テングテフ／オカメコホロギ　ミドリシヾミ／アカシヾミ　ウラギンシヾミ／ウラキンシヾミ　アカセヽリ／クロセヽリ　ナガカイガラ／マルカイガラ　アリモドキ／ハチダマシ　孫太郎／源五郎

メクラアブ／ミチヲシヘ　キヤウジヨロウ／ヤマジヨロウ　石ノミ／砂ノミ　ヤマカミキリ／カヮトンボ　テフトンボ／トンボテフ　駱駝蟲／象鼻蟲　春セミ／花ノミ　クヮガタムシ／ヒオドシテフ　龍蝨／虎フトンボ　天蛾／地蠶

ヨメコムシ／姑蟲（コクゾウムシ）　ハムグリ／ハナムグリ　クサムグリ／スナムグリ　ホタル／ウチワトンボ　テツパウムシ／カノコテフ　豹モンテフ／虎フカミキリ　タケノコムシ／キノコムシ　キノエダムシ／コノハムシ

馬オヒムシ／轡ムシ　キンバイ／ギンバイ　鳳蝶／クジヤクテフ　山椒ブンヽ／サイカチムシ　アメバチ／ダンゴバチ　犬蝨／猿ハムシ　シヤウジヤウトンボ／カメノコムシ　水蠟蟲／白蠟蟲　クソバイ／マグソコガ子

テングクサゼミ／メンガタスヾメ　ハダカムシ／カチカクシテフ　サラサモンガ／ビロウドコガ子　三日月シヤクトリ／星カミキリ　竹ケムシ／フクラスヾメ　ミヽヅク／子コガホヤナギムシ　ウヅラガメムシ／クサヒバリ

火取蟲／水カマキリ　アブラムシ／燈心トンボ　カクガタハナムグリ／マルクサゼミ　貝殼蟲／エビカラスヾメ　テツチンムシ／ミチシルベ　クロタイマイ／ベツカフトンボ

編者評云。この答案中、蟲名を重ねて用ゐしは鐵砲蟲、和斑猫等の數種に過ぎず、此點に於ては他に比して一段優れるを覺ふ。然れどベニナガシ、クモガタヘウモン、子コアシ、孫太郎など、雲形か紋樣か膀類か將た人名か、其區別の確かならぬ樣略記したると、野卑の名稱二三を混じたるとは鉄點なり、なほ九星瓢蟲など普通に知られざる名稱も如何と思はる。概して配合は可なれども、選者には一種の論理法的奇癖ありと見ゆて、中には對の性質を破りしも多かり、例へば、大黑に福俵、鬼に角、頸切に泣、日光に日暮、穀盜に繩目、大將に軍扇、水に吞、埋葬に鉦、提灯に道、春に花を對さしたるが如きは、皆これに因づけるものにて、是も印度の論法若くは陣中の暗合語などには適切なる可きも、蟲合せの對さしては好しからず。然らば如何なるものを以て優秀に數ふべきやと言はれんか、編者は鴉揚羽蝶に雀蜂、白蟻に黑飯鎚子、腹凋蜻蛉に腰細蜂、熊蜂に虎天牛、刺椿象に揀蟲、草切蟲に木伐蟲、鳳蝶に孔

雀蝶の類を以て完作と認む。其他に別に評すべき節もなし、有繋に感服なり。（完）

●益鳥の調査（燕巣）　當春開設の岐阜縣冬季採集昆蟲展覽會へは、百舌鳥の揷餌を出品して參觀者を益したる本巣郡船木尋常小學校ありしが、今またこれにも劣らぬ燕巣の調査をなせる者あり、是は益鳥を保護する上に就て、如何なるものが果して幾何の利益をなすやを豫察するの必要あるより、名和當昆蟲研究所長は夙に其調査の事を諸方に依賴し置ける次第にて、畢竟百舌鳥の揷餌も將た燕巣の調査も其局部なるが、誰しも口には甘諾して實行を怠たるを常態とするに、今や斯く實際の調査を遂げ得たるは感ずるに餘りありと謂ふべし。さて其調査の任に當りしは、岐阜縣山縣郡保戸島村の有志二十八名にて、其主査は同地尋常小學校長篠田常次郎氏なりしが、その大要を茲に摘記すれば、同村は總戸數百五十四戸にて、側島區に八十三戸、戸田區に四十二戸、保明區に二十九戸を有するに、其中燕の一番巣（五月）を營みたるは、側島に十五戸十七巣あり、戸田に九戸九巣あり、保明に四戸四巣ありと云ふにあり。初回の事とて其乳雛數及び親鳥の往復數等は滿足に調査し得ざりし由なるも、之を第一着として他の微細の事項に移らば、必ずや興味深き事實を發見するの日ありと信ぜらる。

●第十三回全國害蟲驅除講習會　豫記の如く本月一日より、第十三回全國害蟲驅除講習會を開きしに其人員は無慮八十名（申込數は百餘名なりしも、病氣、選擧、家事上の都合にて缺席）にて形の如く午前には開講式を當昆蟲研究所内に擧げ、名和研究所長の挨拶、堀内岐阜縣農事試驗場長の祝辭に年長者大澤氏の答辭あり、午後よりは直ちに授業をなし、なほ引續き晝夜修業中なり、開會の翌日には宮地北陸農事試驗支場技師、越えて十日には加藤農商務技師の演説もあり、特に今回は科外講師として所友長野菊次郎氏が前後五六回の講義をなしたれば、從前に比し資益多かりしは勿論なるも、唯多くは降雨に妨げられて、野外實習をなし難かりしは遺憾なりき、又今回は會員增加の爲め、特に岐阜市高等小學校の講堂を借受けたるが、來る十四日の午后を以て修業式を擧行する豫定なれば、其姓名は後號に掲載すべし。因に云ふ、第十四回の同會は來る十月中旬を以て開會することに決定せり。

●綠陰の蟬琴　英國では昆蟲の標本が追々と高價になッたので、今では人造標本を賣る者があるげな、其法は普通の蝶蛾などを捕ッて來ては、巧みに彩色を施こして新種と見せかけ、莫大の高價に賣附くるのである。東京の夜見世で、糊固めの夏羽織を買ッた處が、夕立の爲めに原形を失くしたとの昔咄しがあるが、此の蝶蛾も水濕に逢ふては化皮を現はすであらう。●何時ぞや、蟲大臣や蟲殿樣の事を

書た事があッたが、其殿樣の一人たる中川久知君は、今回の總選擧で代議士の候補者ょ推されたのである、及落は判然せないが、特得の寄生蜂を眞似て、幾多國家の害蟲連を螫殺すのも、時に取ッての一興と存ずる。但し議場へ行く時だけは、身邊の七ッ道具を廢して貰ひたい。●螢の渡瀨か、渡瀨の螢かとまで言はるゝだけ、渡瀨博士は到頭車胤の化身との尊稱を受くるやうに成ッた、科學者はこれ程に熱中せんでは金箔附と申されぬ。其はそれとして、同博士は著書中に鶉衣やら、歷朝詠物詩選やら、俳句集やらから、多くの詩歌を引證せし程の風雅の人であり乍ら、何故ょ螢の名には藤吉螢だの、八郎螢だの九郎螢だのと沒風流的邦稱を命じたのであらう、怪しくて堪らん次第である。一躰英雄の名を取るとあらば、少なくも其英雄を顯彰するだけの分子を含ませんければならぬのに、草履取時代の俗稱や、御曹司時代の幼名を附した一事が感服出來ぬ、それも八郎や九郎や藤吉が、他ょ無い名稱ならば、まだしもであるが、斯かる俗名は斗筲の輩の專有物であるから、決して紀念の名稱とは思はれぬ。そこで卑見を申せば、朝鮮種の藤吉螢をば大閤螢、八郎螢をば爲朝螢、九郎螢を義經螢と改めたい、それが面白く無いとあらば、別の代名詞を用ゐるも宜しからう。是は唯り螢ょ限らんが誤り易い名や、其人の德を殺ぐやうな名は、成るべく避け度いものである。●甲の蟲を乙の蟲が仇するかと思へば、丙の蟲はまた乙ょ仇する、是は生物界の現象であるが、此現象の眞理を硏究する者ょも、同じ現象を示すのが奇妙ではあるまいか。それは擧足取りの名物男松村松年君が、海山一万里の遠方から、度々無遠慮な論說を寄せて他を刺螫して困まらすと、今度はまた局外から飛入して先方を困まらせる者がある事である。併しこれは正々堂々たる君子の爭ひで、學術修鑽の目的に出づるのであるから、高處で見物する讀者には益する事が多い。●類聚國史や、日本書紀や、延喜式などょは、多く慶雲の記事があッて、何れも皆支那流ょ之を國家の祥瑞と云ふてある。處が甚はだ怪しいと云ふ疑ひが起きたので、之を調べて見ると、如何あッても、蚊群の生殖作用を行ふ場合に現はるゝ形象であるやうだ、結局甘露と同ドやうに不祥瑞に歸するのである。其證據は追て發表する心算であるが、此事は未だ嘗て何人も說破して居らんやうであるから取敢へず茲に一目の先手を打ッて置く。但し此以前ょ之を辨明した人があると云はゞ。勿論其功は其先輩ょ捧ぐるが、代りょ擧證の概要を示して欲しい。●先頃來、某縣の某地と某地とより、名和昆蟲硏究所の全部を移轉して欲しいと云ふ交渉がある、それに岐阜市の有志中には、市內恰好の地を卜して新築の上、事業を擴張するが宜いとの勸告を試ろむる者があるので、三面攻擊ょ殆んど板挾の姿となッた。

之に對して名和先生は何んと言ふうと思ふと『斯う諸方から攻められては、堪ッたもので無い、いとゞ白い髯髪が尙ほ白くなるばかりだ』毎度乍ら罪の無い御托宣を聽く事よ。●當年は雨量が多いので。促織、金鐘兒、聒々兒をはじめ總體蟲類の賣口が宜くないと云ふて、蟲屋がこぼして居るさうな。綿服を着けながら、軒端の蟲聲を聽くのも異なものであるから、是は尤も千萬と思はれる。(あにがし生)

◉次號の昆蟲世界と蟲塚　來九月は雜誌昆蟲世界發刊後滿五年に相當するを以て、其紀念として彩色六回刷の石版畵を口繪とし、本文には木版十數個を加ひ、特に有益と認むる記事を選擇掲載すべし。なほ蟲塚の義金募集期限は、七月末日までなりしも、斯かる緣由もあり、且は新潟縣岩船郡の佐藤榮、愛知縣寶飯郡の田中周平兩氏より、懇々延期ありたき旨申越されたれば、是また九月を以て分配送金する事に變更せり。

◉淡路の昆蟲展覽會　兵庫縣淡路國三原郡にては、豫て記載の如く、昆蟲展覽會を開く計畫ありしが、右は愈九月廿一日より廿五日まで五日間同地に開催することに決し、其總裁には淸水永三氏を會長には賀集新九郎氏を推し、委員として飯田儀太郎、中野壽郎兩氏外十九名に囑托し、目下頻りに準備中なるが、其出品は昆蟲標本、器械類、參考品の三類にて、審査を加ふるにはあらざる趣なり。

◉本年の螟蟲驅除一斑　本年は螟害劇甚なりとは農家の信ずる所なるが、右につき如何なる方法を以て之を驅防せしかを知らんが爲めに、本年苗代時期以來去七月下旬まで、各府縣の新聞紙上に現はれたる驅除法、驅除數等を調査せしに、其大部分は纎弱なる小學兒童の手を藉りて、卵蛾驅除の目的を達し得たるもの丶如し。尤とも中には特に人夫を雇傭せし地方もあり、又其方法の不明なるもあれど槪して學童は驅防上の首力となりしは疑がひを容れず、讀者左に列擧の廿九府縣の事例に就て其一端を知られよ。尙ほ此他新聞紙が報導せられざるもの極めて多かる可ければ、實地に就て細密に調査せば、意外の事實を發見することもやあらん。但し此表中には岐阜縣下のものと、その曾て昆蟲世界誌上に掲載せしものとは、渾てこれを省略に附せり。今より僅々數年前までは、世人より嗤笑をうけし採卵法も漸やく其價値を知られ、然かも小學生徒の手によりて之を實行せらるゝに至りたるを思へば、中心の愉快禁ずべからざるを覺ふなり。(昆蟲世界第四十七號學說欄參看)

◎新潟縣　中頸城郡美守村數村に於て數回採卵を試ろみしに、十一万六千餘塊と外に五万四千五百の被害莖とを獲たり。◎愛媛縣越智郡九和村にては、專ら驅蟲に學童を利用し、鴎部村にては、採集學童に向つて、一蛾五毛、二化生卵二厘、三化生卵四厘を交付

し、切手貯金の方法を守らしむ○周桑郡庄内村の學童さ農民さは、六日間に三万餘塊を獲たり。◎栃木縣　塩谷郡矢板町にては、螟卵蛾各一厘にて買收し、苗代時期に十五万餘を獲たり。◎滋賀縣　蒲生郡に於ても採卵法を勵行せり、但し其方法は未詳なり。◎鹿兒島縣　日置郡田布施村にては小學兒童をして驅蟲に從事せしむ○薩摩郡山崎、水引、兩村の學童は、六万有餘塊を採れり○始良郡溝邊村各小學の兒童また多くの害蟲を驅る。◎富山縣　射水郡淺井、黑河、横田、大島の諸村にては、賞を懸けて小學兒童に採收を奬勵す。新湊町外七村また十一万餘の卵蛾を獲たり。◎茨城縣　那珂郡長倉村にては授業時間外に捕採せしめて、之を學童用の紙さ交換し、中野村にては一蛾五毛、一卵一厘の割にて買收して、之を貯金さなさしむ○猿島郡幸島村また採卵せしも、詳細を知らず○北相馬郡東文間村外三村も學童の採收を奬勵し、寺原村は十蛾五厘、一卵二厘にて買收せり。◎福岡縣　糸島郡にては百七町歩の苗田より、十八万八千塊を獲たるも、其方法は未詳なり○粕屋郡青柳村三万六千餘の蛾卵を獲、是亦未詳○大野郡牧口村にては、三千蛾さ十三萬塊さを買收せり○早良郡にては數回に七萬八千蛾さ、六萬二千三百餘塊を獲たり○鞍手郡の苗田五千五百二十六町歩より、三十三萬五千二百塊を獲たり。去れご其の方法は詳ならず。◎大阪府　北河内郡にては三十塊に一枚、被害莖百本に一枚の抽籤券を交附して、一等より五等に至るの奬勵金を與たふ、一等五拾圓、五等一圓○南河内郡にては、農會に奬勵金交付規程を設け學童をして採集せしめ、一塊一厘以内の割にて交附金をなせり。◎島根縣　八束郡來待村尋常小學生は三日間に二萬餘塊を獲たり○簸川郡出東村は學童をして十八日間捕蟲に從事せしめ、一蛾を二毛、一塊を三厘に買收せり。○能義郡山佐荒島の二村また買上法を行なひ、卵蛾各一厘さ定む、一人能く一日に二千百餘を得たるものあり○那賀郡石見村にては、小學生徒を利用して盛んに驅除を行はしむ。◎三重縣　一志郡にては卵塊を買收し、年長學童をして歸宅後これに從事することを奬勵す○度會郡内の苗田より四十四萬を得たり、一村十萬以上に達したるものあり。◎香川縣　香川郡にては、郡内に令しし一齊採卵驅除を行はしめたり。◎石川縣　珠洲郡内の町村は、三日間に十万八千七百二十餘を得たり。◎長崎縣　縣下各郡を通ずれば、苗田にて三十五萬九千九百塊を得たり、其の中、東彼杵郡外三郡にては、二三化生卵三萬九千五百、蛾二十三萬餘頭を得たり。◎鳥取縣　八頭郡河原村外十六村の學童は、百三十萬餘の卵蛾を採集す、外になほ農會の買收に係るもの百萬餘あり。◎岡山縣　縣下を通じて採收を行はしむ、御津郡の如きは、郡令を以て都合五回之を執行せり。◎宮城縣　宮城郡七北田、多賀城二村を始め各地に於て小學兒童を利用し驅除をなさしむ○名取郡生出村小學生四百五十名は、二日間に卵塊其他を合せ十二萬餘を採收す。◎京都府　京都郡にては苗田に四回の採卵を行ふ。◎廣島縣　安藝郡下各町村にては、百九萬五千の卵蛾を收めり。◎兵庫縣　加西郡にては百二十二萬の卵蛾を得たるが、其中特に學童の採收に係るもの多かりしを以て、町村農會は一個一二厘の間に買收して、其幾分を貯金せしむ◎美嚢郡中吉川村及び三木町また買收法を布きて驅除を奬勵す。◎千葉縣　香取郡多古町にては、島尋常小學生をして採集せしむ○夷隅郡中根村にては、一蛾一毛、一塊二毛に買收の事に決し、小學生徒に採集せしむ。長者町また學童を利用して買收を行ふ○千葉郡に

ては初回の採卵に千八百五十を獲　○山武郡湊村にては、生徒に採取せしめて一蛾一厘、一塊一厘五毛を與ふ。◎奈良縣　磯城郡にては、小學兒童の採取する卵塊に對し三等の賞金を與て、貯金をなさしむ○北葛城郡王寺小學校にては放課後の採集によりて三萬六千を、志津美村の小學生徒は、都て三十一萬八千七百を獲たり　○南葛城郡にては、懸賞法を以て十六日間、郡内の十六校生徒に採卵せしめしに、八萬五千百塊八千六十七蛾を獲たり○宇智郡にては教育會の決議により、尋常科三年以上の生徒を利用して三万餘を獲、百塊に付貳錢の賞與を交付せり、他に各町村にて採卵せるもの二万餘あり。◎和歌山縣　伊都郡山田小學外一校にては十四万餘の卵蛾を獲、橋本町外三校にて八万餘の卵蛾を、學文路村小學外三校にて十一万八千の卵蛾を得たり　○北葛城郡志都美村にては、本田に於て三十八萬八千三百餘個を採取せしめて、買上金百拾圓餘を支出せり○此他濱中村濱東濱西兩小學にても、三日間に九萬三千を採取せり。◎靜岡縣　周智郡飯田村にて驅蟲費を支出して買收法を布けり○濱名郡和地村また卵塊を買收す○榛原郡川崎町は、小學生徒の歸宅後の驅蟲を奬勵し、等に準じて賞を與へり○志太郡内に又學童をして、採卵に從事せしめたる處あり。◎德島縣　板野郡堀江村にては、二日間に七千八百を採集せり。◎山梨縣　南巨摩郡の諸村にては、買上法を布き學童をして之に從事せしめ、六萬二千を採收せり○東山梨郡八幡村にては、十五萬六千四百の卵蛾を得んが爲めに、百十三圓弱を要せり。◎大分縣　西部郡西庄内村は苗代期より採集したるも、顛末未詳に屬す○玖珠郡の各小學にては、其遊戯時間を利用して二十二萬餘を、直坂高等小學外三校は九萬四千の卵蛾を獲、其他各村農會に於て驅除したるも不少。◎福井縣　南條郡にては十三萬六千の卵蛾を獲たり○敦賀郡松原村は、苗代期より採卵を嚴行せり。◎山口縣　佐波郡防府町にては、學童を勵まして驅除に從事せしめ三個一厘を與ふ。

◎三十五年度の害蟲驅除費　本年度は國庫第二豫備金より第一回に五六萬圓、第二回に若干圓を支出したるが、其他各府縣に於て勸業費豫算中に編入し置けるものあり、例により之を掲ぐれば左の如し。而して此中最も多きは熊本、大坂、佐賀の府縣にて、最少なるは前年と同じく香川縣の壹圓なり。

府縣	費目	金額
大坂府	害蟲驅除豫防補助	二二、六〇〇円
栃木縣	害蟲驅除	〇、〇一〇
滋賀縣	害蟲驅除	〇、一〇〇
福島縣	害蟲驅除豫防	〇、一〇〇
石川縣	害蟲驅除	〇、一〇〇
岡山縣	害蟲驅除	三、〇〇〇
香川縣	害蟲驅除	〇、〇〇一
京都府	害蟲驅除補助	〇、五〇〇円
茨城縣	害蟲驅除	〇、〇二〇
三重縣	害蟲驅除	〇、六〇〇
岐阜縣	害蟲調査及豫防	二、〇八五
巖手縣	害蟲驅除	〇、三九〇
富山縣	害蟲驅除	〇、一六〇
廣島縣	害蟲驅除豫防	〇、九一二

縣	事業	金額
愛媛縣	害蟲驅除	二、一〇八
熊本縣	害蟲驅除及補助	一四、二二二
佐賀縣	害蟲驅除	一一、〇三〇
宮崎縣	害蟲驅除	〇、六四五

◉昆蟲標本の寄贈者

豫ても記せしが如く、本邦の昆蟲分布調査の材料として、各地の同志よりは續々寄贈せらるゝも、目下多忙を極めて居れば、細かに之を調査し得ざるも、漸次時機を得るに從がひて其名稱を公けにすることある可し、扨寄贈者は注意すべきは上圖の如く、長方形の紙片（新聞廢紙にても宜し）を三角形に折りて其內に昆蟲を納め（蝶、蛾、蜻蛉等あれば必らず翅を合して裏面を現す）昆蟲とゝもに別記の如き記載用の小紙片を入れ置く時は、調査の際に非常に手數を省くのみならず、錯誤紛亂を來すの患ひなきなり、從來包紙上に採集月日、採集場所氏名等を記入し來りしも、自今此方法に改められんことを希望す、今茲に第一回の報告として、寄贈者の氏名を縣別に列擧すれば下の如し。

年	月	日
縣	郡	村
場所		
氏名		（　）

寄贈者所在	氏名
愛知縣渥美郡豐岡尋常高等小學校	中神清太郎
同　同　吉田方尋常高等小學校	村田愛之助
同　同　牟呂尋常高等小學校	小柳津廣三郎
同　同　福岡尋常高等小學校	高柳丈助
同　同　老津尋常高等小學校	不明
同　同　相川村	不明
岐阜縣養老郡池邊村	兒玉齊治
同　養老郡上多度村	栗田孝三
同　惠那郡苗木町	小川鎌次郎
同　揖斐郡豐木村	所喜久
靜岡縣志田郡靜濱村	増田秀雄
滋賀縣東淺井郡役所	廣瀬巨藏
沖繩縣國頭郡大宜味尋常高等小學校	親泊朝擢
愛知縣渥美郡豐島尋常小學校	河合莊三
同　同　花田尋常高等小學校	平井四男太
同　同　豐橋高等小學校	不明
同　同　高根村	昆蟲研究會員
同　同　野依尋常高等小學校	不明
同　同　田原町	杉原孝
岐阜縣可兒郡伏見村	吉田與三郎
同　吉城郡阿曾野村	和仁鐵三
同　本巣郡別府村	廣瀬亮
愛媛縣越智郡立花村	森玄作
山口縣美禰郡伊佐尋常高等小學校	安永源吾
鳥取縣岩美郡野木村	山田豐造

◉靜岡縣中遠の昆蟲學講習會

靜岡縣磐田郡教育會第一部會の主催にて昆蟲學講習會を本月二日より同八日まで一週間、中泉尋常高等小學校內に開會せしに、折柄連日の大雨にて通學を妨げられし地方多かりしかば、修業生は小學教員と實業家を合せ五十六名に止まりしも、其成績は佳良にて將來斯學普及の上に不少の利益を與へしもの丶如くなりしと、右の講師としては當昆蟲研究所より小竹浩氏

を派遣し、最後に名和梅吉氏に臨席せしめたりき。

◉第四十四回岐阜縣昆蟲學會例會　同會を本月二日岐阜市高等小學校內に開きたるに、第十三回全國害蟲驅除講習員其他にて無慮百餘名に上り、近來稀有の盛會なりしが、午後二時名和當昆蟲研究所長の挨拶を以て開會し、午後五時を以て散會せりき。當日の演題及び氏名は左記の如し。

○苗代田の害蟲驅除實驗談　第五回岐阜縣害蟲驅除講習會修業生　岐阜縣　所　喜　久
○和歌山縣那賀郡に於ける害蟲驅除景況　第十一回全國害蟲驅除講習修業生　和歌山縣　寺田鬼子右衛門
○害蟲驅除に關する希望　第十三回全國害蟲驅除講習員　兵庫縣　森　積藏
○昆蟲學と敎育との關係を論ず　第十三回全國害蟲驅除講習員　高知縣　松本喜義
○延喜式に記載せられたる昆蟲に就て　岐阜縣昆蟲學會特別會員　永澤小兵衛
○植物の種類と昆蟲の關係　岐阜縣昆蟲學會特別會員（講話欄參看）　長野菊次郎
○外國產の昆蟲の化石に就て　岐阜縣昆蟲學會名譽會員（講話欄參看）　名和靖

◉富士登山研學者の不幸　東京の讀賣新聞日就社の發企にて、富士登山研學者百數十名を募集し、之れに各學科專攻者數名を附して、本月初めに東京を發程し、大ひに理學界に益する所ろあらんとせり。當昆蟲研究所長名和靖氏も亦其委囑を受け居りしも、何分全國害蟲驅除講習會の開會と搗合ひしより、己むことを得ず名和梅吉氏を代理として出張せしめたるに、過々氣候の不順なるは可惜この壯擧に阻障を來たさしめ、遂に一行は絕巓に躋攀するに及ばずして下山し、隨ひて其採集にかゝるもの亦少なかりしと云ふ。返す〳〵も遺憾の事してけり。

◉諸國の蟲送り（四）　（其七）當地方にては、舊例として年に二回蟲送りなるものを行ふ、一れ之を方言「サンヤリ」と稱し、舊曆六月初めの丑の日に幼童相集まり、竹笹を携へ鉦を鳴らし乍ら「サンヤリ、サンヤリ、サチモリサーマノ、オートムライ」と呼ばゝりて、遍ねく田間の雜路を巡り終れば、其笹を川に流し棄つるなり。當日農家にては又「シャナ」と稱する小麥粉製の團子を櫟の葉に包みて、田の畦畔等に立つなり。他の一は同じく舊六月中の休日をトし、晝は土地の寺院に於て百萬遍を修し、夕方よりは一家一人を出して、松明に火を點じ、同じく鉦を打ちならしつゝ田間を巡り、終りに區界の堤防上、又は河原に其燃殘の松明を集めて燃すなり、此時寺僧は同處にて讀經し、攘蟲の祈禱をなすを例と

す、此日また農家は寺院より蟲除の符札を請受けて、之を田間に立つ。(右、和歌山縣日高郡上南部村、大野宗一氏報)。○(其八)岡山縣久米郡拼和村大字中拼和上口にては、毎年七月土用入の日午後を以て「アマコ」追とて、蟲送の式を施行するなり、其次第は毎戸一人宛、鐘大鼓貝等の如き發音器を携さへ、小竹に幣帛を付けたるものを押し建て「アマコ殿の京のぼり、實盛どの丶御供どや」と大聲に怒鳴り立て、鐘大鼓を打鳴し、村内田圃の附近を馳せ廻り、終りて同大字の天子山と云へる高山に登りて、小竹に付けたる幣帛を納め、神酒を供へて各々皈宅するなり。又同郡大拼和村大字和田北大字大拼和西の兩大字にても、毎年同日に「アマコ」追を行なひ、其翌日を以て蟲逐を行ふ、兩日とも大字の一端に毎戸一人宛出會し、鐘大鼓を叩き貝を吹きつゝ田圃の周邊を經巡り、終りに同所産土神鎮座の柏鶴山八幡神社境内にある蟲神と稱する石碑の處に集合し、幣帛を建て神酒を獻し、其年の蟲害のなからん樣にと祈誓を籠めて各々退散するなり。右兩村則ち拼和村及び大拼和村にては、夜盗蟲の蟲追なりとて、或夜松明を燒き、貝を吹き、銃砲を發しつゝ、村境より村境迄逐ひ行くの習慣もあり、何れにしても大同少異の方法とす。(右、岡山縣久米郡拼和村、松坂住一郎氏報)。

◉害蟲豫防の監督　第二回全國害蟲豫防の監督として、去月初旬に、農事試驗塲技師石塚鐵平氏は福島栃木群馬の三縣へ、同新莊三郎氏は岡山山口の二縣へ、同小幡健吉氏は石川富山の二縣へ、同鏡保之助氏は新潟長野の二縣へ、農商務技師加藤末郎氏は岩手宮城愛知靜岡岐阜の五縣へ出張を命せられき。

◉各地の蟲ばなし　山口縣熊毛郡麻郷村某なる者、已が一手販賣を特約せる除蟲液の販賣廣告を縣廳に依頼する事再三、縣廳これを容れざる爲め、之を井上伯に訴へ、伯の勢力を利用して縣官に採用の議を決せしめんとせりきと。◎島根縣八束郡來待村の高等科小學生徒は、簷頭に六十餘の燕巣を作り置きしに、燕の來り巣ふもの三十餘、産卵數百四十餘顆なりしと、害蟲驅除のため能き思付といふべし。◎福岡縣浮羽、三井、八女、三瀦、山門の諸郡にては、螟蟲天然驅除の一方として、被害地を禁獵區に編入し、鳥類の蕃殖保護を圖らんとせしに、三百餘名の銃獵家は飛檄して反抗運動を試ろむ。◎佛國の昆蟲學者中に、アブラ蟲のスープ、稻蝨のカテレツ、毛蟲のテキなどを食したる報告をなし丶者ありと、吉野クズ人も三舍を避くるならん。◎新潟縣岩船郡の佐藤榮氏、蟲塚保存費に十八圓を義捐し、なほ郷里の有志を勸告して十餘圓を醵出せしむ、一風變りの好漢と謂ふべし。◎本年東京に於ける蟲の

相場は、クツワムシと邯鄲ギス最高價を占め各一頭三十錢、鈴蟲最低價に居り一頭六錢、カネタタキは二十錢、ヤマトスズは廿五錢、螢は三厘より五厘の間なりしとぞ。◎高知縣幡多郡の諸村に於て、螟蛾の買收を行ひ、一頭五厘と規定せしに、村民爭ふて其利に趨むき、一人一晝夜に五六圓を受領せしものありき。◎熊本縣昨年の蟲害額は壹萬二千六百七十石にて、一石十圓換とすれば、拾貳萬六千餘圓の多額、併しこれを一昨年の九拾萬二千餘圓の被害額に比較すれば、頗ぶる輕少との事。◎宮崎縣宮崎郡に於ける昨年の害蟲驅除費は三千九百七拾餘圓、岡山縣苫田郡の三百八拾四圓强や、長野縣下伊那郡の五拾三圓弱の如きは、共に比較し得べきにあらず。◎熊本縣下に於て昨年田畑害蟲驅除に要したる費額は七萬八千八百四拾四圓にて、之を三十年に比較すれば實に四倍强に居る、農家に負擔多きも當然なり。◎三重縣員辨郡の和波久司氏、害蟲圖解數十葉を其小作者に分配して驅蟲を奬勵す、是れ確かに大農の本分を行ふものにて、他の摸範とするに足るの美擧。◎南洋ポルネオ島に産する杖蟲と稱するは、其長さ一尺餘、其翅扇形にして頗ぶる美なり、此れを世界に於ける最大の昆蟲となすとなり。

◉農商務省の訓令　去七月十日農商務省訓令第十四號を以て、農事試驗場處務規程を改正し、昆蟲部に於ては、左の事務を掌どる旨を公けにせり。

一、害蟲、益蟲、有害動物の發生經過及分類に關する事項。
二、害蟲及有害動物の豫防驅除に關する事項。
三、驅除用藥品機械等の研究鑑定幷に設計に關する事項。
四、益蟲の應用に關する事項。
五、害蟲、益蟲、有害動物と氣候との關係事項。
六、害蟲、益蟲、有害動物の地理上分布に關する事項。

◉養老郡に於ける昆蟲　岐阜縣養老郡に於ては、敎員の夏季講習會を本月九日より十五日迄一週間開設さるゝに當り一面には是迄に採集されたる昆蟲標本を一塲に陳列し講習員の爲に昆蟲研究の資に供せられたり今其陳列されたる標本に付當研究所より助手名和梅吉氏を出張せしめて調査されし結果に依れば出陳されしは高田、多良、下多度、廣幡、小畑、日吉、一之瀨、牧田及び下笠の九校にして目別にすれば、膜翅目四十一種、鞘翅目百七十三種、双翅目二十八種、微翅目一種、鱗翅目百十八種、毛翅目四

種、脈翅目七種、有吻目五十六種、直翅目十九種、擬脈翅目三十九種ありて、總計四百八十六種に及べり。而して其種類中には奇種のものも少からず害蟲あり益蟲あり或れ自然淘汰雌雄淘汰等ょ關する標本もありて講習員の利益甚ざ大なりしと云ふ

●名和氏の昆蟲講話

別項記載の養老郡に於ける、昆蟲標本視察の爲め、出張せし名和梅吉氏は教育會の依賴に依り、昆蟲に關する一塲の講話をなし、特に其標本の製作、排列等の批評等ありたりと云ふ。

◉螟蟲驅除豫防に就て

本年は各府縣共稻田に、螟蟲の發生甚だ多き摸樣よて、其加害尠からず、夫々之が驅除豫防ょ就ては、少なからざる注意を以て、奬勵されしと雖ども、未だ一般に此昆蟲志想の普及し居ふざりし爲め、之を天災ょ歸する實業家多くして、到底人力を以てなし得べからざるものと誤信し、其方法宜しきを得ざりし爲め、目下ょ到りては實ょ憐むべき慘害を蒙りしものを、各地ょ於て目擊する景況あり。此處に於てか螟蟲は最早や第一回發生は終期に達し、今や第二期の發生に到らんとせるの時期とはあれり、されば今此蔓延せし螟蟲を悉く驅除して効果を奏せしむる事は、甚だ困難の事業なれば此第二期の發生を期して、油斷なく驅除豫防の方法を實行されしならば、必ずや其効果の著しきを見る事あるべし、幸ひょ當業者は此際此時期を失はず、注意して効果を奏する樣國家の爲め希望する所なり。（ナ、ム記す）

◉樹蜂鋸蜂の種類

樹蜂、鋸蜂の類は膜翅目中害蟲ょ屬するものにて、樹蜂は樹幹を害し、鋸蜂類は重に植物の葉を食害するものなるが、今名和昆蟲研究所に所藏せる種類を聞くょ、樹蜂類は二科十三種、鋸蜂類は六科百四十餘種ありと云ふ、右の種類は重に岐阜市近傍に於て採集せしものヽ由なれば、本邦各地に於て採集せば必ずや、尙多くの種類を發見し得らるならん、

◉昆蟲標本陳列舘の觀覽人

昨七月中ょ、當昆蟲研究所の標本陳列舘を觀覽せし人員は、總計二千九百五十三人ょて、最とも多かりしれ、廿二日ょ於ける百九十五人、最とも少なかりしは三日ょ於ける四十一人ょて、一日平均百十九人ょ當り、其中ょは岡山、東京、長野の府縣より修學旅行として來遊せし者、又は斯學研究の目的のため特に來縣せし者も多かりき。（以上、七月十三日脫稿）

◎昆蟲世界愛讀諸君に敬白す

雜誌「昆蟲世界」の義は、假ひ御注文有之候とも、前金にあらざれば、發送致さゞる規定に有之候處從來の厚誼上、前金相切れ候時は、其旨を朱書の上、特別に御扱ひ致し候ひしに、往々却つて意外の御取計ひに相成る向も有之候故、以後は不得止發送を見合はせ可申候、依て封書に前金切れのしるし相附し發送致候場合には御不用なれば其趣き御一報願上度、若し御通知無きに於ては、舊の如く御購讀相成るものと見做し可申候間、豫め御承知置願上候

七月十日

名和昆蟲研究所會計部

◎害蟲圖解未刊の分豫告

◎桑樹害蟲クハケムシ（桑蛄蟖）
◎稻の害蟲フタホシズヰムシ（三化生螟蟲）
◎稻の害蟲セジロウンカ（背白浮塵子）
◎稻の害蟲ヒゲナガアブ（長角虻）
◎桑樹害蟲クハハマキ（桑葉捲蟲）
◎蠶の害蟲カヒコノウジバヘ（蠁蠅）

◎松樹害蟲マツケムシ（松蛄蟖）
◎藍の害蟲アキノゾウムシ（藍象鼻蟲）
◎粟の害蟲アハノズヰムシ（粟螟蟲）
◎胡麻害蟲メンガタスズメ（胡麻蠋）
◎赤楊害蟲ハンノキケムシ（赤楊蛄蟖）
◎櫟の害蟲カミキリムシ（天牛）

◎稻の害蟲イナゴ（蝗螽）
◎稻の害蟲トビイロウンカ（褐色浮塵子）
◎稻の害蟲クロクサガメ（黑色椿象）
◎桑樹害蟲アヲハマキムシ（靑色葉捲蟲）
◎桑樹害蟲クハゴ（野蠶）
◎蔬菜害蟲モンシロテフ（菜の螟蛉）
◎蔬菜害蟲サルハムシ（菜の葉蟲）
◎大豆害蟲ヒメコガネ（姫金龜子）
◎梅樹害蟲ウメケムシ（梅蛄蟖）
◎梅樹害蟲ウメシヤクトリ（梅尺蠖）

◉圖解の紙幅縱一尺三寸横九寸◉壹枚の代價拾五錢郵稅貳錢
◉百枚以上一纏壹枚拾錢郵稅百枚に付き貳拾錢

㊟豫約代價

壹枚拾錢郵稅貳錢
但申込の際前金添附の事

圖解代金　凡て前金にあらざれば回送せず但郵券代用壹割増の事

◎梨樹害蟲ナシゾウムシ（象鼻蟲）
◎梨樹害蟲ホシハマキ（星葉捲蟲）
◎果樹害蟲イラムシ（刺蟲）
◎稻の害蟲オホズヰムシ（大螟蟲）
◎藍の害蟲アキノズヰムシ（藍の螟蟲）
◎粟の害蟲アハノヨトウムシ（粟蠶）
◎里芋害蟲セスヂスズメ（烏蠋）
◎桐樹害蟲シモフリスズメ（桐蠋）
◎果樹害蟲ホシカミキリ（白斑天牛）
◎果樹害蟲ドウガチブンブン（金龜子）

發行所
岐阜市京町　名和昆蟲研究所

登録商標 硫曹

硫曹肥料

●硫曹肥料を稲作に用ゆれは第一ニ米質を宜しくし且つ頗る收穫を増すべし壹反歩ニ付五六斗より壹石貳三斗を增す之を舊肥料を用ひたるものに比すれは見掛も遙に宜しく目方も重く土用を越して蟲附稀なり舊肥料を用ひたるものは之に反したとへ見掛は異なるざるも米質惡しゝ又籾の收穫は同じくとも玄米となして壹反歩三斗以上の相違あり之を舂さて白米となすに硫曹を用ひたる分は舂減尠なく飯ニ炊くに頗る炊殖すべし一例之は舊肥料の米は水壹升米壹升なるに硫曹の分は米壹升ニ水一升二合ならでは飯ニ適せず即二割以上炊殖の相違あり一●硫曹肥料を用ゆる農家は能々以上の事柄ニ注意し之を實驗して其效用の偉大なるニ驚くべし●輸出米は硫曹肥料を用ひたるものならざるべからず然らざれは南洋熱帶地方通過の際多く腐融すべし●第壹（過燐酸）を稲作ニ用ゆるには壹反歩ニ參貫目より五貫目迄を舊肥料（大豆粕、油滓、堆肥、厩肥等）ニ混交使用すべし●硫曹肥料のみ施すなれは第八號を最も適當とす壹反歩ニ拾貫目乃至拾五貫目を二回に分施すべし（堆肥は何れにも施すを宜しとす）●硫曹肥料は藍、煙草、薄荷、麻、蘭其他陸稲、粟、砂糖黍、桑并野菜物、薬物等ニ施して其效實に驚くべきものあり●第五回勸業博覽會ニ硫曹肥料を用ひたる農産物を出品し名譽金賞牌を得たるものには金三百圓づゝ銀賞牌には金百圓づゝ一等賞牌には金五拾圓づゝ二等賞牌には金貳拾圓づゝ三等賞牌ニは金拾圓づゝを贈呈すべし●第八回關西府縣聯合共進會ニ出品せる農産物の内第一等賞を得たる香川縣の裸麥及徳嶋縣の葉藍は何れも硫曹肥料を使用したるものなれば會社は香川縣の近藤太郎氏へ金百圓を徳嶋縣仁井輝藏氏へ銀盃（三ッ重）壹組を贈與せり●硫曹肥料の明細并ニ見本等は御申越次第贈呈すべし

大阪西區西野下之町

大阪硫曹株式會社

電話西四一九番

蟲塚保存義金募集廣告

◎蟲塚（蟲供養碑）保存義金募集の趣意

現時、本邦各地に散在の蟲塚（害蟲に關する石碑）は其數凡そ十基に下らざる可し而して當初其の建立の旨意を繹ぬれば、多少の異同ありて、石川縣のもの丶如く害蟲埋瘞の紀念碑たるあり、大分、宮城、福井諸縣のもの丶、如く蟲害掃攘の祈祝碑たるあり、又福岡縣のもの丶如く害蟲驅除の記功碑たるありと雖ども、要は農作害蟲の怖るべく、之が驅防の等閑に附す可からざる事を訓戒するの誠意より出づ、豈にこれを路傍の供養碑と同視して可ならんや。然るを其現狀を聽くに、或ひは桑園の間に顚倒するものあり、或ひハ風雨に曝されて文字の剝蝕に任するものあり、或ひは空しく山中の荊叢に埋もるものある等、今にして早く之が保存の道を講せずんば、久しからざるに事蹟湮滅の虞れなしとせずと。當昆蟲研究所深くこゝに感あり、當所創立七年の紀念事業として、本年四月を期し、之が保存修補の計畫をなせり。然れども到底少數者の微力を以て完成すべきにあらざれば、博く同志を全國に募り、其義捐を仰ぎて、古人が今日に遺したる洪恩に荅ふる所あらんとす。世の農桑業に從事し若くは昆蟲學を研究せらるゝ諸士の、半瓶の酒、一塊の肉を節して、此擧に贊襄の意を表せられんことを冀ふ。

◎義金は一口金五錢以上とす。（郵券代用にて宜し）
◎義金は一人一口以上とす。
◎義金取扱は本月末日を以て終了期限とす。
◎義金には受領書を出さず時々「昆蟲世界」紙上に芳名を掲げて領收の證となす、精算報告もまた同じ。
◎醵集義金は之を平分して、本月末日までに判明せる、各蟲塚所在地の官廳に依托すべし。
◎義金送附の際は、蟲塚復舊工費若くは雨覆ひ埒柵修造費に限り支出せられ度旨を指定すべし。
◎義金醵集總額幷に寄附者名簿は、配分金と共に各官廳に送附して、義捐者の意思を傳達すべし。

義捐金申込所　岐阜市京町　**名和昆蟲研究所**

◎本誌定價並廣告料

壹部　郵稅共　金拾錢　（見本は五厘郵劵貳拾枚にて呈す）

壹年分拾貳部郵稅共　金壹圓八錢

（注意）本誌は總て前金ょ非れば發送せず◎爲替拂渡局は岐阜郵便電信局◎郵劵代用は五厘切手にて壹割增とす

廣告料五號活字廿二字詰一行ょ付金拾貳錢、三十行以上一行ょ付き金拾錢とす

明治三十五年八月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二（岐阜縣岐阜市京町）

發行所　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二　發行者　名和梅吉

同縣武儀郡下有知村三百七十四番戸　編輯者　天野秋二

同縣安八郡大垣町字郭百五十三番戸　印刷者　河田貞城

（明治三十年九月十日内務省許可）
（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

（大垣西濃印刷株式會社印刷）

Vol. VI. SEPTEMBER. 15TH, 1902. No. 9.

THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.
EDITED BY Y. NAWA.
GIFU, JAPAN.

（九月十五日發行）
（每月一回十五日發行）

昆蟲世界

（第六卷第九冊） 第六拾壹號

目次 （禁轉載）

（明治三十五年九月十五日發行）
（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU, JAPAN.

◎寄贈物件受領公告

一金貳圓也（昆蟲世界發刊滿五年の祝儀）　鹿兒島縣　生熊與一郎君
一金壹圓也　島根縣　森脇捨松君
一金壹圓也　岡山縣　赤枝小太治君
一金壹圓也　三重縣　西岡嘉十郎君
一Monographie Der Jassinen Japans.　一册　在ブータペスト　松村松年君
一農業館統計表　一册　三重縣　神苑會三重事務所
一稻作改良の歌（昆蟲記事揭載）　一册　三重縣　作野熊吉君
一中津新報（昆蟲記事揭載）　三葉　大分縣　三浦三平君
一稻蟲捕蟲器　一個　靜岡縣　富井秀吉君
一整切器　一個　靜岡縣　吉野寅之助君
一害蟲研究成績報告第二報　新潟縣農事試驗場
一寫シ繪（昆蟲畫）　二枚
一昆蟲畫　一枚　（以上）千葉縣　林壽祐君
一下之關新聞（昆蟲記事）　一枚　山口縣　下之關新聞社
一護謨製玩具（昆蟲摸樣附）　一個　岐阜縣　永澤甲子君
一昆蟲刺繡（臺灣國語學校生徒製作）　一枚
一臺灣製團扇（昆蟲刺繡）　一本
一普通團扇（昆蟲摸樣）　一本　（以上）岐阜縣　甫守文子君
一小紫蝶寫生圖　一枚　鳥取縣　村尾きせ子君
一自製蜂蠟　一塊　鳥取縣　山根五百藏君
一蝶形磁石　一個　同　河尻重太郎君
一蟬形磁石　一個　同　蓮佛万吉君
一蝶形帽子掛　三個　和歌山縣　藤枝碩三君
一銅製茄形香爐（昆蟲附富山縣工業學校製）　大阪府　由比昌太郎君
一蟲除神符　數葉　埼玉縣　櫻井倚畊君
一蟲除神符　四種七葉　新潟縣　佐藤榮君

右寄贈相成候に付茲に芳名を揭げて其厚志を謝す

明治三十五年九月　　名和昆蟲研究所

第十四回全國害蟲驅除講習會員募集

開期（自十一月廿五日 至十二月八日）**二週間**（定員四十名）

全國害蟲驅除講習會は、既に前回までに、三府四十一縣の出身約七百名の有爲なる修業生を出せり依りて此際益々斯學の奮興を期せんことを欲し、來る十一月二十五日を以て第十四回の開講式を擧げんとす。斯學に志あるの士は、速かに其手續を經由せられよ。

今回は全く增員の設備無きを以て、その正式の手續を了し、確定名簿に登錄せられたる正員のみを以て、會を組織する事となしたれば、入會の諾否は一に申込の遲速に由る。

尚申込期限を、**十一月十五日以前**と定むると雖ども、當所の都合により、隨時入會を謝絶することあるべし。規則書入用の向は郵券を添へ至急照會あれ、直ちに送致すべし

明治三十五年九月　岐阜市京町　名和昆蟲研究所

右講習會は會場使用上の都合其他本號雜報欄揭載の如き事情相生じ候に付、其開期を變更致候此段應募者諸彥に對し及報告候也

雜誌昆蟲世界發刊滿五年祝意

學説

◎益蟲に就て

農科大學教授理學博士　佐々木忠次郎

本年本月を以て『昆蟲世界』は發刊滿五ヶ年の盛運に際會せり、依て益蟲に關する記事を寄せて、聊さか祝意を表せんとす。抑も益蟲と稱するものは、吾人に對し直接間接に有益なるもの丶總稱なるが、其吾人に益するの方法に至りては敢て一なるにあらず。乃はち吾人に衣食の原料を給するの益蟲あり、或ひは工藝上重要なる原料を給するの益蟲あり、或ひは藥料を給するの益蟲あり、或ひは諸害蟲を食して蟲害を除くの益蟲あり、又或ひは諸害蟲に寄生し之を斃して蟲害を除くの益蟲あるなり。就中、吾人に衣食の原料を給するものは、家蠶と蜜蜂となるが、家蠶は往昔より東洋諸國に多く飼育せし所ろのもの即はち衣服の原料たる生絲を製出する大益蟲たるの故を以て、其體軀の微小なるに似ず、毎に本邦に飼育せらる丶の數量は實に夥たゞしく、現に明治三十二年に製出せし蠶絲類のみにても、其全額は無量六千萬圓以上に達し、優に邦產輸出物總額の二割五分を占めたりき、其益蟲中の益蟲たるや明かけし。天蠶、柞蠶の類また一種の生絲を製出すべき益蟲たるに違はざるも、其生絲の產額は、前者の如く敢て多からざれば、此より收得する利益も從へて薄し。』蜜蜂は本邦處々に飼育せり、これより蜂蜜を收めて食料或ひは醫藥に供し、又蜂蠟を獲て工藝用品となすべし。又一種の土蜂れ幼蟲は、これを蒐聚して所謂

蜂の子飯を炊き、蟲螽は之を炙き、若くは儀助羮として食膳に上すべし。

工藝上重要の原料を供するものは、耳五倍子蟲、コチニール蟲、蟲白蠟蟲、五倍子蜂等なるが、その中耳五倍子蟲、五倍子蜂は、何れも五倍子を製出するを以て、此より多量の沒食子酸を得べく、コチニール蟲よりは、赤色の顔料を製し得べく、蟲白蠟蟲の分泌物よりは、一種の白蠟を得べし。又醫藥に供すべき蟲類は、芫菁、東洋蜚蠊、赤蟻等にして、芫菁は恒に發泡劑に用ゐられ、東洋蜚蠊は水腫症の治療劑に用ゐらる。而して赤蟻を火酒に浸すに、それより出づる蟻酸は火酒に溶解するを以て、其溶液をば僂麻質斯の治藥に充つると云ふ。

害蟲類を食とする昆蟲類は、蓋し極めて多きも、其重なるものを螻蛄、螳螂、蜻蛉、ウスバカゲロフ及びクサカゲロフの幼蟲たるラクダムシ、サソリムシ、サシガメ、瓢蟲及びその幼蟲、蟻、トクリバチ、ゴミムシ、ハンメウ、ハネカクシ、屍蟲等となす。又諸害蟲類に寄生して、之を斃す所ろの主なる益蟲を算ふれば、馬尾蜂、卵蜂その他寄生蜂種の幼蟲等にして、なほ寄生蠅の幼蟲即はち蛆も諸益蟲に寄生するなり。蜂類は其下卵器を害蟲の皮膚内に差込み、蠅類は害蟲の體皮面に卵子を產付け、幼蟲孵化すれば、直ちに害蟲の體内に入込み、其内臟を食して害蟲を斃すこと多かり。但し蠶兒の蛆蠅は、其食桑に產卵するを以て、蠶兒の桑葉を食するや、卵子は桑葉とゝもに蠶兒の體內に入り、後遂に其宿主を斃すに至るなり。然れば、蜂蠅類は、もと益蟲なるも、唯蛆蠅は有益蟲蠶兒の仇敵たるが爲めに、常に害蟲として論ぜらるゝなり。

右に擧ぐる所ろは、主要なるもの數類に過ぎざれば、此他猶ほ益蟲と稱すべきもの固より尠しとなさず而して此等の益蟲に就て調査攻究を加ひ、其蕃殖を圖り、其保護を善くし、更に步武を進めて新種の益

蟲を捜求する等の事は、害蟲驅防の手段として、特に奬勵すべきの要務たりと信ず。蓋し益蟲の蕃殖を圖らんには、昆蟲學の力に藉らざる可からざるに因る。然らば則はち害蟲驅除の方策を求めんには、自づから昆蟲學を修研せざる可からざるなり。

◎岐阜蝶の分布を記す

名和昆蟲研究所長　名和靖

岐阜蝶の始めて本邦昆蟲書に記載せられしは、約そ六七十年以前の事にて、有名の實驗家吉田雀巣庵の寫生圖を以てその嚆矢とすべし。當時は之をダンダラテフと稱せしが如きも、其意義の不明なる爲にや深く留目する者とても無かりき。況して其分布區域の廣狹と習性經過とをや。降りて明治十六年の春、余は之を岐阜縣下に於て採集し、其學名、種別等の說明を博士石川千代松氏に求むるや、是は新種に屬する奇品なりとの鑑定を與へられしより、端なくも茲に同志の注意を惹起し、尋でまた世人よりは岐阜蝶の邦稱を命ぜられぬ。於是乎、その產地、名稱等に關し、一時學術雜誌上に、時ならぬ筆花を咲かしたる事もありき。これを二十年前に於ける岐阜蝶採集の事實とす。

想ふに、余が明治十六年四月廿四日に、始めて之を岐阜市の東北、貳拾餘里の一寒鄉、美濃國郡上郡祖師野村に於て捕獲するや、事固より偶然に出でたれば、其食草に將た其種屬に、之を精查するの遑なくたゞ從來未だ嘗て採集し得ざりし異品を、標本の一に加へたるを以て滿足せしが、超えて十八年四月廿五日、再たび之を美濃國池田郡霞間ケ谷に於て獲、同廿七日には、三たび之を同國大野郡深坂村、長瀨村及び谷汲地方に於て採集しき。此等の諸村は岐阜市を距る約そ五六里の間にあるを以て、之を第一回採集の地に比較すれば、著るしく分布の區域を縮少せしを悅こびしに、尙數回各地を踏破の結果として

こたびは岐阜市の東隣に屹立する金華山、並に距離の二里半許に過ぎざる方縣郡御望村に於ても、其發生を確かめ得ぬ。去れば明治十六年より同二十年に亘る間に、余が採集せる成績を圖解すれば、恰も下に畫くが如き一個の渦線狀をなし、二十里の遠地より、漸次卷縮して遂に一里の近郊に及べるを見るなり。

（イ）祖師野村
（ロ）霞間ヶ谷
（ハ）深坂村
（ニ）長瀨村
（ホ）谷　汲
（ヘ）御望村
（ト）金華山
（チ）岐阜市

十六年　十七年　十八年　十九年　二十年

併し乍ら此際に到るも、なほ其食草等を確かむるに至らざりしが、明治二十年の春、懸賞採集を行ひたる時、助手名和梅吉の谷汲山に於て產卵の狀を目擊せしより、こゝに其食草のウスバ細辛たることを明らかにし、其後數回の實驗を經て、幼蟲より蛹化の狀態等をも知ることを得たりき。而して此前後の顚末は、十數年前、世に公けにせる余が記述を閱讀せし讀者の今に記臆せらるゝ所ろならん。

上記の事項は、皆余が親しく關係せしものゝみなるが其同志によりて採集せられしは、廿二年四月以後にあるが如し。今其例證を摘錄して、分布區域の一斑を示さんに、（甲）エーッチ、ルーミス氏の採集者の談に依れば、明治廿二年四月十一日に東海道線山北停車場近傍に於て、一農夫の岐阜蝶一頭を捕ひ來れる者ありしも、食草の有無は之を知ること能はざりきと。（乙）山形縣尋常師範學校敎員安藤喜一郎氏は、同年同月廿八日に同縣羽前國南村山郡寶澤と稱する山形市以東の小山にて、食草とゝもに之を採集しき。（丙）翌廿三年四月に、前記安藤氏の依賴を受けたる佐藤泉氏は、これを山形縣羽後國飽海郡觀音寺村に

て、食草と併せ獲たる旨を發表し、なほ安藤氏も、同郡一條村にて、同一の事實に遭遇せる旨を公けにしぬ。(丁)其翌廿四年四月十六日には、廣島縣尋常師範學校教員太田義彌氏、これを山口縣周防國玖珂郡柳井村琴石といへる處にて捕獲せしも、食草は之を採るに由なかりきと。(戊)明治廿六年四月九日、三重縣博物學會員岡田松之助氏は、伊勢國員辨郡南内谷に獲たり、但し其食草の有無は不明に屬す。(己)同年四月廿三日、鳥取縣尋常師範學校教員高橋直義氏は、之を同縣因幡國法美郡大源大山に發見しき。食草の不明なるに至ては上に同じ。(庚)同年同月同日の事、福島縣尋常師範學校教員根本莞爾氏は、岩代國福島町北方の信夫山陰にて之を獲たるが、同處には薄葉細辛の自生ありきと。(辛)同年五月十四日には奈良縣尋常中學校教員東作太郎氏の河内大和の國境に跨がれる金剛山にて之を獲たるあり、同地また食草の生茂するものありきと。(壬)明治廿七年四月十八日、滋賀縣尋常中學校校員粟野傳之丞氏、近江國比叡山に採集を試ろみ、食草をも併せ獲たりき。

此等十餘の採集報は、去二十年に其食草たるウスバ細辛の發見以後、當昆蟲研究所創立以前に起れる事實にて、過半は動物學雜誌の登載を經たるものに係り、其他は採集者の私信を引用せしものに係る。然らば當研究所機關紙『昆蟲世界』の發刊後は、更に他方面に於て、如何に分布の調査を遂げ得られしかと云ふに、(壹)當所員の岐阜縣下に於て、新たに其發生地を探りしもの二三處に上り。(貳)明治三十三年には、當研究所助手森宗太郎は、福井縣越前國今立郡神明村北野及び足羽郡福井市足羽山等にて、成蟲幼蟲に併せて卵子をも採集せしが、其時期は五月の初めなりきと。(三)昨三十四年四月、第一囘全國昆蟲展覽會を開きしに、其出品中また岐阜蝶數頭ありて、一は三重縣伊勢國桑名郡七取村伊東照代氏の出品に係り、其一は岐阜縣揖斐郡昆蟲研究會、他の一は同縣加茂郡昆蟲研究會員の採集せるものなりき。

（四）新潟縣越後國岩船郡神納村の佐藤榮氏は、昨春不圖其郡内に於てこれを捕獲せりきと物語る。（五）同じ昨年の冬、岩手縣陸中國和賀郡に於て、郡の昆蟲展覽會を開きしに、列品中には姫種の岐阜蝶ありきと、同縣陸前國氣仙郡小友村なる鳥羽源藏氏へ報じ越しぬ。（六）岩手縣陸中國稗貫郡湯口村中田谷藏氏より、今年五月其郡内に採集を行なひたる結果、十九日と廿二日とに各々一頭を獲たりとの通報ありき。（七）從來斯學者の眼睛に映ぜざりしも、今年その多生を確りめしは、岐阜縣養老郡にて、去月同郡昆蟲學會の開催せる、昆蟲標本展覽會出品中には、數多の雌雄の陳列せられしものあるを見き。

斯く列擧する時は、斯種の本島各處に分布せらるゝことを明ふむべし、而して此調査によりて得たる所ろの諸點を約述すれば、（壹）岐阜蝶は、北緯約三十四度より、三十九度の間に於て、廣く其種族を分布せり。（貳）岐阜蝶中、姫種と稱するものは、未だ多く發見せらるゝに至らず。（三）成蟲の發見せられたる地方は多きも、其食草と其幼蟲とを檢索せしものは少なし。（四）未發見地中には、其棲息を豫想すべき地方少なからず。（五）岐阜蝶は、暖地よりも寒地に於て、從來多く發見せふる』。ろも此五要點は、斯種の地理的分布を調査するに方り、また記臆すべき價値ありと信ずるを以て、一言茲に讀者の注意を促がすとゝもに、尚ほ他に發生地の有ふんことを疑がへる理由をも陳置かんに、要は斯種の習性、經過に因づくと言はんのみ。即はち斯種にして、若し一年二回の發生を遂げたらんには著るしく人目に入るべきも、早春纔かに一回の飛舞をなすに止まると、其比較的寒地に棲息するに關はらず、羽化期の最とも早きとは、容易に捕獲を脱がるゝ所以にして、特に食物を人家の近傍に求め得ざるは、全たく採集者の眼を晦ふますに足れりとすべし。故に其土地に巧妙なる採集者の跋渉搜索するあくんば、永く其種族の蕃殖を擅いまゝにする事を得べく、又今日まで發生地外と目せられし處と雖ども、採集者の周到なる檢索

を經ば、或ひは將來、發生地の一に加へらるゝに至るやも未だ知る可からざるものあり。現に岩代羽前陸中に包まれたる陸前の如き、越前美濃伊勢に密接せる東近江の如きは、共に前者に屬し、美濃の養老郡の如きは、後者の適例となすべし。而して余が發生地にあらざるかを疑へる地方は、未だ踏査を經たるにはあらざるも、唯其濕度、其植物、其地勢等の隣國に相近似せる點あるが爲に、生物の蕃殖上より、斯く推測を下したるに外ならず。」

岐阜蝶に大小二種あるは、既に斯學者の確認せる所ろなるが、今これを比較する時は、其大形種に屬するギフテフ（Luehdorfia japonica Leech.）の幼蟲は全身黒褐にして稍大なるも、ヒメギフテフ（Luehdorfia puzilio Ersch.）のものは背上に十餘の横白帶を有し、且氣門の黄點顯著なり、而して前者後者共に、そのウスバ細辛を食とするは相同じきも、蛹形は幼蟲の大小に從がひ、成蟲の色彩は後者反つて濃黄を呈はせり。其他發生の期節に至

りては、寒暖その地によりて異なり、決して一樣に論じ難きも、岐阜縣下にては三月の下旬より四月の中旬間を普通とし、東北地方にありては、五月上旬前後に多生すとの報道に接せり、採集者にして巧みに此短少の發生期に應ずることを得ば、また其捕獲の少なきを憂ふるに足らざる可し。今茲、雜誌昆蟲世界發刊第五周年に當り、第壹號の卷首に收めたる岐阜蝶發育圖に因みて、之が分布の記を作る、記事の足らざる所あらば、覽者幸ひに補修の勞を吝むなからんことを。（昆蟲世界第壹號口繪參看）

◎蠶蛆驅除豫防法（續）

農商務省京都蠶業講習所　荒木武雄

唯茲に注意せざるべからざるは、蠅若くは卵の驅除豫防法なりせば、假し一己人の單獨施行法に於ても直ちに効力を生ずべしと雖ども、蛆蛹の驅除に至つては、獨力を以て之を行ふも其効なきが故に、必ずや全國一致の力を以て爲さゞるべからざる事是なり。是に於てか、余輩の望む處は、各府縣に於て後段記載するが如き規程を設けて、之を强制的に實行せられんことの一事に在り。

余輩は規定を發布するに就ては、熟慮愼重の體度を採らざるべからざることを知る、又之を施行するに當ては、少なからざる費額を要すべきことを知る、翻つてまた一般蠶業者の之れが實行を强いらるゝに就ては、多少の苦痛を感ずることを知る。然りと雖とも蠶蛆の斯業界に慘害を與ふるとそれ今日の如く、尙は漸次其力を逞ふせんとする傾向あるに思ひ及はゞ、相應の費額と、多少の痛苦は寧ろ忍はざるべからざるなり。況んや蠶蛆は他の病原菌の如く、常に空氣中に存在するものにあらず、亦肉眼を以て識別すると能はざるものにあらず、年を隔てゝ繁殖の力なく、一年捕殺し盡さば直ちに効驗あるを以て、年を重ねて施行するの要なきに於てをや。又況んや後日完全なる良法の發明せらるゝことありとも、其間幾多の

歳月を重ねざるべからざるのみか、この歳月間に、其受くる損害は、如上の方法を施行せんが爲に要する費額の數百千倍なるに於てをや。而して以上開陳したる所ろを約言すれば、左の如し。

一、蠶蛆驅除豫防の好時期は、其仔蟲期及び蛹期とす。

二、蠶蛆は屋内の地下に蟄伏せんとする仔蟲、若くは蟄伏する蛹を捕殺すれば、殆んど全滅せしむることを得べし、但し共同一致の力によらざれば効力なし。

三、目今に於ては後段記載するが如き規程を、各府縣に於て發布し、之れを厲行嚴施するは頗ぶる時宜に適したるものにて、決して尙早に失するものにあらず。

蠶蛆驅除豫防規程案

第一條　春期養蠶者は、蠶兒上蔟後四日目以內に於て、蔟中の斃蠶を集め之を燒却すべし。

（理由）　蔟中の斃蠶中より、蠶蛆の這ひ出て化蛹するものあり、而して上蔟より四日以後に至る時は、斃蠶の多くは腐敗して除去に困難なれば、本條の如く四日目に於て收集燒却するを可とす。

第二條　春期の生繭は、左記の甲號、若くは乙號の裝置を爲したる室、又は丙號箱中に置き、蠶蛆の逃逸を防ぐべし。但し上蔟後八日目以內のものは此の限りにあらず。

（甲號）　室の出入すべき處には戶若しくは障子を立て、其外側床上に高さ一寸五分以上の木を釘着し、床上人の動作すべき部分及周圍はブリキ、其他は日本紙三枚以上を以て罅隙を目張す、而して四隅には蠶蛆の陷入すべきブリキ製孔を設く。

（乙號）　床下を漆喰とし、四隅に蠶蛆の陷入すべき穴を設く。

（丙號）　箱は木製とし、四隅內側にブリキを張り、罅隙はブリキ若しくは厚き日本紙四枚以上を以て目張す、而して周圍の椽の高さは、容れたる繭の上面より、一寸五分以上の餘裕あらしむべし。

（理由）　上蔟後八日目以內及夏蠶に於ける出蛆は稀なれば、本條の制限外とす。

本條甲及乙號の裝置は、之れを製絲家、大製種家、繭仲買人等に行はしむる目的なり、研究の結果に據れば、日本紙三枚以上、若しくは寒冷紗を以て平面を目張すれば、蠶蛆の突破することなしと雖も、此等の室にありては常に人の出入劇しく動作頻繁なればこの目張も或は破損するの虞あり、是れ本條に於て人の動作すべき部分及周圍の目張りをブリキと定めたる所以なり。而して一頭

の蠶蛆に就きて云ふときは、高さ六分の椽木外に這ひ出づること能はずと雖も、多くの蠶蛆の累積して一寸の高さある椽木を登りたるを見たり、然るに一寸五分の高さあれば、決してこの憂なきことを確めたるにより、床上釘着の木の高さを一寸五分以上と定めたるなり。尚四隅の「ブリキ」製の穴は深さ五寸、徑五寸とし、床を切開して箱入し置くを可とす。

乙號の装置は、最完全なるものなれば、蠶室新築等の場合に於ては、可成實行せしむべし。

丙號の箱は、以上の甲號若しくは乙號の装置をなすに困難なる小蠶種製造家、又は八日目以後に於て殺蛹すること能はざる養蠶家等に使用せしむる目的に出づ。

普通養蠶家等は、左圖の如きものを調製し、養蠶期中蠶箔の代りに使用し、後生繭を容るゝに當りて其罅隙を目張せば十分なり。収繭を一時三四組重ねとなすものは、周圍二寸の餘地を存せば可なり。椽の高さは二寸以上たるべし、是れ繭の短徑は凡五六分にして、席の厚さ一二分なれば、其以上一寸五分を存する都合なればなり。

第三條　生繭運搬の容器には、厚き澁紙を敷き、蠶蛆の逸散を防ぐべし。

（理由）　生繭運搬中、蠶蛆逸散の虞あるにより、即ち本文規定の必要あるなり。

第四條　蠶蛆は之を收集して、逃逸の憂なき容器に貯藏し置き、臨檢員の承認を得たる後燒却すべし。

（理由）　本條は取締上臨檢の必要あり、而して臨檢員は蠶種檢查員及警察官等を適當とす。

第五條　本規定に違背したる者は、五錢以上壹圓九拾五錢以下の科料に處す。

（理由）　本規程は各府縣知事に於て發布すべきものなり、是故に養蠶家若しくは製絲家等の中、指揮者の命を妨害するものある時には、害蟲驅除豫防法第十二條を適用して可なりと信ずるに因る。

（完）

生繭貯藏箱

（イ）ブリキ製
（ロ）空隙（一寸を隔つる毎に一寸の隙きとす、この部分は生繭を入るゝ前に目張するなり、其高さを二寸長さを三尺四寸とし幅を二尺五寸とす）

◎昆蟲の發音

岐阜中學校教諭　長野菊次郎

昆蟲類の發する音は、哺乳類、鳥類又は蛙類等の如く、口腔より漏れ出づる聲にあらず、多くは器械的作用によりて清朗の音、戞々の響をなすものなり。其目的につきては未だ盡とく之を説明すること能はされども、多くは雌の歡心を求めんが爲めに、雄の奏する戀愛歌に屬し、其他なほ注意を與ふる爲め、意志を通せん爲め、又は感情の表出によるものもあるべし。

蟬類の發する喨々の歌、スヾムシ、マツムシ等の發する喞々の吟等は、明かに雌雄淘汰より生じたる一種の愛歌にして、吾人の賞玩措く能はず、採りて以て詩歌の材料となすも亦此類のものたり。蟲の音を愛することは、古來日本支那等東洋の特色にして、歐米人は之が嗜好を缺くと見ゆ、ダーウヰン(Darwin)氏の人の由來(The descent of man)中に『昔は音を聞く爲めに、希臘にて蟬の類を籠に飼ふことありしが支那に於ては今日尙ほ之を行へり』云々とあり。又ジョルダン(Jordan)氏の動物の生活(Animal life)中には、次の如く言へり『日本にては鳴く蟲を籠に飼ふこと行はれ、價も隨分高ければ、此等の蟲を捕ふることは、相應に儲ある職業の一となれること、猶鳴禽類の歐米に於けるが如し』云々と、同じジョルダン氏が、一昨年の夏、相州三浦にて、蟬の音を鳥の聲かと聽誤りしこと抔、想ひ合すれば、歐米諸國にては、美音を發する昆蟲は比較的少なきにあらざるか、然らざれは居常痛く之を念頭に置かぬなるべし。兎もかく彼等が鳥の聲を愛することを知りて、蟲の音に意を注く事の發達せざりしは、美感上明かに吾人に一歩を讓るものと謂ふべし。

扨昆蟲の發音につきては、其方法種々あれども、前述の如く其目的の重なるものは、雄の雌を誘ふ方便

たるを以て、清亮の美音を發するものは殆んど雄に限れり、いざ其主なる方法の二三を次に列記せん。

第一、特別の器官によること　昆蟲類にて特別の發音器官を具へたるは、蟬類を以て著るしとす。今アブラゼミの雄の腹面を觀察すれば、後胸より二葉の鱗狀板（鼇海集には腹板とあり）下垂せり、試みに之を擧ぐれば、腹胸の界に白き薄膜あり、此の薄膜を除けば、腹環の隆起部を起點として大なる一束の肉筋のV字狀に左右に走れるを見る、此肉筋は薄膜にて被はれ、其兩端は圓きキチン質の薄板に着合し又此の薄板の中央より彈力ある細き腱を延ばして、腹壁に接せる皷膜に連結せるを認むべし、なほ其背部に當る處は、腹部第五環節に至るまで、殆んど空腔たるを見ん。而して其發音の理に就ては、諸大家說を異にすれども、茲には肉筋の伸縮によりて、皷膜に振動を與ふるが爲に音を發し、外圍の空腔は、共鳴の理によりて其音を強むる爲めの裝置なり、との說に從はんとす。詳細は動物雜誌第二十四第二十六兩號に連載せる波江氏の論文を見るべし。

第壹圖　ツマオヒムシの前翅（一倍半）

甲　乙　イ　ロ　丙　ハ

（甲）右翅の表面　（乙）左翅の裏面　（丙）はハ部の廓大

第二、翅を摩合すること　直翅類にして美音を發するもの丶多くは、此類に屬せり、今ウマオヒムシ（チンチヨ、又ズイツチヨ等の方名あり）の翅を觀察するに、其前翅は軀の左右の面に接して、稍垂直の位置を保つと雖ども、其基部に近き內方三角形をなせる一部は、殆んど直角に折れて、左翅は右翅の上に重なり、其彩色さへ他の部分と異なり。更に此三角形をなせる局部を細檢すれば、右翅には第一圖甲

の(ロ)に示すが如き透明なる膜あり、之を發音鏡と名づく、而して其一部の脈(イ)には微小の凸起を有せり。又左翅の同じ位置の裏面を檢すれば、乙圖(ハ)に當る所に宛がら梯子に似たる凸起あり、之を廓大すれば、即ち丙に於て見る所の如し。然ればウマオヒムシは古人の所謂、馬蜥之蟲、至秋而鳴、(中略)金木相軋、以爲聲ものにて、此梯子狀凸起を以て右翅の小凸起面を相撫し相摩するの結果、發音鏡を振動せしめて、機杼の淸音を發するものたることを知るべし。キリギリス、クツハムシ等も亦略ぼ之に同じ。

第三、後翅にて前翅を摩擦すること　蝗蚱科中には、此方法によりて發音するもの多し、特にナキイナゴの之が適例たる可きことは名和氏の教へらるゝ所なり。而して同氏の厚意により割愛せられたる標本は、今や余が研究材料中にありといへども、製圖未だ完からざるを以て之か解說は他日に讓り、此には唯ステノボツルス、プラトルム(Stenobothrus pratorum)につきて說明せんに、此蟲の後翅の腿節の內方には、第二圖甲(イ)の部分に於て、披針狀にして彈力ある小齒の一縱列を有し、其齒は八十五乃至九十三を數ふ、即ち之を廓大すれば、第二圖の乙に示せるが如し。そも此蟲は此等の小齒を、前翅の鋭とく突起せる脈條に接觸して、其音を發せしむるものなるが、ハーリス(Harris)氏は、此蟲の音を發せんとするや、其脛部を腿の下面に存せる溝中に曲げ込みかくて活潑に前翅を摩し、左右肢交互に之を行ふなりと言へり。彼の支那の博物學者が、兩股を以て翼を擊て鳴くと說け

第二圖　ステノボツルス、プラトルムの後肢(ランドア氏原圖、デセント、オブ、マンより)

るは、蓋し此作用を指すなるべし。

第四、氣管を空氣の出入すること　此方法は呼吸作用により、空氣の氣門を出入するに際して氣門の内部に存するキチン質突起を振動せしむるより發音するものなり。蠅、蜻蛉、蚊、蜂等は此例にして、就中、蠅及び蜻蛉は、其胸部氣孔より、空氣の逃出する際に音を發し、マルバチ類は又腹部氣孔によりても音を發す。たゞ此に注意すべきは、氣孔によりて發する音は、翅の振動によりて生ずる音とは全く別なる事とす。ランドア(Landois)氏の言ふ所によれば、蜜蜂の翅によりて生ずる音は、A音（一秒時に四百二十七回の振動をなすもの）なれども、氣孔によりて生ずる音は、之より一オクタブ(Octave)以上高くして、即はちB″音（振動數九百六十）乃至C″音（振動數千二十四）に至ることありとなり。

第五、翅の振動によること　翅の振動により、空氣を拍撃して發する音は、各種の昆蟲に於て聞くべきものにして、其音の高低は、即はち羽の振動數の多少に關係することと勿論なるが、假ひ同種の昆蟲にても、躰軀の大小、又は動作の活潑なる時と疲勞したる時とによりて、高低の差を生ずることあり。例へば、マルバチ類の一種ボムブス、テレスツリス(Bombus terestris)の雄は音を發するに關はらず、是より躰の少しく大なる雌は、一オクタブ高きA″音（振動數A′の二倍にして、八百五十三）を發するなり。又ラボック(Lubbock)氏の觀察によれば、家蠅は一秒時に三百三十五回（三百四十二?）翅を振動せしめてF′音を發し、蜂は一秒時間に四百四十回（四百二十七?）の振動をなしてA′音を發す、然れども疲れたる蜂はE′音を發するものにして、其振動數は三百三十回（三百二十?）なるべしと、以て證とすべし。（括弧中の數は、ランドア氏の振動數に從へるもの）

右に述ぶる所の外、他の方法によりて發音するもの甚はだ多く、一々之を區別したらんには、更に十數

條を加へざる可からず、然れば今其一二を摘記せんに、メンガタスズメ及び天蛾類の或種は、口吻の基部を鬚(Palpi)にて摩擦し、コメツキムシは頭部と胸部とを摩擦し、カミキリムシ類は前胸部と中胸部とを摩擦し、コフキコガネの類には腹部關節と翅を摩擦するものあり、チヤタテムシは大腮を以て他物を摩擦し、其他歐洲產の蟻の一種(Mutilla Europaea)は第二と第三との腹部關節を摩擦し、又シデムシの或種には腹部の背面に二條の鑢狀突起ありて、鞘翅の後緣を摩擦して以て發音する等、なほ一々檢擧に遑あらず。特にランドア氏の如きは、甲蟲類の發音法のみを十餘類に區分し、スカッデル(Scudder)氏は、通常グラスホッパー(Grasshoppers)と呼ばはるゝ蝗螽類の發音法には、四種の別あることを記述せる等此等種々雜多の事實は、到底余輩をして之を簡潔に括總するを得せしめず、去れば此編に釋證する所は其顯著のもの二三を擇ぶに過ぎざるなり。

◎蜻蛉と天牛に就て(第九版圖參看)

名和昆蟲研究所調查主任　名和梅吉

雜誌「昆蟲世界」の第壹號を發刊せしは、今を去ること五年前の今月にて、實に近年無比の凶歲と稱せられし明治三十年の九月なりき。當時、本邦に於ける斯學の思想はなほ淺薄に、上下たゞ浮塵子の名に驚怖狼狽の狀を呈するのみにて、確實有効の驅防を講ぜざりし結果、蟲學史上には永く拭ふ可からざるの汚點を留め、國家經濟の上よりは多大の損害を算しぬ。任他これが爲めに害蟲に對する至大の注意を喚起し、爾後また其轍を踏まざらんことを想はしむるに至れるは、誰しも爭ふ可からざるの事實たり、是れ豈に早晩害蟲驅除豫防規則を、死法より實地に活用せんとするの曙光たらずとせんや。而して斯かる危難の際に呱々の聲を發したる昆蟲世界は、幸はひに先進の誘導と愛讀者諸彥の眷遇によりて、今や既

に六拾號を過ぎ、茲に春秋五年の經過を報ずるの嘉辰に達しぬ。假ひ時勢の必要より、此に到らしめたるものありしとは云へ、抑そも斯學の普及發達の功に歸せずんばあらざるべし。

上述の縁由を有するを以て、余はこれより本號の口繪（第九版圖）となせる蜻蛉と天牛とに就て略説を試ろみ、一は之を保護するの要あるを辨じ、一は之を驅除するの急あるをものせんとす、蓋し他の論題を拉し來らんよりは、閲覽の際に、興味を與ふるもの或ひは多からんと信ぜしに因る。

◎蜻蛉　蜻蛉の本邦に縁故深きは言はずもがな、工藝品に、武器に、詩歌に入りて其資料となり、其詞藻とせられしもの蓋し列記に勝へず。去れば世人の之に對する智識も、亦稍他種と異なる所ろあるも古來の習慣として之を慘殺し、左なくば瘧因を避くると稱して、これに近づかしめざる地方も之あり、此兩説の如きは孰れも極端に失せる僻見に出で、之が保護を唱道する今日の時代には決して適切と謂ふべからず。そも蜻蛉は昆蟲種屬中、劣等に屬するものなるが、昆蟲の始元期に發現せりと云ふも不可なき程、古くより棲息を遂げし故にや（前號講話欄外國産昆蟲化石の條參照）其種品また中々に多く、現時の邦產六拾有餘に上る。その形態は何れも略ぼ同一に出で、殆んど同大の四翅には網狀の脈絡を貫通し前後兩翅ともに前縁の先端に近く不透明の縁紋を彩どり、頭部には其體軀に相應しからぬ巨大の複眼を具へ（銀色蜻蜓、鬼蜻蜓、薄翅黃蜻蛉は其適例たり）多くは別に三單眼をも頭頂に點ぜり。觸角は短小に刺毛狀をなし、八節より多からず。胸部は濶大に、其腹部は頗ぶる長く、其形ち圓筒の如きあり、或ひはまた扁平なるもあれど、雄蟲の交器の其第二節の腹面に存在するは皆同じ、是れ他の昆蟲に其類例無き特異の構成とすべし。體色は黑黃赤藍決して一樣にあらず、翅色また黑色あるもの、黃褐なるもの、淡褐なるもの、斑紋を有するもの等ありと雖ども、概むね瑩徹にして薄縠なり。

蜻蛉はその形態、體色の異同によりて、分ちて二科に小別せらる。即はち其一を蜻蛉科といひ、特は性質の勇猛、體軀の强健なる品種をこれに隷せしむ。其特徴とも云ふべきは、靜止の際に於ける姿勢にて四翅を水平に開張するに在り。而して此科のものは、皆頭部豐大にて、複眼は其頂部に於て互ひに相隣れるものと、少しく離隔せるものとの兩種ありて、其腹部は濶し、常に高處を飛翔し、速力最とも快捷を極む。第二を豆娘科と云ふ、前科のものに較ぶれば、形體細窄にして圓筒狀をなし、一も扁平濶大のものある事無く、又靜息の際には、四翅を疊合して之を脊上に負ふ、其後翅の基部は前翅の基部よりも狹く、腹眼は左右に離隔せり、此科のもの丶特性として、低く地上を飛翔し、多くは淺水軟草の邊りに點々徘徊するもの丶如し。

兩科の成蟲は斯く區別し得べきも、其幼蟲に至りては、共に食肉性の水蟲にて、龍蝨、子孑、其他の小魚類と棲息處を同うし恒に小蟲小魚を餌として其口腹を滿たす。蓋し幼蟲の下唇は異形を呈し、頭胸部の下面に曲折しあるも、之を伸ばす時は巧みに他物を捕獲するの便あれば、容易に蟲魚の類を食餌となすことを得るなり。斯くて化育を遂ぐれば、陸上に歧行して舊皮を脱し、始めて成蟲の形態に變ずるものなるが、是また食肉性にて絕えず蚊蚋、蝶蛾その他を貪食するが故に、扨は農作上に不少の利益を與ふるなり。

ハグロイトトンバウの圖(豆娘科)

本號の口繪に揭げたるは、蜻蛉科中の最小種にて、古來ハッチヤウ、トンバウの稱あり。其發見は凡そ文化文政の間にあるもの、如く、其命名は尾張國矢田河原の八町畷に於て始めて採集せしに因ると云ふ。雌雄は其地質を異にし、雄は赤紅色なるも、雌は淡黃褐

色にて且黑條を有せり。翅は共に透明にて、基部には微かに着色あり、翅力强からざるを以て、得て高飛することを莫し。地理上の分布は未だ詳かならざるも、愛知縣、岐阜縣、宮城縣、岡山縣等は、其產地として既に世に知らる。

◎天牛　天牛をカミキリムシと稱するは、嚙斷るの謂ひに非ずして、髫髮の義なることは和漢ともに相同じ、是れケキリムシの異名を有する所以なり。其種類甚はだ多く、邦產のみにても百數十種に上り、東西諸國の調查を經しものは、實に壹萬貳千乃至壹萬三千餘種ありと云ふ。此種のものは、何れも堅甲長角を以て裝はるゝが故に、英語にて之をロング、ホールン、ビートルとも呼べり。即はち此名の如く躰長に倍する長角を具備するものすらありて、特に雄蟲のものは、雌蟲より長きを常となす。形體の大小、體軀の色彩は複雜にして、其色に青黑赤碧褐の各種あるは勿論、或種は黑質に白斑を印し或種は白質に黑紋を飾り、或種は黃色に褐紋を描き、或種は紫黑に、或種は鮮紅なる等殆んど列記に勝へず。剩つさへ、其性質にも相同ドからざるものありて、前胸を中胸に軋して一種の奇音を發するもあれば、或ひは蝗蚱のかの如くに脚を翅鞘に摩擦して發音せしむるもあり、又中には、膜翅目の寄生蜂に酷似するとて、ヤドリバチモドキと命名せられしも之あり。（此種は前翅最とも短かく、後翅は長くして能く飛揚に適す、常に山間に在り）。

それ斯く異なれるも、其幼蟲の草木の莖幹內に隱栖を占めて、長日月間害毒を逞うし、宿主の生育を妨たげ遂に之を枯死せしむるに至るは均しく相同ド。其形狀は無脚にして頭部は小さく、胸部にて覆はるゝこと、宛然吉丁蟲の幼蟲のそれの如し。多くは一年の間に成蟲に化するが如きも、また幼蟲期に二三年を費やし、後始めて蛹化するもの尠なしとせず、是れ此種を飼育研究するに當り、斯學者の恒に困難を感ずる所以なり。

昆蟲學の上に於ては、天牛を分ちて三種となす。其一はノコギリカミキリムシの品種にて、體形は扁たく鞘甲は堅固に、前胸部の側縁は薄く且つ鋭利の刺針を具ひ、其前脚の基節は特に大にして横位にある等の特徴あり。其二は天牛類の過半を網羅し、形大は普通なるも、觸角は十一節より成り、前脚の基節は稍圓く、前脚脛節の內側には斜溝を有せず、前胸部の側縁は圓く、中央に刺狀の突起を有するもありて、下顎鬚の末節は尖鋭を缺ける種類のもの皆これに屬す。其三はキクスヒカミキリ、アサカミキリの類にて、觸角は前者に同じきも、前脚の脛節の內側には斜溝を有し、其下顎鬚の末節の圓筒狀をなすか、又は尖鋭なる種族これに隷す。

ハンノキノカミキリムシの圖(第三種)

因に云ふ、薔薇に加害するはオホキクスヒカミキリと稱する第三種に屬する一種にて、また梨樹、林檎等の枝梢にも發生して枯死せしむること多かり。成蟲は大抵五六月頃に來りて産卵するものなるが、雄蟲は雌蟲よりも小形にて、その頭部、觸角及び前翅の上部を除ける諸部と腹端とは全たく黑色に、他は帶黃褐色を帶ぶ。幼蟲は一年にして羽化し、果園に害を與ふること多し。菊に發生のもの亦第三種の一にて、小形黑色に、前胸の背上には赤褐紋を有せり。是亦五六月頃の發生にて、菊莖の梢頭に近き莖內に産卵し、爲めに忽ち凋萎垂偃の厄に罹らしむ、幼蟲は內容を蝕損し、後根際に化蛹す、一年一回の發生にて、古來園藝家に敵視せらる。彼の『後の花』てふ古書に、菊の舊根を去れば此蟲害無しと云へるも、畢竟根邊に蟄伏の蛹を除去するに外ならず。唯キクスヒモドキと呼ばるゝ益蟲の、此キクスヒカミキリに似たるより、恒に園藝家に疾視せられ、甚はだしきは菊に發生せる蚜蟲其他を食する際と雖ども、直ちに驅殺せらるゝことあり。是れ未だ昆蟲を知らざるの過失に出づるとは云

へ、益蟲保護の上より云ふ時は、決して輕視すべき事にあらざる可し。

本號の口繪とせし天牛は、第二種の小形種にて、雄の觸角は非常に細長く殆んど軀長の四倍あり、是をヒゲナガカミキリの稱ある理由とす。其體色は黑褐にて青灰白色紋を有し、雄蟲のものは雌の紋よりも判然たり。其發生區域は未だ調査せざるも、當昆蟲研究所所藏の標本は、先年近江國伊吹山にて採集せしものに係る。

◎第拾三回全國害蟲驅除講習會員の五分時演説

左に揭ぐるは、去八月一日より二週間、當昆蟲研究所の開催せる第拾三回全國害蟲驅除講習會の央に、其會員のなしたる五分時演説の一斑なり。紙面の都合あれば、纔かにたゞ太平洋方面、日本海方面及び四國、九州より各一名を撰擇して本欄の塡草に充つ。

（一）普通教育上に於ける昆蟲學の價値　　愛知縣　川端九一郎

普通教育即はち國民教育に於ては昆蟲學の價値を評定しませんでも、天地間の萬物はありとあらゆる皆教育の材料でありますから言はずもがなと存じます、併し乍らこれに就ての所感を述べますなら、茲に小學兒童の一群が居るとして、試みに昆蟲に關する問を出しましたならば正答を與ふる者は恐らくはありますまい、それも小供が恒に愉快として弄そぶ蟬や蝶の形態習性に就てであります、例へば蜂は翅が何枚、蟻の足は何本あるかと問ふて正答の出來ないと云ふのは、畢竟兒童の觀察力が足らん結果ではありませうが、要するに普通教育を施す所の教師其人の如何に依て此力は十分養成せらるゝ事と信ぜます、それも唯遊歩時間とか、理科の時間とかに少し注意をさへ與へれば、兒童は愉快を感ずるの外に昆蟲の習性形態を覺えまして、知らず々々の間に博物の智識を得る事が容易であるのであります、現に私の縣下では、渥美郡の教員の一人か昆蟲學の講習を受け且研究會をも設けられたとの事でありますが是等は最とも悅ばしき事と申さねばなりませぬ。之に反して昆蟲の智識無き人は、恰かも自巳の愉快を自巳が消失すると同樣で、草花に戯ふるゝ蝶は何故に我を迎ふるのであるか、日暮蟬や鈴蟲は何故に我

耳に彼れが如き美聲を傳ふるのであるか、或ひはまた蝶は何の用ありて舞ふのであるか、蟬や草蟲は何の望みがありて鳴くのであるかと云ふ樣な原理を究めず、たゞ彼は舞ふもの、此は鳴くものとのみ思ふて居るのであるから、一向に興味もなければ利益とても薄いのである、然るに雲山千里外の事物とか海外の形勢とかと云ふ問題になると、喋々時を吝むの色もありませんが、是れ所謂燈臺下暗しで、此の利を捨てゝ彼の短を取るのでありますから誠に遺憾に堪へぬ次第である。尙ほ序に申述ぶる事がありますそれは昨年末實業補習學校令が發布に成りまして、追々農業科若くは補習學校を設けられましたものゝ備この任に當る者の適否を考ふると前途如何であらうと思はれます、只農學楷梯や農業汎論の一端を素讀した教員の教授せらるゝのでありますから、眞實心配に堪へんのである、特に補習學校令の第七項中には養蠶と害蟲を各別にしてあるのに、遠慮會釋も無く素養の無い者が講壇に立たうとするのは、實地の經驗を積んだ農家が、益蟲を害蟲として驅除致したと云ふ咄よりもなほ寒心すべき事であらうと思はれます。そこで普通教育を行ふのには、昆蟲研究の如く實地に採集もし、製作もして、其後分類法により整頓を致すと同樣にせんことを望むのであります、第二には兒童の捕獲玩弄する所の蟲類に就て、其名稱やら習性やらを授け、また時期を見て其地方に適切なる害蟲驅防に關する事柄を教ふるやうに致したい、第三には補習學校の續立につれ書籍的研究の結果、意外にも善惡混同の弊が生じませうから深く此點に注意致したいのであります。之を要するに、小學校にせよ補習學校にせよ、何分實地に就て天然教授をせんければならぬ、特に昆蟲學研究者は之を尊尙せんければ致方がなからうと思ふのでありますが、此實地研究と云ふ事は兒童の觀察力養成、理科思想の進步と云ふ點に於て特に價値ある活ける學問と信ずる次第であります。

（二）害蟲を侵入せしむべき農家の缺點

鳥取縣　渡邊萬壽治

熟々農業界の狀情を觀するに、其智識の發達せざる爲めか、殆んど振動の氣に乏しく又精緻の觀察力を缺くもの丶如く存じます、例へば害蟲驅除の事業の如きすら之を心に留むる者少なく、昆蟲を以て自然に發生するものと固信し、如何に驅除をとも收支相償ふこと能はずとなせるが狀態でありますから、其危險なる事は今更申すまでも無いのである、故に一朝これが加害ありますれば、貧民は差當り朝夕の糊口に窮し、甚はだしきに至りては其最愛の子女を賣りて一時の困苦を凌ぐ者すらあッたとの事で、其實際と申すものは理想以外の事が多いのであります。然るに斯くならん間に驅防法を講すれば、眞逆に收

穫皆無となるの氣支へは無いのでありますが、農家は動もすると一擧手一投足の勞を吝みまして遂に挽回の出來ぬ大損失を來たすのであります。特に私の縣の或地方では、挿秧が終れば白滿と稱しまして農家は一週間位ゐ休業をするのである、勿論春來の多忙期を過ごしたのでありますから、骨休みも致方が無いとした處が、何の爲す事も無く消光して居る間に、螟蟲を始め總ての害蟲は非常の勢ひを以て其子孫の蕃殖を圖るのであるから、休業の間にも此點に注目せんければならぬのである、然るに一向氣が附きませんで害蟲偶生說を守り驅防なぞと云ふ事は夢にも思はんから、秋收の塲合になつて始めて凶作の聲を發せんければ成らぬやうになるも當然と考へます。此は自縣の事を一例に引いた計りでありますが何方にも其々弊風がある爲めに折角の驅除を普及せしむる事が出來ぬと存じますから、お互ひの責任としては、斯學の普及を圖るのが急務である、則はち害蟲の乘じて以て侵襲を逞うすべき缺點を補足するには、先づ第一に斯學思想の注入に勉めんければ成らぬ、而して此缺點の存在せん限りは到底國家の富强を期し得ない事と信じます。

(三)害蟲驅除の事業と公德養成の關係

高知縣　松本喜義

世間の人は蟬の聲に促されて午睡を貪ぼると云ふ此三伏の極暑に、私どもの耳へは蟲聲を研究せよと蟬が鳴くやうに聞へましたから、此講習會へ參ッたのでありますが、早や已に過半の日子を經ましたのと此炎熱をも厭はず講師諸君は幾多の方面から惇々講話せらるゝので、昆蟲界に對する觀念は時々刻々に高まり、日一日と地盤が固くなッて參ッたやうに感ぜられます。扨社會の現狀を觀察しますと、汽車とか汽船とか電機とかと云ふやうな物質的進歩は、實に驚くべき程高まりましたが、退いて情義的觀念は如何であるかと云ふに、却つて漸次に陷落するの傾向を示すではあるまいかと存ぜられます、畢竟自かふを利する事を知りて他を愛する心の薄弱に歸するもので、所謂社會の公德の缺乏に因ることゝ信じます。然らば之を矯正するには如何なる手段を取るべきかと云ふと、老壯者は暫らく措き、先づ第二の國民を感化するが寧ろ捷徑であらうと思はれる、即はち一たび兒童を將て散策を野外に試みんか、翩々花木の間に飛舞するの胡蝶や、生存上の妙理で以て蚑行して居りまする尺蠖を目擊させまして、更に歩を田圃の間に移して被害作物を示す時には、必ずや生徒は其蟲害の事を問出すに相違ありませんから、此時に先づ手近い蝶や尺蠖の事から害蟲と農作の關係、さては習性經過の一斑を說きまして、次第に害蟲の惡むべき事から益蟲の愛すべき事の大略をも說明し、それには共同驅除を行はんければ成らぬとの眞

理を敎へ、この話に聯關して公德の尙ぶべき事や純潔なる精神の必要をも知らしめて、此を以て第二の天性を形造らせましたならば、公德養成呼ばはりや道義頽懷呼ばはりをするの必要が無からうと存じます、況して法令の力を以て一齊驅除をなさしむるとか、上長が嚴命を下して强制施行をなさしむるやうな事は斷じて不入用となるのである、而して兒童に斯く敎習を加へるのは數十年後の用をなさしむる計りではなく、これによりて現在も其父兄を動かし得る利益があるのでありますから、害蟲驅除事業と公德心の養成とは常に互ひに密接の關係を有して居るのであります。

（四）鹿兒島市現行の害蟲驅除方法

鹿兒島縣　丹羽民三郞

私は元來鹿兒島縣の者ではありませんが、今回同縣から入會致しましたから少しく害蟲驅除の現況を申述ぶる心得であります。凡そ害蟲の化育蕃殖すると云ふに就ては、其源因多々ありませうが、第一は氣候の適否、第二は植物の多少、第三は天敵制裁力の强弱、第四は人爲驅除の緩嚴によりて左右せらるゝものと思ひます、若しも第一第二の事情が十分適當でありますれば、害蟲は益々蕃殖を致しませうけれども第三第四の事情にして其生存を妨害するに足る時には、漸次滅却せらるゝに違ひが無いのである處で鹿兒島は年中温暖で濕氣も十分でありますから、其食物とすべき植物の繁茂が非常なもので、此等の點に於ては蕃殖蔓延の要約を具備して居る。然らば之を妨制するの方法は如何であると云ふと、天敵の制裁は多少行はれ居るやうであるが、人爲驅除と云ふ一段に至ると冷淡と評するより外はない、これぞ同縣地方に年々大蟲害を被ふる源因かと思はれる、即はち蕃殖に對する障害が少ないから。而して斯く人爲驅除の行屆かざるは武士氣質の今に殘ッて居る爲めではあるまいかと思はれます、勿論在朝在野を問はず政治界に立て一廉の敏腕家と云はるゝ者の多數は、確かに同縣人であるから此點から見れば優に他に卓越する特殊の國柄には相違ないが、其影響が實業界に及ぼして、特に農業の進歩を障碍すること、變じたものらしい、現に今に至るも故南洲翁や其他豪傑の遺風を欽慕して、そンな煩らはしい仕事をして何するか、斯かる些末な事には頓着をするもので無いと云はん計りの擧動をして、古英雄一點張の者が多い、そして其意氣込を何事の上にも應用するのであるから、害蟲驅除の普及せざるも固より怪しむに足りない。併し此等の内情あるにつけても、縣農事試驗場や縣農會などでは、熱心に盡力はして居らるゝものゝ、成るべく些少の勞費を以て成るべく多大の効績を擧げやうとの主義の下に立てる事とて、容易に十分の成績を得難いのである、去ればとて此儘に打捨て置かば、害蟲に罹り易い作物は其跡

を絶つことゝなりて、國家の經濟上非常の不利益を來たすのであるから、今に於て早く根元より其迷ひを解き斯學思想を注入せしめんければならぬ、去り乍らこれ平凡の巡回講話などの能くし得べき事では無いから、熱心なる實驗家の力を藉りて後始めて其緒を啓く事が出來るのである。處で僻遠の地であるから甚はだ申述べ兼ぬるも、一度名和先生の鹿兒島へ來り臨まれて、數十年來研究を積まれたる實驗實例によりて其害の恐るべき事、並びに之が驅除法の大要に就て懇ろに啓蒙破迷の任に當らるゝ事を望むのであります、これは啻に一縣下の爲めでは無く、實に國家經濟上重視すべき問題であるから望む次第であります。

◎昆蟲雜錄

千葉縣長生郡　高橋徽一

（一）蝗害　貞觀政要第八卷「論務農」の章に曰く、貞觀二年京師旱、蝗蟲大起、太宗入苑視禾、見蝗蟲掇數枚而呪曰、人以穀爲命、而汝食之、是害于百姓、百姓有過、在予一人、爾其有靈、但當蝕我心無害百姓、將呑之、左右遽諫曰、恐成疾、不可、太宗曰、所冀移災朕躬、何疾之避、遂呑之、自是蝗不復爲災。按ずるに、太宗蝗害の激甚なるを憂ひ、其數枚を呑み呪して曰く、寧ろ吾肺腸を食へ蒼生の禾を害すること勿れと、これ何等仁慈の言ぞや、宜哉、此至誠ありて始めて能く驅除の功を奏せしも、近時我國各地蟲害の警報頻々たり、職に牧宰に在るの士、須らく太宗の意を以て意とせざる可からず。

（二）蟲塚　千葉縣長生郡東村大字大井の地に一小丘あり、人呼んで「なご臺」と稱す、之が頂上に饅頭形の古塚あり、同じく「なご塚」と呼ばはる。傳へ云ふ、往古飛蝗の爲めに農作物蝕盡せられ、稼圃殆んど青色なく、其慘狀言ふ可からず、里正某村民を指揮して之が驅除に從事し、其死蝗十數苞を玆に瘞め以て後世の鑒戒に供せるなりと。按ずるに、蝗の方言を「なんご」と稱するを以て「なご臺」「なご塚」と呼び來りしものか、蓋し「なんご」は「いなご」の訛にて、「なご」は其約言なるべし。去るにても、斯かる

大災害の遺跡の今に現存するに、農民の多數は尙は害蟲の自然發生を固信し、甚ざしきは之を天意神命に出づるものとなし、敢て豫防驅除に勉めざるは、遺憾の極みならずや。

(三)朝鮮國蟲類の稱呼　吾往年、朝鮮國情視察の爲め彼の國に渡航し、內地跋涉の際、土人に就て韓語の蟲稱數種を記し得たり。即はち蜂をポル、蠶をヌーアー、蚤をペートク、蚊をモーキー、蛇をパイム、虱をニー、蛙をクエーコーリー、蟲の子をショクハイ、床蝨をピンデーと云ふなり。

昆蟲世界編者云。それとは異れど、朝鮮語の邦稱に似るもの多し、就中蠅即はちハへをハリと云ふが如きは最とも近似の稱呼なり將來斯かる方面よりも研究を遂げなば、斯學上一方ならぬ利益あることなる可し。序なれば茲に附記す。

(四)害蟲驅除數へ歌　わが友江澤貞治氏は農事に熱心にて、業務に勵精の士たり、頃日千葉縣より稻作改良害蟲驅除豫防委員に任命せらるゝや、害蟲驅除數へ歌を作り、余に示して曰く、是れ固陋の作固より大方に示すに足らずと雖ども、然かも幼童婦女の輩をして之を誦し之を謳はしめ、以て斯學思想の普及を圖るの方便に供し得んかと、受けて之を閱すれば一篇二十節皆有用の句あらざるは莫かりき。

(五)蟋蟀の唐詩　余が家久しく鳴崖顙先生の詩幅一幀を藏す、蓋し幕末、囹圄の中に在りて其鬱悶を破れる絶唱に係るもの、之を一讀すれば、萬感交々生じて悲雨醒風に神泣き鬼哭するやの情あるにあらず、其詩に『好韻從來誤此生。綵籠唧唧若爲情。渠儂就似吾儂苦。一夜瀧前鳴月明』。と嗚呼眇たる昆蟲と雖ども、時ありて憂國志士の鐵腸を動かすことそれ此くの如し、實にや物徂徠翁が蟻螘の勤勞に發憤し、車胤が螢火に美名を擧げし佳談の傳はれるも、決して故無きに非ざるあり。

◎播磨地方の寄生蜂類に就て（續）

兵庫縣揖保郡　大上宇一

(六)ヒメアメコヌカバチ(假稱)小繭蜂科?　六月八日胡蘿蔔の花梗に一繭を得たり、長楕圓形にして二分餘りある黃褐色の繭を下垂しありし。十二日に至りそれより一蜂出で活潑に這廻り、二十一日まで生存して死たり、羽化よりは十日の後なり。其体長二分許り、觸角二分、翅の開張四分許り、產卵管は黑くして五厘を算しき。觸角の下部は黃褐色にて中央以上は稍黑色を呈し、体は淡飴色、脚は体色よりは淡かりき、翅は透明にて前翅は肉眼にても脉を認め得べく、緣紋は淡黃褐色を帶び、腹部は前節極めて細く後部は漸やく太くして倒卵形をなし、後翅脉は肉眼にてハ不明に、複眼は黑かりき、カモドキバチ

に近き種なるが、胡蘿蔔の青蟲よでも寄生せしものか。

(七)クロコヌカヤドリバチ(假稱)　六月廿二日家内にて一頭捕へり、觸角は体よりも長くして一分二厘、体長一分産卵管は二厘五毛許りありて本細く末漸く太く、頭には黑澤あるも、胸部は黑色のみにて光澤少なく且つ腹部の前部は極細にして褐色を帶び後部は卵形にして漆黑色に、頭胸の長さよりは微かに短かゝりき。(長四厘内外とす幅は一厘七八毛位ゐ)。翅は透明に、脉は黑く、縁紋又黑色に、脚は褐色を帶べり。按ずるにアサムシコヌカバチに近きものなるべし。

(八)アカハラホソバチ(假稱)　六月廿五日に捕へり、觸角は体より短くして黑く、前中二脚は黄褐色なれども、後脚は基部を除くの外は全たく黑色に尾端には刺なし、翅は透明なれども稍淡黑色に脉と縁紋とは黑し、腹は第一節最とも細くして黑く、其次は中央よりやゝ後部までも黄褐色（やゝ飴色）を帶び後部は黑色を呈せり、腹は比較的狹長に胸部は大きく、体長二分餘を算しき。又之に似たるものを昨年九月廿六日に蘿蔔葉上よて捕ひしが、觸角は細長にして、体よりやゝ長く、或は同長、黑色よして下部は漸やく褐色に、頭胸に黑色の光澤あり、腹は一節は細くして黑澤を有し、二より三節迄は橙紅色、以下の節にも黑澤を認め、翅は透明に脚は赤黄色にして、腹の末節よは二箇の短針樣の物(産卵管其他)を具へ、体長は二分弱なりき、按ずるよハラアカヤドリバチと同じきか疑はし。

(九)コグロオナガバチ(假稱)　七月六日家内にて捕ふ、全体黑色に脚は褐色を帶べり、体長は一分許りありて黑澤を有し、腹の下面の前部はやゝ白茶色よ、産卵管は一分の長さあり、觸角は其長さ六七厘翅は其色透明に、長は体長と同suく、して水平に疊めり、腹部は頭胸部よりやゝ短かきも幅は廣かり。按ずるよカマキリの卵蜂に似たれども、彼よりは小にして觸角の長きを異點となす。

(十)コグロプテロマル(假稱)小蜂科　七月六日瓢蟲類の蛹と思はるものゝ死狀を成して草莖にあるを採り置しに、中に十頭許りの蜂あり、是れ其寄生蜂なるべし、全体黑色にして光澤あり、翅は透明に体長は七厘許り、觸角は二厘弱なりき、之に似たるもの一種を左よ記す。

(十一)クロプテロマル(假稱)小蜂科　六月中旬往々誘蛾燈に入りて死せるものあり、全体黑色にして体長一分、觸角は二厘許り、翅は殆んど透明に足は黑褐色、腹部に黑澤あり、腹形はプテロマルニ酷肖す、七月五日家内よて見しよ、腹部はやゝ扁平にて翅を水平にたゝめり、前種と異なるは其体の長さと

脚色の同じからざるにあり、其他なほ誘蛾燈の爲に死せる益蟲少なからず。

(十二)ムナアカヤドリバチ(假稱)姫蜂科　七月七日及び二十三日に家近にて捕れり、觸角は三分五厘產卵管は一分五厘弱、之と同長にして稍太き附屬刺あり、体長四分、前翅は二分七八厘、幅七厘五毛あり、後翅は二分二厘、幅五厘內外あり、頭胸は橙紅色にて他は黑し、眼及び觸角も黑くして、後脚の腿節及脛節には毛あり。按ずるに小繭蜂科クワカミキリの寄生蜂の形狀に似たれども、彼よりは大にして其色彩を異にせりき。

(十三)クワカミキリノヤドリバチ(中川氏)　六月中に二頭を獲たりき。此他は次回に報道す。(完)

◎本邦昆蟲研究家叢話　(其八)

古奧　青嚢白笠の人

◎田村藍水先生の開物　京都系の物產學漸やく其勢炎を揚げ、和蘭派の新思潮將に東洋を浸さんとするの時、一旗幟を江戶城頭に樹てゝ、名物博識の學を講じ、克く內外兩派の特長を採擇して、專ら實學國益の振興に任ず、又子弟を敎養しては、其門下より幾多の名家を輩出せしめたる者を、藍水田村先生となす。先生は江戶の人なり、夙慧能く本草に通曉し、幼より衆の爲に推重せらる。遇々奧州南部の人阿部將翁なる者あり、庶物の鑑別に長ぜるを以て幕府の藥園を管掌し、其盛名滿都に鳴る、乃はち就て弟子の禮を執り、潛心硏修を事とせり。既にして學業大に進み、其而立の齡を迎ふるや、人參耕作記一卷を公行するに至りぬ。時に京都系の巨擘松岡氏既に世を去ると雖ども、其高足津島氏のなほ關西を風靡するあり、小野氏の新たに帷を京都に下して盛んに自說の普及に勉むるあり、剩さへ後藤梧桐庵等の物產學を提唱して一世を睥睨するものある等、拮抗對峙互ひに相下らざるの態度を存しき。

寶曆五年、先生年三十八、人參類集を著はして、再たび其國用に供すべきものなる事を解說し、又その七年を以て、物產會を江戶湯島に創設し、內外の草木蟲魚金石の藥物に供すべきものを、一場に陳列して、同志の展觀攻究に便せり(當時先生の出品一百點の多きに達しき)これを本邦に於ける展覽博覽諸會の權輿となす。次年また自家所藏の庶物を主品として之を神田に開き、益々人智の啓發鼓吹に努めり。是より世人其開催の利を知り、藥品會博物會等の名を以て、競ふて之を各地に開くに至りぬと云ふ。聞道、文物の進步を以て誇稱せる西洋諸國に於てすら、始めて博覽會を開きしは千七百九十七年に在りと而してそれに先つこと四十年、尙この企畫を成就せり、誰か其先見の明に服せざる者なからんや。

十三年擧げられて幕府の醫官となり、その新立の製參所を攝理し、又命を奉じて、往て兩野總奥諸國の人參を買收しき。初め韓種の我に傳はるもの三たびに及びしも、能く生育を遂ぐるものなし、其後、享保の初、宗侯の献品を日光山に移植し、玆に始めて生殖を見るに至り、種苗を諸國に分植せしめたるに、是時繁息して五百萬株に上れり、因て此命ありしなり。而して先生の之を熟參に製するや、良品千餘斤を得たりしかば、民間また其貴藥の購ひ難きに苦しむ者無かりきと云ふ。

藍水田村元雄

是より先、先生海内を周游して品物の採集に力め、寶曆八年には、肥前肥後の峻嶮に登攀して、奇卉異草を採り、明和六年には、中山傳信錄を本として物產考を艸しき。島津侯爲めに、其屬島琉球所產の庶物千餘種を遺りて其志を賞せしに、侯の厚意を多とし、乃はち琉球產物志十五卷を編述しぬ。此に至りてその足跡天下に半ばし、一たび經涉する所ろの諸國は、土味氣候より氣形生殖に至るまで盡ごとく之を査察し、特に心力を人參、甘蔗、白河附子、白牛酪、芒硝、火浣布、綿羊等の製產牧養に傾注せり。去れば其著書も物產開成の用に資すべきもの多く參製祕錄、人參譜、竹譜、甘蔗製造傳、木綿培養傳、日本諸州藥譜等の數種あり。彼の平賀氏の人參、甘蔗、火浣布等に於ける究明は、蓋しこゝに原由するを知るべきなり。

先生は享保三年を以て生れ、安永五年三月廿三日五十九歲にて歿しぬ、墓は淺草北寺町の眞龍寺内にあり。名は登、字は玄臺、通稱を元雄といふ、其家世々醫を以て業となし、父備豊(通稱宗宣)はまた頗ぶる國學にも通曉せる人なりきと。二子あり、長を善之といふ、通稱は元長、西湖と號し、父の職を繼ぎて家聲を墜さず、晩年豆州諸島物產圖說、物品彙考等をものしき。次は昌藏、字を瑞見といひ、號を丹洲といふ、出でゝ醫官栗本氏の嗣となり法印に拔擢せらる、有名の千蟲譜の著者は即はち是なり。門下また俊才に富み、平賀鳩溪、曾士考、大槻玄澤の諸氏は其魁と稱せらる、就中、鳩溪玄澤は共に出藍の聲譽を博しき。士考また水氷の令聞あり、成形圖說、本草纂疏、草木昆蟲考、水草志略、皇和蕈譜等を編述し、其後世を益せるもの少なからず。

◎草綿の害蟲驅除方法

山梨縣中巨摩郡　中込喜曾次郎

余が草綿の害蟲を研究せしは、去明治廿一年なりしが、其後米價の騰貴に引變へ、綿花の漸やく下落せしより、之を田地に耕作する者を減じ、隨へて害蟲驅除の事をも放任するに至れり。そも此害蟲は草綿收穫の際に綿花中より現はれて、家屋內、天井、壁、敷物の類ひより、諸木等にも小繭を作りて越冬し翌春八十八夜の春暖の頃に化蛹し、五月下旬より六月中旬の間に羽化するものとす。斯くて草綿の稍成長して輪株を生ぞるや、これに下卵し、それより孵化の幼蟲は、花蕋を食害すること約そ廿四五日の後に化蛹し、十日乃至十二日の後に再たび羽化を遂げて、更に生殖の作用を行なひ、復た花株、論株の間に下卵して其蕃殖を圖るものなるが、綿花の成熟して開裂せんとする頃始めて被害を認め得べし。嘗て被害の多少を檢せしに、年によりては十中の七八を損し、概むね畸形をなせるものゝみなりき。尤とも吾が中巨摩郡中にても、之を耕作するは二里四方位ゐに止まれば、敢て他の重要物產の比にあらざるも損害を積算する時は決して尠少とは云ふ能はず。偖これが驅除法としては、其綿花を收め竹簀の上に擴げて乾燥するの際、搖落して燒殺若くは埋却を行ふに利あるがごときも、盡ごとく殺滅せしむること能はざれば、先づ六月の土用前後に耕作地に點燈誘殺するの覺悟なかる可からず。蛾は麥蛾に似て稍大に其翅色と體色は共に淡灰白色を帶べり。此蟲は方言ナカムシと稱するものなるが、之を驅除する時は啻に收穫を增すに止めず、品質良好なるを以て價格また貴ときに反し、蟲害に罹れるものに至りては、品質劣惡に其收量も一反步に於て約十貫目を減じ、四十貫目のもの三十貫目を採るに過ぎざれば、全躰に於ける損失は言はずして明白なり、世の綿作を事とする農家の共同一致して、之が害を一掃し國益增進の擧に出でられんことを望む。

通信

◎土佐產の蟲報（第六）

高知縣土佐郡　武內護文

○有吻類、椿象科　（一）チャバチガイタ。（二）アヲガメムシ。（三）ナガメ。（四）キンガメムシ。（五）イ

子ガメムシ。（十八）シロヘリガメムシ。（七）クロクサガメ。以上の數種中（四）は普通の種に非ぞ、唯縣の東端室戸岬よのみ之を産するを知るのみ、其他は一般に之を産するも（三）の十字花科作物よ對する加害は未だ甚しきを見ず、（五）（十八）は山中に於て竹類薄類の如き禾本科に多く發生するも、稻田に來襲するものは少なし、獨り（七）に至ては當地稻作の最大害蟲の一にして、農民を苦しむると擧て言ふべからず春季麥類出穗の頃は、往々出で丶穗液を吸收するものあり、室內よ試驗せるものは薄の葉液を吸收するとあるも、其山中の潛伏處を去て大群擧て稻田よ來襲するは六月中下旬の頃よ在り、間もなく産卵し、幼蟲が五回の脫皮を終るは普通八月中下旬の間よ在り、秋收の後は相率ひて山中に入るも、殘るものい田圃附近の石下土中よ越冬す。此科の蟲類よして最大なるものは、其体長七分よ達するも、最小なるものは一分に充たず、体の後端一字形をなせるものは、夏日野生の荳科植物に群生し、脛節よ刺多きものは、冬期蘚苔下に獲たり、中形種にして暗綠に金屬光を放つ、美麗なるものは、北方の高山の頂よ於て獲たり、其他大小各種あれども、種名を詳にせざるもの多し。

○有緣椿象科　　オホガメムシ。（二）クモガメムシ。（三）アヅキガメムシ。（四）ハリガメムシ。（五）ホ丶ヅキガメムシ。以上數種中（一）は夏月山間に普通なり（二）はエノコロ草等の雜草間に稀よ之を獲（三）は到處に普通にして小豆に多く（五）は主にホ丶ヅキに發生し、又往々馬鈴薯、茄子、烟草等に來る、而して稻穗を吸收して最とも多害なるものは（四）にして地方によりては其害クロクサガメよ比して劣らず成蟲は多く山中の枯草間等に越年し、春期麥穗に來集するもの少からず、七月中旬の頃早生稻出穗の頃より續々稻田に來襲す。此害蟲は獨り稻麥類のみならず、蓼科よ屬する蓼類、蕎麥、土大黃或ひはまた藜科に屬するヒユ等の花實液（稀に葉液）を好んで吸收し、八月下旬の頃は幼蟲成蟲共にヒユに多し。予が目下幼蟲を試驗せるものは、禾本科、蓼科、藜科の三樣に別ち、之を更に野生培養性の兩植物よ別てり、幼蟲が五回の脫皮を終ふるは二週間以上を要す、卵は黃金光を放ちて燦然美麗なるも、自然に於ける産卵の場所は今尙ほ搜索中なり。

○長椿象科　　（一）マダラカメムシ。（二）ジュジカメムシ。此科に屬するものは以上二種を獲たるのみ皆其食草を詳にせず。

○盲椿象科　　アカヒゲカメムシ。此科中に在りて土佐よ於ける害蟲と稱すべきものは、唯此一種なるを知る、而かも農作物に來襲することは甚はだ多からぞ、キンエノコロの如き雜草に多し、幼蟲も亦能く

雜草に生育す（此試驗は一時にして停止せり）。

○床蝨科　トコジラミ。未だ普ねく民家に瀰蔓するに至らざれども、近時船舶によりて移播せらる。

○食蟲椿象科　（一）クロサシガメ。（二）モンシロサシガメ。（三）アカヘリサシガメ。（四）アカサシガメ。（五）ヤニサシガメ。此五種は最とも普通に見る所あり、此他夏日夜間に燈火に來るもの、冬日石下に發見するもの、及び花間に徘徊するもの等もありて異種のもの少なからず。

○水黽科　（一）オホカハグモ。（二）カハグモ。水黽の種類は三種を産し、イトカハグモの種類は一種を産す、而して四翅を生せり、海産のものは未だ之を獲ず。

○紅娘華科　（一）ユリノハナスヒ。（二）ミヅカマキリ。（三）タガメ。（四）コオヒムシ。四種皆普通に之を産す（四）の雌雄數頭を捕へて、一器內に飼育したるに、常に數頭相擁するを見る、其背上に負ふものは必ず自己の卵子に非ざるを信ず。（器內に投入せる翌朝、背上に点々卵子を負ふもの一二頭を見たり試驗佳境に入らんとして俄に他出したるを以て、確信すべき効果を得ず）

○松藻蟲科　マツモムシ。到所の淡水に殆んど産せざるはなし、他の二種小形あるものも亦普通なり。

※前號の本文末に（完）とせしは衍、茲に紕漏を謝す。

◎大分縣大分郡の害蟲狀況

大分縣大分郡　小野覺太郎

郡內三十五ヶ町村に於ける稻作害蟲の狀況を視るに、昨年に比すれば、其發生餘程少なきが如し、今一々項を分ちて現況及び既去の狀況を左に示さん。

一、浮塵子　何れの町村にも棲息せざるはなし、然れども町村に依りて其多少の別あるは、驅防の程度に關係を有するの結果なりと信ず。

二、螟蟲　二化生と三化生種は其主なるものにて、二化生は郡內に棲息せざる町村なし、三化生に至りては僅かに五六町村位に傳播せしものゝ如し。

三、葉捲蟲　昨年或一部の村落に發生猖獗を極めし迄にて、一般に蕃殖せざりしが、本年は各町村共該蟲の棲息せざる所なし、而れども昨年の如き猖獗を見るに到らざる可きか。

四、縱葉捲蟲　昨年四五ヶ町村に發生し、被害反別參拾町歩ありしが、本年も亦郡內七歩方は此加害を葉先に見受けり、目下の處にては至つて微かなれども、豫後の憂慮なきにあらず。

五、稻蝨　各町村共多少棲息せざるはなし、中にも苗代期に於て、十分掬殺を行はざりし地方には最とも多し。

六、椿象　郡内に点々發生なしたりしも、著しき害を被りたる地方なきが如し。

七、切蛆蚊姥　苗代時期に二三ヶ町村にて見受けしも、其後該蟲を認めざりしが、本田移植後に所々に於て棲息を見る。其他尚は稻尺蠖等の發生あるも別に記すべき程のことなし。

以上害蟲驅除の有樣を見るに、浮塵子驅除は本田移植後注油のみなるにより、兎に角に實行し得たるも螟蟲驅除に至りては、其感覺鈍く採卵、心穗枯、堀取等は嚴達の期にのみ義務的に實行するに過ぎず。然るに昨年來郡内各小學校に於ては、兒童に該思想養成の目的を以て、授業後教師自ら監督をなし驅除に着手なしたるも、漸やく五六校に止まりしが、幸ひにして本年は擧つて之が實行を見るに至りしため螟卵採集の如きは非常に其効を奏せしものと信ず、是等の成績は更に報道することあるべし。

葉捲蟲は發生處中、尤も多害の方面に於て、小生の監督の下に採集なさしめたる分、戸數五十戸位なにして、一日に幼蟲のみにても壹斗七升五合を獲たりき、其他奨勵の結果二ヶ村に於て、幼蟲の三斗餘こ拾貳荷（是は不注意の農民稻葉共に摘採せしもの）とを採集しき、以て其多生の一端を知るべきなり。

◎螟虫卵採集の成績

兵庫縣揖保郡　岩田熊三郎

兵庫縣知事は明治三十五年縣令第二十三號（昆蟲世界第五十七號參照）を以て、作人に對し稻作の害蟲たる螟蟲及び浮塵子の驅除法を命令せられしが、揖保郡農會は其奨勵を圖り、六月六日總集會を開設し、左記懸賞採卵法を可決し、各農家をして採卵せしめたるに、六月十八日迄に郡農會事務所に送附せし卵塊總計は十八萬五千餘塊にして、其中一巳人の最多採卵高三千五百十塊なりき。該縣令實施のため、其得たる直接間接の利益は實に多大なるを信ず、而して規定に據り七月十六日に同郡役所内に於て賞品授與式を擧行せしに受賞數は二百九十八名ありき。（統計表は次號に掲載すべし）

本郡農會は、左の方法によりて懸賞螟卵採集をなす。（一）採集したる螟卵は、適宜袋に入れ、住所氏名及卵數を記したる上、第一回のものを本月八日、第二回のものを本月十二日、第三回のものを本月十五日限り、其村害蟲驅除豫防委員に差出すべし。（二）害蟲驅除豫防委員に於て、前項の螟卵を受理したる時は、其員數を點撿し、其翌日町村農會長に送付し、町村農會長は更に之を點撿し、採集者氏名及採卵數を記したる表を添へ、二日以内に本會事務所に送付すべし。（三）本會は各農會長より送付したる螟卵を統計し、其

多寡により左の賞品を付與すへし。一等三名、鍬各二丁　二等十五名、鍬各一丁　三等三十名、十能鍬各一丁　四等五十名、上等鎌各一丁　五等二百名、鎌各一丁。(四)町村農會員にあらさるものは、賞品を受くることを得ず。

◎昆蟲に關する葉書通信　(第二十六報)

(一四二)昆蟲の謎々集(岩手縣氣仙郡、鳥羽源藏)　昆蟲世界愛讀者諸君の長夜の一興にもと、考案を費やしたる二十有餘の昆蟲謎々の中より、三四を抜取りて葉書集の材料となさん。

一、昆蟲の夫婦とかけて……刀掛と解く、心は必らず大小で組合してゐる。

二、昆蟲の單眼とかけて……百鬼夜行の圖と解く、心は三ツ目もあれば一ツ目もある。

三、松藻蟲とかけて……布袋和尚と解く、心は何時も腹を出して居る。

四、蚤とかけて……惡い炭火と解く、心は跳ねるために困らする。

五、梨の象鼻蟲とかけて……安木綿の染色と解く、心は何時も落ち易い。

六、大胡麻斑蝶の斑文とかけて……富士山の姿と解く、心は裏から見るも表から見るも同じ事だ。

(一四三)注液器の紹介(兵庫縣印南郡農事試驗場、前田七郎)　驅蟲用の注液器は數種あるも、近頃山口健三郎氏の發明に係るものは、鐵葉製二尺餘の圓筒形にて、油量を測り得べく又注下油の損失少なく且其代價も八合容器一個廿七錢にて、使用保存の點より見るも利便多きが如し。

(一四四)昆蟲讀込の俗謠(三重縣阿山郡、西岡嘉十郎)　吾が伊賀地方にて常に農夫の謠ふ昆蟲讀込の俗曲中、また面白き節のあるもあれば、成るべく卑穢ならぬものゝみを左に報ず。

○瓦皿の中でとぼすは菜種しろ、昔し思へば深い中、蝶々は焦れて逢ひに來る、死ぬる覺悟でくるわいな。

○松にまつむし、青田にゃいなご、主の浴衣にゃ色のむし。

○こひに焦れて鳴く蟬よりも、鳴かぬ螢は身をこがす。

○島田わげには蝶々が止まる、止まる筈じヤは、花じヤもの。

(一四五)昆蟲供養會の執行(島根縣那賀郡、増田齡造)　本郡にては害蟲驅除講習修業生岩本普濟氏等の發企にて、九月二三の兩日に昆蟲供養會を三隅村正樂寺に執行せしに、參會者は三百餘名に上り、昆蟲に關する演說講話さへありて、痛く斯學思想を喚起せり。

（一四六）利用厚生の印（秋田縣南秋田郡、研蠶子）　舊秋田藩主佐竹侯の先代天樹院公が、蠶連紙に捺用せん目的にて、利用厚生の四字を印章に刻せしめたるは、治世の一美談として人口に傳ふる所なるが右の印章は維新後轉々して川村某氏の手に入りしより、同家にては製造の蠶種に今も之を捺すとぞ。天樹院公の殖産興業に鋭意熱中せられたるは、隱れもなき事にて、自から養蠶所を監督せられし程なりきと云へば、秋田藩にて文化文政の頃より、害蟲驅除用の鯨油を備へ置かれしも、亦恐らくは公の用意に出でしものかと思はる。雜誌昆蟲世界滿五年の經過を祝する爲め、特にこの悦ばしき事實を報道す。

（一四七）稻熱病除却の符札（岐阜縣養老郡、牧田村夫）　まだしても醒め難きは頑民の迷信なりけり。本年吾が養老郡内に於て、稻熱病發生せしとて「伊毛知除却神符」といふを處々に立てし村落あり、此分なれば害蟲除却の神符とても、五年七年内には其跡を絶つこと覺束なからん、一方に昆蟲研究會員の熱心從事する者あるに、他方には斯かる迷信の徒あり、歎ずべき哉。

●昆蟲月令（第九月）　此月に配すべき昆蟲記事は、概むね下に列擧するが如し。

○氣候　舊暦八月に當り、殘暑なほ甚だしく日中に温度暴昇する事あるも、朝夕は冷氣を感じ、又時々風雨襲來、禾稼を害ふことあり●月初は晝夜の差、左まで著しからず、夜間よりは晝間の長きこと約一時間なるも、月末に及べば、却つて夜間の長きを見る●月の二日は二百十日に、十二日は二百二十日の厄災日に當る●八日よりは白露の氣に入り、廿一日より彼岸に入り、廿四日よりは秋分となる●内地の温度は、平均攝氏の十七度半乃至廿四度半の間にて最高廿八九度に達する事あり●東京は平均廿二度の温氣を示し京都は其以上なるを常とす●濕度は概むね前月に讓らず、隨へて水量また多し。

○蟲類　去月よりかけて螟蟲の新生せるもの多かる可ければ、拔穗其他の驅除に怠たる可からず●ヨコバヒまた多生して加害劇烈な

加ふべし、其發生の極度に達せざる以前に、共同驅除を行ふて滅盡せしむべし、此蟲害に罹りて古來飢饉を起したるは、多く此月に在るが如し●稻桑その他の結葉蟲多生すべければ、婦女兒童の手を以て懇切に驅除すべし●果樹には金龜子群集し、豆類また象蟲等を出現すべし●此月に入りなば蠅類多からん豫防驅除を緊要とす●菜圃には種々の害蟲蕃殖して菜大根をはじめ、馬鈴薯、瓜類をも加害すべし、適宜の處分を要す●稻穗にはイチガメムシ來りて養液を吸取し、粃米となすこと多からん、船形捕蟲器咽喉附捕蟲器を用ゐるか若くは小禽類を放ちて驅除すべし●ムクゲムシ稻花に潜みて大害を與ふることあらん、注意すへし●害蟲の卵蛹を目擊せば、容赦なく採取驅殺を行ふべし●蟲類次第に蟄伏の準備をなす可ければ、園圃を清淨にするの心掛あるべし●其他は前月の項を見合せ處分すべし●採集家は蕎麥畑に注目すへし。

イチガメムシの圖

○舊說　昔日は八月の六候の一に、蟄蟲坯戶の一項を加へき●此月に至り竹を截れば蛀はずとなせり●白露の日に天晴るれば、蝗蟲多しとも信ぜり。

○雜事　白露の前後には、蜉蝣多く出でゝ死屍河川を覆ふことあり、又秋種の蜻蛉の飛行するもの盛んなれば、採集の時機を逸せしむべからざるは勿論、家屋の害蟲、或ひは蟄伏せんとする蟲類に對しては、此月の中に捕獲し及び調査を加ふべし●他は前月の記事を參照すべし。

●本號の口繪　豫記を經たるが如く、今月は昆蟲世界發刊後滿五年に相當するを以て、本號に對し心ばかりの祝意を表せんが爲めに、六回摺り石版彩色の口畫を挿入しぬ。其意匠の巧拙はさて置き、蝶形は岐阜蝶に擬し、扇形は名和氏の紋章に擬らひ、黃菊と紅薔薇は學術研究に於ける內外の同盟を祝し、更にこれに最長角の害蟲と、最小形の益蟲の寫生圖を綜合して、學者研鑽の資に供せるなり。茲に第六拾壹號を發行するに臨み、將來益々斯學者の愛讀を望むと共に讀者諸君の健康を禱りて已まず。

●安氏の作詩　近頃のこと、京都商業學校の語學教師韓人安泳中氏は、旅窓に一絕を賦して、名和當昆蟲研究所長に寄すらく『蠅貪蟻鬪各何求。蝶舞蜂喧任自由。蚊睫焦螟君莫笑。百年我亦一蜉蝣。と、何か感慨する所ありて賦詠したるらしきが、兎も角、蟲名を多用せし處に味ひあるを覺ふ。

●前回講習會修業生の姓名　前號にものせる第十三回全國害蟲驅除講習會を修業せしは、左記の如くなり、尙ほ八月十四日の修業式當日は笠井岐阜縣書記官、吉田同縣參事官、寺尾同縣視學官、甫守名古屋高等女學校長其他數十名の來賓ありて、名和當昆蟲研究所長の訓諭、笠井氏及び濃飛日報主筆原眞澄氏の祝辭、修業生總代津山義隆氏の答辭等式の如かりしが、一同は其翌日を以て概むね歸鄉の途に就けりと云ふ。

（〇印は中途退會　△印は缺席）

組別	府縣	郡市	町村	族籍	役名	氏名	生年月	履歴摘要
第一組	愛知縣	西加茂郡	明越村	平民		〇大澤雄岱	嘉永四年七月	尋常小學校訓導兼校長
	徳島縣	海部郡	赤河内村	同		長尾角太郎	明治五年八月	村會議員、郡農會議員
	島根縣	大原郡	木次町	同	組長	菅澤徳三郎	明治十二年三月	京都蠶業講習所卒業、廣島縣農事試驗場蠶業教師
	大坂府	泉北郡	東横山村	同		〇辻林順治	明治十二年七月	高等小學校卒業、三ヶ年間漢學修業
第二組	愛媛縣	温泉郡	垣生村	平民		土屋市太郎	慶應二年四月	村農會長、今出絣株式會社支配人
	愛知縣	額田郡	豐岡村	同	組長	川端九一郎	明治四年十月	師範中學体操本科正教員、小學校訓導兼校長
	栃木縣	安蘇郡	堀米町	同		奥澤留三郎	明治十七年一月	農事講習所修業、郡立農事試驗場助手
	鳥取縣	八頭郡	登米村	同		大下竹次郎	明治十二年五月	小學校補習科卒業、農業ニ從事
第三組	愛知縣	葉栗郡	黑田町	平民	組長	杉浦美郎	明治六年六月	郡書記
	栃木縣	下都賀郡	稻葉村	同		落合準一郎	明治三年十月	栃木縣簡易農學校別科卒業、害蟲驅除講習會修業
	三重縣	員辨郡	大長村	同	副級長	川瀬義雄	明治十二年四月	東京專門學校文學科卒業
	和歌山縣	那賀郡	田中村	同		堂本嘉一	明治十三年六月	京都同志社卒業、合衆國高等商業學校二年修業
第四組	徳島縣	海部郡	淺川村	平民		佐藤半三郎	明治二年二月	大坂不如舘修業、名譽助役
	大坂府	南河内郡	長野村	同		中尾貞二郎	明治三年一月	農學校別科講習修了、乙種短期農事講習修了
	愛知縣	西加茂郡	擧母町	士族	組長	牧野敏太郎	文久元年十一月	小學校本科正教員
	群馬縣	邑樂郡	大川村	平民		茂木清治	明治十年九月	郡養蠶傳習所修業、高山社養蠶傳習所巡回教師
第五組	三重縣	員辨郡	久米村	平民	組長	富永豐太郎	明治元年六月	郡農事試驗場擔當人、農事講習所卒業
	島根縣	飯石郡	飯石村	同		堀江國藏	明治三年十二月	縣立農學校本科卒業、郡農會技手
	徳島縣	海部郡	川東村	同		池内國太郎	明治八年八月	農事講習會修業、郡農會議員、害蟲驅除員
	靜岡縣	磐田郡	井通村	同		高橋文平	明治十六年三月	靜岡縣農學校卒業
第六組	福井縣	南條郡	北杣山村	平民		野村左近	文久二年五月	郡吏員、郡農會幹事、同會昆蟲學講習修業
	徳島縣	海部郡	突喰村	同		瀬川萬太郎	明治元年二月	徳島縣農事講習所修業、村農會議員
	兵庫縣	美方郡	兎塚村	同	組長	西谷忠雄	明治四年十二月	農科大學附屬教員養成所卒業、兵庫縣農學校助教
	三重縣	度會郡	一ノ瀬村	同		作野八十吉	明治五年十一月	苗代立毛稻作審査員
第七組	愛知縣	西加茂郡	明越村	平民		〇深谷保之助	明治元年五月	文部省普通免許狀、尋常高等小學校訓導兼校長
	滋賀縣	坂田郡	大原村	同	組長	堀田末松	明治三年十一月	師範學校卒業、大原高等小學校訓導兼校長
	島根縣	八束郡	佐太村	同		森脇捨松	明治七年三月	農事講習所一ヶ年修業、林業講習所卒業
	栃木縣	宇都宮市	花房町	士族		水野清	明治十三年七月	新宿植物御苑一ヶ年勤務、宇都宮市農會理事

組	府縣	郡	町村	族籍	役	氏名	生年月	經歷
第八組	愛知縣	西加茂郡	澁川村	平民		鬼頭辰次郎	元治元年六月	尋常高等小學校訓導
	島根縣	飯石郡	掛合村	同		竹下虎次郎	明治十一年十二月	郡書記、裁判所書記試驗合格
	三重縣	河藝郡	大里村	同		植田貞雄	明治十一年七月	尋常高等小學校准訓導、尋常小學校訓導
	宮崎縣	北諸縣郡	都城町	同	組長	神田猛熊	明治十三年二月	北諸縣郡吏、害蟲驅除豫防委員
第九組	高知縣	吾川郡	諸木村	平民	副級長	松本喜義	明治十一年二月	高知縣師範學校卒業
	兵庫縣	飾磨郡	置鹽村	同		名倉彦次郎	明治十二年十一月	尋常中學校卒業、高等小學校教員、農業ニ從事
	宮城縣	名取郡	六郷村	士族	組長	國井眞一郎	慶應元年七月	小學校正教員、福島縣立蠶業學校講習科修業
	愛知縣	西加茂郡	上郷村	平民		澤田政六	明治十三年三月	高等小學校卒業、尋常小學校准訓導
第十組	岐阜縣	惠那郡	三濃村	平民		上田紋作	明治四年六月	尋常小學校訓導兼校長
	京都府	竹野郡	郷村	同		高家仲造	明治八年一月	京都府蠶病講習所習得、蠶種製造業
	岡山縣	上房郡	上水田村	同	組長	加戸伊右衛門	明治十五年一月	岡山縣農學校卒業、小學校本科正教員
	徳島縣	海部郡	牟岐村	同		丸岡豐吉	明治十三年二月	高等小學校卒業、役場書記
第十一組	三重縣	河藝郡	榮村	平民		横田林藏	明治四年十一月	尋常中學校卒業、河藝郡書記
	兵庫縣	氷上郡	柏原町	同		牧半兵衛	明治十二年四月	高等小學二年修業、三年間漢學修業、農業ニ從事
	愛知縣	寶飯郡	長澤村	同		伊與田茂八	明治十三年十月	高等小學校卒業、小學校准訓導
	高知縣	高岡郡	波介村	同	組長	森岡好馬	明治十三年十月	高知縣農學校卒業
第十二組	福井縣	大野郡	富田村	平民		石垣友市	明治四年五月	福井縣農會昆蟲學講習會修業、村農會幹事
	滋賀縣	蒲生郡	八幡町	同		犬丸芳太郎	明治八年五月	八幡町書記、同町農會書記
	兵庫縣	加古郡	尾上村	同		森積藏	明治九年四月	加古郡農事試驗場技手
	徳島縣	板野郡	大津村	同	組長	齋藤寅五郎	元治元年十二月	村農會長、郡農會議員、名譽助役
第十三組	徳島縣	那賀郡	新野村	平民		庄野一平	明治五年三月	徳島縣農事講習所卒業、村農會議員
	愛知縣	葉栗郡	淺井町	同	組長	前田吉三郎	明治九年一月	尋常小學校訓導兼校長
	兵庫縣	明石郡	資母村	同		今井在止	明治十九年七月	尋常中學校三年級修業、村農會幹事
	宮城縣	名取郡	中田村	同		阿部惣三郎	明治二十年七月	郡農事巡回補助教師、郡昆蟲講習會修業
第十四組	兵庫縣	氷上郡	船城村	平民		荻野秀市	明治十七年一月	兵庫縣農學校卒業
	徳島縣	三好郡	三野村	同	組長	宮本虎市	明治五年五月	徳島縣農事講習所卒業、郡農會煙草作教師
	愛知縣	西加茂郡	根川村	同		鈴村兼四郎	明治九年九月	愛知縣師範學校卒業、小學校本科正教員
	三重縣	一志郡	高岡村	同		喜田川要三郎	明治十二年十二月	勵精舘中學二年修業、小學校代用教員
第十五組	愛知縣	西加茂郡	本城村	平民	組長	松井常太郎	文久三年九月	西加茂郡農會書記、同會幹事
	徳島縣	名東郡	齋津村	同	級長	津山義隆	明治五年一月	徳島縣屬第四課農商係兼知事官房文書係員
	鳥取縣	日野郡	神奈村	同		井上貞一郎	明治十二年八月	郡農會議員
	三重縣	名賀郡	矢持村	同		吉村富三郎	明治十三年六月	武揚中學校三年級修業

組	府縣	郡市	町村	族籍	役	氏名	生年月	履歴
第十六組	三重縣	河藝郡	白子町	士族		○櫻井邦太郎	萬延元年三月	河藝郡書記
	靜岡縣	富士郡	加島村	平民		長谷川紹三郎	明治十一年十月	岐阜縣技手
	愛知縣	西春日井郡	下拾個村	同		海川富保	明治十四年一月	西春日井郡吏
	香川縣	木田郡	前田村	同	組長	出口利三郎	明治十四年七月	小學校本科准教員
第十七組	富山縣	西礪波郡	子撫村	平民		山田孝之助	明治十五年四月	富山縣立農學校卒業、西礪波郡農事試驗場技手
	香川縣	木田郡	平井村	同		松井愛助	明治八年十一月	高松市保眞學舍漢學並普通科修了、農業ニ從事
	新潟縣	古志郡	新組村	同	副級長	安藤清八	明治三年七月	休職長岡中學校助教諭
	德島縣	板野郡	撫養町	同	組長	菊池政太郎	明治八年七月	撫養町役場書記
第十八組	愛知縣	西加茂郡	擧母町	平民		○神戸信次	明治十年五月	尋常高等小學校訓導兼校長
	鳥取縣	岩美郡	本庄村	同		渡邊萬壽治	明治十八年四月	鳥取縣立農學校卒業
	三重縣	河藝郡	豐津村	同		西井讓	明治十二年八月	三重縣明野養蠶傳習所卒業、蠶病消毒法講習修了
	岐阜縣	武儀郡	神淵村	同	組長	加藤二三	明治四年三月	岐阜縣師範學校卒業、尋常高等小學校訓導兼校長
第十九組	鹿兒島縣	鹿兒島市	長田町	士族		丹羽民三郎	明治七年七月	農科大學教員養成所卒業、鹿兒島縣師範學校教諭
	德島縣	那賀郡	今津浦村	平民		△酒本忠右衛門	明治十年八月	高等小學校卒業、農業ニ從事
	滋賀縣	蒲生郡	金田村	同		小西寅之助	明治十一年七月	蒲生郡農會書記
	愛知縣	葉栗郡	黒田町	士族	組長	服部萬次郎	明治十四年九月	尋常小學校長
第二十組	兵庫縣	氷上郡	柏原町	平民		廣内繁吉	明治三年六月	東京工手學校機械科別科修業、農業ニ從事
	愛知縣	西春日井郡	萩野村	同		水野巡	明治十一年三月	西春日井郡書記
	岐阜縣	揖斐郡	池田村	同		原齊治	明治十一年三月	高等小學校卒業、岐阜縣害蟲驅除講習會修業
	和歌山縣	海草郡	濱中村	同	組長	○多田高吉	明治六年二月	和歌山縣師範學校卒業、小學校訓導兼校長

●昆蟲諸會彙報

鹿兒島縣肝屬郡敎育會にては、去月四日より三週間、鹿屋尋常高等小學校内に夏期講習會を開きしに、其中昆蟲學科の講師は縣立鹿屋農學校助敎諭生熊與一郎氏にて、講習生は各小學校長及び職員五十七名なりしが、女敎員も十三名加はり居て何れも熱心に研學せり。（右、鹿屋杉原正助氏報）○靜岡縣周智郡にては、郡農會の事業として、昨年の如く當昆蟲研究所長名和靖氏を招聘して本月二十日より昆蟲學講習會を開き、なは十八日より講習修了日にかけ、昆蟲標本の陳列會をも催ふす豫定なりとぞ。○愛知縣寶飯郡に於ては、本月十日より三十日間、豐川町妙嚴寺内に三河物産共進會を開くを機とし、赤坂高等小學校より昆蟲標本九箱を參考に出品して、一般の視線を注がしめたるが、尚は來春四月初旬より、同郡冬季採集昆蟲展覽會を開く筈に内決せり。（右、同地田中周平、平松彌一郎兩

氏報告）〇岐阜縣養老郡の昆蟲研究會員は、來月十二日より安八郡大垣町に開く東海農區の實業大會を好機として、其會員の採集製作せる昆蟲標本を、養老公園の一亭に陳列して衆覽に供せんと既に其準備をなせり。〇兵庫縣淡路國三原郡の有志は、豫ても登載せし如く、愈々本月二十一日より五日間昆蟲展覽會を開くにつき、當昆蟲研究所よりては裝飾用の蟲旗九十旒の使用を承諾し、兩三日前これを同地へ送附せり。

◉蝶の烙印　こゝに圖せる蝶の烙印は、古桝の内部に用ゐたりしを摸寫せしものなるが、其製作如何よも近代のものとは思はれず、本號通信欄に載せたる秋田藩の蠶種檢印とゝもに、斯學者の注目すべきものと信じたれば、茲に其全形を示す、所有主は兵庫縣播磨國姫路の芥某氏なりとぞ。

◉第十四回全國害蟲驅除講習會期の變更　前號に其開會を報じ置ける、第十四回の全國害蟲驅除講習會は、來十月十七日より開講の豫定なりしに、其以前に昆蟲標本整理の必要起り、且つは會場使用上の都合もありて之を難んじ居れる折柄、助手名和梅吉氏の同じ十月を以て渡米決行の事急に内定したれば、已むことを得ず十一月廿五日より二週間開會することに變更せり。

◉簡便注油器　左に收めたる簡便注油器は、山口縣吉敷郡大内村御堀の池田健然氏の寄稿に係るものなるが、氏は過般實驗の結果、その構成の簡易にして低價なるは最とも農家の使用に適當なるを信じ、特に本誌に寄稿してこの器の有用なるを紹介する次第なりとぞ。尤とも別に委しき説明を附されしも、紙面に餘白なければ、たゞ其構造を示すに止むることゝなせり。

◉小學生徒の手柄　岐阜縣土岐郡の昆蟲學會の報告によれば、同郡にては本年六月上旬以來、苗代田に本田に螟害劇甚を極め、到底尋常手段にては驅除の功なかる可き見込ありしより、同學會はその旨を各支部長に通報し、十二校の小學兒童を引率して採卵捕蛾に勉めしめたるに、去月中旬までに三十

三萬餘塊、五萬七千餘頭を捕殺し得たりといふ、其細別は左の如し。

校名	生徒員數	採取セシ螟蟲卵塊數	捕殺セシ螟蟲蛾數
土岐小學校	二一九	一〇、六八二八	九六七六
餘戸第一小學校	一五八	六三〇〇	九五〇〇
餘戸第二小學校	四七	一八八〇	二八二〇
餘戸第三小學校	三二	一五	二五三
駄知小學校	九六	一〇、〇〇〇〇	一〇〇〇
肥田小學校	九三	四二四七	母蛾ハ撲殺直ニ放棄セシヲ以テ其數不詳
瑞浪小學校	一八八	四一〇四	二、一七七九
笠原小學校	二〇一	三、五六〇〇	一二〇
瀧呂小學校	三二	三、〇〇〇〇	五〇
曾木小學校	五一	四五〇〇	三〇〇
釜見小學校	五五	三、七八一三	一、一六八〇
平原小學校	三二	一七九五	一二三〇
計	一二〇四	三三、三〇八二	五、七一七八

◉第四拾五回岐阜縣昆蟲學會例會　同會を本月六日午后に開きたるに、意外にも炎熱を厭はぬ遠隔の郡部よりの出席者多く、都て三十餘名の會衆あり、左記の順序によりて、第一席より第四席までの講話を終へ、五時過ぐる頃散會を告げたり。次回は十月四日なるが、當日は特別會員名和梅吉氏の米國渡航の發程見送りを兼ね開會の都合なれば、會員は總て定刻までに參會の事に內定せりと。

○蟲の音(附)御嶽山採集旅行談　特別會員　長野菊次郎
○富士山の雨中昆蟲採集談　特別會員　名和梅吉
○山陰道所産の昆蟲(附)鳥取縣の狀況　名譽會員　名和靖
○史學上の慶雲は蟲學上の蚊柱の說　特別會員　永澤小兵衞

◉水谷有斐翁の雅印　文化文政の間に挺身博物學の發展に努め、叉其超群の識才を以て後進の啓導に任じ、因りて以て昆蟲學思想を喚起せしめたる水谷豐文氏が、名古屋正秀寺畔の一坏土と化せしより、茲に正に七十年に當れり。其間世に變遷あり學術に浮沈ありしとは云へ、今なほ愛知縣が彷彿として往年の嘗百社の面影を傳へ、近く岐阜縣が昆蟲の研究地として、多少名を知らるゝに至れるは、實に斯翁の賜ものといふべけれ。斯かる緣故もあり、且つは翁の諸蟲譜を始め、其薫陶をうけし吉田氏の蟲譜に、石川氏の蟲譜に、將また大久保氏の蟲譜に、斯學の發達を幇助せしことの多きを想ひ、本誌發刊滿五年の紀念に、その遺愛の雲根一顆を寫し出して少さか追慕の意を表す。（昆蟲世界第五十六號雜錄欄參照）

藤印
豐文

◉岐阜縣海津郡の昆蟲展覽會

既記の如く岐阜縣海津郡に於ては、去月十七日より同廿一日まで五日間、昆蟲展覽會を同役所樓上に開きぬ。今その概要を摘記すれば、場內には昆蟲を以て飾れる額面等を揭げ、陳列所には分類、害蟲、益蟲、敎育用、裝飾用の各種標本を順次配列せしが、初回としては先づ準備も行屆き、都て七十五點三百八十二個を算し、外に簡易製作法によれるもの百四十三點二百五十八個と參考品三十四點六十一個をも同じく陳列したれば、約四萬二千頭の蟲類を收めたり。斯くて褒賞授與式を擧げしは其三日目なりしが、受賞者は四十名にて、其中一等賞は大江村有志者、今尾尋常高等小學校及び石津尋常小學校の三名に授與せられ、他は二等賞(六名)三等賞(九名)四等賞(廿二名)の三級に分たれ、その簡易製作標本出品者へは總て賞詞をのみ交附せり。さて其審査方法は嘗て全國昆蟲展覽會等にて規定せるものを採用し、かば、是また嚴密高尙にて、其審査長としては當昆蟲研究所長名和靖氏これに當り(故障のため名和梅吉氏に臨時代理せしめたり)他に委員十二名を置きたり。其出品區域は郡內九町村にて人員二百五十名に上り、品種また多少注目すべきものもありて、槪して團躰出品に重きを置きたれば、將來意外の結果あらんかと云へり。同會長は同郡農會長たる古田兼彌氏にて、委員としては海津郡昆蟲學會員擧つて會務を分擔し、終始農會員學會員の盡力頗ぶる多かりきと。又同會の費用は古田、大橋、佐藤、安藤、伊藤、鈴木、鷲野の諸氏を始め郡內有力者の醵出を以て之に充てたるが、右五日間の縱覽者は三千五百餘人を算し、無形に得る所の益少なからざりしとなり。又前記の褒賞の外に石津村渡邊末次郞、大江村水谷和安の兩氏には功勞狀を贈り、名和審査長へは斯學上の功勞に酬ゆるため紀念の銀杯を贈遣するの決議をなせりと。

◉名和梅吉氏の海外視察

當昆蟲研究所助手名和梅吉氏は、海外昆蟲界の事情を視察せんが爲め、來十月初旬解纜れ飛脚滊船に搭乘し、先づ取敢へず米國に渡航の都合なるが、普通の歷遊と事違ひ其歸期は未定なり、尙ほ彼地よりは絕えず通信の筈なれば、本誌の記事よも亦面目を添へんか。

◉鳥取縣の昆蟲報(三則)

去八月十九日より廿八日まで十日間、鳥取縣鳥取市に於て、私立鳥取縣敎育會の主催にて開きたる講習會の昆蟲學科は、當昆蟲研究所長名和靖氏これを擔任して授業せしが、日々の出席人員は三百數十名にて、修業證書を得しは二百九十六名の多きに達したり、而して同會の特色とも稱すべきは、六十餘名の女子これに加はり炎天猛雨をも厭はず能く其終始を一にせる事にて、野

外の採集の如きは悦んで之に應ぜりきと。因みに云ふ、同縣下には第三回全國害蟲驅除講習以來の修業生數十名あれども、互ひに土地の遠隔せるより思ひ乍らも一致の運動を缺きしに、今回名和當所長の到れるを機として昆蟲研究會を組織し、全縣下の同志一團となりて將來斯學に盡瘁せんことを盟ひ、其會則等を議定發表せしが、蓮佛萬吉外數氏は絕えず斡旋の衝に立ちて盡す所ありきと。又同廿九日には西伯郡に散在の名和昆蟲研究所同窓會員一同幷びに郡內有志の發企にて、名和當所長を同郡に請じ、最と盛大なる昆蟲講話會を開き、散會後は更に晩餐會をも催ふして其遠來の勞を謝し、且つ斯學の前途に就て種々協量せる所ありきと。

◉**鳥取縣昆蟲研究會則**　前項に記載せる鳥取縣昆蟲研究會の會則は左に收むる所の如し。

第一條　本會は昆蟲の研究者を以て之を組織す●第二條　本會は鳥取縣昆蟲研究會と稱し、事務所を鳥取縣農會內に置く●第三條　本會は郡市の區域により支部會を設置することあるべし、但し土地の情況若くは會員の都合に依り其區域を合併することを得●第四條　本會は昆蟲に關する智識を交換し、併せて益蟲の保護及害蟲驅除豫防法の普及を圖るを以て目的とす●第五條　本會は前條の目的を達せんが爲め凡そ左の事項を行ふものとす（一）會員相互の氣脈を通ずること（二）昆蟲を蒐集し標本を作製すること（三）研究、調査、講話、演說、討論、協議をなすこと（四）斯道の講師を聘して講習會を開くこと（五）農事、教育、團体と氣脈を通ずること（六）官廳の諮問及一般の質問に答ふること（七）本會の意見を發表すること（八）本會の機關雜誌を發行するとき、但し當分の內鳥取縣農會機關雜誌實業を以て之に充つ（九）其他必要の事項●第六條　會員を分ちて左の三種とす（一）名譽會員（二）特別會員（三）通常會員●第七條　名譽會員及特別會員は、總會に於て之を推選するものとす●第八條　本會に左の役員及事務員を置く　會長一名　副會長一名　評議員若干名　幹事若干名●第九條　役員は總會に於て之を選擧し、事務員は會長に於て之を任免す、但し孰れも無給にして役員の任期は滿二ヶ年とす●第十條　會長は本會を總理し且つ諸般の經營をなし之れを執行するものとす、副會長は會長を輔佐し會長事故あるときは其職務を代理す、評議員は會長の諮詢に答へ且つ其意見を會長に陳述するものとす、幹事は會長の指揮を受け庶務會計に從事するものとす●第十一條　本會會議は總會及評議員會の二種とし、總會及評議員會は會長に於て必要と認めたるとき之を開くものとす、但し會長の意見又は評議員會の決議により臨時總會を開くことを得●第十二條　通常會員は會費として一ヶ年金二十錢を納付するものとす●第十三條　本會の經費は會費及有志の寄附金を以て之に充つ●第十四條　本會に入會せんとするものは申込書を本會に提出し會長の承諾を經るものとす●

◉**昆蟲子守歌**　當昆蟲研究所は斯學進捗の一策として、先づ下層界に昆蟲てふ事を注入するの急

を知り、數年來これに微力を致したるは讀者の推せらるゝ所ろならんが、此事情を熟知せる所友某氏は近頃子守歌を改作したりとて編者の手許まで言遣こせり。固より未定稿の由なれば、辭句に穩やかならぬ節も多きやう覺ゆれど、昆蟲の子守歌とは珍らしければ採りて次に收錄せり、讀者之を草案として推敲を加へなば、或ひはそれ完作を得んかな。

○れんれこよー、おころりよー、れーやの御もりは何處へいたー、お蟲がすーきで、捕りにいたー、歸りの御みやに、何もろたー、害蟲のお蟬や、きりぎりすー、れんれこよー、おころりよー。（右は東京の子守歌の改作）

○れんれこよー、おころりよー、なーつさ秋さの、害蟲はー、なーぜに御聲が、御高いぞー、れんれこ嫌ひの、なき好きでー、そーれで御聲が、御高いぞー、なーけば益蟲に、笑われろー、れんれこよー、おころりよー。（右は土佐の子守歌の改作）

◉海外蟲信一件　獨逸留學中の松村松年氏よりの近信に依れば、氏は去七月中は亞弗利加の北岸に採集を試ろみて、新種の浮塵子百餘種を捕ひ、八月三日に墺國領のツリエスト港に歸着せるものゝ如くなるが、その在外期の滿ちし爲めにや、本月廿五日に同港を出帆し十一月三十日横濱に上陸の豫定なりとぞ。又今春來遊せる英國の紳士エム、シー、ロスチャイルド氏の歸國後は、久しく消息に接せざりしに、此頃Entomological japan てふ當昆蟲研究所に關する一文に、瓢蟲女史の肖像をさへ添へたる鮮麗の小冊子を寄贈せられぬ、中には誤聞に屬する記事もあれど、頗ぶる緻密の觀察を加へし廉も多かり。

◉月前の促織　薔薇の一株「昆蟲世界」は先年幻燈種板の材料にせられた事があッたが、今回或學術雜誌を見ると學說の種にもせられてある。一面から見れば結構な咄であるが、一面から言はせると憫笑至極と評さねばならぬ。◉啻り此事に就てばかり、此感想を起したのでは無いから、今の所謂著述家の爲めに小々言はうなら、近頃昆蟲の事を書いたものゝ中には、萬報一覽とでも評さうか、彼方から一節、此方から一頁といふやうに、切取りをして百數頁の本に纒めたものもある。切取りで以て著述が出來る位ゐならば、筆硯が無用である、既に筆硯が無用である以上は、何が入用かと云ふと、鋏一挺に糊一壺さへあれば十分な道理であるから、以後此等の先生方への手紙の前置き文句には、筆研益々御精良之段奉賀候と書くのを廢めて、鋏糊益々御多用之段奉賀候と改めたならば如何であらうか。昔しは剽竊を以て著者無上の破廉恥罪としたが、今は切取りをしても糊口の料を作ることに勉めて居る、澆季の末世とは斯んなものか知らん。◉前の話は書籍に對する小言であるが、更に圖書の上に於ても、亦同樣であるとは驚かねばならぬ。論より證據、今年になッてから、出版せし昆蟲圖書の中に、著者その人の實

驗から來たものが幾つあらうかを注意するが宜い。何れも何れも皆ヤレ何先生の校閲とか、ヤレ何博士の訂正とかと、同臭味の連番帳らしいものを作ッて、農家を晦ますのを專務とはして居るが、其實はこれまた一種の剽竊で、中には他の版權を侵害して居るものも有るらしい、特に甚はだしいのは、日中公然賣る譯に行かん處から、密々隱れて田舍ばかりを行商して居るげな、それにも矢張某米國學士の名前を利用して居るとの事である。◉斯かる亂雜の有樣であるから、公立の官衙で出版したものにも自づから誤謬が多い、或郡農事試驗場の報告書などには、翅脈やら頭角やら雌雄やらが違ふて居るものを原圖として居ッた、是は他人の圖版をその儘取ッて、剩つさへ拙ない畫工に描かするから、僞りの屋根に僞りの屋根を重ぬる譬への通りに成るのである。併し眞逆に他人のものを取ッたとは、職掌柄言ふことが出來ないから、表面は其處で以て實驗した事にするのなさうだ。◉昆蟲界の弊害を發き始めると底にも底があり、蓋にも蓋があッて、理論外の理屈が多いが、取分け驅蟲油や器械類には弊害がある。或る乳劑にはドクトル號を本尊としたのも見へるが、某地方の試驗場の一人などは、盛んに注油器の提灯を下げて居る。何につけ全たく可愛想なのは、眞僞善惡を分別する事の出來ぬ農家である。（なにがし生）

◉**昆蟲陳列舘開舘一周年の祝ひ**　去月十五日は岐阜縣物産舘設立一周年紀念日の事とて名和昆蟲研究所所屬の陳列舘も亦同じく一周年の祝日に當りしかば、同夜十時まで開舘の上、一般の縱覽に供したるに、晝夜とも頗ぶる雜踏を極めき。此日物産舘紀念式場に於て當昆蟲研究所長名和靖氏は、一席の演說を試ろみて、其希望の存する點より海外の事情にも說及ぼし、縷々事例を引て昆蟲に對する衆人の注意を促がしたるが、この演說の結果、同日よりは福岡縣桑名伊之吉氏寄贈の蜻蛉化石、並びに新潟縣佐藤榮氏寄贈の堆朱彫菓子盆を列品の一に加へたり。

◉**寄稿家のために**　本號には學說その他の記事豫定數外に上り、收容の餘地なかりし爲め、雜錄通信等の次號に編入せしもの多し。又寄稿家中には、變名、雅號、匿名を以てするもあれど、是類は遺憾ながら掲載を見合はする內規なれば、以後は渾て實名を記入せられたし。

◉**昆蟲標本陳列舘の觀覽人**　昨八月中に當昆蟲研究所の標本陳列舘を觀覽せし人員は、總計壹萬卅一人にて、最とも多かりしは十五日に於ける六千六百八十五人、最とも少なかりしは六日に於ける六百五十八人にて、一日平均三百七十一人強に當り、其中には數百里の遠路を來觀せしも少なからざりき。

（以上、九月十三日脫稿）

過般錦地へ罷出候砌は不一方御優待を辱ふし不堪感銘候、歸所早々御挨拶可致之處、所務多忙の爲め其義に及ひ兼候間、乍失禮以本紙上謝意を申述候

名和昆蟲研究所長　名和靖

九月十三日

鳥取縣下　辱交諸君各位

◎昆蟲世界愛讀諸君に敬白す

雜誌「昆蟲世界」の義は、假ひ御注文有之候とも、前金にあらざれば、發送致さゞる規定に有之候處從來の厚誼上、前金相切れ候時は、其旨を朱書の上、特別に御扱ひ致し候ひしに、往々却つて意外の御取計ひに相成る向も有之候故、以後は不得止發送を見合はせ可申候、依て封書に前金切れのしるし相附し發送致候場合には御不用なれば其趣き御一報願上度、若し御通知無きに於ては、舊の如く御購讀相成るものと見做し可申候間、豫め御承知置願上候

九月十日

名和昆蟲研究所會計部

◎昆蟲標本及び昆蟲學研究用具

●農作物害蟲標本　壹組（桐箱入解說附）（金四圓五拾錢）

●農作物益蟲標本　壹組（桐箱入解說附）（金參圓五拾錢）

●教育用昆蟲標本　壹組（桐箱入解說附）（金四圓五拾錢）

●自然淘汰標本　壹組（桐箱入解說附）（金五圓五拾錢）

●雌雄淘汰標本　壹組（桐箱入解說附）（金五圓五拾錢）

●氣候變形標本　壹組（桐箱入解說附）（金四圓）

●昆蟲學研究用書籍及び器具一式

（壹組の荷造費金貳拾錢小包料は百里迄貳拾錢百里外四拾錢）、

明治三十五年九月　名和昆蟲研究所會計部

昆蟲叢書第貳編

昆蟲標本製作全書

右は來十月下旬を以て製本發送の豫定に付此段豫約者諸彥に敬白す

岐阜市京町　名和昆蟲研究所

◎昆蟲世界購讀紹介者芳名

鳥取縣　蓮佛萬吉君　竹信虎造君（五名）

秋田縣　後藤善一君（貳名）

長野縣　細川幸重君（壹名）

群馬縣　山田皆藏君（壹名）

生義昆蟲學現況視察のため來十月初旬出帆の郵船にて米國に渡航致候に付此段辱知諸君に謹告す

名和昆蟲研究所內　名和梅吉

本會特別會員名和梅吉君斯學研修のため十月四日を以て渡米の途に上られ候に付、送別の意を表し度候間、第四十六回月次會（即はち十月四日）には可成御差繰例刻以前に御出席相成候樣致度此段特に及御案內候也（會費を要せず）

九月十三日　岐阜縣昆蟲學會幹事

岐阜縣昆蟲學會員諸君各位

蟲塚保存義金取扱の義締切り致候故直に分配に着手致候處長野縣及京都府下に存在のものに不明の點有之目下照會手續中に候へば自然十月に至らされば終了致し難かるべくと被存候右喜捨相成候同志諸君に報告仕候也

九月　岐阜市京町　名和昆蟲研究所

蟲塚保存義金喜捨第七回報告（順位不同）

金壹圓五十錢　岐阜縣　關谷俊治君
金壹圓　新潟縣伊藤太郎兵衛君
金壹圓　同　小野正三郎君
金壹圓　同　市井仁三太君
金壹圓　同　市井幸太郎君
金壹圓　同　佐藤　橙君
金壹圓　同　佐藤　弘君
金五拾錢　同　伊藤爲太郎君
金五拾錢　同　工藤常齋君
金五拾錢　島根縣　增田齡造君
金參拾錢　新潟縣　小田耕平君
金貳拾錢　同　薄田彌忠次君
金拾五貳　大阪府　小笠原利孝君
金拾錢　兵庫縣　中野壽郎君
金拾錢　愛知縣　田中周平君
金拾錢　同　竹内萬次郎君
金拾錢　新潟縣　佐藤角太郎君
金拾錢　同　大桃元吉君
金五錢　愛知縣　宮野勇太郎君
金五錢　同　寺部治助君
金五錢　同　羽田野榮藏君
金五錢　兵庫縣　名倉彦次君
金五錢　滋賀縣　堀田末松君
金五錢　兵庫縣　西谷忠雄君
金五錢　宮崎縣　神田猛熊君
金五錢　愛知縣　鬼頭辰次郎君
金五錢　德島縣　長尾角太郎君
金五錢　三重縣　川瀨義雄君
金五錢　島根縣　森脇捨松君
金五錢　高知縣　松本喜義君
金五錢　栃木縣　奥澤留二郎君

金壹圓　新潟縣　板垣總之助君
金壹圓　同　伊藤建七郎君
金壹圓　同　細野戸作君
金壹圓　同　市島錬之祐君
金壹圓　同　佐藤榮君夫人
金壹圓　同　佐藤國子君
金八拾錢　同　鈴木菊五郎君
金五拾錢　同　關谷三郎君
金五拾錢　島根縣　石田林太郎君
金參拾錢　新潟縣　本間久雄君
金貳拾錢　同　本間清吉君
金拾五錢　群馬縣　山田皆藏君
金拾五錢　秋田縣　細田茂吉君
金拾錢　千葉縣　八本金十郎君
金拾錢　愛知縣　水野龍次郎君
金拾錢　同　平松彌一郎君
金拾錢　新潟縣　板垣長吉郎君
金五錢　愛知縣　近藤福藏君
金五錢　同　城田德一君
金五錢　同　鈴木浪治君
金五錢　同　岩瀨精君
金五錢　同　加藤式太郎君
金五錢　同　犬塚一君
金五錢　同　中島岬君
金五錢　同　中西伊須造君
金五錢　同　前田悦作君
金五錢　同　西郷啓次郎君
金五錢　同　今泉文七君
金五錢　同　日比元三郎君
金五錢　新潟縣　本間久雄君母堂
金五錢　同　本間久雄君夫人

金五錢　愛媛縣　土屋市太郎君
金五錢　愛知縣　川端九一郎君
金五錢　鳥取縣　大下竹二郎君
金五錢　和歌山縣　堂本嘉一君
金五錢　栃木縣　落合準一郎君
金五錢　愛知縣　澤田政六君
金五錢　高知縣　森岡好馬君
金五錢　岡山縣　加戸伊右衛門君
金五錢　宮城縣　阿部惣三郎君
金五錢　愛知縣　鈴木廣太郎君
金五錢　同　長島十郎君
金五錢　同　大竹直治君
金五錢　同　吉見清右衛門君
金五錢　同　稻石愛之助君
金五錢　同　内山林平君
金五錢　兩　山口春次郎君
金五錢　同　加藤廣太郎君
金五錢　同　市川文吉君
金五錢　同　橋本仲藏君
金五錢　同　今泉嘉一君
金五錢　同　鷲津寰夫君
金五錢　同　渡邊覽三君
金五錢　同　森田平次郎君
金五錢　同　松尾幸次郎君
金五錢　同　ゑびや秀吉君
金五錢　同　ゑびや福助君
金五錢　同　青山新次郎君
金五錢　同　定盛賢太郎君

金五錢　新潟縣　本間椿六郎君
金五錢　同　本間英子君
金五錢　和歌山縣　大野宗一君
金五錢　島根縣　堀江國藏君
金五錢　德島縣　池内國太郎君
金五錢　群馬縣　茂木清治君
金五錢　愛知縣　牧野敏太郎君
金五錢　大坂府　中尾貞次郎君
金五錢　宮城縣　國井眞一郎君
金五錢　愛知縣　鈴木兵四郎君
金五錢　同　辻　松藏君
金五錢　同　清水春吉君
金五錢　同　中野善作君
金五錢　同　羽田野幸平君
金五錢　同　山田助作君
金五錢　同　岡田源十郎君
金五錢　同　神谷福之助君
金五錢　同　白井佐次郎君
金五錢　同　中村五右衛門君
金五錢　同　森島彦九郎君
金五錢　同　大石吉三郎君
金五錢　同　福田蔦藏君
金五錢　同　柴田綾太郎君
金五錢　同　中川惇平君
金五錢　同　神谷兵吉君
金五錢　同　三好慶作君
金五錢　同　政池新作君
金五錢　同　村田照二君

小計金貳拾參圓參拾錢（四百六拾六口）
累計金七拾六圓四拾八錢（千五百三拾口弱）

右蟲塚保存費中へ義捐相成候に付茲に及報告候也

明治三十五年九月　岐阜市京町名和昆蟲研究所

昆蟲世界

（明治三十五年九月十五日發行） 第六卷第六拾壹號 （毎月一回十五日發行）

（明治三十年九月十日內務省許可）（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

◉本誌定價並廣告料

壹部 郵稅共 金拾錢 （見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す）
壹年分拾貳部郵稅共 金壹圓八錢

（注意）本誌は總て前金に非れば發送せず◉爲替拂渡局は岐阜郵便電信局◉郵劵代用は五厘切手にて壹割增とす

廣告料五號活字廿二字詰一行に付金拾貳錢、三十行以上一行に付き金拾錢とす

明治三十五年九月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二（岐阜縣岐阜市京町）
發行所 名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二 發行者 名和梅吉
同縣武儀郡下有知村三百七十四番戶 編輯者 天野秋二
同縣安八郡大垣町字郭百五十三番戶 印刷者 河田貞城

（大垣西濃印刷株式會社印刷）

Vol.VI. OCTOBER. 15TH, 1902. No.10.

（毎月一回十五日發行）

（十月十五日發行）

THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.

EDITED BY Y. NAWA.

GIFU, JAPAN.

昆蟲世界

（第六卷第拾冊）　第六拾貳號

目次

（禁轉載）

（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

（明治三十五年十月十五日發行）

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU, JAPAN.

◎寄贈物件受領公告

一金參圓也　岐阜縣　松野春一君
一金壹圓也　島根縣　堀江國藏君
一金壹圓也　臺灣　熊谷六右衛門君
一金壹圓也　福井縣　岡　喜雄君
一金壹圓也　栃木縣　高柳源多郎君
一絹本群蝶圖（支那古畫）壹幀　岐阜縣　古井由之君
一新聞紙（昆蟲記事）二葉　愛知縣　市守謹吾君
一蟲除御札　二種二枚　宮崎縣　竹井繁滿君
一團扇立（蟬形付）壹個　岐阜縣　林　茂君
一硯箱（群蝶蒔繪）壹個　靜岡縣　岡田忠男君
一盃（蝶摸樣付）壹個　山梨縣　入田達也君
一會報（昆蟲記事）一冊　愛知縣丹羽郡農事研究會
一短冊（蝶鳥摸樣付）壹枚　埼玉縣　櫻井倚畊君
一絹手巾（蝶摸樣付）二筋　福井縣　岡　喜雄君
一蟬鳴玩具　壹個　岡山縣　藤田政勝君

右寄贈相成候に付茲に芳名を掲けて其厚志を謝す

明治三十五年十月　名和昆蟲研究所

第十四回全國害蟲驅除講習會員募集

開期（自十一月廿五日至十二月八日）二週間（定員四十名）

全國害蟲驅除講習會は、既に前回までに、三府四十一縣の出身約七百名の有爲なる修業生を出せり依りて此際益々斯學の奮興を期せんことを欲し、來る十一月二十五日を以て第十四回の開講式を擧げんとす。斯學に志ある の士は、速かに其手續を經由せられよ。

今回は全く増員の設備無きを以て、その正式の手續を了し、確定名簿に登錄せられたる正員のみを以て、會を組織する事となしたれば、入會の諾否は一に申込の遲速に由る。

尙申込期限を、十一月十五日以前と定むると雖ども、當所の都合により、隨時入會を謝絶することあるべし。規則書入用の向は郵劵を添へ至急照會あれ、直ちに送致すべし

明治三十五年十月　岐阜市京町　名和昆蟲研究所

右講習會は開會期節の適當なる爲めか、各地よりの應募者既に定員の過半を占めたれば、希望者は速に其手續を遂けられたし。

トックリバチの種類

論説

（明治三十五年第十月）

◎害蟲驅除の事業と農業界の安危

吾儕は屢次蟲害の天災にあらざる事由を辯じ、且つ農作害蟲の驅防と民心動靜の關係をも詳述して、偏へに當路有司の猛省を求め、又世の大農の改過を促がしき。而して到る處の大農は、今に猶ほ舊に依りて驅防の煩はしきを厭ひ、太甚しきは、此を以て人爲以上の難事となし、之を露だも昆蟲の智識を具備せざる神官僧侶の祝禱に託して、其全滅を期せんとする者すら之あり。頑迷固陋、固より一笑に値ひせざるも、唯それ謬僻の見を懷ける者を開導するに勉めず、その爲すが儘に看過したらんには、哀れ紙符木牌の爲めに斯學の進路を遮斷せられ、確實なる農業も遂に危險極まりなき投機業の圏内に誘陷せらるるの日無きを保せざるのみか、其人爲驅防を無視するの結果として、一轉忽ちに收穫の減縮となり再轉當業者の損失となり三轉地租の特免となり、延て國家の富力を殺ぐもの、それ將た幾何なるやを測られざるべし。然は云へ、局部の減收の如き、一兩年間の地租特免の如きは、國家に影響するところ左まで多大なりとも思はれず、而して轉た懊惱に禁へざる所のものは、斯る機會には毎に發噴し易き、大農小農間に於ける無形の災害を防止するの一事にあり。

故に吾儕は曩に蟲害は飢荒の前驅たることを警告して、其痛く本邦の農民を慘殺し、及び其安寧を壞亂

せしものは、決して旱霜風水に止まらざりし事實をも擧證し、而して之を避免するの唯一手段としては先づ大農の天職を盡すの急要なる條理を陳述せりき。然るに世間同感の人少なき爲めか、將た傾耳注目の價値無かりし爲めか、未だ吾が筆鋒を轉じて、他の問題に專らならしむるに到らず、豈に多少の遺憾なしとせんや。吾儕は常に農政學上の法則を牢記する者なるが故に、輕々しく小農細民に與し敢て以て大農の行爲を是非するの愚を學ばざる可しと雖ども、年來見聞の事實は、端なくも、其反省を促がすの已むなきに出でしむるもの一にして足らず。曰く、春夏の候に驅蟲を行ふことをなさず、秋後その禾稼の被害を見るに迨びて、小農の懈怠を叱責し、官廳の緩慢を怨嗟する者を大農となす、曰く、些々たる驅防費を吝惜して害蟲の蕃殖するに任せ、爲めに國家の收益を減少し及び鄰村に於ける共同驅防に障害を與ふる者を大農となす、曰く、その儉歳に米價を騰昂せしめて、獨り奇利を攫取するの術を講じ乍ら嘗て涓滴窮乏を賑救する事を思はざる者を大農となす、と信僞未た容易に判じ難きも、此說の如くんば誰しも之を頌讃するに躊躇せざるはなかる可し。特に明治三十年以來、蟲害地の國家の保護を仰げるもの、前後數回、而して其主因を尋究すれば、また等くこの風評巷說に近似の事例を存するをや。

加之、近く二十年間の農史中にも、また之に類するの形跡尠しとなさず。則はち秋田、青森、島根、愛知、三重の諸縣に於て、蟲害のために其土民の將に四方に離散せんとするに際し、若くは理非を兇器に訴へんとするの一刹那、之を撫育せんとて、空乏の國庫は甘んじて幾十萬圓の巨費を抛棄しき、而して大農は其間に居て毫も財嚢を披かざるなり。更にこれを他の事實に徵すれば、既往三十年間に各地細民の動亂を來せしもの十數回、就中、明治五年に山梨縣民の口を地籍に藉りて、一齊に竹槍席旗の擧に出でたる、六年に京都、福岡、三瀦、廣島の府縣に於て、細民交々蜂起して暴動を謀れる、九年に和歌山

三重、茨城三縣の農民の結黨嗷訴を事とせる、十年に石川縣下の小農の敢て群起擾亂を試みたる、十一年に千葉縣下の地主小作間に異常の紛紜を釀したる、十三年に福岡縣下に三千の群衆嘯聚して一時橫暴を逞うせる、十四年に群馬縣下六十有餘村の農民所在に聚合して、希望を貫徹せんと試みしが如きは其顯著のものたり。而して外面は皆これ農業の利害問題あらざるは莫しと雖ども、抑そもまた爛腸の美味に飽き、亡國の鄭曲に耽り乍ら、却つて敝衣糲食の細民に苛嚴なる大農其人を羨望怨憤したるの反響ならぞと言はんや。否らざれば則はち、大農を襲擊して其家屋を破毀し、若くハ之を法廷に曲直を爭ふの理なければなり。是に於てか、吾儕は世の大農なる者の其天職を行ふに緩にして、其部下を責むるに急に、其地子米を收むるに斂にして、其地子米を散するに怯に、其富力を殖すに勇にして、其富源を作爲するに拙なるを惜まざるを得ず。人或ひは蝗蟲は貪苛の致す所、是を以て民に長たる者能く民を愛しめバ、蝗或ひは來らず、或ひは散去し、或ひは自から死し、或ひは鳥のために食まる、平日心を淸め政に仁にし以て之を格さするにあるのみ、即し不幸にして是災ひに遇はゞ、亟かに政を修めて以て天心を感ぜしめ、而して撲捕以て之を除くに勤めなば、庶幾は我が田稼を害なふ無からんか、と說けるを嘲けりて、陳腐の愚談となす、而して是れ實に眞理の半面を道破して、遺憾無きの至言たるを知らざるなり又或ひは、本邦に於ける害蟲驅防方の煩苛を難ず、而して未だ米國の每歲貝殼蟲に拾餘萬圓の調査費を投じ、又年々一千噸の除蟲毒劑を費消するの眞意を解せざるなり。

顧ふに今年は春來の氣候に異變を呈し、爲めに蟲害劇甚ならず、且つ去月廿八日の狂飆暴雨に襲はれて橫蟲族の如きは、天敵の制裁を加へられたる可ければ、未然の和平を豫斷するに難しとせず。然れども一方より考察する時は、假し禾穀結花の後なりしとは云へ、この稀有の災厄のために、少なくも貳千萬

圓左右の損穀を來たし、加ふるにこれを無上の僥倖として、米價を踊騰せしむるの奸商輩啻に二三に止まらざれば、細民の大半は其妻子を飢餓に泣かしめ、其祖先の祭祀を停むるの悲慘に陷いらざるを得ざる可きか。是時に當り、常に人の上に立て大農と呼はるゝ者は、須からく慈惠仁愛を以て心とし、賑恤救濟を以て任となし、其天職を完うし、其四恩に報ゆべきは論なく、此かる好機を利用して、下層界に積鬱蟠屈せる惡分子の發散に努め、彼の既に工業界に侵入せる可厭の弊根をば、我が農業界に感染せしめざるの考案を施さゞる可からず。明初の朱熊氏云はずや、天災不一、有可以用力者、有不可以用力者、凡水與霜、非人力所能爲、至於旱傷則有車戽之利、蝗蝻則有捕瘞之法、苟可以用力者、豈得坐視而不救哉、と大農諸氏以て如何となす。

◎トクリバチの種類を記す（第拾版圖參看）

名和昆蟲研究所調查主任　名和梅吉

膜翅目の昆蟲には、種々の習性を有するものと、亦奇異の生活を爲すものとあれば、就て之が研究を積む時は、蓋し無量の趣味を感ずべし。今その一例を擧ぐれば、鋸蜂科のものゝ如く、專はら植物の葉肉を以て、口腹を飽かすものあれば、瘤癭蜂の如くに、植物の嫩芽或ひはその葉片を畸形に變ぜしめて所謂蟲癭を作り、以て其中に發育を遂ぐるもあり、或ひはまた他の蟲躰に寄居して、農作害蟲其他を斃

す所ろの寄生種あるに、蟻科のもの丶如く社會生活を營みて、鬪爭に從事し、其兵粮を蓄積し、其捕虜を驅使するもあり、或ひは地籠蜂、鼈甲蜂の如くに、地下に孔穴を鑿ちて、其内に己が後嗣を養育するもあれば、屋角樹梢に瓢巢を懸垂し、又は地中に幾重層の樓臺を築造して、同族の蕃殖を圖る長脚蜂、土蜂の如きもあり、或ひはまた絶えず糧を花園に求めて、其生計を圖るの際、間接に花粉媒助の作用をなす竹蜂、蜜蜂の種類あるに、營々軟土を運びて、壔子形の巢窟を搆成するの蜾蠃あり。去れば之を細かに觀察する時は、千差萬別、記述するに日もなほ足らざるやの念ひあり。

上に擧ぐる所ろの種類中、玆に主として解說を試ろみんとするは、其最後のものに屬せり。則はち俗にトックリバチと稱するものにて、其漢名をば蜾蠃といふ、古くは之をスガルとも云ひき。此種は其形體の小なるに似ず、詩經に螟蛉有レ子、蜾蠃負レ之と書せられしより、和漢の本草家にも儒家にも、深く研究を遂げられしもの丶一にて、古今これに關する諸說は、紛々として近く三四十年前までも、歸着する所ろ無かりしなり、蓋し古人がろの習性經過に暗きと、分類分科の確然たらざりしは、斯く迷謬を重ねしめたるに似たり。去れば或ひは細腰蜂と稱し、或ひは似我蜂と呼び、或ひは蠮螉の本名を稱し、邦稱にもサソリの別名さへある等、人をして轉た煩雜を感ぜしむるものありと雖ども、之を要するに、唐土の記載方法は科屬名に適當にして、分種分族に不便なれば、曩に吾が名和昆蟲研究所は之を他科より分離して、別にトックリバチ科を置き、蜾蠃の漢字を以てこれに適てぬ。而してこの稱呼に至りては、其巢形の小壔子に似たるより、壔子の俗訓トクリ(德利)を取りて、之に冠せしめしに過ぎず。

そも此種のものには、同目中の蟻、地蜂、蜜蜂等の如くに、職蟻といふべきもの無く、又勞蜂と稱すべきもの無し、故に營巢育子の事、みな雌雄兩性によりて遂行せらる。但し、其營巢の方法は二樣に分れ

樹枝若くは石壁等に泥巢を粘着せしむるものと、筆管又は竹筒中に作房するものとあり。一般の躰色は黑くして黄色或ひは赤黄色の横條を有するも、腹部の胸部に接合する所ろ甚はゞしく括れて有柄狀をなすものと、無柄即はち細腰ならざるものとあり。觸角は絲狀をなし、雄のものゝ尖端第二第三の兩節は、特に纖細にして曲鉤する事あり。何れも螟蛉族、尺蠖族のものを常食となし、又これを以て幼蟲の糧に充つ。今之を記載するに當り、讀者の便を圖りて、左に先づ同種異屬の特質を掲げ、然る後に其小別に及ばんとす。

甲　有柄種

（イ）ヘウタン バチ（Zethus屬）　頭部は大にして方形を爲し、複眼の後部と頰部とは共に廣く、唇基板の濶は、其長さよりも廣し。是れ此屬の特質なり。

（ロ）トックリ バチ（Eumenes屬）　頭部は横位をなし、複眼の後部は廣からで、頰部は殆んど被覆せらる、唇基板の長は、其濶よりも長し。是れ此屬の特質なり。

乙　無柄種

キスヂ バチ（Odynerus屬）　腹部の第一節は、漏斗狀をなさず、漸次圓形をなすか、或ひは直截狀をなし、下顎鬚は總て六節より成り、下唇鬚は四節より成る。是れ此屬の特質なり。

第一　ヘウタン バチ（Zethus sp?）　此の種は中形にして體長は五六分許かり、其の翅張は八九分の間にあり、腹部第二節の第一節に接合する處ろ、緊く括るゝを以て、下躰は恰かも瓢形をなす、故に瓢の俗稱を取りてヘウタン バチ と命名せらる。躰色は黑く、腹部には著るしく光澤を有し、頭部は大にして方形をなせり。複眼は茶褐色を帶びて、兩側の前方に位ゐし、その後頭部は廣し。三單眼は漆黑色に鼎足をなして頭頂に點在す。觸角は短かく、十二節より成り、是また純黑にして、尖端は稍太まる。胸部は楕圓形をなし、中胸背には四溝條を存せり。翅は半ば透明にして、前翅の前緣部は彩色少しく濃かに、緣紋は暗褐色を呈し殆んど方形をなす。脚部また黑色にて、甚はだしく長からず、腹部の構成は

有柄狀をなし、其第一節と次節の末端には、黃色の橫條を有することキスヂバチのそれに類似するも其有柄なると、第一第二兩節縫合部の極めて細きとは、兩種判別の特徵とすべし。此種は多く七八月の盛暑に出で丶、樹幹、木材等の小孔若くは竹管中に於て其幼蟲を育養す。即はち諸種の青蟲及び尺蠖の類を捕ひ來りて、之を其巢房內の空隙に塡塞するものにて、古人が書齋中多二蠮螉一、好作二窠於書卷一、或在二筆管中一、祝聲可レ聽、有レ時開レ卷視レ之、悉是小蜘蛛、大如二蠅虎一、旋以レ泥隔レ之、乃知レ不三獨負二桑蟲一也と記載せしものとは違ひ、本誌第四卷第三拾五號雜錄の蟲談片々の材料こそ、恐らくはこれと同種と思はるれ。其分布區域は判然せざるも、從來の見聞に徵すれば、寧ろ廣きが如し。

第二、トックリバチ(Eumenes pomiformis Fab.) 是は最とも普通の種にて、土を搬び、泥を啣み來りて、巧みは壜子狀の小巢房を作るを以て其名を知らる。外見は前種に肖たるも、其頭胸部の形狀を異にせり。躰長は五分乃至五分五厘、翅張は七分八厘乃至九分を算し、全躰黑色にして腹部の第一第二兩節の末端には、黃色の橫條を有し、其第二節のものは、前種よりも廣し。頭部は橫位をなし、複眼は茶褐色にて、其後部は廣からず。頭頂の單眼は三點より成り、光ある黃褐色を有せり。觸角は前種よりも長く、尖端は鉤曲し、雌のものは十二節、雄のものは十三節より成るを普通とす。而して雌雄共に其兩角間には黃點を印し、特に雄の唇基板は黃色を帶べり、胸部は稍圓くして黑色に、前胸部の前緣は黃色を呈し且つ中胸の側面には一箇、中胸楯板には二箇の黃紋を、其下部にも亦一箇の黃橫帶を存す。翅は前後とも半透明にして、緣紋は暗褐色を帶べり。脚部は黑色と黃色とよりて彩られ、雄のものは特に濃黃なり。腹部は有柄にして、第一第二節の末端に黃條を橫走し、其中第二節のものは、兩側に於て廣きを常とせり。此種は五六月頃に出で丶、泥土を以て小房を作り(第拾版イ圖)青蟲、尺蠖、捲葉蟲の類を其

中に塡充して幼蟲の糧に備へ、成蟲また同一の蟲類を捕食す。尚ほ本誌第三卷第廿三號講話欄を參照せば、讀者に裨補する所ろ少なからざらんか。

第三、キボシ　トックリバチ(Eumenes fraternus Say.)　此種は前種に肖たるも、其第一節と第二節に各二箇の黄紋を有するを以て此稱あるなり。前種よりは普通種として知られ、其長三分五厘より六分五厘に達し、翅張は七分五厘乃至九分五厘許り、全躰黑色にして、腹部の第一乃至第四節には、黄色の横條を有す。頭部は横位にして黑色に、複眼また同色なるも、なほ他の着色を交ふ。單眼の位置、色澤等は殆んど前種と一致し、觸角また同一にして、雌は十二節を雄は十三節を具へ、基節の前下面には黄色を兩角の中間には黄紋を帶有す。唇基板は雌に於ては其前半のみ黄色なるも、雄にありては全部同色にて其他胸部の形狀及び彩色等に至りては略ぼ前種と異ならざ、但最後の横帶の兩側に、稍大なる黄紋を有するの差あるのみ(或ひは此黄紋を缺けるものもあり)。腹部は有柄にして、第一節以下第四節の末端には各々黄色の横條を、第一第二の兩節には黄紋を有するも、第一のものは微小にして往々之を缺くてとすふあり。此種の習性と幼蟲生育期等の狀態は、孰れも皆前種に同じ。第十版の(ロ)號はすなはち其寫生の放大圖なり。

第四、スズ　バチ(Eumenes petiolata Fab.)　此種は蜾蠃科中の大形種にして、常に山林中に多し。躰長は七分五厘乃至八分五厘、翅張は一寸二三分左右を常とす。躰色は黑く、腹部の第一第二兩節の黄色部は横帶をなし、前種とは稍趣むきを異にせり。頭部は横位にして黑く、複眼は茶褐色にして大に、單眼また同色にして頭頂に在り。觸角の尖端は鉤曲し、雌のものは黑色を帶びて十二節あり。兩角の中位には黄紋を有し、上位には斜黄線を具へ、唇基板は黄色に彩どらる。胸部は黑色にして、前胸部は殆んど

黄褐色に、中胸部の側面よは同色紋を、中胸楯板の後部よは、亦同色の横條を存す。翅は黄褐色を呈し半は瑩徹にして、前縁部の着色は濃かなり。脚部は黒色と、黄褐とより成り、腹部は鈍黒色を帯び、其第一第二兩節の末端には、黄褐色の廣帯あり、他の第三第四第五の三節の末端は多少の褐色を呈す。此種は其體形の鈴狀をなすより、スズバチと命名せられたるものなるが、第十版(ホ)圖に示すが如く、爛泥細土の類ひを啣み來りて營巣す。其巣内よは子房三四區を連ね、各房には數頭の青蟲・尺蠖類を塡塞することまた前種の如し。此巣は一見宛がら土塊の如くにて、容易に蜂巣とは思はれぬやう構成せらる尙ほその空巣中には、往々碧蜂の代りて棲居せるを見ることあり。

第五、キスヂバチ(Odynerus sp?)　此種は無柄の腹部に二黄條を有するを以て、キスヂ蜂の稱を得たるなり。體長は六分五厘許り、翅張は八分乃至一寸二分許り、全軀黒色よして腹部の第一第二兩節の末端には、黄横條を有し、頭部また黒色を以て装はる。複眼は茶褐色に、單眼は三箇點在すれども、其着色は一定せず。觸角の末端は多少鉤曲して、總て十二節より成り、兩角間には黄紋を有し、基唇板また黄色なり。胸部は黒色に、その黄色を呈する局部はトックリバチに同じ。翅は淡黒褐色にて、縁紋は赤褐色をなし、脚部は黒色と黄色とに彩どらる。此種は常よ竹筒又は樹幹の孔穴よ其幼蟲を飼育し、青蟲尺蠖等を餌とすること恰かも他種に等し。想ふに、是は陶氏の所謂、其一種入蘆竹管中者、亦取草上青蟲ものか。第十版圖の(リ)號は其幼蟲の生育して、將に蛹化せんとする狀を示せるものに係る。

第六、ムシヒキバチ(Odynerus sp?)　此種の軀長は四分五厘より五分五厘の間にありて、翅長は七分五厘乃至九分五厘とす。全軀黒色なるも、其腹部には赤褐色を彩どる處ろ多し。頭部は黒く、複眼は茶褐色よ、三單眼は頭頂よあり。觸角は雌に十二節、雄に十三節ありて、兩角間には小黄點を飾り、なほ

唇基板も黄褐色を装ふ。胸部は黒色にして、前胸部の前縁のみ赤褐色を呈し、翅は淡き暗褐色をなし縁紋は全たく黒褐なり。脚部は殆んど黒色に、腹部は無柄にして、第一、第二節の後半は赤褐色を帯び第三節より第五節に至る末端には、同色の横條を畫せり。此種また竹筒、樹幹等の孔中に營巣して、其自族の蕃殖を圖ることは、敢て前種と異ならず。第十版(ヘ)號の放大圖を參照せよ。

第七、ベッカフ ムシヒキ バチ(Odynerus sp?) 此種の翅色は鼈甲のそれに似たるより、此稱を冠せらる、一にまたオホ ムシヒキ バチとも云ふ。其體長は五分五厘乃至六分五厘、翅張は九分乃至一寸一分五厘、體色暗褐に翅は、即はち鼈甲色をなせり。頭部は鈍赤褐色にて黒斑を有し、複眼は茶褐色に、單眼は黒色にて、三點頭頂に散在す。觸角は赤褐にて、雌のものは十二節より成り、雄は十三節を算す、前胸部は黄褐を帯び、中胸楯板及び其後部と後胸部の一端は、鈍黄褐色をなす。脚部には鈍褐の着色を有し、腹部の第一第二第三節の各末端と、第四第五第六節等は、共に鈍黄褐色なり。此種また竹筒等に入りて、其巣窩を營なみ、内に其幼蟲を育ふ。第十版の(ニ)圖は、其實物を廓大となせるを示す。

前述の如く蜾蠃族のものは、總て食肉性にて、特に其幼蟲を飼育せんが爲めには、一卵毎に少なくも數頭の青蟲、捲葉蟲、尺蠖類を捕ふるが故に、冥々裏に蟲害を驅防するの功は、得て測り難きものあり。則はち農耕養蠶の上に與ふる利益は、多く他の益蟲の効益に譲らざる可し。三千年來、蜾蠃の名嘖々人口に喧びしかりしも、良とに其以なきに非ざるなり。

(圖解) 第十版圖(イ)はトックリ蜂の巣房。(ロ)はキボシ トックリバチの放大圖。(ハ)はトックリ バチの放大圖。(ニ)はベッカフ ムシヒキ バチの放大圖。(ホ)はスズ バチの巣房。(ヘ)はムシヒキ バチの放大圖。(ト)はキスヂ バチの自然大。(チ)はスズ バチの自然大。(リ)はキスヂ バチの幼蟲棲息の狀(自然大)。

◎慶雲は蚊柱たるの説

仙臺宕麓　晴耕雨讀子

本邦の中世史を繙かば、彼の唐土のそれと同じく、赤雲、紫雲、祥雲、慶雲などの文字乃、屡次讀書眼を遮ぎるもあらん。就中、慶雲を以て國家大瑞の一に加ひ、乃の大寶三年五月、西樓の上に現はれたる時の如きは、元を慶雲と改め（是と殆んど同時に、唐の睿宗も、景雲の年號を用ゐたりき）、天平神護三年八月、參河國に見はれし時にも、軈て神護景雲と改元せしめたるが、天長三年七月には、豐樂殿の西に見はれ、天安三年の八月には、但馬國に見はれ、貞觀十八年七月には、東山に見はれたりとて、皆之を國史に特筆せしめぬ。想ふに、當時は本邦も將た唐土も、苟しくも呈祥出瑞の事ありとし云へば、詳らかに其實體を究めず、偏へに心醉迷信を以て之を迎へたるの極、國家に弊害を遺せしもの決して尠少にあらず。則はち正史にこれを證示するのみか、なほ唐の文宗の開成三年に、諸道の祥瑞を言ふことを禁ぜしに據るも昭らけし。降りて近世に移れば、和漢ともに其名をさ〜史上に絕てるが如きも、彼には明の世宗の嘉靖十七年四月に、群臣が景雲の出現を頌賀せし事あれば、況して千年以前の我が國民が、之を六十四大瑞の一と誤解せりとて、强がち笑ふべきにしもあらじ。

赤雲、紫雲、祥雲は措て問はず、熟々慶雲てふものに就て考ふるに、既に其文字の自示自證せるが如く古へに國家治平の瑞徵と呼ばはれし一種の雲象にて、また景雲、卿雲とも稱せられ、大上中下の四瑞百五十四名物の首班に置かれし程、愛たしと信ぜられしものありき。畢竟是は上古以來、大陸文物の東漸するに從へて、彼國の俗說仙話をも倂せ將來せし形見なれば、昆蟲學上の織女、齊女等とともに、外國傳來の迷信の一とや言はまし。

然るにても、慶雲には如何なる形象を具ふるが爲めに、斯く世にも有難きものとして、敬尙せられしか

と云ふに、固より甘露降り竹實結び、麟獸出で鳳鳥翔るを以て、此上無き吉瑞と思料せし古人の事にしあれば、或ひはこれを以て非レ氣非レ煙、五色紛縕、是謂二慶雲一といひ、或ひは景雲者、太平之應也、一名二慶雲一といひ、或ひは君乘レ水而王、其政和平、則見といひ、或ひはまた王者德、至二山陵一、則景雲出ともいひて、只管治平の應兆として祝こび、時には若レ烟非レ烟、若レ雲非レ雲、郁々紛々、蕭索輪囷、是謂二卿雲一、卿雲見、喜氣也などの頌辭を書列ねたる事も之あり、然れども其實體に至りては、嘗て何人も之を說明せざりき。』前に引用せる故事は、史記、孝經、白虎通、祥瑞圖、晉書、唐書等に擧げ置ける要旨なるが、更にこれに唐の太宗の生るゝや、慶雲其屋に見はれぬとの傳說及び韓退之の賀二慶雲一表てふものをも加へて、之を我が書紀、續紀、類聚國史、延喜式等に散見の事實と對照を遂げしに、彼我全たく其記載の趣むきを同うするを知れり。中に形知レ虹而非レ虹、廣可二一丈五尺一長可二四五丈一とか、五色雲起とか、若くは本朱末黃、稍具二五色一などの形容は、其見る所によりて多少違へる點あるも、其一種奇異の現象として、筆を有耶無耶の間に收めたるに至りては、盖し其揆一なり。乃はち知る、無心にして岫を出で、飛行常處無しとか聞ける一沫の浮雲も、往時、聖代を表示するの裝飾品に供せられ、又施政上の一機關たりし事を。

曩に余は祥瑞甘露の記事を草し、以て昆蟲に對する迷信の一斑を雜誌『昆蟲世界』第五三、五四兩號に揭げしが、其後不圖、正史の所謂慶雲なるものも、甘露と同工異曲に出でし假托物にあらずやとの疑ひを懷きぬ。乃は慶雲にして眞に嘉瑞奇祥たらんか、其出現の前後には、萬民鼓腹の怡樂あるべきに、反つて災異凶變を以て書史を瀆し、剩さへ上に美政無く、下に怨聲を聽き、後世瀧澤曲亭氏をして、人主好瑞の題下に『當時所レ云祥瑞は、天作ならで人作多く、禎祥ならで妖孽にちかゝり、最とも畏こき事に侍

れど、數朝奇を好みて、瑞を受けさせ給ひしことは、浮屠氏に魅せられ給へばなるべし』と評論せしめ

第壹圖　春蚊姥（雄の放大）

たる事すらあり。又良治を施ける清世に見はる丶ものなりせば、如何で中古といはず、近世に將た今日にも、續々出現すべき道理なるに、然は無くて、數百年此方、更に其跡だも留めざるは、少さか解し得ぬ節なり。特に何につけ、學理の判斷を仰ぐ習ひある西洋諸國には、未だ斯る事例ありとも傳へ聞かざるに、唯り陰陽說に拘泥せる國民の歷史にのみ之あるは、抑ろも訝かしき限りにて、其時期の夏秋にあるも、他に深き理由の存するに因るなる可し、と思量したればなり。而して此疑問を解決するに臨み、最とも有力の反證として探討を重ねしは、世に蚊柱と稱するもの丶記載ありしが、遂に史學上の慶雲は、蟲學上の蚊柱たりとの推斷を下し得たり。卽はち次に列擧するが如き、幾多の理由の存在を認めたるに根づく。

一　慶雲の出現は、毎に國民の迷信力熾んにして、好奇談怪の時代に限れり。

二　慶雲の出現時期は、概むね陽曆の四五月より九十月の間にありて、恰かも生物化育の旺盛期と一致せり。

三　慶雲を以て、虹の如くにして虹にあらず、烟の如くにして烟にあらず、雲の如くにして雲にあらず、濶さ一丈五尺許り、長四五丈に及べりとの叙實は、怪しくも蚊柱の記事に符合す。

四　雲は水蒸氣の上騰によりて其形を成すが故に、平年低溫期に多濕なる畿內地方には、寒冷の候と雖ども、また往々之が出現を目擊し得べきに、高溫期間にのみ起りしは、理に有まじき現象とすべし。

五　雲は平地に見はるゝものならざるに、慶雲は每に層塔高閣に傍ふて上昇せしのみか、又蚊屬の棲息地と覺しき、陰鬱卑濕の處に接近して起れること多し。

六　雲は風位に從へて橫さまに進行し、偶々直上する事ありとも、倏忽の間に遠く飛散するものなるに、慶雲は、中空に直上して

七　其狀宛から戰國の大圓柱を立てしが如かり。是れ蚊柱の外には、其例を求め難き奇異の一現象とすべし。

其名稱をこそ雲と名づくれ、其形狀は雲烟の如くにして雲烟に非ず、虹霓の如くにして虹霓にあらずと云へば、必ずや他に飛遊性を有する氣形の物ありて、一時雲形と誤認せしめたるや知るべし。而して蚊柱は此不明確なる雲に代はり得べき、恰當の形質を具ふ。

八　慶雲出現の時刻は之を知り難きも、赤雲の記事等に徵證する時は、多く薄暮に見はれしが。而して夕陽の西山に舂づきて、殘照なほ下界を放射する瞬間は、實に蚊柱出現の好時期たり。

九　凡そ物象に夕陽の反射を受くる時は、各種の色彩を煥發す。則はち蚊柱に映出せる陽光の變幻は、慶雲の五色又は七色を具ふに適應せり。

十　慶雲出現の記事には、風雨の日と寒冷の候とを缺けり。而して蚊屬の生殖及び移殖作用は、概むね晴天蒸熱の日（種類によりては、朝夕又は曇天の時）にあるが故に此事實は兩者の隱見を一にすることを證す。

十一　慶雲を以て、假りに天意の感應に出づるものとせば、其出現の時期に、四季寒暄の差別ありとも思はれず。然るを偏へに高溫期に限れるは、其名稱と性質とに背けるものと謂ふべし。

十二　慶雲は東洋地方の特有現象ならざる可きに、西洋には斯かる祥瑞の雲氣無かりしより察すれば、別に同物異名の現象を存するに因るならん。而してこれに酷類の形象としては、蚊柱を除きて他に的當のもの無きなり。

十三　慶雲は人智の開明に伴れて其出現を絕ち、蚊柱は學術の進歩に從へて其記載益々多かり。是れ慶雲は一時の假托物にして、蚊柱は實在物象たるの確證にあらざるか。

因是觀之、古への慶雲を以て、今の蚊柱と推定すとも、肯て大過なかる可き歟。扨蚊柱の釋名の數多かる中に、畔田翠山氏は、言鹿集を引て『蚊柱は、蚊の多く集り、立上るもの』とし、大槻文彦氏は『蚊の軒端などに、無數飛びて、柱の如くなる事』とし、落合直文氏は『無數の蚊の群がり飛ぶさまを、柱の如く見做して云ふ語』とし、物集高見氏は『夏の頃、蚊の群がり居るを云ふとぞ』と解き置かれぬ。則はち菅茶山氏が、南洋よは群鳥より成れる鳥柱といふものあり、と說かれしと同じ柱の意にて、夏秋季に蚊族の密聚群至して、右轉左旋、一上一下、はては空中に、巨大の圓柱を立しが如き形象を成せるもの

ゝ稱なれば、箕作佳吉氏が、蚊柱の英譯にWhirling about of a great number of mosquitoes, as on a summer eve. と解説せられしも無理ならぬ事なり。而してその此く同族の聚合するは、論ふまでも無く、螢合戰と同一の目的たる生殖作用、若くは移殖を行はんが爲めなりと知らる。

第貳圖　飛蟻(雄の放大)

♂

古來蚊柱は、獨り蚊族間に於てのみ形成せらるゝが如くに思はれしも強ちこれに限るにはあらず、又常時には碧空さして直上すれども一大横柱を成して數町、若くは數里間に蜿蜒連亘せし違例無きにあらず。而して之が要素とも云ふべき蟲種は双翅目蚊姥科の或種、蚊子科の蚊、擬蚊科の擬蚊子、蟆子科の蟆子及び膜翅目蟻科の飛蟻等なるが中に就てカモドキとモチツキ　カガンボは、早く春季より群集し、蚊は專ら夏秋の二季に之を行ひ、飛蟻に至りては、十月に入るも猶は盛んに之を行ふなり(第一圖より第三圖を參看せよ)。扨その名稱は原と俗語より出でしものと覺しくて、和歌には多く得詠まず、俳家は之を夏の部四月の題とせしかども其起源は之を知るに由なし。然は云へ、伴信友氏が拾遺愚草より『草深き賤が伏屋の蚊柱に厭ふ烟りを立そむるかな』の一首を引來りて、立證せしに考徵すれば、七百年前より、既にその稱呼ありしか。但し和歌俳句の如き、風流韵事上の蚊柱は、夏夕簷端などに隱見する一小團を目すに外ならねば、彼此混ずべきにはあらず。

凡そ本邦に見はれし蚊柱中、その飛蟻の京都に於ける出現は、早く三代實錄その他の史書によりて、世に傳はりしも、普通蚊族の東京に於ける出現に至りては、蓋し谷川士清氏が『元錄甲申年三月十五日、江戸上野中堂より煙出たり、とかくして見れば、火にあらず、蚊なりけり、次で淺草の塔も、又かくの

如し』と記載せしを最古の一とすべし、是は元祿十七年の事にて、今よりは百九十九年の昔しに在り。唯其發生時期の稍早きに失するが如き感あるも、之を太陽暦に改算する時は、春風の駘蕩たる四月八日に當り、恰かも上野公園の彼岸櫻滿開の頃なれば、温暖の天候の繼續したらんには、不忍池畔に、將た寛永寺内に棲息せる無數の蚊族の、一時に茲に雲集群飛せしも理りなり。その淺草に至りては、今なほ東京屈指の卑濕地なれば、當時は然こそと思はるゝ節無きにあらず。これに次ぎて、天野信景氏にも、尾張名古屋城邊に起れる蚊柱の記載あり左に。

七月の末、府城の兩門の左右の堀處々より、烟の如く立のぼる物あり、圍一丈許り、長さ四五丈もや有らん、柱など立たるやうに薄曇りて、夕附日にうつり、色異樣に見えし。人々立より、よく見れば、蚊幾萬億ともなく集りて、此かたちをなせしなり、蚊柱といふべきにや。いかさま希有の事と語りしが、廿六日邦君かくれさせ給へりとなん、廿九日に聞えさせ給ふ。斯る事の先兆にやといふ人多し、

此記事の後半は、例のうけ難き妄説なれば、今は誰信ぜる者とても無かる可きも、是亦百八十九年を算ふる正徳三年七月下旬（太陽暦の九月中旬に當る）の珍事なれば、佛敎の隆昌を極むる同地に、斯ばかりの迷信ありしとて毫も奇とするの價値だに無し。强ゐて言はゞ、遠く慶長十九年二月、大阪城の天主閣に烟起りしに、生憎や豊臣家非運の折柄とて、滿城畏懼の念に驅られ韓人李文長に命じて、吉凶を卜筮に問はしめぬとの事實も、恐らくは蚊柱を知らざりし過ちにあらざる無きか。蓋し彼の有名の城濠は、痛く蚊族の蕃殖に適合するのみならず、外氣も東京に比較して常に不少の高濕を示し、其烟の起れりと云ふ今の三月に於ては、攝氏の十二度乃至十九度强に昇騰の日あるが故

第三圖　普通蚊種（雄の放大）

に、能く普通蚊種發生の要約をさへ具備すれば、早生種族の群聚飛揚の如きは、更に論なかる可きなり。況んや同年は陰陽兩暦間の隔離甚はだしくて、陰の二月末日は陽の四月八日ゝ當るに於てをや。一時は我が中世史と近世史を攪亂せる蚊柱も、今や學術てふ照魔鏡のために、其眞相を看破せられたるが、是より先、科學の未ざ開けざる暗黑界裡にあり乍ら、優ゝ前二説の如き非妄を辯明し、兼て舊來の迷信を擯ぞけしは、谷川氏の飛蟻の記載に及くもの莫けん。其要にいはく『正德四年四月上旬（陽暦の五月下旬に當る）京二條城樓の上、煙出る事二日、蓋し飛蟻の群散する也。錦繍萬花谷に、淵州萬歳樓上煙出、人以爲レ怪、實非レ異、蚊子也と見えたり』と、記事稍簡約に失するも、蚊柱と雲烟の關係より其これを形成するもの、必らずしも蚊族に止まらぬ事を釋證し得て餘りあり。その頃、俳人其角に句あり『蚊柱に夢の浮橋かゝるなり』之を前説に較ぶれば、其差豈たゞ五十歩のみならんや。（未完）

◎黄楊の葉捲蟲に就て（次號の第拾壹版圖對照）

鹿兒島縣鹿屋農學校　生熊與一郎

鹿兒島縣に於ける黄楊は、一の副産物として、縣下の經濟に關はる事尠なからず、然るに近年葉捲蟲の一種夥しく蔓延して、或ひは之が發育を防止し、甚はだしきは全たく枯死せしめ、其害や逐年多きを加ふるに至りたれば、栽培家の困難一方ならず。爲めに余は之が除害驅蟲の方法を講せんとて、先づ其害蟲の形躰及び發生經過の如何を調査せしことあり。即はち其成蹟を左ゝ揭かげて同憂の士に示す。

（一）卵子　蟲卵は常に黄楊の葉裏にあり、其形扁平にして、長さ一ミメ、幅〇、七ミメあり、二化生螟蟲のものゝ如く、魚鱗狀ゝ並列す。其一塊の卵數は、普通二十粒内外なれども、最少なるは七八粒に止まり、多きは四十個以上にも及ぶことあり。產附の當時は純白色をなし、漸次ゝ黄色を加へ、其孵

化期に至れば遂に黄赤色となる。（卵子の暗色又は黒褐色に變ずるは、寄生蜂の寄居せるものなり）。

（二）幼蟲　幼蟲老熟に際すれば、其体長は一寸一二分、幅一分二三厘に達す。頭部は黒色にして、六双の單眼を具へ、觸角は褐色にして三關節より成り、第三節は内方に屈曲す。吐絲口は長く且つ尖り、胴部は緑黄色にして濃緑色の背線、亞背線及び氣門上線を具ふ。其他第一關節の背面には、頭部と同色なる硬皮板あり、尚は第一、二、三の關節には、脚の基部に一個、氣門線上に二個、氣門上線上に一個亞背線上に一個、第三節以下に於ては、亞背線と背線との間に一個、亞背線上に一個、氣門線上に一個の黒色なる疣狀突起物ありて、各々一縷若しくは二縷の長毛を生せり。胸脚は三關節より成り、先端に一個の爪を有す。腹脚は五對にして筒狀をなし、先端に鉤狀の爪を環生す、其數は第二齡前なりせば十八個乃至二十個なれども、第五齡に至れば、七十乃至八十を算す。内臟器管は他の鱗翅類の幼蟲と略ぼ同樣に構成せらるれども、氣管の分布に於て少しく異なる所ろあり、即はち大氣管より小氣管を分岐せるものある事是れなり、而して其小氣管中、氣門の后方にあるものは、下方に、前方にあるものは上方に向ふ。又第一氣門と第二氣門との間に連亘する大氣管も、其構造の少しく異なる點あるを見る。

（三）蛹　蛹長は五分乃至六分ありて、頭尖と尾端とは著るしく鋭れり。化蛹當時は緑色にして、幼蟲時代の亞背線及び氣門上線は猶ほ判明なるも、漸次に灰色を加へ、遂に全たく灰黄色となる。而して羽化の前日に至れば、胸部及び腹部は灰色となり、翅部には黒色の斑紋を現はし、口吻及び肢は稍褐色を帶ぶ。尚ほ尾端には鉤狀の附屬物八枝を具へ、常に絹絲に纏懸して墜落を防ぐ。

（四）成蟲　体長は六分乃至七分、翅張は一寸四分乃至一寸七分あり。其頭部は長五厘、幅七八厘にして、複眼は黒褐色をなす。下唇鬚は長七厘許り、二關節より成り、第二節の先端には球狀の腫起物を具

ふれども、常に密生したる鱗毛の內に隱る。口吻は褐色にして四分二三厘あり、下顋鬚は比較上能く發達し、總て三關節より成り、地質は褐色にして、黑色の鱗毛を密生す。其長さ一厘半許りあり。觸角は六十九關節より成り、長五分乃至六分、褐色にして各關節には、方形の鱗毛を規則正しく二列に密生す。胸部は長二分內外、幅一分六七厘許り、第一關節は黑色に、他は白色の長鱗毛を密生せり。前翅は稍々三角形にして、長五分五厘乃至八分五厘、幅二分五厘乃至三分あり。前緣の一帶(肘脈迄)及び外緣に沿ひたる一帶は其色黑褐にして(光線の作用によりて紫色を現ず)極めて强き光澤を帶ぶ、而して半經脈と肘脈との間には小斑及び弦月形の白紋を裝ほひ、他は皆白色にして、紫色と黃色の光澤を映發す。后翅は前翅と同色にして、長さ四分五厘乃至五分五分、幅四分乃至五分許り、其の外緣の一帶のみ黑褐色をなし、翅底より前緣に沿ふて褐色の刺を生ぜ、其長さ一分二三厘其の脚は三對共に灰色にして(跗節れ白色)前肢は長さ六分乃至七分、中脚及び后肢は六分許りありて、前脚の脛節には一枝、中脚には二枝、后脚には四枝の長刺を具ふ、殊に后脚のものは長くして六七厘に達せり。腹長は四分內外、幅一分一二厘あり、翅の白色部と同色にして、七關節より成る。此種の第一化生及び第二化生のものには、雌蟲も雄蟲も共に著るしく小形なる事あり、試ろみに之を計りしに其體長は五分左右にして、翅張は一分內外に止まりき。今其雌雄の區別に就て言はゞ雄體は雌よりも稍小さきに引替へ、その觸角は却つて稍長し。而して雄の前翅の斑紋は、雌よりも黑く、且つ肘脈及び中央脈に沿ひて、細き黑褐色の彩色を見る。其他兩性の著るしき相違點とも云ふべきは、雄の後緣と臀脈との間には、一帶に淡黑色を呈すること是なり。

(未完)

◎モンキアゲハテフの分布に就て（第四十五回岐阜縣昆蟲學會例會演說中の一節）

名和昆蟲研究所長　名和靖

昆蟲學上モンキアゲハテフと申すものは、鱗翅目鳳蝶科の一種で、全躰は黑鳳蝶のやうに黑うありますが、唯その下翅の中央に淡黃白色の斑紋がありますもので、紋が黃色と云ふ處から斯く云ふのである。故に正當に申せば、キモンアゲハテフ（黃紋鳳蝶）と申すべきで、プライアー（Pryer）氏の記載に依れば『本洲の南方に產するもので、四國以北では見ぬ種類であるが、其下翅の白斑紋は著明で、其飛びかたは非常に迅いが、絕えず同じ場處を往來するの性がある、そして其雌は中々稀れである』と書いてある。先には此蝶の事をキマダラアゲハ（黃斑鳳蝶）と申して居ッたが、實際は黃斑で無いから、後に至ッて紋黃と改めたのである、又其學名はパピリオ、ヘレナス。リンネアス（Papilio helenus, L.）と云ふのであッて、全國昆蟲展覽會の出品目錄には、第二章分類標本の四百二號に登錄されてある。

紋黃鳳蝶とは箇樣なもので、是迄は一向暖地外からは發見せられた事が無い、然るに今は故人となられた名古屋の小塩五郎氏は、先年之を三重縣下の伊勢大廟の邊りで目擊したとの說を立てたが、それも唯見たと計りでは證據に成らんから、實は半信半疑の間に埋め置いたのでありました。處で昨年の春、當所に第一回全國昆蟲展覽會を開催致しました時に、同縣然かも同國三重郡大矢知村の後藤幸吉氏が、之を出品したから、伊勢に居る事だけは確かめたのである。これと同時に、京都府下丹後國宮津町近傍でも採集したと云ふて、今度ハ寒潮の出入する日本海方面からも出品した、出品人は岩見勇藏氏で……全國害蟲驅除講習會の修業生でもあるから、間違ひのあらう道理は無いが、何分伊勢のやうな黑瀨川を扣へて居る暖地とは違ひますから、玆に又々疑がひが生じたのであッた、併し現在採集したと云ふ證據のある以上は致方が無い、是また出品目錄に記入したのである。實は昨年二月、岡山縣邑久郡で昆蟲展覽會を開きました場合に、助手名和梅吉を派遣しました處が、同地で之を採集したのが有ッたとの報告

を得ましたから、暫しは首を傾むけましたが、四國とは僅かに内海を隔つる計りの事、如何にも左樣で

モンキアゲハテフの圖(雄)

あらうと申したのでありました。

右申述べました如く、此蝶種に就ては意外な事のみ多いので有りますが、去る八月中旬、私が鳥取縣に出張致しました折、同縣師範學校教諭を奉職して居る高橋直義氏が縣下には處々に之を發見すると云ふて、現に採集品をも示されましたから、誠に奇妙な感じを起したのであります、其上同縣東伯郡瑞穗村の知人竹信虎藏氏も、同月十八日に、氣高郡の山中で、臭梧桐の花に止まッて居るのを捕へたと申して、惜氣も無く標本を私に贈られましたから、成程斯ういふものか、と始めて嘆聲を發しました處がイヤ中々此位ゐなものでは無い、幾らでも縱橫に飛回ッて居ると申すので、私はプ氏の記載に、これを長崎と土佐で捕ッたが彼の暖地ですらも、五月と夏季の發生であると書いてあるのに、假し多少鳥取縣にまで分布して居ッた處が、秋といふ今日此頃然樣に多い筈が有るまいと申しました。すると同縣農事試驗場の技手をして居る蓮佛萬吉氏までが、鳥取市近傍の臭梧桐の花の上には、今に澤山集まッて居ると證據立てたから、致方がない、是れで私は承知致しました。然かも用事が濟みましての歸途に、東伯郡倉吉町に通ずる道路即はち竹信氏が採集を試ろみられたと云ふ近傍に於ては、如何にも臭梧桐の上で以て、私も兩三回は之を目擊したるのである。此等の事柄から、私は鳥取縣に該蝶の廣く

分布せしことを確かめましたが、同時に丹後國に發生することをも承認したのである……如何に日本海に面して居るとは申せ、實事は實事であるから致方が無い。是を以て之を觀ますれば、道理上有り得べからざる樣な事柄でも、意外な結果を來たすもので、又假ひ書物に書いてある事でも、調査不十分の誹りは免がれ得ぬ事もある、と云はねば成りませぬ。此論法で推測る時には、本邦產の昆蟲は、如何ある有樣に分布されてあるか、殆んど豫斷が出來ぬのであッて、能く調査致しましたならば、隨分複雜な統計表が出來るであらうと思ひます。それも昆蟲の土臺が定まらん間は致方が無いとした處が、各方面に於て、精密の採集を行なひ、責ては之を世に公けにする方法計りも、是非立てゝ置さいのであります。今その一例を擧げますれば、同玄プライアー氏の日本蝶譜には、彼のヒメ シロテフ(姫白蝶)の事を、富士、淺間の二高山及び北海道の產として、これに此種は本洲の南方では、單に山間の產であるが、岩手縣陸中國の中央以北より北海道に掛けては、平原に產すべし、と附記してある、然るに當研究所に居ります永澤小兵衛氏は、一昨年の九月に宮城縣磐城國伊具郡北郷村阿武隈河岸の野原で、その數頭を捕獲し仙臺市の昆蟲講習會の一員は、其後に宮城野原で二頭を採集した事を證明致しました。又エゾ ゼミは大概長野縣以北の產で、其他には殆んど鳴聲を聽かぬやうに信じて居る人も多いやうですが、今春に至り高千穗宣麿氏は、九州の英彥山にも多く發生する事を明言致し、鳥取縣の小田義質氏は三十三年八月に同縣岩美郡雨龍山中で採集したりとて寄贈せられ、又長野菊次郎氏は未だ書物に記載せられて無い、夜鳴蟬の福岡縣に產する事を、實物を以て證據立て、其後に靜岡縣の岡田忠男氏は、木葉蝶の同縣伊豆國に產する事を、雜誌昆蟲世界に通信せられた樣なもので、叨りに從來の記載ばかりを信用すると、頓だ誤謬を來たす事にありますから、平生相互ひに深く注意を加へんければ、滿足な調査が出來ぬ事と存じます、云々。

エゾゼミの圖

名和靖云ふ。本年九月六日ょ開會せる岐阜縣昆蟲學會席上ょ於て、右筆記の大要を演說し置き、同月下旬靜岡縣遠江國周智郡森町ょ開きたる、周智郡昆蟲展覽會に臨みしに、豈に圖ふんや、其列品中に亦此種の加はりあらんとは。就て之を質せしに、同郡久努西村增田彌三郎氏が、本年五月に採集せしものょ係れり。又同展覽會場に於て、靜岡縣農事試驗場技手岡田忠男氏ょ邂逅せしに、氏は其雄蟲を卅二年八月十日ょ同縣濱名郡蒲村神立ょ於て採集しきと。然れば此種の分布は頗ぶる廣く、決して一小地區ょ限らざるべし。斯學研究の資料として、吾同志の續々斯る蟲報を寄せられんことを希ふ。

雜錄

◎昆蟲の海上通過に就て

兵庫縣明石郡　井上藤太郎

余は去月十日餘暇に乘じ、早朝より漁船を明石港に雇ひ、明石海峽ょ釣綸を試みたりき。當日の天候は曇天にして北の和風なりしが、海岸を距ること約十町の處に到りし時、偶々淡路島の方面より、風に逆ふて飛來の昆蟲ありしを以て、臨機船中ょ有合したる掬網を以て之を捕獲せしに、豈ょ圖らんや、稻の害蟲イチモジセヽリテフなふんとは。其後ょ飛來るもの亦多かりしも、他は之を採集せざりき。斯くて舞子濱を距ると約二十五町、淡路の岩屋海岸よりは三十町餘の海上を漂ひ、薄暮明石に歸帆するの間、即はち約十時間ょ、吾が漁船を掠めて飛行のイチモヂセヽリテフ(ハナセヽリテフも混せしか)は凡て六十七頭を算しぬ。而して其飛翔の狀は水面を去ること一尺乃至三尺の間にありて、決して水面に墮落することもなく、或は船体等ょ靜止することもなく、風ょ逆ふて前岸ょ直進しき、以て如何に其翅力の强健なるやを知るへきなり。此一事敢て他を度るょ足らざるも、是より余は害蟲の傳播は、海峽を以て隔離し難きことを信せり。若し不幸にして他の害蟲も、甲地より乙地ょ移殖すると、恰かも此イチモジセヽリテフの如くなふしめば、既に淡路ょ發生加害を逞うせる三化生螟蟲の、遠からぞ本州ょ移殖して、遂ょ大害を全國ょ蔓延するの期あきを保せざるべし、同感の士豫しめ記臆せさる可らず。

◎本邦昆蟲研究家叢話　(其九)

古奥　青蓑白笠の人

◎野呂元丈先生の壯圖　本邦物産學の進化して窮理學となり、窮理學進化して博物學となり、以て人智開發の利器となりしは、實に和蘭學研究の賜ものなり。而して世、蘭學者の鼻祖に、儒家青木昆陽氏なる者あるを知りて、物産家野呂先生のあることを想はず、人生の境遇も幸不幸ありと謂ふべし。先生名ハ實夫、字は元丈、連山と號す、常に字を以て稱せらる、本姓は高橋氏、伊勢の頗多瀨村の人、弱冠出で丶叔父野呂三省氏に子養せられ、遂に其姓を冒せり、資性敦厚にして寡欲なり。時に同郷に丹羽貞機氏(字を正伯といふ、本誌第五四號の叢話第二を參照せよ)あり、豪邁にして學を好み、幼より先生と友とし善し。乃はち相携へて京都に抵り、倶に山脇道立氏の門に遊び、古方醫學を修むるもの七年、其間儒學を並河天民氏に、物産學を稻生若水氏に問ふ。先生恒に丹羽氏と共に、力を物産學の講明に致し各々發明する所少なからず、於是乎、二才子の名都下に喧傳せらる。既にして丹羽氏幕府より箱根山の採藥を命ぜらる、乃はち先生を薦めて與に事にこれに從がひ、其年また富士日光の諸山に藥獵す、時に享保六年なり。次年、植村政勝、松本蛇堂等をも携へて、吉野より熊野山中を跋涉し、九年八月、曾我紹叔、中野道格等と伊豆の大嶋を探撿す。後更に途を轉じて北陸道に入り、白山妙高の山嶽を攀ぢ、佐渡の絕海を横ぎり、動植庶物を蒐集す。斯くて經歷數年、大ひに得る所あり、還りて之を當路に復命す

野呂元丈

幕府俸祿、邸宅を賜ひて其功勞に酬ひ、後擢んで丶醫官となし、又丹羽氏に命じて、庶物類纂の增修をなさしむ。

元文四年有德公の特命を奉じ、儒員青木文藏氏と丶もに、始めて和蘭語を傳習す、蓋し異邦の書説を解譯せしめんとてあり、是を本邦に於ける和蘭學研究の嚆矢となす。文藏とは昆陽氏の俗稱なり。當時、蘭語を繰つる者長崎埠頭に二三ありきと雖ども、皆口舌の技に練熟するの

みにして、未だ讀書講學の用をなすに到らぞ、故に是命ありしなり。然れども、蘭使の江戸に來るは毎春一回に止まり、容易に蚊脚蟹行の文字を識り難く、青木氏の如きは研磨數年の後始めて母子音と四百餘言を辨へしに過ぎざりきと云ふ。田口氏の社會事彙に、參考に資すべき一節あれば、左に先生苦學の狀況を示さん。因に云ふ、此頃はＡＢＣを二十五文字とし、之をアベセデエエハケハと讀めりき。

(前略)毎年一度、使人江戸に來りて謁を幕府に執る故に通詞員を設くと雖も、字を學び書を讀むことを許さず、徒に其口舌に就きて言語を記するのみ、將軍吉宗、天文暦數を學ぶに及びて始めて和蘭の其術に精しきを知り、長崎人西川如見を召し親しく事を問ふ、是に於て通詞西善三郎、吉雄幸作等相謀りて蘭文を學び、其書を讀まんことを請ふ、享保中遂に其許可を得て始めて讀書の業に就く吉宗更に蘭書を求め、これを覽て其圖の精密なるに感じ、これが說を知らんことを欲す、當時庶士に青木文藏と云ふ者あり、其學を好むを以て特に官庫の書を貸すことを許す、元文四年遂に幕府の儒員となり、典籍を掌りて常に蘭書の收用す可きことを說く、是に於て吉宗乃ち文藏及野呂玄丈に命じ和蘭學に從事せしむ、此より二人蘭使の江戸に到る毎に、就きて其言語を聞き、又通詞に賴りて其意を悟ることを得ると雖も、文を屬することを左行にして其轉廻多きを以て、通し易からざるを苦しむ、又使人の來ること一年一回に過ぎざれば、數年の得る所僅に其文字の數を知るに止まれり、延享中に至り始めて命を奉じ長崎に往き、幸作善三郎と此學を研精し、漸く其端緒を窺ふことを得たり、云々。

延享二年、山脇東洋氏書を京都より寄せて、幕府の侍醫望月三英氏に就き、明版の外臺祕要方を借らんことの紹介を求む、先生其間に周旋して、祕府に藏むる所の宋刻本を以て校訂を加ひしめ、然る後に自から之を携へて山脇氏に報ず、其書翌年に至りて剞劂の功を竣ふ、即はち重訂外臺祕要是なり。是より先、醫家の之を藏する者全たく無きにあらざりしも、概むね謄本に過ぎざれば、後進輩は其名を聞くも之を讀むに由なく、且つ其浩瀚なると異本の稀少なるとは、また誤脫校正の途なかりき。此を以て山脇氏深くこれを慨き、望月氏所藏の明版の善本を得て、飜刻に附せんと欲せしなりと。

既にして先生又藥物を長門石見の諸國に探る。その探討已に海内に遍ねきを以て、更に淸國に赴むきて採藥せんことを有司に請ふ、幕議聽さず、先生其宿望の達し難きを嘆じ、これより怏々として樂しまず望月氏夙に先生の精鑒宏識、有用の良材なるに服し、每に勸めて一家の言を立てしむ、先生これを諾し未だ業を卒ふるに至らず、遇々頭瘍を患ふ。遂に之が爲めに寶曆十年を以て病て歿せり、享年未だ詳らかならず。

先生常に虚榮を求めず、又時俗に阿附せず、此を以て世よりの名流たるを知る者鮮なし。然かも多年邦内を遍歴して産物を明らめ、又率先して、泰西の文化を閉鎖國に導びき、なほ外國よ渡航して、其專修の學科を大成せんとの壯志を抱けるのみならず、稀世の珍書を頒布するに盡瘁して、弘く醫藥界の裨益を期せるの卓見偉績に至りては、洵とに後昆よ傳ふべきものあり。望月氏の言にいはく、元丈者、博覽高識專修古本草之業、與余爲逐臭之交云と、その當時の名家に尊尙せられしや蓋し斯くの如きものあり。

十四

ア　ベ

A, B,

（昆陽漫録所載の和蘭文字及び數字と其呼音）

先生初學者の爲めに、和蘭本草和解を編述し、また寶曆二年には、奈良佛足石の廢絶の歸せんことを虞れて、佛足石碑考をも作りき。而して其碑銘記の跋文と、外臺秘要の後序とは、以て先生の性行を表示するに足り、併せてまた大ひに其家庭と學問よ於ける敎養を知るの益あれば、之を下に掲げて、傳記の補足となさんとす。

南都藥師寺、有佛足石焉、天平勝寶年中、文室眞人淨三所作也、又有碑、刻和歌二十一首矣、(中略)、嗚呼千有餘年之物、儼然存於今日、豈可不尊敬哉予生勢州、父母親戚皆修禪歸依三寶、數禮長谷觀音及南都古佛刹、因自幼聞之久矣、今親覩眞蹟、不堪追念之情、及上梓飜刻、且手自草一通、傍附譯註以合刻焉、並飜刻佛足石記及露盤銘、共爲一冊、而贈印板於藥師寺、蓋欲廣傳也、其第一章和歌、有爲父母之句、偶感於此、以起信爾。(以上、石碑考抄文)

醫官故法眼山脇道立先生、洛之醫宗也、予先入三省者、昔嘗藉門下、故予弱冠學洛時、寓其塾中、親受業數年於茲矣、先生性識明敏、紀聞該博、精方書熟本草、(中畧)　尤爲醫林所宗、常誡門人、曰、夫學醫者、要勤讀書耳、讀書而不能術者、或有之、未有不讀書而能術者也、勉哉小子、至於若予蠢愚難化、拊之畜之、啓之發之諄々敎育、有不可忘者、其逝也、已二十年、每追念之、則潸然泣下、唯哀不能酬一日之恩耳、云々。

(後序撮要)

按するに、野呂先生の傳記は一も未だ之なかるべし、遇々逸事を記するものあるも、事實に錯誤ありて信を措くに足らず。今諸書を

綜合して、纔かに其一斑をものすと雖ども、年月及び事業の過半はこれを知るに由なし、惜むべき哉。又按ずるに、先生の清國に渡航せんと欲せしは、二大原因あるに似たり。一はその特長を益々伸ばさんとの目的なるに違はざるも、一は阿部將翁氏に刺戟せられし反響にあらざるなきか、蓋し阿部氏は當時、支那直傳の本草學を以て世人に重んぜられ、最とも其得意の時代なりし故なり。而して幕府の之を可さゞりしは、種々の內情ありしが爲めなる可きも、和蘭人に接して親しく外邦の事物を見聞せし先生の目より視れば一葦水を隔つる清國渡航の如きは、左まで難事とは感ぜざりしならん。又その行年に就き、修學時代を二十歳後とすれば、逝去は六十歳左右なりしか、記してこゝに疑ひを存す。

◎東濃地方の蜂子飼養法

岐阜縣加茂郡　長瀬　白

膜翅類の蜂屬は、大概農作物の害蟲を捕食する益蟲なれば、之を保護するの必要なるはまた論なきなり此屬は春暖の至る毎に、勞動の時期來れるを知りてにや、到處の山野にい、其巣窩を作るに營々たるを見る、是れ飼養を試みんとするものには無上の好機を與ふるものとすべし。而して我が東濃地方には夙に此蜂子を飼養するものあり、依て今其の飼養の大略を紹介せんに、七八月の頃、午後を報せば、先づ蛙肉等を綿片に附着し、之を蜂に啣ましめ、其後へに隨へて巣の在る處を檢出し置き、乃ち日中若くは薄暮に成蟲の盡ことく巣內に潛むの時を伺かひ、麥莩或ひは硝烟もて魔醉せしむるなり。但これを爲すには熟練を要すること多く、少なきに過ぐれば成蟲飛散して人を螫刺し、氣に感ぜしむると多きに過ぐれば毒に中りて死滅を免れず、去れば其適度とも云ふべきは、麥糠に點火して巣口を塞ぎ、中に烟を吹込む時は、忽ちにして多くの成蟲の土穴內に於て怒聲を發するを聞く、其發聲停まるも尙は五回ほど吹込みたるの後にあり、併し乍ら、成蟲の多少によりて斟酌せざる可らず。斯て直ちに鎌にて草木の根を切り、孔穴上の土を堀開きて巣を出し、豫て準備せる空樽、函箱等（蘚苔若くは蠷鬆なる土を詰め置きしもの）に二本の竹串を橫たへ、其上に巣を一枚づゝ並列し、成蟲をも併せ入るべし。此際最とも注意すべきは、雌蜂即はち女王の有無を檢査して、若し之あらばこれを必らず巣と共に收むることゝ、巣の量の約三十目乃至百目位ゐなるべきこと是なり。蓋し雌蜂なき時は、其子蜂は繁殖に勝へすして漸々其數を減じ、一ヶ月の後には遂に空巣となり、巣窩過小にして成蟲少なき時は、一旦破壞せられたる巣を補繕するの勞に耐へずして他に飛び去るものなればなり。已に容器に收めたるときは、蓋を作り其出入に便すべし、孔竅大に過くるときは、幾多の天敵の爲めに害せらるゝことあれば、成蟲の通ひ得る大さを

度として、扁平に穿ち置くに利あり。其巣を安置すべき處は、防風凌暑の構造あり且つ夕照を受くるに適せる高さ四五尺の架上を宜しとす、低處なるときには屢次小蟻ゝ襲はるゝ事あり、知らざる可からず。此方法に據るときは其年の十二月上旬ゝは、大概蜜柑箱大の巣形となり、其量一貫目餘を算すべし、而してこれより以前即はち十一月下旬に至れば、雌蜂となるべき幼蟲一枚あるを見ん、其一巣には無慮二三百の雌蜂を藏むるなり。前述の如く煩累少なく、且つ利益多きものあれば、各地に於ても盛んに之が飼養蕃殖の途を講せられんことを望む、讀者一たび之を試みなば必ずや其趣味の多きに驚ろかん。

◎昆蟲雜録拾遺

千葉縣長生郡　高橋徹一

（一）食蟲の俗　　貧者の日向ぼこりし乍ら、襤褸の白蟲を口中ゝ拾ふて風流を氣取るは格別、佛國人の蝸牛を此上なき美味として、之を日常の食膳に上ぼせ、臺灣土人の芋蟲を生食すと聞くも胸悪ろき心地せらる。內地にても、蝗汁は木曾の名物、蠶蛹の煮附は海無き國の大牢の食とかや。去ればイボタムシ柳の蠹蟲の胃肺に特効あり、蜂の幼蟲の治疳に妙なりとて、其所在を尋ぬるの習俗も之を見免すこそ宜けれ、治疾の効否は迷信者の心の儘ゝ任すべし。然は云へ、蜂類其他の有益蟲を濫殺するは、益蟲保護の上より容し難し、併しこれも斯くすれば、害蟲忽まちに蔓延して、其者に天罰を加ふるものよと大悟すれば、深く愚人を責むるの要も無からんか。

（二）昆蟲と啄蟲鳥　　多年實物に就て研究の功を積める、在京の知友林壽祐氏の談話によれば、凡そ鳥類の諸害蟲を啄食して、其蔓延を防ぐの力は、實に意外に多しとかや。氏は云はく、一時間に五匹の昆蟲を啄食する禽類の、一方里ゝ五百羽有る時は、其一月間の蟲數は二百〇二億九千六百五十万匹となり一年間には、實に二千四百六十九億四千〇七十五万匹ゝ達すべしと。此等の事は、既に西洋の動物書にも精細の記載あるやに聞けど、斯くまでとは思はざりしものを。余は茲に感あり、既に客年一月中、同志數輩と謀りて銃獵者大會を開き、其濫獲を戒しめ專はら有益鳥保護の規約を結び、之を實際に施行して頗ぶる好成績を奏しき。盖し其意世人を警醒せしむると共に、農家たるの本分を盡し、徒らに娛樂ゝ荒まざるの美德を養成せんと欲するにあるなり。宜矣、當路者の明治十六年來茲に着目して鳥類保護に努め、又保護鳥圖譜を頒行して、主意の貫徹を圖りしも。

（三）蟲入琥珀　　水晶若くは琥珀中には、草入蟲入など稱して、細草又は小蟲を含めるものあるは、肯

て珍らしからざるも、余が竹馬の友にて、目下東京に天賞堂の招牌を掲げ、時計寶石の類を鬻げる江澤氏を訪づれて、種々貴重なる寶石を彼より此よと觀覽せし中に就き、尤とも珍種奇品なるべしと感ぜりたしは、琥珀の印材中に小蟻を包みしものと、他に一種の甲蟲を包みしものとなりき。聞けば此二品は人造に成りしものにはあらで、自然產のものとかや、斯學研究の好材料とや言はまし。元來琥珀は、古く支那等に於てこそ貴重したれ、前代の樹脂の結晶したるものにて、當時絶えず滴り落ちたる樹脂の塊をなせる中に、昆蟲の陷いりて其儘包蓄せられ、遂に蟲入琥珀なごを作れるものなれば、蟲躰には微さか毀損の痕も無くて、數萬年以前の姿を明らかに今日に傳へしなり。斯かる理由あれば、昆蟲學を研究するに際り、其起原、經過より偖は進化の道理をも併せ考ふる材料としては、唯一の標本なりかし。

(四)蝶と蛾　先ごろ吾が長生郡の茂原附近に毒蛾の發生せし時、その害毒を受けし者數多出でしかば遠近一時に喧傳し、都鄙の新聞雜誌また頻りに其奇を報じき。然るに、是は世人の所謂毒蝶にはあらで昆蟲學上より見れば、鱗翅目に屬する毒蛾科の一種にて、桑樹、茶樹に發生の小黃蛾とこそは知らるれ蝶なごゝは思ひもよらぬものなりけり。それも支那の古流に分類せば格別なるも、苟しくも科學を先とする今日には、斯ばかりの事注意せずして可ならんや。先年上野公園內に開催の青年畫家繪畫展覽會の招待を請け、往て一覽せし事ありしが、當時出陳の畫は二百幀にも餘りぬべく、姸を競ひ、麗を爭ろひ何れも得意の靈筆を揮ひたる中に、某畫伯の手に成りし春草群蝶の圖は、實物寫生に出で、最とも艶美精緻の佳作なりしが、惜むべき事には蝶と蛾とが群居して春草に戯むる狀を描き置けりき。それ蝶と蛾とは形に於てころ稍似たれ、固より別種たるを失はず、然るを漫然春草群蝶など、題せしは如何にぞや。或人の語るを聞けば、此等の缺點のあるが爲めに、本邦產の工藝美術品は輸出額を減ぜしとか、畢竟昆蟲思想の乏しきより、此かる失態を來たすなれば事は小なるに似たるも、影響する所は多かり、世間一般の注意すべき事にこそ、豈に唯某新報の插畫に、虻と蜂とを誤れるのみならんや。

◎六足蟲雜俎（天の卷）

在岐阜市　長野菊次郎

洋の東西を問はず時の古今を論ぜず、苟くも昆蟲に關することは、見たること聞きたることに關はらず、學びて覺えたること、讀みて知りたることを擇ばず、十把一束に此俎上に載せたれば、甘きか苦きかは、味ふ人の心にまかせん、蓼喰ふ蟲も好きずきとやら云ふなる。

(い)白蟻の工事　埃及のピラミッドの中にて、最とも高きものは四百五十七尺にして、之を人の平均

の高さに比すれば九十倍に當れり、今日の推測によれば、當時十万人を役し三十餘年を經て、始めて落成したるなるべしとの事なれば、世界の一大工事たる事は殆んど疑ふものあらず。然るに白蟻(Temites)の築ける蟻垤には、其蟲の高さの千倍に當るものもあれば、人工によりて成れる大築造よりハ、十二倍以上の工事に當りぬべし、豈に驚くべきにあらずや。

(ろ)甲蟲類の牽く力　レニユア(Legnier)氏の發條計力器によりて計算せる所によれば、十七貫二百匁の重量(歐洲人の平均重量)ある人の牽引すべき力は、平均十五貫なれば、其比率は百に對する八十七に當り、又百六十三貫ある馬の牽くべき重さは、百九貫ありと云へば、其比率は百に對する六十七に當る。然れば馬は己が躰重の半分よりは、少しく勝れる重さを牽くに過ぎずして、人は己の躰に均しき重量を引くこと能はざる次第なり。然るにヲサムシの一種は、躰重の七倍を牽き、シデムシの一種は十五倍を、コガネムシの一種は十四倍を、トラフハナムグリの一種は四十一倍を牽き得べし、とはベルジユームの醫師の計れる所なり。是に於て、人や馬の力が、昆蟲に比して如何に憐れなるかを知るべし。

(は)蚤の跳ぬる力　蚤は身長一分前後なるにかゝはらず、一跳能く三尺を躍ることあり、此割合を以てしたらんには、人は一跳に四町餘を、獅子は一跳に九町餘を躍らざる可からず。

(に)昆蟲の擧ぐる力　昆蟲が飛翔の際に、引き擧げ得べき力を計らんが爲めに、柔かなる蠟の球をば糸にて蟲の後脚に結び付けて之を驗せしに、大抵自躰の重さに伯仲する事を知りたり、即ちベッカフトンボの一種は己が躰と同重にして一、アヲトンボの一種は自躰より輕くして〇・七、蜜蜂は〇・七八、マル・バチの一種は〇・六三、シルハーノ一種は一・八四、家蠅にては一・七七を算するなり。

(ほ)蟻の啣へる力　余過日一疋の黒蟻が、バッタの脚を啣ひつゝ、悠然として過ぎ行くを認めしかば試みに之を捕ひて天秤に上げしに、黒蟻の重さは二ミリグラムにして、運べる脚の重さは三十二ミリグラムなりき。但し是は黒蟻の啣ふべき最大の力にあらざるを以て、黒蟻ハ己が躰重の十六倍以上のものを啣ふに耐へ得べき力ありとするも、亦肯て妨げなかるべし。獅子が牛を啣ひ去ることとは、往々地理書や旅行記等に出でゝ、少焉仰山に聞ゆるも、蟻の顎力に比すれバ殆んど顔色なかる可し。

通信

◎土佐產の蟲報（第六の二）

高知縣土佐郡　武内讓文

○蟬科　（一）ミンミンゼミ。（二）ヒグラシゼミ。（三）ツクツクボウシゼミ。（四）ニイニイゼミ。（五）クマゼミ。（六）アブラゼミ。（七）ハルゼミ。（八）チッチゼミ。此中（一）（二）は山中稍深き處の樹林に多く（三）（四）は市街地に、山中に、普く之を產し（五）（六）は寧ろ人里に近く鳴き（七）は晚春到る所の山中に多く（八）は嘗て土阿兩國の境界に入りし時、樹上に小蟬の異聲を聞きて之を訝りしが、想ふに此種なるらん、未だ其實形を認めず。

○白蠟蟲科　（一）ベッカフハゴロモヨコバヒ。（二）アミガサハゴロモヨコバヒ。（三）アヲバハゴロモヨコバヒ。（四）トビイロハゴロモ。（五）テングヨコバヒ。（六）タテヒトスヂウンカ。（七）シマヨコバヒ。（八）ホソミドリウンカ。（九）トガリガシラトビイロウンカ。（十）ウストビイロウンカ。（十一）トビイロウンカ。（十二）セジロウンカ。（十四）スキバハゴロモ。（十五）ヒメクロヨコバヒ。此中（一）（二）は山中に產するも、其數多きを見ず（三）と（十四）は其數多く、地方によりては（三）は往々桑樹茶樹等に加害す而して森林は到る處ろに其害を受く（四）と（五）は雜草間に棲息するも、未だ農作に加害するに至らず。（此兩種は余自ら採集せしに非ず）（六）は亦雜草間に於て稀に之を獲たり（七）は稻田藺田及び雜草間に於て多く之を獲べく（八）は晚春苗代田及び雜草間に多きを見たり（九）は高知市の北方約二里なる、土佐山村の雜草間に於て數頭を捕たり（十）以下（十二）迄は夏秋の頃に各處の稻田に發生すること多し。中に就て蕃殖の最とも多くして、稻作に加害すること最とも劇甚なるものは、即はち（十二）にして、山間地方に在りては其害ツマグロ種を凌ぎ、往々稻株を枯凋せしむ、余が本年飼育したるものは（十二）の短翅は夏月に多く出でて秋月に少く（十二）の短翅は野外に在て秋月に少からざるを見たり。此等の幼蟲は其發達せる後脚を「バッテラ」狀に擴げて、水表を疾走すると頗る巧なるも、暴風大雨に遇へば其斃るゝこと數を知

らず（十五）は亦此等の諸種に混して加害す、秋收の後は皆禾本科の雜草に移る。

○角蟬科　トビイロツノゼミ。唯此一種を樹林ゟ於て獲たるのみ。

○横蟲科　（一）チマダラヨコバヒ。（二）キマダラヨコバヒ。（三）フタテンヨコバヒ。（四）マダラヨコバヒ。（五）イナヅマヨコバヒ。（六）ヒシモンヨコバヒ。（七）ヨコバヒムシ。（八）オホツマグロヨコバヒ。（九）ツマグロヨコバヒ。（十）マルクサゼミ。（十一）サジガシラヨコバヒの一種。（十二）アワフキヨコバヒの一種。此十二種中（一）（二）は春秋の間、幼蟲成蟲共に桑樹に充滿し（三）（四）は稻田及び雜草間に多く（五）は雜草間ゟ於て稀に之を見（六）は桑園及び稻田ゟて之を見るも、稻作の加害は未だ之を認めず、唯幼蟲成蟲の桑樹の嫩芽に加害することを實驗せり（此試驗は二化期を經て中止す、故に産卵狀は不明）（七）は其産數甚だ多きを見ず（八）は山林ゟ多ゝ稀ゟ稻田桑園等に來る（十）（十一）及び（十二）は共に山中に於て之を獲たり。而して全縣下ゟ滿布して、稻作に大害を加ふるものは（九）ゟして三四齡の幼蟲の越冬するもの多く、冬季温暖なる時は、他の稻作の諸害蟲と同じく「スズメノテッパウ」其他禾本科の雜草ゟ食を取り、三月中旬の頃は多く皆羽化し、春秋の間、稻田に加害して後は復び「エノコロ草」等の雜草間に移りて、幼蟲成蟲共に食を之ゟ取る。成蟲が黴菌若くは寄生蟲の爲ゟ斃るゝは、此時期に最とも多きを見、卵の寄生蜂の爲ゟ斃さるゝは、二番稻移植の前後に多きを見る。

附記　稻作加害種と稱せらるゝ横蚑蟲中、禾本科の雜草を食とするものを、本年試驗せしが、其種は（一）ツマグロヨコバヒ。（二）フタテンヨコバヒ。（三）マダラヨコバヒ。（四）セジロウンカ。（五）トビイロヨコバヒ。（六）ウストビイロウンカ。等にして、其外樹間葉裏等に於て獲たるもの尚ほ多し、然れども種名不詳なるを以て後日の記載に讓る。

○葉蚤科　（一）クハノキジラミ。（二）ヒメナシジラミ。此兩種中（一）は晩春初夏の交桑樹に加害すること少からず（二）は初夏の交梨樹を害すること頗ぶる大なり（土佐に任て從來梨樹加害の木虱は、其形態ヒメナシジラミゟ相當するを以て、茲ゟ之を揭げたるも、ナシノキジラミの產否及びヒメナシバラミとの相違點に就ては、更ゟ精密ゟ調査の上確報すべし）。此外、海濱の槇樹に於て、一種淡褐のものを獲たりと雖ども、其種名は未詳に屬す。

（備考）　蟲名は成るべく全國昆蟲展覽會出品目錄に一致せんことを欲し、概むね之に從へり、特に浮塵子科を横蟲科と改書せしが如きは其一例とすべし、讀者怪疑の念を懷かれざらんことを。

◎螟害驅防模範地の成績

鳥取縣鳥取市　山根五百藏

鳥取市農會は害蟲驅除奬勵を圖り、市部各方面に苗代整理害蟲驅除奬勵委員拾餘名を置き、苗代は皆短冊形となして害蟲驅除の實行に便せしめしむ。而して本年第壹回の螟卵採集は六月五日を以て開始し、五六日目毎に實行せしが、一般より云へば未だ其眞意を曉らざるが如し。是より先、市農會よりは、苗代壹反歩に付種油九合（是は壹回の注油量を三合と假定し、苗代時期に三回の見込）を交附し、以て注油、採卵、掬殺をなさしむるの方針を執りしが、卵塊は益蟲保護の目的を以て、之を保護器に收容しき。然るに第壹期螟蛾の發生は、誠に驚くべき状況ありしが、果して第一化生の加害は甚はだしく、皆第二化生の大害をなさんことを憂慮したりしに、幸か不幸か天候不順のために、秋季成蟲に化すのもの至て尠なかりき。而して第二化生に對する驅除奬勵としては、各作人每に心枯莖切取のため、壹町歩以上の耕作人に小鎌貳挺、壹町歩以下の者には各壹挺を交付して之に從事せしめむ。

余は昨年來親しく之が驅除に關係したれば、其概況を摘錄せんに、是より先、某農友と模範的驅除をなさんことを協定し、先づ耕作人協同害蟲驅除規約を結び、其項目中には若し出業せる者ある時は、代人料金として貳拾五錢を納れしめ、尙ほ多作の者にありては、貳人以上を出業せしむる事を定め、着々實行せしに、隣接の郡部には、非常の蟲害ありて、平年以上の減作を來たし、其結果本春に至り米價を暴騰せしめ、縣下第一の物産として年々他に輸出せる米穀も、却つて坂神地方の價格と大差無きを致し遂に多額の外國米を輸入せしに關はらず、害蟲驅除執行地のみは、幸ひに其慘害を免がれたれば、蟲害驅防の効驗忽ちにして現はれ、爲めに本年は競ふて之に從事しき。

右驅除施行の模範地は鳥取市北部の水田にて、其面積は僅かに五町歩內外なりしが、東南西は市街宅地を以て限界をなし、西北部の方面は袋川堤防を以て圍繞せられ、全たく隣村と隔離して劃然たる一區をなせるより、比較試驗地としては好適の地域たり。而して本年の驅除成績を擧ぐれば、第壹回（六月七日）採卵數は百九拾參塊、第貳回（六月十三日）は九百七拾九塊、第參回（六月十九日）は貳千百四拾四塊にて何れも苗代田にて之を行ひしが、第四回（七月二日）は四千八百四拾貳塊にて、是は移植後に本田に於て行へるなり、即はち計八千百五拾八塊を算せり。此中、第三回より第四回に至る間の日數は長けれども、時恰かも移植期にて、其間苗取農人の採卵せし全數は不明に屬す。又蛾の發生の多少を識らんと

て、苗代と本田とに誘蛾燈を用ゐたりしに、六月十二日夜は八十餘頭（苗代）六月十七日は五拾五頭（紫雲英作地）六月十八日は三十九頭（苗代）六月廿九日は百〇五頭（本田）七月一日は五拾五頭（本田）七月四日は三拾五頭（本田）七月十日は拾壹頭（本田）の飛來せしものありき。以上の成績によりて之を一括すれば、第一化期の蟲害は實に僅少なりしも、隣郡村落に於ては、方形の大苗代誘蛾燈を以て驅除の主腦となせしかば、第一化期に於ける被害は、依然として昨年に下らざりき。但第二化期に至り、天候に變調を呈はし、且暴風雨さへ來襲せしを以て、之が爲め成蟲に化育のもの極めて少なかりき、是れ固より全縣下無上の幸福に違はざるも、其勤惰の形迹の判然たらざるは、遇々以て攪夢破迷の任に當れる者の少しく遺憾とする可なり。

◎懸賞螟卵採集の審査と受賞

兵庫縣揖保郡　岩田熊三郎

前號の本誌に於て、吾が兵庫縣揖保郡農會に於て經營せる、懸賞螟卵採取に關する報告を載せ、併せて其成蹟と受賞統計寄稿をも約し置きしが、其詳細は左表の如くあり。但し全郡三十町村中、室津、斑鳩、網干の三者は之に加はるに至らざりしを以て、これを算ふるに由なし、其他は渾て懸賞法則を遵守して正當に行へるものゝみと知るべし。

審査成蹟

町村名	町村農會報告卵塊數	精査卵塊	螟卵歩合	報告人員	一人平均採塊數
龍野	一六	五	三一、二	二	二、五
西栗栖	九四三	七六	八、一	四四	一、七
東栗栖	二五一	二三一	九二、〇	八	二八、九
平井	八、九八四	四、八六一	五四、一	一一七	四一、六
桑原	二、四三三	二九九	一二、三	九一	二、一
布施	三八、四八九	一三、一九二	三四、三	三四三	三八、五
半田	一八、九七四	一七、三七五	九一、六	二六二	六六、一
神部	二六、四七六	二四、一八七	九一、四	一三一	一八四、六

受賞者明細表

町村名	受賞者數 壹等	貳等	參等	四等	五等	計	採集者百ニ對スル受賞歩合
龍野	—	—	—	—	—	—	—
西栗栖	—	—	—	—	—	—	—
東栗栖	—	—	—	—	—	—	—
平井	—	—	—	—	六	六	五、一
桑原	—	—	—	—	—	—	—
布施	—	—	一	二	一五	一八	五、五
半田	—	二	二	八	一七	二九	一一、四
神部	二	五	三	四	一九	三三	二五、二

河内	一一、四四四	一〇、六九七	九三、五	一〇四	一〇二、八	—	二	六	一	九	一八	一七、三
御津	五、六九六	五、一九三	九一、二	八六	六〇、四	—	—	一	三	七	一一	一二、六
余部	一〇、三八五	一〇、一七七	九八、〇	三〇	三三九、二	一	二	二	—	三	八	二六、七
揖保	二〇、九六二	二〇、六〇八	九八、三	二三九	八六、二	—	一	七	九	一五	三二	一三、四
香島	七二七	四七〇	六四、六	二八	一六、八	—	—	—	—	—	—	—
新宮	五、二〇四	一、八九八	三六、二	一二五	一五、二	—	—	—	—	—	—	—
越部	八、一五九	七、三七五	九〇、四	三一五	二三、四	—	—	—	一	九	一〇	三、二
神岡	八、九七六	四、八二四	五三、八	二六九	一七、九	—	—	—	—	三	三	五、九
林田	一七、〇五六	一四、八四一	八七、〇	二一三	六九、七	—	二	一	五	二七	三五	一六、四
伊勢	二、一二〇	一、五三一	七二、二	一八	八五、一	—	—	—	一	三	四	二二、二
太市	三、二一九	二、八四八	八八、五	一二	二三七、三	—	—	二	一	四	七	五三、八
龍田	八、四〇五	五、一六一	六一、四	九八	五二、七	—	—	一	二	八	一一	一二、二
小宅	一一、四五一	一〇、四二六	九一、〇	一七二	六〇、六	—	一	一	五	七	一四	八、一
響田	七、三三三	六、五一三	八八、八	六九	九四、四	—	—	一	二	一一	一四	二〇、三
太田	一三、〇六〇	一二、〇九一	九二、六	九六	一二六、〇	—	—	二	六	二二	三〇	三一、三
勝原	一、五八九	一、〇五九	六六、六	一〇四	一〇、二	—	—	—	—	—	—	—
石海	一、二五七	一、一五一	九一、六	四七	二四、五	—	—	—	—	二	二	四、三
旭陽	六、二五二	五、九五八	九五、三	一九二	三一、〇	—	—	—	—	九	九	四、七
大津	二、一八〇	二、一二九	九七、七	一〇四	二〇、四	—	—	—	—	四	四	三、八
計	二四二、〇三一	一八五、一七六	七六、五	三、三一九	五五、八	三	一五	三〇	五〇	二〇〇	二九八	—

◎昆蟲月報（第四信）

第八回全國害蟲驅除講習修業生　埼玉縣　櫻井倚畊

六月　此月は梅雨の季節にて、雨又雨の日打續きたれば、眼に映つる蟲類とても極めて少なかりき。

先づ一日は午後南の強風にて晴、風蔭にゴマダラテフ盛んに舞ひ、イチモンジテフ、ヒメジャノメテフ、

ルリシヾミ多く飛翔せり、此日林中にてサビキコリ、クサハラコメツキ、コボウコメツキ（？）を獲たり。五日前年初冬に取置ける枇杷の枯葉の卷かれたる中に蟄せし蛹より、綠翅にして後緣灰褐色の小蛾羽化せり、また前月末に取れる枝尺蠖の黑變せるものより、カモドキ蜂一頭乃至二十九頭發生しき。七日は松の葉黃蜂ウラギンヒヤウモンテフを捕ふ。此上旬も寒冷にて二日の朝には薄霜あり、蠶兒熟して概ね上簇を終る、此頃蚕蛆蠅の發生して室内に入り來ること往々あり、槲蛄蟖ブランコケムシの類老熟し、楢のアカスヂケムシの幼蟲は八日の强西風ありためか、翌九日より俄かに死滅するもの多かりき、概して本年は昨年の比よりも蛄蟖類の寄生小繭蜂至つて少なかりしが如し。十一日ミヅキシロテフ多く羽化しヒヲドシテフの二回目のもの發現す、此日水蠟樹蟲の幼蟲老熟せしを飼育箱に入れしも、布片を嚙み切りて逃去せり。十二日始めてヒカゲテフを獲。十三日ウメシヤクトリ蛾、花カミキリの一種及び蟲螽科の一種（黃綠色小形にして草叢間にての鳴聲高し）を捕ふ。十六日クルマスヾメ、コムラサキテフ、クハガタムシ、トモヱテフ、カナブンブン、マメコガ子、ヒメカレハテフ（？）を捕ふ、此日曩に第二信に報し置ける楢の新梢間に發生の肉塊樣蟲癭より、膜翅目沒食子蜂の一種發生せり。十九日欅葉の蟲癭黑熟して蚜蟲の一種（？）を發現す、稲苗代の葉先黃變しムクゲムシ發生す。此の中旬には二回目のヒヲドシテフ、紋白蝶の發生盛んに、又バラタマバチ、イゴノキノハナブシ、ナラダンゴも多く發現しき。二十一日、藍のズヰムシの蛾の産卵せるを認む。二十二日ヤブカ發生し、又楢の新梢に黑蚜蟲多く發生蕃殖せり、此日田圃にて蜻蛉科の一種にて、体長は一寸位ゐ躰に紺色を呈せる小形のトンボを見たれとも捕へず。二十三日大豆のコフキザウムシ現はる。二十六日ジヤノメテフを捕ふ。二十七日カノコテフ發生し、またテフトンボを見たり。三十日ゴマフカミキリ、ハナセヽリ、イチモジセヽリを獲たり。此下旬に多かりしはツバメシヾミ、ヒヲドシテフ、モンシロテフ、ヒメジヤノメテフ、ヒカゲテフ、クハノエダシヤクトリ蛾、ムクゲムシ等にして、ベニシヾミ、ヤマトシヾミ、コムラサキテフ等は之に亞げり而してシホヤアブ、アシナガムシヒキアブ、オホイシアブ、アシグロムシヒキアブ及びアブ、メクラアブ、ヒメアブ、ハラアカアブ等の發現は實に此月末にありき。

◎林檎樹に發生の蟲類

在青森縣農事試驗場　新渡戸稲雄

林檎樹に寄生の害蟲類は、從來十有餘種に止まるが如く信ぜられしが、實際は然ばかり少きものにあら

ず。現に去九月中、青森縣陸奥國南津輕郡果樹害蟲調査として出張の折、余が手帳に上りしものゝみにても十餘種ありき。勿論、中には林檎樹に發生せぬもあれど、植物分科の上より見る時は、過半はその害蟲と稱するも大過なかる可し。即はち林檎樹の蚜蟲、林檎樹の綿蟲、林檎樹の貝殼蟲、サンホーゼー貝殼蟲、横蛺蟲、梅樹の貝殼蟲、梨樹の貝殼蟲、桃樹の木蝨、金毛蟲、梅樹毛蟲、巣蟲、林檎の姫心食蟲、桃の蠹蟲、梨の蠹蟲、擧尾蟲、林檎の葉捲蟲、大青蝶、ガクモン葉捲蟲、クルマスズメ、ウチスズメ、小透翅蛾、枯葉蛾、小角毛蟲、刺蟲、梨葉捲蟲、紫蠖、筒形蓑衣蟲、蓑蟲、林檎樹の星象蟲、林檎樹の葉蟲、林檎の天牛、金龜子、剪絨金龜子、コチドン蟲及び横蟲屬の一種等なりしが、就中、其害の最とも强烈なりしは綿蟲、星象蟲、巣蟲、貝殼蟲の各種、木蝨、蚜蟲、葉捲蟲等にて、是等は年々加害の度を加ひ、遂に當業者をして十餘年間培養の巨幹を伐採するか、廢園するかを判斷するに迷はしむるに至れり。世の園藝家は豫じめ玆に注目するなくんば、遠からずして財源の一部を失ふに至るものあらん、害蟲の擧動や實に畏怖すべきなり。

◎昆蟲展覽會并に講習會概況

靜岡縣周智郡昆蟲研究會

第一回周智郡昆蟲展覽會は周智郡農會の主催に係り、其昆蟲學研究部の擔任事業とす、而して本會の出品者は各町村に設立の支會にして、拾三支會の中三ヶ村を除ける拾町村支會の出品惣數は百箱、蟲數れ四千五百頭餘、種類七百有餘を算せり。審査は委員拾名を甲乙に分ち、名和昆蟲研究所長名和靖氏を審査長に仰きて、九月十九日より着手しき。又第一回講習修業生は當日を以て會合し、名和講師の臨席を煩はして研究會を開きしに、講師よりは一同に對して將來に於ける希望と會員の任務につき一場の講話ありき。偖昆蟲展覽會出品の審査は、第二回昆蟲學講習會開會中に結了せしが、其結果は左の如くにて褒狀と賞品の授與は講習會修業證書授與式と共に之を行へたり。

○一等賞(分類標本) 久努西村支會　○一等賞(同上) 宇刈村支會　○二等賞(同上) 山梨町支會　○三等賞(同上) 森町支會　○三等賞(同上) 飯田村支會　○四等賞(同上) 一宮村支會　○四等賞(同上) 園田村支會　○四等賞(同上) 天方村支會　○四等賞(同上) 三倉村支會　○四等賞(同上) 犬居村支會

第二回周智郡害蟲驅除講習會も亦周智郡農會の主催に係り、名和講師授業の任に當られ、九月廿日午前

第八時より周智郡役所樓上に開會せり、生徒は百五名にして、日々の授業は午前第八時より十二時迄昆蟲學大意、午后一時より三時乃至四時迄害蟲驅除法にして、其廿一日午后敎程修了后には野外實習を行ひ、廿二日夜は講習生の自作に成る幻燈會を開き、廿三日授業后に於て講習生一同より書感を講師に呈し、廿四日午前を以て全く講習を修了し、同午后第二時修業証書授與式を擧げたり。生徒百五名中、事故欠席せしもの三名、修業証書を受けしものは百貳名にて敎育者は拾三名、實業者は八拾九名あり、終りて一同森町高等小學校運動場に於て撮影し、次で講習生の五分間演說をなせり、斯くて名和講師は同夜八時四十六分袋井發西行列車にて歸途につかれしが、講習中は本郡宇刈村久永源右衞門、久努西村長沼兼作の兩氏助手として盡力し、又靜岡縣農事試驗場技手岡田忠男氏も數回の講話を爲せり。其他愛知縣寶飯郡よりは郡視學竹内萬次郎氏景況視察として出席し、同郡赤坂高等小學校長田中周平、鹿菅尋常高等小學校長水野龍次郎の兩氏も出席、數回の講話を試み又は昆蟲展覽會に於ける分類標本の整理に不少の援助を與へられたり。

◉昆蟲月令（第十月）

此月に配すべき昆蟲記事は概むね下に列擧するが如し

○氣候　舊曆の九月朔日より十月朔日に跨がるを以て、日毎に寒冷の身に染むを覺ふべく、隨へて是より長夜の嘆を發するに至らん。即はち月初には晝夜の差一時間なるも、月末には二時半の長きに涉り牀下に寒蛩の鳴くを聽くべし◎月の九日は寒露を報じ、廿一日は土用にて、廿四日よりは霜降の氣に入る◎此月に最とも奇なるは、日蝕と月蝕とのある事なり、神甞祭の當日といふ十七日には月蝕を、晦日といふ三十一日には日蝕を現すべし◎內地の平均溫度は、十一度強乃至十九度強にて、前月よりは著るすく低下するも、大平洋方面は所謂小春の好季節にて、快晴連日、頗ぶる身體に適すべし、之に反して日本海方面は、時々雨霰を降らし、陰冷不快の現象あらん◎東京は平均十五度七を、京都は十五度五を示すも、地方によりては二十二三度以上に及ぶ事珍しからず◎濕度は槪して前月より低く、大氣の乾燥甚しき事あり。

○蟲類　稻田には螟害に罹れる白穗益々多かるべく、横蟲の成長せしもの亦多からん。白穗は之を切取りて堆積肥の料となすべく、横蟲は之を捕殺又は誘殺して其遺族を滅すべし●螟害劇甚地にありては、苅取後の殘株を堀開して、燒土法若くは推積蒸殺法を斷行すべく、其稿は無害地のものと混同せざれ。なほ被害莖切取器は、別項圖解のものに就て選用し、赤手もて拔取るの古風を廢すべし●横蟲の加害の判然するは、去月より今月にかけ、其穗の異狀を呈するか、又は故なくして其莖幹の倒るゝによれり。然れども、此場合に驅除策を講ずるは、既に遲ければ、成るべく共同して咽喉附捕蟲網もて、將に越年さする成蟲其他を捕殺し、遺類無きに至りて止むの決心あるべし。世人或ひは注油を勸誘するも、少量にては決して効功あるものに非ず●畑芋、馬鈴薯の類にも諸種の蟲類加害すべし、これ亦驅除に勞して明年の發生を豫防せざる可からず●大根、蕪菁、漬菜類には無數のサルハムシ群集して、大害を與ふべし、乳劑等の灌注も其奏無きにはあらざるも、寧ろ朝夕に心臟形の捕網（鐵屬製）を以て捕獲すべし。朝露の未だ消へざるに先たち灰類を撒布するは、多少の効あるも、初めより害蟲誘引耕作法を行ふて、小區内に群聚せしめ、一擧之を鏖殺するの便且つ利なるに及かざるべし●桑毛蟲の幼齡のもの桑樹に群集して、絲素を食ひ網の如くならしむべし、其群集の場合に靜かに摘取りて、之を潰殺すべし。●櫻樹、桃樹、梨樹、林檎樹等にも毛蟲類發生し、又蓑蟲の加害あらん。特にイラムシは、人體を螫刺し又尋で樹枝に結繭すべければ、驅殺又は浸油法を行ふべし●菜園の害蟲又は豆類の害蟲には、半圓形捕蟲網を用ゐるも、其効多かるべく、藍の害蟲等には摘殺を行ふべし●果樹園の金龜子等は、打落法によりて方形捕蟲網を用ゐるべし●弄花蝶種飛散すべければ、注意して捕獲すべし●月末に至れば、纔かに數種の飛蛾と、鳴蟲類を見るのみに止まり、他は概むれ蟄伏の準備をなさん●深山赤翅蜻蛉、又は大形種の或ものは、なほ飛翔すべければ標本の資料とすべし●其他は前月記載の各項を斟酌すべし。

○舊説　昔時は九月の六候の一に蟄蟲咸俯といひ、又重陽の日に、月に光無きときは蟲草木を傷るといひ、月の内に日蝕あれば饑饉あり、月蝕あれば牛馬に災ひあり、月常に光無きは蟲災の徵となせり。

○雜事　新穀貯藏前には、必らず倉廩を淸淨にし、蟲害の多き處にありては、薰烟その他の方法を以て先づ驅殺を行ふべし●蟲害をうけたる禾稼は、其置き處を異にして、他の無害のよのよりは早く處分するの心掛あるべし●蠅、蚤等の衞生上の害蟲再たび多きを感ぜん。又食用のイナゴは此頃捕說くべし。

（サルハムシ捕網の圖）

●農林二大會と昆蟲問題　本月十二日より三日間岐阜縣安八郡大垣町よ開くべき、東海農區の實業大會へ、農桑上の問題提出なるべきは當然なるが、或ひは一二昆蟲に關するものをも見るに至らんかと云へり。又同月十七日より、愛知

縣名古屋市ょ開く豫定の大日本山林會大集會ょは、別段昆蟲問題とても無けれど、ろの山林旅行の際には、防風林及び雜林と害蟲の關係を示導すべしとの事なり。何はさて、斯かる大會に公衆の注意を惹く迄に進歩せしは、末頼母しき事と謂ふべし。

◉大分縣の害蟲供養碑に就て　大分縣東國東郡朝田村にある蟲塚に就ては、本誌第五十四號（本年二月分）に概要を掲げしが、今回蟲塚保存金分配上之が有無等を調査するの必要あるより、去月中これを大分縣廳內務部長宛にて照會する所ろありしに、本月二日附を以て同縣書記官小川弘水氏より存在の旨回答あり、且つ此石碑の左右兩側には、左の數十字の文字を細刻し置ける旨をも報道せらる。

◉右側　源以大乘經王經吾佛世尊陀我應緣而直靈無窓所世于魯重光氏並村一村老若男女各各拾小丸石請予永石書矣今巳至圓成者願望心中蝗蟲供散其功德誠不可思儀也云爾

◉左側　醍醐七軸多和民丸石點頭如意輪六萬九千三百八十蝗蟲毎字鄉天眞惟時明和三丙戌年六月大吉辰並般若心經神咒共右寫收納者也

螟害稻莖切取器（其一）

文意如何ょも晦澁にして明瞭ならざるも、畧ぼ建碑の目的を推察し得べし。なほ大分縣へ照會と同時ょ京都府、福岡縣、長野縣廳等へも、照會せしょ、未だ回答に接せざれば茲に報じ難し。

因に云ふ、前號に掲げたる義捐者氏名中、愛知縣の分にて稻石愛之丞とすべきを愛之助とし、渡邊賢二とすべきを賢三とし、山口助作とすべきを山田とし、岡田源重とすべきを源十郎とし、定盛建太郎とすべきを賢太郎と誤記せし趣むき、申越されたれば訂正す。

◉鷺か鴉か　吾が鳥取縣ょては、極力點火誘殺法に重きを置き、螟蟲驅除としては、なた他に良法無きが如くに固信せるの結果として、去八月中、名和昆蟲翁が講習會講師として臨まれし際ょは、滑稽にも詫證文的演說といふ、一種愛嬌ある古今珍無類の戯ふれ事すら演ぜられし程なれば、當時の新聞紙は、之に對して縣方針攻難の聲も喧しかりしが、眞理は何時しが發光すとの諺に漏れず、本月發行の鳥取縣農會機關雜誌『實業』第七二號紙上にまで、次の記事を見るに至れり。斯く視易き黑白をさへ、混同視する過渡時代の今日なれば、無智の農民等が害蟲驅除を嫌忌するも、强がち無理ならぬ事ならずや餘りに可笑き事實あれば、其全文を報道すべし。（右、在鳥取市一敎員の九月三十日附通信）

●螟蟲採卵驅除の効驗　縣下氣高郡寶木村農會にては、今春誘蛾燈を苗代田に點用せしめんとて、その奬勵費四拾圓を議决せしが扨實際奬勵に着手して見れば、種々なる支障の生じ來りて、容易に實行せらるべくもあらず、強て之れを實行せんには其費用も斯かる少額にては足れりとも覺へざればとて、中途其議を變じて螟蟲卵塊の買收に着手せしに、採集し來る所ろの卵塊意外に多く、豫算の四拾圓は瞬たく中に支消したれば、村農會長は持餘して、一時其買收を見合せんとせしが、斯くてこそ買收の効驗も見はるべきなれとて、村内の有志者も其の持續を賛成せしに力を得て、茲に百數拾圓を支出して多數の卵塊を採集せり。其効驗今日に至り果して空しからず、此程本會の技手谷口龍三氏、巡廻の次手に立寄りて其田面を見れば、螟蟲の被害附近村落に比して、著しく寡少なるを見たりと、去れば同村農會長も、今後年々採卵驅除を實行するの見込なりとは甚だ喜ぶべし、他の各村農會も斯ありたき者なり。

螟害稻莖切取器(其二)

◉第拾四回全國害蟲驅除講習會　來十一月下旬を以て當昆蟲研究所に開會の豫定ある、第十四回全國害蟲驅除講習會は、恰かも農閑の際なればにや、近畿地方は論なく、遠く青森縣よりも入會申込者ありて、已に定員の過半は確定名簿の登載を了へたるが、他に必要無き限りは、本年はこれを以て終講とし、明年春季のもの、亦第五回內國大博覽會のあるに、其開會如何あるべきかと危ぶまるれば、斯學研究者は此場合應募するこそ利便ならん。特に從來は特別標本の名稱、種族整理を打捨て置しに、近頃これを完成したれば、以前に比べて見學上の利益も、一層多からんかと思はる。

◉岐阜縣昆蟲學會例會　本月四日午後一時より開きたる同會には、岐阜縣下各郡市よりの會員も多く、特に山梨縣より八田達也氏の來會せられし事とて、場内何となく活氣づきしが、同四時を以て散會を告げ、それより一同袂を連ねて會員名和梅吉氏の渡米啓程を見送りき。但當日演壇に立ちしは下記の諸氏なりしも、概ね別意を表する旨意に出で別に命題もなし難ければ、茲には演題を省きつ。

○第一席　岐阜縣郡上郡會員代表　町田治助
○第二席　岐阜縣本巣郡會員代表　松野春一
○第三席　岐阜縣揖斐郡會員代表　長屋米次郎
○第四席　岐阜縣羽島郡會員代表　小島實
○第五席　岐阜縣昆蟲學會代表　村井正元
○第六席　(靜岡縣周知郡の害蟲調査)　名和靖
○第七席　(輓近發明の春蠶種飼育法)　八田達也
○第八席　(昆蟲學に對する警戒)　長野菊次郎
○第九席　(海外より移殖の昆蟲)　永澤小兵衛
○第十席　(米國昆蟲學視察の目的)　名和梅吉

◉農作害蟲驅防上の訓令　近頃農作害蟲驅防の聲頓に高まりしより、各地競ふて之に從事するも、如何せん無訓練の兵卒に戈戟を執らしむると一般、比較上その効果の見るべきもの無きより、此等の事情を看破せしにや、岡田農商務總務長官の名を以て、遂に左の訓諭的通牒を各地方廳に發せしとかや。然り、害蟲驅防の事業は、もと今日の如くにムシ其物を知らざる人物に委ぬべき小事にはあらぞ、時已に稍晩しと雖ども、當路者が此缺點に着眼して、根底より改造の必要を悟り、更に其普及を圖らんとするは頗ぶる多とすべし。

近時害蟲の發生頻繁にして、爲めに農作の減收を來たし、農家の經濟上に及ぼす影響尠からず、然るに地方に依りては、害蟲驅除督勵の任に當る者にして、往々害蟲に關する觀念に乏しく、其督勵自ら充分ならざるの憾有之、又警察官の監察は督勵上必要と被考候條、此等の吏員に對し、便宜時期を見計ひ、必要と認められたる昆蟲の性狀及び其驅除豫防等を教示せられ度く云々。追て本文教示に關する講師は、學事に關する技術員に囑託すべし。

◉名和梅吉氏の出發　別項に記載を經たる如く、同氏は岐阜縣昆蟲學會例會後直ちに米國渡航の途に上り、本月四日午後六時發東行列車に搭乘せしが、見送人は無慮六十餘名にて、中には遠路遙々來會せし向も名古屋驛まで見送れる向も數名ありき。斯くて無事横濱に着せしに、生憎惡疫其の他の爲めに故障を來たし、八日午前一時に纜を埠頭に解けりと。因に云ふ、其出發に先だちて農商務省よりは、米國害蟲調査囑托（九月廿六日附）を受け、又知人よりもそれ〳〵送別の厚意に預かりしが、其他靜岡縣の神村直三郎、岡田忠男の兩氏、新潟縣の佐藤榮氏、岐阜縣海津郡昆蟲研究會、各府縣の同窓會員等よりは數十通の祝電祝詞を接受しき。

◉螟害稻莖切取器の種類　螟害被害の稻莖を切取るに用ゐる器械は、今や數種の多きに及びたれば、時節柄これを集解せんも興味あるべしと信するを以て、重複を厭はず茲に收錄せんに、第一圖の鎌狀のものは、舊來九州地方にて使用せられたる單純の構造にて價格は七八錢の間、第二圖のは、それを改良して一昨年愛知縣三河國にて創製せしものにて、壹挺拾貳參錢を値ひし、第三圖のは、一新機軸

螟害稻莖切取器（其三）

を出ゑて、稍實用に適合するやう考案せゑものとて、貳拾五錢許り、第四圖は、今年始めて靜岡縣駿河國にて發明せる最とも簡便のものにて、普通製れ拾錢位ゐなり。第五圖のは、近く岐阜縣農事試驗場の試製に成れる摘取器なるが、白穗の摘取の塲合にのみ用ゐるものとて、稲株蕃茂後ゝは適當せず、價ひは五錢との事、第六圖はこれ亦同塲にて製作せしめたる莖切剪刀なるも、未だ完成せしゝ非ずと云へば其價ひと實用の如何は知る由も無し、恐らくは反つて果樹の枝條選定用に適さんか。

螟害稲莖切取器(其五)

◉感謝狀と銀杯　岐阜縣海津郡の昆蟲研究會にて、當昆蟲研究所長名和靖氏ゝ對つて、銀杯贈呈の議を決せし趣むきは、前號の雜報欄内に掲載したるが、右の銀杯の内部には、今春始めて同地にて採集せる瓢蟲の新種を、外部ゝは年月日會名等を小篆もて細刻せしものにて、形狀宛がら全國昆蟲展覽會用のそれに似たり。又その杯に添へる感謝狀は次の如きものなり。

本郡の昆蟲學に於ける、明治卅一年始めて本縣害蟲驅除講習會に講習生を出せし以降、年と共に其數を增加し、親しく先生の薫陶を受けて昆蟲學を修業したる者今や拾餘名に及へり、加之同三十四年海津郡昆蟲講習會に於て、先生の講話を聽き斯學の綱領を學び、こ以て修得證書を受けし者實に一百五拾餘名の多きあり、是に於て乎、昆蟲研究の思想翕然として郡內に普及せり。今茲本會主催となり、海津郡昆蟲展覽會を開設せしに、出品總箱數七百壹個、昆蟲總數實に四萬有餘の多きを算し、且つ幸に審査長として先生を煩はし、公明正確に其審査を結了することを得たり、而して此結果や、更に本郡農事改良上に裨益を與ふるの偉大なるべきを確信す。是偏に先生の賜にして、本會の深く肝に銘する所なり。依て本會は聊か感謝の微意を表せん爲め、茲に謹て銀杯壹個を捧呈す、希くは犖納せられんことを。

◉諸國の蟲送り(五)　(其九)當地方に於て以前行へる蟲送り方法は、先づ蟲害ある村落の農民は各自に松明を作り、黄昏一定の處ゝ集合し、こゝにて村の法印即はち修驗者の祈禱讀經を請ひ、松明に火を點じ、讀經し乍ら先導せる法印の後へに從ふて、畦畔間を迂回旋盤す、是れを其地の横蟲を火にて導びくとは云ふなり、而して此間ゝ農民は一同に聲を揚げて『ナァーニ、ムーシヲ、オークルワイ、ウンカームーシヲ、オークルワイ(何蟲を送るぞ、ウンカ蟲を送るの義)と唱へつゝ豫て言定め置ける塲處に到り、松明を捨て法印の讀經中に勝閧をつくりて、各々逃歸りしなり。(右、靜岡縣志太郡靜濱村、增田秀雄氏)◯(其十)余が地方には害蟲驅除

螟害蟲稲莖切取器(其四)

に就きて二種の迷信あり、一は神社の床下の土砂を採り來りて之を田中に撒布するか、又は紙符木札の類を田面に立てゝ神力の保護を請ふ事あるが、他の一方は即はち古來爲し來れる蟲送なり。其蟲を送る方法は、挿秧後約そ一ヶ月を經たらん頃に、村内の若者ども大勢集まりて、手に〳〵鐘、太鼓を鳴らし可笑な事を大聲に唱へつゝ周ねく田畔の經路を經廻るにあるなり、是は古くより何地にも行はれたる事にて、本誌に掲載の樣子と大同小異あれば、詳しくは茲に言はざるべし。(右、千葉縣香取郡香取町、東勇氏)◎(其十二)福岡縣筑前國福岡附近の蟲送りには二樣あり、其一は儀式的に行ふものにて、其他のものは蟲害のある場合に行ふものとす。前者は古例により陰暦七月六日に、一村の未成年者等隊を組み旗を樹て、且つ鉦太鼓の類を鳴らして田畝の間を巡行す、其時に『實盛ドンノ、御陣ダチャア、コーヌカ蟲ノ御供ジャ』と唱ふるあり。後者は蟲害を認めたるの場合には、炬火を以て横蟲を驅除し得るものと信じ、各自炬火を手にし、藁人形を推て行列を作りて田間を巡歴し乍ら、同じ『實盛ドンノ御陣ダチヤア』云々を唱へつゝ終局の場處にて其人形を燒棄つるなり、是は齋藤實盛の首を燒きし灰のコヌカ蟲に化せしとの舊說に起因せりとぞ。(右、在岐阜市杉山町長野菊次郎氏報)

◎**支那の蝶畫**　その昔し宋の學士謝逸が蝶詩三百首を作りて、謝胡蝶の名を得たる由は藝苑の一佳談として、今に傳ふる所なるも、果して蝶種なりしか、或ひはまた蛾種なりしかの分別は疑ふべし。今回衆議院議員古井由之氏が、當昆蟲研究所へ寄贈せられし張愷の群蝶圖は、尺八幅の絖絹四尺許りなるに、大小卅三羽を縱横に描出し、其間に海棠花(?)を點じたる極彩色の横幅にて如何にも見事の古畫なるが、惜むらくは蝶蛾を混じ置けり、是にても昔しの蝶といへる範圍を知り得べし。

螟害稻莖切取器(其六)

◎**昆蟲標本陳列館の觀覽人**　昨九月中に、當昆蟲研究所の標本陳列館を觀覽せし人員は、總計五千二人にて、其中最とも多かりしは廿四日に於ける千七百三十七人、最とも少なかりしは十二日に於ける七十五人、之を開館日數に割當つれば一日平均二百人强となり、其重なるは長野、福井、滋賀、宮城、愛知諸縣の敎職又は勸業に關する者と中央官衙の諸官吏等なりき。(以上、十月十日脫稿)

去月末大風雨の爲め、岐阜縣物產舘潰破の報傳はりしより、昆蟲標本陳列舘の罹災を氣支はれ、各地の知友諸君より、續々御見舞狀御遣し被下候處、幸ひに右陳列舘には何等異狀も無之候間御放慮被成下度、乍略儀於本誌御挨拶申上候

十月十日

名和昆蟲研究所

名和靖

◎昆蟲世界愛讀諸君に敬白す

雜誌「昆蟲世界」の義は、假ひ御注文有之候とも、前金にあらざれば、發送致さゞる規定に有之候處從來の厚誼上、前金相切れ候時は、其旨を朱書の上、特別に御扱ひ致し候ひしに、往々却つて意外の御取計ひに相成る向も有之候故、以後は不得止發送を見合はせ可申候、依て封書に前金切れのしるし相附し發送致候場合には御不用なれば其趣き御一報願上度、若し御通知無きに於ては、舊の如く御購讀相成るものと見做し可申候間、豫め御承知置願上候

十月十日

名和昆蟲研究所會計部

◎害蟲圖解未刊の分豫告

◎稻の害蟲イナゴ（蝗螽）
◎稻の害蟲フタホシズヰムシ（三化生螟蟲）
◎稻の害蟲セジロウンカ（背白浮塵子）
◎稻の害蟲ヒゲナガアブ（長角虻）
◎桑樹害蟲クハハマキ（桑葉捲蟲）
◎蠶の害蟲カヒコノウジバヘ（蠁蛆）

◎松樹害蟲マツケムシ（松蛅蟖）
◎藍の害蟲アヰノゾウムシ（藍象鼻蟲）
◎粟の害蟲アハノズヰムシ（粟螟蟲）
◎胡麻害蟲メンガタスズメ（胡麻蠋）
◎赤楊害蟲ハンノキケムシ（赤楊蛅蟖）
◎櫟の害蟲カミキリムシ（天牛）

◎梅樹害蟲ウメシヤクトリ（梅尺蠖）
◎稻の害蟲トビイロウンカ（褐色浮塵子）
◎稻の害蟲クロクサガメ（黑色椿象）
◎桑樹害蟲アヲハマキムシ（青色葉捲蟲）
◎桑樹害蟲クハゴ（野蠶）
◎蔬菜害蟲モンシロテフ（菜の螟蛉）
◎蔬菜害蟲サルハムシ（菜の葉蟲）
◎大豆害蟲ヒメコガ子（姫金龜子）
◎梅樹害蟲ウメケムシ（梅蛅蟖）

◎圖解の紙幅縱一尺三寸横九寸 ◉壹枚の代價拾五錢郵稅貳錢
◉百枚以上一纏壹枚拾錢郵稅百枚に付き貳拾錢

◉豫約代價

壹枚拾錢郵稅貳錢
但申込の際前金添附の事

圖解代金 凡て前金にあらざれば回送せず但郵券代用壹割增の事

◎梨樹害蟲ナシゾウムシ（象鼻蟲）
◎梨樹害蟲ホシハマキ（星葉捲蟲）
◎果樹害蟲イラムシ（刺蟲）
◎稻の害蟲オホズヰムシ（大螟蟲）
◎藍の害蟲アヰノズヰムシ（藍の螟蟲）
◎粟の害蟲アハノヨトウムシ（粟蠶）
◎里芋害蟲セスヂスズメ（烏蠋）
◎桐樹害蟲シモフリスズメ（桐蠋）
◎果樹害蟲ホシカミキリ（白斑天牛）
◎果樹害蟲ドウガ子ブンブン（金龜子）

發行所 岐阜市京町 名和昆蟲研究所

◎昆蟲世界購讀紹介者芳名

宮城縣　佐藤運七郎君（貳名）
京都府　小佐三治君（壹名）
德島縣　豐野次郎三郎君（壹名）

蟲塚保存義金取扱の義締切り致候故直に分配に着手致候處長野縣及京都府下に存在のものに不明の點有之目下照會手續中に候へば自然十月に至らされば終了致し難かるべくと被存候右喜捨相成候同志諸君に報告仕候也

九月　岐阜市京町　名和昆蟲研究所

昆蟲世界の擴張に就て讀者諸君に敬告す

雜誌「昆蟲世界」は明年一月より紙面を改良し、更に斯學研究上の便益を圖るに就ては、弘く讀者の高見をも斟酌し其希望に副はんとす、願くは改善を施すべき要點を示されんことを。

雜誌「昆蟲世界」は時論を探り輿望を知らしめ、又讀者間に於ける智識の交換を欲し、從來寄送の玉稿を棄擯せし事少なきは、已に寄稿家の知らるゝ所なるも、今や益々各地の通報を歡迎するの必要に逼れり、依舊續々投稿あらんことを。

雜誌「昆蟲世界」は其内容の豐富にして、文字の多數なること、遙に他の諸雜誌の上に在り、然れごも之に伴へて亦多數の所友を有するが故に、號每に盡ごとく各地の寄稿を收錄すること能はず、故に明年一月の誌上に掲載を望まるゝものあらば、遲くも十一月中旬を限り投稿を乞ふ。

名和昆蟲研究所編輯部

昆蟲世界

（明治三十五年十月十五日發行）　第六卷第六拾貳號　（毎月一回十五日發行）

（明治三十年九月十日内務省許可　明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

新刊廣告

昆蟲叢書　第壹編

◉全國昆蟲展覽會**出品目錄**　全壹册

題字及び寫眞銅版四葉挿入◉木版寫眞銅版書七十餘圖◉紙數貳百餘頁◉定價金八拾五錢◉郵税毎册金八錢

記載目次

第一章　昆蟲展覧會出品目錄の必要●第二章　分類標本に於ける蟲種別●第三章　害蟲標本に於ける蟲種別●第四章　益蟲標本に於ける蟲種別●第五章　教育用標本其他の出品●第六章　出品物と其出品者　（附錄）　開設の計畫●役員の選定●開會設備●開會式●審査方法●褒賞授與式●閉會式●雜件彙報●蟲種の調査●殘務處理●昆蟲名稱の意見●展覧會の効果　以上

右去月出版の上豫約御申込の順序を以て御送附致候處、萬一不着も候はゞ乍御手數御一報願上度候尚ほ代價等御尋ねの方も有之候へども、豫約者外へは當分一部賣不致候間此段も御承知置願上候

明治卅五年九月　岐阜市京町　名和昆蟲研究所

◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條ェ依り、毎月第一土曜日午後正一時より、岐阜市京町名和昆蟲研究所内に於て開く筈なれば、毎會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所内　岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會本年中の日並は左の如し

第四十七回月次會（十一月一日）　第四十八回月次會（十二月六日）

小生出發の際は餞別の御厚意に預り且つ御見送被成下候段奉感謝候着濱後諸事無滯相濟み明日解纜の米國直行滊船に搭乘致し候間乍憚御安堵被成下度此段御禮を兼ね辱交諸彥に御報申上候

十月七日　（於横濱）　名和梅吉

◉本誌定價並廣告料

壹部郵税共金拾錢　（見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す）

壹年分拾貳部郵税共　金壹圓八錢

（注意）　本誌は總て前金ェ非れば發送せず◉爲替拂渡局は岐阜郵便電信局◉郵劵代用は五厘切手にて壹割增とす

廣告料五號活字廿二字詰一行ェ付金拾貳錢、三十行以上一行ェ付き金拾錢とす

明治三十五年十月十五日印刷並發行

發行所　岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二（岐阜縣岐阜市京町）　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二　發行者　名和梅吉

同縣武儀郡下有知村三百七十四番戶　編輯者　天野秋二

同縣安八郡大垣町字郭百五十三番戶　印刷者　河田貞城

（大垣西濃印刷株式會社印刷）

Vol.VI. NOVEMBER. 15TH, 1902. No.11.

(十一月十五日發行)

THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE
EDITED BY Y. NAWA.
GIFU, JAPAN.

(毎月一回十五日發行)

昆蟲世界

第六拾參號　（第六卷第拾壹册）

目次　（禁轉載）

(明治三十五年十一月十五日發行)

(明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU, JAPAN.

◎寄贈物件受領公告

○金壹圓也　靜岡縣　河原崎伊左衛門君
○金五拾錢也　岐阜縣　平田桐三郎君
一展翅板壹組（大小）拾六枚
一模範展翅板　壹枚
一幼蟲乾燥器　貳組
一昆蟲用留針　五種貳拾箱
一其他藥器械等　數種
　英國　ロスチャイルド君
一杉ケムシ標本寄生蟲共　各種
一被害杉年輪標本　一枚
　奈良縣　今川唯市君
一日本産貝殼蟲（英文）一册　福岡縣桑名伊之吉君
一濠洲産昆蟲甲蟲類十五種　十五頭
一沖繩産昆蟲蝶蛾類七種　九頭
　岐阜縣　小森省作君
一昆蟲模樣付塗膳　五枚　岐阜縣　林　正一君
一昆蟲模樣付塗盆　五枚　岐阜縣　千原治作君
一蟬形磁石　壹個　岐阜縣　河田貞城君
一造物大蝶（美濃物産品評會ノ山軸ニ用井タルモノ）　岐阜縣大垣町有志者

右寄贈相成候に付茲に芳名を掲けて其厚志を謝す

明治卅五年十一月　名和昆蟲研究所

第十四回全國害蟲驅除講習會員募集

開期（自十一月廿五日至十二月八日）二週間（定員四十名）

全國害蟲驅除講習會は、既に前回までに、三府四十一縣の出身約七百名の有爲なる修業生を出せり依りて此際益々斯學の奮興を期せんことを欲し、來る十一月二十五日を以て第十四回の開講式を擧げんとす。斯學に志ある の士は、速かに其手續を經由せられよ。

今回は全く增員の設備無きを以て、その正式の手續を了し、確定名簿に登錄せられたる正員のみを以て、會を組織する事となしたれば、入會の諸否は一に申込の遲速に由る。

尙は應募者の利便を圖り申込期限を十一月廿二日までとす猶豫すべきにより、規則書入用の向は郵劵を添へ至急照會あれ、直ちに送致すべし。

明治卅五年十一月　岐阜市京町　名和昆蟲研究所

◎昆蟲世界購讀紹介者芳名

靜岡縣　增田小三郎君　（六名）
島根縣　森脇捨松君　（貳名）

黄楊葉捲蟲發育圖

◎黄楊の葉捲蟲に就て（續）（第拾壹版圖參看）

鹿兒島縣鹿屋農學校　生熊與一郎

(五)經過及び習性　此害蟲は一年二回の發生にして、(への一)圖の如く幼蟲態にて越年す、越年したる幼蟲は、三月中下旬の頃より蝕葉し始め、約十日毎に一回宛、都合三回蛻皮して(への二)の蛹となり五月下旬乃至六月上旬頃に(イ)圖の成蟲となる、成蟲は羽化後、五日乃至十日間に(ホ)の卵を産附すれば、大約二週間を經て孵化す。孵化したる幼蟲は、体長一。七ミメ、幅〇。三ミメありて全躰黄色を呈し大頭黒色、第一關節の背面に黒色の硬皮板を具ふ。第二齡に至れば胴部は著るしく緑色となり、濃緑色の五縱線及び判然したる小黒紋を生ず。其第一齡中は、嫩葉數枚を綴りて、葉裏のみを喰害すれども第二齡後殊に第五齡に至れば、絲を吐きつゝ、纎緯又は葉縁のみを殘して夥しく喰害し、發生より二十五六日にして老熟す、此時に至れば、絹絲を纒ひ數葉を綴りて化蛹し、約二週間の後に羽化して、第二回の成蟲即ち飛蛾となるなり。蛾は夜間飛翔し、靜止する時は翅を半開して水平に疊むこと(ロ)圖の如し。斯くて一週間内外にして生殖作用を終ふれば、直ちにまた産卵し、其れより二週間内外を經て孵化し、復た二週間許りにして、躰長一分二厘乃至二分(第二眼前)となり、三枚若しくは四枚の葉を連綴し

其内に蟄して越年す。左に飼育表の一部を掲げて參考とす。

齢	月日時 始	月日時 終	身長(ミメ) 始	身長(ミメ) 終	躰幅 始	躰幅 終	温度(C氏) 最高	温度(C氏) 最低	家外ニ自生スルモノ
卵	六月三日	六月十七日	一、〇〇	一、〇〇	〇、七	〇、七	二六—三二	二〇—一八	三日ニ三ミメ以上ニ達シタルモノヲ認メキ
第一齢	六月十七日	六月二十一日	一、七	五、五	〇、三	〇、六	二六—三三	二一—一八	
第二齢	六月二十二日	六月二十八日	七、〇〇	一〇、〇〇	〇、七	一、二	二四—三三	二五—二二	
第三齢	六月二十九日	七月三日	一三、三	二一、〇	一、二	二、〇	二五—三二	二五—二三	
第四齢	七月四日	七月七日	二五、〇〇	二七、〇〇	二、〇	二、六	二七—二四	二六—二四	
第五齢	七月八日	七月十一日	二八、〇〇	三三、〇〇	二、六	三、五	二九—二七	一八—二三	
蛹		七月二十五日		一六、〇		四、〇	三〇—二五	二〇—二二	
成蟲				二〇、〇		四三、〇	二九—二五	二一—二四	
卵	八月十一日	八月十三日					三二—二九	一九—二四	
第一齢	八月十三日	八月十八日	一、七	四、〇	〇、三	〇、五	三二—二八	二二—二四	
第二齢	八月十八日	八月二十三日	四、五	六、〇	〇、六	〇、七	三三—三〇	二一—二五	越年ノ準備ヲナセシハ八月二十三日以後ニ多カリキ
第二齢	次年三月二十日	三月二十五日	四、〇	一二、〇	〇、五	〇、八	三三—二二	九—一五	三月十九日ニ体長十三ミメ以上ニ達シタルモノヲ認ム
第三齢	三月二十七日	四月五日	一三、〇		一、〇		三二—一七	六—一五	
第四齢	四月七日	四月十七日					三三—一六	二—一三	

(六)所属　既に上記のごとく此害蟲の卵子は、二化生螟蟲のものと同様にして、幼蟲態にて越年し、三四葉を捲綴りて化蛹し、蛾は夜間に飛翔し、觸角は鞭狀にして、前翅に十三條の翅脉及び翅と畧ぼ同形なる中胞を有し、且脚の脛節に刺を具ふる等、小蛾亞目(Miclolepidoptera)螟蟲蛾科(Pyralidae.)に屬するものたるや明らかなり、而して其學名は Phakellura perspectalis? ならんか。

(七)卵子の寄生蜂　此蟲の卵子に寄生する黑色微小の蜂ありて、一卵に必らず二頭づゝ寄生するを恒とす。其形は(チ)圖に

種別	始	終	越年				備考
第五齢	四月十八日	四月二十六日			二四—一六	九—一五	
蛹		五月十日			二四—一三	六—一五	
成蟲					二四—二〇	九—一四	五月二十五日ヨリ六月五六日頃最モ盛ナリ
卵	五月十九日	六月一日			二八—一三	一三—二一	七八日頃ニ發生セシモノアリキ
第一齢	六月一日	六月四日			二六—一六	一三—一六	
第二齢	六月五日	六月十一日			二八—一四	一五—二三	
第三齢	六月十二日	六月十七日			二八—一三	一七—二三	
第四齢	六月十七日	六月二十二日			二七—一三	二〇—二二	
第五齢	六月二十三日	六月二十八日			二七—一五	一九—二三	
蛹	六月	七月八日			二七—一四	一七—二二	
成蟲	七月	七月			二九—一七	一七〜二三	
卵	七月十二日	七月二十二日			三〇—一八	二二—二四	
第一齢	七月	七月二十六日			三一—一八	一九—二四	
第二齢	七月二十七日	七月三十一日	越年		三二—一八	一八—二四	七月二十三日頃既ニ越年ノ準備ヲナセシモノアリキ

〈備考〉各齢の終りは、眠起までを算入するを正當とすれども、本表に於ては、就眠時を以て其齢の終りとせり。

示すが如く、螟蟲の寄生蜂に似て、なほ一層小さく、体長は〇・五ミメ餘、翅の開張は一・三ミメあり。頭部は扁たく、三個の單眼を具へ、觸角は稍膝狀をなして、六關節より成る（雌は雄より稍長さを常とす）前翅は杓子狀を爲し、無色透明にして短小なる一條の脉絡を具ふ。後翅また略ぼ前翅と同形なれども唯著るしく小さく、且つ翅脉を有せず。肢は三對共に少しく褐色を帶び、長さ〇・四ミメ内外あり。跗節は五小節にして、腹部は七關節より成り、雄の尾端には短き產卵管を具ふ。葉捲蟲の卵粒中、該蜂の寄生を受けざるものは、始め純白色にして、漸

次に黄色を帶び、孵化前と雖ども黄赤色あるに、一たびこの寄生を受けたるものは、黒褐又は黑色となる。故に同卵塊中にありても、寄生蜂加害卵と、その然らざるものとを、一見容易に區別するを得べし而して此寄生種は、卵蜂科（Peroctotrupidoe）の Teleas. 屬ならん。

（八）幼蟲の寄生蠅　此害蟲には、また（ト）に示せるが如き一種の蠅ありて、四齡以上の幼蟲に寄生す躰長二分乃至二分五厘、翅の開張四分内外を有す。全躰黑色にして家蠅に酷似す、頭部は家蠅の如く略ぼ三角形にして、複眼は黑褐をなし、其表面に短毛を生せり。單眼は割合に小さく、頭部の後方には稍光澤を帶ぶ。觸角は黑色にして、亦家蠅と同しく、都て三關節より成れども、第三節は著しく伸長して長方形をなし、其基部の外方には三關節より成れる一枚の長き觸毛を具ふること（ヌの二）の如し。胸部には縱線あく、たゞ五條列の粗毛を生ず。前翅の翅脉は九條にして、鱗狀片は灰白色をなす。腹部は五關節より成り、末端に至るに從がひ少しく尖り、且つ長粗毛を生ず。脚は三對共に黑色にして、跗節は五小節より成り、末節に二個の大なる爪及び吸盤を有せり。卵は略ぼ圓形にして、幼蟲は蠶蛆と同形をなせども稍小さく、蛹も亦蠶蛆のそれに似て長七ミメ左右、幅三ミメ許りあり、彩色は黑褐を帶ぶ。其所屬は蠅亞科（Brachycera）家蠅科（Muscidae）の Masscera 屬ならんと思はる。因に云ふ黃楊葉捲蟲の幼蟲は、この寄生蠅の他、黴菌（Sporotruns. の一種）の爲めにも、斃死せしめらるゝもの多しと雖ども、該菌に就ては、目下研究中なれば、他日再たび發表するの機會を俟たんとす。（完）

◎第拾壹版圖解說　（イ）は成蟲（ロ）は成蟲靜止の狀（ハ）は蛹（ニ）は幼蟲（ホ）は卵粒（ヘ）は被害局部（への一）は被害樹に幼蟲越年の狀（への二）は被害樹に化蛹の狀（ト）は幼蟲への寄生蠅（チ）は卵子への寄生蜂（リ）は寄生繩の前翅の脈條（ヌ）は寄生蠅の觸肢（ヌの一）は全觸毛の基部（チ）は葉捲蟲の前後翅の脉條（チの一）は同上の剌（ワ）は同幼蟲の觸肢（ヲの一）は同上基節（ヲの二三四）は同上關節（カ）は同幼蟲の第二關節（ヨ）は同上第八關節、共に諸縱線黑色疣狀突起及び毛の配列を示せるなり（タ）は同成蟲の下唇鬚（タ

の一)は鱗毛(タの二)は突起(レ)は同成蟲の觸角の一部(レの一)は鱗毛(ソ)は同蛹の尾端、鈎狀の附屬を示せり。

名和靖云ふ。黃楊葉捲蟲に關し、生態氏が細密の觀察を遂げて、特に本誌に寄稿せられし厚意を謝すると共に、玆に一の附記すべき者あり。そは、數年前東京府所屬伊豆群島中の三宅島に此蟲の多生せし事實是なり。言ふまでもなく、黃楊は同島重要物產の一なるを以て、農商務省は今の農事試驗場病理部長技師堀正太郎氏に其被害實況の調査を命ず、余も亦堀氏に同行を勸められしが、事ありて果さざりき。此行堀氏は異常の危難に遭遇せしかども、遂に詳細の復命をなしたる趣なるが、其際紀念の爲めにとて被害樹の禿立する光景、害蟲發育圖等の寫眞數葉を寄贈せられしを以て、今猶ほ當昆蟲研究所昆蟲標本陳列舘に揭げ置けり。恐らくは是れ、本邦に於ける黃楊葉捲蟲研究の第一着手ならんか。去ればにや、佐々木氏の近著『日本樹木害蟲篇』にも、其發生地を本州は勿論、三宅島にも每年發生し、特に三宅島に於ては、葉捲蟲の發生特に夥く、爲めに『ツゲ』の成長を惡くし、或は之を枯死せしむるに至ると云ふ、とあり。又岐阜縣下稻葉郡地方にも、連年發生加害せる爲め、當研究所は之が飼育に從事し、既に昨年を以て其發育原圖の調製を了へしが、恰かも好し、今回生態氏の寄稿に接したれば、本號の口繪第十一版圖を調製するに當り、往年堀氏より寄贈に係れる寫眞と、當所調製の原圖をも參照して、偏へに其誤謬なからんことを期せり。去れば生態氏自寫のものとは、一二少異を來したる點無きにしもあらざる可し、併せてこの由を告ぐ。

◎蜚蠊類につきて(上)

岐阜中學校教諭　長野菊次郎抄譯

油蟲類につきては、余未だ本邦人の取調べたる詳細の報告を見ること能はざりしに、本年米國農商務省昆蟲部第一助手マーラット(Marlatt)氏は、此の類につき適切の記述をなしたり、依りて其大要を譯し、傍ら余の卑見を加へて、本誌の餘白を借ることとせり。

蜚蠊の類は、直翅類中の蜚蠊科に屬し、重に暖國の產にして、其中の少種は人家に棲息せり。其普通に產すると、損害を及ぼすこと少なからざるを以て、古より人に知らる。溫帶諸國に於ては、普通に家屋に生ずるもの、僅か四五種にして、野生のものも亦少數なれども、熱帶地方にては、家棲野生共に甚だ多くして、變種に富み、形狀色澤を異にし、或種の如きは六英寸の大さに達するものあり。寒氣に抗す

る力の弱きものにして、極寒の際には、特別の防禦なきもの丶外は、家棲のものさへ盡く滅亡に歸することあり。然れども適當なる狀態にありては、ラプランド(Rapland)の如き、寒帶國の小舍にも棲息し冬の食糧として貯へたる乾魚等を貪食すること少からずとなり。上述の如く、家棲の種は少なしと雖ども、飛蠊科（以下單に飛蠊と書くは蜚蠊の類を指す）に屬するものは、甚だ多くして、今日までに記載せられ、且採集せられたるものは、殆んど千を以て數ふべし、尙一層精密に討究したらんには、五千種以上を算すること易々たるべし。戸外に生ずる多數の蜚蠊は、暖國にては重に植物を食ひ、時には大害を及ぼす事あり。然るにテッパー（Tepper）氏の最近の實驗によれば、此類は著るしき食肉性のものにして、蜈蚣及び其他の柔かなる昆蟲を食ひ、時としては害蟲驅除の効を奏することありとなり。扨また此等の蜚蠊が、果實及び澱粉質塊莖、其他植物の產出物を食ふことは、普通に認むる處なるが、綠葉を食ふや否やについては、多少の疑ひなきを得ず。

●●●●●歷史及び分布　飛蠊は昆蟲類中の初級に位ゐするものにして、地質學上の古生代石炭紀に於て、旣に多數に存在し、現今の昆蟲の出現に先ちて、旣に存在したりしことは、化石によりて徵すべし。其時代に當りてや、蜚蠊の種類甚だ多くして、今日現存の數にも勝れり、蓋し此時は氣候溫暖にして植物又は此等の蟲の蕃殖に適當したればなり。今日家に棲めるものは、疑ひもなく、上古の家屋に於て、旣に人類と同居したるものなるが、商業の發達に從ひ、航海事業の擴張と共に、各地に分布せられたるものならん。而して此蟲の船中に多くして、又損害を及ぼすことの多きは、船中の濕氣多きと溫暖なるとが、其生育に恰好せるが故なり。

歐洲に產する普通のアブラ ムシ(Periplaneta orientalis)は亞細亞の原產にして、二三百年前に歐洲に送

られたるものと思はる。チャバチ アブラムシ(Ectobia germanica)は、多分上古より人と同居したるものにして、亞細亞及び埃及等舊き文明國より、新に歐洲に輸入せられたるなるべし。其他オーストラリア アブラムシ(Periplaneta australariae)は、濠洲の原産にして、アメリカ アブラムシ(P. americana)は、熱帶及び亞熱帶亞米利加の原産なり。

●形狀　蜚蠊は地質學上、昆蟲類中の最も古きものゝ一とは云へ、當時と今日のものとの間に、著しき形態上の差異あることなし。躰軀扁平にして滑かに、頭部は胸部の下部に曲り込みて、口器は後方に向ひ、眼は下方に向へり。觸角は甚だ長くして柔かに、屢々百節以上を有せり。二對の翅を有し、前翅は稍革狀を呈し、後翅は膜狀にして、縦に一褶を有し、前後其趣きを異にせり。然れども、或種の雌には、殆んど翅を缺くものあり。脚は長くして強き剛毛を生じ、口器は發達して健き顎を具へ、種々の物質を食ふに適當なり。都て色は、暗褐色又は暗黑色を呈せり、蓋し此蟲が、日光を避けて夜行の習癖あるには適當の保護色と云ふべし。

アメリカ アブラムシと其卵塊の圖
(イ)は卵塊　(ロ)は成蟲

●習性　蜚蠊は重に厨房等の火氣ある處に棲み、晝間は器物、板張等の間隙の、日光の達せざる處に潜み、夜に入りて出づ。然れば器具を移すか、又は其隱栖を衝くにあらざれば、容易に發見し難く、一旦其隱栖を襲はるゝときは、驚くべき速度を以て愴惶逃れ去り、容易に捕獲又は殺戮することを得ざらしむ。又躰軀扁平なるを以て、罅隙を出入して敵害を避くるに最も便なり。人若し夜間厨房等に入れば、微かに戞々又颯々の異音を聞くべきも、光輝一たび照す時は忽ち隱栖

さして逃げ去る所の多數の蜚蠊が、棚或は床等に算を亂すを見るべし。此蟲は雜食性にして、動物の死躰穀物及び各種の食物を食ひ、往々自己の脫殼又は卵殼をも食ひ、甚だしきは他種の同族を攻擊することさへあり。多分彼は同類相食むの性あるなるべし、其他此蟲は毛織物、革物を嚙み、又屢次圖書館、書店等の書冊の背革、又はクロース等を損害すること多し、蓋しクロース或ひは本の緣等に用ゐる糊がその好物なればなり、又蛋白質糊を食ふが爲めに、書冊に鏤せる金文字の損害せらるゝことあり。其他船中に於ても大害を及ぼすこと少からず、或時船中に貯へられたるビスケットの全量が、此蟲の爲めに盡とく食はれたる事さへあり。

此蟲はかく物品を損傷せしむるのみならず、其躰に接したるものには、嘔氣を催すべき一種の惡臭を附するものなり、此臭氣が、棚又は皿等に移りたる時は、石鹼又は熱湯を以て洗ふに非ざれば、之を除くこと能はず。然れば、一旦此臭氣の爲めに汚されたる食物の如きは、最早回復すべきにあらざるなり。此臭氣は重に口より脫出する、黑色の液より發するものにして、又其一部は疑ひもなく、臭腺より發するものなり。臭腺は雌雄共に腹部關節に之を有して、一種の不快なる臭氣を有する油狀液を分泌するものなり、然れば棚上に置ける皿碗等に此臭氣の移る事あるは、敢て怪しむに足らざるなり。若し此等の器に、茶或はカッヒー等の如き飮料を入るゝときは、臭氣忽ち散布して、嫌惡すべき惡臭を發することは人の知る所なり、此際其臭氣が、器具より來ることを知らずして、飮食物に存するかを疑はしむる場合少からず。されど一方に蜚蠊は掃除者とも云ふべくして、時には動物の死躰を食ひ盡し、或は運搬することあり、又家屋の害物、例へば壁蝨等を食ふことあれば、少しは其罪惡を贖ふことを得んか。

●變躰　此種は不完全變躰をなすものにして、幼蟲と成蟲との異なる所は、唯躰の小なると、翅の短さ

位に過ぎざるなり。他の昆蟲類にては、大抵卵は個々別々に產付くれども、此種の雌にありては、時として母躰に充實する程の堅き角質の卵殼を、腹中に保つことあり、而して此卵殼は多數の卵を含み、其數は種によりて異なれども、二行に配列せり。卵の位置は側部の有樣により、外部より知ることを得べし、若し卵數十分に形成せられ、卵殼を以て被はるゝときは、其一部分雌躰の腹より拔け出で、時としては一週間も此まゝに經過し、或は幼蟲が孵化せんとするまで、其儘に過ごすことあり。卵殼は長楕圓形にして、稍蠶豆狀を呈し、其一端に鋸齒を有せり、孵化したる幼兒は、或は親に保護せらるゝことあり、と云へる人もあれど、眞僞頓に決し難し。然れども幼蟲の群が、常に一二匹の成蟲と連れ立つことは通常認むる所なるが、是は此蟲は多少群集的性を有するによるなり、斯くて屢次蛻皮すること、時には六回の多きに及ぶ。皮は背部より分裂し、蛻皮後は白色にして。柔軟なれども、忽ちに堅く變じて、固有の色を呈するに至る。其生長は遲々たるものにして、適當の事情の下に、殆んど一年一回の生育を遂ぐるに似たり、寒國にて孵化又は生育するは、溫かなる季節のみに限り、冬の間は蟄伏す。チヤバ子アブラムシが十分生長するには、四ケ月半乃至六月を要し、アメリカ アブラムシは十月乃至十一ケ月を要すと云へり。斯くその生長が遲々たるに係はらず、割合に其數の多きは、蕃殖の速かなるに非ずして驅除法の不完全なると、自然の敵蟲の少なきとによれり。　（未完）

◎慶雲は蚊柱たるの說（續）

仙臺宕麓、晴畊雨讀子

斯れば、專ら佛道に歸依し方術を信仰し、又深く陰陽說に惑溺せる奈良朝の前後に、慶雲等の美稱を命せしは、或氣形物の作爲せる現象を目しゝに外ならざる可く、その伊勢の外宮の殿上に五色の祥雲起れり（六月）と云ひ、陰陽寮に美雲起れり（七月）と云ひ、東南角に五色を具ふるの雲見はる（七月）と云ふ

の類ひは、畢竟、五色の雲黄帝の顏を覆へり、との唐土の筆鋒を擬へるに出で、則はち其人を神にし、其世を聖ならしめんとの意なりしや昭らけし。故に迷信の少しく薄らげる延喜廿三年五月、仁和三年八月、建曆二年十月、嘉禎二年四月、寛元五年正月、治承四年五月、寛平元年十月と嘉吉三年四月等に、京都鎌倉の兩地に起れる飛蟻の蜜集團を、もし其數百年前にあらしめば、或ひはこれをも瑞兆慶雲の出現として、泰平の謳歌を奏せしならんか。

如上の事實は、單に蚊柱と慶雲の關係を叙述せしに止まるも、更に研究の範圍を擴むる時は、彼の赤氣白氣てふ物も、半は慶雲と異稱同體にあらずやと疑がはる。即はち史には『白鳳十一年八月、白氣東方にあり、其大さ四圍許り』云々『元和五年、夏より秋九月に至るまで、白氣東南の間に夜毎に見はる、形ち牛角の如く、長さ數十丈』云々『寛文八年正月、白氣西方に見はる、恰かも棹を立てたるが如し』云々とあれど、是等はよも水蒸氣の作用とは思はれず。去れど未だ解し得ぬ疑點の二三あれば、爰に確乎たる意見を述べ難かり。たゞ水蒸氣の多量なる夏秋の晩景に、變幻極まりなき色彩を、天際に棚引すは尋常の事なるに、貞觀十八年八月、日沒に八條の赤雲東より起り、直ちに西に接げりとて、之を禎祥とし喜こび、又天文十五年には、八月廿三日酉の刻に、黃雲四に見はれ、草木黃變し人面金の如かりしとて、頗ぶる危懼の念を懷きし程なれば、古人が目して雲といひ氣といふもの、必ずしも今のそれとのみ速斷すべきにあらず、と言ひ置かんとす。

古人は辨物識名を以て後とし、好奇談怪を以て先とせしかば、往々常理を以て判別し易からざるものあり。例へば貞觀十六年に伊勢に發生して、痛く禾穀を蝕損せる、有害蟲種に於て之を明らむべし。然れば台記には『天養二年、三月七日（中略）中院寢殿有レ烟、件烟見二屋上一、隣里驚、存二放火一由、驚放二天

井ニ見レ之、有ニ繪像佛五躰、色旗等一出ニ件物於門外ニ之後、烟散盡』ともありて、その烟氣の上騰に驚怖し、專ばらこれを神明の靈威の赫耀たるに歸せりと雖ども、是豈に一種の蚊柱の高く屋上に起れるものに非ざる莫ふんや。其他なほ、治安四年九月の布雲に、万壽二年九月の祥曉に、延寶二年二月の黒雲に一時奇異の現象と信ぜられしもの數者あるも、之を蚊柱の下に拉し來らば、其解說敢て至難なりとも思はれず。但近世に至るまで、雲氣に對する觀察の正確を缺きしに似ず、古史に、これと氣形物の聯繫を說置けるものあるに至りては、事少さか異とすべし。即はち三代實錄の『仁和三年八月四日（中畧）達智門上有レ氣、如レ煙非レ煙、如レ虹非レ虹、飛上屬レ天、或人見レ之、皆曰、是羽蟻也』云々の一節及び扶桑略記の同月八日の記事に『有ニ羽蟻一出下大藏正藏院上、群飛竟レ天、屬ニ于船岳一、其氣如レ虹』とあるが如きは共にもと無意に出でし記錄に過ぎざる可きも、慶雲の實躰を審明する上より云へば、有力の材料を今日に遺しゝものとこそ思ふなれ。萬綠叢中一點の紅とは、斯かる類ひをやいふらん。

凡そ蚊柱を形成する昆蟲中、雙翅目總絲類の各科のものは、夙に其特性を知られしと覺しく、爾雅の註疏を始め通史昆蟲草木略の如きにも、斜陽には群聚鬪飛すと載せられ、特に小野蘭山氏によりて『簷下の群飛す、或は一上一下舂く狀の如し、或は旋り飛て礌狀の如し、人以て雨晴を占ふ云々。天陰る時は此蟲飛群す、遠く望めば烟霧の如し、人行てこれに遇へば、口鼻目に入り甚だ害をなす』と細釋を加へられき。その飛蟻に至りては、多く日中に群集するより、古來最とも史家の視線を惹けるが如しと雖ども、惜むらくは、其漢名の錯誤し易き爲めか、屬目を異にせる白蟻（Termes fatalis, L.）と同視せられしも多かり。就中、寺島良安氏が『螱、一名白蟻、羽蟻也。人家古松柱間、生レ螱、其蜓細白、如ニ罌粟子一、有下黑點上處、頭也、尋變ニ黃赤一、生レ翼、再變レ黑而群飛、不レ能ニ奈何一、相傳、書ニ呪歌一、粘下其柱上、則螱悉

除去、屢試、驗焉』云々とせしは、正しく西南産の白蟻と、畿内地方の飛蟻を連記せしやに見え、貝原益軒氏が『白蟻は翼を生ずれば、則はち黒色に變ず』とせしは、唐土の説を其地方の白蟻に適用せしものある可く、栗本丹洲氏が、ハアリに白蟻の漢字を適て、『春月快晴の日に羽化して出、飛ぶこと甚多し、遠望雲烟の如し、其飛ぶこと高きこと能はず、風に吹落されて地に下り、即ち翼を脱て地上を行き遂に虎蟻の食となり、蛛網にかゝりて終りを全ふせず』と云へるは、偏へに小野氏の説に據りて、飛蟻を解釋せしものならん。而してたゞ本綱の附錄の『白蟻、即蟻之白者、一名螱、一名飛螘、穴レ地而居、蠹レ木而食、因レ濕營レ土、大爲二物害一、初生爲二蟻蝝一、至レ夏遺レ卵、生レ翼而飛、則變二黑色一、尋亦隕死、性畏二烰炭、桐油、竹雞一云』のみは、稍擬脈翅目白蟻科のもの丶性狀を説得たるに似たり。論ふまでも無く、邦内の暖地には、白蟻の一種を産せざるに非ず、又其群飛に當りては、所謂蚊柱を作爲せざるに非ざるも、局部の發生に對して、恰かも一般に分布するが如くに信ぜられしは、蓋し漢字に拘泥して、膜翅目種と、擬脈翅目種とを混錯せしに因るなる可し。（前號の第二圖は、膜翅目二節蟻科のコアリを示し、本號の第四圖はシロアリの一種を示す）

第四圖　白蟻の一種（放大）

前に述べし如く、唐土にては古くより、蚊屬の群聚性を熟知せしかども、唯その密集團に對する命名は之を缺きしものか、未だ諸書に邦稱蚊柱と同義の熟字あるを見ず、又これを詩題となせし事をも知らず平生事物の形容に、特得の妙ある彼の國人としては、最と似氣無き業にこそ。西洋諸國また蚊柱てふ熟語無しと聞けど、其出現の記載に至りては、細緻の觀察に成れるもの固より少しとなさず。但之を學理

に照合して、解決を加ふるが爲めに、此をば蚊屬の生殖作用を完うせんとて、或時期に群聚する一の密集團となせるのみ。

去頃、石川千代松氏の所說に據れば、英國の一高塔に我が元文元年に起れる蚊柱は、人をして簇烟の上昇するにあらずやと疑はしめ、獨逸には文化九年の七月と、安政六年の八月とに起れる事ありしが、特に或年の八月にノイブランデン ブルヒ市の寺院の、高さ三十丈を有する尖塔上に懸れる大蚊柱は、宛がら動ける烟かとも怪しまれ、明治十一年の九月にライブ ジッヒの森林の附近に見はれしものは、碧空遙かに一條の雲柱を立てし如かりしが、軈て無數の死屍の下流に浮べるを見き、と云へり。又テンネー氏の記載を見るに、米國獨立戰爭の際に、藁稈に附着して獨國より移殖せりと傳へらるゝ、双翅目癭蠅科のヘッシアン種(Cecidomyia destructor, say)は、其外見に其擧動に、邦產の擬蚊子、蚊姥兩科のものに酷類する爲めにや、春秋二季を以て蚊柱を作り、同科の小麥蠅(Diplosis tristis, K.)は、邦產膜子科のそれの如くに、六月の初、八月の末には、朝暮若くは曇天の日を以て、同族の集合を催ふすとなり。而してハワード氏の記載は、啻に蚊柱の眞面目を知らしむるのみか、また國史に散見せる諸雲象を解釋するに稗益あれば、次に其一節を抄出して、本文の劵左となさん。

蚊子の頗ぶる遠地より移殖するものなる事は、テッキサス州ヴィクトリアのセェー、ディー、ミッチェル氏が、近者公行せる報告によりて之を確認し得べし、其說に曰く。

コロラド河のマタゴルタ灣に朝する處に、洲渚より成れる低地あり、中に一沮洳を存し、其廣袤約十八方哩を算す、蓋しこれ蚊族の發生には、恰當の蕃殖地たり。余は飼畜場設置の必要より、東はカランカー灣に臨み、南はマタゴルダ灣に面し、西にケラル、クレークの二灣を扣へ、唯北の一方のみはカルハンの北境に隣接せる此半島形地を相して、其北端に近きカランカー灣上の一地域を卜定せしが、此地と沮洳とは、海路遙かに四十浬を距て、之を陸地よりするも、なほ直徑三十五哩左右あるべし。

想へば、初回の移殖は、去る千八百七十九年(我が明治十二年)の十一月にありしが、當時沮洳には雨水充溢せしも、種畜場附近は乾

燥その極に達せる後の事にて、寧ろ猶ほ降雨を祈り、且つ絕えて蚊子の棲息無き折しもあれ、東順風を吹送ること三日の黃昏に到り約五丈許りの中空に飛颺し乍ら、宛然、雲か霧かの如くに擬へる密聚蚊族の一團は、カランカー灣を渡り、直ちに此方を指して飜進し來ぬ。之が爲めにあらゆる生類は螫刺の災厄を被ふり、その體熱を激發せしかば、場務を擧げて休止するの悲慘に際會せり。家畜と馬匹とは、絕えず軀を躍旋して、苦悶の狀甚はだしかりしかば、聽て之を釋放して、奔馳の自由の下に其侵襲を防がしめぬ。斯くて何一つだに成し得ず、前後五日許りを空消する中、一團は何れへか散逸せしかば、始めて愁眉を開きしものゝ、猶ほ爾後二週間は、恒に不安の狀を以て執業しき。此移殖は、其初め東に起りて西に及びたりしが、隊列の濶さは、綿々として三哩に連續し、然かも列外に於ては、蚊子の隻影だも見ること能はざりき。

（蚊柱通過地域想定略圖）

（本圖は讀者對照の便にもと、假に添附せしものなるを以て、本文と合はぬ所多からん、諒焉。）

（イ）コルラド河　（ロ）同河口　（ハ）マタゴルダ半島　（ニ）マタゴルダ灣　（ホ）ポートラヴァカ灣　（ヘ）ポートラヴァカ市　（ト）ヴイクトリア市　（チ）カランカー灣　（リ）サンアントニオ灣　（ヌ）アランサス灣　（ル）アランサス市　（ヲ）メキシコ灣　●印蚊柱發現地（想定）　▲印種畜場所在地（想定）　…印蚊柱通過路（想定）

次回の移殖は、千八百八十六年（明治十九年）十一月の事にて、是また同じ沮洳に發現せしが、前回と異なり內地とは半哩許りなるマタゴルダの海岸線を以て、殿に其境界を劃しき。然し乍ら、密聚せる蚊群の多かりしは、三哩の橫列を成せる前者のそれにも讓る所なく空中に雲集せる此一團の通過する處は、餘威を以て生草を薙倒し、果は浮木と土壤を同色に變ぜしめし程なりしかば、家畜類は海岸を逃れ出で、沮洳界に遠ざかれる北方へと避難しぬ。是日や南の微風にて、西向の一團は毫も阻障を感ぜざるものゝ如かりしが、地上十尺乃至十二尺の低處を、恒に同方位を執りて齊しく行進しき。余は他の三名と俱に、木片其他の燃料を堆かく携へて此一團の中に乘入り、身を爐烟の裏に置き乍ら、數刻その動靜に注視しぬ。斯くて三日を經る間に、さしもの大群も、何時しか其形跡を留めずなりしが、跡には唯點々たる遺類を殘すのみなりき。（譯者云ふ。此地は、我が琉球と同じく、北緯三十度に達せざる暖地なれば、初冬にも蚊柱の出現はありと見ゆ。）

余はまた之を研究せんものをと、其發現地たる沮洳より起り、種畜場を西に距つること、十五哩乃至二十哩に至る全長五六十哩間な

前後とも追跡を試みしが、初回の移殖には、濶五浬のトラパラシオス海峽と一浬のカランカー海峽とを横斷し、次回には海岸線に沿ふて、三浬のトラパラシオス海峽、三百ヤーヅのカランカー海峽、半浬のケルラー海峽及び一浬半のコックス海峽に加へて、四浬のポートラヴアカ海峽をも通過しき。

既記の衆說を讀去り讀來り、更に之を括摠する時は、慶雲は蚊柱の前身にして、蚊柱は其化身たるの事實を、略ぼ認容するに足らん。乃ち蚊柱研究の賜として、次の數條の結果を、茲に再言することを得べし。

一　蚊柱は、或時期に蚊屬又は蟎屬の群集する團體にて、每に雲烟の形を成して出現す。之に反して、慶雲は、雲氣又は水蒸氣の昇騰と確認すべき牢固の根基を有せず。

二　蚊柱は、形成の要素、出現の理由、發生地點より、其形質、進退に至るまで、悉とく之を實際に具有す。之に反して、慶雲は茫漠模糊、未だ實跡の何たるやを辨じ難きも、獨出現の時期と形質等に至りては、蚊柱のそれと異なる所なし。

三　蚊柱は古往今來、內外諸國に出現し、特に卑濕沮洳の地、或ひは高塔喬林の近傍に多かり。之に反して、慶雲は古代に存して今日に絕え、東洋に見はれて西洋に缺けり。然かも、其陰鬱地に起り樓閣に傍ふて上れるは、全く蚊柱に同じ。

四　蚊柱とは、原と一種の俗稱に過ぎざりしも、人智の高度に趨くに隨へて、其名愈々多く用ゐらる。之に反して、慶雲とは、長へに國瑞に冠すべき美稱なるに、人智の低度なる古代にのみ見はれしを以て、追漸其名を失へり。

五　蚊柱は、能く慶雲の形質を解釋し、又之を自體に一致せしめ得べき、實在の氣形物たり。之に反して、慶雲は、自已の實體をすら說明し得ざる、舊史上の一現象たるに止まる。

六　故に科學の進步せる今日の蚊柱は、古への慶雲と同體異稱なるべく、迷信の昌熾を極めたる古代に慶雲と稱せしものは、今の蚊柱に對する、理想上の嘉名たるべし。

此考徵を以て正鵠を得たりとせば、之によりてまた、慶雲即はち蚊柱は、奇しくも、人智の程度と、並行線を畫せるを見ん、則はち中古以還、幾たびか變遷を累ぬる間に、其開化の淺薄なる時代よ出現せしものは、世よも有難き應瑞と呼はれて、國民を蠱惑するの弊源となり、その稍文物の改進せる時代に見はれしものは、人事凶變の先兆として嫌惡せられにき。而して今や學術の發展に伴れ、これをば小蟲族間に於ける當然の會合と信じて、また疑惑を挿まざるに至りしこそ是非なけれ。觀來れば、時勢の推移に隨へる

智識の發達は、其秩序整然として、寸毫も欺くべからざるものあるを知る。豈啻に擬脈翅目の白蟻を、膜翅目の蟻屬に混同せし時代の經過のみを怪しまんや。意ふに、宋の英主仁宗が、皇祐に瑞物に却け、又職司を黜け、以て天下に戒めて迷信を矯むるの急なるを知り、而して未だ力を國民智囊の拓開に傾むけ、以て其弊根の芟除に勉めざりし所以のものは、そも是理に通曉せざるの過失ならずといはんや。(完)

◎ゴイシウラバシジミテフの研究

千葉縣印旛郡　山崎市平

凡そ鱗翅類の昆蟲は、其種類甚だ多くして、現今其學名を有せるものゝみにても、三萬五千種以上に達すと云ふ。而して此等の殆んど全部は、其幼蟲時代に植物の莖葉を貪食して、吾人に損失を與ふる所の害蟲たり。尤も中には、家蠶、天蠶等の如き、特別なる有益蟲ありと雖ども、之を概括すれば、先づ害蟲と見做して差支なかるべし。唯りゴイシウラバシジミテフ(Taraka hamada Druce.)のみは、其の幼蟲時代に他の昆蟲を食するところの食肉性種に屬するを以て、鱗翅類中に有益蟲を求むれば、實に此一種あるのみ。

此蝶は體長四分、翅の開張一寸許り、翅色は表面暗灰色なるも、裏面は白色に、多くの黑點を散在するの狀恰かも碁石を駢べたるが如くなるを以て、碁石裏翅蜆蝶の稱あるなり。

成蟲は大抵四月頃より出現し、九月頃まで發生を繼續す、其飛翔の狀態等は他の蜆蝶類に異なる所無く多くは竹叢等の濕暖なる處に飛遊し、竹類に寄生する白色蚜蟲の群生中に産卵す。卵子は圓形にして扁たく、圓徑一厘許り、産卵當時は白色なるも、其孵化期に近づけば、中央部は淡黑色に變じ、凡そ一週日にして孵化す、幼蟲の躰色は蚜蟲の如く、一見其の所在を判別し難きも、細かに蚜蟲の群集中を視る

ときは、其形體は全たく異なれるものあるを發見し得べし。即はち其全躰は十二の環節より成り、白色にして背上處々に黒斑紋を有し、體の兩側の各環節には、小突起ありてこれより數條の長毛を生じ、猶其他にも亦短毛を密生せり。頭部は小にして、第一環節の爲めに被覆せらるゝが故に、前面より明かに窺知し難し。幼蟲の形狀は薄翅蜻蛉の幼蟲の如くにて、蚜蟲の群生中に混棲し、毎に好んで之が捕食に勉め、成長する時は其體長三分五厘、幅一分五厘乃至二分を算するに至る。脚は都て八對より成り、其中、胸脚は三對腹脚は四對にして外に尾脚一對あり。斯くて老熟期を迎ふれば、自から絹絲を吐きて脚を緊括し、絶食靜止すること約そ一二晝夜にして蛹化す。蛹は圓形にして、恰かも瓢蟲のそれの如く、背部には黒色なる圓形の輪紋あり。其紋には薄き赤色を帶び、長は二分五厘、幅は一分五厘乃至二分許り七箇の環節を有するを見る。蛹期は一週の間に經過するを常とすれども、また十日を要することあり。

これより羽化して成蟲となるものは、即はち此ゴイシ ウラバ シジミテフとす。

(碁石裏翅蜆蝶の圖)

ニ　ハ　ロ　イ　♀

(イ)は卵子　(ハ)は蛹
(ロ)は幼蟲　(ニ)は成蟲

編者云ふ。ゴイシ ウラバ シジミテフの記載は、從來世間に其比少なし、而して其食肉性たる事を始めて世に公にせしは、去明治卅一年十月に於ける土田都止雄氏の論說にあるべし。其記載には蝶名をシモフリ シジミと稱しき。其後明治三十三年に至り、宮嶋幹之助氏は『日本產蝶類圖說』第百一號を以て、同じくシモフリ シジミの稱下に、之が略說を試ろみられしかど、要は土田氏所說の範圍を出でざりき。此種は分布の區域廣く、夏秋には何地にも獲らる可き蜆蝶種のことなれば、其特殊の長處を利用するも興味深かるべく、又之が飼育の功を重ねて、其敵蟲の有無より、食料の分量等を究明するは斯學發達上の急務の一たるべしと信ず。

◎吉野山林加害の杉毛蟲（前）（次號の第十二版圖參看）

京都府　木村三郎

編者云ふ。今年吉野山林に發生せる杉毛蟲に就ては、去月十八日に、愛知縣名古屋市に開會の第十五回大日本山林會總會に於て、林學士今川唯市氏の講話ありたれば、本號にはその筆記を收錄の豫定なりしに、京都府研農會々報第二十號（十月發行）にも、同蟲に關する木村三郎氏の視察報あれば、其文躰の異なるに關はらず、玆には先づ木村氏のものを轉載し、次號を以て今川氏の詳說を紹介せんとす。蓋し、木村氏は學術的に記載し、今川氏は驅防上より立論せしを以て、研究の順序より言ふも、爾くせざる可からざるのみならず、此兩說を綜合する時は、實に首尾照應の妙を得るが故なり。覧者、其人を異にして、其題を同うする事由を怪しむ勿らんことを。

大和國吉野郡賀名生村、大字大日川、小字西谷の杉檜林に、杉毛蟲發生し、夥しく杉檜を蝕害せしことは、已に世人の知る處にして、余は本月七日實地其被害の狀況を視察することを得たりしを以て、聊か本府林業者の參考迄に、右被害の一般狀況を紹介せんと欲す。抑も此害蟲は、杉蛄蟖と稱するものにして、學名をDasdchisab.と云ひ、其幼蟲の成熟せるものは、長さ一寸二三分、着色杉葉に酷似し、各節には皆黑毛を存し、就中、第一軀節には二束の長き黑毛を生じ、第四より第七に至る軀節には、褐色と黄色とより成る短き束毛あり、第十一軀節には又一束の長き淡黄色を生せり。繭は其質粗薄にして、楕圓形をなし、其長さ凡そ七分許あり、其外圍には、幼蟲時代に於ける黑き軀毛を纒附す。蛾は灰褐色を呈し、長さ五六分、翅の開張一寸四五分にして、雌蛾は雄蛾に比し稍大なれども、觸鬚の櫛齒特に短きを以て、直ちに判別することを得べし。卵子は圓く、大さ蕓薹粒位ゐあり、先端凹入して其色稍白く、葉部に二三十粒許づゝ産着せるを見る。

以上は唯其害蟲の外部に於ける、大體の觀察に過ぎざるものにして、佐々木博士著日本樹木害蟲篇に依れば、幼蟲即ち杉蛄蟖は、四五月より現出し、杉樹に棲息して其葉を蝕害し、七八月に老熟の後、枝上に粗繭を營みて蛹となり、後一二週間を經て、成蟲即ち蛾となり杉に産卵す、此卵子は一二週間を經て孵化し幼蟲を出す、而して此幼蟲は冬日を經過し、翌年の四五月より、再び杉葉を蝕害し發育するものなり

と。然るに今回此害蟲の大害たるを發見せしは、漸く八月上旬頃とかにて（然れども、已に三月下旬間伐採せし時、仔蟲の杉葉に數多棲息せるを認めたるも、斯く大害を爲すものと思はずして、其儘放置せりと云ふ）爾來著しく其葉を蝕害せられ、恰も火災後に於ける罹災木の如き慘狀を呈せるに驚き、該林所有者は勿論、縣廳郡役所より、それ〳〵勸業官吏出張し、種々之が驅除方法を施したる中、最も有効なりしは、空砲を發し又は石油の空罐を叩きたることにて、之が音響に蟲は驚き、恰も驟雨の射降するが如くに夥しく枝上より落下するを以て、之を蒐集打殺せりと云ふ。而して其蝕害の最も甚だしかりしは、八月十四五日より十八日頃に至る間にて、右驅除法の有効なりしと同時に、一方には此幼蟲に寄生する蠅と、病菌とあり、特に此寄生蠅は甚だ多く、大さ二分許の小さき幼蟲に、五六頭の蠅寄着せるものを發見することを得たるが如き、其幼少なる頃よりして、已に此寄生蠅寄着し其卵子を產着するを知る。又一種の病菌に襲はれ、爲めに地上に落下斃死せるもの夥だしく、恰かも蠶兒の白殭病に罹りたるに酷似し、其死せるもの一坪實に三百乃至五百頭の多きを數ふるに至れり。

斯く甚だしく天然にも驅除せらるゝ事になり、大に減退せしむるを得、今日に於ては最早、人工驅除の必要無きものとし之を中止するに至れり。而して此害蟲の變態期日は、未だ不定にして、現に今に幼蟲にして盛に蝕害せるものあり、或は蛹となれるものあり、或は蛾となれるものあり、或は卵子あり、又は之より孵化せし仔蟲あるを見るが如く、果して年唯一回の孵化に止まるものなりや、二回三回と孵化するものなりや不明とする所なり。（目下、奈良縣立農林學校長今川林學士實地に於て、之が研究に從事しつゝあれば、追て明瞭なる事を得ん）

此害蟲は主として杉樹を害し、其部分は葉部は勿論、綠色の皮膚に至る迄も蝕害し、亦杉樹を混生せる檜葉をも蝕害せり、然れども杉に比して其害甚だ少なし。而して此蟲は陽光を甚だ嫌忌するものゝ如く爲めに枝葉の先端、陽光の直射せる所は、幸にも皆蝕害を免がれたり。此故に其被害樹の成長は、大に害せらるゝと雖ども、全く枯死するが如き憂なく、今後之が害蟲を全滅することを得ば、漸々其成長を回復することを得べけん。

以上記する所は、唯其被害の一斑に過ぎざるものなれども、茲に注意を要すべきことは、單純林と混交林との利害得失に於ける關係にして、吾府下の如く、杉は杉の單純林となし、檜は檜の單純林となすが如き處にありて、一朝此等害蟲の發生することあらば、全林悉く蝕害せらるゝのみならず、其害の蕃殖

は著しく勢力を强め、復た如何とも爲すこと能はざる損失を被ふることあれども、若し甲樹に乙樹を混交せしむる場合には、假令甲樹に對する害蟲の發生するも、乙樹は其被害を免がるゝことを得るが如く即ち全林より見るときは、唯其一部の損害に過ぎざる事となるべし、殊に森林害蟲の如き、容易に人工を以て驅除する事能はざる業にありては、混交林に仕立て、其損害を自然的に僅少ならしむることに務むるは、大に必要とする所ならんか。

◎イナゴ利用の實驗談

岐阜縣揖斐郡　小森省作

私は當昆蟲研究所へ御邪魔に參りましてから、未だ幾程もありませぬ故、昆蟲に關する經驗も無く、又何も知りません、それで今晩の水曜昆蟲會には皆樣の御說を承はるのみの積りでありましたが、規程として何か申さんければ成らぬとの仰せでありますから、私が村農會に居りました時の稻螽利用の實驗談を致しませう。

稻蟲が原と害蟲でありますか、益蟲でありますかは、深く研究致しませぬ私には解り兼ねますが、之を克く研究する時には、確かに益蟲と申す部類に入ることであらうと考へます。然し私の鄕里では、今に害蟲として學校兒童に捕らせますが、其方法は先づ五六月頃、田を犁き起し、水を入れて搔並らしますと卵塊は皆浮きます、其より二三日經ちますと、風の爲めに卵塊は畔の周りへと寄りますから、其れを兒童が拾ふて學校へ持て行くと、先生が之を帳簿に記入し置き、終りに計算をして、其多寡により賞品を與へるのであります、其れで默つて居ても、生徒は年年持つて參るのです。是は明治三十二年より始めましたが、其成蹟は同年に參升九合五勺、翌三十三年に五升三合六勺、昨三十四年に四斗四升四合九勺今三十五年には二斗四升六合七勺でありました。或地方へ參りますと稻螽が多く居りまして、田舍道などは之が爲めに步けない位ゐの所もありますが、私の村へ來て見ると、最早殆んど居りませぬ。其からまた春採りました殘りの幾分は、秋に成蟲で採らせるのです、是は昨年より始めたのですが、既に卵塊の時代に驅除が行つてありますから、左樣に多量に集めることが出來ませんでした、其中少し多いと思ふ者は皆他村で採りましたのなさうです、此が五貫四百七十八匁ありました。

此時恰ど學校では、郵便貯金を奬勵して居りましたから、兒童が稻螽を持つて來ると、帳簿に記入して四十匁毎に五厘切手を一枚宛遣りました、四十匁位ゐのものは極少量で、一番に多いのは八九百匁持つ

て參りました、子供で以て暫くの間に、十錢内外も取れるとは、誠に良き業務ではありませんか。勿論少し多く居る處になりますと、一貫匁位ゐは直ぐ採れます、と申すのは段々寒くなると、皆朝晩は植物などに登て居りますから、朝夕行つて採るのは譯の無いことであります。次に毎日兒童の持つて參りました丈は湯を掛けて殺し、之を日に乾して肥料と致しましたが、此稻蝗は意外に窒素に富んで居りまして、乾燥しましたものは十二パーセント以上、生でも四•八パーセント位ゐは有るのであります。本年之を村農會試作場で肥料功能試驗用に致しました處が、始めは餘り功能が見へませなんだが、二番除草の頃からは非常に功能が顯れて來まして、油粕等よりも數等宜しき樣に見受けました。其分量は一反歩に付て油粕十一貫九百匁に對し、乾燥しました稻蝗八貫七百匁を施したのでありました、同時に卵塊の試驗も行ひましたが、此も隨分功能がありました。即はち生稻蝗と油粕とは、殆んど同樣の價値があるのであります故、油粕一貫匁の代を二十錢と見れば、如何にしても、生蝗は十七八錢に當ります。少し多量に居る處でありますと、二貫匁や三貫匁は、一日に採れますから、稻蝗採りを致すのも、日雇賃位ゐには充分當ります。之を算盤から申すと、稻蝗を採るのは、害蟲驅除を行ふと同時に、之れを利用するのであるから、取も直さず、利益を二重に取ると云ふ事に成るのであります。

併し乍ら、斯う皆んなが採集する樣になりますと、稻蝗は次第に減じて來ますから、之を採つて生計を立てやうと云ふ者は宜しく考へねばなりませぬ。即はち五六月頃に採集致した卵塊をば、何處か不用の草生地へでも持つて參つて、飼育するより外に致方がありますまい。其日には稻蝗も大切にされまして有功蟲と云はれる樣になりませう。恐くは彼の蠶も其始は箇樣であつたろうと考へられます、成程一度は桑の害蟲などと呼ばはれた時代もありましたらうが、只今は如何ですか、有効蟲も有効蟲、然かも國家の經濟に關する程のものと變つて居るではありませんか。稻蝗でも既に信州などに參りますと「此田の稻蝗を捕る可らず」と云ふ制札を立てあります、是は肥料にするのではなく、食用にする爲めに惜むのです。前に述べましたのは、肥料としての經濟談を申しましたのですが、更に之を家畜の餌にするとか或は尚ほ一歩進んで儀助煮にするとかすれば、一層の利益があらうと存じます。それで今日までは有害蟲と云ふて嫌はれました稻蝗も、是からは有効蟲と云はれて、却つて苛い目に逢ひます日が、餘り遠くはあるまい事と信じます。（十月廿九日）

雜錄

◎食蟲動物の餌食の調査

在東京　林　壽祐

予は近刊の本誌に於て、將に食蟲動物の餌食研究に就て、意見を述べんと欲する者なるが、鳥類、兩棲類、爬蟲類等は、敢て食を嚙碎くことなく、所謂丸呑とするものなるを以て、其胃囊を撿せば、如何なる食種あるやを詳にすべしと雖ども、之に反して蟲類に至りては、得て知悉するの便に乏し。唯田舍に住居を占むる者のみは、一歩野外に出づれば、之が咬嚙の實況を目擊し得べきを以て、研究材料を蒐むるの機會多し。去れば、平素の注意の最とも必要なるや知る可し。予もと淺學未熟、加ふるに今や身東都にあり、容易に朝夕野外の動物に接して、細に之が觀察を遂ぐること能はず、故に素よりこれが通信に憚かるも、今數種類に就きて、其適例を示さんと欲す。

諸動物の名稱

種名	類別	餌食の種類（害）	餌食の種類（益）	評價
鵙（モズ）	鳴禽類	蝗、螟蛉、蟋蟀、甲蟲類。	蜘蛛、螻蛄、蜻蛉、蜂、雨蛤、金線蛙、鰌。	有益
雀（スヾメ）	同類	螟蛉、蝗、尺蠖、蟋蟀、毒蛾。	粟、黍、米、麥、蜻蛉、蜘蛛、蜂。	未定
金線蛙（トノサマガヘル）	無尾類	蝗、螟蛉、甲蟲、蝶蛾類。	蜻蛉、蚯蚓、螻蛄、幼魚。	有益
蟷螂（カマキリ）	直翅類	蟬、虻、蝗、蠅、蝶蛾類。	蜻蛉。	有益
江鷄（ムギワラトンバウ）	擬脈翅類	蚊、蠅、虻、蚋、蝶蛾類。	幼魚。	有益

前表中、鵙の如きは、蛙、蜻蛉等種々なる有益類を害すれども、其量尠くして、他の蝗、螟蛉等を食殺

するの力頗る大なるが故に、先づ有益動物と評すべきなり。斯く廣く食蟲動物の餌食を探求する時には兼てまた被食蟲類の食主の如何なるものなるかをも知り得べし。即はち前表に就て蝗の食主を索むれば鴫、雀、金線蛙、蟷螂等に屬する事を撿證するの類なり。終りに、勤勉なる讀者諸士が、各々實驗する所を陸續報告し、以て斯學の大成を期し給はらんことを禱る。

◎六足蟲雑俎（地の卷）

在岐阜市　長野菊次郎

(へ)蝶の種數　昆蟲類の中にて、比較的大にして且美麗なるものは、蝶類なれば、人の注意を惹きしこと最も早く、今日までに記載せられたるもの殆んど一万三千種にして、尚續々新種の發見あり。四十年前には、此數の四分の一乃至三分の一に過ぎざりしに、一躍此大數に達したれば、其全數は三万乃至四万と假定するも大差なかるべし。就中、英國には六十八種を産し、ニュージーランド(New Zealand)は非常に少くして僅かに十八種、南亞米利加は最も此種に富み、ウォリース(Wallace)氏の如きは、四十年前既にパラ(Para)市附近のみにて、六百種を算したり、然して本邦には、臺灣を除き百六十七種あり。

(と)鳳蝶科の種數　鳳蝶科の種數は、殆んど七百にして、其の多數は鳳蝶屬に屬せり。英國には、唯キアゲハの一種のみを産し、本邦には都て十五種あり。

(ち)蛾の數　今日までに知られたる蛾類の大數につきては、詳細に知る由なけれども、三万五千種より少なからずとなり。然れども此類には、蝶類よりも非常に小形のもの多ければ、其全數の如きは今日の幾十倍なるか知るべからざるものあり。現に英國にては、殆んど二千種を算すと云ふに非ずや。

(り)膜翅類の數　現今知られたるものは、二万五千より三万種の間なりといへども、寄生蜂の如きは實に無數なれば、其全數は二十五万より少なからざるべしとなり。

昆蟲世界編者云ふ。名和昆蟲研究所現在所藏の蜂類標本は、約八百種にして、其中六百種は寄生蜂、七八十種は普通種、百二三十種は有害蜂なり、以て寄生蜂の多種なるを證すべし。

(ぬ)双翅類の數　此類につきて、現時記載せられたるものは、四万種あり。但本邦産種は、其數未だ詳ならず、憾むべし。

(る)甲翅類の數　此類の今日に知られたる數は、殆んど十五万種にして、英國に産するもの畧三千三百種あり。本邦に産するものにして、其の調査を經たるものは、大約二千六百餘種なれども、ルーイス

(Lewis)氏の採集したるのは、現に四千餘種なりと云へば、其全數の如きは未だ容易に知るべきにあらず。

(を)半翅類の數　今日までに記載せられたるものは、畧一万八千種にして、其三分の二れ、異翅亞目(Heteroptera)に屬し、其餘は、同翅亞目(Homoptera)に屬せり。英國にては、異翅類に屬するもの四百三十種にして、同翅類に屬するもの六百種ありと。

(わ)直翅類の數　此類は少なくとも一万種はあるべし、然れども、此類は熱帶地方に多きに關はらず其地方の採集未だ十分ならざるを以て、其全數を知るは困難なることなり。英國に産するは、僅かに四十種にして、南方歐羅巴には、殆んど五百種を産すと云へり。

◎羽衣蟬と玩具の鳴子

在神戸市中山手通　藤田政勝

此頃當地に於て、興味ある玩弄物を行商する者あることを知れり、始めその之あるを知らざりし際には往還の行樹に羽衣蟬の鳴聲を發するものかと思ひ居たりしに、豈圖らんや、一種の玩弄物即ち蟬聲に擬へる鳴子の音聲ならんとは、乃はち其壹器を求めて、先づ搆造を剖撿せしに、製作は簡易なるも、極めて趣味多きものなる事を明かめたり。人或ひは之を一概に卑下して、蛙の鳴器を應用せしものなりと言はんも、實際は之に反して、手に握るべき棒端に松脂を塗抹し置き其凹まれる粗面を、長き一縷の絲の強く摩擦するが爲めに音は次第に絲を傳へて、末端に裝置せる振子に反響を生じ、玆に更に響音を高め、又空氣を振動して、一種の聲を作爲すること、猶ほ三味線の胴と其絃の如き關係を有するに同然、而して此には振子の唯一方に紙を粘せるの差あるのみ。尤とも傳響絲の長短と、振子の大小、特に粘紙の厚薄如何によりて各其音聲を異にし、或ひは鈍く、或ひは鋭どくも聞へ、又廻轉の緩急によりて自在に高音低聲を發せしむることを得るなり。今之を實物に比較せる時は蟬の腹板は鳴子の外面にして、其内部は裏面に當り、松脂を糊せる小木棒は蟬聲の發音器にして、其絲は筋とも謂ふべく、腹板は反響をうけて聲音と傳發するの處なれば、即ち振子に均しきの理なり。兎も角、此玩具は蟬聲と區別し得ざるまで、巧妙に裝置せられしものたる事を悟れり、若しこれを應用して、啞蟬の採集上に利す

蟬鳴子の圖(縮寫)

ること多かるべし、兒戯の一小器と雖ども、斯學に益するの効や頗ぶる大なりと謂はざるを得ず、讀者のこれを實驗より徵せられんことを望む。

說明　圖中の圓器は竪約一寸二分、徑九分許りの竹製の振子にて、絲を附せし處に紙を糊し、底は空なり。用絲は二縷を合せたる太き綿絲にて、其長さ四寸七八分あり。棒は木片を用ゐ、其徑二三分、長さ四寸位ゐあり。是は小器の寸法なるも、大器はこれに準じし其形量を增せり。

◎昆蟲瑣談

靜岡縣磐田郡　神村直三郎

○モンキアゲハ　吾が名和先生は、前號に於てモンキアゲハテフの分布を調査紹介せられ、併せて該蝶に關する通信をも需められたれば、之を報せんに、余が始めて該蝶を捕獲せしは、昨明治三十四年六月六日の事に係り、現住地即はち靜岡縣磐田郡岩田村字匂坂中に於て、雌を捕へき。其後本年六月一日、同郡同村同字山林に於て、確かに該蝶の飛揚を認しも捕獲し得ず、又八月廿七日に、同縣濱名郡濱松町字元名殘中學校附近に於ても、該蝶の飛翔するに遇ひ、殆んど手中のものたらんとして遂に逸したり。中遠西遠に於て、余の該蝶に接したるは此三回のみ、學友岡田氏の、蒲村神立に於て捕へたりといへるも、濱松を距る壹里內外の地なれば信を措くに足り、且同氏の標品は、嘗て親しく之を見しことあれば、旁々以て我遠江の地に、該蝶を產するは、毫も疑ふべきにあらず。

○コナラハマキムシヤドリバチの羽化　コナラハマキムシは、小楢の葉を數枚綴合して、其の中に自己の糞粒にて繭を營なみ、繭中に蟄して化蛹するものあるが、これに寄生する一種の蜂あるより、其羽化期を試みたるに、本年三月七日に雄一、十日に雄一、十四日に雄二、十八日に雄一、雌二、十九日に雄一、二十二日に雄一、廿四日に雌一、廿七日に雌五、三十一日に雌一、四月三日に雌一、出でき。

○カマキリヤドリバチの羽化　例の益蟲保護の一を實行せんとて、オホカマキリの卵塊を採り置きたるに、其中より多くの寄生蜂羽化し出でたり、即はち三月十七日に雄一、雌二、十八日に雄一、雌一、廿二日に雌三、卅一日に雌三、四月三日に雌一、四日に雌一の割合なりき。

○マツケムシヤドリバチの羽化　本年三月廿六日に、靜岡縣濱名郡和田村並木の松の北側に、麴の如き多くの小繭の塊を爲して附着し居るを認め、仔細に之を撿せしに、其傍らには松毛蟲の斃れて、今尙ほ水分を含めるものあり、因て其繭を採り來り、之が發生を試みしに、四月一日に少數、四月三日に多

數の羽化を遂げぬ。

○四齡蠶の產卵　本年は多くの四齡蠶の繭を獲たれば、これが產卵を試みしに、六月十二日より羽化し始め、同十三日と十四日には多數羽化せしを以て、更に交せしめて生殖を圖りしに、其卵は別に小形といふ程にもあらで、一見普通のものゝ如かりき。而してこれが孵化力の强弱等に至りては、當に來春を以て判明すべし。

◎螟蟲卵蛾買收報告

東京府南足立郡　武者良三

吾が南足立郡には五六年前より、二化螟蟲非常に繁殖し、全收穫の三四割は爲めに蝕害せられ、農家經濟の困難甚だしきに關らず、一般に之を不可救の天災となし、また驅除豫防を施行するもの無かりしを以て、蟲害は益々猖獗を極むるに到り、遂に昨年を以て局部有志者間に驅防の必須を唱道せられ、其結果郡農會よりは、郡内に簡便誘蛾燈を交附して、苗代期より點燈誘殺に勉めしめ、本年亦被害の劇甚地を以て目せらるゝ西北部の淵江村、伊興村、舍人村の三ヶ村に螟卵蛾の買收を實行せり、而して其成蹟を擧ぐれば、淵江村の蛾數は七千八百二頭（壹蛾二毛つゝ、此金壹圓五十六錢）、卵は七千四百三塊（壹塊五厘つゝ、此金三十七圓一錢五厘）、伊興村の蛾數は七千三十四頭（壹蛾三毛つゝ、此金二圓十一錢）卵數は二万二千九十二塊（壹塊五厘つゝ、此金一百十圓四十六錢）、舍人村の蛾數は五万七千六十六頭（一蛾一毛つゝ、此金七圓七拾六錢六厘）、卵數は參萬貳千貳百貳拾塊（壹塊參厘つゝ、此金九十六圓六十六錢）にて、即はち七万一千九百二蛾と、六万一千七百十五塊の多きを採殺せる道理なり、豈に驚く可からずや。然れども斯く多數に、斯く買上價格の他郡縣の價格に比して低廉ならざるに、猶未だ捕蛾採卵を厭ふ者少なからざりきと、亦以て如何に吾が地方の害蟲に對する觀念の厚薄を推知すべきなり。但實行後僅々一兩年に過ぎざるに、早己に本年の第二化期に於ては、殆んど大害を絕てりと云ふも敢て過言に非らざるの好績を顯はせしを以て、初め驅除豫防法の迂遠を冷笑せし者と雖ども、今や口唇を緘默し

て、卵塊摘採の多効に驚歎し、今後は年々之を實施せん事を希望するに至りたれば、將來統計數字に現はるゝ卵塊數は決して斯かる少數に止まらざるべしと信ず。抑も斯かる瑣報は、貴重なる昆蟲世界誌上を瀆すの値ひ無きも、螟卵摘採法の如何に現時の農界に適合せしかを報じ、又之が奏功の著大なる一斑を知らしめんとて、故らに初年に實施せる不完全の成蹟を示せるなり、希くは微衷を知り、兼て驅防の有効を悟り、速かに之を各地に普及せしめんことを。

◎土佐產の蟲報（第六の三）

高知縣土佐郡　武內讓文

○蚜蟲科　（一）ミドリアブラムシ。（二）イチノアブラムシ。（三）ムギノアブラムシ。（四）豆ノアブラムシ。（五）苹樹ノアブラムシ。（六）蔬菜ノアブラムシ。（七）樫ノアブラムシ（樫樹に發生する大形の黑色種）（八）柳ノ大蚜蟲。（九）五倍子。此九種中、（一）は薔薇に多く（二）は禾本科の雜草及び稻に多く苗代田に於て特に加害多し（三）は同じく雜草に多く、早春甚だしく麥類の稚葉を害し（四）は紫雲英及び蠶豆等に加害し（五）は梨葉を害し（六）は十字科の雜草及び大根、蕪菁類に發生すると多く（七）は樫樹に（八）は柳樹に多し。而して唯り（九）は人生の用に供せらる。

○貝殼蟲科　（一）蜜柑ノ貝殼蟲。（二）桑ノ貝殼蟲。（三）樟樹ノ貝殼蟲。（四）桑ノ蠟蟲。以上四種中、（一）は柑橘樹に加害し（二）は桑樹の被害頗ぶる大なり、而して其第一回の蕃殖期は、六月中旬のころなるべく、此時雄蟲多く發生を、第二回は未だ詳ならず（三）は食樹に因みて假りに其名を命ず、樟葉に點々附着して加害する微小種なり（四）は桑樹及び山中の諸木に往々之を見る。此等の中に就て、貝殼分泌後に、完全なる六脚を具ふるものは、獨り（三）あるを見るのみ。而してサンホーゼー貝殼蟲に至りては未だ土佐に於て之を發見せず。

（附言）　全縣下に於ける山野の草木にして、上記二科の害を受けざるものは少なし、然れば其種類の幾百種に上るべきや、得て知るべからざるものあり、之を後日の精査に徴せんと欲す。

○蝨科　（一）衣蝨。（二）頭蝨。（三）毛蝨。（四）牛蝨。（五）犬蝨。（一）は全縣其發生極めて少なし、是れ古來縣人の之を忌むこと最とも甚しきに因る（二）も亦之を産せざるに非ざるも、之を獲んと極めて易からざ（三）は本年辛うして其標本を得たり（四）と（五）とは時に牛及び犬に寄生するとあるも、大に蕃殖せしを聞かず、他日畜類の盛んに蕃殖せん際に非ざれば、十分に調査することと難かるべし。

●有吻類附報　ミンミンゼミを、或地方にてはクルマセビと稱す。其鳴聲の田婦紡車の時のそれに似たるを以なり。ニイニイゼミは之をジイセビと稱し、クマゼミはシヤチシヤチと稱す、皆稱を其鳴聲に取れるものとす。アブラセミはユフセビと稱す、夏日日沒前に多く鳴くを以てなり。ハルセミは松樹に多きの故を以てマツムシとも云ふ。而してハゴロモヨコバヒの類をセヒチヨウと稱する地方あり、これは蟬蝶の義なり。稻作加害の橫蟲類は、皆通じてウンカ、コムシ、コヌカムシと稱し、ツマグロヨコバヒは別にセビウンカとも稱せらる。クハノキジラミは之を桑の白霧又はキリ、蚜蟲類は皆之をアリマキと稱し、五倍子をばフシと稱す。蝨類は總てムシと稱し、毛蝨をば殊にケムジと云ふ。ハリガメムシは之をヒラクサと稱し、其他の椿象類と雖ども多く同稱を有す。但しクロクサガメにはサシムシ、又はクロムシの稱あり。水黽類は皆シホタキと稱し、タガメ、ユリノハナスヒ及びミヅカマキリは之をウチトリムシと呼ぶ。

序に云ふ。昨年來、余が淺劣を暴露して杜撰の蟲報を出すや、各地無面識の人士より、屢次書翰を以て質疑或は垂教に預り啓蒙少なからず、厚誼深く鳴謝する所なり。元來余が踏査の不備なる本年に至りてヒメ　カマキリの一頭を吾川郡に獲、ナキ　イナゴを土佐郡内に見、其他新に蝶種の三四を發見し、ウスバカゲロフ、コナムシ及びチヤタテムシの到處に多きを確認せる等の事實あり、また徵證の據るべきもの無かりし爲め、顯著の種を脫せるも之あり、アケビノキノハガの如き是れなり、去れば或は同種と認めたるものにして、色彩の異なれるも多からん。又ハナセ、リ　テフの幼蟲、蛹及び翅の裏面には差異なきも、其後翅表面の互列紋を現はさゞるもの多く、又少しく之を現はすものも之あり（是は同一時に稻葉を以て飼育したるものより出づ）ダイミヤウ　セ、リの後翅表面の白紋は、嘗て疑問の儘揭出せしに、或は同種にして彩色頗ぶる濃麗の觀あるものさへありき。故にモンキ　アケバテフの雌蟲に頗ぶる大形なるものある、高岡郡南方の江上に、海棲半翅類の生息する疑ありしも怪しむに足らず（土人の談に據る）特に土佐の地たる、西南幡多郡の海島には、檳榔樹、榕樹等を生ずるあり、北方土豫の國境山中に入れば夏猶は單衣を着るに堪へざる處ある等、周ねく踏查すれば、如何なる種類を發見するやも知るべからず先識の士幸ひに示針せられよ。余は將來準備の終了を俟ちて、土佐產の蟲類とあらば、科屬種名の明不明に拘らず、出來得る限り多類を採集して、之を名和昆蟲研究所に送り、以て各地研究者と共に、斯學研究の資料となさんと欲す。

◎大分縣害蟲驅防の狀況報告

在大分縣廳　瓢　護　生

本年吾が大分縣下に於ける苗代以來の害蟲の狀況を聞くに、苗代時期に於ては害蟲も蔓延の兆候ありし

より、其筋にても非常に憂慮し、縣令及び訓令を發布し、一方には絶えず監督員を派出して嚴重の督勵を加へし結果、其成蹟良好なりしが、中には令規の精勵を誤まり、或は又之を無視せしもありて、過料に處せられし者は、縣下に殆んど百名内外もあらんこと。夫れ如此有樣なりしを以て、本田移植後と雖も漸次蔓延の虞れなきにあらず、故に縣郡町村吏員等奮勵して驅除豫防法に勉むる所ありしも、これのみにては到底十分の成蹟を擧げ難きを認め、去八月中旬より特に十二名の害蟲驅除豫防委員を置き、之を各郡に派出して刈取期に至るまでは、絶えず巡視をなさしむる事となしぬ。今其分擔地及び人名を擧ぐれば、大分郡には△小野覺太郎、東國東郡には國廣進、北海部郡には平川九藏、直入郡には山口猛、玖珠郡には今村貞吉、大野郡には△三浦三平、下毛郡には山脇良平、宇佐郡には生山熊太郎、西國東郡には植山熊雄、南海部郡には廣瀨龜五郎、速見郡には△佐藤賢の諸氏にて日田郡のみは未定とす、其結果の如きは重ねて之を報するの日あらん。（人名の右肩に△印を附したるは名和昆蟲研究所主催の全國害蟲驅除講習會を修業せし者に係る）

編者云ふ。本件に關しては、別に大分縣大野郡三浦三平氏よりも報告ありしかど、格別相違の點無きやうに思はれたれば、そを省略に附しつ。

◎昆蟲標本展覽會概況報告

岐阜縣養老郡　養老昆蟲學會

去十月十二日より同十四日に至る三日間、縣下安八郡大垣町に東海農區實業大會の開催を好機會として吾が養老郡昆蟲學會は養老公園内に昆蟲標本の展覽會を開きたり。陣列場は公園内千歲樓階下を以て之に充て、各町村より出品せし害蟲、益蟲、分類、教育用、裝飾用の各種標本を順次配列せしに、其總數百八十四個にして、其蟲數は七千二百四十頭を收め、中には自然陶汰、雌雄陶汰標本等もあり、又特に害蟲標本には變態經過の有樣、被害植物及び寄生蟲等を添加せしものあり、裝飾用標本には害蟲益蟲の區別を明かにせんとて、物体を摸造したるものありき。然るに徒だ陳列して衆庶の觀覽に供するのみにては、其利益極めて多からざるを以て、特に名和昆蟲研究所長を請じて、逐一之に對する優劣適否の審査を乞ひ且嚴密の批評をも仰げり。而して開會中の縱覽人は無慮千七百十五人にして、一日平均三百四十三人に當り、他府縣より來聚の有力者も少なからざりしが、就中近郷の小學兒童の見學最とも多く郡内有志者の來觀も陸續たりき。故に此短期間に斯學を啓發し、當業者を誘導せしの功實に豫想の外に出

でたり。因に云ふ。本會に出品せしもの丶中、小學校は高田（十五函）、石畑（七）、澤田（一八）、廣幡（五）下多度（五）、池邊（十四）、下笠（八）、船附（二）、笠郷（四）、小畑（五）、日吉（十）、牧田（十）、一之瀬（十）多良（十五）、時（五）等にて外に多藝村役場よりは八函を、小畑、日吉の兩村講習生よりは各五函を出品し、他になほ有志十名より三十七函を出品したり。

◎昆蟲月報（第五信）

第八回全國害蟲驅除講習修業生　埼玉縣　櫻井倚畊

七月　此月に入れば三伏の炎威當に熾んなるべきに、前月に引續きて天候陰濕に失し蟲類の眼に入るもの尠なかりしが、先づ一日にはヂーヂーゼミ始て出で又コジヤノメを獲たり。四日ゴマカミキリ、シヤウ〳〵トンバウ、ウスバキトンバウ（?）を捕ふ。五日の夜チヤタテムシ始めて障子紙を摩擦す。六日ナツアカネ多く見え、苹果のエダカミキリとユフガホベツタウとを獲たり。七日アゲハノテフを捕ふ。八日イチモジセヽリ、ハナセヽリ多く現はる、此夕暮よりカシノケムシの黄蛾出で、喬木（重に松樅の類）の枝梢の邊を飜翔してヒリヒリツキリ〳〵の異聲を發す。九日アヲバハゴロモの幼蟲諸樹の新梢に多生す。此上旬に最とも多かりしは、第二化期の麥蛾にして、アカイトトンバウ、アヲイトトンバウ多く稻田に發生し、其他は、マツノシンクヒムシ、クハノアヲメムシ、サヽキリ、ヤブキリ等なりき。十一日カナカナゼミ始めて啼く、テフトンバウ、オホコフキコガネを捕ふ。十二日ジヤノメテフ出で、クビキリバツタ盛んに鳴く。十三日チツチゼミ啼く、ウチワトンバウを獲たり。十五日ハンノキケムシテフ俄然多く羽化し盛んに生殖を行ふ、此夕よりアイムシ亦夥だしく發生す。十九日オホジヤノメテフ、オホハヤバ（?）ヒメゴマダラテフ、シホヤアブ、オホイシアブ、アシグロムシヒキを捕ふ。二十日アブラゼミ鳴聲を發す。此中旬に多かりしはウスバキトンバウ（?）モノサシトンバウ、ジヤノメテフ、ヂイヂイセミ等にして、時々カラスバアゲハ、クロアゲハ、ジヤカウアゲハをも見、サイカチムシ、クハガタムシ等亦多かりし。二十一日マメコガネを獲。二十三日マヒマヒカブリ、アヲオサムシ、アカボシシデムシを捕ふ。二十四日始めてミスヂテフを目擊す。二十五日ウジヤドリバチ、コウカバチを捕ひ、夕刻イボタノテフを追ふ。二十六日ノコギリカミキリを獲、夜に入り熊谷町にてウスバカミキリ（?）を捕ふ。二十七日セスヂスヾメを捕ひ、二化生のイネコアヲムシ蛾を獲、又同幼蟲に寄生するシロコマユ蜂及びムギダハラ蜂の繭を多く採集す。二十八日ミンミンゼミとキリ〳〵スの啼聲を聽く。二十九日ナラノケム

シテフ、クハカミキリ、ハラビロトンバウ等を捕ふ。此下旬間に多かりしは、ジヤノメテフ、ヤマキテフ、ハナセセリ、一文字セセリ、ヂイヂイゼミ、アブラセミ、アヲハダトンバウ、ダイコンノハムシ、ナスノハムシ、ハンノキハムシ、ウリバヘ、マメコガネ、金龜子、カナブン〳〵等なりしが、稻のコアヲムシ(二回目)幼蟲及び螟蟲各所に發生し加害甚だしかりき。又カツヲムシ類の發生多く、氣候陰濕のため、魚店並びに蠶繭貯藏家の如きは、被害の多きを知り乍ら乾燥せしむること能はず、大に困却せりと此期間また李及び葡萄、里芋等の烏蠋も多く、水棲類にはマツモムシ、カハグモの各種、ミヅスマシを始め、ガムシ、コオヒムシの幼蟲等も多かりしが、アブの各種、ヒラタバイの幼蟲をも屢次目擊しき。

附記　第二信に楢の新梢間に生じたる肉塊狀圓形の蟲癭とせしは、佐々木博士の日本樹木害蟲篇の槲の團子、沒食子蜂の事にて、六月八日沒食子蜂一塊より、十數頭の發生ありき。

◎兵庫縣三原郡昆蟲展覽會況

兵庫縣淡路國三原郡農友會

第一回三原郡昆蟲展覽會は、我が私立農友會の主催を以て去る九月二十一日より五日間、三原郡衙の樓上に於て開設せしに、出品蟲數は一万二千に餘り、種類また九百種の上に出で、其他害蟲驅除、益蟲保護に關する器械藥品等數百點に達せり。會場正門には綠門を設け國旗を交叉し、猶ほ名和昆蟲研究所より借入たる蟲類を描ける小旗九十旒を吊し、其下には農民と害蟲の米俵引合の造物、害益蟲等綱引等の造物をなし、會場の昇降口には三化螟蟲及び二化螟蟲等の大旗を交叉し、且つ金龜子を以て昆蟲展覽會と描ける大額を掲げ、又出入の玄關にも蝶旗を交叉し、會場の樓上には北面に土石芝草等を以て、山を築き、松杉等を栽植し、之れにキリギリス、コホロギ、マツムシ、スヾムシ等美聲を發する蟲類を放ち其下には底淺き大なる箱を備へて四方に草を植ゑたる池を造り、之に水產昆蟲を飼育し、第一部を害益蟲標本、第二部を分類標本、第三部を敎育用と裝飾用の標本とし、第四部は養蠶上の標本を陳列し、其南面には害蟲驅除、益蟲保護に關する器械藥品及び標本製作用器具と其藥品とを陳列し、猶ほ會場の四壁には、各種の害益蟲圖譜を隈なく貼付し、天井の如きも數百の蝶蛾を描ける圖を吊し、以て諸人に注意を與へたり。斯くて豫期の九月廿一日を迎ふるや、午前七時を以て開會式を擧げ、次に一般公衆の縱覽を許したり。開會中は兎角天候不良にして、遠來の參觀者少なかりしと雖ども、猶ほ四千三百名を算し、特に名和昆蟲研究所の全國害蟲驅除講習同窓生としては、香川縣より勝屋禎三郎氏、縣下加西郡よ

り〻三枝角太郎氏、津名郡よりは廣田孫爹氏の來觀ありて面目を施したるが、同廿五日午後四時を以て無事閉會式を擧げたり。開會中は總裁淸水永三氏、會長賀集新九郎氏を始め郡內の有力者の盡力多く又出品物の整理には專ばら名和昆蟲研究所の同窓生飯田儀太郎、中野壽郞、宮下京平の三氏之に當りき。今參觀人總躰を大別すれば郡內は三千九百三十四名にて內小學生徒は二千六百五十八名、郡外は百五十四名にて內小學生徒は百十五名を算せり。尙ほ脫漏の要項は追て報告すべし。

◎昆蟲に關する葉書通信　（第二十七報）

（一四八）桑の心蟲の蟄居（岐阜縣武儀郡出張先、松村菊太郎）　桑の心蟲驅防監督のため、同僚松尾氏と同伴ろ上、昨日を以て當郡神淵を調査せしに、幼蟲の十中の八は、旣に葉を去りて枝に移り、芽元又は枝の凹陷部に纒絲して蟄伏せるを實見し、之が驅除は九月末か遲くも十月十日を越ゆべからざる事と思考せり。（十月廿九日附）

（一四九）岐阜蝶の分布地に就て（靜岡縣靜岡市、岡田忠男）　昆蟲世界第六十一號學說欄內には『岐阜蝶の分布を記す』てふ有益の地理的分布調査記事ありしが、中に本縣產のものを省かれたれば、左に實驗の二則を報ず、次に同號口繪の八町蜻蛉も確かに縣下に發生せる種にて、余は之を採集せし事あれば併せて之を報道す。因みに云ふ、去頃伊豆國に出張してヨコバヒの新種十餘を獲たり。

○ギフ　テフ　明治三十一年四月十五日に、之を遠江國濱名郡知波田村大知波に於て捕獲せり、但し雄なりき。
○ギフ　テフの蛹　明治廿四年六月一日、同國引佐郡中川村中川に於て、出殼一箇を採れり。

（一五〇）昆蟲世界滿五年の祝歌（埼玉縣北埼玉郡、櫻井倚睇）　雜誌昆蟲世界の健全に發達して、玆に滿五年を迎ふるに際し、小生も相應の慶意を表して、多年本誌より與へられたる斯學上の智識に酬へんことを欲せしも、不學菲才の徒、固より文字の力を以て吾が意想を表示すべくもあらざれば、左に短歌二首を寄せて、聊さか祝賀の微衷を致さんとす。（九月十日）

○昆蟲世界の滿五年を祝ひて　世にしろきこの蟲ぶみは國の富つくらむわざのたつきなりけり。
○同じこゝろを　山は裂け海はあせてもこのふみは千卷八千まき積みかさへなむ。

（一五一）岐阜蝶の產地に就て（岐阜縣飛驒國大野郡、千原治作）　岐阜蝶は寒地に多產すとの經驗に漏れず、當飛驒國大野郡位山（宮村分）に於て、本年五月廿七日に一頭を捕ひ尙ほ數頭を目擊したれば、報

じて分布調査上の資料とす。

(一五二)米澤式驅蟲用喞筒(愛知縣名古屋市、愛林翁)　今回創製せる米澤式スプレ喞筒は、背上に負荷し乍ら、灌注し得るやう製作せるものあるが、全部鐵製にて水量は細大自由に奔放し得べし、但し其考案の稍完成に殆きに引換へ、價格の參拾五圓なるは、普通農家の需用に如何にや、畢竟、縣郡農會若くは郷村團躰にて購入し、之を共同驅除用とする時は、最とも利便のものと思はる。

◎僞瓢蟲の驅除法質問　(甲)　石川縣石川郡鶴來町　稻葉久左衛門

本年七月十三日昆蟲採集の途すがら、石川郡河内村八幡に過ぎりしに、道傍に種培の馬鈴薯は葉莖黃萎して、將に枯死せんばかりの慘狀を呈し、僞瓢蟲の盛んに之を蝕害するを見たれば、試ろみに其蟲名を知らんとて、村民に質せしも之を知る者あるなし、因て余が記憶の要節のみを說示せしに、一同喜悅して、果は驅除の方法まで質問せられぬ。於是余は迷惑の餘石油乳劑の灌注を說きしに、其効なかりしとて次回には別法を請ふて止まぬ、余審らかに其配劑の厚薄を示して、復た之を實行せしめたるも、昔て前回と異ならずとの報を得、又石灰の撒布を以てせしも、また効なしと云ひき。果して然らば此二劑は驅除の用をなさゞるものか、或ひは他に方法あるにや、該蟲の發生經過と併せ示敎を蒙ふりたし。

◎瓜の害蟲驅除法質問　(乙)　宮城縣志田郡三本木町　加藤捨吉

從來吾が地方は畑作に重きを置き、特に瓜を以て一の特產物となせしに、近頃螻蛄、蟻、ヲサデムシの加害甚はだしく、爲めに著るしく減收を見る。此等を驅除するの便法は之なきものか、垂敎あれ。

右二問の答　名和昆蟲研究所内　永澤小兵衛

(甲)テンタウムシダマシの發生經過等に就ては、既に雜誌『昆蟲世界』第廿四號及び第五拾八號をはじめ時々雜報欄問答欄に於ても記載したれば、茲に詳答せざる可し。而して此蟲には兩種ありて、溫暖地方

に棲息するものと、寒冷地域に發育するものとに分る。即はち前者はEpilachna 28-maculata, Motsch. にて、邦稱をテンタウムシダマシ（偽瓢蟲）と云ひ、後者はEpilachna 28-punctata, Fab. にて之をオホテンタウムシダマシ（大形偽瓢蟲）と云ふ。一は東海道より、京畿地方の如き暖地に分布し、他は東北地方より、北海道に最とも多かり、故に石川縣下のものは第二の種類かと推測せらる。然は云へ、其加害の狀況に至りては、兩種ともに軒輊なく、共に菊科、瓜科等の植物を貪蝕す。其驅防方法に至りては、分ちて四種となす事を得べし、即はち第一を豫防驅除とし、第二を器械驅除とし、第三を藥劑驅除とし、第四を乳劑驅除とす。就中、普通に行はるゝは第四に在るが如しと雖ども、合劑の方法を誤まり、且つ稀釋の度其宜しきを得ざらんか、之を施こすも、寸分の奏効無きことは貴問に自證せるが如し、第三は專はら米國等に行はるゝものにて、毒汁毒粉を撒布して死滅せしむるの方法なるも、現時の本邦には恰當と謂ふこと能はざる事情あり、故に結局、第一と第二を嚴行せざる可からず。而して第二は三四月頃その越年せる成蟲の出づるを見る毎に捕獲し、蕃殖の後ちは朝露の間に、鉄葉、桐油紙、布片等にて作くれる捕獲器、咽喉附掬網等に墜落せしむるか、若くは兒女の手を藉りて油水を盛れる壜瓶の類に投入するにあり、此方法は極めて迂濶なるが如きも、實際は非常に有効にて、嘗て之を茄子畑及び馬鈴薯畑等に實施して、全たく絶滅せしめたる事さら之あり、併し乍ら、日中に之を行へば、徒らに煩勞に終らんのみ。第一は其名の如く、豫じめ防禦を講ずる事にて、先づ偽瓢蟲の嗜好せる蔬菜の連作を廢し、冬季に其潛伏地を開發して、成蟲の蟄居するものを捕殺し、葉裏に産下の卵塊若くは孵化の幼蟲をば、容赦なく速かに潰殺を行ふ等にあり。然れども唯一人のみ之を行ふとも、四周に發生地ある時は、寧ろ少効多勞の嘆あらん、深く共同驅除に勉めざる可らず。之を要するに、乳劑は確かに効能あるも、其調合の巧拙によりて厚薄あれば、通じて利益ありと云ふこと能はざるは勿論、一たび該蟲大發生の曉には到底石灰劑の能く驅防し得べきものにあらず。特に灌注劑と撒布劑とは、葉裏の卵仔を驅殺するに不便なれば、寧ろ早朝婦女兒童をして拾收せしめ、兼て接隣地と共同的器械驅除を行ふを以て利ありとす。

（乙）質問の要領を得ざるを以て、玆に明答し難し。去れど蟻害には先づ其巣窟を破滅し、次に食物誘殺法を行ない、又其同棲の蚜蟲驅除の目的を以て、稀薄なる石油乳劑等を灌注せば、著るしき効驗あらん螻蛄に對する驅防法は、本法第五拾九號雜錄欄内の試驗説を應用し、其他に至りては、前揭の（甲）に應答の條々を參照して適宜處分せば可ならん。ヲサデムシは應答の限りにあらさる可し。

●昆蟲月令　此月に配すべき昆蟲記事は、概むね下ょ列擧するが如し。

○氣候　舊暦の十月は即はち此月に當ゐ、月初には、晝夜の差二時半間に止まるも、月末に到れば、増して四時間以上さなり、始めて燈火親しむべしの趣あり●月の三日は聖上の誕生ましませし國民奉祝の吉辰にて、八日は立秋を報じ、廿三日は小雪にて、新嘗祭の祭祀あり●内地の平均溫度は、五度二乃至十三度八の間にて、東洋海岸は所謂日本晴の日多かるべく、之に反して日本海方面は、益々冷雨寒風に鎖さるべし●東京は平均十度一、京都は九度六に降り、地方によりては霜雪の降下敢て珍しからざるも、中部以南はなほ稻田の收穫に着手せざるも多からん●濕度は概して少なく、前月以來、全たく黴菌の發生を絶てるを見ん。

○蟲類　稻苅後に秋耕を行ふは、蟲害を薄らぐの効果あれば、成るべく之を行ふべし●紫雲英及び麥苗には、多くの横這蟲を潜伏せしむれば、其生長を見計ひ、時々捕掬をなすべし●桑樹は勿論果樹の幹枝處々に、藁稈を纏ひ置く時は、種々の毛蟲及び尺蠖類集まり來りて、其中にて越年するものなれば、明年一二月頃に至り、徐かに其藁稈を取去りて、之を炎火に投すべし●貝殼蟲を始め蚜蟲類は、其生殖作用を終はるが故に、極寒に到らざる間に早く驅防すべし、洗滌法、擦殺法何れにても宜しきに從ふへし●田畝の間にも將た向陽の堤防上にも、稻螽のなほ盛んに棲息するものなれば、成るべく多く捕獲して、食用又は肥料等に供するの外、家禽の飼料に貯ふるを利得とす●稻田の螟害に罹れる白穗は、遲くも前月中に拔除るの運びをなさゞる可からざるも、未だ苅取前の地に之を見ば、尚は盡ごさく之を切取るに利あり●三化生螟蟲は言ふまでも無く、二化生のものさ雖ども、加害甚たしき時には、苅株を發掘して之を堆肥の原料又は燒土肥に製すべし、又被害地の稻さ藁さは、成るべく無害地のものさ各別に堆置くべし●蔬園のサルハムシ等は、其未だ蟄伏せざる以前に驅殺を行ふべし●羽蟻の生殖作用はなほ止まず、綿蟲の飛行するもの全たく絶つに到らざらん、注意を要す●蜂類の蕃殖を行ふは、此前後にあれば、濫りに之を捕殺せざれ●晩種の蜻蛉數種さ弄花蝶は、山地に多かるべし●豌豆畑又は庭園の凌寒の籾糠中には、地蠶その他の害蟲多く潜伏するものならん●果樹の落葉後に、枝條の選定さ洗滌驅除法等を行へば、明年の被害少なからん●

（イナゴの圖）

其他は前月記載の項を參照して、適宜實行すべし。

○舊説　立冬と小雪の間に雨ふれば、百蟲これを飲で蟄すとなせり◉此月よりは、昆蟲に關する記事古書に殆んど見る所なし。

○雜事　蚊屬の遺類若くは蠅の飛遊するものあらば、盡ごとく捕殺し、又床下の洒掃に勤め、塵芥を淨むべし、明春發生の衛生害蟲少なからん◉煤掃を行ふ際には、油蟲、竈馬等を注意して捕殺すべし◉穀倉と養蠶室また此月より掃除に注意し置かば、其被害最とも少なからん◉冬季の昆蟲採集を、此月より始むることを忘却せざれ。

◉**第十四回全國害蟲驅除講習會**　同會の摸樣は、粗ぼ前號に報道し置ける如くなるが、開講式は本月廿五日午前九時なれば、入會員は遲くも其前日までに來所の上、万端の手續を終ふべしとなり又今回は本年最終の講習たるのみならず、明年も所務上の都合にて、春後に到らざれば、到底第十五回のものを開催し難き事情あり、旁々成るべく入會者の便を圖り、其申込を本月廿二日まで猶豫し、明春實施の驅防事業に差支へ無からしむる事となせり。

◉**農林二大會の昆蟲問題**　去月十二日より三日間、岐阜縣安八郡大垣町に開會せる、東海農區實業大會の問題中、昆蟲に關するは山梨縣農會の提出に係る『名和昆蟲研究所へ、國庫補助の遂行を促すの件』にて異議なく原案に可決し、又同月十七日より、愛知縣會議事堂に開會の大日山林會第十五回總會の節は、林學士今川唯市氏の『杉毛蟲の話』（後號の講話欄に掲載のもの）あり、なほ外に山林旅行の際にも、多少の説明ありきと云ふ。

◉**特例銀杯下賜**　去月二十三日の事、內閣賞勳局より、特例銀杯一個を下賜せられし篤志者あり農作害蟲驅除に關係あれば、左に其賞詞を收録す。

福岡縣筑後國八女郡二川村　益田素平

資性實直、夙ニ心ヲ農事ニ注キ、殊ニ螟蟲驅除及豫防法ヲ研究シ大ニ得ル所アリ、當路者ノ間ニ奔走シテ、害蟲試驗所又ハ町村聯合會ノ設立ニ努メ、稻蟲實驗錄ヲ著ハシテ衆ニ頒チ、或ハ各地ヲ跋渉シ、或ハ遠邇ノ招聘ニ應シ、講演ニ記述ニ開導誘掖到ラザルナク、一意盡瘁玆ニ四十年、裨益ヲ農家ニ與フルコト尠ナカラズ、其他、力ヲ肥料ノ改良、產業ノ振興、道路ノ開鑿、河川ノ改修ニ竭ス等洵ニ奇特トス、依テ爲其賞銀杯一個下賜候事。

◉**加納子の昆蟲標本觀覽**　前項記載の東海農區實業大會へ臨席せる、全國農事會幹事子爵加納久宜氏は、去月十三日午後、大雨を衝きて特に岐阜市に過ぎられ、當昆蟲研究所長名和靖氏の案内も

て、標本陳列舘及び昆蟲飼育所等を隈なく細覽し、夜に入り東歸の途に上られしが、有繁に鹿兒島縣の令尹たりし時、全國に率先して、警察官を農作害蟲驅除の監督に活用せし程の人なればにや、長時間有益の談話あり、特に農政上斯業を奬勵するの要ありとて、大農小作間の現情にも説及ぼされしが、本誌前號の論說の旨意には、全然同意を表せられにき。

◉岡山縣英田郡の螟卵摘採　岡山縣英田郡農會に於ては、夙に螟蟲摘採の利を信じ、各町村農會を奬勵して鋭意これに從事せしめたるも、其成績に至りては未だ之を知るに由なかりしを以て、九月廿四日同縣技手森近運平氏に監督を依頼し、同郡係り郡書記及び郡農會巡廻敎師其他町村農會關係員一同立會の上、摘採物に就き細密の檢査を施こしたるに、左に表出の如き意外の好成績を得たりき、と同地よりの報道に見ゆ。

村農會名	採卵數	棄却數	合格數
豐田	三一、四〇〇	—	三一、四〇〇
檜原	六七、〇二三	—	六七、〇二三
江見	五四、二〇〇	—	五四、二〇〇
土居	六一、八三〇	八、〇〇〇	五三、八三〇
福本	八、〇〇〇	一、二五〇	六、七五〇
巨勢	三六、一〇〇	一、一〇〇	三五、〇〇〇
粟廣	一八、六〇〇	—	一八、六〇〇
粟井	九六、三二一	—	九六、三二一
大野	二八、二七七	—	二八、二七七
吉野	四四、四四四	—	四四、四四四
大吉	一一七、〇六六	—	一一七、〇六六
讃	六七、〇八四	—	六七、〇八四
大原	七、四〇九	七、四〇九	—
東粟倉	六、〇三三	—	六、〇三三
福山村 香山佐藏	四一〇	四一〇	—
河會村 丸本幸作 小林宗吉	四〇〇	—	四〇〇
合計	六四四、五九七	一八、一六九	六二六、四二八

◉佐々木氏の來所　博士佐々本忠次郎氏は、桑樹萎縮病調査として、飛驒國へ出張中なりしが、本月十二日に來所の上、當昆蟲研究所の昆蟲標本陳列舘を一覽せられぬ。

◉福岡縣の蟲塚　曩に當昆蟲研究所より、福岡縣廳に對して、蟲塚の有無を照會せしに、去月廿一日附を以て、該碑は同縣下粕屋郡箱崎町潮除堤防内に現存の旨確答あり、なほそれに添へて碑文をも示されたれば、注油驅除の一節のみを左に轉載す。因に云ふ、未だ京都府廳と長野縣廳よりの回報に接

せざる爲め、保存義捐金を分配すること能はざるは、如何よも遺憾なれど、其後重ねて照會の手續を盡し置きたれば、軈て速答を得る事と信せらる。又第六回報告中の岩本氏は兵庫縣に非ずして、千葉縣なれば正誤す。

法華經一字一石書寫　　玄照居士　妙照善尼

明和三丙戌年七月十二日　　王丸彥四郎妻

居士。姓王丸。字彥四郎。其先曰王丸石見守。世仕大內氏。(文中略)享保五庚子年。邦內大旱。蝨賊害田。大半作烏有。然而不知所爲之。民人憂懼。居士適丁七月七日。洗濯油器於前田。其翌旦至則蝗蟲盡死。是以。其每私田。灌鯨油以試之。悉有驗。故居士之田耳大稔云。其年官貢。大略以粟納之。蓋居士灌油之方出于此。享年八十有九而病卒。實寶曆六丙子年九月十七日也。云々

◉松村松年氏の歸國　獨逸國に留學の命をうけし松村松年氏は、本月の初めに神戸港に上陸し五日の夜半岐阜市を通過して東上せり。是より斯學界に、時ならぬ花を咲かす事あるべし。

◉冬季の昆蟲採集に勉めよ　冬季百蟲蟄居の期間よ、精密の採集を行ふの利は、最早世間に知渡りたる事實なるが、今や斯學思想の普及よつれ、其蟲種其分布の調査を加ふるの端緒を啓かざる可ければ、同志の本月より明年二月に掛け、鋭意採集に努力あらんことを望む、之が爲めに意外の發見を現實にすべく、又古來の迷信を打破するは、これに勝れる方法あるまじと信ず。其例證にもと、本年二月開會の岐阜縣冬季昆蟲展覽會よ出品せる、有吻目の採集數を次に表出す。(表中△印とあるは各十頭以上のものに限る)

種名	岐阜市	稲葉郡	羽島郡	海津郡	養老郡	不破郡	安八郡	揖斐郡	本巣郡	山縣郡	武儀郡	郡上郡	加茂郡	可兒郡	土岐郡	惠那郡	大野郡	益田郡	吉城郡
オホツマグロヨコバヒ	｜	｜	｜	六	一	二	｜	｜	｜	二	△	△	△	△	六	｜	△	二	｜
ツマグロヨコバヒ	二	｜	一	五	｜	二	｜	｜	｜	｜	△	｜	｜	一	｜	｜	｜	｜	｜
ヨコバヒムシ	△	△	△	△	｜	｜	｜	二	八	二	△	｜	｜	一	｜	｜	△	一	｜
アチパハゴロモ	｜	｜	｜	六	｜	｜	｜	｜	｜	｜	一	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
ミヅカマキリ	｜	三	△	九	｜	二	五	｜	｜	｜	一	｜	｜	｜	｜	｜	一	｜	｜

コミヅカマキリ	一	二	九	二	｜	四	一	｜	｜	｜	三	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
カヘルバサミ	一	七	△	五	｜	｜	｜	｜	｜	二	二	｜	｜	十	｜	｜	二	｜	｜
ユリハナスヒ	三	二	△	八	｜	二	二	｜	｜	二	三	｜	｜	一	一	｜	｜	｜	｜
コオヒムシ	五	△	△	△	｜	二	｜	｜	｜	｜	｜	｜	△	｜	四	｜	｜	｜	｜
マツモムシ	｜	五	△	三	｜	四	｜	｜	｜	二	二	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
アシナガサシガメムシ	△	｜	一	｜	｜	｜	｜	｜	｜	一	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
トゲサシガメムシ	△	｜	一	一	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
トビイロサシガメムシ	△	△	△	△	二	二	二	二	二	二	△	｜	｜	一	二	｜	｜	｜	｜
ヤニサシガメムシ	△	△	△	△	二	二	四	九	△	一	△	一	｜	｜	四	｜	△	｜	｜
オホサシガメムシ	｜	｜	｜	六	一	一	｜	｜	｜	｜	△	△	｜	｜	六	｜	△	｜	｜
ハラナガサシガメムシ	二	二	三	十	｜	二	｜	｜	｜	｜	二	｜	一	｜	｜	｜	二	｜	｜
クロサシガメムシ	△	△	△	△	｜	二	三	二	△	｜	四	｜	｜	｜	四	｜	｜	｜	｜
アカジマサシガメ	△	｜	七	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	一	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
ツツジグンバイムシ	△	｜	｜	三	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	一	｜	｜	｜	｜	｜	｜
クヌギグンバイムシ	△	｜	△	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
ミミヅク	｜	一	｜	｜	｜	｜	二	｜	五	｜	一	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
ミミヅクモドキ	△	｜	八	｜	｜	｜	｜	｜	二	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
チヤバ子アオガメムシ	△	△	｜	｜	二	一	｜	｜	二	｜	一	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
リヅラガメムシ	二	三	△	△	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
アカスヂアナガメムシ	△	△	△	△	二	一	五	｜	二	二	七	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
ホホヅキガメムシ	三	△	△	△	｜	四	｜	｜	｜	一	三	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
スナガメムシ	△	｜	｜	｜	｜	八	二	二	△	二	△	｜	｜	｜	△	｜	｜	｜	｜
ハリガメムシ	△	△	△	△	｜	三	｜	｜	一	二	二	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
アヅキガメムシ	△	四	五	△	二	｜	｜	二	二	｜	｜	一	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
トビイロガメムシ	△	九	｜	二	｜	二	｜	｜	｜	一	一	｜	｜	一	一	｜	｜	一	｜

ササゲガメムシ	△	七	△	△	｜	一	三	｜	一	一	三	｜	｜	｜	｜	｜	五	｜	｜
オホクモガメムシ	一	一	四	｜	一	二	｜	一	一	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
ゴマガメムシ	△	△	二	｜	二	二	｜	六	五	一	三	二	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
コクモガメムシ	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	二	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
イ子ガメムシ	△	△	△	十	｜	｜	一	｜	｜	｜	二	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
アチクサガメムシ	△	△	△	△	｜	八	二	｜	六	二	△	｜	一	｜	｜	｜	｜	｜	｜
キンカメムシ	｜	二	四	七	｜	一	一	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
アハガメムシ	△	三	｜	△	一	二	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
ムギガメムシ	△	△	△	△	｜	一	二	｜	｜	｜	五	｜	｜	｜	｜	｜	｜	二	｜
クモガメムシ	三	｜	｜	｜	｜	｜	｜	四	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
キモンツノガメムシ	三	｜	｜	｜	｜	一	｜	｜	一	｜	六	｜	｜	｜	一	｜	一	｜	｜
クヌギガメムシ	△	△	△	｜	｜	四	五	｜	△	｜	△	｜	｜	｜	｜	二	｜	｜	｜
ヒゲブトガメムシ	三	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	三	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
アリモドキガメムシ	△	△	△	二	｜	｜	｜	｜	｜	｜	一	｜	｜	｜	二	｜	｜	｜	｜
カボチヤガメムシ	一	五	△	三	｜	二	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
アカヘリガメムシ	二	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜

◉船中の害蟲と帝國の恥辱

海外留學中、不幸にして二豎に襲はれ、今秋歸國の上、駿灣絶勝の地に靜養を事とせる、所友田中節三郎氏の近信には、害蟲のために我が帝國の威信にも關する緊要の事項あれば、これを左よ詳報することゝせり。（本號の學說欄參照）

此度歸朝の際の乘船は、我〇〇〇會社の歐洲航海船に有之候處、船中に油蟲（蜚蠊）の加害劇甚なりしには驚入候。從來度々外國船に乘込候も、油蟲の客室に徘徊して、船客の荷物を汚穢若くは損傷せしめたる事を知り申さず、蓋し此害蟲の發生を容さゞる樣注意を怠らざる次第にて、毎度清潔を感じ申候ひしに、我滊船に甚だしく蕃殖せし事は今回始めて之を知り申候。此蟲に就ては、自分は痛く迷惑を感ぜしより、乘船の外人に對して、向後とも深く省慮の必要あらんかと思居候。故に雜誌「昆蟲世界」に於て、其經過、驅除法を十分に世間に吹聽相成度、併せて〇〇〇會社にも適當の注意を與ふるの必要を信じ居申候。

そも此船中の油蟲は、本邦に於て通常厨房其他不潔の家屋に棲息する種と同じきや、又外國種なりやを詳にせずとは申し乍ら、何れ

Periplaneta americana; P. orienntalis; Ectobia (phyllodromia) germanica; Periplaneta australasiae. 等の類に之ある可きか。唯遺憾なる事には、之を標本として採集するを忘れ申候へども、恐くは本邦種にあらずやと存居申候。

其加害の一斑を申せば、船室にありては、食物類は勿論、水鉢、便器等より、臥床、腰掛、箪笥に入り、其小なる者に至りては、革鞄乃錠前の合目より其中にも入込み、書籍の表裝を嚙り、諸器物をば其排泄物を以て汚瀆し、就中、衣類を穢し候のみか、果物を喰みては脱皮をなし、又靴墨の附着せる靴革を蝕害して何もかも毀損汚穢せしめ、偶には床上に攀ぢて人躰に觸るゝ事すら有之候。外國にても、船の害蟲として之を怖れ、或は二硫化炭素等にてその殺滅の方法を講じ居候が、其邊は十分御取調べの上に御垂敎可然と存候。東洋通ひの外國滊船にては、未だ此蟲の生存を目撃せし事無之、その豫防驅除の行届けるには實に感心の至りに候。之に反して、本邦人の害蟲驅除に冷淡なるは、社會一般の通弊にて、堂々たる滊船内にも此かる珍事有之、彼我相違の甚だしきに驚入り、害蟲に對する觀察の深からざるは、唯り農家のみには無之義と存居候。假し荷物搭載船とは申し乍ら、斯る大會社の船室に、婦女子の最とも忌嫌ふ油蟲の發生蔓延し居ることは、國の威信上より打算して、如何にも殘念至極に御座候。

斯る次第に付、若し雜誌「昆蟲世界」に於て、「其發育より驅防の良法、特に船中に適用すべき事項等を御登載相成る場合には、是非とも〇〇〇會社へも、御示し被下候樣御注意相成度、此義小生に於て切望に堪へず候。右油蟲に就ては、米國農務省發行の報告中に記載有之候樣心附居候へども、病軀を以て專門外の横徑に立入兼候間、可然御取調願上候。云々（十月廿四日附）

◉警察官吏と昆蟲講話　過般主務省より發せる訓令の旨意に基づき、警察官吏に昆蟲の觀念を注入するの必要を感じけん、去月廿一日には福岡縣に於て、縣農事試驗場技師黑木幾太郎氏が、警察吏員其他に益蟲の講話をなせるあり、又島根縣に於ても、同廿七日より、縣農事試驗場技手田中房太郎氏を講師として、毎週三時間、巡査敎習所員に害蟲驅除方法の講話を開始せりと、何れの府縣に於ても速かに斯くあり度ものなり。（本誌第四十七號雜報參看）

◉明年一月以後の昆蟲世界　雜誌『昆蟲世界』は昨年以來非常に改良を加へし結果、漸次愛讀者を增加し、又寄稿記事にも有益のもの多きを加ふるに至りたれば、第六拾五號すなはち明年一月發刊の分よりは、其體裁を改ため、記載事項を斟酌し、且つ都合によりては、追て紙面を擴張して四十八頁となさん計畫なり、而して其收錄の記事題目幷びに改良の程度等に至りては、例により本年終刊の誌上に於て披露すべしと雖ども、之を今日のものに較べて、如何に改善すべきかは、一に讀者の意見によりて定めんとす、豫じめ此意を知られよ。

◉佛國萬國大博覽會の賞狀

先年、當名和昆蟲研究所より、佛國巴里府に開催の萬國大博覽會へ昆蟲標本二十四函を出品せしに、右に對し銀牌賞を擬せられたる趣むきにて、其賞狀は先月末に到達せしが、之を邦譯する時は上の如し。右は頗ぶる鮮麗に印刷せるものにて、周邊には技藝、平和、平等、博愛、自由、勸業、勞力、思考、理想等を代表すべき人物摸様を描寫し置けり。

> 佛蘭西共和國
> 商工郵便電信省
> 千九百年萬國博覽會
> 萬國審査會ハ
> 下ノ賞狀ヲ授與ス
>
> **銀牌**
>
> 名和靖君　岐阜縣
> 第一部三類　昆蟲標本　日本
> 巴里千九百年八月十八日
> 商工郵便電信大臣　ア.ミルラン
> 事務官長　ア.ピカール

◉岩手縣の昆蟲展覽會　岩手縣和賀郡農友會主催となり、本月十八日より廿四日まで七日間、第二回昆蟲展覽會を同縣道平和街道と國道の分岐點なる黑澤尻町に開會する筈なるが出陳種目は(一)諸種の標本(二)器具藥物(三)圖畫(四)書籍(五)參考品なる由、同地よりの書信に見ゆ。

◉岐阜縣昆蟲學會報　第四十七回岐阜縣昆蟲學會例會を、本月一日午後當昆蟲研究所内に開きたるに、雨天をも厭はず參集せしは、岐阜高等女學校長三吉艾氏を始め二十餘名の熱心家なりしが、初席に名和靖氏の博覽會出品標本に關し分布區域蟲種別に於ける詳密の報告、幷びに本會事業上の談話あり、次で小森省作氏は前説を確證する爲めとて、既に調査既濟の各郡送附標本に對する統計其他を報告し、第三席の永澤小兵衛氏は、本邦に於ける昆蟲標本製作法の沿革を述べ、第四席の長野菊次郎氏は、マアラット博士記載の蜚蠊調査書の大要を述べたりしが、終りに小學校用昆蟲標本の程度及び害蟲驅除の奬勵方法を本會に於て調査を加へんとの協議ありて、同五時半に散會を告げたり。當日は專はら實物を演題として談話し、英國より新着の標本製作用器械(ロスチヤイルド氏寄贈)を始め内外產蟲種、昆蟲應用食器等をも一覽に供しき。

◉霜後の殘蟲　追々と理化學の進歩に伴れて、惡事も巧みに成ッて來たが、蝶蛾の翅色の彩色位ゐは朝餐前の御茶で、今では前古時代の化石までも僞造するげな、其上に蟲入り人造琥珀抔をも賣るから油斷が出來ない、實に早や興の覺める咄である。●人造琥珀は譯の無い事で、琥珀の屑片を溶解して

其内ニ好きな蟲を入れるそうな。是は西洋でやる方法であるが、支那にも昔から其方法があッたと見ゑて、好蘇木二觔、紫草一觔、槌碎入鍋、河水煮數滾、熬極濃、細絹濾去、渣入鍋再煮一滾、即將上號白觔入內、化開凝結、任彫物件などゝ書いてある。是は古今祕苑といふ書物にある事柄だが、試驗でもしやうとあらば、まづ眉毛ニ唾液を附けて讀むが宜い。●世の中には氣樂な人物も多いが、自分の家屋が類燒して、五万圓の損失をしながら、それには頓着せぞ、其餘燼の未だ失熱せぬ間に「辛苦して捕ッた蟲の標本と、器械一切を燒失したのが惜しくてたまふんかふ、道具類の再調製を至急に賴む」と言遣した氣樂者に優さる氣樂者はあるまい。是れは新潟縣の岩船郡神納村有明の佐藤と云ふ、全國害蟲驅除講習會を修業した先生である。●信州淺間大明神の神使と云ふ男から、先き頃一種不可思議な手紙を遣こした、其文句を有のまゝに寫すなら「此夏の終りに、九州彥山の同僚の召使ざと云ふ蜻蛉と貝殼蟲とが當山に飛越して、數晝夜踏荒らしての果ては手前勝手の善い事のみを吹聽致し、其上手札の類や披露紙の如きものを、惜氣も無く播撒らして歸ふうとしたかふ、以ての外の事であると申して、至極不屆の所業を責めた處が、歸りには岐阜の蟲捕老人の許に罷り參じて、篤と協量の上神意を和ふぐだけの祈禱を行ふと申すにより、其儘神罰も加へずに下山を赦免したが、今以て何事も無い、神慮をも憚からず重々淺からぬ罪を致してある、其の許は如何樣な協議してあッたが」云々と書いてある。何の事やら、一向凡俗どもには、解し得ない神話では有るまいか。●今年は蟲合戰が多くあッたと見えて、九月十五日には、蜉蝣の一團が不意ニ東京の牛込を襲ふたが、同日佐賀縣佐賀郡の巨勢村には、赤卒の一群が四五町の間に充塞する位ゐ集ッてあッたとの事である。併し憐れなものは斯學思想の幼稚な事で、當時東京の一新聞に、牛込に集ッたのは、カゲロフと云ふ蟲であるが、雄には二尾あッて、雌には三尾を具へてあると書いてあッた。●アブラ ムシ(油蟲)は遽かに價値をあげて、先づマァラット博士の引導ニかゝり、田中君の筆に敲附けられ、其上長野君までをも煩はしたが、是は分布の廣い種類と見ゑて、北海道にも棲ンで居る、そこでアイノ先生は之をチクバップと呼ぶのであるが、して見れば隨分寒地ニも耐へる種類と云はんければ成るまい。●第十四回の全國害蟲驅除講習會の申込は、一府廿一二縣かふ來たので、名和先生は、昆蟲の方言を調べる事が出來るとて、灰白髭を撫で乍ら喜んで居るふしい。何處までも蟲と緣故が深いやうざが、何故蟲の年に生れんであッたらう、惜い事ではあるまいか。(なにがし生)

◉嘗百社の交友博物雅會　本月九日午前九時より、嘗百社交友博物小會を、三重縣三重郡富田

驛の正泉寺に開會せしに、諸國よりの出品意外に多く中には木下長嘯子が蟲歌合の繪入版本（二冊）の如き世に珍貴のものもありしが、これを展觀せる同志の裨益少なからざりきと。同會は同地川北の博物家丹波修二氏の發企に係り、田中芳男氏また特に臨場して、會員と交々品騰を事とするなど、頗ぶる淸逸を極めたる一雅會ありしとの通信ありき。

◉諸國の蟲送り（六）　（其十二）當地方の蟲送りは每年舊曆六月七日の早朝に、區內の老人ども（但し男子のみ）集りて一團をなし、葬禮に用ゐる鐘太鼓を打叩きつゝ田圃を巡廻するなり。此事をば土地の者は蟲供養と稱し今は老人の爲すものとなせど、古へは然らざりしとぞ。又此儀の濟むや、郡內安食町酒直天臺宗多寶院よりは、區內の各戶に竪五寸橫一寸許りの紙片へ咒咀樣の數字を印せる符札を頒布する例なるが、其起源に至りては同寺も絕えて之を知らず、古來この符札を蟲害地に立置けば自づから其害を免がるとの說を信じて、今になほ古例を襲ふありと云へり。（右、千葉縣印旛郡安食町、後藤新左久氏報）◉（其十三）兼ても通報せし如く、兵庫縣須磨地方に於ては、每年蟲送りのためとて、村長以下農民は夜間に松明を手にして、隈なく村內を巡行し、終りに或山に到りて玆に蟲を送りやるの式を行ふ事なるが、其時に呼步くを聞けば『實盛御上洛、稻蟲御供じや〱』と云ふなり。（右、在神戶市、藤田政勝氏報）（完）

◉橫岐蟲の寄生黴菌　先年山口縣の農事試驗場やらにて、發見せられしとか聞ける橫岐蟲の病菌を今年當地に於ても發見せり。之を撿視するに、該菌に犯さるゝものは唯ヒショコバヒに限れるが如し尤とも山口縣には、大橫岐蟲、二星橫岐蟲其他二三種に上れる由なるも、當地には絕えて未だ之を他種に見ず。而して雌蟲には罹災多く、雄には比較少なし、其罹災蟲は、皆尾端より害を受くるもの〻如く白色の結束せられし狀を呈し、鏡撿の結果は、其菌絲胞子をも見確めたり。（十一月九日附、靑森縣農事試驗場新渡戶稻雄氏報）

◉昆蟲標本陳列舘の觀覽人　昨十月中に、當昆蟲硏究所の標本陳列舘を觀覽せし人員は、總計三千四百六十一人にして、其中最とも多かりしは、十四日に於ける三百七十二名、最とも少なかりしは二十四日に於ける三十九名にして、一日平均百四十四人强に當り、其重なる人々は靜岡三重愛知山形山梨諸縣の縣官、敎職又は勸業に關する中央官衙の諸官吏等なりき。（雜報は十一月十二日脫稿）

名和昆蟲研究所長名和靖著

第六版

薔薇の一株 昆蟲世界 全

定價貳拾錢 郵税貳錢（郵券代用一割增）

臨時刊行第一編

日本昆蟲分科表 全一冊 再版

定價（郵税共）金貳拾八錢（郵券代用一割增）

臨時刊行第二編

通俗益蟲集覽 第一輯再版（説明書附）

定價（郵税共）金貳拾貳錢（同 上）

臨時刊行第三編

貝殼蟲圖説 全一冊（再版）

定價（郵税共）金參拾七錢（同 上）

◎害蟲圖解既刊の分廣告

●第一。桑樹害蟲エダシヤクトリ（枝尺蠖）（三版）
●第二。桑樹害蟲トゲシヤクトリ（刺尺蠖）（再版）
●第三。稻の害蟲イ子ノズヰムシ（二化生螟蟲）
●第四。煙草害蟲タバコノアヲムシ（煙草螟蛉）
●第五。稻の害蟲イチモジセセリ（苞蟲又葉捲蟲）
●第六。桑樹害蟲ヒメゾウムシ（姬象鼻蟲）
●第七。桑樹害蟲シンムシ（心蟲）
●第八。稻の害蟲イ子ノアヲムシ（稻螟蛉）
●第九。茶樹及果樹害蟲ミノムシ（避債蟲）
●第十。豌豆害蟲エンドノキリムシ（夜盜蟲又地蠶）
●第十一。桑樹害蟲クハカミキリ（桑天牛）
●第十二。稻の害蟲ツマグロヨコバヒ（褄黑横蚊又浮塵子）
●第十三。桑樹害蟲イトヒキハマキムシ（糸引葉捲蟲）
●第十四。茶樹害蟲チヤケムシ（茶蛄蟖）
●第十五。馬鈴薯及茄子の害蟲テントウムシダマシ（擬瓢蟲）
●第十六。稻と麥の害蟲キリウジガガンボ（切蛆蚊蛇）
●第十七。桑樹害蟲キンケムシ（金條毛蟲）
●第十八。桑樹害蟲アヲハマキムシ（青色巢捲蟲）
●第十九。桑樹害蟲クハケムシ（桑蛄蟖）
●第廿。稻の害蟲フタホシズイムシ（三化生螟蟲）

以上二十種は既刊の分よして發行以來既よ多くの各縣農會は勿論、諸學校よも弘く備へ付けられたり。

定價壹枚金拾五錢 郵税貳錢 百枚以上一纏壹枚拾錢の割郵税百枚に付貳拾錢

●第十九。桑樹の害蟲クハケムシ（桑蛄蟖）圖解（本年八月新刊）
●第二十。稻の害蟲フタホシズヰムシ（三化生螟蟲）（十一月新刊）

發行所 岐阜市京町 名和昆蟲研究所

◎害蟲圖解未刊の分豫告

◎稲の害蟲イナゴ（稲蝗）
◎稲の害蟲オホズヰムシ（大螟蟲）
◎稲の害蟲セジロウンカ（背白浮塵子）
◎稲の害蟲ヒゲナガアブ（長角虻）
◎桑樹害蟲クハハマキ（桑葉捲蟲）
◎蠶の害蟲カヒコノウジバヘ（蠁蛆）

◎松樹害蟲マツケムシ（松蛅蟖）
◎藍の害蟲アヰノゾウムシ（藍象鼻蟲）
◎粟の害蟲アハノズヰムシ（粟螟蟲）
◎胡麻害蟲メンガタスズメ（胡麻蠋）
◎赤楊害蟲ハンノキケムシ（赤楊蛅蟖）
◎櫟の害蟲カミキリムシ（天牛）

◎梅樹害蟲ウメシヤクトリ（梅尺蠖）
◎稲の害蟲トビイロウンカ（褐色浮塵子）
◎桑樹害蟲クロクサガメ（黑色椿象）
◎稲の害蟲アヲハマキムシ（青色葉捲蟲）
◎桑樹害蟲クハゴ（野蠶）
◎蔬菜害蟲モンシロテフ（菜の螟蛉）
◎蔬菜害蟲サルハムシ（菜の葉蟲）
◎大豆害蟲ヒメコガ子（姬金龜子）
◎梅樹害蟲ウメケムシ（梅蛅蟖）

◉圖解の紙幅縦一尺三寸横九寸　◉壹枚の代價拾五錢郵税貳錢
◉百枚以上一纏壹枚拾錢郵税百枚に付き貳拾錢

◉豫約代價

壹枚拾錢郵税貳錢
但申込の際前金添附の事

圖解代金　凡て前金にあらざれば回送せず但郵劵代用壹割增の事

◎梨樹害蟲ナシゾウムシ（象鼻蟲）
◎梨樹害蟲ホシハマキ（星葉捲蟲）
◎果樹害蟲イラムシ（刺蟲）
◎藍の害蟲アヰノズヰムシ（藍の螟蟲）
◎粟の害蟲アハノヨトウムシ（粟蠶）
◎里芋害蟲セヽスヂスズメ（烏蠋）
◎桐樹害蟲シモフリスズメ（桐蠋）
◎果樹害蟲ホシカミキリ（白斑天牛）
◎果樹害蟲ドウガ子ブンブン（金龜子）

發行所

岐阜市京町　名和昆蟲研究所

雑誌昆蟲世界合本出來廣告

○第十二號以下完備

本邦唯一の昆蟲雑誌

昆蟲世界 合本

第五巻（昨年分）出來

西洋綴金文字入美裝

●昆蟲世界第三巻合本壹冊（自第拾七號至第貳拾八號）

●昆蟲世界第四巻合本壹冊（自第貳拾九號至第四拾號）

●昆蟲世界第五巻合本壹冊（自第四拾壹號至第五拾貳號）

（毎冊定價金壹圓貳拾錢　郵税金貳拾錢）

右昆蟲世界の義は發刊以來、非常の高評を博し斯學研究上の寶典として又農事改良の先驅として歡迎せられしも、未た之を合本とするに至らざりしに、今回讀者の勸告により毎一年分を裝釘して閲讀索引に便にせり、請ふ愛讀を玉へ。

●増訂再版 **日本昆蟲分科表** 全

（十一月十日發行）

右今般訂正を加へ、記載の蟲名に更に二百餘種を増補し、なほ備考をも添附して再版ょ附せり、斯學者の一讀を祈る

岐阜市京町 **名和昆蟲研究所**

專賣特許第四九八六號

莖切器發賣廣告

螟蟲の稻作に害を及ほすや頗る大ょして之れか驅除を爲さんとするには早く病稻を刈り取り害蟲を撲殺するに如かさるなきは精農家諸君の汎く認むる所にして近來之れか實行を唱導せらるゝ頻りなりと雖とも未た完全の良器なく止むを得ず在來の鎌を使用して徒に他の良稻を戕ふのみならす全く螟蟲の潛伏せる稻莖を根底より刈去ることを得さるが爲め害蟲を驅除の目的を達する能はす空しく螟蟲をして其害欲を逞ふせしむるに到る實ょ概嘆ょ堪へさるなり發明者多年茲ょ意を籠め遂に完全なる一良器を案出せり此鎌は上圖に示す如く小形の鎌に彈力性の遮匙を付したるものにして本器を使用するには先つ把手（ハ）を握り而して切取らんとする稻莖を左手ょて握り遮匙の頭部と鎌の尖端との中間（イ）に當て鎌を少しく前方に押すへし然るときは遮匙（ロ）は彈力性あるを以て外方に開き稻莖を押入るへし一度押入れたる后は遮匙は彈力の爲め元形に復し鎌の尖端を被覆して他の健全なる稻莖は挿入する事なし此に於て鎌を根底迄押入れ後方に引くときは毫も他の稻莖を害せす容易く根元ょり刈取ることを得る至極輕便の良器にして特ょ名和昆蟲研究所及び靜岡縣農事試驗場等の協賛を博せり：：定價一挺金拾錢：農會等の共同御用は特別割引：：各地に特約販賣店を募る

新發明莖切器の圖

イ　ロ　ハ

製造元　靜岡縣小笠郡比木村　**山本勘藏**

發賣元　同縣志太郡燒津町　**吉野寅之助**

昆蟲世界の擴張に就て讀者諸君に敬告す

雜誌「昆蟲世界」は明年一月より紙面を改良し、更に斯學研究上の便益を圖るに就ては、弘く讀者の高見をも斟酌し其希望に副はんことす、願くは改善を施すべき要點を示されんことを。

雜誌「昆蟲世界」は時論を探り輿望を知らしめ、又讀者間に於ける智識の交換を欲し、從來寄送の玉稿を棄擲せし事の少なきは、已に寄稿家の知らるゝ所ならん、今や益々各地の通報を歡迎するの必要に逼れり、依舊續々投稿あらんことを。

雜誌「昆蟲世界」は其内容の豐富にして、文字の多數なること、遙に他の諸雜誌の上に在り、然れども之に伴へて亦多數の所友を有するが故に、號毎に盡ごとく各地の寄稿を收錄すること能はず、故に明年一月の誌上に掲載を望まるゝものあらば、本月二十日を限り投稿を乞ふ。

名和昆蟲研究所編輯部

新刊廣告

昆蟲叢書　第壹編

全國昆蟲展覽會出品目錄　全壹冊

題字及び寫眞銅版四葉挿入●木版寫眞銅版畫七十餘圖●紙數貳百餘頁●定價金八拾五錢●郵税每冊金八錢

記載目次

右去月出版の上豫約御申込の順序を以て御送附致候處、萬一不着も候はゞ乍御手數御一報願上度候尚ほ代價等御尋ねの方も有之候へども、豫約者外へは當分一部賣不致候間此段も御承知置願上候

明治卅五年九月　岐阜市京町　名和昆蟲研究所

●アブラムシ（蚜蟲又は滑蟲）の標本

右分布調査材料として、同志の寄贈を望む

●昆蟲世界　第壹號以下第十一號迄

右原價を以て購入す、不用の方は通知あれ

岐阜市京町　名和昆蟲研究所

●岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

第四十八回月次會（十二月六日）

●岐阜縣昆蟲學會員に告ぐ

來十二月六日の第四十八回例會は、月次會とは申し乍ら、本年の納會にも有之、且明年施設の事業上、御協量申上度件も多々有之候に付、本會員は成るべく御繰合御出席相成度、此段特に及御案内候也

十一月　岐阜縣昆蟲學會幹事

●本誌定價並廣告料

壹部郵税共金拾錢（見本は五厘郵劵貳拾枚にて呈す）

壹年分拾貳部郵税共　金壹圓八錢

（注意）本誌は總て前金に非れば發送せず●爲替拂渡局は岐阜郵便電信局●郵劵代用は五厘切手にて壹割增とす

廣告料五號活字廿二字詰一行に付金拾貳錢、三十行以上一行に付き金拾錢とす

明治三十五年十一月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二（岐阜縣岐阜市京町）

發行所　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二　發行者　名和梅吉

同縣武儀郡下有知村三百七十四番戸　編輯者　天野秋二

同縣安八郡大垣町字郭百五十三番戸　印刷者　河田貞城

明治三十年九月十日内務省許可
（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

（大垣西濃印刷株式會社印刷）

Vol.XII. DECEMDER. 15TH, 1902. No.12.

THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.
EDITED BY Y. NAWA.
GIFU, JAPAN.

（十二月十五日發行）

（毎月一回十五日發行）

昆蟲世界

（第六卷第拾貳册） 第六拾四號

（明治三十五年十二月十五日發行）

（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

目次 （禁轉載）

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU, JAPAN.

◎寄贈物件受領公告

- 一金拾圓也　第十四回全國害蟲驅除講習生一同
- 一金五圓也　岐阜縣　柳原榮次郎君
- 一金壹圓五拾錢　福井縣　石垣友市君
- 一日本樹木害蟲篇(中下)二冊
- 一清國種蠶蛆(英文)壹冊
- 一軍配細蜻蛉 貳頭
- 一昆蟲分類法 壹冊
  - 以上　東京市 理學博士 佐々木忠次郎君
- 一蜜蜂 壹冊　神奈川縣　箱根養蜂場
- 一小學理科(第壹)壹冊
- 一稻莖切鋏 壹挺
  - 以上　愛知縣　田中周平君
- 一農事試驗場特別報告(第一號)螟蟲及浮塵子に關する調査 壹冊　愛媛縣農事試驗場
- 一稻莖切鋏 壹挺　岐阜縣　圓山包吉君
- 一薄茶碗(群蝶摸樣金華山燒)壹個　岐阜縣　福田金次郎君
- 一竹製塗箸(蝶蒔繪附)壹對　岐阜縣　林正一君
- 一肖像寫眞 各一葉
  - 滋賀縣　西川豊次郎君
  - 群馬縣　高山助太郎君
  - 長野縣　三澤勝重君
  - 京都府　田中龍三君
  - 兵庫縣　佐々木庸太郎君
  - 長野縣　坂井辰三郎君

右寄贈相成候に付茲に芳名を掲げて其厚意を謝す

明治三十五年十二月　名和昆蟲研究所

雜誌昆蟲世界愛讀者諸君中、御移動相成候場合には、新舊住處兩樣に御明記の上、必ず御一報奉煩度候、從來御報無之か、若くは舊地御認め無之ため、非常に煩雜を來したる事往々有之に付、爲念御注意申上置候

名和昆蟲研究所會計部

第十五回全國害蟲驅除**特別講習會開始**

開期 {自明年三月初旬 至同月下旬} 三週間以内　定員約四十名

第十五回全國害蟲驅除講習會は明年春後より開催の筈の處、本號雜報に詳記の事情を生じ、明年三月開設の内國勸業博覽會の紀念として**特別**に開講せんとす。然れども事もと吶嗟の間に起れるを以て、之が開始を難ずるもの多々之あり隨つて其必成を期し難し。是を以て試みに之を世の同志に問ひ、其贊同者の多少によりて更に確定する所あらんとす。入會希望者は左の條規を熟覽の上、明年一月十日迄に其手續を履行せられよ

一、會期は明治三十六年三月上旬より下旬まで三週日以内とす。
二、會費は通常の講習會費と同額を收む。
三、講習學科の終了次第、修學旅行として大阪市に出張し、内國勸業大博覽會に出品の昆蟲標本、驅除器械、驅除藥劑等に就き親しく現物の説明品評を爲さしめ、各講師は公平の審査眼を以て、其優劣得失を示導す。
四、大阪へ往返の際、天候の如何によりては、比叡山若くは伊吹山に於て、各種の採蟲法を行ふ。
五、講習科目は他の講習會のものに同じと雖ども、本會は長期講習會の豫untilを以て准ず。
六、入會希望者は明治卅六年一月十日以前に其旨を申込むべし。
七、開會の有無及び之に關する事柄は、明年一月十五日發行の昆蟲世界第六十五號を以て發表す。
八、修學旅行費は、各會員の負擔とす。
九、其他は概ね普通講習會の規定に同じ。

(附記)　本會開會中に、名和昆蟲研究所創立滿七年の紀念として昆蟲百五十萬供養塔の開眼式を擧行し、又大阪市に於ては、全國害蟲驅除講習修業生の同窓會を開くの計畫あり。

十二月十二日　名和昆蟲研究所

杉ケムシの發育並に寄生蟲

論説

◎螟害に對する方今急須の驅防方法

名和昆蟲研究所長　名和靖

凡そ害蟲を驅防せんと欲せば、須らく先づ其驅防の良法を求めざる可からず、假ひ良法は之を求め得んも、團体の共同事業として實行するに非ざれば十分の成果無し。之に反して、昆蟲學思想を涵養し、共同驅除の自づから行はるゝに際會せば、左まで方法に重きを置かざるも、其効果の遙かに前者に勝れるものあるを見ん。況んや、驅防の方その實に適ひ、施行の法共同に出づるに於てをや。

現時、本邦農作害蟲の首魁たる、稻作螟蟲、特に二化生螟蟲の驅防法を講ずるや、その方頗ぶる多岐に渉り、或ひは之を學理に徵する者あり、或ひは之を想定に推す者あり、或ひは之を實驗より論ずる者あり、或ひは之を偶然の發見に求めたる者あり、又或ひは之を古人の記錄に得し者ある等、表裏長短互ひに一ならず。然れども、未だ固定の確說無きより、各地に於ける螟蟲驅除法なるものは、唯乃の技術を競爭するに過ぎず。例へば、土況民情を忖度せずして、煩勞多雜の方法を命示するが如き、又た貧富閑忙を斟酌せずして、得失不償の理想を勸奬する等の如し。此を以て、其聲の大なるに比べて、其實甚はざ舉らず、遂に却つて兵庫縣に於けるが如き反抗的罷業を招致するに至る、愼まざる可けんや。

熟々害蟲驅防上に於ける內容を窺ふに、到處の農家には、建本培根の設備無きを以て、最とも驅防の要素に乏し。故に、外面に於てのみ、幾たびか儀式的共同驅除を行ふことありとも、熱誠に出でたる單獨驅除と相庭逕する所無きは、理數の當に然らしむる所なり。然かも、此不具の驅除者に授くるに、偏僻生硬の方法を以てす、世の螟害を言ふ者の、其馳驅に勞して、實蹟に乏しきを歎ずるも、深く怪しむに足らざるべし。

讀者の知る如く、今年は大農と小農の間に起れる軋轢多く、大阪府下に、東京府下に、埼玉縣下に、兩毛の間に、鎭西の邊に、東陲の處々に、一時不穩の警報を傳へき。是れ、職に害蟲驅除に在る者の、夙に深省せざる可からざる重事にして、之を裏面より觀察すれば、將來益々これが勵行の必要を知らしむるものと謂ふべし。然れば、螟害の如きは、各方面より救濟の術策を講じて、早く其殲滅を期せざる可からざるも、如何にせん、農家の大半は其要素を具へざるが故に、之を器械視して操縱し得べく、而して一呼の下に活動自在ならしむること能はず。去ればとて、遽かに斯學思想を注入せん事、固より難ければ、漸次智囊の啓發に努むるとゝもに、眼のあたり何地に於ても、將た何人にも行ひ易かるべき、簡便確實の驅防方法を普及せしむるを以て、方今の急務とすべきか。

斯學の普及順序は別問題に屬すれば、爰にたゞ驅防方法のみを述べんに、余は卵塊摘採、死莖除去、枯穗除去の三者を併行するを以て、少なく滿足せんと欲す。就中、第一の卵塊摘採法は、この兩三年以來弘く各地に採用せらるゝに至りたるが、是は春季秧田に數回施行の後、更に本田に於ても、二三番除草期間は、精勵從事するを要す。人或ひは、農桑多忙期の故を以て、淺慮にも直ちに擯斥せんと試むるも農業地に於ては、所謂田植休業中の各學校生徒を利用するの便あるべく、下級農會に於ては、專務の農

人を使役するも得策なるべく、又老幼婦女を招くに薄給を以てするも可なるべければ、決して斯る薄弱の理由を以て、其利益を沒却し得べきにあらず』。第二の死莖除去法は、採卵の際に脱漏せしもの、後に化育して、莖心に加害せしを剪除するにあれば、二三番除草と開花期間に、田面より黄萎の莖葉を拔取りて、適宜これを處分すれば足れり。但赤手これを拔取る時は、根株の發育を妨たげ、又他莖を損ふろ、幼螟の蝕入孔邊より中斷するの虞あれば、或種の器械を用ゐて、靜かに根上より剪截するを要す。而して其器械は、今や數種の多きを算すと雖ども、已に世に公けにせられしものに就て之を擇べば、前々號の本誌上に圖説せる、第三圖若くば第四圖のもの、、輕便にして且低價なるに及かざるが如し』。斯くて、仲秋に至り、第二回の產卵ありと雖ども、時已に莖葉蕃茂して執業に適せざれば、開花結實の前後に、第三の枯穗除去法を行ふこと、猶は第二法のそれの如くすべし。而して之をなすや、必らず苅取器を使用するは勿論、其時期は成るべく早きを選ばざる可からず。蓋し、孵化の當時は、其加害力微小を極め、一莖或ひは數莖に蝕入するに止まるも、體肢の成長するに從がひて、漸次他莖より他莖に移殖するの性あるが故なり。現に、本年九月、靜岡縣周智郡に於て、昆蟲學講習の際、百餘名の會員をして試みに人每に十莖以上の枯穗を拔切らしめて、莖內蟄居の蟲數、體長、齡期等を各別に調査を加へしめたるに、十人採取の百莖より、幼蟲の一千七百四十六頭を獲、即はち平均一莖に對して十七頭餘の比例を示しき。中に最多數なるは、一莖能く五十六頭に上りしが、更に之を細檢して、若齡のものは群居し老齡のものは單居するの事實を確かめり。則はち、孵化後未だ多く日を經ざるものなりせば、必らず同莖に群棲するも、稍齡期を重ねて、食慾旺盛なるに到れば、自から四方に分散して、他の新莖に加害するに因る。以て世人の所謂蔓延なるものは、孵化後直ちに行はるゝには非ずして、姑息放棄の結果たる

事を知るに足らん。

如上の如く、採卵より枯穗除去の法に至るまで、皆これ、纖弱なる老幼の容易に履行し得べき事業なるが故に、普通の螟害驅防には、左まで莫大の費用を抛たず、又壯大なる裝置をも施さずして、能く除害興利の目的に副ひ、延て農家の悲慘を慰むるに足れるものありと信ず。近者、雜誌『新農報』は、螟蟲驅除の簡便法と題して、一福音を傳へらく。

大坂府北河内郡にては、昨年は螟蟲驅除の爲め、賞金を與へて、白穗拔き取りを奬勵したれども、尚盡きざれば、本年も之を行ひたる由なるが、今其賞金を分與するの方法並に成蹟を聞くに、賞金は抽籤法を以て與へ、一等より五等までの籤に當れるものは、五十圓より一圓までを得べしとなり。本年は、締切當日迄に、白穗百本を一束と爲せるもの二十八萬束、この貫數四萬貫目に上り、之に附着せし螟蟲の仔蟲を取りて、五升入の桶に入れたるに、桶數十五個ありしと云ふ。螟蟲驅除の方法としては、誘蛾燈に優れる好簡便法と云ふべし。

加之、昨秋、千葉縣夷隅郡農會に於て、各町村より蒐收せる被害莖を以て、堆積肥料となしたるに、此一塊の土饅頭より、數千の幼蟲の四近に跂行せるものありきと云へば、たゞ深く萎莖枯穗の剪截に注意せば、春夏採卵後の遺類を、一擧秋冬の間に滅盡せしむることの至難ならざるは、多々之を實地に證し得べきなり』。余は他に螟蟲驅防に關する意見を懷かざるに非ず、又別法の施すべきもの不少にあらざることを知らざるにも非ず。然れども、未だ蟲害の何ものたるを辨へずして、茫然之を無視するの農民に臨むに、徒らに複雜の理論を以てするの非なるを想ひ、退きては、肥料の借銀にすら、高利を拂ふの農家に、經濟の原則に戻れる苛法を勸むるに忍びず、當今の眉急に應ずるの一策として、此三方法の普及を希ふの餘、歲晩の書感に代へて、一片の陳說を讀者に勸告す。知らず、明春より之を實地に行ふて國家慶福の增進を圖るもの、それ吾が同志の間に在りや否やを。

◎名和氏の寄贈に係る貝殻蟲類調査の結果

福岡縣　桑名伊之吉寄稿

實業界に於て、貝殻蟲の宿主即ち托生植物調査の必要を知らんと欲せば、先づ貝殻蟲の習性を明めざる可らず。貝殻蟲は、多く植物に寄生する小動物にして、常に樹皮の罅隙、或は草木の枝葉に固着し、通常蠟質、綿質等の分泌物を以て体軀を包ひ、其長絲狀の口器をば植物に刺入れて、滋液を吸收するものとす、或貝殻蟲は、單に一種類の托生植物即ち宿主を擇ぶも、他は能く幾多の宿主に生存することを得而して此の幾多の托生植物に、よく適合するの性は、其種族の榮枯如何に大なる關係を有するを見る。蓋し貝殻蟲にして或一種の植物にのみ托生せんか、其種族の生命は、擧て宿主の榮枯如何に一任するものと均しければ則ち托生植物と盛衰を倶にせざるべからず。之に反して幾多の宿主に能く適合するの力を有せんか、其種族は多々蕃殖の機會を有するの理あるを知らん。

凡て動物を宿主とする寄生物の蕃殖は、其宿主の繁殖に伴ふものなりと雖も、若し寄生物蕃殖比率の宿主よりも増大なることあれば、一時宿主の凋萎枯衰を招致し、寄生物亦從つて衰滅の運命に遭遇するか或は他に新たなる情態の適合を求めざる可ざるに到ることあり。斯の如き宿主と寄生物との關係は、或程度まで、貝殻蟲と其托生植物との間に存するや、亦疑ふべからざるなり。是れ實業家が、兩者に於け

る關係を調査して、貝殼蟲の意外に蕃殖するの可能力を有するや否やを研究するの急務ある所以なり。

以下記載する所の貝殼蟲は、本年八月、名和昆蟲研究所長名和氏が、鳥取縣鳥取市へ、講習會講師として出張せし時、同市及び其附近にて、氏自身と他員との採集に係れるを、寄送されしものにして、別に新種と認むべきもの無しと雖も、採集地の新たなると、宿主植物に新奇のものあれば、其分布研究上重大なる價値を有すと謂ふべし。彼の山陰地方は未だ交通機關完備するに至らざれば、此等の材料を得ると容易ならざるに、斯く數種の標本を得たるは、記者の名和氏に對して深く謝する所なり。

一　赤色貝殼蟲（Aspidiotus aurantii Maok.）

托生植物　オホミカン（大蜜柑）
採集地及採集者　鳥取市　河島菊松氏

雌蟲の貝殼は、略ぼ圓形にして、中央に臍狀の腫起あり、これ即ち第一蛻皮の存する處あり。着色は淡灰色にして、稍透明なるが故に、蟲躰着色の異なるに隨て、黃綠、赤褐等ありて一定せず。第二蛻皮を以て被へる部分は、他の部分よりも暗黑なり。雌蟲は通常黃褐色にして肥大なり、腹部環節の兩端は、下面に向ひて著大となり、末端の臀板を圍むに至る。臀板は褐色にして、圓形分泌孔（Spinnert）を有せず、其游離緣には、能く發達せる三對の扁長板（Lobe）あり。第一對の扁長板は、末端に至り俄かに狹まりて其尖は二瓣となり、通常內部にあるものは、外部のそれよりも狹し。第二、第三對の扁長板の外緣は、斜面をなし之に一個の緊縮あり。棘（Plate）は能く發達して、扁長板よりも長く、且つ鋸齒を具ひ、第一對扁長板の中央、第一と第二對との間、及び第二と第三對との間には各々二枝、第三對の上位に於ける臀板緣には三枝ありて、各扁長板の基節には一個の刺毛を有せり。

雄蟲の貝殼は、雌蟲のものに似たれども、其大さ僅かに四分の一に過ぎず、前端少しく腫起し、後端に及んで扁平なり、蛻皮は稍一側に偏し、其部分は甚だ薄し。雄蟲は淡黃色にして、胸部の斑紐は褐色

あり、眼は褐紫色を呈す。

（註） 名和氏の寄送にかゝる標本は、其着色原種と異なりて淡黄なりと雖も、マスケール氏の記載せる濠洲産の原種は、稍赤色を帶ぶ、故に之を赤色貝殼蟲と名つく。是より先、余は此種の東京、横濱、和歌山縣等に於て柑橘、槇及び他の植物に寄生するものあるを實見せりき。

二 黑色貝殼蟲（Aspidiotus duplex Ckll.）

托生植物 ミカン（蜜柑）
採集地及採集者 鳥取市 藤田喜久藏氏

雌蟲の貝殼は、殆んど圓形にして、暗褐色を呈し、少しく腫起せり。蛻皮は少しく一側に偏し、橙黄色を帶ぶ。被害樹より之を剝離する時は、其跡に白痕を殘す、大さは殆んど三「ミリ」あり。雌蟲の軀は淡黄色にして、前端の幅は濶く、後端に至りて狹し、其中央より稍前端に近き軀緣には深き緊縮あり。臀板は長楕圓形にして、黃褐色を呈す、生殖孔の左右には、四點の圓形分泌孔群散し、前側の二群は二十八乃至三十孔より成り、後側の二群は四十二孔の多きに達せり。別に口部の兩側に各一群の小圓形分泌孔ありて、十七乃至二十二孔より成れり又臀板の游離緣には、四對の扁長板ありて、第一對のものは、甚だ大にして互ひに接近し、他の三對は小にして、末端尖銳なり。棘は扁長板より長からず、鱗片狀をなして相接續し、其第四對の上位に於ける臀板緣に存するもののみは、鋸齒を有せり。

（註） 名和氏の寄送にかゝる標本の貝殼蟲は、稍赤褐色を呈し、普通標本よりは一層扁平なり。是より先、東京、横濱、福岡縣にて、柑橘、椿、茶、山茶、樟、槇、柳、躑躅、木犀等より之を採集せしことあり。

（貝殼蟲の臀板の放大圖）

刺毛

棘

扁長板

中央なるは生殖孔、其四邊にあるは圓形分泌孔

三　櫻樹貝殻蟲(Diaspis pentagona Targ.-Tozz.)

托生植物　ウメ(梅樹)
採集地及採集者　鳥取市　山根源藏氏

雌蟲の貝殻は、畧ぼ圓形よして白色なり、蛻皮は稍ゝ一側に偏し、少しく腫起し、其色彩は黄橙色を呈す大さは二「ミリ」あり。此種は夙に世人に知られたる本邦産貝殻蟲族中、最とも普通の種にて、分布區域亦從つて廣し。多くの果樹及び植木に寄生し、常に桐、梅、椎、桑等に大害を及ぼすものとす。

四　薔薇のパルラトリア(Parlatoria perandei var. theae Ckll.)

托生植物　バラ(薔薇)
採集地及採集者　鳥取市　山根源藏氏

雌蟲の貝殻は、灰褐色を呈し、不正圓形(廣楕圓)にして、少しく腫起せり。黑色の蛻皮は、少しく一側に偏す、身長約二「ミリ」あり。其貝殻を寄生植物より剝去する時は、其跡に白痕を殘留するを見る。雌蟲の体色は淡黄よして、臀板の四處に、圓形分泌孔を點在す、其中、前側の一對は、大約二十孔より成り、後側の一對は僅かに七孔を有せり。又三對の扁長板を有す、各板は中部最も廣く、末端に至れば狭まりて數個の緊縮あり。而して第一對の中央よは二枝、第一と第二對の間よも二枝、第二と第三對との間には三枝の棘を生じ、其長は扁長板と殆んど同じく、各扁長板の基部には、一個の刺毛を有せり。余は嘗て京都、大阪、東京、横濱、仙臺、福岡縣其他に於て此種の幾多の植物に寄生せるを目撃しき。

五　柑橘長形貝殻蟲(Mytilaspis gloverii Pack.)

托生植物　ミカン(蜜柑)
採集地及採集者　安藤サツ、河島菊松二氏

雌蟲の貝殻の着色は一樣あらず、或ひは黄褐に或ひは暗褐あり。其長さ大約二、五「ミリ」にして、幅は其五分の一許に過ぎず、細長にして側面は殆んど平行し、後端に到れば少しく廣し。腹面の貝殻は、白色にして薄し。雌蟲の躰軀は、淡紫色にして、臀板は黄色あり、星聚の五圓形汾泌孔を有し、其前中央の一群は五孔、前側の一對は十一孔、後側の一對は五孔より成れり。臀板の游離縁には、三對の扁長板を有し、中よ第一對は他の二對よりも能く發達し、兩緣は末端に向ひて次第に尖り、第二對の中央には深

き緊縮部ありて殆んど之を二分せり、而して第三對のものは、短少にして僅かに躰縁を出づ。棘は單に刺毛狀をなし、扁長板の第一對と第二對との間及び第二對と第三對との間に各二枝を算し、第三對の上位ある臀板縁には四枝を生ぜり。刺毛は甚だ小にして、各扁長板の基部に存在す。

○○○雄蟲の貝殼は、雌蟲のものに似たれども、小形にして單に一個の蛻皮を有するのみ。余先年岐阜縣、和歌山縣及び福岡縣下に於て、此種の柑橘に寄生せるを發見せしことあり。

六　林檎白色貝殼蟲(Leucaspis japonica Ckll.)

托生植物　ミカン(蜜柑)
採集地及採集者　鳥取市　山根五百藏氏

○○○○雌蟲の貝殼は、白色にして細長く、恰も林檎貝殼蟲に彷彿たり。蛻皮は栗色にして、第二蛻皮は、大なるも幅狹く、僅かに第一蛻皮と重なれるを見る。○○雌蟲の躰軀は、長楕圓形にして蜜柑色を帶び、臀板の游離縁にハ、能く發達したる四對の扁長板あり、其中第一對即ち中央に位ゐするものは最も大に、他は殆んど同大にして尖端各々三瓣に岐かる。而して第一と第二扁長板の間には、二枝の棘あり。此種には圓形分泌孔を有せずと雖も、幾多の細長分泌孔の散在を認む。

七　蜜柑蠟蟲(Ceroplastes sp.)　此種は、鳥取市にて福原衡氏の採集せしものにして、柑橘の小枝に附着せり。憾むらくは、標本の不足あるが爲に、其何種たるやを確むること能はず。

八　龜甲粉蟲(Pulvinenia aurantii Ckll.)

托生植物　モチノキ及ミカン(冬青及蜜柑)
採集地及採集者　鳥取市江崎　高橋直義、山根五百藏、能勢吉夫三氏

○○雌蟲は通常葉の裏面に附着し、躰軀の後縁には、白色線樣の卵嚢を存せり。嚢の長さは大約五「ミリ」を算し、略は楕圓形をなす。老熟したるものは、黄褐若くは黄綠色を帶び、其躰縁にある刺毛は、比較的大にして枝を生ぜざるも、體縁の緊縮部には三枝の大なる刺毛ありて、二枝ハ短かく他の一枝は長し跗節は脛節よりも著しく短かく、爪また短かくして彎曲す。觸角は八環節より成り、第三の環節は最も

長く、環節毎に幾多の長毛を有せり。其肛門環には六枚の長毛を存す。余は先年、福岡縣、和歌山縣下等にて、此種の柑橘類に寄生せるを實檢しき。

九 紐絮貝殻蟲(?)(Pulvineria japonica (?) Ckll.) 鳥取市にて黑部論代松氏が、コバメザクラに寄生せしを採集せしものに係る。風雨に曝され、甚だしく毀損せしを以て、其種別を確言し難し。

十 竹のエリオコックス (Eriococcus onukii Kuwa.)　托生植物　クマザサ(熊笹)　採集地及採集者　鳥取市　名和靖、伊吹タツ二氏

雌蟲の躰軀を包める嚢は、廣楕圓形にして、灰白色を呈し、肩面には横刻せる畦様の腫起を印せり。躰軀は赤褐色にして肥大に、其長約二、五乃至三「ミリ」あり。背面には硬剛の刺毛を有し、觸角は七環節より成る。觸角は通常第三環節最も長く、且つ各環節には幾多の長毛を有せり。脚は三對相似て、蹠節は脛節よりも長し。肛門環には、八枚の粗毛を生せり。是より先、余は之を東京、福岡其他の地方の竹類に於て、屢次目擊しき。

◎蜚蠊類につきて(下)

岐阜中學校教諭　長野菊次郎　抄譯

種類　本邦に産する普通の蜚蠊の學名につきては、余(譯者)之を確言すること能はず、恐くは未だ其名を有せざる種にあらざる莫きか。或る一二の書には Periplaneta americana を以て、是に當てたれども箇は其標本を比較すれば、一目の下に錯誤に出でしものなることを辨別すべし。特にペリプラネタ屬に比すれば、其胸部は割合に小さきを以て、或は其屬をすら異にせずやと思はる。但、臺南縣に産する一種に、アメリカナと一致するものあり、又大阪地方に産して普通のものと異れる一種あり、形狀能くアメリカナに類似すれども、少しく小さし。任他、大小の差は、種々の事情によりて生ずるものなれば、多數の標本を比較せば、或は意外の結果を得るやも測り難し。而して若しこの種がアメリカナなるんには

多分近時外國より輸入せられて分布せしものなるべし、又臺北縣に産する一種にはオーストラリア、アブラムシ(Periplaneta australasiae)と符合するものあり。而して普通産のチャバネ　アブラムシは確かにEctobia (Phyllodromia) germaniaなり。

●●敵蟲　歐洲に於ては、蜚蠊の卵塊に、屢次寄生蜂Evania appendigasterの寄生することあり、此寄生蜂は其寄主に伴はれて廣く世界に撒布せられ、一千八百二十九年には、キユバ(Cuba)に於て發見せられしのみか、合衆國に於ても、屢次採集せられぬ。然るに不幸にも、更にまた此蜂に寄生する一種の寄生蜂Entodon hagenowiありて、蜚蠊を保護するを如何にせん。然れば、若し蜚蠊の卵寄生蜂が、更に第二の寄生蜂を伴はずして、各地に分布せられたらんには、其利益や實に莫大ならんも、自然の配合は爭ひ難く、第二の寄生蜂は、既に早くより蕃布せられしものと覺ぼしくて、キユバ及びフロリダ(Florida)に於て見出されたるのみならず、其他各地に散布して、有益寄生蜂の蕃殖を妨害せり。此外蜚蠊の自然の敵は、雨蛙類(Tree frogs)にして、若し此等の動物が、夜間室房に近く來るときは、蜚蠊を驅除するものなりと云へり。昆蟲類ある蜚蠊は、鳥類中に於ける烏の如く、敵に對して自身を防禦すべき力を有せり即ち毒を混したる食物や、器物等を避くることにつき、大なる能力をば有するなり。

●●驅除法　蜚蠊を驅除するには、數法あれども、其時と其場合、若くは種類の異なるに從ひて、多少の得失あることを免れず。今其重なるものを次に述ぶべし。

蜚蠊を驅除する一法は、青酸瓦斯(Hydrocyanic acid)を以て、燻蒸するにあり。先年苗圃及び樹園の樹木を害する貝殼蟲、其他の害蟲を驅除すると同一なる燻蒸法を、家棲昆蟲に適用せしに、尚同一の効果を奏し、家棲蜚蠊の多種に對しても、滿足ある結果を得たりき。元來此瓦斯は、非常の毒物なれども、少

しく準備に注意すれば、敢て恐るゝに足らざるなり。

又小房船室等の如く、全く空氣の流通を謝斷し得べき場處に於ては、二硫化炭素を以て燻蒸すべし。大抵、室の面積一千立方英尺に對し、壹磅の量（液躰にせるもの）を用ゐれば、蜚蠊を殲滅すべし。之れを行ふには、管を厨房、小室等に通じて、此瓦斯を送るにあり、但し此際室内には、些少の間隙ども存せざる樣注意すべし、若し間隙ありて、空氣の流通を許すときは、全く無効に屬するものなり。小船の如きは其入口を閉ざして之を行ひ、二十四時間を經ば、飛蠊其他の害蟲を殄滅すべし。然れども此瓦斯は、火に逢へば、忽ち爆發するものなれば、十分の注意を要す、且又他の高等動物をも致死せしむるものなれば、燻蒸後は、直ちに空氣を流通せしめざる可からず。

チヤバ子　アブラムシの圖

除蟲菊類（Pyrethrum）を用ゐて燻蒸すれば、爆烈の憂ひも無くして安全なり、但し室内を密閉して六時間乃至十二時間を經過するを要す。此法は除蟲菊粉末を用ゐるよりも有効なり。火藥の煙も、亦蜚蠊には有害にして、之を殺し得べし、故に適宜に之を使用すれば、驅除に際して有効なり。

前述の如く、蜚蠊は雜食性たるに關はらず、毒を混ぜる食物を識別する能力ありと云へば、少量の砒を混ずるも、直ちに見出し得べし。嘗て農務省のクロス製書冊を入れたる文庫より、蜚蠊を絶滅せんとて砒を混じたる糊を用ゐたりしに、彼等は少しも之を食はざりき。而して此法は一般にチヤバ子　アブラムシに對して適用せられたるが、不注意にして智覺の鈍き、大形の蜚蠊に對しては其効力少かるべし。

其他の驅除法にて有益安全なるは、燐糊を用ゐることなり、此糊は百分の一乃至二の燐を混じたる粉糊にして、時には丸藥の形となせるもあり。之を紙片又は厚紙に擴げて蜚蠊の出入する處に置く時は、其

毒分の存在せん限りは、之を殺戮することを得るなり。
係蹄を用ゐて捕獲殺戮する法も種々あり、佛蘭西にて行はるゝ法は、箱の内に蜚蠊の嗜む食物を入れ置きて、之を招誘するにあり。其の箱の蓋は各面縁より斜めに中央に向ひたる四枚の硝子片を以て、唐箕の漏斗狀に裝置せられ、一度此の内に陷れば、還た匍ひ出づること能はざらしむ。英國に行はるゝ單簡ある方法は、木造の箱の上部に圓き孔を穿ち、これに硝子環を嵌め置きて、同じく脱出すること能はざらしむ、斯くて夜間、此内に陷りたる蜚蠊は、翌朝熱湯を注ぎて之を殺すにあり。又ロンドン其他に於て使用せられて最も有効なるものは、深き瓶又は壺の類を以て陷穽器に充て、其口の邊縁よりは、數多の細棒を中心に向ひて突出せしめ、其尖端を少しく下方に曲ぐること、恰かも我國の鰻搔の製の如くになせしものなり、器中には古き麥酒等を入れ置くに過ぎざるも、翌朝多數の蜚蠊が横はり、或は死し居るを認むべし。又外に簡單なる一法あり、即ち石膏末一分と、麪粉三四分の混合物を、小礫等に入れて蜚蠊の多き處に置き、其傍には水を盛りたる他の平なる盤を置き、双方を接續せしむるに木片等の小橋を以てし、尚其盤の縁に近く薄き木片の一二葉を浮ばしむるにあり。斯の如くする時は蜚蠊は確かに此混合物を食ひて渴を感ずるの餘り、橋を越え、木片に移りて水を飲むべし。斯くすれば、則ち腹中の石膏に水を得て、固着せしむるが故に蟲腸を害するや言を俟たず。此方法にして都合よく行はるゝときは二三週間にして此害蟲の消滅するを見るべし、而して其死躰は生存者の食餌となるなり。
凡そ上に述べたる如き種類の係蹄を、厨房等に置くときは、疑ひもなく多數の蜚蠊を殺戮し得べし、而して此等の方法は、不便なる除蟲粉や、又は混毒食物を用ゐるよりも、却て効果多かるべし。（完）

◎杉毛蟲の話（後）

（第拾貳版圖參看。於大日本山林會第十五總會演説）　林學士　今川唯市

私は今この杉毛蟲の形體、特性等に就きて、學術的に御話しを致すのでなく、唯私の居りまする地方の山に、此蟲が突然現はれまして、忽ちの間に、大部の森林を蝕害致しました故、之れが事實の儘の大畧を報告的に御話し申上げて、聊か御參考に供する積りであります。

さて近時、我國に於て漸次殖林の聲高まり、各地に於て諸種の樹木を栽植致しますが、其中で最も盛んに植栽せるのは杉樹だと思ひます、勿論、杉は日本の林業上、極めて大切な樹でありまして、其需用の途の如きも、諸種の木材中最も廣く、或は造船用として、或は電柱として、又桶、樽類、其他器具材として、將た又家屋建築材としても、杉材の需用さるゝ方面は實に廣いもので、此點から申すも、杉の造林事業の發達と不發達は、我國の林業上は勿論、延いては國家の經濟上に、少なからざる影響を及ぼすこととなりますから、此樹林の保護と云ふ點には、特に注意を要することと考へられます。凡そ何れの林木に對しても、或は其生長を妨たげ、或は時として之を枯死せしむる所の害蟲のあるものでありますが杉樹に對しても、種々の害蟲がありまして、即ち其幼苗の際にありては、夜盜蟲、金龜子の幼蟲又はハリガネ蟲等が根部を蝕害し、又成木してからは、或種の穿孔蟲の材身を害するのがあります、又杉金龜子の如きは、盛んに杉葉を害することと其例甚だ多いのであります。併しながら、私の考ひを以てすれど杉毛蟲ほど杉林に對して恐ろしいものは無からうかと思ひます。然るに此蟲の事は、今日までの處にては餘り世の中に知られて居らなかつたのです、私も蟲の事ハ甚だ暗いのですが、亞米利加などではジプシィ　モスと云ふのが、濶葉樹林を、獨逸にてはノンネと云ふのが、唐檜の林を、又我邦に於ては松毛蟲が松林を盛んに蝕害するなどが、先づ森林蟲害中の主なるものかと存じて居りました。所が丁度本年の八月下旬の始め、私は鄕里に居りました處が「森林に害蟲發生せり、急ぎ歸れ」との電報に接して歸つて

山の中に入つて害蟲發生地の實際を目擊するや、非常に驚いたです。實は杉林に害蟲が附いたと云ふとですから、其れは多分、先年山口縣柳井津地方の杉山に付いた事のあるものと同じ金龜子の類であらうと思ひ、薄々驅除法抔も考へて山に入りましたが、豫想は全く外れて、蟲は杉毛蟲であつたのと、又其の加害の有樣の激猛なるとに驚き入りました。第一に目に觸れたものは、蟲糞で、殆んど林地上剩す所なく一面に被はれ、其厚さ平均二分位ゐ、猶梢上よりは絶ゑずボタ／＼墜落する排泄物と申したなら、恰かも雨霰の降下するやうな有樣、特に其音は幾百万頭の蟲群が盛んに杉葉を蝕害する、所謂蠶食の音と相和して、一種凄愴たる響をなし、又何れの樹幹を見ても、幾百の毛蟲は先を爭ふて急がしさうに匍ひ上る、是亦隨分見事なものでありました。扨此際に當り、如何なる方法に依て、此の可驚多數の毛蟲を驅除せんか、固より樹幹にタールを塗りて、毛蟲の上るを遮ぎるの方もありますが、最早毛蟲の大部分は既に樹冠で以て盛んに蝕害をなしつゝある時でありますから、是も駄目、さりとて竿を以て樹冠の蟲を打ち落さんか、其中々高きを如何せん、去ればこれも適はず、然りとて他に何か好き方法はあらんかと、少時が間考へ居る間に、向ふの方から、異樣の音響を立てゝ參つた一隊の人々がある、何事やらんと見ますと、鐵葉鑵、即ち石油の空鑵を柄の長き槌もて打鳴らしつゝ被害地を巡行するのであるから段々其譯を聞きますと、是は斯くすると杉樹の梢上に居る蟲共驚て忽ち落下するからだと申すので、直ちに目前に於て試みさせたるに、果して其言の如く落ち來る蟲は恰かも急雨の降る如くで、實に幾萬と云ふ蟲が、一時にバラ／＼落下するのでありましたから、其時は非常に愉快に感じました、其時彼等は柄の長き槌を以て樹幹を匍ひ上る蟲を撲殺し、又足を以て頻りに地上の毛蟲を踏殺しましたけれども中々容易な仕事ではありません、到底殺し絶した話でありません、依然樹冠の上にも、地面にも、又樹幹の部にも、毛蟲は多數殘つて居つて、中々眼に視えて減耗したと申す迄には往かず、蟲は更に屈せずして盛んに蠶蝕を續け、猶ほ風の方向に從ふて次第に隣地に移り、以て其蝕害區域を擴めんとするの勢ひがありました、蓋し此の有樣で若し數年間も繼續するの不幸に會ひました日には、其損害や實に莫大なる事であります。併しながら何れの生物にも、一時の天候に乘じて發生し、俄かに其繁榮を極むるものに對しては、必ず又之れを妨碍するものゝ自然に生じ來るもので、杉毛蟲に於ても此理の範圍を免るゝ事が出來ません、忽ちにして數多の强敵に出會ふことなりました、强敵とは何物ぞ、曰く寄生蟲、曰く黴菌等であります、即ち寄生蟲にありましては、寄生蜂及び寄生蠅の數種が盛んに集まつて參りまして

或は毛蟲の背部を、或は腹部をチク〳〵刺して、其所に自分等の卵子を産込むことが夥しく、一方には又白色の黴菌が盛んに害蟲を犯し來り、爲めに害蟲の斃死するものの數は幾十百万なるか算へきれん程で加ふるに前申せし通り、石油の空罐を打ち鳴らし、或は喇叭を吹きて害蟲を驚かし、之れを樹冠上より落して踏み殺す人々もありたるが爲め、一時は非常なる勢を示したる害蟲も、今は早や四面皆な敵、到底滅亡を免れざる樣に至りました。斯くて天然の驅除即ち寄生蜂、寄生蠅及び黴菌の攻擊と、人爲の驅除とは相助け相待つて、着々其効を奏し、僅々五六日の間に、毛蟲の大部分を夷らげました。然し此場合に成りましても、毛蟲の健全なるものと、及び寄生蟲又は黴菌に犯され乍ら猶生活力を存し居るものとは、孰れも薄き繭を樹上杉葉の間に作りましたのが多くありまして、即ち毛蟲の數は大に減少しましたけれども、蛹と化して樹上の繭の中に眠れるもの亦稍や多きを認めました。仍て樹上に登り又は杉樹を切り倒し採致して、蛹を取りて撿査致したるに、其百匹の中に十三の生存者あることを確かめました。即ち凡そ百分の十二三は當時生存致したるも、其餘のものは、皆腐敗して黑色となり、又は黴菌の爲めに白色を呈して居りました。勿論生存せる分と雖ども、多くは寄生蟲の卵子を體内に有するか、又は病氣に罹り居るもので、此等は到底蛾化する丈けの力はなきものでありますから、眞に健全なる有樣を以て蛾化せし數は、蓋し全蛹の百分の二を超へざる事と信じます。斯くて蛾は交尾を爲したる後に、杉葉に産卵するもあり、又交尾せずして直ちに産卵するものもありまして、其交尾せずして産みたる卵は孵化しませんが、否らざるものは悉とく孵化して黑色の幼蟲となりました。此時もし其幼蟲の數多かりせば、毒液を注ぎて之れを殺さんかとも考へましたが、何分其數が少なく、且つ六七間もある樹上のことでありますから、明かに見ることが出來ません、それで此法を施すことは見合せました。此の如き次第なるを以て、最早や驅除の手段は之れを止めて專ら孵化せる幼蟲の經過に就いて注意して居りました所、段々氣候の寒くなりし爲め、幼蟲は非常に不活潑となり、中には斃るゝものさへあるに至りました時にカツコー、ホトヽギス等の鳥類も、之を食せるものと見へまして、漸次に其數を減じ、十月中旬に至りて殆んど其存在を見付けることが出來ん樣に成りました。

次に此蟲の驅除法に就きましては、其發生せる林の狀態に依て一概には申し兼ますが、其森林の年齡が幼くして、地面上僅かに高さを有し、人の手の容易に達する事を得る林でありますれば、捕掬器で蛾又は毛蟲を取るも宜しい、木を振りて毛蟲を落し、踏み又は撲ち殺すのも宜しい、又卵を産付けてある枝

蟲害杉樹年輪比較圖

（イ）は被害後發育不良の年輪（ロ）は蟲害前年までの年輪（ハ）は中心（ニ）は杉皮

葉を切るのも宜しい、繭のある枝を切り取るも宜しい何れにしても其手段が容易であります。併しもし林齡が稍高く、十三四年生以上の林になりますと、之が驅除法に困難を感ぜまして、前法の如きとでは、到底奏効の見込がありません。此場合に於ては春期毛蟲の樹幹に沿ふて上らんとする際に、タール又は其混合物を、幅凡そ一尺位ゐに樹幹の目通の處に帶の如くに塗置きまして、毛蟲の樹上に登るを遮ぎるのが宜しい（此タールの混合物にて、近來獨逸國にては「ラウペンライム」と稱する液を使用し、其結果甚だ良好なる由）若し又旣に毛蟲が高く樹梢上に登りまして、盛んに杉葉を蝕害する場合でありますれば、前申せし如く、鐵葉鑵を叩き喇叭を吹いて毛蟲を地上に落下せしめ、之れを撲殺又は踏殺すのが最とも宜しい。蛾、蛹、及び卵に向つては樹を切り倒せば格別他に殆んど之れを取るの良法がありません、火を林中に燃やすも蛾の來るのが極めて少なうありますから、誘殺法が良法に非る事を認ました。只此蟲を豫防するには第一、初め造林する際に、勉めて他の樹種を混植するが宜しい、即ち杉と扁柏との混淆林を造るが如きは最とも妙で、若し經濟上又は土質上の關係から、混淆林を造るの大に不得策なる場合には、杉の單純林を造るは已むを得ざる次第なれども、此かる場合に於ては杉林中、適當の個所を選びまして扁柏又は他の樹種を、幅十間乃至二十間位ゐに帶狀に植栽致し（多くの場合に於て峯より谷に向つて）以て縱令害蟲の發生することあるも、此防禦線を超へて他に蔓延することを得ざらしむる樣にするが得策であります。第二、は林の手入及び拔伐を怠らざることで

是亦害蟲豫防上忘るべからざる要件であります。

次に此害蟲に罹りました林木、即ち杉の被害木の處分は如何致すが得策なるかと云ふに、此處分と云ふに就ては、第一に此林木の年齢に就て考へ、次に被害の程度に就て考へなければなりません、即ち被害林木の年齢が、殆んど伐期に近づき居るか、又は之を伐採するも、十分使用の途ありて相當の價格を以て賣却することが出來る塲合でありますれば、之を伐採して然るべきでありますが、若し之れに反して、縱令之れを伐採しても賣口が無いとか、又は之れあるも甚だ廉價で到底算盤の立たぬ時は、先づ見合せものである。此に於てか、被害後に於ける林木の生長量は如何との問題が起らざるを得ざるのであります。私は今より八年前、即ち明治二十七年の夏より秋に亘り、杉毛蟲の害に罹りましたる杉林（吉野郡宗檜村）に入りまして、一木を伐採して生長の有樣を撿しました、處が被害前四ヶ年分の生長量と、被害後八ヶ年分の生長量とは、殆んど同量なることを確かめました。即ち被害後八年掛りましても、被害前の四年分丈の生長に留まるものとせば、既に四ヶ年分の生長量は、丸で失損せる譯で、被害林地は四ヶ年程一物も産せざるに等しいのである、假りに一町歩の一ヶ年の平均生長量を三十尺〆と致せば、四ヶ年分は即ち百二十尺〆であります、是は僅か一町歩のみの損失でありますが、況んや被害木は被害後八ヶ年で以て、全く元氣を回復し得るものではありません、猶ほ幾年間も、否な其林木の一代間は、終に不完全なる生長を免れ得ざるものでありますから、一旦蟲害に罹りましたる時には、大抵の塲合に於ては、可成林木を伐採するが却て利得である、是れ一には經濟上の得策たるのみではありませんで、又害蟲驅除の一助ともなることでありますから、山林の所有者は徒らに其林木の枯死せざるを幸ひとし、何時までも之を林地に存立せしむるは愚の至りである事を知らなくてはなりませぬ。（下略）

因に云ふ、吉野地方の山林中比較的林業の進歩せる部分、即川上小川四郷等諸村の人造林では、林地の位置及び土性上の關係から、自然に杉、扁柏の混淆林を造り、若くは谷に近き部分に杉を、峯及び峯に近き部分に扁柏を植栽し居りまして、又能く其土地を選び、且つ一般に手入の行屆き居る爲めに自然に害蟲の豫防は立派に出來て居る、此かる所に害蟲の發生することは殆んどなかるべく、只縱令之れあるも蔓延するの虞れなかるべきことを信じます。

雜錄

在岐阜市　長野菊次郎

◎六足蟲雜俎（人の卷）

(か)蟻の多形　蜜蜂の一群に、雌性なる女王と、雄性なる蜜奴と、雌性にして生殖作用を營まざる職蜂の三形あることは、人の知る所なるが、蟻には一層の多形を有せり。即ち有翅雄蟻、職蟻狀雄蟻（無翅）有翅雌蟻、職蟻狀雌蟻（生殖作用を營むもの）雌職中間蟻、兵蟻、大職蟻、小職蟻の各種是なり。但し一種にして盡とく此多形を有するにあらず、多きは五六形を有し、少きは二形に過ぎざるものあり。

(よ)蟻の種數　世界に產する蟻族の全數につきては、余未だ之を知らずと雖ども、大蟻亞族（Camponotides）に屬するものゝみにても、八百種以上ありといへば、其全數の千位以上あるは論を俟たず。而して英國には、十四屬三十八種を產すと云へり。

(た)蟻の蛹　蟻の蛹には、繭の内にあるものと繭を營まずして裸躰のまゝなるものとあるが、其理由に至りては未だ明ならず。然れども、概して刺劒を有するものは繭を作らずして、刺劒を有せざるもの之を營むが如し。併し赤蟻の一種 Formica fusca には、繭を有する蛹と、之を有せざる蛹とあれば、獨り前例に反するのみならず、其理由の説明に至りては、一層の困難を感ずるものあり。

(れ)蟻の複眼　蟻の複眼を構成せる小面の數は、性によりて異れり。例へば、ホルミカ　プラテンシス(Formica pratensis)にては、雄は殆んど千二百にして、雌は八百乃至九百、職蟻は六百位なりと云ふ。

(そ)蟻酸　蟻は、顎を以て嚙みたる傷口に注ぐに蟻酸を以てし、被害者をして、大に苦痛を感ぜしむること少からず。蟻酸とは、化學上 CH_2O_2 の分子式を有するものにして、赤蟻を蒸溜して得るが故に此名あり。或る國民は、酸き味を取らんが爲めに蟻を嚙むことあり、又レモン汁の味を有すとて、乳酥(Cream) の代りに用ゐることあり、佛國の南部に於てすら、現に蟻の乳酥を用ゐる人民ありとは、豈驚くべからずや。

(つ)蟻の越年　蟻は概して冬の極寒の間は、巣に潜みて冬眠をなし、此間は食物を取ることなし。然れども、或る少數の種は、嚴寒中も冬眠をなさずして、蚜蟲と共に蟻垤中に籠る、熱帶地方に於ては全く冬眠をなすことなし。

(ね)化石上の蟻　蟻族は地質學上、膜翅目の中にて、最も早く現はれたるものにして、第三紀に於ては、昆蟲類中最も多數を占めたるものと思はる。米國のフロリスサント(Florissant)に於て發見せられたる多數の昆蟲化石の中、其四分の一は蟻族の爲めに占められ、又歐洲の第三紀層にも、多數に之を存し、マイア(Mayr)氏の如きは、琥珀中に含まれたる千五百以上の標本につきて研究を遂げしとなり。(完)

◎食蟲植物 附千葉縣下に於ける好産地

在東都　林　壽　祐

本邦産食蟲植物にして、能く調査せられたるものは、昨今まで四屬十四種と稱せられ、茅膏菜屬にイシモチサウ、ナガハイシモチサウ、モウセンゴケ、コモウセンゴケ、ナガハノモウセンゴケ等の五種あり貉藻屬にムジナモの一種あり、狸藻屬にタヌキモ、ノタヌキモ、コタヌキモ、ミミカキグサ、ムラサキミミカキグサ、ホザキミミカキグサの六種あり、ムシトリスミレ屬にムシトリスミレ、カウシンサウの二種あり、茅膏菜屬及び貉藻屬は、共に離瓣花にして、狸藻屬及びムシトリスミレ屬は、共に合瓣花なり。是等の植物は、根の發育十分ならずして、窒素含有物の分量不足なるより、更に微小なる動物を捕殺し、以て其屍躰より滋養分を吸收するなりといふ。而して其蟲類を捕獲するの方法に數樣あり。茅膏菜屬の如きは、葉面に細毛を生じ、毛端より粘液を分泌して蟲類を膠着し、貉藻屬の如きは、葉は蝶鋏となり、自在に開閉し得るを以て、貝の如く閉合して蟲躰を挾み、狸藻屬の如きは、數多の小囊を具へ微蟲の浸入するを竢ちて入口を閉塞し、ムシトリスミレ屬の如きは、稍長大なる葉面に粘液を湛へ、蟲類の粘着するや、多少まくれたる葉縁にて抑制し、これをして逃去ること能はざらしむるなり。是等の植物の爲め捕食せらるゝものは、陸生にありては、主に蚊、蠅、蚋の如き昆蟲なれども、水生にありては、微細なる甲殼類及び他の幼蟲等なりとす。元來食蟲植物は、窒素含有物の不足を補ふに起因せしものなれば、唯に生活せる動物に止まらず、蛋白質に富める禽獸の肉片を與ふるも、また能く消化すといへり。

食蟲植物中、最も普通に吾人の眼に觸るゝものは、タヌキモにして、到る處の水田と沼澤に生ず、是は稻田にありては、農家に嫌はるゝ水草にして、其浮漂する狀、恰も狸の尾に似たるより名けられしものなり、夏月長軸を出し、黄色なる美花を開く。而して最も珍らしきは、ムジナモ及びカウシンサウなり。ムジナモはタヌキモの如き水生草にして、明治二十三年五月に本草家牧野富太郎氏が、東京を距る三里武州伊豫田村(下總國市川附近)の沼中にて發見し、同地は本邦唯一の産所なりしが、近來利根川の水域内各地に産する事愈明白となれり。カウシンサウは、ムシトリスミレに能く似て小さく、同じく明治二十三年の八月、理學博士三好學氏が、始て下野國庚申山の岩上に於て發見し、未だ他に産地あるを聞かざるもの。モウセンゴケは濕地に生じ、其の密生せる狀密から毛氈を敷きつめたる如きより名けられしものにて、本邦各地に産す。イシモチサウは古より知られたる種にして、餘り珍らしからず。ムシトリスミレは産地尠なからざれども、高山に生ずるを以て珍草と稱せらる、東京附近にては、上野國赤城山に産すといふ。ミミカキグサ、ムラサキミミカキグサ、ホサキミミカキグサは皆濕地に産し、其分布はやゝ廣し。

乙ゝにムジナモ、カウシンサウに次ぎ、産地尠なく今猶珍重せらるゝは、ナガハイシモチサウ及びコモウセンゴケ、ナガバノモウセンゴケの三種とす。ナガハイシモチサウは、外形イシモチサウとは大に異なり、葉頗る長く粘液多く白光を放ちて美觀なり、産地僅少にして、上總及び三河、尾張、常陸の數國及び臺灣等に過ぎず。コモウセンゴケは、モウセンゴケよりは遙に小にして、花葉共に紅し、三河豊橋附近には多く産し、その外上總及び伊豆の海岸琉球、臺灣にも産す。ナガハノモウセンゴケは、本邦極めて稀有の種にして擇捉島及び岩代國南會津郡の二ケ處にありと云へり。上總國一宮海岸に沿ひて一帶の松林あり、一宮川に近かき處俗に御林と稱す。低濕にして矮草の間には數種の食蟲植物を生ず。『其中ナガハイシモチサウの如きは、他に多産せず、且つ一宮は東京附近(陸路約二十一里、今は汽車の便あり)なるを以て食蟲植物の産地として、雜誌に教科書に、其名嘖々として世に知らる。爰に一宮海岸を距る東北二里許りにして一廣野あり、里人おこなば長吉野と稱し長生郡鶴枝村下永吉區の共有に係る。地は同郡茂原町永吉新田に屬し、廣袤略ぼ五十町に達し、猶大芝

(コモウセンゴケ捕蟲圖)

野、早野新田野等之に連る、皆低濕にして處々に溜水あり、開墾の價値なきにや、僅に小松と雜草の短生するを見るのみ（房總鐵道は斜めに其一隅を橫ぎれり）。今茲三十五年七月二十七日、予は植物採集を此草野に試みしに、豈圖らんや、食蟲植物滿野に散生し、其數頗る饒多ならんとは、此日予が採集せしものを擧ぐれば。

茅膏菜屬
- イシモチサウ　Drosera. lunata.
- ナガハイシモチサウ　D. Indica
- コモウセンゴケ　D. Bruma nni

狸藻屬
- ミミカキグサ　Utri Cularia. bifida
- ムラサキミミカキグサ　U. affinis

即ち二屬五種に止まりしも、猶此草野及び近傍の林野を詳しく探求したらんには、更に他の種類あるやも測り難し。而して此近傍の低野松林に、最も著しく繁生するものを、イシモチサウとなす。予が永吉野に採集せしは、七月下旬の盛夏なりしかば、ナガハイシモチサウ、コモウセンゴケの旺盛期に當りしが其の粘液夥しく、宛然露滴の觀を呈し、一見他の雜草と異なる所あるを知りき。何れも蚊の如きものを粘着せしめ、白蝶等やゝ大形なる昆蟲といへども、一たび其足を粘着けらるゝや、容易にまた逃れ去る能はず、恰も鳥類が黐枝に苦悶するそれにも似たりき。而して食蟲植物の產する處、他に比しては微蟲の多きものの如し、是れ微蟲饒かなるを以て、食蟲植物の繁生するものか、抑もまた食蟲植物に適良なる誘引物ありて、爲めに微蟲を集來せしむるものか。吾人は食蟲植物が、如何程の効益あるやを知らず唯強ひて云はしめば、害蟲驅除の一益ありと答へんのみ。千葉縣下の食蟲植物の產地に就ては、予は永吉野を以て、一宮海岸に優る好產地なりと信ず、而して千葉縣下に於ては、猶ほ他に食蟲植物の良產地尠なからざるべしと想ふなり。

◎本邦昆蟲研究家叢話　（其十）

古奧　靑蓑白笠の人

◎後藤梧桐菴先生の博見　先生は江戶の人なり、其家世々藏書家を以て知らる。幼にして篤學、每に好で本草を讀み、深く造詣する所あり。謂ひらく、天地間の山川草木、禽獸蟲魚、殆んど此に盡く、名物多識の學これに如くもの莫けん、それ千金の裘は一狐の腋にあらず、大厦の材は一丘の木にあらず、物乏しければ則はち其功用を成すこと難く、物蓄ければ則はち其名稱を諳じ難し、獨り明の李東壁に至りて本草成り、品物大に備はると雖ども、李氏の學たる靑囊に專にして、醫藥外に於ては略して載せざ

るものありと。遂に本草綱目補物品目錄二卷を著し、庶物の和漢名を對譯し、且これに略解を附して其出典を擧證せり。尋で名物學の範圍の錯雜なるを論じ、新に物產學を唱道しぬ。蓋し稻生氏は、醫學より藥物學を特立せしめ、先生は藥物學より博物學を特立せしめたるものと謂ふべきか。先生また和漢風土の不同より、動植鑛諸物に不同あるを看破し、和產目錄を著して、邦產を網羅し、物品目錄と相俟て辨物識名に資せしむ。董可亭の叙に、余來于日本也、寓居長崎之客館、有人携一書示余、題曰物品目錄

閱之、則日本江戶處士後藤子者之所著也、其爲書也、有前後編其前編所載、草木金石禽獸魚鼈、殆千有餘種、則我華夏之所有而補李時珍本草者也、其後編也、蓋日本之所產、而時珍氏所未載者也、部品亦共千餘種矣、(中略)嗟、日本學問之隆也、固當有博物如斯人也、余嘗聞、時珍之本草、甚行于日本、而竊疑風土之不同、本草亦無所遺乎、幸有此書而能足之、可謂大功成矣」とあるは則はちこれを指せるなり。先生才藻卓絕にして、平賀氏と親交あり、又その著に合鑑本草、左傳名物解、隨觀寫眞等、斯學に稗益するもの多し。明和八年四月八日、享年七十五歲を以て歿せり。名は光生、字は梨春、太仲と稱す。父は龜運氏、九十餘の頽齡に至るも、なほ矍鑠たりきと云ふ。

◎太田大洲先生の英特　先生名は澄玄、字は子通、別に崇廣堂と號す、江戶の人、外家を嗣ぎて、太田氏を冒せり。父は元浩氏、世々醫藥を以て名あり。偶々享保六年春、松岡氏幕命に應じて江戶に到り醫館に藥品を鑑定す、元浩氏從ひて本草の要旨を學修し、乃ちこれを先生に授けぬ。先生丫角にして穎悟、頗ぶる聲譽あり、本草を父に受くるに及んで礪砥怠らず、晩に至りてます〱該博精詣、其見殆んど前輩を凌げり。是より先、本草を攻むる者は、率ね窮搜博討、遍ねく珍異を盡すを以て本領となせり先生はすなはち神農本經を以て主となし、常用物品に就て、名實を甄覈し、精粗を辨訂し、その鶩博不急の辨、鑿空未核の說は、概ねこれを屛斥に附し、以て一に醫療上の益を圖りき。零々たる一介の後進を以て、稻生、松岡、小野、田村、栗本の諸名家と名を等しふするに至りしは、蓋しこの英特の質あるに因れるなり。先生陋巷の敝廬に賃居し、終身他に移らず、わづかに一室に坐臥し、常時臥具を設けて意に愜はざる者の來り訪ふことあれば、輙はち被を覆ふて臥し、その會意に値へば、圖書藥物の間にあ

りて塊然自から樂しみき。然れば學生を爲めに、近隣の佛寺を借りて、本草の正義を講せしが、聽者常に堂に滿てりきと、以てその物に拘束せざりしを證すべし。先生に兄弟數人あり、皆貧窮なり、毎にこれに衣食を給して吝厭の色なく、又隣里に困乏者あるときは、之を資導して藥草を種栽せしむ、爲めに生計を得たるもの數十戸ありき、其倫彝の道に篤厚なる、世に多く儔なかるべし。著書多し、神農本經臆斷、本草綱目示蒙、本草臆斷、救荒本學臆斷等あり。寛政七年十月十二日歿す、年七十有五。（完）

蓑笠子云。本邦昆蟲研究家叢話に列叙すべき學者は、他になほ多く、貝原益軒、木村蒹葭堂、栗本丹洲、山本亡羊、福山德潤、內山覺中、小原桃洞、畔田翠山、飯室樂圃等十餘家に下らざれども、本誌第六卷の完結とゝもに茲に記事を中止し、餘は時機を窺ふて之を續載することゝなさんとす。覽者これを以て、故人を網羅せりと見做すことを勿らんことを。

◎先づ昆蟲學の思想を養成すべし

福岡縣　北豊老人

害蟲驅除に就き地方廳は訓令を發布し、驅除實施の日割などを定め、當日は郡吏及び村役人に出張を命じて之を監督せしむる等の如きは、用意周到のことと云ふ可きなり。されど往々其驅除時期の適合せざる爲め、意外の好果を得ざるのみならず、反て農家をして其訓令を遵守すること能はざらしめ、遂に犯罪者を出すに至るは遺憾と云はざる可らず。之を眞面目に考ふるに、害蟲てふ生物は、必ずしも行政官の定められたる日割の如くに、一定の期日を以て、一定の場所に、一時に發生するものにあらず（勿論發生經過により或時期は他の時期より多し）、故に之を驅除するに日割に拘束するか如きは、蓋し出來得べからざるものゝ如し。若し農家が斯の如き日割害蟲驅除の法に則とり、郡吏村役人の指揮によりてのみ動かんか、假令本年の如く天候の制抑によりて害蟲發生の少なき年と雖とも、尚ほ其被害の爲めに我が九州一圓に於ける豐作をは期すべからざりしなり、幸に農家が害蟲特に浮塵子の恐るべきことを知り居ればこそ、訓令を俟たずして自ら進んで注油驅除に努め、加之天候の助力ありて例年に比し害蟲少なかりしなり。要するに害蟲驅除監督にのみ巨費を消耗せんよりは、寧ろ農家の智識を開發し、一般農藝に關する教育普及の途に其幾分を抛ちなば、啻に其得る處大あるのみならず、法律の罪人をも多く作らざるに至るべきなり。左に記載する所のものは、過日篤志の某農家が、余の許に贈れる書信の一節にして、其着眼着實に頗ぶる當業者の注意を促すに足るものと信ぜれば、こゝに序言を添へてこれを雜誌昆蟲世

界に寄す、幸ょ數頁の餘白を割愛せよ。

（前略）地方廳は害蟲驅除勵行の爲めに、嚴重なる法律を以て致し候も、我郡下（築上郡）の如きは、其法令に則るは尙ほ火災后に水を用ゆるの感なき能はず候、現に去る七月の如きは、浮塵子驅除期日を豫定し置かれ、郡吏の出張ありて前後四回之を施行致さしめ候ひしが、偖この日割驅除は、決して完全に出來候事とは申され難く候、其故は郡吏の出張ありて、第一回の驅除を行はしめしとき我村落の如きは、既に二回注油驅除を施行したる后の事に候。去れば郡吏員の所謂第一回の好時機と思料せらるゝ注油驅除は、我等にとりては第三回ぶりなる次第に候、若し我等にして郡吏員の云ふ第一回の時迄、注油驅除を放擲致候はんには、本年に於ける浮塵子の加害は、去年よりは一層大なりし事と存候。此の如き次第に候得ば、第一回害蟲驅除などゝ郡役所より通達し來り候驅除は、丁度火災后の用水と申しても不可ならずと存候。尙ほ甚だしきは、其注油時期にあらざるときに來りて、無理に法律ぜめにて注油を行はしむる事にて、若し之に應ぜざる時は、則はち違法者として罪人視せらるゝ事に有之候、餘り智識のなき愚民どもの事とて誠に困難を感じ居申候。要するに何もかも、法律と申すよりは、寧ろ敎育を先に致しては如何のものに候や、御互に害蟲の恐るべきものであると謂ふ事を知り、其驅除の必要を自らわきまへるだけの智識がある樣になれば、無理に警官迄を害蟲驅除に使用するの必要は無きに至るとかと存候、兎に角農民一般に昆蟲學の智識が備はらざる前は、如何なる法律ぜめに致され候ても、害蟲驅除の完全に出來る樣にはなり不申と斷言するも、敢て不可なかるべくと存ぜられ候。云々

◎大分縣大分郡害蟲驅除成績

大分縣大分郡　小野覺太郎

左の二表中、第一は大分郡內高等小學校生徒の捕獲採摘したるものにして、主ょ本年の苗代期ょ於て實施なしたる成績を示し、第二表は大分郡內各町村當業者の採集なしたるものよして、苗代期より稻成熟前迄に實施せる總數とす。即ち誘導的學生採集に於ては螟蛾七千六百六十九頭、螟卵塊二万三千七百十二顆、同幼蟲四百二十六頭其他を獲、隨意學生採集に於ては螟蛾四万六千百十七頭、螟卵塊八万五千二百八十九頭、同幼蟲五万五千六百二十四頭其他を獲、當業者に於ては、螟卵塊百五十六万二千七十顆と

枯莖の百八十六万九千八百九十九と死穗の百十二萬三千八百七十六莖を除却せるものと謂ふべし。

件名	挾間小學校	植田小學校	戸次小學校	鶴崎小學校	庄内小學校	計
教師が生徒を引率して捕獲せしめたる數及其面積						
螟蛾	六〇〇	三,五〇〇	(生徒各自捕獲の數中に含む)	一,四六九	二,一〇〇	七,六六九
螟卵塊	七五〇	二,六〇〇		二,三六二	一,八〇〇	一三,七一二
螟幼蟲	不詳	四二六				四二六
浮塵子	同	三,二五〇				三,二五〇
稻蝨	同	一,二六〇匹		三合		一,二六〇匹 三合
葉捲蟲	同	五六三		一,二九八		一,八六一
右田面積	一五畝	二〇〇	不詳	不詳	四〇	二五五
生徒各自隨意に捕獲せしめたる數及其地方區域						
螟蛾	一〇,七一〇	二三,〇〇〇	九,一一三	一四九	二,一四五	四五,一一七
螟卵塊	二五,四九三	三〇,三三四	九,七〇三	八五〇	一八,九〇九	八五,二八九
螟幼蟲	一五,三三〇	八,二四〇	三〇,〇〇〇	二,〇六四		五五,六三四
浮塵子	二斗餘	二六,五二四				二六,五二四匹 二斗
稻蝨	二五,四七〇	四,二七二				二九,七四二
葉捲蟲	六八七	五,三五〇	四二			六,〇七九
椿象	一,二五〇	一四	七八八			二,〇五二
紋白蝶	八五〇					八五〇
蛾類	一七,〇六七					一七,〇六七
稻青蟲			一,〇六四			一,〇六四
其の他				四五二	一五,〇〇〇	一五,四五二
右捕獲の區域	本學校組合内五ヶ村	同上	同六ヶ村	同六ヶ村餘	同五ヶ村	二十七ヶ町村餘

町村名	螟卵數	心枯數	穗枯數
大分町	八,〇〇〇個	九,〇〇〇本	一,五〇〇本
河原内村	一〇,〇〇〇	五〇〇	二〇〇
西大分町	一四,〇〇〇	一〇,〇〇〇	九,五〇〇
竹中村	八,七五〇	一八三,七五〇	四六,二〇〇
八幡町	二三,〇〇〇	三五,〇〇〇	一五,〇〇〇
東植田村	二八,〇一〇	三三,一七〇	四一,三五〇
荏隈村	五七,九二〇	五四,八二三	五,七二三
植田村	不詳	四八,〇〇〇	二〇,五〇〇
豐府村	四,三三七	一九,五〇〇	三,九〇〇
野津原村	八〇,〇〇〇	一三〇,〇〇〇	二一,〇〇〇
瀧尾村	一,五一五	五〇,六五〇	一,五八〇
諏訪村	一八五,〇〇〇	—	—
東大分村	三四,四〇〇	不詳	四,三八〇
西植田村	四四二,二〇〇	一七八,八〇〇	一八四,五二〇
日岡村	五八,〇〇〇	四,五〇〇	四,〇〇〇
賀來村	二四,〇〇〇	五一,七五〇	三七,二五〇
桃園村	八,七〇〇	三八,〇〇〇	三〇,五〇〇
石城川村	四三,三〇〇	七,五〇〇	七,〇五〇
三佐村	一二八,七〇〇	一六〇,〇〇〇	五五,九〇〇
由布川村	二三,八四三	三一,九三〇	三五,七〇〇
鶴崎町	二七,〇〇〇	二三,〇〇〇	一二,〇〇〇
狹間村	一一,二〇七	五四,〇八二	三八,三七三
別保村	一三,〇〇〇	二九,〇〇〇	二四,〇四〇
阿南村	二五,六〇〇	三六,三〇〇	二五,四〇〇
明治村	二,九五五	五六,〇〇〇	三三,五〇〇
谷村	八四,一五〇	五五,五〇〇	六六,六〇〇
東庄内村	二五,五〇〇	一一,九〇〇	五,七〇〇
松岡村	四,八〇〇	九一,〇〇〇	一二,〇〇〇
西庄内村	三三,一一八	四,〇三五	一一,六五〇
判田村	二七〇	一九六,四〇〇	一五,五一〇
南庄内村	—	三〇,〇〇〇	一三,〇〇〇
戸次村	四六,三〇〇	六六,五一〇	三四〇,〇〇〇
湯平村	八二,〇〇〇	六〇,〇〇〇	—
吉野村	二三,五〇〇	一〇,九〇〇	一一,三五〇
合計	一,五六二,〇七〇	一,八六九,八九九	一,一二三,八七六

◎土佐産の蟲報　(第七)

高知縣土佐郡　武　内　讓　文

○鞘翅類、斑蝥科　(一)ミチヲシヘ。(二)サビハンメウ。(三)コサビハンメウ。上記中(一)は全縣下に普通にして、其産數多く(二)は重に山中の陽地に多産し(三)は唯瀕海の砂地に棲息するを見るのみ。其他の種類に至ては之を産することを知らず。

○歩行蟲科　(一)マヒマヒカブリ。(二)アカガネヲサムシ。(三)オホゴミムシ。(四)クロゴミムシ。(五)アヲゴミムシ。(六)キベリアヲゴミムシ。(七)キボシアヲゴミムシ。(八)セアカゴミムシ。(九)(アカアシゴミムシ。(十)ヒラタゴミムシ。(十一)ヘウタンゴミムシ。(十二)マルガタゴミムシ。(十三)クビナガゴミムシ。(十四)ミヰデラハンメウ。此等十四種中、(一)は重に北方の山中に産し、夏日樹陰よ歩走するもの少からず(二)も亦山中よ産し、黄昏より多く道路に出づ(三)と(四)は圃地に來るも、其數多きを見ず(五)(六)も亦圃場よ多く(七)は(五)に似て翅鞘よ二黄點あるものなるん、亦其棲地を同うす(八)も亦其棲地を同うし、晝間は石下に於て多く發見せらる、之に類するものよは、黑色或は赤胸或は黄脚なるもの等あり(九)は海濱山野よ普く之を産し(十)は田圃に多く、屢次稻の苞蟲、桑の葉捲蟲等の苞葉内に潜入するを見る(十一)は(十)と其棲所を同うし、到る處の田圃に歩走し、早春よ於ては(十)等と共にイチモジセヽリ、アハノヨタウムシ等の越年せるものを襲ふと少なからぞ(十二)は前者よりは多く、水田に來りて屢次螟蟲孔内に破入るを見る。尙ほ之れと殆ど体長を同うし乍ら比較的細小なるものにして、黑色黄縁のもの、又は全身黑色なるものの二種あり、皆螟蟲孔内に穿入す。又一種體長一分許なるものあり、薑よ加害するアハノズヰムシ孔内に多し、皆種名を詳にせず。(十三)は甘蔗、鳩麥等の如き大莖の禾本類の在る所に多産し、オホズヰムシ孔内よ穿入して屢次之を食するを見る(十四)は全縣下に之を産せざる處なからん。其他のヲサムシ、ゴミムシの種類は採集するよ隨ひて續々發見せらる。

○龍蝨科　(一)ゲンゴラウムシ。(二)コガタノゲンゴラウムシ。(三)クロゲンゴラウムシ。(四)キスヂゲンゴラウムシ。(五)コシマゲンゴラウムシ。(六)ハイイロゲンゴラウムシ。(七)ナガキベリゲンゴラムシ。(八)コクロゲンゴラウムシ。この中、(一)(二)は最も普通にして(二)は特に多産し(三)は北の方山間の溪流に於て僅に其一頭を獲たり(四)と(五)は到る所に之を産するも(二)の如く多からず(六)は高岡郡の淡水に産するを見る(七)と(八)とは頗る之を多産し、初夏の頃は、共に畦畔濕土内に化蛹せるもの多く、幼蟲成蟲共に螟蟲孔内に穿入するもの少なからず、其之を食殺するとは殊に其幼蟲よ多さを

見る。其他小形種乃至微小種多きも、種名詳かならず。

○豉蟲科　（一）ミズスマシ。（二）コマヒマヒムシ。此種のものは、到る處の淡水に多く之を產するを以て、玆に說明を省く。

○水龜蟲科　（一）ガムシ。（二）コガタノガムシ。（三）マメガムシ。此三種は、共に淡水に多產するも（三）は高知市附近には少なし。（一）は早春到る處の稻苗に產卵し、時に農家をして恠ましむ。其他微小なるもの尙ほ數種を產す、其内圃場堆肥下に棲息するものは、体長五厘許りあり。

○埋葬蟲科　（一）アカボシシデムシ。（二）クロシデムシ。（三）ヒラタムシ。（四）オホヒラタムシ。此四種は、皆動物の死躰を好餌として誘獲せり。他に尙ほシデムシの一種、體長凡そ七分、翅部に赤黑相交錯せるものの北方の深山の厠中に於て、汚穢物の上に、幼蟲成蟲の群棲せるを見しが、之を捕ふることを得ざりき。

○隱翅蟲科　（一）アカバハ子カクシ。（二）アヲバハ子カクシ。（三）メダカハ子カクシ。（四）ダイメウハ子カクシ。（五）オホハ子カクシ。此中（一）（二）は田圃に多產し（二）は最も夥多なり、屢次螟蟲叉は葉捲蟲の巢内に潛入し（三）は比較的少なく（四）と（五）は多く動物の死屍に來集す。畑地に於ける螟蟲若くは桑の葉捲蟲等の巢内に潛入する隱翅蟲の幼蟲にして、體長七分許、全体黑褐色を呈するものは、屢次目擊せし所あり、是れ恐くは（四）の幼蟲ならん。其他或は他蟲を捕食するもの、或は木蕈、蟲糞、朽木樹皮下等に棲息するものを索むれば、其種類舉て數ふべからざ、此中工石山中に獲たる一種は、異形にして稍々大なり。

◎昆蟲月報　（第六信）

第八回全國害蟲驅除講習修業生　埼玉縣　櫻井倚晰

八月　此月も前月に續き曇天雨勝にて冷涼に失し、獲物は至つて少なかりき。一日ベツカフハゴロモの成蟲を獲。二日林中に於て、一種のトリバテフを多く見る。三日稻のアヲムシの第二回成蟲を多く捕ふ。四日平家螢の夜間飛翔するもの稍多し。五日アヲバハゴロモの幼蟲初めて見ゆ。六日マメコガ子、キイトトンバウを多く見る。七日桑園にオホヲナガバチを見出したるも、遂に失へり。八日暴風雨にて吹落されたるオホゴマダラテフ數頭を獲たり。九日ベツカフバチを捕ふ。此上旬に多かりしはハラビロトンボウ、イ子アヲムシヤドリバチの二種、ハグロトンバウ、蜉蝣科の二種、オホヨロバヒ、コキシタバ

大小豆のヒヱブウ、マメハマキムシ、ツマグロヨコバヒ、キテフ、シヤミテフの類ありき。十二日ホホグロテフを獲。十三日此月に入り此日を以て始めて晴れ、且つ暑さ高きを加ふ、林中ょ採集を試ろみてテフトンバウ、ツノトンバウ、キマワリ、ヨツボシキノコムシ、キノカハテフ、オホハヤバ(?)、ルリタテハ、ギンバチ、チカバチ、モンクロバチ、ツチスガリ等を獲。十四日ウスバカゲロフを捕ふ。十五日アヲスヂアゲハ、マツケムシの蛾、ツク〳〵ボウシ蟬を獲。十六日ベニシタバを捕ふ。十七日藍のズキムシ蛾を獲。十八日藍のハナタカゾウムシ、アカスヂバチの一種及び藍のアヲムシヤドリバチの一種を獲たり。二十日藍のヘウタンムシ(方言)を捕ふ。此中旬ょはクハカミキリ、オホゴマダラテフ、アヲスヂアゲバ、キマダラテフ等多く、殊に大豆の葉捲蟲(幼蟲)の被害盛んょして、稻の螟蟲また化蛹せる者多かりき。此頃は秋蠶の飼育盛んなるに、氣候過涼にして食桑遲緩なるため、春蠶のろの如くに障子を立て燃火をなして温度を補へり、近年絶無の變候とす。廿一日蟲螽の成蟲を始めて見る、聒々兒始めて啼く。廿二日トモヱテフの一種を逸せり。二十三日オホアヲテフ、コムラサキテフを捕ひ、又第二回羽化のカヾンボを見る。廿四日始めてアミガサハゴロモを捕ふ。二十五日マツケムシの幼蟲孵化せ。二十六日稻葉にスヂキリムシの卵塊多く見ね且イブキギス(?)始めて啼く。二十八日アカタテハ及びウスイロコジヤノメテフを獲たり。二十九日シリアゲムシの第二化成蟲を捕ふ。三十日ベツカフカヾンボを捕ふ。三十一日金鐘兒始めて啼た、アゲハヤドリバチ發生す。此下旬ょ多かりしは、水棲のナベフタムシアゲハノテフ、オホゴマダラテフ、ベツカフハゴロモ、アヲバハゴロモ、アミガサハゴロモ、ウスイロゴジヤノメテフ、ツク〳〵ボウシゼミ等にして、蟋蟀の各種また漸やく鳴聲を高めき。

◎昆蟲に關する葉書通信　(第二十八報)

●(一五三)石見昆蟲研究會報告(島根縣那賀郡、石見昆蟲研究會)　石見昆蟲研究總會を本月九日、那賀郡和田村東向寺ょ開きしょ、會衆六十一名にて、會長增田齢造氏の開會の辭あり、次で果樹、稻、蔬菜等の害蟲標本數十種に就て、其經過と驅防法等を研究し、又會員岡本延藏氏の携帶せる毒荏の害蟲ょ就ても驅除法を研究し、次に戴蟲の人躰加害を豫防するため、ハブサウを播種し置くの件等を協定し、午後五時閉會を告げ、後更に懇談會を開きて散會しぬ。(十一月十五日附)

●(一五四)モンキアゲハテフの分布區域(愛知縣渥美郡、宮林桂次郎)　モンキアゲハテフは、吾が

愛知縣三河國渥美郡にも、分布の證跡あり。現に本年に入り老津村に於て採集し、又西部の泉村に於てても、その飛翔を目擊せり。然らば則はち、靜岡愛知三重の三縣に亘りて、其發生あるとを知るに足れり蓋し風土に大差無きに因れるなる可し。

（一五五）ハッチャウトンバウの產地を報ず（福岡縣企救郡、矢野宗幹）　本誌の第六拾壹號紙上には八町蜻蛉の記載ありたれば、余が知れる所を報ぜんに、一昨三十三年六月下旬、余はこれを福岡縣筑前國嘉穗郡飯塚町附近の山中の草叢間にて獲たりしも、當時は其珍種たる事を知りて種名を知らざりしが昨年に至り、高千穗宣麿氏の標本中に、それと同形の尾張產のものあるを見、乃はち余が採集せる二頭を寄贈して、異同を確めしに、果して同種なることを報道せられき。又本年、當山口縣師範學校內に開かれたる敎育品展覽會列品中にも、此種の標本ありて、山口縣吉敷郡產のハッチャウトンバウと記し置けり。然らば此種の分布は中々に廣く、北は奧州より東海道、山陽道を經て九州に至るものある事を知るなり。（十一月廿五日、山口に於て）

（一五六）蔬菜品評會と害蟲標本の出品（愛知縣名古屋市、一師範生）　去十一月廿八日より、當市に於て蔬菜品評會を開きしに、種々の害蟲標本さへ出品ありしかば、覽者は不少の利益を得たりき。右の標本出品を一見し、臨場せる田中芳男氏の如きは、特の外賞讃の意を漏されぬ。何れの農作品評會にありても、斯かる注意は有りたきものなり。

問答

◎冬蟲夏草に就き質問　（甲號）　三重縣河藝郡玉垣村　栗本伊之助

自宅の庭園は、東南に面するも、梅楓梧桐木犀檜其他の雜木ありて、地面は濕潤がちの處、別封標本の如きもの本年八月上旬、蘚苔下に生じて、地上に現はれたり。從來、斯かる事は、更に之無かりしやに老人どもは申合へり。是は將來蟬となるべき幼蟲の、地面に達せし時濕氣甚だしかりし爲め絕命せしを

偶然菌種の飛來して、適當の蕃殖を致せしものにや、或ひはまた他の變化によりて、斯かる異形のものを生せしにや。甚だ了解ゝ苦しむを以て、之を貴所に質す。

◎天蠶繭の產地に就き質問（乙號）　大阪市疊屋町　井村祐太郎

昆蟲中、栗繭と稱し栗樹に發生する蟲、即はち網の如き繭を作る蟲の蕃殖區域を承はりたし。此繭は今日まで用途無かりしも、海外輸出に盡力の結果、販路を開くに至りたれバ、其發生地域及び產出豫想額等を調査するの必要を感ぜしに因る。願くは國名及び多少等を垂教あれ。

◎櫟と蜜柑の寄生蟲に就き質問（丙號）　德島縣名東郡　堀　龍　資

別封の如き蟲癭、櫟の葉上ゝあり、これは何れの種が作爲せしものか、又第二號の蜜柑樹の葉面ハ、正しく蟲類の蝕害と思はるゝが、是は何蟲の加害せしものか、示教ありたし。

◎菽麥等の害蟲に就き質問（丁號）　長野縣東筑摩郡新村　波多腰行一郎

今年當地方ゝ於ては、黑色蛞蝓の加害最とも甚だしく、處によりて大豆は半減、紫雲英及び豆作跡の大小麥また不少の損害を來せり。右は長さ二分許り、脊部黑褐、腹部淡褐色の小形種なるが、其加害の如何は別封の大小麥葉によりても證し得べし。依て今その發育の狀態、冬時越年の狀、幷びに驅除法等を問ふ、昆蟲世界紙上ゝて詳細應答あらんことを望む。

右四問の答

名和昆蟲研究所内　永澤小兵衛

（甲號）　實物を以て質問せられしは、冬蟲夏草の一種なり。是は梅雨後陰濕の地に生するものにて、敢て奇とするに足らず。貴縣下には發生地多く、昨年は度會郡中に、本年は三重郡外一二處より採集せり而して其發育は、蟬の幼蟲に菌類の寄生するゝ原づけるにて、概むね年毎に同地に於て發見せらる。多くは小形種の蟬類に寄生するが如きも、また甲蟲にも少なからず。寄生の菌種ハ、普通に Torrubia 屬か又は Laborbenia 屬と稱せらる。

（參考）　冬蟲夏草また之を夏草冬蟲とも云ふ。その蟬に寄生せしものは、本草綱目の所謂蟬花にて、冠蟬、胡蟬等の別稱あり。古來唐土にては竹林に生ずるものを貢とし、之を小兒の藥劑に供しき。その本邦に紹載せしは、享保年間の事にて、價ひ頗ぶる貴かり

しが、其頃には清俗これを保肺益腎、止血化痰の靈藥と信じ、又脚病延年の奇方となしたるにや、長崎貿易の際に、低價を以て之を購得せんとすれば、直ちに將還しきと長崎聞見錄に見えたり。青木昆陽氏が書隱叢說を引て、夏草冬蟲とせしは、即はち是なり。又水谷有斐氏の蟲譜、栗本丹洲氏の千蟲譜、小原桃洞氏の遺筆、伊藤錦窩氏の日本産物志等にも、之を圖說せしものあれど、多くは蟬花の類にて、其根源は柚木常盤氏の冬蟲夏草帖に在るに似たり。是菌は向陽の地には絶えて發生せぬものにて、或ひは梅に、或ひは臭梧桐に、或ひは竹林に、又或ひは灌木の根邊に生ず、邦稱をセミタケ、セミノキともいひ、本邦處々に之を産す。多くは梅雨後に庭園の樹下、即はち蟬の化育處に適當の陰地に於て發見するを常とす。雲錦隨筆には、その一角なるをツノゼミと云ひ、珊瑚枝形なるをばハナゼミといひ置けり、而して一角のもの最とも多く、三角、双角若くは多角のものは少なし。

冬蟲夏草の發生の原因につき、淸の感豐の頃には、博物學者と雖ども、之を蟲の土中に入りて草に變するものとなし、冬の蟲が夏に草に化すとの說を確信し、約そ百五十年前には英國の學者も、略ぼ同一の意見を懷きしなり。然るに近來科學の前進に伴れ、蟬、甲蟲類には、トルルピア、ラボウルベニア等の菌屬寄生加害することと明白となり、また之を奇怪視する者無きに至れり。博士三好學氏の說に依れば、本邦産は概むれトルルピヤ屬菌の昆蟲に寄生するなりといへり。之を換言すれば甲蟲、蟬類の幼蟲の、地中にありて化育を遂ぐるの際、寄生菌に罹りて殪さるゝものは、貴問の冬蟲夏草なれば、菌種の其地に存在せん限り、毎年地下の幼蟲に加害すべし。而して寄生菌の寄居蕃殖は、濕熱の盛んなる梅雨期にあるべきも、生育不十分の間は地中に隱伏するを以て、扨は夏日に至り偶然發見せらるゝなり。猶ほ蟬類の發生地(夏秋間に小孔を穿つを以て、直ちに判明すべし、多くは樹木の周邊にありて、枝幹には蟬退を存す)中、特に陰鬱多濕の處に注意するを要す、必ずや土用前後に之を採取する事あらん。

冬蟲夏草の一種
(質問書に添附のもの、寫生)

(乙號)　栗毛蟲は別に飼育するものに非ざれば其産地とても定かならず、山林に富める地方を搜索せば、多量に其蛹を購ひ得べし。水産家關澤明清氏が、明治十六年に本問と同一の質疑に對して『本邦未だ多く天蠶絲を産出する地方あらず、但從來美濃、信濃、土佐、薩摩、陸奥、丹波、下野、越後其他の諸國より之を出すと雖も、其額少なくして僅に其地方釣魚者の用に供するに過ぎず』と答へしは至當の言なり。然れども其産地名は、故伊藤理學博士の楓蠶の記載を抄出せしに止まるを以て、未ゞ悉せりと謂ふべからず。すなはち前擧の諸國の外には山形、鳥取、京都、熊本等の府縣をも加ふるを穩當とす

同博士の説によれば、栗毛蟲は殼斗科、樟科、栜樹科、胡桃科、冬靑科等の樹木に多しと云へば、平地よりは山村、暖國よりは寒地を搜求すべし。さて問者は、此蟲の蛹繭即はちスカシダハラを蒐聚せんとの希望なるも、そは商略上の假托說に非ざるなきか。但し海外に輸出して、蟲種の蕃殖を圖らしめんとの目的なれば格別なるが、其際には大に寄生蜂の有無に注意すべし。なほ他山石、桃洞遺筆、日本產物志等を參照せば、利する所極めて多からん。

（參考）　明治五年八月、大藏省に於て山繭飼育方法書を各府縣に頒布し、適宜に其業を開かしめたる事あり。九年八月、熊本縣の緖方儀八郞なる者、其繭絲及製織品を勸業寮に送附して鑑査を乞ひしかば、寮はその飼育法製絲方を錄上せしめ、十一年には、在上海領事に牒して、二化生の野蠶種を求めき。其後十四年に至り、栃木縣那須野に天蠶飼育を奬勵せし事あり。去り乍ら、是は概むれ柞蠶、野蠶の類なるべく、その眞に栗毛蟲の記事と見るべきものは、明治五年に信夫粲氏が今の長野縣に出張して、調査を加へたるゲンジキムシ一覽圖なるべし。元來本邦の固有產なるべきも、その有用蟲たる事を知られしは、近く享和年間にありしと云ふ。

（丙號）　質問の第一號すなはち櫟の葉面の蟲癭は、膜翅目沒食子蜂科（Cynipidae）に屬するクヌギノタマバチにて、癭内よは幼げながらも、其繭と其成蟲とを認むべし。第二號の柑橘葉上の粗糙面は嫩葉の際よ蚜蟲の蝕害を被ふりしものにて、其全く光潤を失へる局部は、蚜蟲吸液の加害痕跡たり。但し右二葉共に、採取後十數日を經、且つ普通信書に封入せしを以て、乾燥と毀損甚だしく、應答上多少の遺憾無きよあらぞ。

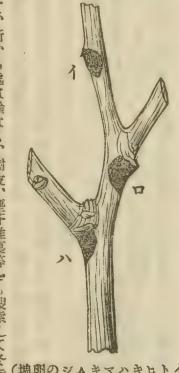
（丁號）　ナメクジリは當昆蟲研究所の研究以外の動物なれば、一も應答すること能はず。唯、昆蟲中には、此を食とする益蟲有り、又地方によりては、苦塩水等を灌注して驅除する事あり、と答へ置かんのみ。問者之を諒とよせ。

雜報

◉昆蟲月令（第十二月）　此月に配すべき昆蟲記事は、概むね下よ列擧するが如し。

○氣候　舊曆の十一月に當る。月初には晝夜の差四時十二分あれども、下旬には更に甚だしくて四時三十六分となり、冬至を過ぐれ

ば、漸次晝長くして四時三十二分となる。すなはち一年中最とも長夜の月とす●月の八日よりは大雪の氣にて、廿三日より冬至に入る●内地の平均温度は、零下壹度より、十度强に及び東海方面には、稍前月の候に同じき日あるべきも、日本海方面は益々寒冷險惡を加ふべし●東京は平均五度二に居り、京都は減じて四度三を示すに至る●濕度は前月に比して多少減退するも、降雪雨の日數は槪して多かるべし●寒地にては屢次降雪を見ん。

○蟲類　此月に入れば大概稻苅取を終了するを以て、直ちに秋耕を行ふべし。螟害劇甚地なりせば、苅株を集めて堆肥に製するに利あり●暖地にては苅稻又は藁稈を田圃に積置くの風あるも、害蟲驅防上忌避すべき惡習とす。稻は宜しく一旦他處に運搬し藁は腐熟後に肥料とするか、適宜の處に於て貯藏すべし●果樹の枝條選定、害蟲驅防、枝幹の洒洗等は、此月に行ひ、落葉等は燒却すべし●蚜蟲類なほ花木に棲息し、殘菊の莖中に潜伏のものも多かるべし、速かに驅除せざれば明年の被害大ならん●貝殼蟲と綿蟲は、此月より驅防に注意せざれば、到底これを殄滅し難かるべし●横蚊蟲の紫雲英畑、麥畑に潜居するもの多かるべし、時々掬殺するを要す●豌豆畑には地蠶の潜伏するものあらん、耕耘の際に細心潰殺に勉むべし●桑園の落葉下、根邊、枝側等に各種の害蟲蟄居すべければ、努めて驅除の勞に當るべし。特に姫象蟲、枝尺蠖は速かに着手すべし。又耕耘の際に、地中より土塊の如きものを掘出さば、之をトゲシヤクトリの繭と知り、桑枝に一種の黴菌の如き小黑色の斑點あらば、イトヒキハマキムシの卵塊と認めて、摘採若くは塗油法を行ふべし●桑樹に藁稈を捲置くか、又は積置く時は、蟲類聚り來りて、越冬すべければ、後に落葉と共に適宜處分するも可なり●水田に限らず、農園は耕鋤して寒氣に觸れしめ又草叢を燒却する等も驅蟲の一方たるべし●山麓の石塊下等には、守瓜等多く潜伏し野原には有吻目及び甲蟲類蟄居し、暗處には双翅目のもの生存し居るべければ、斯かる處は論なく、樹皮、塵芥堆裏等をも搜索して冬季採集を試ろむへし●其他は本年一月の月令及び前月記載の事項を參酌すべし。

（イトヒキハマキムシの卵塊）

○舊說　支那にては、冬至に風巽より吹來れば、諸蟲草木を害すとなせり●舊記載には、此月に昆蟲の記事を缺けり。

○雜事　年末の煤掃には、室内害蟲の巣窟を破滅するを以て專要とす●煤掃の節には、啻り家内を淸むるに止めず、また簞笥、書箱より穀倉米廩をも洗掃すべし、是れ最とも必要の事たり●蟲害偶發說を破らんとせば、此月より蟄伏の狀態を研究し、又その現狀を示すを以て捷徑となす●螟害の甚だしかりし土地の藁は、成るへく速かに燃料、厩用とするか、又は細工用に充つるやう、常に心掛け置くべし。

◉中央農事會の決議

今秋の全國農事會に於ては益蟲保護に關する議案を可決せしが、斯かる新議題に力を致さんよりは、寧ろ既決の問題の實行に努められんことを望まざるを得ず、即はち一昨年十一月の議決案件中にも、益害蟲調査會設立建議の如き目今重要のものあり乍ら、其枝葉に屬する保護論を云々するは、決して適當の着眼とは言ひ難かるべし。同會代表者の猛省に竢つ。

◉蟲害地租免除は如何

年々歳々帝國議會を騒がしたる蟲害地租免除の件は、よも今期には提出せられざる可し、蓋し大被害地と目せらるゝ府縣の皆無あればなり。其原因に就ては、或方面の者は之を監督厲行の功に歸するが如きも、虚心坦懷を以て判斷すれば、春來の氣候の變調を以て主因となし驅防法の普及を以て副因となさゞる可からず。然かも是はこれ水田に就て言ふのみ、彼の陸田に、彼の家屋に、害蟲の跋扈加害するものあれ幾百千種なるやを知らず、未だ以て放慮すべからざるあり。●●●●●●●●

◉特別講習會開催の計畫

第十五回全國害蟲驅除講習會は、當所務上の都合により、明春後に到らざれば、之を開設し難き趣きは豫記を經たる如くなるが、本年度末に入會せんとする希望者の失望は一方ならぞと見ゑて、早や三四の地方よりは左記の事由あるを以て、例年の通り之を明年三月中に開會せられたしとの希望を申越せり。（卷首の廣告參看）

一、明年三月開會せられざる時ば、官衙の會計年度變移のため、選拔生の入會し能はざる者多し。

二、同月開會せられざる時は、明年の苗代驅除期に適當の處分を行ふこと難し。

三、同月よりは第五回內國大博覽會開會に付、同會參觀を兼れ、岐阜に集中する者極めて多からん、就ては普通會期外數日の豫定を以て、一同を大坂に引率せられ、同會出陳の昆蟲標本より驅除器械に就て、優劣の說明、適否の品評を試みられたし。

四、明年三月の講習會は、博覽會參觀のため自つから會期を伸長せざる可らず、故に之を第十五回の全國害蟲驅除講習會と稱するも更に特別の二字を冠して彼此の區別を立て、其會期を約三週間とし、歸途都合よくぞ、實地採集を示導せられたし。

五、博覽會行は講習の終、修業式の前とし、開講は三月初旬と定められたし。

依て其得失等に就き目下調査中なるが、此種の擧は畢竟、希望者の多少によりて向背を決するものあるが故に、明年一月十日までに多數の同意者を求むる時は、斷然開催せん內意なるも、何分先例の無き事柄と言ひ、所務多忙の折なれば、また開催を難ん

螟害稻莖切取器（縮圖）

（別項參看）

ずる點少しとせず、併し實行の曉には同窓會を大阪に開くの便もあり、全國の昆蟲標本比較研究の利あれば、或ひは意外の好果無きを期し難し。兎まれ角まれ、入會希望者は此際速報あり度ものあり。

◉今後の雜誌「昆蟲世界」　豫報の如く、昆蟲世界は明年一月の新刊より改良を加ふることとなるが、讀者の意見としては(一)學說に主力を注ぎ(二)圖畫を增加し(三)內外の新事實を網羅せよ、と云ふに歸着するを以て、成るべく其希望を採納するに努め、更に又時々歐文の說明と目次とを卷末に揭げて精緻の木版をも加ふることとなさん。又次號すなはち明年一月の紙上に收錄すべき事項の大要は、末尾の廣告欄に揭け置ける如くにて、尙他にも有益の記事多ければ、讀者に裨益する所、それ二三にあらざらんか。因に云ふ、本號には例によりて今年(第六卷)揭載の總目次を添附せり。

◉長野縣の蟲塚　長野縣下にも蟲塚ありとは、帆足大分縣參事官の談話なるより、義金分配に際し其有無を照會せしに、何故か同縣下には右に該當するもの無之旨、十一月廿七日附を以て回答ありたれば、更に再び照會の手續をなし置けり。又京都府下のものは、未だ回答に接せざるを以て、是また存在の如何を知り難きも、或ひは長野縣と同一にあらずやと氣遣はる。

◉昆蟲叢書第貳編に就て　昆蟲叢書第二編「昆蟲標本製作全書」は、少しく印刷期を遲引したるが、是は挿入の木版、寫眞銅版及び記載事實の調査に前後數十日を空費せしに本づけり。其中、口繪の銅版は第十三回全國害蟲驅除講習會の有志十餘名が、金華山麓に於て實地採集の狀を挿入の豫定なりしに、原版惡しとて製版を拒絕せられ、遂に今回の講習生採集圖に變更したるがため、記載の事項は沿革の部に不備の點ありて、屢次各地の先輩に質疑せしため、玆に更稿の必要を生せしに因る。併し今や此等の障害を除きたれば、本月中には竣功することと信ず。

◉第十四回全國害蟲驅除講習會　十一月廿五日より、本月八日まで二週間、當昆蟲研究所內に開きたる第十四回全國害蟲驅除講習會は、全たく會員の熱心と一致とにより、至極圓滿に開閉したるが、其成績に至りては近來稀に見る程の優良に出で、或ひは晝夜の苦學に、或ひは志度山の旅行採集に終始靜肅、態度また齊整、實に意外の好果を收めたり。開講は初日の前十時にて、名和當昆蟲研究所長の演說に、年長者代理依田悅太郎氏の答辭ありしが、修業證書授與式は最終日の午後一時を以て執行し形の如く名和講師の證書授與幷びに訓諭、來賓川路岐阜縣知事の演說、修業生總代和田恒作氏の答辭あ

りて終了しき。會員は左に表出の如く、北は青森縣より、西は山口縣に至る二府十九縣の出身なればよや、最終に懇親の會をも開きて、種々將來を談じたるが、中には閉會後なほ滯在して、見學に勉めたるも數名ありき。（表中〇印は中途退學、△印は缺席）

組別	府縣名	郡市名	町村名	族籍	役名	氏名	生年月	履歴摘要
第壹組	京都府	何鹿郡	西八田村	平民	組長	仲山安太郎	明治七年六月	陸軍砲兵軍曹、村役場書記、農業ニ從事ス
	福井縣	大野郡	小山村	同		吉田得次郎	明治十年三月	福井縣甲種農學校卒業、大野郡吏在勤中
	兵庫縣	明石郡	伊川谷村	同		井上藤太郎	明治十一年二月	兵庫縣農學校二ヶ年修業、農業ニ從事ス
	山梨縣	中巨摩郡	國母村	同		松井虎治	明治十一年二月	有明義塾英漢數學修業中巨摩郡書記在勤中
第貳組	京都府	天田郡	庵我村	平民	組長	鹽見貞吉	明治八年八月	京都府城丹蠶業講習所修業天田郡蠶業巡回教師
	滋賀縣	坂田郡	長濱町	同		西川豐次郎	明治九年四月	石川縣[illegible]村農業補修學校長
	群馬縣	多野郡	美九里村	同		高山助太郎	明治十四年六月	元福井縣農事巡回教師農商務省蠶業講習所卒業
	青森縣	中津輕郡	堀越村	士族		板垣無前	明治十五年四月	東奥義塾中學部卒業、第二高等學校二ヶ年修業
第參組	栃木縣	那須郡	下江川村	平民	組長	見目嚴治	明治六年十一月	縣農事講習所卒業、那須郡農事試驗場擔當
	高知縣	香美郡	明治村	同		上島永治	明治十二年十二月	農商務省蠶業講習所卒業高知縣蠶種檢査員
	山口縣	佐波郡	防府町	同		佐々木孝祐	明治十三年八月	山口縣農業學校卒業、農業ニ從事
	三重縣	阿山郡	鞆田村	同		松山孫太郎	明治十五年六月	高等小學校卒業、農事講習會修業
第四組	大阪府	豐能郡	熊野田村	平民	副級長	笹部利作	明治四年四月	農科昆蟲[illegible]講習會修業大阪府害蟲驅除豫防委員
	愛知縣	越智郡	小西村	同	組長	檜垣賴恒	明治七年二月	[illegible]農事講習會卒業、農業ニ從事ス
	山口縣	吉敷郡	大歳村	同		△伊藤勇造	明治十二年五月	山口縣農學校卒業、吉敷郡農事巡回教師
	福井縣	大野郡	富田村	同		松山榮	明治十五年一月	福井縣農學校卒業
第五組	靜岡縣	志太郡	豐田村	平民	組長	増井林太郎	明治三年十月	志太郡青年會[illegible]、農業ニ從事ス
	富山縣	下新川郡	天神村	同		大久保正純	明治四年五月	村役場收入役勤務中
	埼玉縣	兒玉郡	本庄町	同		森田定吉	明治十一年七月	埼玉縣模範[illegible]員、農業ニ從事ス
	長野縣	東筑摩郡	島内村	同		三澤勝壹	明治十年四月	東筑摩郡蠶業同業組合技手、長野縣蠶業檢査員
第六組	岐阜縣	海津郡	海西村	平民	組長	大橋慧逸	明治十七年九月	高學小學校卒業、農事講習會修業
	鳥取縣	東伯郡	日下村	同		岡野庫八部	明治十七年十二月	鳥取縣簡易農學校乙科卒業、村役場書記勤務中
	高知縣	高岡郡	北原村	同		△宮地高春	明治十一年一月	農商務省蠶業講習所卒業、高知縣蠶種檢査員
	島根縣	八束郡	佐太村	同		安達庸一	明治十三年七月	島根縣師範學校卒業、小學校本科正教員勤務中

組	府縣	郡	村	族籍	役	氏名	生年月	經歷
第七組	香川縣	大川郡	造田村	平民	組長	木内久松	明治五年十月	造田村害蟲驅除豫防委員、村役場收入役
	鳥取縣	東伯郡	古布庄村	同		川崎作一	明治十年九月	高等小學校卒業、農業ニ從事
	三重縣	名賀郡	比奈知村	同		永井亦左衛門	明治十三年十月	農事講習所卒業、農業ニ從事
	京都府	宇治郡	宇治村	同		近保辰三郎	明治十五年九月	農事講習會修業、農蠶業ニ從事
第八組	山梨縣	南巨摩郡	靜川村	平民	組長	依田常吉	元治元年十一月	山梨縣蠶病講習會修業、靜川村長
	京都府	宇治郡	醍醐村	同		田中龍三	明治九年一月	宇治郡農會技手
	香川縣	大川郡	長尾村	同		佐々木傳五郎	明治十年四月	農事講習會修得、農業ニ從事ス
	岐阜縣	惠那郡	坂下村	同		原攝祐	明治十五年一月	岐阜縣農學校一ヶ年修業、農業ニ從事ス
第九組	山梨縣	南巨摩郡	五開村	平民	組長	依田悅太郎	明治五年七月	元福居學校教員、村役場書記
	兵庫縣	揖保郡	石海村	同		佐々木庸太郎	明治八年八月	鳥取縣農事講習會修業、農業ニ從事
	岐阜縣	稻葉郡	鏡島村	同		眞鍋五市	明治十二年一月	尋常小學校卒業、農業ニ從事
	長野縣	埴科郡	戶倉村	同		坂井辰三郎	明治十四年一月	農事講習會修業、農蠶業ニ從事
第十組	山梨縣	南巨摩郡	增穗村	平民	級長	和田恒作	慶應元年十二月	南巨摩郡書記
	福井縣	大野郡	下庄村	同	組長	土本彌助	明治十五年四月	福井縣農學校別科卒業、村役場書記
	長野縣	下伊奈郡	座光寺村	同		北原源左衛門	明治十六年五月	農事講習會修業、農蠶業ニ從事
	鳥取縣	西伯郡	崎津村	同		角正表	明治十六年十月	高等小學校卒業、農事講習會修業

◎名和梅吉氏の消息　去九月初旬横濱を解纜せる名和梅吉氏は、同月廿五日無事シヤアトル港に着し、廿九日を以て桑港に上陸し、同地に於て目下研究に從事し居れりとの消息に接せり。

◎三日間の昆蟲講話會　岐阜縣揖斐郡農會催主となりて、去月二十日より三日間、昆蟲講話會を同郡に開きたりしが、當時の景況は左掲の如かりしとて、同地の野口新太郎氏より報じ越せり、講師は名和當昆蟲研究所長なりき。

揖斐郡農會主催の害蟲驅除講習會を、十一月廿日より三日間、揖斐町大乘寺に於て開設し、講師には本縣名和昆蟲研究所長名和靖氏の出張を乞ひ、毎日午前九時より午後三時迄開會せしに、聽講者は總計百廿二名にして、其資格を大別すれば、村長及び役場員にて十六名、小學校教員十八名、巡査十一名、町村會議員及び區長にて二十名、其他有志者七十三名なりき。而して農會に於て、今回斯會を開催したる所以を略記せんに、本郡は去る明治三十二年に小學校教員の昆蟲講習會を開き、小學兒童の害蟲に關する思想養成に勗めたるに、爾來其効果の視るべきもの尠させず、其后數星霜を經て、講習を卒へたる教員の漸次他方面に轉したる者多きため、是が補充を要するさ、且つは直接害蟲驅除の監督の任にある町村役場員、警察官吏、其他町村の勸業委員等に、少なくとも斯學に關す

ろ概念を教授し、以て一朝害蟲發生の場合に際し、應急の處置をなすに差支を生せしめさるへき方針を以て、本縣下十七種の害蟲の中、郡内に發生の重なる害蟲に就き、其發生經過及び之が驅除豫防の方法を授くるにありきと。閉會後に揖斐郡昆蟲學會總會を開會し、名譽會員、特別會員の推擧及び會務の狀況を報告し、最後に名和昆蟲研究所長の害蟲驅除豫防實施上に關する懇篤なる講話を以て終り、それより茶話會を催せしが、此數日間に得たる所は極めて多かりき。

◎蔦村の昆蟲講話　岐阜縣揖斐郡蔦村農會にては、去月廿一日に其會合を催ふしたるを好機とし前掲同郡農會の講話會に出張中の名和講師を請じて、一場の講話を求めたるが、其結果は、全村一致して共同驅除の模範たらんとまで意氣ごみを強め、當日の聽講者は二百餘名にて、概むね村内の有力者なりき、と是また同地よりの報道に見ゆ。

◎昆蟲の質問につき　此以前にも報じ置きたりしが、昆蟲の作毛に就て各地方より續々質問あるも到底之に應じ難きを以て、向後は單に當雜誌紙上にて應答することゝなせり。去れば質問者へは別に復簡を贈らざるは勿論、重複の嫌ひあるもの、若くは不必要と認めたるものへは、應答を與へざる事もある可ければ、豫じめ此旨を了知せられたし。

◎昆蟲學上の日本　本誌第六拾壹號の雜報にて、略評を試みたる如く、英國のロスチャイルド氏は「昆蟲學上の日本」と題する記事を公けにしたるが、其全文を義譯すれば次の如し。是は自畫自讃に類するを以て、轉載を見合せ置しも、既に「岐阜日日」にも出でたれば、併は茲に收容する事となせるなり。

日英同盟は、世界各國の注意を惹きしこと更に余の喋々を俟たず。余輩は始終、日本岐阜市名和氏によりて發行せらる、「昆蟲世界」と稱する華美なる小雜誌の外形につきて驚愕の眼を注ぎ、略ぼ其内容をも想像したりき。蓋し其雜誌の日本語を以て印刷せられ、且つ其表紙にはギフチフの圖を印せるに因る。そも日本國には、唯一人の君主として　天皇陛下を戴き、唯一人の昆蟲學者としては名和君を推す。日本國には他に昆蟲採集者もあらん、然れども外國人にして有名なる識者を見んと欲せば、氏の昆蟲研究所を一覽することこそ必要なり。著者たる余は昨年の四月七日、京都に在りしが、遂に該昆蟲研究所を一覽せんと決心しぬ。而して余の經驗は、從來幾多の經驗中、最も愉快なるものなりき、かゝる場合は他人にも亦興味あるべしと信じ、敢て此事を公にする所以なり。

岐阜市は一覽の價値ある地にして、鬱蒼たる松樹及び爛熳たる櫻樹を以て蔽はれたる山に圍まれ、特に春時に於ては非常の美觀を呈す、傍らに長良川あれば、夏時鵜飼觀覽の清遊を試むべし。又激動を希ふ人には其事の用意もあり、蓋し時に地震起りて、其重なる街衢の家屋を破壞することあればなり。

旅館より半哩を距てゝ名和昆蟲研究所あり、名和君及び六人の助手と書生等は非常の歡迎を以て應待をなし、先づ美麗なる蝶の標本を示されぬ。各標本には、皆産地採集日の記載ある紙片を附し、或箱の如きは、採集者の寫眞の鄭重に保存ならるゝを見き、都ての産地は、他人の分與に係ることをあらはし、而して熱心なる採集者はギフテフの精細なる一定産地、及び他の地方的特異を示すべく配慮しき。一室は幼蟲又は蛹を養ふゝ所の飼育箱を以て充され、アヲスヂアゲハの幼蟲は、今や將に戸に於て蛹化せんとせりき。家屋の外部の數反歩の開地には、生長せる穀物其他の植物あり、蓋し名和君が昆蟲應用の目的を以て試作せるものならん。氏は著者に農作物を害する日本昆蟲の發生經過を表はしたる、美麗なる寫眞の圖解を惠まれたり、其各葉の圖畫既に小美術品として見るべし、況んや美麗なる八ツ切形の帖に表裝せられたる完本に至ては、これに精密なる君が説明をさへ加へ置きたれば、農家又は園藝家に對して、貴重の價値を有するものたるや、また論なかる可し。

岐阜市には、特別に日本趣味を以て建てられたる倉庫樣の木造の巨屋あり、名和君の言によれば、こは昆蟲陳列館なりと、此大建築物の上部は、全く昆蟲の圖畫を以て裝飾せられたるが、是亦精勵なる名和君、及び熱心なる補助者の小圖によりて構成せられたるなり就中、横徑三尺許の扁額に畫かれたるギフテフの寫生畫弁に蝶と花との美麗なる畫は、一段の注意を惹けり、即ち日本最初の昆蟲學女子名和孃の手に成れるものにして、其肖像は齊しく此に騈掲せらる。名和孃名をタカ子と呼ぶ、蓋し義をレーデー、ボルドに取りて其頭字を冠せしなり、そは其兩親が、名和君の如く勤勉の女子となさんとて、特に斯かる名を命ぜしなり。英國に於ける婦人と處女とは、昆蟲につきて、然まで望ましく思はぬ樣なるに、岐阜に於ては、反對にも、名和君の全家族が、擧つて昆蟲學研究に我劣らじと各々勵み合へるを見る。

日本の諺に、取持るゝ心で人を取持てと云へる事あるが、其夜名和君の家族は、昆蟲學談話晩餐會を開きて、著者を饗應せられき。會場萬松館に於て、火鉢を圍み乍ら、坐蒲團に平坐し、木箸を取りて食事をなし、果ては昆蟲世界の萬歳を祝しぬ。宴に侍する二人の舞妓の「岐阜四季の蟲獸」を三絃に合せて謳ひたれば、余は酒を汲み乍ら、日本の植物及び動物の繁昌を祝しぬ。

◎岐阜縣昆蟲學會報

第四十八回の岐阜縣昆蟲學會例會を、本月六日午後一時より開きたるに雨天なるに似ず東養老郡長、三吉岐阜高等女學校長を始め、第十四回全國害蟲驅除講習生等、無算五十餘名の會衆ありしが、別室には昆蟲分布調査上の材料を陳列して衆覽に供し、又誘殺法の參考には、アセチリン瓦斯に點火して其効用を示せり、尚當日の演者は左記のごとく、第一席より第八席までなりき。

○昆蟲の分布調査及び比較研究の必要　副會長　名和靖
○内國博覽會出品昆蟲の調査報告　岐阜縣　小森省作
○螟蟲驅防の實驗談　會員　鍵谷榮太郎
○床蟲の發生と驅除方法　兵庫縣　井上藤太郎
○岩木山の昆蟲採集談　青森縣　板垣無前
○昆蟲と植物の共棲　特別會員　長野菊次郎

○昆蟲採集と兒童奬勵方法　福井縣　石垣友市

○暦本と昆蟲との關係　特別會員　永澤小兵衛

◉殘菊の蜂語

今歳は昆蟲學者の有卦年と見えて、河内君は米國で以て、コーネル大學文學部敎授の英國婦人と、伉儷の式を擧げたが、松村君も歸朝匆々、東京の中央で、異姓の佳人と握手して、百年の苦樂を誓ふたとの事である。これで始めて、雌雄淘汰の幽玄なる奧秘を說明し得る資格を具備されたと申すものであらう。◉そこで次は、白髮若翁桑名君の當り番であるから、君も決行しては如何だと申して遣つた處が「仙人か行者の樣なる余に、婚儀の御相談とは、少々驚き申候、されどこれが世間有がちの事にて、今更貴殿を御無理とは申さず候、されど斯る御噺をば、暫時御預り置被下度候」と至極眞面目に、頗ぶる不平の體で答へて來た。名詮自證、矢ッ張仙人か行者の仲間入して、英彥山の山奧に立籠つて居る。◉新婚談はこれ計りでは無い、實は小名和(梅吉)君も、其渦中の一人であるのだが、流石よ多年標本の製作に苦心せられたゞけ、無造作よ靈妙動物の理想的標本を製造し終ッた、それで米國視察行を以て、一種の隔離法など酷評した者もあッたのだが、何にせよ機敏の動作をした事だけは、幾多の先進を凌駕したのである。◉先頃、談話の序に「松村君の日本昆蟲書に、白蟻は日本に居らぬと書いてある爲め、質問矢の如くで困ッて居る」と云ふたら、蠶博士の佐々木君は、扱かさず「寒地よは居るまいが、東京までは確かに分布して居る。松村氏の著書と云へば、白蠟蟲科といふ科名のもあるが、あれは何う云ふものかとも思はれます」と疊掛けたのも、時よ取ッての皮肉談であッた。◉併し此等は別問題としても、松村君の著書が、校正の疎漏から初學者を困らす事の多いのは、缺點の一つよ算入するの直打が有らうと思ふ、然うも一頁よ六ッも七ッも間違ひのあるのであるから、校字は猶ほ落葉を掃ふがごとしの一點張りでは、通用が出來ん場合がある。甚はだ氣毒だが、筆の序であるから、斯學のために忠告をして置く。◉大名和君を三成佛の一人に勘定して呉れたのは、一昨年の日本新聞であッたが先月のよは、俳家碧梧桐の精筆を以て、その羊羹色の羽織と、紀州ネルの襯衣とを紹介されたのてある加之、近刊の中央公論までが、貧乏世帶のすッぱ抜きをした。すると得意顏になッて「ナニ福の神はナフタリンの臭ひが嫌ひだから、乃公の傍へは寄り附けんのである」と言ふたげな。多分福の神の方で逃げたのであらう。◉然樣に貧乏を好くなら、茲に一の名案がある、それは名和家の定紋たる扇の中へ、半風先生の抱合せの摸樣を畫く事てある。實は昆蟲よビンバウムシと云ふが有ッたなら、それを紋に章

勸めたいが、生憎そんな蟲名が無いから、取敢へず世界三十餘万種中、貧乏の代表者たる此蟲を定紋に應用し、他年名稱一定の時に、之をナワヤドリムシと改稱したいのである。自體を飼育室に充つるのであるから、蟲と親しみ且つ道を樂しむ上から見るも、至極適當で、工藝美術品に蟲を應用する上から云ふも、將た紀念蟲稱と云ふ點から思ふも、嘸本望であらう。◉咄は段々悲觀的に陷いッたが、明治昆蟲學者中の古參たる、鳴門義民君は、古稀の老齡で、東京の芝の僑居に閑日月を送迎して居らるゝが、精勤二十年の久しきに亘ッて在り乍ら、官制が官制時代だけに、今以て無位無勳で、年金僅かに百四五十圓を受くるに過ぎぬ。實に斯道の爲め歎かはしい次第ではあるまいか、何んとか工夫が無いのか知らん。◉ヨコバヒムシに浮塵子の漢名を當て、バッタに飛蝗の新熟字を適用したのは、何時頃で又誰の仕業であるかと調べて居る場合に、幸ひ練木君と實業大會で邂逅したから、早速質問すると「只今では、杜撰との御叱りを被ふるかは知れませんが、あれは予、確か明治十年から十三年の間に、私が附けたのです、然かも種々と支那の書物などを取調べまして予」と答へられたのには、呆れて返へす言葉を知らなかッた。敵の本能寺に在りとは、夢にも思ふて居らなンだから。◉歳晩に、筆の煤掃の序に、先輩どもの棚卸しも、忘年の一策と思ふて、玆に列叙した次第である。假し失策があらうとも、新年の祝詞を述ぶれば、古い罪は一切消滅するものと、且那寺の住持に聽いて居ッたから、多分功德に成らぬまでも罪業には成るまい。(なにがし生)

◉**本號口繪の説明**　本號の卷首に收めたる第十二版圖即はち口繪は、今年夏秋季に、奈良縣吉野郡賀名生村の杉檜に發生して、約二十町步の良林を蝕害せる毛蟲の發育圖及び其天敵となるが、幼蟲の體色は淡黃綠にて、それに黃褐の束毛を裝ひ中々に美麗なり。今これに符號順を以て、説明を加へんに(イ)は杉毛蟲の卵塊(ロ)は孵化の幼蟲(ハ)は二齡の幼蟲(ニ)は三齡の幼蟲(ホ)は四齡の幼蟲(ヘ)は五齡の幼蟲(ト)は蛹(チ)は成蟲の雄(リ)は成蟲の雌(リの一)は雌蛾靜止の狀(ヌ)は寄生蟲の寄居せる幼蟲(ル)は同上の蛹(ヲ)は黴菌に侵されたる幼蟲(ヲノ一)は黴菌のために結繭し能はぬ幼蟲、其下なるは寄生蜂の繭(ワ)は寄生蜂(カ)と(カノ一)とは別種の寄生蜂の雄雌(ヨ)と(タ)とは、共に小形種の寄生蜂(レ)は寄生蠅の一種なり。(前號の講話欄參照)

◉**稻莖切取器の圖説**　本欄第三十五頁に圖したる螟害被害莖切取鋏は、本年秋季に愛知縣額田

郡下山村近藤良平氏の考案製造せしものなるが、是は福岡縣人山本幾次郎氏發明の切取器(本誌第六十二號の第三圖のもの)の稍高價にして農民一般に用ゐ難きを知り、これに代用せしめん爲め、簡易低價を旨として製造せしものなりと云ふ、壹器わづかに金四錢なりと云へば之を試用するも一利あるべし。また茲に圖したるは、靜岡縣にて製造する彼の鐵線製(第六十貳號の第四圖)のものを用ゐて、被害莖を摘剪するの狀なるが、其搆造の輕便なるは、當業者の歡迎をうけ得たるに似たり。何にせよ、斯種の器具の續々各地に發明せられて、速かに害蟲驅除の効果を現はすに至らんことを望ま欲し。就ては本誌讀者の、未だ普ねく知られざる良器を、時々圖解的に通信して、これを弘く世上に紹介せられんことを冀ふのみ。

◉水曜昆蟲談話會　當昆蟲研究所員のみの會合なる水曜昆蟲會は、所務上の都合にて中止を命じ置きしが、追々長夜ともなれるものから、去十月より開始せしめたりしに、其週間に研究調査せる事柄何くれと無く眞率に談話するの狀、例によりて興味深く、中には飼育製作上有用の事も少なからざるのみか、競ふて精密の觀察を遂ぐるの利益あれば、障碍の無らん限りは長く繼續せしめん見込なり。

◉本誌の愛讀者に告ぐ(三件)　本號には盡ごとく各地の寄書を掲載し得ざりし爲め、後號に讓れるもの多ければ、例に比して地方通信其他の不足を怪しむこと勿らんことを。又年賀廣告の依賴をなさんとする愛讀者は、遲くも此月の下旬までに、會計部に宛て其手續を了せざれば、或ひは昨年の如く二月發行の分に繰越さるゝ事無きにしもあらざる可し。前號學說欄に揭げたる北米合衆國の地圖中、蚊群の經過路幷びに種畜場の位置は、彫刻の際多少誤りを來たしたれば、其心して參看せられよ。

◉昆蟲標本陳列舘の內容　當昆蟲研究所の昆蟲標本陳列舘は、列品を選擇するの目的を以て時々交換を行ないし來れるが、更に研究上の便を圖らん爲め、去月よりは漸次陳列方法を改ため及び列品にも加減を加へ、新たに英佛諸國より送り來れる數點の製作器其他をも出陳したれば、斯學者には多少の利益を與ふることとなる可し。

◎災害地地租延納法案　聞く、政府は本月十三日頃までには、標題の法案を提出するに至らんと。說の信否は知る所にあらざるも、之を彼の地租特免法に比して、優れる所あるのみか、第一條に「災害又は天候不順により」云々とあるに據り、將來蟲害地にも適用せらるべしと思はるれば、左に載す。

第一條　災害又は天候不順により府縣の全部又一部に涉り田畑の收穫皆無に歸したる場合に於てその地租を納むべきものにして所轄税務署に於て納税の資力なしと認めたる時は本法により三年以內の期間を以て年賦延納を許可することを得。

第二條　前條により延期の許可を得んとする者は被害現狀の存する間に於て前條に該當することを證明し所轄税務署に出願すべし。

第三條　本法による被害調査中は地租の徵收を猶豫す。

（附則）本法の規定は第二條を除くの外之を明治卅五年分地租に準用す。前項により延納の許可を得んとする者も本法施行後三十日以內に第一條に該當することを證明し所轄税務省に出願すべし。

◎淡路の三化生螟蟲調査　兵庫縣淡路國に發生の三化生螟蟲に就ては、去月下旬に農商務省農事試驗場より、技師小貫信太郎氏出張調査する所ありしが、右は他地方に發生のものとは、少しく異なれる形質を具ふる種なるより、津名三原兩郡の有志者は頻りに研究中にて、また一方には刈株堀取中なりと、同地の飯田儀太郎氏の近信に見えたり。

◎昆蟲イロハがるたの新作を望む　兒童をして昆蟲思想を發起せしむるには、之を嫌惡せるの舊習を避くると共に、一般蟲名より其特性、さては益害蟲種の區別、植物との關係に及べる卑近の譬喩を絕たず口誦記臆せしむるを要とす、即はち古來行はれたるイロハガルタの如きは、暗に此目的に副ひたるものと云ふべし。然かも未だ昆蟲のものは、一も之なきより、其編作の材料にもと、曩に蟲合せを募りて本誌に披露せしが、今や進んで其新作を吾が愛讀者に求めんとす、希くは前記の範圍を以て之を編作し、來年二月の誌上に掲載して、陰曆正月には、一般農家の閱讀に供せしめ得るやう寄稿ありたし。優者には本誌一年分を寄贈して其厚志に酬ゆるの外、なほ長く其編者の芳名を世に傳ふるやう、當所の昆蟲標本陳列館に掲げ置かんとす。

◎昆蟲標本陳列館の觀覽人　昨十一月中に、名和昆蟲研究所の標本陳列館を觀覽せし人員は總計三千百十八人にして、其中最とも多かりしは、十五日に於ける二百三十二人、最とも少なかりしは一日に於ける三十五人にて、毎日平均百〇三人强に當り、重なる者は、文部省視學官中川謙次郎氏を始め、各府縣の教職、勸業當局者又は中央諸官衙學校の職員と學生等なりき。（右雜報は十二月十二日脫稿）

名和昆蟲研究所長名和靖著

第六版

薔薇の一株 **昆蟲世界** 全

定價貳拾錢　郵税貳錢（郵券代用一割増）

臨時刊行第二編

通俗益蟲集覽 第一輯再版（說明書附）

定價（郵税共）金貳拾貳錢（同上）

臨時刊行第三編

貝殼蟲圖說 全一冊（再版）

定價（郵税共）金參拾七錢（同上）

●農作物害蟲標本　壹組（桐箱入解說附　金四圓五拾錢）

●農作物益蟲標本　壹組（桐箱入解說附　金參圓五拾錢）

●敎育用昆蟲標本　壹組（桐箱入解說附　金四圓五拾錢）

●自然淘汰標本　壹組（桐箱入解說附　金五圓五拾錢）

●雌雄淘汰標本　壹組（桐箱入解說附　金五圓五拾錢）

●氣候變形標本　壹組（桐箱入解說附　金四圓）

（壹組の荷造費金貳拾錢小包料は百里迄貳拾錢百里外四拾錢）

●昆蟲發育標本　各種

●山林園藝害蟲標本　各種

●昆蟲學研究用書籍及び器具一式

明治三十五年十月　名和昆蟲研究所會計部

◎年賀廣告料割引

先例により、本月廿五日までに廣告料を添へ、御依賴の年賀廣告に限り、左の通り特別割引可仕候（郵券代用苦てからず）

一、昆蟲世界購讀者
一、各級農會の役員
（五號活字壹行に付金九錢）

一、昆蟲世界購讀紹介者
一、當所證明の修業証所持者
（同壹行に付金六錢）

なほ長文の廣告又は三月以上長期約束の普通廣告は此以外とす。但年首に限り特に割引の照會に應じ可申候

十二月　名和昆蟲研究所會計部

小生義海上無事去十月廿五日を以てシヤアトル港に着、同廿九日當地に上陸仕候間幸に御放念相成度候、尚日夜多忙の爲め一々御挨拶申上兼候間、當分疎音の段は御海容奉希望候

北米合衆國桑港に於て　名和梅吉

辱交諸君各位

◎害蟲圖解の刊行につき

害蟲圖解は、本邦産の有害蟲種の大要を何人にも理解し易からしめんがため、當昆蟲研究所の一事業として、數年來續刊し來れるものにて、既に府縣の各級農會より諸學校、警察署、郡衙等に備附られしもの甚だ多く、或地方の如きは之を小學校の教授用に充てしも有之候、然るに近來これと類似のものを出版して當昆蟲研究所の名を騙り、若くは同一の名稱を附して、是は害蟲圖解を更に放大圖に製せしものなるなど言觸らし、其僞版同樣乃ものを販賣する者有之哉にも相聞へ候間、愛讀者は此際十分御注意相成度候。

◎害蟲圖解既刊の分廣告

- 第一。桑樹害蟲エダシヤクトリ(枝尺蠖)(三版)
- 第二。桑樹害蟲トゲシヤクトリ(刺尺蠖)(再版)
- 第三。稻の害蟲イ子ノズヰムシ(二化生螟蟲)
- 第四。煙草害蟲タバコノアヲムシ(煙草螟蛉)
- 第五。稻の害蟲イチモジセセリ(苞蟲又葉捲蟲)
- 第六。桑樹害蟲ヒメゾウムシ(姫象鼻蟲)
- 第七。桑樹害蟲シンムシ(心蟲)
- 第八。稻の害蟲イ子ノアヲムシ(稻螟蟲)
- 第九。茶樹及果樹害蟲ミノムシ(避債蟲)
- 第十。豌豆害蟲エンドノキリムシ(夜盜蟲又地蠶)
- 第十一。桑樹害蟲クハカミキリ(桑天牛)
- 第十二。稻の害蟲ツマグロヨコバヒ(褄黑横蚑又浮塵子)
- 第十三。桑樹害蟲イトヒキハマキムシ(糸引葉捲蟲)
- 第十四。茶樹害蟲チヤケムシ(茶蛅蟖)
- 第十五。馬鈴薯及茄子の害蟲テントウムシダマシ(擬瓢蟲)
- 第十六。稻と麥の害蟲キリウジガガンボ(切蛆蚊蛯)
- 第十七。桑樹害蟲キンケムシ(金條毛蟲)
- 第十八。桑樹害蟲アヲハマキムシ(靑色葉捲蟲)
- 第十九。桑樹害蟲クハケムシ(桑蛅蟖)
- 第廿。稻の害蟲フタホシズイムシ(三化生螟蟲)

定價壹枚金拾五錢　郵税貳錢　百枚以上一纏壹枚拾錢の割郵税百枚に付貳拾錢

第十九。桑樹の害蟲クハケムシ(桑蛅蟖)圖解（本年八月新刊）

第二十。稻の害蟲フタホシズヰムシ(三化生螟蟲)(十一月新刊)

◎害蟲圖解未刊の分豫告

◎稻の害蟲イナゴ(稻蝗)
◎稻の害蟲オホズヰムシ(大螟蟲)
◎稻の害蟲セジロウンカ(背白浮塵子)
◎稻の害蟲ヒゲナガアブ(長角虻)
◎桑樹害蟲クハハマキ(桑葉捲蟲)
◎蠶の害蟲カヒコノウジバヘ(蠁蛆)

◎松樹害蟲マツケムシ(松蛅蟖)
◎藍の害蟲アキノゾウムシ(藍象鼻蟲)
◎粟の害蟲アハノズヰムシ(粟螟蟲)
◎胡麻害蟲メンガタスズメ(胡麻蠋)
◎赤楊害蟲ハンノキケムシ(赤楊蛅蟖)
◎櫟の害蟲カミキリムシ(天牛)

◎梅樹害蟲ウメシヤクトリ(梅尺蠖)
◎稻の害蟲トビイロウンカ(褐色浮塵子)
◎稻の害蟲クロクサガメ(黑色椿象)
◎桑樹害蟲アヲハマキムシ(青色葉捲蟲)
◎桑樹害蟲クハゴ(野蠶)
◎蔬菜害蟲モンシロテフ(菜の螟蛉)
◎蔬菜害蟲サルハムシ(菜の葉蟲)
◎大豆害蟲ヒメコガネ(姫金龜子)
◎梅樹害蟲ウメケムシ(梅蛅蟖)

◉圖解の紙幅縱一尺三寸橫九寸 ◉壹枚の代價拾五錢郵稅貳錢
◉百枚以上一纏壹枚拾錢郵稅百枚に付き貳拾錢

◎豫約代價

壹枚拾錢郵稅貳錢
但申込の際前金添附の事

圖解代金 凡て前金にあらざれば回送せず但郵劵代用壹割增の事

◎梨樹害蟲ナシゾウムシ(象鼻蟲)
◎梨樹害蟲ホシハマキ(星葉捲蟲)
◎果樹害蟲イラムシ(刺蟲)
◎藍の害蟲アキノズヰムシ(藍の螟蟲)
◎粟の害蟲アハノヨトウムシ(粟蠶)
◎里芋害蟲セスヂスズメ(鳥蠋)
◎桐樹害蟲シモフリスズメ(桐蠋)
◎果樹害蟲ホシカミキリ(白斑天牛)
◎果樹害蟲ドウガネブンブン(金龜子)

發行所 岐阜市京町 名和昆蟲研究所

雑誌昆蟲世界合本出來廣告

○第十二號以下完備

本邦唯一の昆蟲雑誌

昆蟲世界 合本

第六卷（本年分）出來

西洋綴金文字入美裝

●昆蟲世界第一卷　六部（自第拾貳號至第拾六號）
右は明治三十一年發行の分（但合本にあらず）

●昆蟲世界第二卷合本壹冊（自第拾七號至第貳拾八號）
右は明治三十二年發行の分

●昆蟲世界第四卷合本壹冊（自第貳拾九號至第四拾號）
右は明治三十三年發行の分

●昆蟲世界第五卷合本壹冊（自第四拾壹號至第五拾貳號）
右は明治三十四年發行の分

●昆蟲世界第六卷合本壹冊（自第五十三號至第六拾四號）
右は明治三十五年發行の分

（合本は毎冊金壹圓貳拾錢、郵稅金貳拾錢
其他は定價の通り）

右昆蟲世界の義は發刊以來、非常の高評を博し斯學研究上の寳典として又農事改良の先驅として歡迎せられしも、未た之を合本とするに至らざりしに、今回讀者の勸告により毎一年分を裝釘して閲讀索引に便にせり、請ふ愛讀を玉へ。

岐阜市京町　**名和昆蟲研究所**

專賣特許第四九八六號　**莖切器發賣廣告**

螟蟲の稻作に害を及ぼすや頗る大よして之れか驅除を爲さんとするには早く病稻を刈り取り害蟲を撲殺するに如かさるなきは精農家諸君の汎く認むる所にして近來之れか實行を唱導せらるゝ頻りなりと雖とも未た完全の良器なく止むを得ず在來の鎌を使用して徒に他の良稻を戕ふのみならず全く螟蟲の潛伏せる稻莖を根底より刈去ることを得さるが爲め害蟲驅除の目的を達する能はず空しく螟蟲をして其害欲を逞ふせしむるに到る實よ慨嘆よ堪へさるなり發明者多年茲よ意を籠め遂に完全なる一良器を案出せり此鎌は

新發明莖切器の圖

ロ　ハ　イ

上圖に示す如く小形の鎌に彈力性の遮匙を付したるものにして本器を使用するには先つ把手（ハ）を握り而して切取らんとする稻莖を左手よて握り遮匙の頭部と鎌の尖端との中間（イ）に當て鎌を少し前方に押すへし然るときは遮匙（ロ）は彈力性あるを以て外方に開き稻莖を押入るへし一度押入れたる后は遮匙は彈力の爲め元形に復し鎌の尖端を被覆して他の健全なる稻莖は挿入する事なし此に於て鎌を根底迄押入れ後方に引くときは毫も他の稻莖を害せす容易く根元より刈取ることを得る至極輕便の良器にして靜岡縣農事試驗場等の協贊を博せり…

定價一挺金拾錢…農會等の共同御用は特別割引…

製造元　靜岡縣小笠郡比木村　**山本勘藏**
發賣元　同　縣志太郡燒津町　**吉野寅之助**
縣下一手販賣所　岐阜市京町　**高橋喜之助**

昆蟲世界第六卷自五拾參號至六拾四號總目錄

◎口繪

◎論說

◎學說

◎講話

◎雜錄

◎通　信

◉問　答

◉雜　報

◉昆蟲世界新年附錄

明治卅六年一月發行昆蟲世界
第六拾五號掲載記事概要豫告

◎口　繪

○蟬類に寄生する蛾の圖（彩色石版密畫）

◎學　說（順序不同）

○蠶蛆以外の寄生蛆に就て（圖入）
○蟬に寄生する蛾の說明（歐文添附）
○果樹の害蟲（綿蟲）驅除豫防の一策（圖入）
○瘧媒蚊種は上古より棲息せしか
○其他二件掲載の豫定

◎講　話

○農作害蟲豫防驅除方法一斑（圖入）

◎雜　錄

○食蟲動物の餌食の研究○蜻蛉の保護方法（圖入）
○害蟲驅除講習會の必要○蟻垤の記（圖入）○昆蟲雜記○六足蟲彙纂○其他數件

◎通　信

○島根縣の害蟲驅除試驗報告○高知縣下の昆蟲報
○埼玉縣の昆蟲報○岐阜縣郡上郡蝶報（圖入）○其他數件

◎雜　報

○應用昆蟲書報（第一）○千蟲萬豸錄○其他數十件
例によりて材料豐富なり

右の中、多少の變更增減あるべしと雖ども、何れも適實の好問題にあらぬは莫し、讀者少焉次號の出つるを竢ちて、其價値を判せよ。

十二月　名和昆蟲研究所編輯部

昆蟲世界

（明治三十五年十二月十五日發行） 第六卷第六拾四號 （毎月一回十五日發行）

（明治三十年九月十一日内

◎昆蟲世界購讀紹介者芳名

靜岡縣 岡田忠男君（壹名）
鳥取縣 角正表君（壹名）
鳥取縣 城崎郡中竹野村役場（壹名）
秋田縣 佐々木茂助君（壹名）

●アブラムシ（蚜蟲又は滑蟲）の標本
右分布調査材料として、同志の寄贈を望む

●昆蟲世界 第壹號以下第十一號迄
右原價を以て購入す、不用の方は通知あれ

岐阜市京町 名和昆蟲研究所

◉岐阜縣昆蟲學會員に告ぐ

明年一月三日の第四十九回例會には、本會より第五回内國勸業博覽會へ出品の各昆蟲標本を一覧に供し、兼て新年祝賀の式をも擧行致度候間、同志御誘引の上、晴雨に關らず、同日午後一時までに會場に御參着相成樣致度此段及御報候也

十二月十日 岐阜縣昆蟲學會幹事

◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

第四十九回月次會（明治三十六年一月三日午後一時開會）

◉增訂再版 日本昆蟲分科表（新刊）

壹部定價金貳拾六錢 郵税金貳錢

右今般訂正を加へ、記載の蟲名に更に二百餘種を增補し、なほ備考をも添附して再版に附せり、斯學者の一讀を祈る

岐阜市京町 名和昆蟲研究所

◉本誌定價並廣告料

壹部郵税共 金拾錢（見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す）
壹年分拾貳部郵税共 金壹圓八錢
（注意）本誌は總て前金に非れば發送せず
◉爲替拂渡局は岐阜郵便電信局◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす
廣告料五號活字廿二字詰一行に付金拾貳錢、三十行以上一行に付き金拾錢とす

明治三十五年十二月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二
（岐阜縣岐阜市京町）
發行所 名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二 發行者 名和梅吉
同縣武儀郡下有知村三百七十四番戸 編輯者 天野秋二
同縣安八郡大垣町字郭百五十三番戸 印刷者 河田貞成

（大垣西濃印刷株式會社印刷）